ことだま
カンパニー
今神栗八

プロローグ（**0**）

このドキュメントは、ＥＴの研修受講と職務遂行の経緯と結果について、文書・音声・映像の各データに加えて、本人たちをはじめ、当社社員、日本国政府、その他関係する個人と組織にヒアリングを行った記録をもとに、若干の脚色を付加して、 当社役員（エグゼキュティヴ） の皆様に、物語形式での報告を試みたものです。

株式会社ＫＣＪ　　秘書室室長　　今神栗八

（この物語はフィクションです。実在の人物及び団体とは 一切関係ありません）

プロローグ（1）

―

ズッチャズズッチャ……。

頭の中に延々と流れるメロディーを英語でイヤー・ワームというが、漢字を当てるなら「耳虫」か、それとも「耳芋虫」か。

とにかくその虫が、斎藤圭太（さいとう けいた）の頭の中で、さっきからずっと、サザエさんのテーマソングを口ずさんで、くるくる回っているのだ。

それは、クライアントにおいては、ファームウェア・バージョンの更新であったり、ログデータの吸い上げであったり、つまり、フラッフィーがバックグラウンドでＫＣＪサーバーと交信中であることを示している。曲目は問わない。コマーシャル・ソングでも、「山寺の和尚さん」でも、そのときクライアントの頭の中にある、手近なメロディーをループ再生する。

だが、今このタイミングで自分にそれが起こるとは、斎藤は予想していなかった。

斎藤は思う。歌い出しまでの「ズッチャズズッチャ」という、絶妙なミドルテンポ。あのリズムは、あれ以上早くても遅くても、「明日からまた、仕事かあ……」という、世のサラリーマンたちの気だるい哀愁を表現することはできないだろうな……。

――いや、そんなことより、集中しろ、俺！

ズッチャズズッチャ……。

斎藤は思う。仕事を終えたらすぐ電車に乗って家に帰れるから……などという理由は、もちろん誰にも明かしていない。が、理由がどうであれ、インプラントの実施場所をここに決めたのは、ほかならぬ自分自身だ。しかもいま、たった一機、九百八十万円相当しか持ち合わせていないのも、自分以外の誰のせいでもない。だから、この場所設定が裏目に出たからといって、イラついてはいけないのだ。冷静に、淡々と仕事をこなすべきなのだ。俺はプロなのだから。

ズッチャズズッチャ、買い物しようと……。

――いかんいかん、集中ッ！

耳虫は斎藤の思考に関係なく回り続ける。斎藤は目を閉じ、頭を軽く左右に振ってから、顔を上げ、目を開けて周りを見回してみた。

街は、買い物客であふれていた。

斎藤は、努めて現実を再認識することにした。

ここは、大きなターミナル駅構内にあるカフェのテラス席。テラスといっても、完全に屋内である。カフェが、個々のテナント用スペースとしてデザインされている区画からはみ出して、天井の高い、駅の公共スペースにパラソルを広げ、テーブルとイスを置いている。それが街カフェの屋外席を模したしつらえになっているということだ。

テラス席も屋内席も、ほぼ満席だ。日曜日の遅い午後、店内の客の全員ではないまでも、多くは買い物を済ませて休憩している女性たちだ。

彼女たちは、ひと通りの買い物を終え、ショップの手提げ袋やビニール袋を傍らに、羽を休めているが、口を休めることはない。あのモールに新しくどんな店がオープンしたとか、あの店のケーキを並んで買ったけれど大したことはなかったなどと、同伴の友人との情報交換に余念がない。そこここでの、そのような会話の集積が、切れ目のない喧噪となって斎藤の集中力をそいでいた。

斎藤が一人この席についてから、九十八分と十七秒経つが、まだ、一杯目のアイスコーヒーを飲み終えていない。
――とっとと仕事を済ませて、早く家(うち)に帰ろう。いつも寝顔しか見られない来海(くるみ)を今日こそ膝の上に乗せて、一緒に「サザエさん」を観て過ごそう。

日曜日で今日の　施術(オペレーション)　が二件だけなのを幸いに、斎藤は別の場所での一件目のオペを終えて昼食を食べ終わるまで、そんな無邪気な算段を立てていた。

ところが、長年の仕事に培われた彼の勘(カン)が、この二件目は少々手間取ることになるだろうと、確信に近い予感を彼にもたらしている。

――それに、たった九百八十万じゃ、足らんかもしれん……。

そうした不安はさておいて、とにかくこの二件目の仕事を片付けなくては家に帰れないのだから、早いところ、おっぱじめなければならない（インプラントのオペを始めることを斎藤たちは、「オペ始める」→「おっぱじめる」と呼んでいる）。

だが行動開始に確信が持てる状況にいまだ至っておらず、おっぱじめ予定時刻を十九分三十一秒過ぎた今も、斎藤は自身をさいなむ焦燥感と闘っていた。

斎藤は握りこぶしを作ると、マスクの上からそのこぶしを口元に当てて、軽く咳払いをした。それから、ゆっくりとこぶしを解き、テーブルに置いたタブレット端末に指先で触れてみる。

省電力モードの黒い画面から復帰した画面の三分の二は、デジタルストップウォッチらしきアプリの窓が占めていて、コンマ何秒の桁が目まぐるしく時間を刻んでいる。バックグラウンドで稼働していたのだ。そして、ストップウォッチとは別に、画面の右下隅に、小さく現在時刻が表示されている。今、ちょうど午後三時半になった。斎藤の待機時間はついに百分を超えた。

二

極度の集中がこうまで長時間続くと、さすがに喉が渇く。斎藤は、かけているマスクの、左の紐は手で軽く頬に押し付けて外れぬようにしたまま、右の紐を耳から外し、アイスコーヒーのグラスに刺さっているストローの端を咥え、もう氷が解けて水っぽくなったコーヒーを一口吸い上げて、再び右の紐を耳にかけ直す……という、面倒臭い動作をした。それからしばらく右耳の辺りをごそごそ触っていたが、やがて視線をまっすぐ前方に据えた。

喧噪は切れ目がないが、かといって、カフェのすべての女性が情報交換にいそしんでいるわけではない。たとえば目の前のテーブルにいる、川井摘美鈴（かわい つみれ）二十二歳歯科助手見習い独身彼氏ありは、一回六十分の英会話のカフェレッスンを終え、外国人講師ボビー・W・タイラーが立ち去って一人になってからも、手渡された教材のプリントと、もう三十分も格闘していた。

――む！

斎藤はやにわにタブレットにタッチし、画面を復帰させる。鋭くなった斎藤の視線は、時刻表示ではなく、目まぐるしく動く秒表示でもなく、その隣の、すでに確定したラップタイムの数字に注がれている。

――八十六秒フラット……。

斎藤は厳しい目をしたまま、マスクの下でつぶやいた。

「今、ターゲットは何をしている？」

斎藤は画面の数字をじっと睨んだまま、再びマスクの紐を右耳から外し、ストローを咥え、アイスコーヒーを吸って、紐をかけ直した。そして、マスクの紐に絡んだもう一本の紐の先を指先で確かめると、耳の穴に差し込んだ。それはイヤホンだった。先ほどもごそごそと同じ仕草をしていたのだ。

少し向こうの席に座っていたスーツ姿の細身の男性が、空のグラスを手に斎藤と川井摘美鈴の間の通路を通って、ピッチャーの水をセルフサービスで入れ、再び自分の席へ帰っていった。

程なくして、左耳に詰められたイヤホンから、若い男の声が斎藤に答える。

「見たところ次回の予習ですね。今やっているのは、"IN A CAFÉ（カフェにて）"と題された、ボブ・タイラーの自作テキストのようです。実際の二人のレッスンを模した、"Tsumire"と"Bob"のカフェでの会話、という設定ですが、ボブの手書きなので筆記にクセがあって読みづらいのと、どうも、 "It's not my cup of tea.（1）" のセリフあたりから訳（わけ）が分からなくなっているようです。なぜコーヒーの話題で、お茶が出てくるのか理解できないのでしょう」

　斎藤はマスクの下でつぶやく。

「ボブ・タイラーはユーモアでそんなイディオムを使ったのだろうが、かわいそうに、川井摘美鈴のような英語学習の初心者は混乱するばかりだ。ボブの奴、日本語が話せないのに、次回どうやって摘美鈴ちゃんに説明するつもりなんだ」

　イヤホンの男の声がわずかに笑みを含んだ。

「斎藤さん、三週間もターゲットをマークして、情が移りましたか」

「おいスペード！　ミッション中はコードネームで呼べ。そうだよ、情も移ろうってもんだ。ターゲットの英語が上達しないのは、教えている奴が下手だからだろう？　それなのに彼女はいつも自分が悪いって悩んでいる。高いレッスン料払って、わざわざ自信をなくしているんだ。どうせまた明後日のレッスンで彼女は謝る。こう言ってな。"Bob, I’m not a very good student, sorry." この三週間で聞き飽きたよ」

　スペードの声がイヤホンから斎藤の耳に入る。

「さいとうさ……もとい、ジョーカー、今撮ったテキストの写メ、送りましょうか」

「いらん。それより早くターゲットを楽にさせてやろう」

　そう言い終えて、視線を摘美鈴に据えたその途端。

　――うッ！

三

　斎藤はぎょっとして目を見張った。摘美鈴と目が合ったからだ。

　だがこの喧噪の中、三メートルも離れたテーブルで、この男がマスクの下で何かをつぶやいているとか、その話題が自分のことであるとか、そんなことに摘美鈴が気づくはずはない。どれだけ考えても「ノット・マイ・カップ・オヴ・ティー」がやっぱり分からなくて、思わず顔を上げた時に、たまたま視界に斎藤を認めたに過ぎない。摘美鈴にしてみれば、ダークグレーのスーツに身を包んで、一人、音楽を聞きながらタブレットをいじっている風邪ひき中年の動向などまったく興味ないだろう。

　案の定、彼女はうつろな視線をすぐにそらした。そして、うつむいて、口に手を当てもせずあくびした。英語が分からな過ぎて不機嫌な時は、ターゲットは決まって口に手を当てずにあくびをする。それも蓄積されたデータ通りだった。

　斎藤はすかさずタブレットをタップする。液晶のバックライトが点灯し、ラップタイムが更新された。

　一一八十一秒。システムの予測より早い……。

　再び画面を睨みながら斎藤はマスクにつぶやく。マスクに仕込まれたマイクは、イヤホンの向こう側の男につながっているらしい。

「ダイヤ、ターゲットの、昨夜の睡眠時間と、午後八時以降の摂取カフェインの総量をくれ」

　スペードとは別の、今度は女の声がイヤホン越しに答える。

「はい。今神部長に照会します」

　すると斎藤はつぶやきにしては大きな声を出した。

「いや！　あいつには訊くな」

「は？」

「営業調査部のスタッフなら誰でもいい。だが、今神以外だ」

「……ですが、今神さんがターゲットの提案者……」

「そんなことは分かっている！　奴には訊くな」

「……ですが、誰に聞いても、どうせ後で今神さんに報告されますが」

「あいつの手を煩わせたくないんだよ！」

「ラ、了解（ラジャー）」

それを聞いて斎藤はまたマスクを外し、アイスコーヒーを吸った。

忌々しかった。

――今神栗八（いまがみ くりや）……なぜあいつだけ社長に可愛がられるんだ。同期入社で歳もほぼ同じ。俺はいまだ第一営業課長で前線勤務なのに、あいつだけ本社召喚されて、社長側近の秘書室長兼営業調査部長。なんだこの待遇の差は。あいつが何か、俺とは違う手柄を立てたとでもいうのか。

「営業調査部長なのをいいことに、俺の仕事の領域にいちいち口挟みやがって……」

すると、イヤホンにスペードの声が入ってきた。

「今神さんはそんなつもりないと思いますよ。だいたい、斎藤さんは今神さんの部下じゃないんだし。それに現場はやっぱりベテランの斎藤さんがいないと……」

うかつにも、マスクをつけながらぶつぶつとつぶやいたので、部下たちに筒抜けに聞こえてしまっていたようだ。斎藤は狼狽しながら、マスクを整えた。

「コードネームで呼べと言ったろう」

そこへ、ダイヤと呼ばれた女性の声が。

「ジョーカー、営業調査部の平井さんから返事が来ました。データ、そちらに入れましょうか」

「ああ、入れてくれ」

ちらりとターゲットに目をやる。彼女はテキストとのにらめっこを再開していた。片頬に頬杖をついて髪が垂れ下がっているので、よく確認できないが、恐らくしかめっ面をしているだろう。彼女はそもそも、英語が苦手なのだ。

彼女が新人として勤務しているデンタルクリニックは、コンビニより多いと言われるライバルたちとの差別化のため、在邦外国人の「集客」に力を入れつつあった。院長から英語をやってくれと指示されて、新人ゆえ断ることもできず、嫌々取り組んでいる……という事情も、斎藤のチームは調査してよく知っていた。

――もうすぐ楽にしてやるからな、もうすぐ……。

斎藤はタブレットを注視した。新しい窓が開いて、睡眠時間とカフェイン摂取量に関するデータがバラバラと左側に表示された。

「よし。データを計算式のパラメーターに代入して再計算してくれ」

「はい」

イヤホンの向こうの声が答えるとすぐにまた新しい窓が開く。そしてそこには計算結果が表示されていた。

計算結果――次回予測――前回から八十三秒後。

斎藤の目が見開かれた。前髪の間から見える川井摘美鈴の口が大きく開かれつつあったからだ。

「ターゲットがあくびをする！」

斎藤は言いながら急いで画面をタップする。タイムスタンプのリストが改行され、即座に右に実測値が表示された。

――八十三秒！

「よしっ！　予測通りだ」

斎藤はマスクの下でつぶやく。

「こちらジョーカー、ターゲットの数値が安定した。おっぱじめるぞ！」

「スペード、了解」

「ダイヤ、了解」

「クラブ、了解」

「ハート、了解」

　イヤホンを通って斎藤の耳に聞こえてきたのは、四人の男女の声だ。斎藤は少し顔を上げて視線を店内に巡らせる。左奥の少し離れた席ではダークスーツでサングラスをしている若い男がこちらを見ながら心持ち手を挙げた。右奥に少し離れて座っている男女もわずかにこちらを見て頷いた。斎藤のテーブル列の一番向こう奥の女も、広げていた雑誌のページをめくるときに目配せしてきた。

四

一一三、四、五……。

斎藤は頭の中でカウントしながら軽く頷くと、上着の内ポケットから、薄型のゴム手袋を取り出した。目立たぬ仕草で左手に手袋をはめる。次に取り出したのは、仁丹型の口中清涼剤のプラスチックケースのようだ。ケースをいったんテーブルに置いて、斎藤は右手にも手袋をはめた。一連の動作は流れるように早く、手慣れたものだ。

薄い名刺入れほどの大きさのケースには、開閉式の小さなふたがついている。斎藤はつまみになっている部分に親指をかけてふたを押し開けると、右手のひらをわずかにくぼませて、注意深くケースを傾ける。マスクの上辺と額（ひたい）との間から、厳しい視線が手のひらに注がれた。

斎藤が目を凝らす中、仁丹粒の代わりに出てきたのは、仁丹粒よりかなり小さく、注意して見なければ気付かないほどの大きさの、たった一つの、毛玉のような塊だ。それは斎藤の右手のひらにこぼれおちた、というより、手のひらの上一ミリのところに、一本か二本の毛の繊維によって、やっと立っている、という方が正しい。マスクの下でごくりとつばを飲み込む斎藤。喉仏が顎と襟元の間を一往復する。

一一十五、十六、十七……。

一瞬、タブレットに目をやる。

「計算結果一一次回予測一一前回から八十三秒後」

前回から予測は変わっていない。

一一ようし、慌てるな。慌てるなよ、斎藤……。

自分を落ち着かせるため、「毛玉」を乗せた右手を硬直させたまま、大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出す。呼気はマスクで遮られ、毛玉を吹き飛ばすことはないが、それでも毛玉はゆらゆら揺れている。

斎藤は、そっと左右をうかがう。

ーー誰も歩いて来ない……。

それを確認し終えると、息を殺して左手で風を立てないようにゆっくりマスクを外した。そしてストローをつまんでグラスから取り出す。次に、ほとんど透明に見えるゴム手袋をはめた右手のひらをわずかに開き、そこに定置している毛玉を確認した。そして、ごくゆっくりと手のひらを顎の高さまで持ち上げておいて、そこからまたゆっくりと、手のひらを下に下げた。

慣性の法則で毛玉がふわりと空中に放り出された。今、斎藤の五十センチメートルほど前方に滞空し、顎の高さ辺りをゆらゆらと上昇している。

斎藤は風を起こさないように呼吸を止め、左手に持っていたストローを注意深く口に咥えて、蛇腹の角度を両手で調整する。心臓が高鳴り、呼吸を抑えるのが辛くなる。頭に血が上り、顔は苦痛にゆがむ。

ーー三十一、三十二……目を離しちゃいかん。集中！　集中するんだ。三十六、三十七、三十八……。

毛玉が目の辺りまで浮き上がってきた。

ーー行けッ！

逆「への字」型に曲げたストローの先端を毛玉に向けて、斎藤は「プッ」と強く、短く息を吐き出す。次の瞬間、もう、ストローの先に毛玉の姿はなかった。

斎藤がマスクの耳紐をかけ直すと、即座にそのイヤホン越しに女性の声が入った。

「ダイヤです。フラッフィーからの信号確認。感度良好、現在地計測開始。方角十二時〇三分、初速五十四センチメートル毎秒、一・五メートル地点通過、一・八メートル……通過！　順調です」

「クラブです。ＧＰＳ経由でも同じ現在地を確認。斎藤さん、すごい技術ですね、絶妙です！」

斎藤は厳しいまなざしのままで、部下たちと共有している現在地情報をタブレット画面で追いながら答える。

「四十七、四十八……まだだ。まだ行程の六割しか飛んでいない。何が起こるか分からん。まるでアポロを月に送り込むＮＡＳＡの指令室の気分だよ」

「ダイヤです。画面見ておられますか。方角変わらず。速度十八センチメートル毎秒、空気抵抗による減速ペースも予想通り。ターゲットまで七十一センチメートル。到達予想、直前スタンプから八十三秒後。ピッタリです」

　ところがその時、斎藤の右後方から男の店員が近づいて来た。

「番号札七番、ベテルギウス・チーズケーキをお待ちのお客様、いらっしゃいますかぁ……」

　その声を聞いて、斎藤の左、向こうの方に座っている一人の女性が手を上げるのが見えた。雑誌を読むふりをして待機しているハートのすぐ前のテーブルの女性だ。

　斎藤がサッと青ざめ、イヤホンマイク越しに訊く。

「ハート！　女性の番号札は？」

「七番です」

「ダイヤ！　邪魔が入るぞ！　現在地は？」

「通路通過完了まであと十六秒……」

「乱気流予測は？」

「ジョーカー、店員名は誰ですか？」

　斎藤は振り返って名札を見る。

「高橋！」

「たかはし……ありました。入社二年十一か月、フロアチーフ、今日はＡシフト……身長……うっ、背が高い！　足速い！　まずいです。かなりの乱気流（タービュランス）を発生させます」

五

　高橋店員が女性客の挙手に気付き、一歩を踏み出した。

「おいっ、まずいぞ！　通路通過まであと？」

「八秒」

　その時、先ほど顔だけ振り向いて斎藤に頷いた、右奥のテーブルの男女ペアのうち、女性の方が大きな声で叫んだ。

「店員さん！　はいっ、それ私よ」

　斎藤とターゲットの間の通路に侵入しかかっていた高橋が一瞬足を止める。

　ーーでかした、ダイヤ！

　高橋は目を凝らして、ダイヤのテーブルを見る。札は立っていない。高橋は愛想笑いをして、ダイヤに声をかける。

「お客様、すぐに参ります」

　そう言って通路の突き当たりで挙手している女性に視線を向け直して歩き始めようとしたその途端、男の方の大声が響いた。

「おいっ、高橋！　ベテルギウスって赤いラズベリーの乗ったチーズケーキだろ？　俺の彼女が先に頼んでんだよ！　おかしいだろ、高橋！」

　声の主は、クラブだ。高橋はぎょっとして再び足を止める。多くのテーブルで人々は会話を止め、高橋を巡って次に何が起こるのか見守り始めた。斎藤が反対側を振り返ると、ハートが、手を挙げていた七番札の女性の肩を、後ろから叩いていた。

「アイミ！　アイミちゃんでしょ？　私よ、アリサ」

　右耳からはイヤホン越しに、また、店内が静まったおかげで左耳からはじかに、ハートの声が

斎藤に飛び込んでくる。

　ほぼ確実にアイミではないであろう女性は、手を挙げたまま、きょとんとした顔でハートを振り返っている。

　その時、斎藤のイヤホンにスペードの声が入った。

「あと二秒……一秒……渡りきり……ました！　ターゲットのボディゾーンに……入ります」

　斎藤は小さく舌打ちをした。ダイヤとハートの機転のおかげで乱気流の発生は危ういところで免れた。だが明らかに摘美鈴は眠気から覚めたようだ。予定通りにあくびが出るとは考えられない。

　斎藤は気が気ではなかった。

「現在地！」

　ダイヤが即答する。

「座標、五、十一、マイナス十七、速度一・三センチメートル毎秒！　ターゲットに接触します」

「まずい！　ターゲットの服にくっついたら静電気で繊維が絡まって取れなくなる！」

　斎藤はパニックになった。

六

　ーーー機九百八十万。回収不能になるくらいなら、ターゲットを動かすか……いや、それが何の解決に……？

　スペードが声を殺しつつ叫ぶ。

「ジョーカー、どうしますか！」

「……」

　斎藤はとにかくターゲットをどうにかしようと、鬼気迫る表情で立ち上がろうとした。

　まさしくその時。

　ーーあーっ！

　予期せぬことに、まったく別の一人の客が、斎藤の左奥の席から通路を早足で横切って行ったのだ。文字通り、あっと言う間だった。

　斎藤のタブレットの画面は真っ赤に点滅し始めた。

　ダイヤの慌てた声。

「緊急事態発生！　乱気流です。フラッフィーの姿勢制御不能。現在位置捕捉不能」

　ーー何てことだ！　これは始末書じゃあ済まんぞ。

「じ、状況が判明次第、知らせてくれ」

　斎藤はダイヤにそう使えると、鬼気迫る表情のまま、ターゲットの胸の辺りを凝視した。むろん、大きさーミリメートルになるかならないかの物体を三メートルの距離から発見するのは無謀だ。そもそもターゲットの胸の辺りをさまよっている保証などないのだ。それでも斎藤はそうでもせざるを得ない心境だった。

　あまりの細部に注意を払っているせいで斎藤は、摘美鈴が自分の視線に感づいたことに気付いていない。正面の男はどう見ても自分の胸を凝視していると警戒した摘美鈴は、表情を険しくして胸の上で固く腕組みした。

　摘美鈴のその動作は乱気流を引き起こす。

「ジョーカー、フラッフィーの現在地が判明しました。ああっ！　今ターゲットの周りで乱気流発生！　ただ、位置は捕捉可能。激しく回転しながら、通路側に押し戻されています。軌道計算中……あっ！　落下中！　フラッフィーは落下しています。繰り返します、フラッフィー落下中！　通路の床面に衝突する可能性大！　ジョーカー、あなたとターゲットのちょうど中間辺り、いや、少しターゲット寄りです。衝突まであと十秒！」

　ダイヤの報告の末尾はスペードにさえぎられた。

「ジョーカー！　床に汚染されたらもう使えませんよ！　どうするんです？」

「どうするんですって……」

「八、七、……」

「斎藤さん、指示をッ！」

　必死で空間を凝視していた斎藤は、いらだちのあまり舌打ちをして、声に出して言った。

「クソッ！　ダメだ、見えないんだ」

　それを聞いた摘美鈴は驚愕の表情を浮かべ、組んだ腕にさらに力を入れる。

「六、五、……」

「斎藤さーんッ！」

「おおッ！」

　斎藤は嬉しそうに大声で叫んだ。

「よし、見えたぞッ！」

「み、見えたって……？」

摘美鈴は目を丸くして、固くガードしているはずの自分の胸元に視線を落とす。

七

　斎藤は立ち上がると同時にマスクを荒々しく取り去り、電光石火の速さでストローをつまんで、体を仰向けによじりながら、摘美鈴のテーブルの近くの床に滑り込んだ。ズザザーッと音が聞こえてもおかしくない体勢で斎藤はストローを口に咥える。摘美鈴は恐怖で声も上げ得ず、腕を組んだまま上体をのけぞらせた。

　ーーああ、遅過ぎたか……。

　斎藤のストローはすでに、フラッフィーなる物体を真下から吹き上げることは不可能だった。フラッフィーはすでに床から十センチほどのところをゆっくり、降下していた。自分が起こしたかもしれない乱気流がたまたま影響していないのは幸か不幸か。

　仰向けになった自分の頭の上、つまり摘美鈴の足の方に向かって視界から消えていこうとするフラッフィー。斎藤はストローを咥えたまま、顎を上げてそれを追いかける。

　ーーくそっ！　床に汚染されるよりは……。

　斎藤は、その場で自分の尻を持ち上げ、体重を頭で支えるブリッジをした。手で支えているストローの先とフラッフィーが一直線になる。

　その延長線上に、後ろにのけぞった状態でテーブルの縁から床を見下ろす摘美鈴の目があった。斎藤は摘美鈴など見えていない。また摘美鈴もフラッフィーなど見えていない。摘美鈴が見ているのは、ダークグレーのスーツに身を包んだ中年男が、目の前の床で頭支えブリッジして、摘美鈴の股間に向けて必死にストローを吹こうとしている姿だ。摘美鈴は状況が飲み込めず、口をぽかんと開けたまま、斎藤の行動をただ見守っている。

「プスーッ！」

　ストローから空気音が漏れた。斎藤はストローを口から外すと、思わず叫んだ。

「よしッ！　ベストポジションだ」

　斎藤にしてみれば、このぎりぎりの状況で、絶妙な角度でフラッフィーを吹き上げ得たのだった。サッカー選手が、試合終了間際、ありえない角度からーか八かのシュートを打ちこむのに

似ていた。ゴールは……ターゲット川井摘美鈴の「口」だ。最初からそこが目標なのだ。だが、起死回生のシュートがターゲットの口の中に入るためには、摘美鈴の口の開きかたは不十分だった。

「お客様！　大丈夫ですか？」

　手にしていたベテルギウス・チーズケーキの盆を、取るも取りあえず傍らの空いたテーブルに置いて、高橋店員が斎藤に駆け寄ろうとする。立ち上がり際に客が卒倒したのだと思い込んだのだろう。

　その高橋を、クラブが制した。

「行くな高橋ッ！」

　高橋は再びぎょっとしてその場に立ち尽くした。

　斎藤は上下逆さまのまま、神に祈るような目つきになって叫ぶ。

「もっとだ！　摘美鈴ちゃん、頼む、もっと大きく開けてくれ！　早く！」

　摘美鈴は見る間に恐怖で顔を青ざめさせ、両膝を固く閉じた。が、その直前、驚きで大きく息を吸い込んだのだ。

「ど、どうして私の名前を……？」

　斎藤は大きく目を見開き、希望の色を浮かべる。

「おおよしッ！　行ったか？　行ったのか？　ダイヤ、現在地ッ！」

　すかさずダイヤが肉声で叫ぶ。

「座標、ゼロ、ゼロ、ゼロ。行きましたッ！　成功です！」

八

　斎藤はすごい速さでブリッジから起き上がり、すがるように自分のテーブルに手を伸ばして、立て膝になりながらタブレットを確認した。モードが切り替わっている！　画面には、横向きの人間の首から上の断面図が黒いシルエットで表示され、その口腔辺りに白い光が点滅している。

「き、奇跡だ……やった……！」

　タブレットを両手で握って、斎藤はつぶやいた。

　ダイヤが再び大声で斎藤に知らせる。

「インボディー・ナビゲーション開始！　ターゲットの鼻腔から上がります。脳幹定置まで十五秒！」

　斎藤は感動に打ち震えていた。心臓はまだバクバク脈打っている。

　ーー俺って、すごいな。見たか今神。お前にはとてもできまいが。

　斎藤は満足げに後ろを振り返った。怒りと恐怖に震える川井摘美鈴の姿がそこにあった。彼女は電話をかけている。

「警察ですか？　変態ストーカーがいます」

　すると、向こうのテーブルからスーツ姿の男が現れた。スペードだ。

「こいつか、ストーカー野郎は」

　高橋の名を叫んだカップルの男の方も寄ってきた。クラブだ。

「お前のせいで高橋がいつまでたってもケーキ持ってこねえじゃねえか！」

　あっけにとられている斎藤を二人は怒りの表情で見下ろした。

「駅長室に連れて行きましょう」

「そうだな、警察が来るまで駅長室だな」

　斎藤は両腕を二人の男たちにつかまれ、立ち上がるよう促される。

「痛ッ……」

　川井摘美鈴は一瞬顔をゆがめて、スマホを少し顔から離した。

「え？　いえ大丈夫です、刺されていません。一瞬頭痛がしただけです。犯人は、取り押さえられています。……はい、駅構内のカフェです」

　そのとき、ダイヤが叫んだ。

「定置完了！　インプラント・オペレーション、オール・ダン！」

　斎藤の右腕を取り押さえている男の一人が斎藤をせかす。

「ほら、歩け！」

「痛てて！　スペード、腕、絞めすぎ」

「つべこべ言うな！　早く歩け、変態野郎！」

　斎藤は恨めしそうにスペードを見上げて、せかされるままに歩き始める。その斎藤の荷物は、奥のテーブルにいたハートがそっと回収していった。

　ミッション完了を宣言したダイヤが、自分とクラブの荷物を持って、すでに席を立ち去ったのにクラブは気づいた。彼は斎藤の左腕を抱えたまま、自分のテーブルの横を通り過ぎるときに、ズボンのポケットをまさぐって、探り当てた五千円札をテーブルに置いて言った。

「高橋ッ！　五人分だ。釣りはとっとけ」

　他の客が見守る中、スペードと一緒に斎藤を抱えて店を出て行ったクラブに、ハートが後ろから駆け寄って耳打ちしている。

「えっ？　ダイヤが最初に払ってた？　この店、先に払うシステムだったの？」

　間の抜けた声を発して、クラブは未練がましく自分の五千円を振り返った。ハートが「迷惑料、迷惑料！」としきりに言って慰めている。「早く逃げるぞ」と言うスペードが斎藤を引っ張って歩調を緩めないので、クラブは泣く泣く上司に八つ当たりした。

「この変態野郎！」

◆◆◆

（１）"It's not my cup of tea."「私の好みではない」という意味のイディオム（慣用句）で、コーヒーが好きではない場合も、"It's not my cup of tea."となる。

第一章 万三郎（1）

一

「む、お見えになる」

新渡戸稲男（にとべ いなお）人事部長のその声で俺は、はっと我に返って顔を上げた。

部長は、本革張りのひじ掛け椅子からおもむろに立ち上がったので、俺は部長と向き合って座っていたソファーから弾かれたように起立し、気をつけをする。ほぼ同時に、隣に座っていた若い男も起立した。

新渡戸部長は、数歩歩いて応接セットのエリアから出ると、ある場所で立ち止まる。俺たちを見やって、ここに立てとばかり、足下を二回、無言で指さした。そして、自分はそこから少し離れて、ドアの方に顔を向けて立つ。

俺と隣の男は、指示された場所にいそいそと移動して、ドアに向かって並んで立った。そして二人示し合わせたようにスーツの襟を正し、乱れがないか前髪を撫で、うつむいてコホンと咳払いをした。

深みのあるワインレッドを基調とした、毛足の長い絨毯が、靴のソール部分をほぼ完全に覆い隠している。踏みしめた足の下の、安定感のあるわずかな弾力が、この絨毯の下地の厚みを物語っていた。

俺は、顔を上げ、背筋を伸ばしてあごを引く。隣の男もそれに倣う。わずかな衣擦れの音などは、毛足の長い絨毯の隙間にたちまち吸引されていき、ついにこの部屋は完全なる無音に至った。

静けさは、まるでゼラチンが急激に固まるように三人を包みこんでいる。部屋中に隙間なく満ちて、もはやどんな音を拡散させることをも拒んでいた。

俺は、ゼラチンが部屋の中どころか、体内にまでどんどん侵入してくる気がしていた。臓器が包まれていき、体腔の内圧が高まる。すると肺が膨らむのもままならず、呼吸が苦しくなる。心臓も、じわじわと握られていく圧力に抗うために鼓動が強く激しくなる。静寂は、明らかに俺の緊張を倍加させていた。隣の男は平気なのだろうか……。

それから十秒、あるいは、永遠が過ぎた。

ゴクリ……。音こそ拡散しなかったが、視界の隅で、隣の男の喉仏が一度大きく上下した。時が止まってしまっていたわけではないのだと気付くと同時に、奴もやはり、極度の緊張の中にいるのだと分かった。

それから、さらに十秒――。

カチャリ。

密室に隙間ができた。八メートルほど先のドアに向かって、溜まっていたゼラチンがゆっくりと流れ出した。急な減圧に、心臓の鼓動が勝ちすぎて、血圧が一気に高まったようだ。こんなの、心臓に良いはずがない。

人の背丈の倍ほどもあろうかという重厚な扉が静かに部屋の内側に開いて、若い女性が顔を出した。彼女は黙ってそのまま扉を押して開ききり、続いてもう一方の扉も内側に全開にして、自身は部屋に入ってすぐの、右扉の脇に立った。

ワインレッドの絨毯は、室内のみならず、扉の向こうで左右に延びる廊下に至るまでずっと敷き詰められている。開いた扉越しに見える廊下の壁の正面には、レンブラントかルーベンスか、よく分からないけれど、荘厳な額で縁どられた、大きな油絵が掛けられている。キャンヴァス表面に盛られた絵の具のタッチが生み出す細かな凹凸に、廊下の柔らかな照明が反射して、絵の白っぽい部分を眩しく輝かせている。俺は目を細めた。

そこへ、一人の男が、現れた。

男は、廊下の左側からゆったりと歩いて俺たちの視界に入り、扉の中央に至ってはじめて身体をこちらに向け、一瞬足を止めた。そして、背景の油絵の中心に描かれた、聖者が発する、きらびやかな後光の放射を背景にして、入室してきた。

二

格調高いダークネイビーのスーツに身を包んだ、壮年のビジネスマンかと最初は思ったが、実際にこちらに近寄ってくると、意外にも彼は六十代前半あたりに見える、小柄な爺さんだ。ただ、背筋はピンと伸びて、耄碌をみじんも感じさせない。日本人離れした地黒の肌に、短めに刈り込まれた白銀色の頭髪、そして、短く野性的に手入れされた口ひげとあごひげが、下頬でつながっていた。目が爛々と輝いている。「自信」がスーツをまとって、こちらに歩いてくる、そんな印象だ。

部屋に数歩入って歩みを止めると、爺さんはこちらを向いたまま、後方の女性に向けて軽く片手を上げる。女性は口角を上げ、この場におよそふさわしくないと思われるほど明るい声で、「かしこまりました、すぐに」と言うと、お辞儀をして、音もなく両側の扉を閉めて出て行った。

続いて新渡戸部長が爺さんに深く立礼する。

それを見て俺も慌ててお辞儀をする。隣の男も二人に倣った。俺が隣の男より先に顔を上げると、爺さんは俺をじっと見ていた。俺の視線と爺さんの視線が寸分の狂いもなく一直線につながる。

睨まれているのだ。

俺は一瞬たじろいだ。そしてそれが顔に出たかもしれない。まだ六、七メートルは離れているのに、この爺さんの眼ヂカラは凄まじい。まばたきをしないその眼球から、俺に至る一直線の視線に乗せて、何か人体に有害な毒エネルギーでも送り込んできているのか、心臓の鼓動が再び一気に高まった。

なぜこの爺さんから睨まれているのか、俺が何かをしでかしたから、この初対面と思われる爺さんを怒らせてしまっているのか、俺は心当たりを探り始める。

――というか、そもそも俺は、なんでここにいるんだ？

そう、それがさっぱり分からないのだ。

考えようとすればするほど、爺さんの目からどくどくと流し込まれる毒エネルギーに、思考回路は圧倒され、かく乱されてしまうのだった。

どす黒い入道雲がもくもくと湧き立つのを早送り画像で見ているように、爺さんの毒が腹の中で急激に広がっていく。これが夏の空なら、いきなり至近距離で雷鳴が轟くパターンだ。

――来る。次の一瞬に何かが起こる！

俺は身じろぎひとつせず、その瞬間を本能的に待っていた。

果たして、隣の男が頭を上げたその瞬間。

小さな体に見合わぬ大きな声で、爺さんはおそらく、俺と隣の男の両方に問いかけた。えらく流暢な外国語で。

"Young men are fitter to invent than to judge, fitter for execution than for counsel, fitter for new projects than for settled business（1）. Do you agree?"

三

　まばたきをしない暴力的な視線を二人に交互に向けながら、爺さんは、並んで立っている俺たちの前へ、一歩一歩、絨毯を踏みしめて、歩み寄って来る。表情は、ない。近づくにつれ、小柄なはずの爺さんが、遠近法の計算値を超えて巨大化するように思えた。

　――な、何言ったんだ、この爺さん？

　俺だけではない。隣の男も口を半開きに開けて黙っていた。

"You?"

　爺さんは、俺ではなく、隣の男の正面三メートルほどのところに立ち、彼に視線をやって、発言を促すために、彼に向けて手のひらを斜め上に向けた。詰問口調のような、語尾の上がった" You? "だ。

　逆に俺は、視線を外されて、幾分理性的にものを考えられるようになった。

　――ということは、さっきのセリフ、英語だったんだ。英語で何か訊かれているんだ。

　それにしても、何という圧力の「ユー」なのだろうか。きっと隣の男は、例の視線に捕らえられた上で、抗い得ない電圧で「毒電流」を流し込まれ、かなりの苦痛を味わっていることだろう。

　隣の男は、先ほど新渡戸部長に対面して俺に並んで座っていた時の印象では、俺と同じ二十代前半のようだ。ライトグレーのスーツは新卒者の就活ではあまり見かけないが、部長や爺さんからの扱われ方が俺と同じであることから、俺と同じく、新規採用者か、採用最終候補者と思われた。いや、俺がそうであること自体、まったくの憶測なのだから、本当のところは分からないが、おそらく俺たち二人は同じ立場に置かれているのだろう。

　――ということは、彼の次は俺に……？

　爺さんは彼を間近で見て何やら驚いている風に目を見開いているが、彼は爺さんを見つめ返したまま、右手を自分の後頭部に手をやって声を発した。

「あー……」

その声には幾分の笑いが込められている。だが後に続く言葉は何もない。したがって彼の、悲鳴にも似たそのおどけ笑いの「あー」が、悪魔でも降臨しそうな黒雲の隙間から、温かな救済の光を地上に招き入れる……などということは、全くなかった。「あー」では、この場の何も変え得なかったのだ。感電しそうな空気は微動だにせず、依然、彼に逃げ場はない。あまりの痛々しさに俺は、男の横顔から目をそむけ、うつむいて彼の足元を見た。

震えている。ズボンの上からでも分かった。

ーー無理もない。いきなり" You? "なんて振られても……。

英語だったと気付いてみれば、この爺さんの英語は、ネイティヴのように流暢なものだった。だいたい彼は、顔も少なからず日本人離れしている。地黒の皮膚、白髪混じりの短いくせ毛と髭、年齢によって醸し出される渋み。そして、眼力やオーラの、およそ常人ならぬパワーを考え合わせると、ダンディーなアフリカ系アメリカ人みたいだと思った。

ーーそうだ、まるで昔、父親が持っていた映画に出ていた名優みたいだ。[万三郎は、直近の記憶がないけれども、もっと昔の、父親との記憶はクリアに思い出せるのか。この設定に読者は矛盾を感じないか。]あの映画を一緒に観ていた父が、「おお、カッコえいのう！」と唸った時のセリフの日本語字幕は、確かこんな感じだった。
「ヘミングウェイは言った。『人生は素晴らしい。戦う価値がある』……後の部分には賛成だ（2）」

ヘミングウェイなんて固有名詞が出てきたから、俺はこの字幕を覚えていた。で、今、目の前の爺さんはそう言ったのか？ いや、覚えている限り「ヘミングウェイ」などとは聞こえなかった。

ーーじゃあ、何と……？

爺さんが次に俺に問うてくるのは火を見るよりも明らかだ。まずい、時間がない。考えろ、脳！　嫌な汗が、こめかみのあたりからつーっと流れてくる。

ついに爺さんは、隣の男に明らかに失望した様子で肩をすくめてみせると、視線を俺の方に向けて、何か言おうとした。

そのときだ。

「あ、あの……大きく分けて……ス、スリー、ポインツ……あります」

隣の男が下腹に力を入れ、震えを制した声で爺さんに挑んだのだ。

四

　男は無謀にも、爺さんに逆質問を投げかけ、抵抗を試みるのか。爺さんはいったん俺に移した視線をゆっくりと彼に戻した。再び毒を流し込まれる前に彼は口を開く。

「ワ、ワン、ポイント、イズ……なぜ、私は、ここに、いるのでしょうか」

　ーーおお！

　心の中で彼に喝采を贈る。たしかにひどい英語の発音だし、その文脈なら「ワン・ポイント」ではなく、「ファースト・ポイント」だろうとは思ったが、そんなことより、英語の質問に対して、日本語混じりで逆に質問し、この爺さんと渡り合おうとする、彼の度胸に感服したのだ。あっぱれ、同胞！

「ツー、ポイント、イズ……英語で訊かれたからといって、英語で答えなければならないのでしょうか」

　ーーうおお、すごいぞ、同胞！

「スリー、ポイント、イズ……私は、英語が、苦手です」

　見事な彼の「スリー、ポインツ」だった。それは今、彼が思っていることをすべてぶつけて全力で抗っている姿であり、それらははからずも、三つとも俺自身がまさに今抱いているポイントと同じものだ。溜飲を下げたのは言うまでもない。

　しかし。

　ーーああ……。

　爺さんは、全く動じていなかった。まるで、自衛隊の戦闘機がゴジラに搭載ミサイルを数発撃ち込んで、まったく効き目がない時の絶望感を抱かせる。爺さんは例の、まばたきをしない目をもって、隣の勇者のあらゆる動きを完全に封じ込めた上で答えた。

　英語で。

"So, what?"

ーーなんだ？「だからどうした」って言われているのか。

それくらいは彼にも意味が通じたのであろう。袋小路に追い詰められたところで手当たり次第に投げつけた「スリー、ポインツ」を、一顧だにされることなくさらりとかわされた彼は、いよいよ完全に言うべき言葉を失って、うなだれるほかなかった。

爺さんの左眉がピクリと上がる。不敵な笑みを浮かべたように見えた。

それからようやくゆっくり瞼を閉じた爺さんが再び目を見開いた時、その視線はピタリと俺に据えられていた。

"How ’bout you?"

五

　――ハバチュー？

　「お前には充分、時間が与えられたであろう？」と、微かな期待の声色も混ざっているように感じられる。しかし、こんなに短いセリフに、これほど圧力を持たせることができるものなのか。

　――いや、そんなことより、考えろ、脳！

　今しがた玉砕した隣の男と同じく、思わず右手を後頭部にやりかけて、同じ反応をする頭の悪さに気付き、途中で止めた。爺さんの視線に耐えながら、胸の辺りで止めた右手でこぶしを握って、無意味な薄ら笑いを浮かべつつ、その笑いの口がたまたま「イ」を発音したがっていたので、俺は答えた。頭の中は真っ白になっている。

「イ……イエッサー！」

　そこまで言い切って、わが脳はこと切れたかに思えた。しかし爺さんは、決して俺の目から視線を外すことなく、英語で思いがけない言葉を継いだのだ。

"Go ahead."

「はい？」

"I said, ‘Go ahead’. C’mon, go on."

　爺さんの目は俺の目を見すえて寸分も動かない。爺さんは、「ゴーアヘッ」のところだけゆっくり言った。

　――ゴーアヘって、「前へ進め」ってことか？　この状況で？

　思いがけない展開に、俺の脳は処理能力を超え、ついに思考停止に至った。

　――えーい、どうにでもなれ！

「イ……イエッサー！」

　中学の運動会での入場行進以来の手足の振りで、その場から前へ行進した。兵隊の行進のように、視線をまっすぐ、背筋を伸ばして、必要以上に足を高く上げて歩く。

　三メートル前に爺さんがいるので、ぶつからないように爺さんの一メートル手前で直角に右折、さらに一メートル進んで直角に左折、そのまま、先ほど爺さんが入室してきた扉に向かって行進していく。

　途中、怖くて爺さんの顔を見ることはできない。もちろん、マーチ音楽も手拍子もない。このふかふかの絨毯が足音を吸収してしまい、スーツの上着やズボンが擦れる音以外は、不気味な静寂が辺りを包んでいる。

　あっけにとられたように立ち尽くす新渡戸部長の横を素通りし、八メートルを行進して、閉められた扉に至った。高さが俺の身長のたっぷり倍はある重厚な扉。観音開きタイプのその扉は、縁（ふち）から、ドアノブから、豪華な金の装飾で光沢を放っている。その一部に、近づいた俺の像がおかしな形でぼんやり映りこんでいた。

　先ほど扉は部屋の内側に開いていた。だから、行進の勢いのままに扉を押し開けて廊下に出ていくわけにはいかず、爺さんたちに背中を向けたまま、扉の前で足踏みを続けるしかない。

　俺が足踏み状態に至ってもなおしばらくの間、静寂が続いた。このわずかな運動量に似合わぬ量の汗が、額といい、首筋といい、脇といい、体中に湧き出しているのが感じられる。

　――俺は、何をやっているのだろう。

　しばらくして、わずかに笑みを含んだ声で、爺さんは号令した。

"Company …halt!"

　それに合わせて、扉に向いたまま気をつけをした。なぜ足を止めたか。それは、爺さんの英語の口調が、日本語の「ぜんたーい、とまれ！」と全く一緒だったからだ。ようやく確信に至る。

　――前進して、良かったんだ。

　続いて、背後で爺さんの声が聞こえた。

"About … face!"

　これは、「回れ右」だ、間違いない。

　俺はその場で美しい回れ右をする。そこで初めて、今まで進行していたことの全容を、いくぶん客観的に把握することができた。

六

　視界には、こちらを向いている爺さん、そして俺がいた場所の隣に、さっき足を震わせていた男が立っている。彼はこちらを見て、あっけにとられたように目を見開き、口を半分開けていた。そして、少し手前で新渡戸部長も、やはりこちらを見て立っている。爺さんは、やはりもの凄い存在感で、まるで俺は見えない紐でがんじがらめに縛られているようだ。

　そして爺さんは、そのがんじがらめの紐のうち、一本をわずかに緩めてくれた……ような気がする。すなわち、笑わずして微笑んだのだ。その違いは……目だ。たぶん、目だけでそれを表現しているのだ。

　俺は、救われた。

　その場で行進するという、一見突飛な指示を、聞き違うことなく遂行できた、その即断能力の高さに自己満足していた。

　ーー俺が、正解だ。

　今や、爺さんに微笑み返す余裕すらある。爺さんは、一本の紐を緩めたまま俺に短く言った。

"Come back, to where you originally stood."

「イエッサー！」

　ともかく最初の「カムバック」だけは聴き取れたので、そう答えておいて、俺は静寂を縫って再び直線的に行進して、さっきの場所に戻った。爺さんが自ら進路から外れてくれた。

　最初の場所に戻ると、爺さんは表情を引き締め、流暢な英語で再度、隣の男に迫った。爺さんは今度は、男の目の前一メートルに立っている。

"Now, you’ve been given enough time to consider. What do you think, eh? "

　最後のこもった音の「あー？」のときに、爺さんは男を見たまま顎をわずかに上げた。俺は顔を動かさないようにして視線だけを左へやってみる。男の足は、また細かく震え出していた。凄まじい場の雰囲気だ。それでもついに彼は、腹に力を入れて回答を絞りだした。

「ナイス、トゥー、ミーチュー。アイム、ファイン」

ーーうーん、それはたぶん、違うだろう。

案の定、爺さんは深いため息をついた。首を左右に振る。それから爺さんは、傍らの新渡戸部長に振り向いて言った。

流暢な日本語で。

「新渡戸くん、よくここまでのレベルの若者を見つけたな」

「はっ、社長がおっしゃった、話にならんレベルというのはこのあたりかと」

七

　新渡戸部長は、悪びれもせずそう答える。

「よろしい。して、英語以外の能力については？」

「はい、二人とも充分に優秀です」

「うむ」

　爺さん、いや、社長は満足げに頷くと、俺たちのさらに後方、部屋の奥にある社長机に歩いて行き、その上にあった数枚の書類を手にして戻ってきた。書類と二人の顔を交互に見比べながら、爺……社長は、まず俺に目を留め、尋問するように言った。

「　中浜万三郎（なかはま まんざぶろう）　、二十二歳。君が中浜くんか？」

「はっ、はい！」

「うむ。私が言ったのは、『答えを続けて』ということだ。前へ進めと言ったわけではない(3)」

「は？」

　そのとき社長はすでに隣の男に視線を移していた。

「三浦杏児（みうら あんじ）。二十二歳。三浦くん」

「はい！」

　社長は書類から目を離して、しばらくまじまじと彼の顔を覗き込んだ。

「うーむ。よく似ておる」

「は？」

　彼は社長から目をそらしているのが分かった。そして、目をそらしたくなる気持ちも分かった

。

　充分過ぎる間を取って、社長はようやく話を再開した。

「君の英語はある意味、素晴らしいな」

「は？　といいますと……？」

「高校英語あたりで、多くの生徒の発音はある程度ましになるものだが、その完璧なまでの日本語的英語発音の話者として、よく大学卒業まで生き残ったな。君は化石のように貴重だ」

　三浦杏児と呼ばれた男は、一呼吸おいてから爺さんに答えた。

「お褒めにあずかり、光栄です」

　三浦は、顔を赤らめつつ社長に向けてわずかに目礼をしたが、目を上げると社長がまだ彼をまっすぐ見ていた。彼は目のやり場に困り、結局まっすぐ社長を見返すしかなかった。彼の喉仏がまた大きく上下した。

　俺がうつむきながら、隣の三浦を気の毒そうな目で見ていたそのとき、コツコツと、外から扉が二回ノックされた。最初にあの扉が開いていた時には見逃したが、内側のあの装飾度合いからして、あれは、扉の外側に埋め込まれた、ライオンが真鍮の輪を咥えたデザインのドア・ノッカーの音に違いない。

「入りなさい」

　社長は三浦から目をそらさずに言った。

「失礼します」

　入室してきたのは、先ほど出て行った若い女性だ。扉を押し開け、するりと室内に身を滑り込ませると、そのまま一方の手で念を押すように扉を閉めた。扉は音もなく閉まり、その前で女性は、歯を見せずに口角を上げて、社長に向かって再び深々とお辞儀をする。

　彼女はごく小さな、黒いブリーフケースを手に提げている。社長はようやく三浦からその女性へと視線を移した。

「持って来てくれたかね」

「はい、社長」

　女性は俺のすぐ目の前まで歩いてきて社長の前に立つと、うやうやしく小さなブリーフケースを片手の上に水平に掲げ、もう片方の手で、ロックを外した。つまみを横にスライドさせると、パチンといって、二つの留め金が跳ね上がる。ロックを外した手で側面に手を添え、社長に向けて、ケースをそっと開く。

「うむ」

　社長は中身をあらため、一瞬目を細めて頷いた。女性は心得て、ケースを後方の社長机まで持って行ってそっと置く。そして今度はその中身だけを持って社長の横に戻ってきた。

　女性が社長の横に立つと、社長は俺たち二人に向かって大きな声で言った。

「ようこそ、わがＫＣＪへ！」

八

　社長は小柄な身体に似合わない大きさの声で続ける。

「私が社長の古都田誠（ことだ まこと）だ。こちらは秘書の藁手内（わらてない）くん」

「秘書室所属の藁手内恵美（えみ）です」

　藁手内恵美は、澄ました表情に二割ほどの微笑みを混ぜて涼やかに挨拶した。肩すれすれのストレートヘアがお辞儀で前に流れた。歳は三浦や俺とそう変わらないようにも見える。名前こそ面白いが、これまでのそつのない所作から、彼女が有能な秘書であろうことが容易に想像できた。

　社長は続ける。

「あちらは諸君ももう知っているだろう。人事部長の新渡戸稲男（にとべ いなお）くんだ」

「新渡戸です。あらためて、よろしく」

　五十代とおぼしき新渡戸部長は万三郎たちに向かって軽く会釈した。その頭頂部の頭髪が薄い。だがそのことが良い意味でこの人に落ち着きと重みを与えている。人事関係を束ねる立場だけに、しっかりした人物なのだろうとは思うが、両の眉毛が漢数字の「八」の字型だからか、社長とは違って近寄り難い印象はない。むしろ、心の奥底に豊かに温情をたたえている優しい人なのではないか。いや、なにしろ今日初めて会ったばかりなのだから、本当のところはどうなのか、まだよく分からないのだが。

「さて」

　古都田社長は視線を俺たちに戻し、先ほどより幾分声量を落ち着かせて話し始めた。

「中浜くん、三浦くん。君たちは、本日よりわがＫＣＪの社員である。のみならず、君たちは入社した本日から、ＥＴである」

　思わず三浦と顔を見合わせる。

「イー・ティー……地球外生命体？」

　不用意にそうつぶやいてしまった俺の方を向いて、社長はくわっと目を広げ、その声色が威圧的になった。

「Executive Trainee（エグゼキュティヴ・トレイニー） つまり、『幹部候補生』の略称だが、中浜くん、君が自分を地球外生命体（Extra-Terrestrial（エクストラ・テレストリアル）） だと思うのは自由だ」

　俺は素直に謝る。

「いえ、失礼しました」

　もう毒を注ぎ込まれるのはごめんだ。だから俺は、上官の部屋で叱られる兵士さながらに、気を付けしたまま、視線を目線の高さに固定して、まっすぐ遠くを見るようにした。社長は、二、三秒の間、そんな俺の視線を絡め取ろうとしていたが、ついに諦めて、再び声のトーンを戻し、用件を再開する。

「幹部候補生ないしＥＴは、つまるところ『選ばれし人材』ということだ。二人とも一流の大学を優秀な成績で卒業している。その卓越した知識と技能は、わが社に貢献していく中で適切に発揮されると期待しておる。しかし、だ！」

　社長は、今度は鋭い眼光を三浦に向けつつ言葉を継いだ。

「しかし、君たちがＥＴに選ばれ、ここにいる理由は別にある。それは……」

　社長はそこで言葉を切る。

　――それは……？

　ごくり。絶妙のタイミングで三浦杏児が唾を呑む。社長は三浦を無遠慮に見据え、それから俺を射るように見る。

「その理由は、二人の英語能力が、悪い方に抜きん出ている、ということだ」

九

　ーーは？　それがここにいる理由？

　返す言葉がない。

「今、この部屋で君たち自身が見聞きした通りだ。君たちの英語は、目も当てられん。まったくもって信じられない。驚異のレベルである。グローバル化したビジネス環境で働く人材、我がＫＣＪはもちろんのこと、例えば韓国のシムサン、中国のホイエール、日本のフニプロやバクテンの幹部社員たちから見れば、君たちはおそらく、ミドリムシのレベルだろう」

「ミ……」

　三浦が小さく一音だけつぶやく。社長は一瞬、三浦の方を向いたが、そのまま言葉を続けた。

「そしてこれはある意味、奇跡でもある。他の学業分野の成績とのギャップの大きさが奇跡的なのだ。見事な落差だ。すばらしい。おめでとう。それが今、君たちが、選ばれし者としてここに立っている理由だ」

　俺は納得がいかない。英語ができないことがなぜ、おめでとうなのか。いや、それより、ミドリムシに例えられることには少なからずプライドを傷つけられた。そこまで言うことはないだろうに。

　そう思った時、三浦が小さく挙手した。

「社長……一つ質問があります」

「何かね」

「英語ができないと不利だと思うのですが、なぜ社長は今、おめでとうとおっしゃったのですか」

「うむ。実のところ、英語ができない今の君たちは、特に我が社ではまったく戦力にならん。その意味ではたしかに何もめでたくはない。しかし、非常に良いことがある。それは、英語に関して君たちが、ほとんどゼロから、よーい、どんで競えるということだ」

「はあ……」

　生返事をする三浦の横で俺は、口を半開きに開けたまま黙って直立していたが、頭の中では目まぐるしく思考が駆け巡っていた。

　――よーい、どんで英語学習を競えと？　誰と？　この隣の男と？　俺に今さら英語をやれというのか？

　中学時代からずっと英語が苦手だった。英語をやりたくないがために、他の科目をがんばって、それでトータルの成績をキープして逃れてきた。このたび大学を卒業して、十年にわたる悪夢のような英語学習からようやく解放されたはずだった。

「つまり、私たちに、よーい、どんで英語を勉強せよと？」と三浦。

「そうだ。英語を学ぶこと、それが君たちの当面の業務となる」と社長。

「英語を学ぶこと自体が業務……」

「そうだ。その理由はいずれ分かる」

　古都田社長はそう言うと、続く言葉に力を込めた。

「ＥＴ、すなわち幹部候補生として、本日より、英語学習にまい進せよ。これは社命である」

十

「社命……ですか」

　三浦がつぶやく。

「不満なのか？」

「い、いいえ。ただ、あまりに意外だったものですから」

「何が？　仕事の内容がか？」

「はい。私の専門分野を活かした職務につきつつ、その傍らで英語の研修などを受けて能力向上を図るのかと」

「いや、主たる業務が、英語の習得だ」

「はあ。そうですか」

「三浦くん、君は他社の幹部社員から、ミドリムシ並みと揶揄され続けたいか？」

「いいえ」

「まあそれ以前に、もし君がミドリムシレベルに甘んじ、英語学習を放棄するようであれば、幹部への道はおろか、君の居場所は早々にわが社からなくなるだろうがな」

　俺は社長の顔を見た。先ほど、回れ右をした時に見た顔とは反対に、穏やかな笑顔こそ浮かべていたが、俺や三浦をがんじがらめにしている全ての紐はピンと張られている。

　――社長の笑顔は、笑っていない。

　居場所がなくなるという話は、冗談ではないようだ。ということは、幹部候補生として社命を受け入れるか、入社そのものを辞退する、それ以外の選択肢は俺たちにはないということらしい。

「では、我がＫＣＪのＥＴ専用の特別な社章を今から貸与する」

　横に控えていた藁手内恵美の手から金色の物体を受け取ると、社長は二人に、それを一つずつ手渡した。

　それは、手のひらの中ほどに収まる小さなサイズの、金細工のオブジェがついたピンブローチだった。オブジェは水面に浮かぶ水鳥をかたどっているようで、目の部分には小さな宝石が光っていた。ＫＣＪの文字も鳥の胴体に銀素材であしらわれているので、これがこの会社の社章で、鳥は会社のシンボルか何かなのであろう。

「鴨……ですか？」

　俺が訊くと社長はすかさず答えた。

「そうだ。ミドリムシ型の方が良かったか？」

「いえ……」

　悪意のあるジョークだ。

「いいか、よく聞きたまえ。この、金色の鴨があしらわれた社章は、それをつけている者が、ＫＣＪのＥＴとしての責任と権限を有していることを内外に知らしめる、特別な意味を持っている。ＫＣＪの一般社員たちは皆、ＥＴの指示命令に従う義務があるのだ」

　それから社長は、より力を込めて、ゆっくり言葉を区切りながら、俺に言った。

「社命に従い、英語学習にまい進する決意ができた者は、今、ここでそれをつけなさい。辞退する者は今、それを私に返しなさい」

十一

　社長が言い終わる前に、三浦は自分の社章をスーツの襟に着け始めようとしている。が、このようなタイプのバッジは初めてらしく、要領を得ないようだ。

「藁手内くん、手伝ってやりなさい」

「はい」

　社長の指示を受けた藁手内……さんは、涼やかな表情ながら、ほんの少し、照れたように顔を赤らめ、三浦に近づいて言った。

「タックピン、初めてですか」

「はい。すみません、お願いします」

　ーーそうか、これ、タックピンというのか。

　藁手内さんは三浦から社章を受け取り、彼のスーツの襟のフラワーホールに挿し、襟を裏返して、ピンの先をキャップのような留め金で留めようとした。

「つッ……」

　彼女は留めそこなって自分の指先を刺してしまったようで、留め金をポトリと落とした。

「あら、ごめんなさい」

　彼女は留め金をさっと拾い上げると、それからは流れるような手つきで社章をつけ終え、三浦のスーツの両襟の下の方を両手で持ってサッサッと下へ引っ張ってなじませた。

「オッケーです」

「ありがとうございます」

「いえ……」

杏児のお礼に藁手内さんは、はにかんだ笑顔でちらりと彼を見上げて応えると、次に俺の方を見やった。藁手内さんはたぶん、手伝いましょうと申し出ようとして、その言葉を飲み込んだはずだ。俺は、自分の社章を握りしめたまま、最後の段階でためらっていたから。

ーー英語かあ。もう一度やるのかあ……。

そんな俺を見ていた社長が、また、紐の一本を緩め、語りかけてくる。

「ＫＣＪで英語を学習するということは、英語との関わり方を変えるということを意味する。それは、中学、高校、大学と、今まで君が教科書で学んできた英語の世界とは、まったく違う」

俺より少し背の低い古都田社長は、一歩歩み寄りながら、下から見上げるように見つめて、言葉を継いだ。

「今、君は、その世界の扉の前に立ちながら、扉を開けようか迷っている。扉を開けずにこのまま立ち去ることも、自由だ」

社長はそう言うと、今度は一瞬、押し黙った。考える時間を与えたのかも知れない。三浦も手を止めて社長の言葉をじっと聴いていた。

しばらくして、社長が再び俺の目を見て口を開く。

「『最高の学習は、学び方、すなわち自分が変わる方法を学ぶことにある(4)』という言葉がある。いずれ分かるだろうが、ＫＣＪで英語を学ぶことは、自分が変わることを学ぶということなんだ。中浜くん、君は若い。考えるよりやってみることだ。苦手だと思う自分を、変えることができるか、やってみればいい。扉があるなら、とにかく開けてみればいい。自分をより高きに導いてくれる『チャンス』の階段は、扉の向こうにしかないのだからな」

俺は腹を決めた。

「社長、……扉を……開けてみようと、思います」

「うむ。良い判断だ」

社長はそう言って一瞬、とても魅力的な笑顔を見せた。この人が本当の笑顔を見せたーーつまり、がんじがらめの紐のすべてが緩んだーーその時、俺はどんなに安堵と安らぎを感じたこと

だろう。さっき、この人に初めて出会ったときには、黒い毒エネルギーを流し込まれたように感じたが、今はまるで、春の陽射しにキラキラ川面を輝かせるせせらぎの清水が心の隅々にまで染みわたっていくようだ。俺は一気にこの小柄な爺さんに親近感を抱くに至った。

　ミドリムシ並みと揶揄されるまでもなく、自分でもやはり劣等感を抱いていた英語の実力を、昔の他の教科と同じくらいに引き上げたい気持ちは、心のどこかにくすぶっていた。だから、考え方を変えれば、これはひょっとすると、チャンスなのかも知れない。

　そう思い至った俺を柔らかい眼差しで見つめる社長を認めると、つい苦笑いをして頭を掻いた。

　一一社長は、俺が社命を受け入れることなど、最初から見越していたんだ。思うに、あまたの部下を束ねてきたであろう社長からすれば、若い俺の向上心に火をつけることなど、訳ないのかも知れない。

　藁手内さんが俺を見上げて微笑む。俺は彼女に自分の社章を手渡した。

「お願いします」

　藁手内さんは今度はスムーズに俺の社章を取り付け終わり、古都田に報告する。

「はい、つけました」

「そうか、つけたか」

　ほとんどまばたきをしないこの社長がそうつぶやくと、一度、とてもゆっくりまばたきをして、それから、あらぬ方向を見てニヤリと笑った。

　そんな古都田社長を、俺は思わず二度見した。笑顔の種類が、違っている。先ほどの、お日さまのように優しく、温かなエネルギーは、この爺さんから、もはやみじんも流れてこなかった。

十二

　三浦が、それまで見つめていた胸の社章から視線を上げた。

「社長、大きく分けて質問が三つあります」

「なんだね」

「一つ目は、私と中浜……くんは、同胞なのですか、それとも……」

　三浦がこちらに顔を向けたので、目が合う。ショートヘアが精悍な顔つきによく似合っている。なかなか良い男だ。さっき社長に、三つの意見を述べてたてついたことから考えると、論理的でコシの強い性格なのかとふと思った。

　社長が答える。

「協力し合いたまえ。そして時には競い合いたまえ。君たちはチームだ。そうだな……『チーム・ミドリムシ』と名付けよう」

　ーーチーム・ミドリムシぃ？

　これは勘弁してほしい。俺はそれを口に出した。

「社長、それはちょっと」

　すると社長は、こともなげに次なる思いつきを指示する。
「では、『みどり組』にしなさい。英語で『緑』（green）には、『未熟な若造』という意味がある。まさしくその通りじゃないか。もって励みとしなさい」

「み……」

　今度は俺が、一文字だけ鳴いた。

　代わりにまた、三浦が問う。

「二つ目の質問ですが、私たちの職場はどこになりますか」

「当面、ここ、本社内の研修室が多かろう。言い忘れていたが、ＥＴ専用の社員寮を用意している。衣食住の心配は必要ない」

　――えっ、社員寮？　俺たちは寮に住むのか？

　にわかに疑問が湧いてきた。だが、俺がそれを口にするより先に、三浦杏児が三つ目の質問だと称して、まさに俺が訊きたかった質問を訊いた。

「社長、ここはいったい、どこなのですか」

　社長は、ほんのわずかの間、何か考えているようだったが、すぐに彼にしっかり目を据えて言った。

「東京都千代田区永田町一丁目、株式会社ＫＣＪ本社社長室だ」

　――東京？　東京なのか、ここは。いつの間に俺は東京に来ていたんだ？ いや、そもそも俺はなんでここにいる？　この会社を志望していたのか？　なぜ……？

　記憶が混乱し始めていた。どうしても思い出せないのだ。何か大事なパーツがごっそりとまるごと抜け落ちているような感覚に襲われていた。

　その時、社長は三浦に逆に訊いてきた。

「ここの場所も分からずに、今朝、君はどうやってここへ来たというのだ」

　三浦は言葉に詰まっている。

　まさしく言われる通りだ。言われる通りなのだが……。

　――俺は、この社長室にどうやって来た？　いや、そもそもこの本社にどうやってたどり着いた？　歩いてきたのか？　地下鉄で来たのか？　どこから？　今朝、俺はどこで目覚めたのだ？

　その時、社長は、今度は俺を見てあごをしゃくった。

"You?"

　ーー来たよ。さっきと同じモードだ。

　問われるまでもなく、今考えていたところだ。だが俺も完全に混乱している。何が何だかよく分からない。どうしても、ここに来る以前のことが思い出せない。

　社長は、黙って俺の答えを待っている。

　ーー普通、この質問は反語的な皮肉だろう？　場所がわからずに来られるわけがないのだから、君はこの場所をわかっていたはずだと。それで終わりじゃないの？　それ以上何を聞き出したいんだ？

十三

　数秒のうちに、激しい頭痛に襲われた。

　こちらを凝視され、見えない紐で彼にがんじがらめに縛られているように感じるのは先ほどと同様だったが、先ほどは頭がズキズキするようなことはなかったのに。

　それでも、何か答えなければと思い、社長の黒眼の向こうに、じっと記憶をたどろうとする。

　嫌な汗が頭から額へと流れてくるのを感じた。

　社長の眼を見返したからわかったのだが、答えを待つ社長の眼は、俺の眼を見てはいなかった。社長は、俺の胸の辺りを注視していた。しかし、俺の額に汗が一筋流れたのに気付き、先刻同様、ようやく緊張の紐をわずかに緩め、俺の目を見て、笑わずして微笑んだ。

「ふっ、まあいい」

　頭痛はたちまち治まった。

　古都田社長の、恣意的な威圧感のコントロールによって、俺は良いように翻弄されている。そして隣をうかがうと、三浦杏児も右手をこめかみの辺りにやって首をかしげていた。彼も頭痛だったのか。

　――やはり、この爺さんの本性は、よく分からない。

　その時、社長室のドアがノックされた。

「入りなさい」

「失礼します」

　入って来たのは、四十代後半とおぼしき、メタボリックな男だ。

　古都田社長は、男を近くに呼び寄せた。

「ああ、今神くん、ちょうど良かった。紹介する。本日入社のＥＴだ。中浜万三郎くんと、三浦杏児くんだ」

　俺たちは慌ててこの男にお辞儀をする。

「中浜万三郎と言います」

「三浦杏児です」

　あごから首のラインが鈍角のこの男は、タオル地のハンカチをポケットから出してせわしく額の汗をぬぐいながら、俺たちの胸の社章を見てフフンと片方の唇を上げた。それから顔を上げて俺たちを交互に見る。

「なるほど。中浜くんに三浦くんだね、社長から聞いていました。素晴らしい英語の使い手とか。ＫＣＪ秘書室長兼営業調査部長の 今神栗八（いまがみ くりや） です。よろしく」

「私の直属上司です」と、藁手内恵美が補足した。

「で、社長、いかがですか」

　今神室長は汗を拭いながら社長に向き直って尋ねる。

「うむ。機能しているようだ」

「そうですか、ではしばらくこの周波数で……」

　ネクタイが締まっているシャツの襟元を人差し指で引き上げて、首との隙間にタオルハンカチを当てている今神室長を視野から外しながら、社長は俺たちに言う。

「先ほども言ったが、ＥＴは、選ばれし幹部候補生として、我がＫＣＪの取締役、監査役など役員一同から大いに将来を嘱望されている存在だ。今神くんには、君たち三人の成長ぶりを役員諸氏に伝える仕事もしてもらう」

　万三郎は訊き返した。

「三人……？」

「ああ、そうか」

　社長は新渡戸部長と目交ぜした。

　新渡戸部長が説明する。

「ＥＴは君たち二人だけではない……とだけ、今は言っておこう」

　社長が今神室長に向き直る。

「ところで、もうそんな時間か」

　今神室長が頷く。部下の藁手内恵美が、腕時計を見ながら答えた。

「そうですね、そろそろ石川さんを玄関でお迎えする時刻です」

「そうか」

　社長は、新渡戸部長に向き直る。

「新渡戸くん、では彼らをよろしく頼む」

「チンステへ」

「そうだ。私からエドワード駅長へ伝えてある」

「かしこまりました」

「よし、三浦くん、中浜くん。新渡戸くんについて行きたまえ。ＫＣＪを代表して、君たちの奮闘を祈っている。今神くん、行こう」

　社長のその言葉に、藁手内恵美がすぐに扉を開けに向かって行き、新渡戸部長は手に持っていた書類ファイルを閉じた。

　エレベーターのボタンを押すためにか、先に部屋を出て行った今神室長に続いて、古都田社長は大股で社長室を出て行こうとしていた。

俺は、意を決して、その背中に声をかけた。

「あの、社長！」

社長は部屋を出たところでこちらを振り向く。

「社長、ＫＣＪって、何の略なのでしょうか」

油絵の後光をピタリ後ろに従えながら、社長は鋭い眼光を放ちつつ、謎めいた笑みを浮かべ、ゆっくり俺たちに言った。

「こと(K)だま・カン(C)パニー・ジャ(J)パン」

重厚な社長室の扉がゆっくりと閉じられていった。

◆◆◆

（１）"Young men are fitter to invent than to judge, fitter for execution than for counsel, fitter for new projects than for settled business."――Francis Bacon （1561-1626）.
「若者というのは、判断することよりも考案することに適しており、また、協議よりも実行に適しており、また、安定した仕事よりも新しい企画に適している」――フランシス・ベーコン（イギリスの随筆家・哲学者・政治家）

（２）「ヘミングウェイは言った。『人生は素晴らしい。戦う価値がある』……後の部分には賛成だ」
“William Somerset: Ernest Hemingway once wrote, ‘The world is a fine place and worth fighting for.’ I agree with the second part.” ――Se7un （1995）
映画「セブン」のラストで、ヘミングウェイの小説『誰がために鐘は鳴る』の一節を引いて老刑事がつぶやくセリフ。

（３）「前へ、進め」は”Forward march!” という号令が一般的。

（４）最高の学習は、学び方、すなわち自分が変わる方法を学ぶことにある――ジョージ・レナード（アメリカの作家・教育家）
"To learn is to change. Education is a process that changes the learner."――George B.

Leonard（American writer, editor, and educator, 1923-2010）

第二章　杏児（1）

一

　扉上のディスプレイによると、僕たちは今、六十二階辺りを下降中である。

　後ろにいる新渡戸部長は、このシースルーエレベーターに乗り込んでからは無言だった。

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル……」

「えっ？」

　僕は、隣で何かつぶやいた中浜万三郎の方を向く。すると中浜もこちらにちらりと目をやって答えた。

「あ、とても驚いているってこと」

「ふうん、そう言うんだ」

　中浜万三郎。

　僕と同い年だという、この、紺のスーツに身を包んだ細身の男……。横並びだった社長室の時とは違って、このエレベーターの中では必要に応じて彼に顔を向けて観察できたので、僕は彼の外見について、新しい知見を得ることができた。知見は、大きく分けて三つある。

　第一に、体格は、僕よりは細くない、ということ。これは、中浜が太り気味だというわけではなく、比較する僕自身の体格がむしろ細めなのだ。世の日本人男性の平均値からすれば中浜は、おそらく太くもなく細くもなく、これといって特筆すべき特徴のない「普通の」体格であろう。対して僕は、ガリガリではないが、少し痩せ気味の部類に入る。痩せ気味ではあるが、筋肉質でもある。中浜が筋肉質なのか否かについては、スーツの上からでは何とも言えない。身長については、僕と同じくらいのはずだ。たった今、目が合った時に、至近でその目線の高さがほぼ同じであると認識したから。

　そう、中浜と今、目が合った。彼の目は、奥二重瞼の、吊り目でもない、たれ目でもない、黒目も大きくも小さくもない、眉毛も太くもなく細くもない、まつ毛も長くもなく短くもない、うーん……まあ、これと言った特筆すべき特徴のない……いや、逆を言えば、要するに、程よく整ったパーツ……つまり、イケメンの面構えの、中核を成すパーツが目であった。これが第二の

知見。

　そうだ、中浜は、なかなか見栄えの良い男であると、認めざるを得ない。そこそこイケメンーーこれはもちろん、同性としてはうらやむべき特徴なのだろうが、僕に限っては、その点については、そこまで強く羨望の情を抱かなかった。なぜなら、僕の方も、なかなかのイケメンだと自負していたからだ。自惚れだと笑うなかれ、非難するなかれ。これでも僕は、これまで女性にそこそこ人気が……あれ？　なぜ思い出せない？　僕のちょいモテ記憶が……。まあ、いいか。

　軽く頭痛がしそうだったので、僕は思わず後頭部を手で押さえ、押さえると同時に、二つの、どちらかというと嫌なことを思い出した。

　そうだ、目が普通にイケメンのそれだということよりももっと、中浜を羨ましいと思う特徴がある。彼についての第三の知見、それが髪質だ。

　中浜は、僕とは髪質が違う。直毛のサラサラヘアは、くせ毛で猫毛の僕が羨望して止まない理想の髪質だ。整髪剤も何もつけなくても、おさまりの良い、黒く、光沢のある健康状態の良い髪だ。彼はきっと生まれた時からその髪質と付き合ってきているのだろうから特別なことに思わないかもしれないが、毎朝ムースで癖を整えなけえばならない僕には、羨ましくてしようがないのだ。

　さらに僕は、つい先程、後頭部に手をやって「あー」と含み笑いをしてごまかそうとして、ごまかしきれず、古都田社長に自尊心を完膚なきまでに叩き潰されたことをフラッシュバックのように思い出した。

　苦手な英語、威圧的な老人、社長室という完全アウェイなシチュエーションに、僕は確かに恐怖におののいていた。あの光景は今後長く、僕が自分の後頭部を撫でるたびに、不快なアドレナリンの分泌を伴って思い出されるトラウマになるのだろう。

　だが、目の前のこのやさ男、冷や汗をかきつつではあったが、大胆にも社長の前で一人、行進して見せた。結局それは誤りだったが、あのプレッシャーの中、思い切りの良いその行動に対して、僕は少なからず感心したのである。

　社長から、助け合え、競い合えと言われた。まだ会って間もないので、決めつけるのは早計かもしれないが、パートナーとして、ライバルとして、中浜万三郎という人材と行動を共にすることは、あるいは幸運なのかもしれないと僕は思った。

二

　シースルーエレベーターはまだ降下を続けている。僕が中浜から目の前の景色に意識を移してからも、なおしばらくの間、誰も何も言わなかった。中浜と並んで僕はいま、言うべき言葉を知らず、眼下に広がる光景をただ固唾を飲んで見守っている。

　見渡す限り、そこは「屋内」だった。ドームのような、向こうが霞んで境界がわかりにくいほど、ひたすら巨大な空間があった。僕たちの足元から「沖」の方に向かって、くしの歯のような、平行な直線が何百本も伸びている。

　さらに目を凝らすと、それぞれのくしの歯先から、米粒がいく粒か連なったようなものがゆったりと飛び出して、そのまま「沖」の、さらに遠くの上空にある、隙間のようなところから「屋外」へと出て行く。

　この真下から伸びるくしの歯からも、かすむほど遠方のくしの歯からも、その中間辺りのくしの歯からも、それら米粒の連なりがひっきりなしに飛び出していった。エレベーターの中にいると、外からの音は聞こえないが、かなり慌ただしい風景に思える。

　――こんなに巨大な施設が、東京の永田町にあるなんて！

　それは、ヨーロッパのどこかの巨大ターミナル駅と、製鉄所と、テーマパークのジェットコースター施設が一緒になったような場所……いや、やはり、そのどれとも違うような気もする。

　エレベーターが三十階を切ると、くしの歯のように見えたものが何なのか、分かるようになってきた。

　レールだ。

　そして、くしの歯の付け根にあたる辺りのレールを、今、僕たちは見下ろしているのだった。

　だんだん、米粒のように見えていたものの正体も分かってきた。それは、レール上に停止している、ジェットコースターのような、屋根のない列車のようだ。そして、列車に沿ってプラットホームがあって、その列車の周りで、人が慌ただしく働いている。並んで待っている人たちが、ホーム上の別の人の指示を受けて列車に次々と乗り込んでいるように見えた。

今、少し先のプラットホームから、列車が動き始めたのが見える。

――ああ、これはまさしくジェットコースターだ。

僕はそう思った。

ジェットコースターの車両一両につき、一人が座っている。プラットホームの先端近くに立っているメカニックが、手旗を前に倒して「発進」のジェスチャーをしていた。十両ほど連なった車両が動きを速めていく。

ほぼ地上階まで降りてきたエレベーターは、そこでシースルー部分が終わって、黒い壁に入り、減速し始めた。

後ろから新渡戸部長が静かに言う。

「ＫＣＪ・トーキョー・ローチング・ステーションだ」

エレベーターの扉が開いた。

三

「江戸（エド）、わざわざ出迎えてもらって悪いな」

「いやあ、稲（いな）さん、そんなんかまへん。新しいＥＴが来るゆうて聞いとったから、ドキドキやったんや」

　白い髭を蓄えた恰幅の良い白人のおじさんが、日本の駅長帽と駅長服に身を包み、江戸というあだ名のくせに関西弁をしゃべっているのは、非常に違和感があった。

　友人でもあるのだろう、あだ名で呼び合う部長と駅長。駅長は部長と握手を交わしたのち、僕たちの方を向いて部長に訊いた。

「で、彼らがそうか？」

「ああ」

　僕たちはすかさず挨拶する。

「三浦杏児といいます」

「中浜万三郎といいます」

　駅長は、ふうんと言って、僕たち二人を交互にまじまじと見つめた。

「えらい華奢やけど、大丈夫かいな」

　部長はそれには答えず、駅長を僕たちに紹介した。

「江戸ワード・スミス駅長だ。チンステ全体を統括している」

「チンステ？」

　僕が部長に訊き返すと、「ああ、ローンチング・ステーションの略だ。ここのことだよ」との答え。

　江戸ワード駅長は、僕たちを見たまま、部長に訊いた。

「社長から、百番線から二百番線でと聞いてんねんけど、ほんまにええんかな」

「うむ。お考えがある。迷惑をかけるが、よろしく頼む」

「ふうむ……」

　駅長は厳しい表情でしばらく僕たち二人を見ていたが、「ま、これからのＫＣＪの為やな……」と、誰に言うでもなくつぶやいて、それから部長に向き直って、ニッコリ笑って言った。

「いきなりその範囲（レンジ）は、ほんまに賭けやけどな。ええわ、やらせてみよか」

「すまない」

　駅長は襟元に取り付けられたインカム・マイクに口を寄せて言う。

「信太（しんた）！ お前の管轄の中で……そうやな、百番線台で、今、一番でかそうな取引（ディール）は何番線かな？　……うん。何のディールや？　ほう。そうか。二番目は？　ふんふん……あ、隣り合ってんのか、そうか……ほんなら、そこ、いこか」

　駅長は僕たちを見ながらインカム越しに言う。

「信太、今すぐセントラルビルまで来てくれ。そうや、察しがええな。わしが朝礼で言うとった、あの件や。そうや、マジや。頼むで」

　インカムから口を離すと、駅長はまだ僕たちを見たまま、部長に言った。

「稲さん……。社長は、ええ、覚悟や」

四

　駅長は「外で待とう」と言った。

　ここは、先ほどの駅長の話から察するに、セントラルビルのロビーだ。駅長がいるくらいだから、ここが駅の中心なのだろう。静かなもので、僕たち以外、このロビーには誰もいなかった。

　玄関側がガラス張りなので、先ほどエレベーターから見下ろしていた景色が見える。このビル自体がまだ高台にあるのか、このロビーが地上一階ではないのか、ジェットコースターのホームは、さらに少しだけ下に見下ろす形で見えた。慌ただしく人々が動いているのが遠目に見える。

　さらに、ビルの目の前の車寄せの向こうには、左右を貫く道が通っているようで、ゴルフ場のカートのような電気自動車や、マイクロバスやトラックがひっきりなしに行き交っているのがうかがえる。

　東京都心、永田町のど真ん中に、こんな大きな世界があるとはまったく知らなかった。いや、もしかするとこれらはすべて、地下都市なのかも知れないと僕は思った。

　駅長と部長の後について、玄関の自動ドアを抜ける。途端に、都心の交差点さながらの喧騒と、生暖かい風が僕たちに向かって飛び込んできた。この超巨大ステーションはまさに活発に脈動している。

　信太という男は、電気軽自動車のようなものに乗ってやってきた。玄関前の車寄せに車を止めるとすぐにドアを開けて降りてくる。

「あ、僕は三浦……」

　挨拶をしようとする僕を信太氏は無視して、駅長にけしかけるように言った。

「駅長、ちょっといいですか」

　信太はそう言ってすたすた歩いて、江戸ワード駅長をロビー内へ誘う。駅長が信太について玄関から屋内へ入るなり、信太は駅長に向き直って癇癪を爆発させた。自動ドアが閉まってしまっ

たので、彼の叫びの冒頭しか聞こえなかった。

「なんで！　なんで俺んとこ……」

　部長が明らかに僕たちの注意をそらせようと口を開く。

「前を見ろ、あれはみんな、この駅のプラットホームだ。止まっている無蓋車（むがいしゃ）を、シークウェンス・トレイン、略してシートレという」

　隣の中浜が訊く。

「無蓋車って、あのジェットコースターの車両みたいなやつですか」

「うむ」

　後ろではまだ信太が駅長に向かってしきりに何か抗議をしていた。僕は部長に質問せずにはいられなかった。

「部長、質問が三つあります」

　部長自身も何か考えごとをしているようだ。

「言ってみなさい」

「ここは本当はどこで、ここでは何をやっていて、僕たちは今から何をするのでしょうか」

　部長は腕組みをして、目線の先でも、刻々と作業が進行しているプラットホームの様子を見ながら答えた。

「百聞は一見に如かずだ。彼について行け。すぐに分かる」

　――「彼」って、誰のことですか？

　そう聞こうとしたら、ドアが開いて、憔悴しきった様子で信太が出て来た。

「この人ですか」という意味でだまって部長を見ると、部長は小さく頷いてあごをしゃくった。

玄関から出て来るなり、信太は僕たちの顔も見ずに車へ向かいながら言った。

「乗って」

五

　僕たち二人は、片方が「百十七」、もう片方が「百十八」と看板が掲げられた、幅の広い島型プラットホームに連れて来られた。その一番手前、つまり、くしの歯でいう根元のところにいる。大きな液晶モニター画面がそれぞれ備え付けられていて、異なった映像が映し出されていた。見ると、大型モニターはホームの中ほどと先端近くにも設置されているようだ。

　他のプラットホームと違い、このホームは人でごった返してはいなかった。ホームの中ほどで、駅員のような制服を着ている二人の男たちが、それぞれタブレット端末にじっと見入っているのが見える。

　暗い顔で案内してきた信太がホームをそれぞれ指さしながら言った。

「中浜さん、あんたは百十七番線、三浦さんは、百十八番線だ」

　続いて信太は、声を上げて二人の駅員を呼び寄せる。

「島田、斗南（となみ）、こっちへ！」

「はい、楠さん」

　寄ってきた駅員に、信太は、僕たちを引き合わせた。

「百十七番線専属クラフトマンの島田くん、百十八番線専属クラフトマンの斗南くんだ」

　僕たちは彼らとあいさつを交わす。

「島田です」

「どうも、斗南です」

　その時両氏は、僕たちの胸につけられた金鴨の社章に目を留め、大いに驚いた。

「い、ＥＴですか！」

　楠さんと呼ばれた信太は頷き、神妙な面持ちで、クラフトマンと呼ばれた男たちに宣言した。

「お前ら、次のセッションを、この二人のＥＴに全部任せろ」

　二人のクラフトマンはしばらく絶句して目を見開いていた。ようやく島田が当惑したように口を開く。

「し、しかし楠さん、俺んところ、デカい案件（ヤマ）ですよ」

　斗南氏も眉を顰めて楠信太に訴える。

「楠さん、俺の方も正念場ですが」

　しかし楠は目の前で手を振って、そんなことは分かっているという風だ。

「セクション・マネージャーとして命じる。黙っていろ。手を出すな。いいな、これは社長命令なんだ」

「しゃ、社長命令……なんで……？」

　二人のクラフトマンはお互い顔を見合わせ、次に僕と中浜くんを交互に見て、それから俄然、不機嫌になった。

　楠信太セクション・マネージャーは、念を押すように二人の部下を睨むと、僕に、「じゃあ、概要を斗南から聞いて」と言った。

　中浜は、楠の指示で、クラフトマン島田と打ち合わせに入った。

　一方、斗南と呼ばれたクラフトマンは、ぶすっとした顔で僕に言った。

「じゃあ、あっちのモニター、見て」

「は、はい」

　ホームを歩く斗南についていき、僕は百十八番ホームの中央近くに設置された、大きな液晶モニター画面に見入った。

　プロ野球中継をやっている。

「野球に興味は？」

「あ、ええっとある程度は。レッドスナッパーズとタイフーンズの試合ですね」

「いいか、時間がない。一回しか状況説明しないからよく聞いて」

「は、はい」

「七回裏で、四対三でリードされているタイフーンズの攻撃中。今、フォアボールで、三番打者が塁に出た。これでツーアウト満塁、一打逆転のチャンスで、バッターは四番、ベン・マンズフィールド。球場は最高の盛り上がりを見せている」

　斗南はここで息を継いで、これから大事なことを言うぞとばかり、真剣な顔で僕の目をのぞき込む。

「ベンは、前の打席で、ピッチャー伊藤から首の辺りにデッドボールを受けたんだ。だけど審判が、伊藤を危険球投球による退場処分にしなかったので激怒した。そのやりとりはさっき俺がここ、百十八番線で対応した。彼をなだめるために、シートレの編成には細心の注意を払って、俺の持てる限りの技術を発揮した。ものの言い方を一つ間違えると、彼は大暴れして試合がめちゃめちゃになりかねなかったからだ。さっきは何とかうまく収めたが、今、映像を見るに、ベンはまだ気が立っているようだ」

　モニター映像では、レッドスナッパーズの内野陣がピッチャー伊藤の周りに集まって、守備について確認している。

　斗南氏が言った。

「いいか、三浦さん。ベンを怒らせるなよ。奴は気が荒いから、ものの言い方に細心の注意を払え」

　僕はつばを飲み込んで、頷きながら斗南に訊く。

「それで、僕はどうしたら……」

「ええっ！　何も聞いてないのぉ？」

「はい」

斗南は、まいったなあという風に天を仰いだ。

六

「それじゃあもう、失敗してくれって言ってるようなものじゃないか」

　斗南は今度は手にしたタブレット端末を操作しながら口をとがらせる。

「すみません……」

　僕は謝るしかない。斗南は一度大きくため息をついて、しようがないなという体で、端末に表示された画面を示し、説明を始めた。

「ほら、こんなふうに日本語で注文（オーダー）が来るんだ。このタブレットに表示される。三浦さん、あんたは適当なワーズたちを招集して順番にシートレに乗せる。乗せるべきワーズを乗せたら、出発させる。以上だよ」

　僕は面食らった。

「ちょ、ちょっと待ってください。誰から注文が来るって言いました？」

「それは今あんたが気にする必要はない。受注部からこの端末に転送されてくるのさ」

「ワーズって、なんですか」

　斗南は、目を見開いて僕をまじまじと見た。

「あんた……そんなことも知らずにここへ来ているのか……」

「す……すみません」

　僕は俄然心細くなった。

　――社長も部長も駅長も、僕たちに何も教えてくれてないじゃないか！

「斗南さん、大きく分けてあと三つ、質問があります。いいですか」

　斗南は、まっぴらごめんといった感じで顔の前で大仰に手を振った。

「そんなこと、事前に聞いてから来てくれよ。もう、いい。もう、ここでどれだけ丁寧に教えたってうまくいくわけないから、もう好きなようにしてくれよ。ああ、上はいったい何考えてんだ」

　僕はもうコテンパンに打ちのめされていた。悔しい。何だってこんなに嫌がられなくちゃいけないのだろう。確かに、何をしなくちゃいけないのか、まだよく分からないけれど、この人や、楠マネージャーや、江戸ワード駅長を何とか見返してやりたい気持ちになった。この人たちは、僕が必ず失敗すると決めつけてかかっている。いや、だいたい、社長からして、僕をミドリムシ扱いしている。

　ーーくそお、やってやろうじゃないの。

　僕の中から闘志がふつふつと湧いてきた。　僕は斗南に気おされないように、眉毛を吊り上げて強い声で訊いた。

「じゃあ、ワーズって、どうやって召集するんですか」

　僕はクラフトマン斗南から、ワーズの招集のしかたをはじめとした、タブレット端末上の操作方法をひと通り簡単に学んだ。

「それで最低限の知識だ。あと、編成に必要なのは、あんたの判断力と、瞬発力と、センスと、機転と、指導力と、論理性と……」

　斗南は指を折っていき、片手では足りなくなって、数えるのをあきらめ、匙を投げるようなそぶりで手のひらをパッと広げて言った。

「英語の技術だ」

七

　突然、プラットホームに立っている電柱のような柱の上についている拡声器が、「フアン、フアン、フアン……」とけたたましく鳴り始め、その隣の黄色いパトライトがクルクルと回り始めた。

　大きな製鉄工場で巨大な鉄骨を吊るして移動させる時や、大きな船からガンクレーンでコンテナが荷揚げされる時を思わせる注意喚起の音だ。うるさくて心がざわつく。

　そこへ、もう一つ、同じシステムで音が鳴り、パトライトが回り始めた。これは、百十七番線、中浜のホームの音だ。僕らの作業が今から始まる、ということが直感で分かった。

　向こうの方からマネージャーの楠が大きな声で呼んでいる。

「おうい、島田、斗南、こっちへ戻って来い。業務命令だ」

　斗南は「はい！」と答えておいてから、タブレットとインカム・マイクセットを僕に手渡し、僕の肩をポンと叩いて言った。

「いくらＥＴだからって、最初からうまく行ったらオレの立つ瀬がないよ。まあ、あまりひどい事故にならんことを祈ってるよ」

　そう言った斗南の顔にはまったく笑顔がない。むしろ、恨みがましい表情だ。お前の尻は俺が拭かなくちゃいかんのだ、と言っているようだった。

「はい、最善を尽くします」

　それを聞くと斗南は、「ハッハ！」と言って僕に背中を向けて歩いて行った。

　見ると、同じホームの反対側でも、中浜がタブレットを持ったまま、いくぶん緊張した面持ちでひとり、立ち呆けていた。この広々としたホームの真ん中辺りに、僕と中浜の二人だけが立っていた。

　そこへ、ホームに平行しているレールの、くしの歯の付け根の方の自動扉が開いて、ボウリングの球が現れるように、シークウェンス・トレインがカタン、カタンと入線してきた。それはま

さしく、一両一座席のジェットコースターの、二十両連結程度の列車そのものだった。むろん、まだ誰も乗っていない。全体的に、デザインが昭和風だった。車体も、ブリキ製なのかとても古めかしく、あちらこちらに大きなめくれ傷があり、ペンキも剥げていて、超レトロな感覚だ。

ーーこんなので、本当に大丈夫なのか……？

僕がそう思ったその時、コンピューターの声がホームに響いた。

“Lines 117 and 118, forming operations must be started.”
（百十七番線と百十八番線は、編成作業を始めてください）

八

　ホーム中央辺りのモニターには、レッドスナッパーズとタイフーンズの試合の中継が映し出されている。レッドスナッパーズの内野陣が打ち合わせを終えて、ようやくそれぞれの守備位置に散って行ったところだった。

　ーーあれからかなり時間が経ったはずだけど、時間の進みが異様に遅いなあ……。

　そう、まるで、モニターに映し出されているのは実は中継ではなく、録画されたビデオ動画であって、今まで一時停止か超スロー再生されていたのではないのかとすら僕には思えた。

　そこで僕はひらめく。

　ーーあ、ひょっとしたらこれって、訓練シミュレーションなのかな。僕たちはこうした架空のセッティングで試されているだけなのかな……。うん、僕たちに対する事前説明の少なさを考えると、これはきっとそうだ。僕が今やろうとしていることは、シミュレーションに違いない。シミュレーションなら、ゲームと同じだ。失敗しても、どうってことないだろう。よしっ、思い切ってやってやる！

　さっき斗南から借り受けたインカム・マイクのイヤホンのボリュームを上げる。球場の大歓声や実況中継のアナウンサーの声が聞こえてきた。

「さあ、この試合一番の見どころと言って良いでしょう。四対三で迎えた七回裏、一点を追うタイフーンズの攻撃、ツーアウト満塁、バッターは四番、ベン・マンズフィールド。前の打席でデッドボールを受けて、一度はピッチャー伊藤につかみかかろうかという形相で激しくののしったマンズフィールド。キャッチャーの山本が間に入って止めましたが、先ほどは両チーム一触即発の不穏なムードになりました。そのマンズフィールド、今、バッターボックスに入りました。ピッチャー伊藤、セットポジションから第一球、投げました。真ん中低め真っ直ぐの球、きわどいところボール、おっと、審判はストライクの判定！」

“Hey, give me a break! Why the fuckin’ strike? Where d’ya have eyes? ”

　モニターには、バッターボックスに立つベンが、審判に大げさなジェスチャーで文句を言っている姿が映っている。英語で言っているので審判は理解できていなさそうだ。もし日本人選手があんな感じで文句を言ったら、一発退場を命じられるかもしれない。

「あっ！」

　そこへ突然、オーダーが来た。タブレットに日本文が表示される。

「ベン、えらくカッカしてるなあ。首がまだ痛いからかい？　まだワンストライクじゃないか」

九

　僕は一瞬にして頭が真っ白になった。シートレの編成をするために、ただちにワーズを招集しなくてはならない。

「べ……ベン、と。それから……ええっ、『カッカ』って何だあ？　『アングリー』、『マッド』？　えい、『マッド』でいってみよう。『ユー、アー、ア、マッド、パーソン、ナウ』……お、いいじゃん、英語らしい感じがする。これで行こう」

　そうやってぶつぶつ独り言を言いながら、僕は急いでタブレット上でワードの召集ボタンを押していった。

「痛みは、ええっと、何だっけか……思い出した、『ペイン』だ。じゃあ、『ペイン』召集……と。それから首……『ネック』。『イン・ザ・ネック』……いいね、語感がばっちりだ」

　その時、タブレットから今、召集コールをかけたばかりの 【Ben】が、早くもホームの根元に急停止したカートから駆け下りてきた。カートは、ゴルフ場のコースで見かける、ゴルファーやキャディーが乗る電気自動車のような仕様だったが、猛スピードでやってきて、ホームの根元でキキーッと急停止した。漫画のように、慣性の法則でカートの上半分が前に傾いたような感すらあった。

　【Ben】はホームの中ほどまで駆け寄ってきた。右頬に鮮やかに【Ben】と示してある。左頬には、【固有名詞】と漢字で書いてあった。

　――わかり易くていいけど、ボディーペイントにしてはえらく本格的で、タトゥーみたいだな……。

　【Ben】は僕を認めると怪しんで訊いてきた。

「あんた、誰だ。さっきまで一緒に仕事してた斗南さんはどこへ行った？」

「斗南さんの代理で今回の編成を担当します、三浦杏児です」

「三浦……」

【Ben】はいぶかしげにじろじろと僕を見る。そして襟章を見つけ、驚いた。

「あ、い、ＥＴ……！」

【Ben】は、小さな声でつぶやく。

「な、生（なま）ＥＴなんて、初めて見た。本社の奥深くにいるんじゃないのか。なんでこんなとこで編成なんか、やってんだ」

その時、いつの間にかもう鳴り止んでいた拡声器から再びアラーム音が鳴り始めた。

「フアン、フアン、フアン……」

僕のタブレットの画面いっぱいに、“Hurry up!（急げ！）”の赤い文字が明滅した。

ーー何だ、何だ？

その時、【Ben】が僕に向かって言った。

「あの……、俺みたいな、働きの多くないワーズが、こともあろうにＥＴなんかに偉そうにモノ言えないし、だいたい、ＥＴの指示にワーズが異議を唱えてはいけないと社員規則で定められているからあれだけど、あの……三浦さん、急いだ方がいいっすよ」

「ええっと、【Ben】さん、時間制限なんてあるんですか」

僕が訊くと、【Ben】は眉と声を潜めて答えた。

「【Ben】でいいっす。大物ワーズならともかく、普通のワーズ社員を、ＥＴが「さん」づけで呼ぶなんて聞いたことないっすよ。それはともかく、三浦さん、もっと早く編成して、次のオーダーに備えないと、百番線台のセッションは、とてもさばききれないっすよ。さっき俺が乗ってきたカートの運転手も、『一人だけしか運ばないって、なんて非効率的なんだ』とぼやいてました。だいたい、時間の進み方はあっちの数十からせいぜい百倍程度ですから、急がないとクレームが来ますよ」

僕はハッとして【Ben】に訊いた。

「これって、ひょっとして、シミュレーションではなくって、リアルに起こってるの？」

「はあ？」

　【Ben】は、この男、何を言ってんだという顔をした。

「ガチ、戦場ですけど」

十

　血の気が引く思いだった。

　別のスピーカーから、「ビーッ、ビーッ」という、危険警報みたいなのが、拡声器の警報に重なって鳴り出した。

　ーーなんでこんなに音で焦らせるんだ！

　僕はパニックになりかかっている。

「で、三浦さん、俺はどこに乗るんです？」

　僕は放心状態で【Ben】に訊き返した。

「ど、どこがいいと思いますか」

　【Ben】がついにブチ切れた。

「あんた！　俺を呼んでおいて、『どこがいいと思いますか』はないだろう！　シートレ編成はあんたの仕事だろうが。俺たちワーズには反論や意見は許されてないんだよ、早く決めろ、このタコ！」

　僕は涙目になって言う。

「い、一番前に……お願いします」

　【Ben】は、「ケッ」と言って、一番前の車両に座った。

　次に到着したカートには、【You】、【mad】、【pain】など、今しがたタブレット画面で召集したワーズの連中が連なって乗っていた。

　【you】や【the】など、一部のワーズは「斗南さんは？」と訊いてきたが、他のワーズたちは、今日このホームは初めてのようで、特に僕に対して違和感を持たず、指示を仰いできた。彼らは僕がＥＴであることには気付かなかったようだ。僕はやぶれかぶれで各ワーズたちに着席順を

指示していった。

「え、私、こんなとこに座っていいの？」

「なんで俺、呼ばれたんだろう、狂ってる。【angry】の方が適任じゃないのかな」

「俺とあんたが前後でつながるなんてことは、余程のことじゃないのかね」

「おい、こりゃまずいっしょ！」

　指示通り座ったワーズたちが、ＥＴ同様、クラフトマンには直接意見を言えないのか、前後で顔を見合わせ、ガヤガヤ騒ぎ始める。だが僕にはもう再考する心の余裕などない。

　ウォンウォン、ビービー、けたたましいアラーム音の中、先頭車両に乗った【Ben】が僕に叫ぶ。

「準備できたら、『ゴー』って言って手を振るんだ」

　僕は言われるままに「ゴー！」と言って手を振った。

「おい、どうなっても知らないぞぉー」という、乗車したワーズの一人が発した声が僕に近づき、そして遠ざかっていった。僕が編成したシークウェンス・トレインは、加速しながらレールを離れ、宙を飛んで、やがてドームの隙間（スリット）から外の世界に消えていった。

　こちら側のアラーム音がようやく鳴り止んだ。だが、同じホームの向こう側に向いた拡声器からは、まだアラーム音が鳴っている。

　ふと気がついて目をやると、中浜が涙目でタブレットを操作していた。

十一

　中浜が編成したシートレ第一便は、僕のシートレより少し先に何便か出発していた。今、最新の一編成が飛び立っていったばかりで、ホームには中浜以外誰もいなかった。僕と違って、もう次のオーダーがタブレットに入ったようで、彼は目を血走らせてワーズに召集をかけていた。彼の担当案件は、会話のキャッチボールをしているようだ。

　彼のホームのモニター画面を見ると、日本の中小企業の応接室とおぼしき部屋に、大きなテーブルを挟んで、五人の日本人と五人の欧米系外国人が向かい合って座っている。日本人の一人はこの会社の社長で、あとの四人の男性はその部下、同様に外国人の方も、一人の男性がＣＥＯで、男性二人と女性二人の、四人の部下を引き連れてきている、といった光景だった。

　何か契約を交わす前のように、お互い書類を取り交わしているようだ。

「中浜くん、首尾はどう？」

　彼に歩み寄りながら訊いてみた。

「最悪」

　彼は額から冷や汗を流しながら画面に見入ったままだ。

「クライアントから日本語でこう言ってくれというのは、何とか考えて、五編成送り出した。だけど、クライアントがちゃんと向こうの英語を理解していないみたいで、『向こうが言ってきたこの英語に適切に答えてください』みたいなオーダーが来るんだ。でも、俺もその英語が、何言ってるのか、ほとんど分からない」

「……ということは、事実上、会話相手は中浜くんになってるってこと？」

　中浜がタブレットから一瞬目を離して、僕を見て言った。

「さっきから俺が送った答えで、アメリカ人たちの機嫌がどんどん悪くなっている」

「へえ、アメリカ人なんだ……。中浜くん、どんな案件やってるの」

その時、彼が召集をかけたワーズたちがホームになだれ込んで来た。

ちらりとそちらを見た中浜の表情に恐怖の色が浮かぶ。

目はワーズたちを追ったまま、彼は答える。

「アメリカ大企業の社長御一行さまを迎えての、二億ドルの商談の最終段階。日本の小さな会社にすぎないこのクライアント、社運をかけて開発した商品を、このアメリカの大企業に売り込みをかけて、ようやくここまでこぎつけたらしい。アメリカ側は、大型取引の相手としてこの日本の会社がふさわしいかどうか見極めるため、自ら日本まで足を運んできたらしい。もし契約が成立したら、この小さな会社の明るい将来は約束される。だけどもしダメなら、この会社、開発費を返済できず、つぶれるんだそうだ。二億ドル、二百億円と、社長以下、従業員数十人の生活がかかってる。初めての俺には重すぎるよ」

ついに、ウオンウオンに加えて、ビーッ、ビーッと、いよいよ時間が迫っていることを知らせる警報が鳴り始めた。

中浜はいよいよパニックに陥った。ワーズたちが口ぐちに「どこへ？」と中浜に訊いている。彼は、自信なさげな小さな声でワーズたちが乗る車両を指示していった。

「まじぃ！　こんな文で相手、怒んねえのか？」

「馬鹿野郎、俺が三両目なんだよ、お前が聞き間違ってるんだ」

「えっ、聞こえない！　クラフトマン！　お前新人か？　大きな声で言えよこら！」

僕と同じ大混乱に彼は翻弄されていた。

僕は彼の送り出したシートレの履歴を検索してみた。クライアントが日本語でオーダーしてきたのに対して、中浜が編成したシートレの履歴が載っている。

「どうもどうも、どうぞこちらにお掛け下さい」
“Hey, you guys. Please shit here.”（1）

「スミス社長、御社のホームページであなたのプロフィールを拝読しました。大変興味深かったです」
“I read your profile on your company’s homepage, Mr. Smith. It was very funny.”（2）

「本日は御社とお取引きができるのを、私どもは大変嬉しく思っております」
“Today, you buy us. We are very funny. ”（3）

「御社にとりましても今日は本当に楽しい、嬉しい日になると私どもは信じております」
“We believe you are very funny today, too.”（4）

「スミス社長、日本（ここ）へはいつお越しになったのですか」
“Why did you come here, Mr. Smith?”（5）

僕は大いに感心した。

――へえ、中浜くん、やるじゃない。

ただ、最後のシートレに初歩的な間違いがあると思った。おそらくパニックの中でミスをしたのだろう。

――「いつ」と訊きたいのなら、"Why"ではなく"When"だろう。惜しいな。

それ以外は特別大きな間違いを彼がしているとは思えない。僕は、ワーズたちに詰め寄られてたじたじの彼に「とにかくがんばれ！」と声をかけて、自分の案件がどうなっているのか、百十八番線のモニターに目を移した。

「ゲゲッ！」

十二

　ベン・マンズフィールドが、クライアントであるキャッチャーの山本の首根っこに手をかけて、今にも殴り掛からんとしている。

　審判が二人を引き離そうとするが、ベンの腕は強く山本を押さえていて、どうにもならない。ベンは山本に何か激しく言葉を吐いている。両チームのベンチからわらわらと選手たちが飛び出してきた。

「な……なんで？」

　僕は慌てて、タブレットで、先ほど送り出したシートレの編成を確認した。

　「ベン、えらくカッカしてるなあ。首がまだ痛いからかい？　まだワンストライクじゃないか」
“Ben, you’re a mad person. You’re a pain in the neck. You don’t have balls. ”（6）

　――どこがいけなかったというんだ？

　注意深く英文を読みなおしてみる。

「あっ！」

　オーダーは、ワン「ストライク」なのに、僕は焦りのあまり勘違いして、ノー「ボール」、つまり【ball】を招集して送り出してしまっていた。

「あああ……しまったあ！」

　思わず天を仰いだ。中浜に匹敵する初歩的な間違いだ。だが……だが、それくらいの間違いで、なぜベンは激怒する？

　よくわからなかった。僕は自分の判断で、とりあえずベンに謝ることにした。

　――自分の判断で？　そんなことができるのか？

いや、分からない。だけど何かしないと、自分の犯したミスで、クライアントが殴られ、試合が滅茶苦茶になってしまう。急いでワーズに召集をかけ、シートレを編成する。

「そんなカッカするなって。君は『最高！』のバッターじゃないか」
“Don’t be so angry. You, a “SAIKO” batter! ”（7）

「ゴー！」

シートレはすぐに出発した。後はしばらく待ってみて、ことの成り行きを見守るしかない。

――頼む、ベン、落ち着いてくれ……。

ホームの端に立って、送り出したシートレが、ドームの隙間から飛び去るのを祈るような思いで見届けた。

すると同じホームの反対側、百十七番線から、相次いでシートレが出発していった。

――中浜くんも厳しい状況の中、さっきから何編成か送り出していたみたいだけど、挽回できたのか？

ホームの端にある、百十七番線のモニターに目をやると、画面には難しい顔をしたアメリカ人社長が映っていた。中浜の意に反してますます機嫌が悪くなっているように見える。

――なんでだ？　中浜くん、どうしてそんなに機嫌を損ねてる？

タブレットで、中浜が編成して、新たに出て行ったシートレの内容を確認してみる。

十三

「スミス社長を退屈させているなら、お詫び申し上げます。私どもは日本人なので、熱意を顔に出したりせず、慎み深いだけなのです」
”We regret to say that you are boring, Mr. Smith. We are Japanese, so we are naive people. That’s all.”（8）

　僕はタブレットの画面をスクロールして、その後どうなったかを見ていった。すると、このあと、メモがしてあった。中浜が書き添えたものだろう。メモにはこうあった。

　スミス社長は大変厳しい表情。だが、
“Yes, you seem so, indeed.”（9）
と言ったように聴き取れる。スミス社長は理解してくれたようで、安心する。

　そして、中浜が次に編成したシートレの履歴が続いていた。

「しかしスミス社長、覚えておいてください。我が社はこれからずっと、貴社のために新しい挑戦をし続けます」
“But, remember, Mr. Smith, we will always be a new challenge for you.”（10）

　すると、再び中浜くんのメモ書きが挿入されていた。

　スミス社長が言う。

“You don’t want to be our business partner, don’t you?”（11）

と聴きとれた。

「あなた方は、われわれのビジネスパートナーになりたくはないのですね？」と訊かれていると判断し、次の通りシートレを編成して送り出す。

「なりたくないなんて、とんでもない！」
“No, never!”（12）

「これからいつでも、御社に対しては、考えられないほどの割引きをさせていただきます」

“We will always discount your thoughts.” (13)

「そして大変お求めやすい価格で商品を販売させていただきます」
“Besides, we will sell you very cheap goods.” (14)

十四

　スミス社長の言葉を聴き取りながら、わずかな時間にこんなにたくさんのシートレを次々と編成し、送り出した中浜をすごいと思った。社長室で古都田社長の諮問を受けていた時は、せいぜい僕と同じ、ミドリムシレベルだと思ったけれど、なかなかどうしてやるじゃないか。むしろ僕は彼に劣るのではないかと焦り始める。その時、その僕の焦りをいっそう助長させる光景が、百十八番線のモニターに映った。

　ベン・マンズフィールドが、暴れていた。

　――彼をなだめるためにさっき送り出したシートレは届いたのか、それとも届かなかったのか。

　モニターの前で絶望的な顔をしている僕のことなど知る由もなく、止めに入る審判を荒々しく押しのけて、ついにベンは山本に手を出した。やられた山本もすぐにベンを殴り返した。そしてすぐさまその二人を両チームの選手たちが取り囲んでもみくちゃにした。

　アナウンサーが実況を伝える。

「ああ、これはいけません。ベン・マンズフィールドと山本のもみあいから、チームメンバーを巻き込んでの大乱闘になってしまいました。今、私が見ていたところでは、ストライク判定に不服のマンズフィールドに、さらに山本が不用意に何かを言って、それが決定的にマンズフィールドを怒らせたように見えました。ですが山本は、マンズフィールドに胸ぐらをつかまれても、何が起きたのか分からないという表情でした。何か誤解があったようにも見えました。しかし時すでに遅し。今は両軍の監督も乱闘に加わっています。観客からの大きなブーイング。これは収拾がつきません」

　――誤解の原因は……僕しか、考えられない！

　気が気ではなくなった。僕のせいで大変なことが起きている。僕が悪いんだ。

　もう、ベンにひたすら謝るしかないと思った。急いでタブレットでワーズを招集する。

“Sorry, sorry, sorry, sorry, sorry…”

【sorry】たちはすぐ来てくれた。ＣＧ映像を見ているかのように、見た目がまったく同じ、ほっぺたの【sorry】という表示もまったく同じ連中が、カートを降りてバラバラとホームに駆け込んでくる。ホームはたちまち、【sorry】たちでごった返した。

「おい、何で俺たちだけこんなにたくさん出動するんだ」

「クライアントは、いったい何をやらかしたんだろう」

「誰がどの車両に乗ってもいいのかな」

僕は叫ぶ。

「どうでもいいから、みんな早く乗ってください、急いで！」

結局、僕は二十人の【sorry】を招集してシートレに乗せたのだった。

「ゴー！」

「まずいぞ、このシートレは文になっていない。車両の連結部が弱すぎる」

「そりゃあそうだ。同じワーズを延々と並べただけだから、文になっていない」

「マジでやばいぞ、同じワーズを何回も使ったら、それに応じて一つ一つのワーズのエネルギーが減ってしまうことを、この新人クラフトマン、知らないみたいだぞ」

「いや、それなのに、シートレの推進力だけやたら感じるんだ。エネルギーバランスがおかしなことになってる」

「本当だ、列車のパワーだけやたら強い！　こりゃ、下手すりゃコケるぞ！」

【sorry】たちのさまざまな愚痴や不安を聞きながら、僕はシートレがガチャガチャ音を立てながら飛び立っていくのを見送った。そしてすぐさま、第二弾の「言い訳」シートレの編成にとりかかる。

“Oh, my god. Please, please, please. Don’t hit me. Don’t do that.”
（ああなんてことだ。お願いだ、お願いだよ。僕を叩かないで。そんなことしないで）

その時、隣りで中浜が自分のモニターを見ながら叫んだ。

「どうして……どうして、グッバイなんだよ！」

十五

“That does it. I don’t think we need your products. Good bye, gentlemen.”
（もうたくさんだ。あなたのところの商品を我々が必要とするとは思わない。失礼するよ）

スミス社長は、書類を自分のブリーフケースに戻し、契約書関係の書類を日本側に突き返した。そして取り巻きと共に席を立つ。日本側は慌てた。

「待ってください、スミス社長。どうか、私どもの言うことを今一度……」

四人の部下を引き連れて、応接室から大股で出て行くスミス社長に、日本の中小企業の高橋社長以下、幹部社員たちが追いすがる。

「製品にお気に喰わない点があればすぐ改善します。アフターサービスについても無償で技術者をアメリカに派遣いたします。この後、料亭を予約しています。スミス社長、どうか行かないで……わが社の命運が尽きます。ああ……」

モニターを見ていた中浜は愕然としてつぶやく。

「俺だ。俺の乏しい英語力のせいだ。ああ、どうしよう……」

一瞬頭を抱えた中浜は、ハッと顔を起こすと、真剣なまなざしでタブレットを操作し始めた。僕と同じことを思いついたようだ。オーダーを受けてはいないが、中浜自身の思いでシートレを飛ばそうというのだ。状況からいって、僕でもそうしただろう。

間もなく、ホームの付け根に二台のカートが競うように止まり、そのうちの一台からは、僕が召集したワーズたちがわらわらと降り立ってきた。

【please】や【don’t】が見える。僕は彼らを案内した。

「早く来て乗ってください。みんな殴ったり蹴ったりしています。彼らはプロだから、怪我でもしたら生活にかかわる」

そこへ、中浜の声が重なる。

「あ、【please】さん、こっちこっち。早く来てくれないと、スミス社長がエレベーターに乗っちゃう。【don't】さん、こっちです」

　ええっ、このワーズたち、僕の方でしょ！

「中浜くん、このワーズたちは……」

「えっ、三浦くんも同じワーズ呼んだのか」

「うん、しかも僕の方が早く……」

　そのとき、立往生しているワーズたちの後ろから、さらに別のワーズたちがやってきた。似たようなワーズたちがたくさん、僕らを先頭にひしめき合っている。

「おい、前の方、早くしろよ、何つっかえてんだよ」

「どっちなんだ？　百十七番線か、百十八番線か」

「ちょっと待て、クラフトマンたちが打ち合わせしてんだからよ」

「何で？　今頃、何を打ち合わせるってんだ！　おい、ビープが鳴るぜ」

　ワーズがそう言うとともに、ビープ音が鳴り始めた。ビーッ、ビーッ……急げの合図だ。僕はイライラした。

「僕の方が先に編成オーダー出したんだよ。【please】とか、僕が呼んだんだ」

「俺も【please】呼んだよ。カートが二台同時に着いたじゃないか」

「じゃあ、どっちがどっちの……」

「知るもんか！ だけど、三浦くん、数は同じじゃないのか。俺が呼んだ【please】と、君が呼んだ【please】を合わせた数の【please】がここに来ているはずだよな？　だからどっちでも乗せていきゃあ、最終的に足りなくなったり、余ったりしないって」

　中浜がそう言っている間にも、僕が手にしたタブレットの画面いっぱいに、“Hurry up!”（急げ！）の文字が……。

僕は、ホームにあふれ出そうなほどたくさんのワーズが「早くしろよ」という表情でこちらを見ているのを確認して、中浜に言った。

「よし分かった。このワーズの皆さんを共用しよう」

「よし。そうと決まれば……」

中浜はてきぱきとワーズたちを自分のシートレに案内し始めた。急いで送り出さなければ、スミス社長がエレベーターに乗って帰ってしまうのだ。引きとめられなければ、クライアントの会社は終わりだ。

「【please】一人目、来てください。ここ、一号車に乗って！　そう、あなたです。次、【Mr.】、はいあなたは二号車です。そして【Smith】、三号車にお願いします。あ、【elevator】は、まだ待っていて。あ、そうだ、【the】を探して、一緒に手をつないで、私が呼ぶまで待っていてください。えーっと、次、あと三人【please】いますかぁ？　急いでください！」

中浜が素晴らしく早い編成作業をこなすのにしばらく見とれていたが、なんだか、自分が呼んだはずの【please】たちがどんどん取られていく気がして、ハッと我に返って、僕は慌てて作業を開始した。

「百十八番線、【oh】、【my】、【God】のお三方、来られてますかぁ？　急いで先頭の一から三号車まで乗ってください。次、【please】三人、次々乗って！」

十六

　そう長い時間かからずに、僕たちはそれぞれのシートレの編成をほぼ同時に終えた。「ウインウイン」と「ビーッ、ビーッ」の警告音が両ホームのスピーカーから鳴り響く中、僕と中浜は同時にゴーサインを出した。

　ーー頼む、ベンの心に届いて、乱闘騒ぎが収まってくれ……！

　隣の中浜は、思いが口をついて出た。

「頼む、エレベーターに乗り込む前に、スミス社長の心に届いてくれ……」

　中浜も僕もホームの先頭に立って、目の前を通り過ぎつつあるシートレの、各車両に乗っているワーズたちを順に確認していった。

　ーー【Oh,】でしょ、【my】でしょ、【God】でしょ……。

“Oh, my God. Please, please, please! Keep punching me, don’t don’t. Calm down, put on your cap. and go back to your bench.”

「あれっ？」

　見間違いかと思って、もうすでに発進して行ったシートレの後ろ姿を僕は見つめる。

　最後の一文、「落ち着いて、帽子をかぶって、そしてベンチに戻ってくれ」、これは問題ない。だが、その前……。

“Keep punching me.”

「キープ・パンチング・ミー」？　キープ（続ける）になっていなかったか？　ストップしてほしいのに？　そして、
“don’t, don’t”
……って、ありゃなんだ？　僕はあんなの指示した覚えがない！

　僕は慌てて、タブレットで今自分が送り出したシートレの乗員名簿を呼び出して確認した。

ーーああ。最悪……。

心配していた通り、【stop】であるはずのところに【keep】が間違えて乗っており、その文の末尾に、【don’t】【don’t】と、余分な二つのワーズが乗っていて、文が意味不明になっていた。

「ちくちょう！　あれじゃあ口に出して言ったら『どんどん殴ってくれ』みたいに聞こえるじゃないか！」

僕は、隣りで自分のシートレを見送った中浜に言う。

「中浜くん、君が呼び出したワーズと、僕のワーズが間違って乗って行ったみたいだ、確認して」

中浜はハッとして、「まさか」と言いながら、自分のタブレットから乗員名簿を呼び出した。

「君が呼んだ【keep】の代わりに【stop】が間違って乗ってないか？　それからどこかで【don’t】が二つ、抜けていないか」

中浜の横顔がみるみる土気色に変わっていく。

「はあああ……ちくしょう！」

僕は、歯噛みして悔しがる中浜のタブレットを覗き込んだ。

“Please, Mr. Smith. Please, please, please!”
（スミスさん、どうか、どうか、どうかお願いします！）

“Stop listening to us. Calm down, get on the elevator, and go back to America.”
（私たちの話を聴くのをやめて、心を静めてエレベーターに乗って、そしてアメリカに帰りなさい）

十七

「三浦くん……」

「何？」

　僕はイライラしていた。彼の責任とは言えない。指示を間違えたのは僕の方だったかもしれない。そして、差し迫っていたとはいえ、二人とも出発前に確認をしなかったのだ。だから、そのイライラをどこにぶつければいいのか、僕は分からずにいた。

「ここ、見て」

　中浜に言われるがまま、彼のタブレットの画面を覗く。

「”Emergency stop”……エマージェンシーって、緊急ってこと？」

「そうだよな、やっぱりこれ、『緊急停止』ボタンだよな」

「今のシートレを、止める……？」

「分からないけど、君は、あのシートレが届いてもいいのか」

「いや、だめだ。火に油を注ぐ」

「俺もだ。ダメ押しになってしまう。非常停止ボタン、君の画面にもあるか」

　僕は自分の端末を見た。

「ああ、ある」

　中浜が真剣なまなざしで僕に訊く。

「押すか？」

　僕も真剣な顔で頷く。

「そうだな」

　ーーどうってことはない。ワープロ原稿を打っていて、プリントアウトしかかっている最中に取り消しボタンをクリックするようなものだろう。

　僕らがそれまでに送り出したシートレの多くは、結構なスピードでびゅーんと飛んでいったが、今回の編成は二つとも、かなり重そうな感じでスピードも遅かった。だから二人のシートレは、かなり遠くの上空を飛んではいたが、まだドームの中だった。

　特に、ここから見える僕のシートレは、なんだかとてもガタガタしていた。意味内容はともかく、僕の文は文法的に間違っているから、連結器が微妙に合っていなくて、連結部の強度が心もとないからではないか。先んじて飛ばした、【sorry】ばかりを乗せた二十両編成のシートレに乗っていたワーズが、「ちゃんとした文になっていないから連結部が弱すぎる」みたいなことを言っていたから。

　中浜が言う。

「じゃあ、いち、にの、さん、でクリックするぞ」

「分かった」

「いち、にの、さん！」

　タブレット画面に表示されていた緊急停止ボタンを、僕と中浜は同時に押した。すると、画面に、びっくりマークつきの英語のダイアログが出てきた。

“Caution! This sequence train is very heavy. There is a great danger of collapse. Do you want to continue?”

十八

　社長室で古都田社長からいきなり英語でふっかけられるよりは、英文読解の方がよほどましだ。

「ええーっと、最初の単語は知らない。で、このシークウェンス・トレインは大変重い。何かの危険があるけど、『コラ……』ってなんだろ。コラの危険があります。『コンティニュー』……これはゲームで出てくるから分かる、『続ける』だ。続けたいですか？」

　中浜が即座に言う。

「続けるしか、ないだろう。答えは、”Yes” だ！」

　僕たちは揃ってイエスを押した。するとまた、びっくりマークを伴って、ダイアログが開いた。

“Are you sure?”

　僕がつぶやく。

「『マジ、続けますか』って」

「くどいッ！」

　中浜もイライラしているようで、直ちに「イエス」ボタンを連打した。僕もそれに倣う。

　すると、タブレットに連動しているのか、突然、ホームのスピーカーから「ウオンウオン」と大音響で再びアラームが鳴り始め、黄色いパトライトが光って回転し始めた。画面を見ると、

“！　CANCELLATION　UNDER　EXECUTION!!”(15)

　……と、何て書いてあるのか分からないが、全部大文字で、しかも毒々しい黄色と赤と黒で、チッカ、チッカと、反転表示が繰り返されている。

　ーーなんだなんだ？　そんなに大そうなことなのか？

僕の頭の中では、例の、ワープロ原稿の印刷がイメージされていた。印刷中止ボタンを押したら、紙送りしていたプリンターが突然、「ガガガ……」といって何度も紙の巻き込み直しを試みているような、まるでプリンターから、「このボケ！ 今さらストップさせやがって！」と口汚くののしられているような、そんな焦燥感に襲われる。

「あっ！」

僕と中浜は、彼方のシートレを見て目を見張った。

遠いので、動きがスローモーションのように見えたが、その瞬間、僕のシートレが尺取虫のように空中でぐにゃりと曲がり、少し後方を飛んでいた中浜のシートレにまともに絡んだ。僕のシートレは彼のシートレと全車両接触して、バリバリと火花が飛んだ。接触の弾みで僕のシートレは、後ろ半分がちぎれて、逆さまになって吹き飛んだ。同時に、シートレの二か所が爆発を起こして、黒い破片が放物線を描いて四方に飛散した。車両を含め、辺りに吹き飛んだ部品のすべてが落下を始めた。まるで打ち上げ花火が開いた後のように、宙に漂う黒煙を縫って、全てのかけらが同じ速さで落下していった。

「ガガガ」といっていたプリンターが、「キュルキュル……」といって、ついに息絶えかのような虚無感が漂う。

見るに堪えない、ひどい光景だった。僕たちはあんぐり口を開けたまま、ことの成り行きを、それでもただ見守るしかなかった。

はるか遠くから流れてくる、何台もの救急車両のサイレンと、消防車のカンカンカンという鐘（しょう）の音を、僕らは茫然と聞いている。

虚空から目を逸らせないまま、中浜がつぶやいた。

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル……」

◆◆◆

（１）“Hey, you guys. Please shit here.” 「やあ、君たち。ここで糞してくれ」（sit座る≠shit糞をする）

（２）funnyは「滑稽でおかしい」「不正でインチキ臭い」という意味がある。「興味深い」はinterestingが適切。

（３）“Today, you buy us. We are very funny. ”「今日は、あなた方（の会社）が私ども（の会社）を買うのです。私どもはとてもインチキ臭いですよ」

（４）“We believe you are very funny today, too.”「今日はあなた方も大いにインチキ臭いと信じて疑いません」

（５）“Why did you come here, Mr. Smith? ”「スミス社長、あなたはここ（日本）へ何しに来たのですか」

（６）“Ben, you’re a mad person. You’re a pain in the neck. You don’t have balls. ”「ベン、お前は気が狂った男だ。ムカつくんだよ、ヘタレ野郎」

（７）“ Don’t be so angry. You, a “SAIKO” batter! ”「そんな怒んなよ、この、頭のおかしなバッターめ」
強調して山本に言わせた、”SAIKO”という言葉は、ベンをなだめるため、あえて日本語の「最高！」を使って褒めようとしたのだろうが、英語の”psycho”（精神異常者）と発音が似ているため、不運にも、ベンに、侮辱されていると受け止められたようだ。

（８）”We regret to say that you are boring, Mr. Smith. We are Japanese, so we are naive people. That’s all.”「残念なことでございますが、スミス社長、あなたは退屈な人ですね。私どもは日本人、世間知らずな民族です。ただそれだけのことなのでございます」（＝ちょっと意味不明）

（９） “Yes, you seem so, indeed.”「うむ。まさにそう（世間知らずに）見えますね」

（１０）“But, remember, Mr. Smith, we will always be a new challenge for you.”「スミスさん、覚えておいてください。私どもはこれから、いつだって御社にとって、新たな課題となるだろうことを」（＝ちょっと意味不明）

（１１）“You don’t want to be our business partner, don’t you?”「あなた方は、我々のビジネスパートナーになりたくはないということですね？」

（１２）“No, never!”「ええ、（ビジネスパートナーになど）なりたくないですね、絶対に」

（１３）“We will always discount your thoughts.”
「あなた方の意見など、我々はいつも話半分にお聞きする所存でございます」

（１４）“Besides, we will sell you very cheap goods.”「その上、私どもは、とても安っぽくてチンケな商品をあなた方に売りつけるつもりでございます」

（１５）“！CANCELLATION　UNDER　EXECUTION‼”「取り消し処理実行中！」

第三章　由紀（1）

ー

「マスター、シャンディーガフお代わり」

　空気を抜いた特製ハンバーグのたねが並んだトレイを前に、マスター・ジロー白須田（しらすだ）は、私の注文を聞いて眉をひそめる。

「ユキちゃん、大丈夫かい」

　使い捨て手袋を外しながら、マスターは私の顔色をつぶさに観察した。カウンター上のダウンライトのせいで、私の酔いがどれほどのものか、顔を見るだけでは分からないだろうと思う。でも、実際私は、最近ではちょっと覚えがないほど、ひどく酔っていた。それも、気持ちの良い酔い方ではない。どんよりした澱みが体内に積み重なっていて、気を許すと一気に喉元までせり上がってくる気がするのだ。

「ユキちゃん、何か食べた方がいいんじゃないか。もともとお酒、弱いだろう？　すきっ腹にそんなに飲んじゃ、悪酔いするよ」

　マスターが心配そうな顔でカウンター越しに寄ってきた。

　ーー悪酔い、もう、してるよ。

　私は左腕の肘から先をカウンターの縁（へり）にかけて頭を垂れつつ、一人苦笑した。

　マスター・ジロー白須田。

　歳を訊いたことはないけれど、もう、いい中年だ。私はこの人の過去など知る由もない。だけど、きっと若い頃はモテたことだろう。また、基本的に、イケメンが歳を取ってもやはりイケメンなのだ。若い頃よりも渋みが加わって、今の方がいっそう魅力的になっているかもしれない。物知りで物静かで、上品なオーラを持っているこのマスターを、私は客として好きだった。

　白のドレスシャツに黒のベストと蝶ネクタイ。いわゆるバーテンダーの基本形ともいえるオーソドックスな服装ながら、糊が効いたシャツに染み一つない。

　ちらほら銀が混じり始めている頭髪は、今日も几帳面に整えられている。仕事中に一本たりと

も抜け落ちることのないよう、きちんと固められていた。

　輪郭のはっきりした頬から顎のラインに、皮膚の表面から一ミリでも顔を出す無精ひげなど、ただの一本もあり得ないと私は今日も確信できた。

　このバーテンダーは、プロだ。隙がない。しかも、この人の真のプロフェッショナリズムは、隙がないのに厳格さを感じさせず、爽やかで親し気な接客ができることにあると、私は思っている。客の心の垣根の内側に土足で踏み込むような真似は決してしないが、なじみ客にビジネスライクに距離を置き続けることもない。そして私は、マスターとは打ち解けた会話ができるほどの常連だった。

　たった一つ、気になることを除いては、私はこの人の店で時間を過ごすことを快適に感じている。それで今日もつい、ふらりとこのお店に来たのだけれど、今日に限っては、注文の品を出してくれる以外は、私にかまって欲しくなかった。

「マスター、いいからお代わり」

　マホガニーのカウンターに頬杖を突きながら、マスターを睨む。そして空のグラスを片手でコースターごとマスターの方に押し出した。

「よほど嫌なことがあったんだ」

　軽いため息をついて、グラスを下げたマスターは、私の反応を推し量るようにつぶやいた。

　そうよと答えたら次々と上手に質問されて、答えなくちゃならなくなるのが嫌だなと思い、私は黙っていた。マスターは仕事柄、そういうの、上手いから。

　しばらくしてから私は話題を変えようと、マスターに訊いた。

「今日は、マサヨさんは」

　冷蔵庫からビールとジンジャーエールを取り出しながら、マスターは答える。

「ああ、マサヨたんは六時からだから、もうすぐ入るよ」

　ーー出た。マサヨたん。

　私はマスターがこちらを見ていないのをいいことに、うんざりして脇を向いた。

　たった一つの気になること、そして、聞いている私の方が恥ずかしく思うのが、この、「マサヨたん」だ。

　マスターにとって私は客であり、その客が不快感を覚えているのだけれど、マスターは私の、たぶん二回りも年上で、このこと以外には、彼の言動に不快なことがあるわけではないので、今まで黙っていた。でも今日の私は、酔いに任せてつい言ってしまった。

「ねえ、マスター、今、私の他にお客さんがいないから言うけど、その『マサヨたん』って呼び方、どうかしらね」

　マスターは、穏やかな顔に戻って瓶の栓を抜く。

「え、どうかしらねって？」

　全体のイメージがかなり良い人だから、まあ、不可解なことの一つくらいは……と今までそのことには触れずにいたのだけれど、今夜は、マスターのその白々しいとぼけ方が私の癇に障った。

「あのねマスター、人前ではその呼び方、どうかな。マスターももう、いい大人なんだし」

二

　マスターは表情を変えず、グラスにビールを注ぎながら答える。

「気になるのなら申し訳ない。だけど、もうその呼び方に慣れてしまっていてね。どうか見逃してよ、ユキちゃん」

「……」

　ーーマスター、さっきよりビール少な目じゃない？

　私は、それがマスターなりの優しさだと気づいているのだけれど、今夜は素直になれずにいた。

「マスターがマサヨさんをこよなく愛しているのは分かるけれど、私はともかく、初めてここに来るお客さんがそれ聞いたらびっくりすると思うわ」

　ーー引くよ……きっと。

　私が今日、上司から何を言われたか聞かれたくないのと同じように、マスターにとって触れられたくない話題に、私はひょっとしたら触れてしまっているのかな、とふと思いつつ、言い出してしまったばかりに私は食い下がって意見していた。

「気持ち悪がって、二度と『ティートータラー』に来なくなるかも知れない。それって、お店にとって損じゃない」

　マスターは、頬杖をついた私の目の前に新しいコースターを敷いて、さっきよりジンジャーエールを多めに入れたシャンディーガフを音もなく置いた。

「マサヨたんとおしゃべりする目的で来店してくれる男性のお客様も結構いてね、それはお店にとってありがたいことだから」

　私は来たばかりのシャンディーガフにすぐ口をつけ、その四分の一ほどをごくりと飲むと、マスターに言い返した。

「でもそれなら、マサヨさんがマサヨたんじゃなくて、マサヨさんと呼ばれていても、お客さんは来るんじゃない？」

　炭酸で、のど越し爽やかに楽しめるはずなのに、私はげっぷが出そうになる。そのえづきが引き金になって、吐き気を催すのではないかと恐れた。まったく、慣れない量のお酒はやるもんじゃない。「お代わり」を繰り返させる自分とは別の自分が頭の中でそうつぶやく。

　マスターは私の頭がボーっとしていて、論理的に考えられないのをいいことに、澄まして答えるのだ。

「そのお客様たちは、マサヨたんの呼ばれ方がマサヨたんであってもなくても、最初の来店の時に、私がマサヨたんをマサヨたんと呼ぶのを聞いていたにもかかわらず、マサヨたんのことが好きでマサヨたんに会いに来てくださるので」

　ーーダメだ。私、マスターに良いように玩ばれてる。

　だけど、今日の私はそのマスターの落ち着き払ったあしらい方が気に喰わなかったので、さらに突っかかった。

「それならマスター、賭けをしようよ」

三

　私は頬杖をつくのをやめて、グラスを持ってもう一口ごくりとやると、意地になってマスターに言った。

「次のお客さんがいる前で、マスターが『マサヨたん』と言った瞬間、お客さんが凍ったり、驚いたり、笑ったりしたら私の勝ち。来店中、お客さんが『マサヨたん』をスルーしたら、マスターの勝ち」

　マスターは注文控えに記入する手を止めて、澄まして言った。

「いいよ、ユキちゃん。ユキちゃんが勝ったら？」

「『マサヨたん』の永久禁止。それから、白須田ハンバーグ定食、私は一生無料」

　マスターは驚いたようだった。

「大きく出たねー。一生無料とは……」

「マスター、自信があるんでしょう？　だったら、一生分っていっても、私一人の分くらい大丈夫でしょ？」

　私はマスターにそう言っておいて、あとは誰に言うともなく小さな声でつぶやいた。

「一生っていっても、いろいろあるでしょ。一年もしないうちに死んじゃうことだってあるんだよ」

　私はまた少し、気分が悪くなった。マスターは私を見て少し考える風に言った。

「ふうん。じゃあユキちゃんじゃなくて、私が勝ったら？」

　私は少し考えて、

「『マサヨたん』の永久許可」

と言った。

　マスターは笑った。

「なに、その、ただ『現状ＯＫ！』みたいな不公平な取引条件は」

　確かに不公平だな……アルコールで弱った思考回路でもそう思った。

「いいよ、私だって自信あるから、じゃあマスターが何でも言ってみてよ。裸踊りでもなんでもやってあげるから」

「ははは、ユキちゃんの裸踊りかあ。見てみたい気もするが、そりゃあまりに可哀そうだから、そうだな、ドジョウ掬い踊りでもやってもらおうか。鼻に割り箸刺してさ」

　マスターはそう言ってクックッと笑った。

四

　ティートータラーは、カフェバーと銘打つだけあって、コーヒーも料理も出す。早い話、何でもありの食べ物屋さんでもあるのだ。マスター・ジロー白須田は、和洋中、メニューにない料理でも結構器用に作る。私がお腹減ったと言うと、何かパッと作って出してくれたりする。そして、そのほとんどが文句なく美味しかった。

　私の一番のお気に入りは、マスターがさっき下ごしらえをしていた特製ハンバーグで、これは、お肉とたまねぎと香辛料だけで、なんでこんなに深みのある味が出せるのかと、いぶかしむほどの傑作だと私は思っている　ハフハフと口に入れると、表面はカリッと香ばしく、中身はほろほろと柔らかくジューシーで、味と香りが口の中いっぱいにせめぎ合って、噛むことがこんなに幸せなんだと思い知らされ、ずっと噛み続けたくなる。例えるなら、強面（こわもて）の無口な男が不器用に発するシンプルな言葉。飾り気のない短い言葉の中に、豊かな人間性と優しさが溶け合っていて、女はメロメロになる……その感覚の、味覚バージョンだ。

「マスター、ハンバーグ屋さんやれば大繁盛するよ、きっと」

　私は何度となくそう言うのだけれど、そのたびにマスターは、輪郭のはっきりした、男前の顔をほころばせながらも、店内をぐるりと見渡して、「私はこの小さな店で満足しているので」と、一向に野心を抱いていない風なのだ。

　お店は、私が座っているバーカウンターに六席、テーブル席が、壁に沿って二人掛け二テーブル、奥の少し広まったところに四人掛け一テーブルの、合計十四席の小さな間取りで、私の知る限り、お店が満席になったことはない。それどころか、閑古鳥が鳴いていることの方が多くて、私はなぜこの店がつぶれないのか、かねがね不思議に思っている。

　その程度の客入りなので、マスターが一人で客をさばくことが多いけれど、私と同じくらいか、ちょっと若いかなと思う女の子が一人、手伝いに入っていることが時々あった。その子が、マスターがとても可愛がっている「マサヨたん」だ。

　マサヨたんの苗字は知らない。ショートヘアの細身の女の子で、清潔感はあるけれどちょっと薄幸な印象がある。マスターは彼女を異様に可愛がっていた。けれど、それが年の離れた男女の恋愛感情なのか、娘を溺愛する父親の情なのか、よく分からなかった。

　マスターにもマサヨにも、何度か、それとなく聞いてみたことはあったけれど、「どう見えま

すか」とか「店長と店員です」とか、その都度、笑ってはぐらかされた。

　人のプライバシーにあまり踏み込んで訊くのも下世話だわ、自分なら嫌かもしれないと思ってからは、私はそういう質問をするのを　やめたのだった。

　マスターとマサヨがどんな関係でも構わない。だけどやっぱり、私の前で「マサヨたん」は、聞きたくないと思う。イギリスの少し歴史のあるパブみたいな、温かみのある木を主体にした、落ち着いた内装の店内に、ダンディーなマスター。薄く流れるジャズのＢＧＭ。そんな店のマスターの口から出る「マサヨたん」は、どう考えても似つかわしくない。

　けれども、そんな、私の人生にとってどうでもいいことにこれ程までに絡んでしまう今日の自分に、私はもっと嫌気がさしていた。

　一一私って絡み上戸だったんだ。

　お酒に強いタイプではないので、ここまで深酒に浸ることは普段ないのだけれど、まあ、間違いなく人に嫌がられるタイプだ。私自身が、今の私を嫌だと思うほどなのだから。

「よし、マスター。じゃあ、賭け成立。次のお客さんで決めよう」

　私は、少しろれつが怪しくなってきたことを自覚しつつそう言うと、グラスの飲み物を飲み干した。

「マスター、お代わり」

五

　私が役立たずだってこと、自分がいちばん分かってる。でも……努力しても、できないことはできない。そう、天地がひっくり返っても、私にはできない。でも……だから、これは、その報いなの？　　人を裏切り、人から忌み嫌われろ、と？　嫌だと言っても逃れられないの？　ああ、どうして私、頭がおかしくならないんだろう。いっそのこと、消えてしまえばいいのに……。

「いらっしゃいませ」

　ドアベルの音とマスターの声で我に返った。私はカウンターに突っ伏してうつらうつらしていたらしい。

　悪い夢だった。

　夢の中でも、思考は同じところをぐるぐる回っていた。目が覚めた今は、世界がぐるぐる回っている。私はまた気持ちが悪くなって目を閉じた。

　ドアが閉まる音がして、私の後ろを誰かが通り過ぎて行く。

「あのー、食事、摂りたいんですけど」

　若い男性客の声がした。

「ええ、お食事していただけますよ。テーブル席へどうぞ」

　マスターがカウンターの中から対応している。私のバーチェアよりも少し奥にあるテーブル席の、木製の椅子が引かれる音が立て続けにした。どうも二人連れのようだ。

「上着、お預かりしましょう」

　若い女性の声がした。

　ーー若い女性……。若い女性？　女性！

　バッと上体を起こして、右後ろを向き、たぶん、腫れぼったい目で、テーブル席の方を振り向

いた。

　邪魔な髪を右手で掻き上げてもう一度よく見ると、こちらを向いて座ろうとしていた男性客と目が合った。私が急に振り向いたので、とても驚いた顔をしている。

　そして、同じく振り向いたのは、男性のスーツの上着の一着を腕に掛け、もう一人の上着を預かろうとしていた、マサヨだった。

六

　私が状況を理解するのに二、三秒かかり、もう一人の男性客もこちらを振り返った。

　マサヨが私に微笑む。

「ユキさんがおやすみ中に入りました」

「ふーん、あ、そう」

　私は、それからさらに二、三秒、そのテーブルの状況を確認すると、急に興味を失って前に向き直った。男性客たちも、一瞬の不思議な光景はすぐ忘れて席に着いたようだ。

「初めてなんですけど、何かお店のおすすめありますか」

「てごねのハンバーグ定食はいかがでしょうか」

「あ、じゃあ、それお願いします」

「僕も同じで」

「かしこまりました。お飲み物はいかがなさいますか」

「じゃあ、先に生ビール持って来てください」

「僕も」

「かしこまりました」

　マサヨはカウンターのマスターにオーダーを伝えると、私の後ろを通ってカウンターの向こうに戻り、ビールのジョッキを取り出した。マスターはさっき冷蔵庫に入れたハンバーグのたねを取り出した。

　私はまた頬杖をついて、マサヨの様子をぼんやり眺める。二人は無言でそれぞれの作業にとりかかっているので、私は必然的に後ろの男性客二人連れの会話を聞くともなく聞いてしまう。

「あんなことになったってのに、食欲、あるんだ」

「ああ、お互いに」

「今日はいろいろありすぎたな」

「俺たち、言われるがままに、あそこを後にして良かったのかなあ。誰も死んだり、怪我してなけりゃいいけど」

「あれだけ大変なことになって、気にするな、もう行けって言われても、気にしないなんてできない」

「そりゃそうだ、だけどさ、もう気にしてもどうにもならない。飯喰わずにいれば、なかったことにできるってわけでもないし」

　マサヨが私の後ろを通って、ビールを運んで行った。

「じゃあ、共に健闘を祈って」

「うん、よろしく」

　それからしばらく無言になった。二人はビールを飲んでいるところのようだ。マスターはカウンターを越えてさらに奥にある、小さな厨房スペースに入ってハンバーグを焼き始めていたが、カウンターに戻ったマサヨを呼んだ。

「マサヨたん、ちょっと……」

「はい」

　マサヨが奥へと歩いて行く。私は、バッと男性客の方を振り返った。

　ーーああ。

七

「ぷはぁ、旨い」

　彼らはちょうどビールを自分の喉に流し込んだばかりで、マスターがマサヨを呼んだ声に気付かなかったようだ。

　こちらを向いている方の男が、また私と目が合って、ジョッキを持ったまま驚いていた。きっと、「なんだ、この人」といぶかしんでいることだろう。そういう顔をしている。

　少しの間厨房に隠れたマサヨは、二人分のライスの皿を盆に載せて現れた。カウンターの裏を通ってテーブル席へ行こうとするところを、厨房からマスターが呼び止める。

「マサヨたん、これも持って行って」

　私は再び男性客のテーブルを振り返った。そして注意深く観察したが、少なくともこちらを向いている男の表情には特別な驚きらしきものはうかがえなかった。向こうを向いている男も特段、動作が凍った感じでもない。

　――なんで……？

　心底がっかりした。間違いなく聞こえているはずなのに……。私は、思うように反応しない男たちが憎らしくなる。

　――何なのよ！

　この店の入り口ドアの近く、レジ後ろにクロークハンガーがある。カーテンが開いていたので、さっきマサヨがハンガーにかけておいた、二人の男性のスーツの上着がふと目についた。金の襟章が光っていた。その襟章には見覚えがあった。

　――えっ？

　思わずバーチェアからすべり下り、一人レジ近くまで一歩二歩、駆け寄って、それがＫＣＪの社章であることを確認すると、私は二人の男に向き直る。

「ちょっ……あ、あなたたち、ＥＴ？」

「はあ？」

　こちらに背を向け座っていた男も上体をよじらせてこちらを見た。先ほどから幾度も目が合って、私のことをいぶかしんでいたに違いない男は、いよいよ不審さを表情に出す。

　向こうに座っていた方の男が訊いてきた。

「あの……ＫＣＪの方ですか」

　私は二人の男たちの顔を交互に睨むように眺めたが、それから一瞬目を閉じて「はあ」とため息を吐いて、質問には答えずに彼らから目を逸らし、席に戻った。酔いが完全に回っているのに、急に立ち歩いたりしたから、頭がくらくらした。私は再びカウンターに突っ伏す。

　無言の時間が経っていく。彼らの視線を背中に感じながら考える。

　ーーそうか、この人たちが私の……。

　マスター・ジローー白須田が、ハンバーグの皿を両手に持って私のすぐそばまで来た。そこで皿をマサヨに手渡し、マサヨが二人のテーブルまで運んで行った。

「お待たせしました、ハンバーグ定食です」

　その時、マスターが私に囁く。

「確かに、ＥＴ、ことだまカンパニー幹部候補生の社章だね。ということは、ユキちゃんの……」

　私は少しだけ顔を上げて、自分の口の前で人差し指を立てて見せる。マスターは、ナイショだという私の意図を察してくれたようで、小さく頷いた。

「おお、旨そう、じゃあいただきます」

　ＥＴの一人がそう声を上げた。よほど腹が減っていたのか、二人はしばらく無言でカチャカチャと料理を食べ続けた。

　ＢＧＭのジャズが店内を支配する。その間、私はカウンターに突っ伏して一人、悪夢の続きを見ていた。

「マスター、マティーニ」

　突っ伏したまま、空のグラスを前に押し出して呻くように言うと、マスターが心配そうに諫める。

「ユキちゃん、もう止めておいたら？」

　だらしなく丸めた背中からカウンターの天板にまで無秩序に広がった髪を右手でうっとおしげに掻き上げてキッとマスターを睨む。

「マティーニ！」

　マスターは困ったような表情で首をかしげた。

「今日は本当に荒れてるね」

「いいから、作って」

　マスターがシェイカーを振る間、後ろのテーブルでは、ようやく腹具合が落ち着いたＥＴたちが会話を再開した。

「すみません、ビールお代わりお願いします」

　ＥＴの一人がマスターに言った。

「かしこまりました」

　その時、マスターは小さく「マサヨたん」と言った。マスターの横に待機していたマサヨは頷いて行動を始めた。

　私は右の腕を少し持ち上げて、二の腕の下、ばらける髪の間からＥＴたちの様子をうかがった。マスターの声は確かに小さ目だったが、それでも絶対、今の「マサヨたん」は耳に入ったはずだ。

八

　彼らに反応は、なかった。

　ーーああ、なんで無反応なのよ、鈍感な男たち！

　この男たちがＫＣＪのＥＴだと知ってからは、私は余計に憂鬱になった。こんな、頼りなさげな細身の男たちがＥＴなんて……。

　私の不機嫌をよそに、ＥＴたちは、満腹になって気が緩んだか、二杯目のビールをやりながら能弁に語り始めた。

「しっかしさ、東京のど真ん中にあんな大きな施設があるなんて、俺、知らなかった。三浦くんは知ってた？」

　ーーミウラ……あっち側の男はミウラというのか。

　その三浦が答える。

「いや、全然。というか、あそこで何が起こっているのか、いまだに僕は理解できていない」

　そう言うと、三浦は首元に人差し指をやって、ネクタイの結び目を少し下げて、第一ボタンを外しながら言った。

「その前に、中浜くん、僕は三浦杏児（あんじ）と言うんだ。なぜか杏児と下の名前で呼ばれる方がしっくりくるんだ。よかったら今から杏児と呼んで欲しいんだけど」

　もう一人が言った。

「分かった、杏児。俺は中浜万三郎。じゃあ、俺の方も、万三郎と呼んでもらえるかな」

「オッケー、万三郎。ナイス・ツー・ミーチュー」

　タイミングよくマサヨが運んできた二杯目のビールを手にして、二人はジョッキをカチンと合わせた。

――バーカ。

私は、少なくともＥＴのうちの一人、ミウラ・アンジの、恐ろしく下手な英語の発音を聞いて、何もかも心から嫌になった。

――社長の、バーカ！

心底そう思っていた。こんなレベルのおめでたい男集めて、幹部候補生って、いったいどうするつもりなのかしら。私の未来も含めて、こんな人たちに誰の未来を託せるっていうのよ……。

私はマスターが注いだばかりのマティーニをいきなり半分ほどぐっとあおった。

マスターが驚く。

「何があった、ユキちゃん！　とにかく、今日はもうダメだ、アルコールは終わり！」

九

「僕が疑問に思うことは大きく分けて三つある。第一に、なんでワーズたちは顔に英単語をペインティングしているのか」

　三浦杏児が発した問いに、私に背中を向けている中浜万三郎がおどけたように答えた。

「そりゃ、解りやすいからじゃないの」

「いや、確かに分かりやすかったけど、そんなの、名札でいいじゃない」

「俺、見たけど、あれはペイントじゃない感じだ。むしろタトゥーじゃないかな。もっとしっかり顔に刻まれている感じだったよ」

　私が少し顔を上げて横を見ると、マスターと、横に控えたマサヨが一瞬顔を見合わせていた。

　三浦が続ける。

「第二に、同じ人が何人もいるのはなぜか」

「同じ人？」

「【sorry】みたいな、さ。彼らは、同じ人物の分身か何かなのか、別人なのか」

「ああ、確かに。世の中、そんなに双子や三つ子がたくさんいるわけじゃないだろうしね」

　私がそのままＥＴのテーブルをそっと見ると、三浦はビールを一口飲んでから、コトリとテーブルに置き、中浜の目をまっすぐ見すえた。

「そして第三に、あの人たちは、本当に実在しているのか」

「え？」

　マサヨが下げてきた彼らのビールジョッキを静かに洗っていたマスターが顔を上げたが、三浦はマスターにも私にも気付かず、話を続ける。

「だって万三郎、おかしいと思わないか？ 彼らーー顔に英単語が彫ってあるワーズたちーーは、何の仕事してるんだ？」

「何のって、シークウェンス・トレインだっけ、あれに乗って飛び立って行ったけど」

「どこに？」

「どこって、クライアントのとこでしょ？　加速してレールから飛び立って、空を飛んで、駅のドームみたいな天井の隙間から外へ出て行った」

「物理的な意味でだよ。僕たちのホームからだけじゃない。いっぱいあったホームから次々飛んで行ってたよね」

「あ、ああ、言われてみれば」

「あの隙間から、本当は、どこへ行ってるんだろう」

　一瞬の静寂があった。三浦に難しい質問を振られて、中浜はひるんだようだ。

「そ、それは……モニターに映ってた、あの現場に……」

「あのトレインが現場に着くところ、モニターに映ってた？」

「いや、それは映ってなかったと思う」

「ほら、何か現実的じゃないと思わないか、万三郎」

「というと？」

「僕たちはさっき、大混乱の末、トレインの大事故を起こしてしまった」

「うん」

「普通、あんな大事故起こしたら、現行犯逮捕とは言わなくても、関係者はまず間違いなく事情聴取でしょ？　それなのに僕たちは別に逃げたわけでもないのに、上司からも警察からも事情を聞かれず、『あとは任せろ、気にするな』なんて言われて、こんなところで平和に晩ごはん食べ

てる。とても現実的とは思えない」

第三章　由紀（10）

十

――この論理男、嫌な奴！

　彼らとは反対方向にある、ハンガーにかかっている彼らのスーツの上着を見る。別に変わったことはなく、彼らの、二つの鴨の社章が、お店のライティングを反射して、微かな鈍い光を放っているだけだ。

　私はこの、嫌な論理男を邪魔しようと思った。

「マスター、マティーニ、お代わり」

　目の前に半分ほど残ったマティーニをぐっと一口で飲み干して、あえて大き目の声を上げる。マスターは私の空のカクテルグラスを見て首を横に振った。

「今日はもうダメだ、ユキちゃん」

「いいからお代わりって言ってるでしょ！」

　上体をカウンターにうつぶせたまま、顔だけ上げて私は声を荒げた。それは、三浦たちの気を引いて話を中断させようとする、意図的な演出のつもりだったのだけれど、実際には、頭がどーんと重くて胃がむかむかしている、私自身の今の体調に我慢がならず、自然に口調が険を帯びたのかも知れなかった。

　ともかくも、彼らの会話は途切れた。

　――きっと二人ともこっちを向いているはず。

　マスターが厳しい顔で腕組みをして、私を見たまま言った。

「マサヨたん、水を」

　それを聞くやいなや、バッと上体を起こし、右を向いて、二人のＥＴをキッと睨んだ。確か、彼らが入店してから四回目の「マサヨたん」のはずだ。

彼らは驚いて私を見返していたけれど、「マサヨたん」に何らかの反応を見せているとは思えなかった。

ーーこれは、私の負けだわ……。私は何するって言ったっけ……裸踊り？　どじょう掬い？

一瞬天を仰いで大きくため息をつくと、右手で髪を掻き上げ、二人を睨みながら問う。

「あなたたち、シートレをめちゃくちゃにしたの？」

二人はどう答えて良いのか分からないのだろう、こちらを向いたまま凍りついたように無言のままだ。

ーー私と、一緒じゃん。

先が思いやられた。

ーー何にも知らずに、いい気なもんだわ。

そう、何も知らされていないとはいえ、この男たちのせいでワーズたちは痛い思いをしただろうと気の毒だったし、その罪悪感もなく、初回来店にして、ティートータラーの特製ハンバーグを食べる栄誉にあずかっているのも腹立たしかったし、何より、四度目の「マサヨたん」に無反応だったのが気に喰わなかった。

私は、おそらく彼らと歳は変わらないのを分かっていながら、上から目線で偉そうに言ってやった。

「だいたい、社章をつけたままの上着を預けるなんて、初日からよくそんな無頓着なことができるわね。あれがどれだけ大事なものか、分かっているの？　外に出る時は肌身離さずつけていなさいって、古都田社長から言われたでしょう」

三浦が口ごもった。私が関係者で、しかも先輩か上司であろうことはすでに察しがついたのだろう、少し畏れ入った顔で目を逸らした。

「い、いえ……、そこまでは言われていませんが……」

その時、中浜が私の方に身体ごと向き直って言った。

「あのー、どうして今日が僕らの初日だと知ってるんですか？　あなたはいったい誰ですか」

　ーーしまった。酔った勢いで言い過ぎてしまった。そりゃあ、そう訊くわよね……。

　迂闊だった。お酒に酔うと、大きく出てしまうわりに、先を読む頭の回転が鈍くなって困る。私は慌てて言葉を濁した。

「私？　私は……どじょう掬いの女よ」

「はあ？」

　さっき私がナイショよとジェスチャーしたことで、今は素性を彼らに知られたくないという私の心情を、マスターは理解してくれていた。苦しい言い逃れをしている私をフォローするつもりなのだろう、マサヨから受け取ったグラスの水をスッと私の前に差し出しながら、マスターははっきりとした口調でマサヨに言った。

「マサヨたん、お客様の、済んだお皿をお下げして」

　私は背筋を伸ばし、これが最後と彼らを見すえる。中浜は私の視線に驚いたようだったが、自分の手元の皿に目を落とすと、マスターの方を向いて頭を下げた。

「あ、すいません、ごちそうさまでした」

　それにつられて、三浦も私から目を逸らし、手元のおしぼりに手をやって言った。

「おいしかったです、ごちそうさまでした」

　ーーこの、馬鹿男（おとこ）、鈍感男、非常識男ッ！

　絶望した私に、ふつふつと怒りと震えが湧き上がってきた。

「あなたたち、おかしいんじゃない？」

十一

「いや、ユキちゃん、あれは冗談だって。そんなの、やらなくてもいいよ」

「ばばば、馬鹿にしないで。マスター、わわわ、私はね、やや約束は守る女なの。言ったことは、かか必ずやってみせる」

　止めようとするマスターの手を振りほどき、自分のスカーフをほどいて頬かむりのように顔に巻く。

「若い女性が、やめなさいって」

　そう言って懸命にマスターが止めるその肩越しに、私はマサヨに震える手を伸ばした。

「ままままサヨさん、そそそのお盆、貸して」

　あっけにとられたような表情のマサヨから、ステンレスの大きな丸盆を借り受けた。

「お箸も」

　マサヨは言われるままにエプロンのポケットから割り箸を取り出して私に手渡す。

　スーツの上着を脱いでビジネスパンツとブラウス姿になると、私はお盆と割り箸を持って、ＥＴの男たちの前を通り、店の奥、四人掛けのテーブルがあって、少し広くなっている辺りへふらふらと移動した。

　割り箸の、先から三分の一あたりをまとめてポキリと折って、それを両方の鼻の穴に仮差ししてみた。

「痛た……」

　お酒でちょっと感覚神経が麻痺しているかもしれなかったけれど、それでも折れ目の棘が鼻の穴に刺さるような感じで痛かった。しかも折った箸を持つ私の手はどうしようもないほど震えていて、自分で分かっていながら、割り箸の棘は私の鼻の穴の中を何度も刺した。

　マスターがカウンターからホール側に出てきて、ＥＴたちの視界を遮るように、私の前に立ちはだかった。

「ユキちゃん、しらふになったときに後悔するから、もう止めようよ」

　いったん割り箸を外し、私は脚を広げて踏ん張った。震えを誤魔化すためだ。

「マスター、どどどじょう掬いの音楽、かかかけて」

　マスターは肩をすくめる。

「そんなの、あるわけないよ」

「じゃあ……」

　私は、マスターの上体を払いのけ、あっけにとられてこっちを見ている二人のＥＴを見た。

「あああなたたち、どじょう掬い音頭とか、しし知らないの」

　中浜がかすかに首を横に振る。

「……安来節みたいな？ 知りません」

「じゃあ、手拍子して！　このくらいの速さで」

　三浦が訊いてくる。

「ねえ、どうしてユキ……さんは、今からどじょう掬いを踊るんですか？」

「せせせ、責任を取るのよ」

「はあ？」

「あのとき、ままま、負けた責任を……」

十二

　マティーニの一気飲みはやはりまずかった。気分最悪、吐き気旺盛、頭ガンガン、視界チカチカ。

　ーー何やってんだ、私。

「ユキちゃん、それまでだ。もういいよ、充分罰ゲームになってる」

　ふらつく私を支えようとマスターが腕を伸ばした。

「ダメッ！　近寄らないで！」

　私はマスターを激しく突き飛ばした。マスターは少し後ろによろめいた。

「こここれは、私の、みみみ、禊（みそぎ）なの。後ろへさがって、だだ黙って見ていて、お願い」

　三浦が言った。

「罰ゲームなのなら、禊じゃなくて、ケジメってことですか？」

　私は三浦をキッと睨みつける。

　ーー何も知らないくせに！

　その眼力にタジタジとなった三浦は、私から目をそらした。すると今度は中浜が、マスターを振り返って、心配そうに訊いた。

「ねえ、店長さん、この人、すっごい震えてるけど、急性アルコール中毒とか大丈夫なんですか」

　私に言われるままに、私が座っていたバーチェア辺りまで下がっていたマスターは、中浜の肩越しに気の毒そうな目で私を見て言った。

「いや、極度のあがり症なんです、ユキちゃんは」

　私は頬かむりをしたまま、鼻の両穴に割り箸を差し、反対の端を受け口にした下唇で支えて、ステンレスのお盆を手に持った。

「ふぁふぁ、ふぁにひゃへっへんふぉ！　へへ、へひょうひ、ひへ」

　私は手拍子のジェスチャーをしてお盆を幾度か叩いた。ジェスチャーに促されて手拍子をし始めた二人のＥＴたちの前で、私は脚をガニ股に広げる。

「ユキちゃん、やっぱり……」

　マスターが再び歩み寄ろうとするのを私は手で制し、顔を横に振った。

「ああ、どうしてこんなことに……」

　マサヨも顔をそむける。無理もないと私も思う。

　ーーたしかに、これは、笑えないわ……。

　こんなに鬼気迫るどじょう掬いは、むしろオカルトかもしれない。お酒に酔って顔が赤いのか、羞恥で赤いのか、彼らには判断できないのが救いだった。ただ、震えについては、やはりどうしようもなく、私はガタガタと震えている。それでもやはり、明日以降のために、私には、禊が必要だと思えた。

　ーーこれさえ、これさえ克服できれば……私はまだ、きっと戦える……。

「はああー」

　手拍子の中、私は鼻の穴に痛みを感じながら、閉じない口で素っ頓狂な声を上げた。

十三

　あ、それ、あ、それ、あ、それそれそれそれ……。

　もとより、本格的などじょう掬いの踊りなど見たことない。私は狂ったようにガニ股の足を、右、右、あ、左、左……と繰り出しながら、ざるに見立てたお盆を両手でしきりに掬い上げる仕草をした。

　ーーうえ……気持ちわる……。

　激しく頭を振ったので、束ねていない髪が乱れ、私はおそらく夜叉のようになっているだろう。今、お店の扉が開いてお客さんが入店したら、すごいトラウマになるだろうなあ、お客さんが。……いや、私がか。

　そんなことを考えながら、たぶん私は足をもつらせてフロアに倒れ込んだのだろう。

「あっ、ユキ……さん、大丈夫ですか？」

　壁に寄りかかりながら崩れる私に駆け寄って私を介抱したのは、一番近くで見ていた中浜万三郎のようだ。

　ーーー度くらいの失敗が、何だってのよ。

　誰にともなくそう反発している心の中で、私は、宇宙空間にぽっかり浮かぶ地球の姿をイメージしていた。

　ーーそりゃあ、地球は一つしかないけどね。

　朦朧とした意識の中で、中浜が私の上体を抱いて、小さく呼びかけた。

「怪我はないですか？」

　私は頷きながら答えた。

「へも、吐ひほうはも……」

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル……」

　中浜万三郎は、気の毒そうに意味不明の言葉を言うと、顔を覆って乱れに乱れた私の髪を優しく左右にかき分け、私の鼻に刺さった割り箸を、そっと取り外してくれた。

「あ……ありがとう」

　私はやっとのことで薄目を開けてお礼を言った。

「ああ、大丈夫みたいだね」

　マスターの声が中浜の後ろから聞こえる。

「マサヨたん、ユキちゃんに冷たいおしぼりを」

　すると、中浜と並んで私を覗き込んでいる三浦杏児が、独り言のようにつぶやいた。

「だからさっきから何回も、『マサヨたん、マサヨたん』て……おかしいでしょ」

　それを聞いた私は、残る力を振り絞って、三浦の頭を一発ひっぱたいた。

「最初にそう言えよ、バカ！」

第四章　研修（1）

一

　エレベーターを降りて、近代的なオフィスの廊下を十メートルほど歩くと、左手に「第三研修室」と表示が出ていた。

　万三郎は、引き戸型の白い扉に手をかけてみて、扉の抵抗感に驚き、思わず杏児と顔を見合わせる。

　鍵は、開いては、いた。

　ただ、こちら側から見る限り、白く塗装された軽量素材のスライドドアだと思っていたのに、万三郎が力を入れて引くと、扉のコロが砂を噛んだように軋み、やがて止まってしまう。上下に揺さぶる感じでさらに力を加えると、ようやくガクガクとぎこちなく動いた。建て付けが非常に悪い。

　開いた扉の向こうには、エレベーターや廊下の近代的デザインとは真逆の空間が広がっていた。こげ茶色からはすでにかけ離れた、薄汚れた黒鉛色に近い板張りの床。人間工学の対極を行く、超四角い一人用の木製の椅子と机。それらが縦五列、奥へ五列と並べられている。

　部屋の前方、二人の目の前には、その床より一段高い教壇があり、中央に講演台、いや、昔仕様の「教卓」があった。

　教壇に沿った壁には、こちらの端から向こうの端まで広がる暗緑色の黒板。黒板の上には、デザイン性のかけらもない、大きな時計。

　部屋の向こう側が、校庭を見渡せる全面窓ではなくて、白壁になっていることと、天井の中央あたりに吊り下げ型の、スクリーンプロジェクターらしき装置が取り付けてあることを除けば、ここは、どこからどう見ても、昭和時代の小学校の教室だ。万三郎は部屋を見渡しながら杏児に確認する。

「第三研修室って、言ってたよな？」

「ああ。ここのはずだ」

　入口から一歩入って、一通り部屋の様子を把握し終えた万三郎と杏児は、とりあえず、一列目

中央の、隣り合った二つの机を選び、おずおずと席に着いた。

「なんで、こんなに古い部屋のデザインになっているんだ？」

「さあ……」

　二人は着席したまま改めて周りを見回すと、浅くため息をついて黒板の上の壁面に掛けられた時計の文字盤を見つめた。

　九時きっかりに、扉が「ガ……ガガ」と音を立てて横に動いた。

二

　やっとのことで扉を開けると、新渡戸稲男部長が一人の男を伴って入ってきた。後ろの男が扉をガクガクと閉める。万三郎と杏児はその場で起立した。新渡戸は部屋に入るや、すぐに立ち止まって部屋全体を不思議そうに見回している。

「あれ、二人だけか。福沢くんは？」

　新渡戸が自分に向かって尋ねているのだと分かると、杏児は首をかしげてもごもごと答える。

「は、僕たち二人だけだと思います」

「ふうん」

　新渡戸は視線を少し上に向けて何か考えるような素振りを一瞬見せたが、再び二人のＥＴに視線を戻して言った。

「おい、昨日は、二人とも派手にやってくれたな」

　新渡戸は起立した二人に歩み寄って、手前側に立っていた杏児の左肩を、無表情のまま、ポンと叩き、次に万三郎の肩を一度ポンと叩くと、その手をそのまま万三郎の肩に置いた。

　二人は畏れ入ってうなだれる。昨日のことについて、おそらく自分たちへの何かしらの処分が、今から言い渡されるのだろうと予想していたからだ。

「だが、まあそれはいい」

　新渡戸は、緊張した面持ちで頭（こうべ）を垂れている万三郎の耳元でそう言った。万三郎はその言葉に驚いて顔を上げる。新渡戸は万三郎の肩に手を置いたまま、杏児にニコリと微笑んだ。

「私は江戸ワード駅長と一緒にセントラルビルの駅長室から見ていたが、そこへ古都田社長と、石川さんという、政府の審議官も来られた。シートレがバラバラになって墜落していく様子を見ながら、『あいつら、予想以上にやらかすじゃないか』としかめっ面していたよ」

「全然よくないじゃないですか」

　万三郎はがっかりしてそう言うと、一度上げた顔をまた下げた。新渡戸は万三郎の肩をもう一度ポンと叩くと、同伴してきた男のところへ戻りながら言った。

「紹介しよう」

　万三郎と杏児は、その言葉に揃って顔を上げて、部長の背中を見る。そして、その向こうに立ってこっちをニコニコと見ている、年の頃三十代後半くらいの、中肉中背の男に視線を移した。

「ＫＣＪ人事部、能力開発課長の、倉間法文（くらま のりふみ）先生だ」

第四章　研修（3）

三

　実のところ、二人にとってみれば、この部屋に入ってきた時から、新渡戸よりもこの男のことの方が気になっていた。ただ、無遠慮にその姿をまじまじと見ては失礼と、あえて目を合わさずにいたのだ。なぜ気になったか。それは、この男が羽織袴に下駄履きといういで立ちだからだった。

「お初にお目にかかる。それがしの名は、　倉間過去完了法文（くらま かこかんりょう のりふみ）　でござる。以後、見知られよ」

　満面の笑みをたたえて彼は自己紹介した。万三郎は思わずつぶやきかける。

「か、過去完……」

「ああ、それはミドルネームでござる。普段は言わぬので、気にするな。倉間ほうぶんでよろしい」

「ほうぶん……？　先ほどはのりふみと……」

　杏児の問いに新渡戸が答える。

「ああ、先生は皆から『ほうぶん先生』と呼ばれて親しまれている。正しくは『のりふみ』ながら、しばしばご自身のことも『ほうぶん』と言われるのだ」

　するとほうぶん先生は、笑みをたたえたまま、上司にあたる新渡戸に向かって頭を掻く。

「いやあ部長どの、それがしに成り代わってのご説明、かたじけのうござる。はっはっは」

　ほうぶん先生はそう言って破顔した。

「なんの、これしき。はっはっは」

　ほうぶん先生に合わせてか、新渡戸もいやに古風な答え方をして声を上げて笑った。

「うわははは」

「はっはっは」

　あっけにとられているのは、万三郎と杏児だ。だが、二人にしてみても、昨日シートレを滅茶苦茶にしたことを激しく叱責されると朝から覚悟していたにも関わらず、何やら温和な雰囲気が醸成されているので、大いにホッとする。何だかよく分からないが、朗らかに笑う二人に合わせて、彼らも次第に一緒に笑い声を上げ始めた。

「はっはっは！」

「うわっはっは」

「は……ははは……」

「あ……あはは……」

第四章　研修（4）

四

「がはははははは」

「ひゃっひゃっひゃ」

「ははははははっ」

「あっはっは」

　ほうぶん先生と新渡戸部長の豪快な笑いに背中を押され、万三郎と杏児は、目尻を下げ、口を大きく開けて声を出し、もう一分間ほども笑っていた。笑っていくうちになんだか本当に楽しくなってきて、笑いが笑いを呼ぶ。昨日からずっと強いられてきた緊張から、二人はようやく解放されたような気分になっていた。

「うおほっほ……。さて……」

　ほうぶん先生は、教壇に立って、大笑いをおさめ、にこやかに語り始めた。

「おぬしら二人があまりに暗い表情であったゆえ、あいさつ代わりに、それがしから『笑い』をプレゼントしようと思ったのだが、受け取ってくれたようで何よりでござる」

　新渡戸部長は入口の近くに立って、ほうぶん先生を柔らかな目で見守っている。

　ほうぶん先生は右手を二人の方に軽く伸ばして手のひらを下に向けて二度上下させ、二人に言った。

「座りなされ」

　二人が座席に着くのを見届けると、にこやかなほうぶん先生は、黒板の方を向いてチョークを手にした。

「カッ、シュッ、シュッ、シャー」

　懐かしい音を立てて黒板にチョークを走らせる。

「おお！」

　万三郎は感嘆の声を発した。今は学校ではなかなか教えてもらえぬ、筆記体の英語だ。万三郎も杏児も、笑いで充分ほぐされた口を半開きに開いて、黒板に美しく描かれていく英文を見つめた。

“How to Win Friends and Influence People”（1）

　それからほうぶん先生は行を変え、次のように書き足す。

“一一 Dale Carnegie”

　書き足しながら二人に訊いた。

「おぬしら二人は、この人物を知っておるかな」

　杏児が手を挙げて答える。

「先生、それは、アメリカの作家、デール・カーネギーのことでしょうか」

　ほうぶん先生は手についたチョークの粉をパンパンと払いながら頷く。

「彼が、著書『人を動かす』の中で言った言葉を紹介する」

　そう言うと今度は、美しい発音で、流暢に英文を暗誦し始めた。

”Your smile is a messenger of your good will.”（2）

　そして、驚いたことにその次の文からは、新渡戸部長も、これもまた流暢な発音でほうぶん先生に合わせたのである。

”Your smile brightens the lives of all who see it. To someone who has seen a dozen people frown, scowl or turn their faces away, your smile is like the sun breaking through the clouds. ”

　二つの男声がピタリとシンクロして万三郎と杏児の耳にステレオで入っていく。二人ともその時、英文はほとんど理解できなかったが、音とリズムの美しさに心震えるものがあったのだ

った。

　ほうぶん先生は英文を言い終えると、続いて日本語訳を暗誦する。

「笑顔は好意のメッセンジャーだ。受け取る人々の生活を明るくする。しかめっ面、ふくれっ面、それに、わざと顔をそむけるような人々のなかで、あなたの笑顔は雲のあいだからあらわれた太陽のように見えるものだ」（3）

五

　カーネギーの名言の日本語訳を暗誦し終えると、柔らかな笑顔をたたえたまま、ほうぶん先生は言った。

「どうでござるか。おぬしら二人の今が、少々明るくなったかね。それが、それがしからの『プレゼント』でござる」

　万三郎は少なからず感動して杏児を見る。杏児も同じ気持ちだった。

　昨日以来、すっかり萎縮して陰鬱になっていた二人の気持ちを、ほうぶん先生は爽やかに吹き飛ばしてくれた。そして、新渡戸部長とシンクロして、両側から、美しい英語で、良い文章を聞かされた時、二人は、大げさではなく、魂が揺さぶられるような思いがした。二人は今、まさしく雲間に差し込む太陽の光を見ていた。出会って五分、二人とも一気に、この風変りな昔風の男を好きになっていた。

「言葉には、力があるのでござる」

　ほうぶん先生は言う。

「よく吟味された言葉の連なりは、非常に効果的に相手の心を打つ。悪い言葉は、効果的に相手にダメージを与えるが、良い言葉は、相手に勇気と愛と感動を与える」

　先生は続けた。

「時と場合に応じた、言葉の使い方、選び方、組み合わせ方。これらに熟達することで、人を動かす非常に大きなパワーを得ることができるのでござる」

　新渡戸部長が、ほうぶん先生の言葉を継いで言う。

「そして、それが、君たちのミッションなのだ。君たちは、昨日の失敗を良き教訓として、時と場合に応じた言葉の使い方、選び方、組み合わせ方を身につけていって欲しい」

「それは、ここ、ＫＣＪの一一」

　ほうぶん先生が再び言葉を引き継ぐ。

「一一百万のワーズ社員たちの、理想的なリーダーになることに他ならぬ。エクゼキュティヴ・トレイニー、すなわちＥＴとは、ワーズ社員たちを自由自在に動かし、それらの持てる力を最大化する能力を持つ、偉大なリーダーの卵なのだ。そしてその修行は、今始まったばかりでござる。まずは、笑顔。これは、対人関係の要諦なり。大きな心で、相手を笑顔で包み込むよう、心がけなされい」

　万三郎と杏児は深く頷く。昨日からのことは、まだまだ分からないこと、納得いかないことがたくさんあったが、ともかくも自分たちが何を求められているのかはおぼろげに理解したし、そうなろう、熟達を目指そう、という気持ちになれた。

　ほうぶん先生は、改めて弾けるような笑顔を見せて言った。

「さ、笑顔のウォーミングアップはこれにて終了、オリエンテーションに入るといたそうか」

　その時、前の引き戸が突然、ガタン！　と大きな音を立てた。

　新渡戸部長が思わず飛び退(すさ)る。続いて、「ガラガラガラッ！」と強引にドアが引き開けられ、一人の女が転がり込むように部屋に駆け入ってきた。

「おっ、遅れて、ももも申し訳、あ、ありませんっ！」

六

　これ以上小さくなりようがないだろうというほど身体をかがめて、女は両手を膝につき、最敬礼で謝っている。そして震えてもいた。

　数秒の沈黙の後、いまだ顔を上げ得ぬ女に、新渡戸が声をかける。

　優しく。

「よく来た、ミズ・ヒロイン。君がいないと始まらないところだ」

　怒鳴られることを覚悟していただろう女は、ハッと顔を上げて新渡戸の方を見た。

「ああっ！」

　声を上げたのは万三郎だ。もちろん杏児も口を開けて目を見開いた。

　昨夜と違い、髪を必要以上にビシッと揃えて束ね、眼鏡をかけてはいるが、これは紛れもなく昨夜ティートータラーで見た、あの、自称どじょう掬い女ではなかったか。

　髪ビシどじょう女は、眼鏡の奥からちらりと万三郎と杏児の方を見たが、すぐ新渡戸に視線を向け直し、上気した顔で礼をした。

「ぶぶ部長、申し訳ありませんでした」

　息せき切ってエレベーターに駆け込み、駆け降りて、一秒でも早くと走り込んで来たのだろう、女は謝罪を口にし終えてもなお、肩で息をしている。

　しかしこの髪ビシどじょう女、眼鏡が多少のカモフラージュになっているとはいえ、目の下のくまがいかにもひどかった。内出血のように青黒い。

　一一ははあ、完全に二日酔いで寝過ごしたな……。

　万三郎は昨夜のこの女の酒量と荒れ具合を思い出して、この遅刻をさもあらんと思った。同じことを思っていただろう杏児は、それを表情に出して鼻先でフッと笑う。

　すると、そのわずかな表情の変化にどうして気づいたか、髪ビシどじょう女はキッと杏児を睨んだ。杏児は思わず目をそらす。

　女は杏児が目をそらし終えるまでしっかり見届けると、教壇に向き直り、今度はほうぶん先生に頭を下げた。先生は、にこやかに言った。

「ちょうど今からオリエンテーションを始めるところでござった。間に合うてよかった」

「本当に、もも申し訳ありませんでした」

「新渡戸部長」

　ほうぶん先生は新渡戸の方を向く。

「うむ」

　新渡戸は頷くと、髪ビシどじょう女の横に立ち、万三郎と杏児に言った。

「新人ＥＴの、福沢由紀（ふくざわ ゆき）くんだ。今日から君たちと共に学ぶ」

七

「ええっ！　同じ新人ＥＴ？」

　杏児が素っ頓狂な声を上げる。

　再び、福沢と呼ばれた髪ビシどじょう女が杏児を睨みつける。その紺のスーツの上着の襟のところには、なるほど、金色の鴨の社章が燦然と光っていた。

　新渡戸が平然と杏児に問い返す。

「そうだ。なぜそんなに驚く？」

「い……いや、新人ではなく、先輩かと……」

「同い年だと思うが。あるいは数か月彼女の方が先輩かな」

　新渡戸はそう言いながら、髪ビシ女に、万三郎の後ろの席を指し示した。

「だが新人ＥＴであることに変わりはない。お互い、仲良くやってくれ」

　そう言う新渡戸に続き、ほうぶん先生が優しく髪ビシ女に着席を促した。

「座りなされ」

「はい」

　女は席に向かう。幾分震えが落ち着いてきたようだ。杏児がそれを目で追いながら独り言のようにつぶやく。

「新人て。昨夜（ゆうべ）僕たちにあれだけ偉そうにしておいて……うがっ！」

　通りすがりに、髪ビシ女が肩から提げたトートバッグが杏児の後頭部を強打した。女は慌てもせず言う。

「あーら、ごめんあそばっせ」

　それを見ていた万三郎は、これは明らかに宣戦布告だと思った。「仲良くやってくれ」と聞いた五秒後にこれだ。

「なんてこったい、ホーリー・マッカ……」

　そう口の中で言いかけた万三郎の耳に、小さく鋭い声が飛びこんできた。

「昨日のことは忘れなさい、いいわね」

　席につくなり、髪ビシ女は釘を刺してきたのだ。万三郎は機嫌が悪くなる。

　――なんて高飛車な言い方なんだ、同輩のくせして……。

「昨夜のことって、君が俺たちの前でどじょう掬い踊りをしたこと？」

　万三郎は前を向いたまま、意地悪く訊き返してやった。

　後ろが一瞬無言になった。

　――ああ、ちょっと言い過ぎたか……。

　万三郎が軽い後悔の念を覚えて後ろを振り返ると、右頬の中心に痛みが走った。

「あ痛(いた)っ！」

八

　万三郎は反射的に右手で頬を押さえる。何が起こった？　万三郎はそのまま後ろを振り向く。髪ビシ女は、昨夜どじょう掬いの時に自分の鼻の穴に詰めていた、折れた割り箸を一本つまんでいた。

　ーーあっ、あれを俺の頬に……？

　女は今さらながら割り箸を隠すように手のひらに握り込んだ。

「ちょっとぉ、急に振り返らないでよ」

　そう言ったものの、女は万三郎を睨む代わりに目を伏せたのだった。髪がきつすぎるくらいにまとめられている上、眼鏡のフレームでビジュアル的に顔から切り離されて露わになった両耳が、真っ赤に染まっていた。昨日のことを万三郎にはっきり指摘されて、よほど恥ずかしいのだろう。「よくもそうはっきり言葉で言ったわね」という、非難の意味での割り箸アタックであることは分かったし、彼女は万三郎の頬が当たる瞬間にわずかに割り箸を手前に引いて衝撃を和らげたのは万三郎も感じていた。それでも万三郎はムッとする。

　ーーそれにしたって、あぶないじゃないか。

　そこで万三郎は、さらに意地悪く女に問う。

「あれ？　なんで、どじょう掬いの時に君が鼻に詰めた割り箸をまだ持っているの」

　女は眼鏡の奥から万三郎を恨めしそうに見ながら、慌てて割り箸をポケットに隠した。

「ポケットにたまたま入っていたのよ。それより何よ、さっきからどじょう掬い、どじょう掬いって。何を意味不明なこと言っているの」

　万三郎は苦笑する。

　ーーははあ、とぼけることにしたのか。まあ、ここは合わせておくか。

　しかし、万三郎がそう思った一方で、杏児はこの女の言動が腹に据えかねたと見えて、先ほ

どバッグをぶつけられたお返しとばかりに女にかみついた。

「あ、そうだ。社章うんぬんと偉そうに言っていたけど、君も昨日、どじょう掬いを踊っていた時、社章を身につけていなかったじゃないか」

　女は勢いよく立ち上がって、万三郎と杏児を交互に見ながら言った。

「あのねえ！　あなたたち何言ってんの。誰がどじょうすくい踊ったって？　だいたい私はあなたたちに会ったのは今朝が初めてでしょう。社章がどうのこうのと、はあ？　訳わかんない！」

　杏児が張り合うように立ち上がる。

「僕の方が訳わかんなくなるよ！　同い年ならなんでそんなに偉そうなんだよ」

「あんたたちが頼りなさすぎるのよ、そんなんで地球を守れるはずないじゃん」

「はあ？　何言ってんだ。君の方こそ訳わかんない」

「何よ！」

「何だよ！」

九

「まあまあ！」

　立ったままいがみ合う杏児と女を、ほうぶん先生が宥めにかかる。

　杏児はそれでも収まらず、「地球を守るって？　そりゃあ、僕には君のように、割り箸をあんな風にリサイクル利用するなんて発想は出ないね。ぜひこれからも、そうやって地球の限りある資源を守ってくれ」と言って、女の方を見ながら、顎を受け口の形にして、ざるでどじょうを掬う素振りをした。髪ビシ女は再び耳朶まで真っ赤にして震えながら、下唇を噛み、杏児を睨み続ける。

　怒りか緊張か、再び震え始めた女は、やっとの思いで訊く。

「あ、あなた、な、名前は何だっけ？」

「僕は、三浦杏児」

「あ、あ、あなたとは、な、仲良くできそうね」

　女はそう言うと、少し脇へうつむいて眼鏡のフレームを親指と人差し指でつまんで位置を調整し、そして座った。

　万三郎がほうぶん先生の顔をそっとうかがうと、先生も苦笑していた。

「ほれ、君も座りなされ」

　促されて杏児が着席したのを見届けた新渡戸は、思い出したように口を開いた。

「今、社章の話が出たが、その社章の効力は絶大だ。いかなる場合でもＥＴとしての諸君の身分を証明し、身の安全を保障してくれる。仕事中やプライベートにかかわらず、外出する時には身に着けるようにしてくれ」

　女がどや顔であごを上げ、見下ろすような目つきで杏児に言った。

「ほらみなさい。社章はいつも身につけておくのよ」

　杏児が再び立ち上がりかけた。

「何が『ほらみなさい』だ！　昨日僕たちが出会ったこと、認めてるじゃないか！」

　女の方は勢いよく立ち上がった。

「なな何よ、まま間違ったこと言ってないでしょ！」

「もう、いい加減、やめようよ」

　万三郎がたまりかねて二人に言う。そして、新渡戸もゆっくりと頷いた。

「中浜くんの言う通り、もう止めた方がいい。この研修室での様子は、ほら、あそこ、後ろのカメラで監視および録画されている。研修中のこの部屋での言動は、人事考課に影響することを申し伝えておく」

　そこまで聞いてはじめて、杏児と髪ビシ女は後方天井の、こちらを向いているカメラを見て、きまり悪そうに着席した。

　なるほどあれはプロジェクターではなくて監視カメラだったのかと万三郎は納得する。杏児はうらめしそうに新渡戸部長をちらと見やって口を尖らせた。

「部長、それを早く言ってくださいよ」

十

　新渡戸はさらに続ける。

「とはいえ、あのカメラは君らを監視することだけが目的ではない。ほうぶん先生はじめ、講師陣の講義の映像と音声は余すところなく収録され、ＫＣＪ秘書室が保管することになっている。今後もし、何らかの事情で遅刻したり欠勤したりするようなことがあれば、今神（いまがみ）秘書室長へ申し出なさい。聞き漏らした講義のデータが提供される。そして最後に……」

　新渡戸はそこでいったん言葉を切った。そして、聴き手に一語一語理解を求めるかのように、ゆっくりした口調で説明を始める。

「君たちが、ＥＴという、わがＫＣＪの将来を担う重要な存在である以上、また、君たちにとって英語学習自体が勤務である以上、君たちの学習内容とその理解の進捗は、厳密に管理され、役員に報告される」

「役員って？」

　万三郎が小さな声で隣の杏児に訊く。

　杏児の代わりに、教壇のほうぶん先生が答えた。

「代表取締役である古都田社長はもちろん、超巨大企業であるＫＣＪには数多くいる　取締役（エグゼキュティヴ）の方々だ」

　杏児が再び素っ頓狂な声を上げた。

「ええっ？　僕らの成績は、社長以外の取締役にまで知らされるんですか！」

　ほうぶん先生はニコリと笑って頷いた。

「エグゼキュティヴと呼ばれる彼らは、各々方ＥＴ、すなわちエグゼキュティヴ・トレイニーにとっては先輩方にあたる。彼らにとってみても、自分たちの後輩取締役になるかも知れない三人の成長は、重大な関心事なのでござろう」

新渡戸は顔色ひとつ変えずに付け足した。

「もちろん、君たち自身にも、定期的に報告書を書いてもらうことになる」

万三郎は思わず上ずった声で言ってしまった。

「そ、それは、相当な作業量とプレッシャーになりますね」

万三郎は、昨日、古都田社長から社章を受け取るかどうか躊躇していた際、社長から、「中浜くん、君は若い。考えるよりやってみることだ」と言われたのを思い出していた。

ーー社長、ずるい、聞いてないよぉ……。

やってみる前に考えるべきだった。

だが、あらかじめすべての情報を知らされていなかったので、考えても判断のしようがない。万三郎は英語が苦手で、その出発点が低いだけに、英語能力を高めるという社命を全うするとなると、相当ハードな勉強量になるし、そのストレスは並々ならぬものがあるだろう。それでも社長が、あの眼ヂカラで、「扉があるなら、とにかく開けてみればいい」などと言って、それで万三郎は扉を開けることを決意したのだ。

決意した以上、もうやるしかない。それはいい。だが、万三郎にしてみれば、自分の「ミドリムシ並みの」英語能力が、自分のまったく知らない人たちにまで逐一把握されるということは、かなりの苦痛だった。それでつい、弱音か愚痴に聞こえるセリフを口にしてしまったのだ。

新渡戸が何か言おうと口を開きかけたところに、後ろから女の鋭い声が飛んだ。

「その程度のことをプレッシャーに感じるレベルの男なのね、あなたは。ハッ！　なんでこんな男たちがＥＴなのかしら」

十一

　カッチーン！

　万三郎がその場で立ち上がった。

　杏児も三たび立ち上がった。

　女も立ち上がった。

　万三郎が振り向いて反攻の口火を切る。

「プレッシャーになりますねって言っただけだ！　だから嫌だとかは言ってないじゃないか！」

「嫌だと思ってなけりゃ、そんなセリフ、出てこないのよ！　人さまに自分がいかに不出来なのか見られるのが怖いの？　自分の恥ずかしい姿をさらしたことのない甘ちゃんだから、打たれ弱いのよ、はあー頼りない」

「じゃあ、そういう君は、甘ちゃんじゃあないってことか。人に恥ずかしい姿をさらしたことがあるってことか」

　それを聞くと、女は眼鏡の縁に手をやってうつむき、すこしくぐもった声で答えた。

「昨日……見たでしょ」

　万三郎は一瞬ひるんだが、攻撃の手を緩めなかった。

「じ、じゃあ、鼻に割り箸刺して、どじょう掬いを踊ったら、甘ちゃんじゃあないってのか！」

　万三郎のそのセリフに、新渡戸部長とほうぶん先生が驚いて顔を見合わせる。

「なんだって、福沢くんが、何を踊ったって？」

　女は部長たちに構わず万三郎に反論する。

「違う。私はもっと、もっと恥ずかしい姿をさらしたことがある。死にたいと思うほどのね。だからなおさら思う。あなたたちみたいな甘ちゃんが、どうして、みんなの期待をしょって立つＥＴなんだろうって」

　二日酔いの女の目は、眼鏡の向こうで、くまができ、充血し、うるみ、見るも耐えられぬ様相を呈していた。だが、彼女が必死に何か感情をぶつけてきているのをありありと感じて、万三郎は思わず言い返す言葉を失い、口を閉ざしてしまった。

　そこへつっかかっていったのが杏児だ。

「おいっ！　『あなたたちみたいな甘ちゃん』って、なんで僕まで巻き添えにして言うんだ！」

　女はキッと杏児の方に向き直って直ちに攻撃を開始する。

「あなたも同じようなもんよ。見るからに頼りなくて、不甲斐なくて、意気地がなくて、勇気もなくて……。ひょっとしたら、男として大事なタマタマもついてないんじゃないの？　ええ？　三浦杏児。何とか言ってみなさいよ」

　万三郎は女の横顔をぽかんと口を開けて見ていた。

　ーーこの女、どうして初対面、いや、会って二日目の人間に、ここまで攻撃的になれるのだろうか。

　言われた杏児は怒りのあまり、言葉を失っている。

　が、突然彼は、何かにひらめいたかのように目を見開き、眉を下げ、女の目を無心に見つめながら、自分の股間に手を触れた。そして、股間をわさわさといじった。

　女は彼の行動に当惑して、思わず目をそらせる。

「な、何やってんのよ、なにも今、確認することないでしょ」

　杏児は最初、つぶやくように、そして次に、目の前の雲が晴れたかのように、嬉しそうに喜びを声に出した。

「そうか……そうか！　それでマンズフィールドがキレたのか！　タマタマがないんだ。ノー・ボールズだ！」（4）

十二

　三人は新渡戸から座るように命じられた。

　髪ビシどじょう女は、社内外・勤務時間内外にかかわらず、ＥＴとして好ましくない行動はとらぬようにとの注意を受けた。万三郎は、輝かしいＥＴの社命をいったん受け入れた以上は、どんなハードなプレッシャーや負荷にも耐えてもらわねば困ると言われた。そして杏児は、カメラの前でやみくもに股間をいじらぬようにと言われた。

「ようし、それではオリエンテーションだ」

　自己紹介あたりから始まった三人のいがみ合いで思わぬ時間を無為に過ごしてしまったほうぶん先生だったが、それでも彼は笑顔を失わない。

「まずは、チーム結成式だな。この三人でＥＴの一チームとなる。三人はチームメイトでござる」

「はあ……。チーム、ですか……」

　万三郎と杏児は、まだチーム形成の意図がよく飲みこめないまま生返事をした。女は、気分がすぐれないのか、終始顔をうつむき加減で、眼鏡の向こうで不機嫌な顔をしている。

　先生は言う。

「チームのルールがござる。その一つを伝えおく。チームメイトをファースト・ネーム、つまり、苗字でなく、下の名前で呼ぶようにしなされ」

「は？」

　怪訝な顔の杏児に、先生は言葉を継いだ。

「チームの結束を強めるためでござる。ほれ、まず手始めに『私のこと、〇〇って呼んでね』と英語で相手に言ってみなされ。三浦どの、おぬしなら、『コール・ミー、アンジ』ってな具合だ。ほれ、まず福沢くんの目を見て、相手を受け入れようと、微笑みをたたえながら言うのでござる。はいっ、いち、に、さん。『コール・ミー・アンジ』」

　杏児は顔をしかめてかぶりを振る。

「い……言えません」

「フ……」

　女が嘲笑めいた短いため息を吐いて脇を向いた。

　新渡戸が胸ポケットから小さなメモ帳を取り出して、文言をゆっくり口ずさみながら、ペンを走らせる。

「三浦杏児、業務命令違反……と」

「分かりましたよ！　コール・ミー・アンジ」

「ダメでござる。目に笑顔がござらぬ」

「く……」

十三

　杏児は唇を噛んだが、気を取り直して女を見つめ、口角の筋肉と眉間の筋肉の、顔面における見事なせめぎあいを披露しつつ、言えと言われた言葉を繰り返した。

「コ、コール・ミー……ア、ア、」

　その時、わざわざ顎を上げて顔に角度をつけ、上から見下ろすような視線を杏児に向けていた髪ビシどじょう女が、杏児を遮るかのように口を開いたのだった。

「オウケイ、アンジ。デン、ユー・キャン・コール・ミー・ユキ」

　万三郎は驚いた。

　髪ビシどじょう女、いや福沢由紀の英語は、ネイティヴ発音からは程遠いが、自分や杏児よりは、よほど脈がある発音に聞こえた。ただ、純然たる日本語発音の「ゼン」ではなく、歯と歯の間にかたきのように舌を挟んで、「デン」と発音するのがとても鼻についた。が、

　ーー俺たちより、できる！

　ともかくも万三郎はそう思った。それは他の二人にとっても同じ印象だったようだ。ユキは勝ち誇って、どや顔を眼鏡の奥でつくり、一方の杏児はひきつって泣きそうな笑顔のまま語尾を濁らせた。

「ナ、ナイス、ツー、ミーチュウ、ユキ……」

　次に万三郎も、「コール・ミー・マンザブロー」と自己紹介し、その超日本語発音を聞いたユキは、一瞬目を閉じて「ハア」と、音の出ないため息を吐く。同い年と思われる女が、よくもこれだけ人の感情を逆なでする態度がとれたものだと、万三郎は舌を巻く。

「アイム、ユキ・フクザワ。カーミー、ユキ」

　ーーくそ、俺との発音の違いをわざわざ強調して言ってくる。さっき杏児に言った時は、そんな粋がった言い方じゃなくて、普通に「コール、ミー、ユキ」だったじゃないか！

「オ……オウケイ、ユキ」

　万三郎は下を向いてそう答えた。この女、今きっと、眼鏡の奥でどや顔で笑っているに違いないと思うと悔しくて顔を上げ得なかった。

　出入り口近くに立っている新渡戸が咳払いをして言う。

「それではチーム名を発表する。福沢くん、中浜くん、三浦くんの三人のチーム名は、『チーム・ミドリムシーズ』だ」

「嫌！」

「嫌だ」

「嫌です」

十四

　初めて三人の意見が合った。万三郎が新渡戸に確認する。

「あの……、古都田社長は昨日、『みどり組』にしなさいと」

「あ、そうだったかね？」

　ユキがまた立ち上がって言う。

「私、みどり組も、ぜったい嫌です！」

　もう反射のように、杏児も立ち上がって言った。

「僕も嫌です。もっと洗練されたチーム名がいい」

「ふん、杏児とやら、あなたが洗練されないと名前負けするわよ」

「な……なんだって！　このアマァ！」

「私の名前はアマではありません、ユキです。一分前に教えたことを忘れるなんて、相当頭悪いわねー。私がいなければ、ミドリムシーズがふさわしいチーム名ね」

　万三郎も立ち上がる。

「ちょっと、ユキ！　なんで俺も巻き込むんだよ！」

「まあまあ三人とも」

　ほうぶん先生が苦笑しながら両手をひらひらさせて、三人を宥めた。

　ユキが新渡戸部長に訴える。

「普通、チーム名なんて自分たちで決めさせてもらえるものではないのですか」

新渡戸はユキを見て、それからほうぶん先生を見る。

「三人仲良く協力し合い、知恵を出し合って、良いチーム名が決まるのであれば……」

ほうぶん先生がそう言って頷いたのを見て、新渡戸は答えた。

「よし、まあいいだろう。では十分間、時間を与える。ほうぶん先生と私はこれから能力開発課に行って、君らを教える他の先生方を呼んでくる。その間に自分たちで話し合って決めなさい。三人の最初の共同作業だ。相手の意見を尊重し合い、仲良く決めなさい」

そうして、新渡戸部長とほうぶん先生はガタガタとやっとこさ扉を開け、連れだって出て行った。

十分経って二人が再び扉を開けたとき、研修室はしんと静まり返っていた。

新渡戸もほうぶん先生も、教室に入るなり「おっ！」と驚きを口にした。割れたチョークが散乱していたのを踏みつけたのだろう。

そう、ユキの机の上にはトートバッグが立てた状態で置かれ、その表面の数か所にチョークが直撃した跡がある。そして当のユキは、椅子ごと新渡戸たちとは反対を向いて座っていて、背中しか見えていない。

ユキとチョーク戦を闘った杏児は、机に両肘をついてあごを乗せ、正面上方の時計を不機嫌そうにじっと睨んでいた。肩で息をしている。

杏児が睨む時計の下の黒板には、白いチョークで「みどり組」と書かれた、その四文字全体が大きくバッテンで消され、その下に、チーム名の候補だった名前が三つ並んで書かれていた。

万三郎だけが新渡戸たちを振り返り、両手を上に向けて肩をすくめた。

「あの……やっぱり、みどり組でお願いします」

新渡戸はフッと笑って三人に言った。

「よろしい。諸君は今から、みどり組だ」

十五

”Hi, guys! How’s it going? I’m Wazuki, Wazuki Kai.”

　日焼けした小麦色の肌。番手の大きい、粗い綿の、ゴワゴワしたワンピース。しかも緑と赤基調の、大きなハイビスカス柄のノースリーブ。そして紫外線のせいか艶（つや）のない、束ねていない長い黒髪。バカンス的ムードあふれる、三十代半ばとおぼしきこの女性講師は、昭和の小学校の「木製教室」に見事にマッチしなかった。目尻に小じわを作りながら、甲斐和月（かい わづき）先生は軽快な英語に続いて、日本語でも流暢に自己紹介した。

「口語英語表現を担当する、甲斐和月よ。趣味はダンスとテニスとゴルフとスノボとスキューバと、ジムで汗を流すこと。ショッピングと海外旅行、ドライブも好きよ。好きな食べ物はシュラスコ。お酒は焼酎からコニャックまで何でも。今ハマっているのは、信玄亡き後の武田勝頼の領地マネジメント戦略の研究、それからバナナムシの飼育かしら」

　万三郎にしてみれば、この派手な人がＫＣＪの講師とは、にわかに信じられなかったが、ラジオのＤＪのような軽快なトークと、英語のカッコイイ発音は、こちらもテンションが上がる。だが、いったいこの人は、森羅万象を深く考えているのか、表面的で刹那的な快楽指向の生きざまなのか、人物像がよく分からない。

”Now everyone, let’s get started learning spoken English with me!”

　彼女はそう言うと、まるでプロのＤＪよろしく、自分に許された時間の尺をギリギリまで使い切って、これからＣＭに入るかのように、隣の中年男性講師に順番をバトンタッチして、教壇の向こうの方に退いた。

　次に登壇してきたのは、口髭を蓄えた、おそらく五十代くらいの男性講師だ。彼は、別に足が不自由でもないのに、ステッキを片手に教卓まで進むと、教卓の縁にステッキの柄をひっかけた。大正か昭和初期を思わせるレトロな三つ揃えのスーツで、ウエストコートのポケットから懐中時計のチェーンが覗いている。

　彼は、かぶっていたハットを教卓の上にパサリと置いて、権威主義的な咳払いをしてから、自己紹介した。

「ゴホン、えー私はもっぱら、文語英語を担当分野として教壇に立っておる、片井文五郎（かたい ぶんごろう）と申す

者です」

　そこまで言うと片井先生は、黒板に向き直り、受け皿から、今しがた弾丸として使われて残り少ないチョークを一本探し当て、『みどり組』やら何やら、万三郎が書き残したチーム名候補を避けるようにして、大き目の字で板書し始めた。無言の中、カッカッと黒板の音が威圧的に響く。途中、力が入りすぎるのか、二回チョークが折れた。

十六

”The style is the man.”（5）

　教室の入口脇に、新渡戸部長たちと並んで立っていたほうぶん先生が感心したように、小さな声でつぶやく。

「うむ。『文は人なり』。ビュフォンか」

　おそらく、万三郎たち若いＥＴに説明する意図があっての独り言だろう。

　書き終えた片井先生は、チョークを置いて、また咳払いしながらこちらに向き直ると、胸元のポケットから「ハンケチ」を出して、そう汚れてもいないと思われる、「白く汚れた」指をぬぐった。

「オホン。文語英語とは、所謂（いわゆる）、文字に書かれたところの英語を意味すると解釈して概ね差し支えなかろうと存ずる。文語英語は格式ばっておって、小難しい印象がなかなかもって拭いきれぬ、という輩が少なからず跋扈（ばっこ）する近年の傾向にあって、私は声を大にして真っ向からその傾向に異を唱えたい。文語英語とは、親しみやすく、平易なるものである」

　一一超、親しみにくい。

　口には出さないが、そう思ったのは万三郎だけではあるまい。ただでさえ苦手な英語だが、この先生の文語的な説明で文語英語を学習するのは苦行に近いと万三郎は予想した。

　すると、片井先生の口調は意外にもがらりと変わったのだ。

「……つうかさ、まあぶっちゃけ文語英語とか、激ムズでだりぃっちゅうイメージはそんな当たってなくねー？　ってこと言いたい、みたいな」

　そう言いながら片井先生は、ポケットから懐中時計を取り出してちらりと見た。

「まあ、おまいらもさ、ＴＰＯに応じた使い方ゲットしてけば、全然だいじょうぶっしょ。一年もすりゃ、まじイケてて、きっとヤバいって。まあ時間来たし、ばっくれるけど」

　片井先生は懐中時計をしまい、ハットをかぶり、ステッキを持つと、思い出したように言った。

「あ、自分で言うのちょっとイタいけど、自分のこと、『文ちゃん』って呼んでくれたらまじ嬉しいかも。ぢゃあ」

　軽くハットを持ち上げて挨拶すると、片井文五郎先生、いや文ちゃん先生は、教壇の向こうの方に下がった。

　ほうぶん先生が、顔を赤らめて三人のＥＴに言う。

「実は、それがしは文ちゃん先生を心からリスペクトしてござる」

　すると文ちゃん先生は、「コクられてるって、まじで？　やばくね？」と照れたように言って、それから「いやいや、私なぞ、およそ尊敬に値する人物ではないので、追従はご無用に願いたい」と目の前で軽く手を振って、言葉とはうらはらに、嬉しそうにはにかんだ。

「ご謙遜を。文ちゃん先生の、人文科学、社会科学、自然科学全般における膨大な知識と高いご見識は、とてもとても、われらの及ぶところではござらぬ」

「いやはや、なんとも面映ゆい気持ちですな」

　文ちゃん先生はハットを取ると頭を掻いた。

　――とんでもない堅物かと思ったけど、なんだか、純情で可愛い先生じゃないか。

　万三郎は少し安心する。

　一方で杏児は苦笑している。その理由はおおよそ分かるような気がする。おっさんがおっさんにあこがれるのは、勝手だけど、傍から見るとちょっと気持ち悪いということだろう。

　ユキはといえば、微笑むでもなく、しかめ面をするでもなく、背筋を伸ばして淡々と文ちゃん先生とほうぶん先生のやりとりを聞いている。さっきチョークバトルをしたことで少し上気したのか、朝いちばんに比べれば目の下のクマが目立たなくなってきたようだった。

十七

　能力開発課の課長で文法担当の、ほうぶん先生こと倉間法文（のりふみ）先生。口語英語担当の甲斐和月先生。文語英語担当の、文ちゃん先生こと片井文吾郎先生。そして、新渡戸部長が連れてきた講師の最後の一人が教卓の前に立った。

　それは、歳の頃三十あたりだろうと思われる、髪を後ろで束ねて、ほっそりとした端正な顔立ちの女性だ。メイクは濃くなく、口紅もナチュラル、黒のパンツスーツに白いブラウス、光り物は一切身につけていない。まったく目立つポイントのない、シンプルないでたちだ。

「わたくし、ビジネス英語を担当します、戸井久美子（といくみこ）と申します」

　そう言うとこの女性講師は、教卓から一歩横にずれて、両手のひらを臍の辺りに重ねて、背中をピンと伸ばしたまま腰から四十五度に折れるお辞儀をした。

「主に英語でオフィスコミュニケーションがとられる職場ならびにビジネスシーンに役立つ英語を、わたくしと一緒に学びましょう」

　戸井久美子先生は、もう一度お辞儀をすると、教壇上に直立した。

　無言の時間が流れた。

　それが不自然なほどの長さになったので、たまらず新渡戸部長が彼女に呼びかける。

「久美子先生……？」

　先生はハッとして部長の方を見た。

「あ、新渡戸部長、すみませんでした。人数を、数えておりました」

「は……はあ？」

　少し当惑する新渡戸部長を尻目に、下の名前で呼ばれた戸井久美子先生は、黒板の方に向き直るとチョークを手にとって、杏児の机の前辺りの黒板に、「１」と書き、万三郎とユキの机の列の前の黒板に、「２」と書いて、次に「１」をゆっくり丸で囲み、さらに「２」をゆっくり丸で

囲んだ。（6）

　その不可解な行動を見届けて、新渡戸が再び久美子先生に声をかけた。

「なにか、もう少し自己紹介を……」

「そうですか。はい部長、分かりました」

　先生は三人のＥＴの顔を代わる代わる見ながら、澄んだ、あまり抑揚のない声で自己紹介を始めた。

「趣味は大学めぐりと、蛍光ペンで顔写真のふちに直線を引くこと。特技は足音を立てずに歩くこと。好きな時刻は十五時もしくは十五時一分。好きな人物はグプタ社長。嫌いなものは、床に寝かされていない傘。携帯電話の電源は常にオフにしているのでつながりません。悩みは木曜日に取った歯医者の予約が必ず変更になることです」（7）

十八

　教室入口に立っている新渡戸部長は、向こうの隅に固まっていた二人の講師も、中央の戸井久美子先生の方に寄るように言い、さらにほうぶん先生にも再登壇するように言った。

「ＥＴ諸君、左から、倉間ほうぶん先生、戸井久美子先生、片井文吾郎先生、甲斐和月先生だ。この四人のプロフェッショナル講師陣が、君たちみどり組の英語学習プログラムを支える。改めて挨拶を」

「はい」

　万三郎、杏児、ユキがその場で起立し、講師たちに礼をする。ほうぶん先生が笑顔で言った。

「明日からはいよいよ学習に入るわけでござる」

　新渡戸が後を継いで説明する。

「いいか、みどり組の諸君、よく聞いてくれ。プログラム全期間を通して、諸君は語彙力（ごいりょく）の強化に努めてもらう。早い話、英単語を覚えろということだ。わがＫＣＪのワーズ社員達のことを、一人でも多く学んでくれ。ワーズたちを君たちと引き合わせる役目を、私、新渡戸が担当する」

　新渡戸は話を続けながら、ほうぶん先生の方に目を向けた。

「その上で、プログラム一年目は主に、英文法のやり直しをやってもらう。全員必須の科目として、ほうぶん先生の英文法のレッスンを受けなさい」

　三人は頷く。

　ＫＣＪにおける英文法は、シークウェンス・トレインの編成技術に直結していることを、少なくとも万三郎と杏児は体験的に理解していた。もうあのような嫌な体験はしたくないと二人とも思っている。

「その上で、一年目は、口語英語のレッスンを福沢くんに、文語英語のレッスンを三浦くんに、ビジネス英語のレッスンを中浜くんに、それぞれ受講してもらう。分かったかね」

万三郎が訊く。

「それらは三人が別々にレッスンを受けるのですか」

新渡戸が頷く。

「それぞれ得意分野を持つことで三人協力したときにより広い範囲をカバーしようということだ」

口語英語担当の甲斐先生はユキににっこり笑いかけた。

”Take it easy, Yuki.”

ユキも笑って再度お辞儀をする。

「甲斐先生、よろしくお願いします」

文語英語担当の文ちゃん先生も、杏児に向けてハットを持ち上げて言った。

”I admire people who dare to take the language, English, and understand it and understand the melody.”（8）

文ちゃん先生は、大変きれいな英語の発音だった。きょとんとしている杏児に、新渡戸が翻訳してやる。

「『英語という言語に思い切って取り組み、英語とその旋律を理解する人たちを、私はすばらしいと思う』マヤ・アンジェロウという、有名なアメリカ人女性作家の言葉だ」

ビジネス英語担当の戸井先生は、ほとんど無表情で万三郎に言った。

”Now, part one will begin.”（9）

◆◆◆

（1）“How to Win Friends and Influence People”　Dale Carnegie”　邦題『人を動かす』　1937

年発売。著者のデール・ブレッケンリッジ・カーネギーはアメリカ合衆国の実業家、作家、ビジネスセミナー講師。本書ならびに『道は開ける』などの自己啓発書は二千万部以上の売上を記録した。

（２）”Your smile is a messenger of your good will. Your smile brightens the lives of all who see it. To someone who has seen a dozen people frown, scowl or turn their faces away, your smile is like the sun breaking through the clouds. ”　出典：”How to Win Friends and Influence People,” Dale Carnegie 1937

（３）「笑顔は好意のメッセンジャーだ……あなたの笑顔は雲の中からあらわれた太陽のように見えるものだ」……『新装版　人を動かす』Ｄ．カーネギー著　山口博訳　創元社より。

（４）「そうか……そうか！　タマタマがないんだ。ノー・ボールズだ！」
第二章で三浦杏児は、山本捕手をして打者ベン・マンズフィールドに、「まだワンストライクじゃないか」と、なだめる趣旨のセリフを言わせようとして、混乱のあまり誤って、"You don't have balls.”（お前にはballs（睾丸）がない＝意気地なし）と翻訳して、結果的にマンズフィールドの怒りに油を注いでしまったことに、この時気づいた。

（５）　”The style is the man.”　「文は人なり」と訳される。文章は筆者の思想や人柄が表されており、文章を見れば書き手の人となりが判断できる、という意味。フランスの博物学者ビュフォンが、一七五三年、アカデミー・フランセーズの入会演説で言った言葉。

（６）主要なビジネス英語検定である、ＴＯＥＩＣ Listening & Readingテストをこよなく愛する戸井久美子先生のキャラクターとなっている。いわゆる「ＴＯＥＩＣテストあるある」で、試験会場内の受験者数と回収した問題冊子（テストブック）および解答用紙の数を照合する、定型化されたやり方。
なお、ＴＯＥＩＣListening & Readingテストは、ＥＴＳ（Educational Testing Services）の登録商標です。

（７）「趣味は大学めぐりと……変更になることです」……これもいわゆる、「ＴＯＥＩＣテストあるある」。

（８）マヤ・アンジェロウ Maya Angelou （一九二八～二〇一四）アメリカを代表する黒人女性詩人、作家。黒人公民権運動で積極的に活動した人権運動家でもある。二〇一四年死去。

（９）”Now, part one will begin.”
「では、パート１を始めます」　ＴＯＥＩＣテストの、リスニング・コンプリヘンションテスト

が始まる直前の男声ナレーション文言。ディレクションズ（事前説明）が終わり、この文言が放送されると、受験者は非常な集中力を求められる。

第五章 仲間（1）

一

ピーナッツが止まらない。

カフェバー・ティートータラーのカウンター席。万三郎とユキに挟まれて真ん中に座っていた杏児のハイボールの氷が、カランと小さく音を立てたのに、マスター・ジロー白洲田だけはさすが、気づいてくれた。

万三郎もユキも、カウンターを挟んでマスターやマサヨとおしゃべりに夢中だ。杏児ももちろん、ときおり会話に加わるのだが、アルコールが気持ちよく回ってくるにつれ、会話に比べて思索の割合が少しずつ増えてきている。咀嚼で顎を動かした方が大脳に刺激が行って頭が冴えるものなのか、それはよく分からないが、杏児は知らず知らずのうちに、ピーナッツを一粒ずつ、あまり間を置くことなく口に放り込んでいた。

杏児のハイボールとピーナッツ皿の両方のお代わりを用意しながら、マスターは万三郎の話にふんふんと頷き、マサヨやユキと笑いを共にした。

昨夜とはうって変わって、和やかな空気が店内を包んでいる。マスターの取りなしのおかげもあって、一時間ほど前に、杏児と万三郎は、「ユキ」こと福沢由紀とようやく和解したからである。

終業と同時にユキが、「チームの結成祝いに、昨日の店に行くわよ」と、半ば強引に杏児と万三郎を誘ってきた時は、対立が先鋭化した今日の研修に続いて、二回戦を挑んでくるのかと心の中で身構えたのだが、いざ、三人が並んでカウンター席につくと、注文したビールをマスターが置くより先に、ユキが二人に向かって頭を下げたのであった。

「今日は、ごめんなさい」

今まで高飛車に出られていたからこそ相応の対抗心も湧きあがってくるのだったが、いきなりこう下手に出られると、肩透かしを食って呆気にとられる。いや、これは何か策略でやっているのではないかと最初は警戒してみたものの、マスターがユキの前にビールとチャーム（おつまみ）を置きながら彼女をフォローするのを聞くと、普段の福沢由紀は、他人にいちゃもんをつけてくるような、扱いにくい人間ではないらしい。

「昨夜ほど荒れたユキちゃんは見たことなかった。よほど嫌なことがあったんだろうね。今日は

もう大丈夫かい？」

　ユキは頭を下げたまま、こくりと頷いた。

「中浜さん、三浦さん、昼間何があったか知らないけれど、ユキちゃんこうして頭、下げてるし、許してあげては？」

　マスターに言われるまでもなく、こうしおらしく謝られるのを無碍にすれば、こちらの方が悪者になってしまう。しかも昼間、険悪になった理由は、ユキのもの言いが上から目線だったというだけで、他には特にユキだけが非難に値する失態があったわけでもなかった。言うなれば、性格の相違が少々強い形で顕在化したに過ぎない。彼女自身もそう思っているかもしれない。それにも関わらず、今、ここで彼女は二人に頭を下げている。この事実をよく考えてみるべきだ。もし彼女が、杏児と万三郎が抱いた第一印象通り、勝ち気な性格なのなら、今、相当な屈辱感を必死で抑え込みつつ頭を下げているはずで、そうまでしても、関係改善を望む姿なのだと杏児には察しがついた。

　そう考えると、今日起こった些細ないさかいでお互い後味の悪い思いをしているのを放置せず、今日のうちに向き合って、酒の力も借りず、言い訳もせず、潔く謝ることのできるこの女性を、杏児は認めざるを得ない。

　――福沢由紀。この人は、自分で決断し、責任を取り、自分で解決できる人なんだ。

　頭を下げているユキを前に、杏児は黙って万三郎を振り返る。昼間、杏児ほど激しくユキと対立していたわけではない万三郎は、和解に何の異論があろうかと、眉を開いて両手のひらを上に向け、両肩をすくめて見せた。杏児は頷く。これ以上彼女と反目し合う理由はない。彼女はチームメイトなのである。優しい言葉の一つでもかけてやらなければ……。杏児は、まだ頭を垂れているユキに穏やかな口調で言葉を投げかけた。

「ユキ、顔を上げてよ。君が全部悪い訳じゃない。チームメイト、仲間として、あらためてよろしくね」

　ちょうどよいタイミングでビールが揃ったので、三人はお互いの目を見てジョッキを打ち付け合った。万三郎が言う。

「みどり組に、乾杯」

　初めてユキがニコリと笑った。

二

アルコールや食事は相当に対人関係の障壁を低くする。一時間前、ユキが最初に謝ってくれたことで、場は一気に和らいだ。今夜もマスターのハンバーグを食べながらビールを傾けて、三人は打ち解けて会話を交わした。

だが結局、人との関係が深まっていく過程は、共通の体験について感想を分かち合うことと、自分の個人情報を提供し、相手の個人情報を受け取る作業を丁寧に積み上げていくことに他ならない。

食事中は、マスターのハンバーグのおいしさの秘密や、お店のしつらえに対する感想など、共通の話題で話ができる。だが、食事を終えて、席が温まってくると、相手を知ろうといろいろと訊いてみたくなるのは当然だろう。しかし不思議なことに、マスターやマサヨを含め、誰もが人のプライベートにかかわる質問の口火を切らないのだ。

杏児は、自分たちと同じ新人ＥＴのユキが、昨夜の時点ですでにこの店の馴染み客だったのはなぜか、訊いてみようと口を開きかけたものの、結局、喉元まで出かかっていた質問を飲み込んだ。口さみしさから手にしたハイボールでそれを流し込み、さらにピーナッツを数粒口に入れて、ダメ押しのように質問を封じ込んだ。

どうもまだ、そういう質問をできる時機が来ていないようだと判断したからだ。どちらかというと空気が読めない人間だと自覚している自分にしては、よく抑えたと杏児は思った。

万三郎はといえば、グラスを持ったまま、昼間、第三研修室で起こったことをマスターとマサヨに饒舌に話して聞かせている。

「その、ワーズ・トークのゲストに【please】と【sorry】が連れだって入室してきた時には、俺は思わず固まっちゃったよ。包帯ぐるぐる巻き、松葉杖ついて、肩を貸し合いながら教壇の前に立つんだもん。で、【sorry】なんかさ、包帯で隠されてない方の片目でじーっと、俺たちのこと、うらめしそうに見るんだ。俺、思わずその場で起立して、【sorry】に『ごめんなさい』って謝ったよ」

マスターとマサヨは、カウンター越しにニコニコしながら黙って聴いている。

杏児の反対隣り、入り口に近い席に座っているユキは、頬杖をついて、話を聴きながら自分の

ロング・カクテルに軽く手を添え、グラスについた水滴を見つめるともなく見つめていた。彼女はその時、その現場にいたから、万三郎の話は知っている。

　万三郎はふいにマスターから目をそらして、杏児に向き直った。

「だけどさ、彼らワーズ社員はそう簡単に死なないらしいね。あれだけの大事故だったのに」

　杏児は、一口飲んでからグラスをテーブルに置き、万三郎を見返す。ハイボールを飲み込むのと、万三郎に頷くのと、手にピーナッツを数粒つかむのを同時に行った。さらに杏児は答える前にそのピーナッツを口に放り込み、ポリポリ噛み砕いた。

「うん。部長が僕にも後で耳打ちしてくれた。本当はもう傷は治ってたんだけど、僕らに当てつけるために、わざと包帯だらけで足引きずって登場したんだって。僕らＥＴに面と向かって文句は言えないから、ああやって罪悪感を煽ろうということらしい」

「そうそう。それ聞いてホッとしたよ。それまで俺たち、本当に落ち込んでたものなあ……」

　すると、ユキがにわかに顔を上げて、二人に言った。

「死なないまでも、怪我は確かにするし、痛いのは痛いらしいわよ。【please】も【sorry】もビッグ・ワードだから、エネルギー・レベルがもともと高くて、治癒力が高いってこと。部長がそう言ってた」

　ユキのコメントに杏児は一瞬、口を差し挟もうかと迷った。ビッグ・ワード？　エネルギー・レベル？　それと傷の治りと何の関係があるんだ？　だが、そう思っている間に万三郎が会話の流れを引き継いだ。

「でもねマスター、研修中に彼らもだんだん機嫌直して心を開いてくれてね、ワーズ・トークの時間の最後にはこう言ってくれたんです。『あのシートレに乗ってたみんなは痛い思いしたけど、中浜さんや三浦さんが立派なボスになってくれるならきっと、みんなこれからも我慢できる。立派なボスになってください』って。俺、嬉しかったなあ」

　まるで遠くの空を見つめるような目をして万三郎が上機嫌でそう言ったのがおかしかったらしく、マスターの横でグラスを拭いていたマサヨがクスリと笑った。

　杏児は、ユキが言った言葉への疑問をきっかけに、それまでピーナッツを噛み噛み巡らせていた思索を思い切って口に出してみようと決めた。

「うん、【sorry】が、僕たちの、申し訳ないという気持ちを他のワーズたちへ伝えるのに協力してくれるって。”We are sorry.”って」

　万三郎がすかさず同意する。

「そう、【please】も、”Please forgive us.”（僕らを許して）って伝えてくれるって。いい奴らだよなあ、二人とも」

　杏児は、飲み物でピーナッツを流し込んでおいて、少し声のトーンを変えて切り出した。

「だけどさ、さっきの話、僕、どうしてもわからないんだ。なんであいつら、死なないんだろう？　それどころかあいつら、状況によっては、シートレなしで飛ぶことさえできるとも聞いたんだけど……」

三

ユキが眉をひそめて反応した。

「そんなに死んでほしかったの？」

「いや、そういう訳じゃ……」

個人情報を訊いている訳じゃないのに、まだこうした話題を口にする時機になっていないのか、それとも人が死ぬの死なないのと、物騒な話題を単に嫌ってのことかわからず、杏児は少し慌てた。すると杏児の肩越しに万三郎が代わりに反論する。

「そうじゃなくてさー、ユキ」

振り返ると、万三郎はビールグラスを手にしたまま、もどかしそうにユキの方を見ている。酔っているのか？　杏児を挟んで二人の視線が交錯する。

今、ユキは眼鏡をかけていない。眼鏡をかけていたのは、どじょう掬いを踊った昨夜と、今朝、研修第一日目に遅刻してきた時だけだった。あれは、度の入っていない伊達メガネだったのか、あるいは今は、コンタクトレンズをつけているのか分からなかったが、ともかく眼鏡をかけていない今は、フレームなど遮るものがない分、ユキが眉をひそめたのがあからさまで、ついさっきまで上機嫌だった万三郎は、興をそがれて少し不機嫌になったように見えた。

場の空気が濁りそうになるのをマスターは機敏に察して、万三郎の気を一時そらせる。

「万三郎くん、ビールお代わりは？」

「あ、そうですね、じゃあもう一杯」

「ラガーで？」

「はい」

「マスター、私が注ぎます」

　隣に待機していたマサヨがそう申し出たので、マスターは任せることにする。

「ありがとう、マサヨたん」

　マサヨはマスターの方を向いてはにかんだ。

　今夜もすでに何度目かになる、マスターの「マサヨたん」に、相変わらず三人は、〇・五秒だけ凍りつく。だが今は、険悪になりかけていた空気がそれでリセットされたのである。今回に限っては、マスターはわざとマサヨたんと言い、マサヨさんはわざとマスターにそう言わせたのではないかとさえ思える、絶妙なやり取りであった。

　杏児は、せっかく修復してくれたデリケートな空気をできるだけ壊さないように気をつけながら、万三郎の発言を引き継いだ。

「万三郎もたぶん同じことを言いたいんだと思うけど、僕も不思議に思うことがあるんだ。大きく分けると三つある」

　すかさずマスターが反応する。

「出た、杏児くんの『スリー・ポインツ理論』」

　場が和むにつれて、マスターは万三郎のことを万三郎くん、僕のことを杏児くんと親しみを込めて呼ぶようになった。ユキの物言いの影響を受けたのかもしれないが、マスターは二回りはゆうに年上だと思われるから、その方が自然だった。

　僕は訊き返す。

「マスター、何それ？」

「いやあ、杏児くんがトイレに行っている時に万三郎くんから武勇伝を聞いたよ。なんでも、古都田社長に果敢に三つ質問をしたそうじゃない」

　僕はちらりと万三郎を見た。彼は平然と、手にしたジョッキのビールを飲み干していた。

　ユキが訊く。

「杏ちゃん、いつも三つ挙げるの？　二つしか思いつかないこととか、四つ思いつくことってな

いの？』

　ーー杏ちゃん……か。

　ユキなりに親しみを込めているのだろう、僕をそう呼ぶようになってまだ一時間。嫌ではないが、少々照れてしまう。僕は目の前にあったピーナッツに手を伸ばしながら答える。

「うーん。たぶん、たくさんある何かのうち、三つだけピックアップしてるんだ」

「じゃあ、大きく分けて三つじゃないのね」

「まあ、カタいこと言わないで」

　お代わりのビールが目の前に置かれるのを見ながら万三郎が言った。

「俺も疑問がたくさんあるんだ。だけど、まず杏児のその三つ、聞かせてよ」

　僕はピーナッツを一つずつつまんで口に入れながら答えた。

「一つ目。なぜ彼らは不死身なのか」

　ポリポリ。

「二つ目。なぜシートレは空を飛ぶのか」

　ポリポリ。

「三つ目。うっ！　ごほっ……ふんがっふっふっ」

四

口を押えるのが間に合ってよかった。杏児はピーナッツをマサヨめがけて吹き飛ばすところだった。咳き込む杏児を目の当たりに、マサヨが慌てる。

「杏児さん、大丈夫ですか！」

杏児は頷きながらハイボールを飲み干して、ピーナッツの粉末を胃に流し込んだ。

「ごほっ」

大事ないと認めて万三郎が苦笑する。

「一つ言っては｜間《ま》を取って、もったいぶるからだよ」

杏児が落ち着くのを待って、ユキが真剣なまなざしで訊いてきた。

「で、スリー・ポインツの三つ目は？」

杏児はユキを見て、それから万三郎に向き直ってゆっくりと言いきった。

「三つ目は、君たちは本当に存在しているのか」

「はあー？」

万三郎がおかしな声を上げる。杏児はあらためて皆を見回した。

「万三郎、ユキ、マスター、マサヨさん。皆さんは本当に存在しているの？　ひょっとして僕は今、夢を見ていて、君たちは僕の夢の中の登場人物なんじゃないのかと、結論としてそう思うわけだよ」

マスターがニコニコと笑いながら言う。

「杏児くんは、ピーナッツにむせる、リアルな夢を見られるんだ」

　万三郎とマサヨは笑ったが、ユキは笑わなかった。杏児は食い下がる。

「逆説的に言うと、夢でもない限り、あんなジェットコースターみたいな列車は空を飛ばないし、飛んであんな衝突事故起こせば、ワーズたちが皆無事であるはずがない」

　万三郎は腕組みをして言った。

「うーん。杏児、実は俺も同じこと考えてた。これは全部、夢なんじゃないかって」

　ユキが当惑したような低い声で、杏児越しに万三郎に尋ねる。

「夢なら全部、つじつまが合う？」

　万三郎は苦笑を浮かべて首を振りつつ、ユキに答え、杏児に言った。

「いや、ユキ、つじつまは合わない。なあ杏児、俺は実在してるぜ？　君こそ、俺の夢の産物なんじゃないのか」

　ーーそう！　そうなんだよなあ……。

　今度は杏児が腕組みをする。頬に力を入れて、唇を一瞬、一文字に結ぶ。

「うーん、そこが一番の矛盾点。夢にしてはリアル過ぎるんだ。ちょっとごめん」

　杏児はそう言うと、手を伸ばして万三郎の頬をつねってみた。

「痛てて！　杏児何するんだよ」

　万三郎は杏児に食って掛かる。やっぱり彼は痛がっている。こんなによくできた夢って、あるか？　杏児はカウンターに両ひじをついて頭を抱えた。

「ああ、やっぱり夢じゃない気がする。混乱してきた。うう、またアタマ痛くなってきた」

「何言ってんだ、アタマ痛くなるってこっちのセリフだよ。あー、俺もなんだか急にムカムカしてきた」

　万三郎はそう言ってビールをグイッとあおってから立ち上がった。

「気分悪い。ちょっと、トイレ」

「万三郎くんも、杏児くんも、大丈夫かい」

　よろよろとトイレに向かう万三郎と、カウンターに両ひじをついて頭を抱える杏児に、マスターが心配して声をかける。

「二人とも、悪酔いしかかってるんじゃないの？」

　昨日とは違って、コントロールしながら上手に飲んでいるユキが、わずかに批判的な声色でそう言ってくる。

　杏児は頭を抱えたままつぶやいた。

「まただ……」

　マサヨが「何が？」と訊き返してきたのと時を同じくして、ズキズキと脈動する痛みのピークが脳を襲う。杏児は、耐えるのに精いっぱいで答えることができない。

　ひどい痛みが多少和らぐと、杏児はようやく顔を上げてマサヨとマスターに訴えた。
「シートレの事故は、夢なんじゃないかって考えるたびに、急に頭痛が襲ってくるんだ。毎回だ」

「杏児くん、研修が始まって緊張している上に、連日飲んでるからってこと、ない？」

　マスターの問いに、杏児は首を傾げる。

「うーん、それが頭痛の理由じゃないような気がするんだ」

　少しの間、無言で目の前のグラスを見つめて、次のピークが来ないか警戒していたが、やがて杏児は顔を上げて、マスターに自分の意見を説明し始めた。

「夢ってさ、自分の中の無意識が見させているものだって僕は思っていた。もしそうなら、自分の夢には、自分が記憶している知識や経験をベースにした物事が起こってきそうなもんでしょ？
　それなのに、ＫＣＪに入ってこのかた、出会った人はみな初対面。それに、頭痛とかピーナッツが喉に詰まったりとか、不快なことも含めて、起こってくることはみな、僕が過去に経験し

なかったことや、まったく予想しないことばかり。マスター、これを夢と結論づけるべきか否か、どう思う？」

　第二波が来た。

　杏児は、顔をしかめてこめかみを押さえる。

「マサヨさん、すみませんが、水を……」

　マサヨが即座に水を目の前に置いてくれる。頭痛を思いやって、あえて冷水ではなかった。杏児は、無理やりニッコリしてマサヨに礼を言うと、水を飲んで、ともすれば吐き気に発展しそうな痛みをやりすごす。

　痛みが落ち着くと、杏児は再びマスターに顔を向けた。

「例えば今、僕がこう予想する。『間もなくこのお店に、三人のお客さんが初めて来店する。とてもフレンドリーで良い人たちだ』。マスターには失礼かもしれないけど、これまで僕らの来店中に、ほかのお客さんが来たなんてことはなかった。だから僕はそんな予想、これまでにしたことがなかった。マスター。そんな中でさ、もし、僕の予想通り、都合よくお客さんが来店したら、それこそ僕の夢っぽいと思わない？　三人の一見（いちげん）客が来店して、その人たちがすごくいい感じの人なら、やっぱり、この世界は夢。僕の無意識が創り出した幻想に過ぎない。反対に、もし誰も来なかったら、僕の都合で物事は進んでいない。だから現実」

　マスターは苦笑いした。

「私としては、どちらを願いましょうかね。杏児くんの夢の中で商売繁盛するか、お客の来ない現実を思い知るか」

　その時、ドアベルがカランカランと鳴って、入口のドアが開いた。

「いらっしゃいませ」

　マサヨが声をかけながら入口に歩み寄って行く。杏児は思わず目を丸くしてマスターと顔を見合わせた。

五

店の外で待つ客に、マサヨが外まで出て応対する。会話が漏れ聞こえてくる。

「あのー、ＫＣＪ提携店のステッカーが貼ってあったんで……」

「はい、当店では、ＫＣＪさんの、ゴールド社章をお着けでしたら、ＫＣＪさんのツケでご飲食できます」

「そうですか。じゃあ三人、食事で入れますか」

「はい、大丈夫です。どうぞ」

マサヨは店内を振り返ってマスターに告げた。

「お三方さま、お食事で」

マスターは杏児と一瞬目交ぜをしてから、新しい三人の客を出迎える。

「いらっしゃいませ」

マサヨが開け放したドアから、男が店内に顔を出した。ユキは、失礼にならない程度にその男の挙動をそっと目で追う。

「マサヨたん、奥へ」

マスターの指示に頷いたマサヨは、男が店内に一歩足を踏み入れたところで後ろから声をかける。

「どうぞ、奥の四人掛けテーブルへ。上着、お預かりしましょうか」

「あ、いや結構」

マサヨの申し出に、店の奥へと歩きかけた若い男は、身をよじって半ば振り返る格好で手を挙げて断った。

身をよじったところがユキの目の前だった。ユキは小さく押し殺した声で「あッ」と言った。ユキのその声に、頭痛上がりの杏児は鈍く反応して、バーチェアに座ったままユキと並んで男に目を向ける。

杏児たちと同年代に見える、ライトグレーのスーツ姿の男は、がっしりとした体つきだ。自信ありげで積極的な印象を受けるのは、バーの控えめな照明の下でも分かる、健康的に日焼けした、ごつごつしてたくましい男性的な顔立ちだからかもしれない。

彼は、ユキが自分をじっと見ていることに気付き、いかにも自信家らしく、わずかに笑みをたたえてユキを見返した。ちなみにその間、隣にいる杏児には一度チラリと視線を投げただけで、その後は全く気にも留めていない。

そうして、二人の前を通り過ぎる時に、彼はユキにウインクをした。

――げっ！　まさかのウインク？

杏児は心でそう思っただけだったが、ユキは実際に小さく「げっ！」と声に出した。

ウインクで相手を悩殺する……こんな、漫画みたいな恥ずかしい勘違い男が実際にいるんだと杏児は驚いた。しかしユキは、隣りで見ていて滑稽に感じるほど当惑していた。視線の動きが安定していない。ひょっとしたら、理性とはうらはらに、不思議な胸の高鳴りを覚えている自分に気づき、そのことにうろたえているのかもしれない。

杏児とユキの視線を引きずりながら、男は悠然と店の奥の席へ向かっていった。

ユキはグラスをカウンターに置いて、両頬を手のひらで挟みながら、視線を男の後ろ姿から入口の方に戻した。そして再び大きく目を見張る。

ユキの視線を追って、杏児も同じく入り口へ向き直り、ユキ同様目を見張った。

先行の勘違い男に続いて、二人の若い女性が入店してきたのだったが、先に立つ小柄な女は、濃紺のスーツこそ着ているものの、どう見ても「ギャル」だった。髪は明るい茶髪の巻き毛で、つけまつ毛にこんもりとマスカラを盛っている。その上、目の周囲がシャドウベったりなので、目全体が黒目に見える。明度を落としているお店の照明の下では、彼女がどこを向いているのか杏児にはよく分からなかった。彼女はそのまま、二人の前を通り過ぎていく。

ユキは杏児だけに聞こえる程度の小さい声で「信じられない！」とつぶやいた。

六

すぐに、もう一人の女が杏児の視界に入った。この女も自分たちと同じくらいの年齢に見える。だが先行のギャル女とはすべての点で違っていた。

彼女は、文句なしの美人だった。

女性の着こなしには詳しくない杏児だったが、ごく淡いピンクのスーツは清楚な印象だったし、ラインも美しかった。ジャケットの下のアイボリーのブラウスは、首元にシルク地の大きめのリボンがあしらわれて、いかにも上品だ。上着と同色のスカートはタイトなものではなくて、ソフトなドレープが控えめながら華やかさを醸し出している。全体をもって、柔らかな春風を杏児はイメージした。

ただ、おおよそ職場に適した服装なのかと問われれば、明らかに問題が、三つ……いや、この人に限っては問題などないのだ。それが杏児が出した結論だった。それくらい品のよい女性らしさと優雅さを、この女は兼ね備えている。

同じ女性として、ユキはどう思うのだろう。

店の奥に向けて、流れるような所作で歩き始めた彼女は、カウンターの二人と目が合うと、初対面なのに柔らかく微笑んで、通り過ぎざまに二人に向けて顔をわずかに傾げていった。ユキはそのあまりの優雅さに思わず引き込まれたのか、口をぽかんと開けたまま、会釈を返していた。

何の香水か、かすかに春のような香りを残して彼女は四人掛けのテーブルの前に至った。

ユキはテーブルの方を向いたまま、杏児の肩を思わず小突いてきた。

「ちょっと杏ちゃん、あの人たち……」

「ああ。いい匂いがしたね」

かぐわしい香りが頭痛を幾分和らげさせたと思うのは気のせいか、ともかく杏児は声のトーンをわずかに上げてそう答えた。

「いや、それより……」

　ユキは依然視線を変えずに訴える。

「ユキ、あいつ、君にウインクして行ったね」

　杏児のその言葉に、ユキはほんの少しうろたえた様子で、ついに視線を杏児に移した。

「そんなことよりも、気付かなかったの？」

「何が」

　杏児は、再び視線を戻すユキに倣って奥のテーブルに目を向けた。ちょうど、自信家の男の向かいにギャルが着席したところだった。

　杏児はユキに囁く。

「僕の夢の産物なのか、それとも現実に起こっていることなのか、しばらく彼らを観察して判断しよう」

　ユキもチェアを杏児の方、つまり店の奥の方向へ回転させて、体を少し前に乗り出すようにして三人の男女を見つめたまま、杏児に訊く。

「さっきマサヨさんが言ったこと、聞いてなかったの？」

「へ？」

　その時、マサヨに見守られながら席につく三人のすぐそば、店の一番奥のトイレから万三郎が出て来たので、ユキも杏児も口をつぐんだ。

「おっと！」

　出て来たとたん、目の前に知らない女が横向きに立っていたので、万三郎は非常に驚いたようだ。この店にユキとマサヨさん以外の女性がいるのにも、その人がかなりの美人であることも、彼の目を見開かせる理由だったのだろう。

「あ、お待たせしました。どうぞ」

トイレ前の狭いスペースをすれ違おうと、万三郎は慌てて身体を横に向ける。

「は？」

小首を傾げる美女の肩越しに、先程のがっしりした体格の男と、その向かいにギャル女が座っているのに万三郎は気付いた。自信家の勘違い男は、万三郎を見て驚愕の表情をしている。

対する万三郎は男から目を逸らして、目の前の美女を見つめる。杏児には分かった。いま彼の鼻腔を、爽やかで甘い、上品な香りが｜通《かよ》っているはずだ。

「引いて、くださらない？」

女は真っ直ぐ万三郎を見つめて静かに言う。

「はい？」

万三郎は目をしばたたいた。トイレから出てきて、がらりと変わっていた周りの状況の全容をつかみかねたまま、至近距離で美しい女性から話しかけられて、当惑しているのか。

「椅子を、引いてくださらないこと？」

「は……い……」

万三郎の視線のすぐ下に、テーブルから引き出されていない椅子があった。座りたいからこれを引け、と彼女は言っているのだとようやく理解したようで、万三郎は「はい」と言って、自信家勘違い男の隣の椅子の背もたれを引いて、女が座れるようにしてやった。

彼女はかすかに頷き、いつくしむような視線を万三郎に残すと、引かれた椅子とテーブルの間に身体を入れて立った。彼女が腰を下ろすタイミングで、ホテルのレストランでウエイターがやるように、万三郎は椅子を前に押し出してやった。杏児の目には、女の所作が反射的に万三郎の行動を誘い出したように見えた。これは、見かけだけではなく、彼女が本物の上品さを身に着けていることの証拠に思える。

「ありがとう」

彼女は背筋をのばしたまま、ゆったりと腰を落ち着かせた。

「いえ」

万三郎はドギマギしつつ、引きつった笑顔を彼女に返す。

その時、目の前の自信家男が鋭い声で万三郎に呼びかけた。

「おい、お前！」

七

男はその言葉と共にその場でスッと立ち上がった。カウンターに座っている杏児の方向から見れば、シーソーに座る男女みたいに、美女が座るのと入れ違いに隣で立ち上がったように見えた。

自信家のがっしりした体格の男の、スーツを、その立ち上がった足元から徐々に上体へと見ていって、万三郎は驚愕の声を上げた。

「あっ！」

杏児はなぜ万三郎が驚いているのかは分からなかったが、何かよからぬ気配が辺りを支配し始めているのは感じていた。

男は、万三郎をまっすぐ見つつ、腕を上げて万三郎の胸を指さした。万三郎は、男の指さす先に従って、自分の胸元に目を向ける。

「えっ？」

そして万三郎は、男の胸元と自分の胸元を交互に見比べた。さらに見やすいように、自分のスーツの上着の襟を右手で裏地から起こしている。そうやって社章の場所を強調していたので、杏児は少し離れていたにもかかわらず、万三郎の社章の、鴨の目から赤い光の輝きがスーッと消えていったのが見えた。

光が完全に消えたのを見届けて、万三郎は顔を上げる。男だけではなく、ギャル風の女も、万三郎が椅子を引いてやった美女も、三人が万三郎の社章を身じろぎひとつせず見つめている。テーブル席周りの緊張がカウンターにいる杏児とユキにまで生々しく伝わってくる。杏児もユキも固唾を飲んで成り行きを見守っている。

テーブルの男が再び万三郎に向けて口をきいた。

「お前、ＥＴか」

万三郎は緊張した面持ちで頷く。そして、男の襟元に光る金の鴨を指さして言い返した。

「あんたも、か」

「そうだ」

　それを聞いた杏児は素っ頓狂な声を上げた。

「ええっ、あいつもＥＴ？」

　男は一瞬、杏児とユキの方を向く。

　ユキは男に目線を固定したまま杏児に言った。

「マサヨさんとのやり取りで彼らが金鴨の社章をつけているということだったし、ここを通る時、社章をこの目で確認したわ」

　自信家勘違い男は、ふと優しい顔をユキに向け、それから万三郎に向き直って、杏児とユキが座っているカウンター席にあごをしゃくった。

「あの二人も、お前の仲間か」

　万三郎も応じた。

「そうだ。こちらの二人も……」

「ああ、みんなＥＴだ」

　男はあからさまに警戒の色を隠さず、数秒間黙って万三郎を見つめた。張りつめた空気が周りを取り囲む。

「お食事のご注文はいかがいたしましょう？」

　まったく空気を読まず、いや、読み尽くしてあえてなのか、マサヨがいやに明るい営業スマイルでメニューを持って現れた。しかし、男は万三郎から目を逸らさない。必然的に万三郎も微動だにできない。椅子に座っている二人の女たちも一言も発せず、極度に緊張した場の空気を共有している。

　万三郎は表情を崩さず、男に言った。

「おすすめは、お手製ハンバーグ定食だ」

　男は三秒間の沈黙の後、万三郎から目をそらさず、明るい声で言った。

「ハンバーグ定食、ください」

　すかさず、二人の女の声が続いた。

「うちも」

「わたくしも」

八

マサヨが下がっていくと、男は万三郎を見つめたまま、美女の頭越しに悠然と手を伸ばし、握手を求めてきた。

「祖父谷義史（そふたに よしふみ）だ」

万三郎も、求めに応えて手を伸ばす。

「中浜万三郎だ」

ところが、その名前を聞いたとたん、男は素早く手をひっこめ、目を見張ったままガタガタと向こうの壁際まで後ずさりした。男の向かいに座っているギャル風の女も恐怖におののいてガタンと席を立ってのけぞった。顔をしかめ、慌てて万三郎から遠のいて、その出かたをうかがう。

「な……」

手を前に差し伸べたまま、万三郎は居心地のよくない静寂を持て余した。祖父谷と名乗った男がいまだ驚きの色を隠さずつぶやく。

「お、お前が、中浜万三郎か」

「あ、ああ、そうだが」

万三郎が怪訝な顔で同意すると、男は当惑した顔でカウンターの杏児に目をやった。

「すると、あの男が、三浦杏児……」

「そうだが、どうしてそんなに驚くんだ」

答える万三郎にギャル女が、

「マジでぇー？」

と、恐怖におびえたような声を上げていっそう身をのけぞらせる。

　祖父谷が警戒を解くことなく万三郎に言う。

「お前たち、ワーズ社員たちを二人でリンチにかけたらしいな」

「な、何だって！」

「チンステではワーズたちの間で大きな噂になっている。ＫＣＪを破壊しようとする悪党ＥＴたちがチンステを暴力で支配しようとしているって」

　――どうして、そんな誤解が？

　ぽかんと口を開けた万三郎の表情から声ならぬその質問を読み取ったか、祖父谷義史は、怒りを込めた目で万三郎を見ながら、非難を口にした。

「今日、【punch】と【elevator】が、俺たちの研修室に現れて、『ひでぇ目にあった』とこぼしていた。奴ら、包帯だらけだった。お前、なんで自分の会社の社員に暴力を振るう？　ＥＴの風上にも置けない不届き者だな、お前たちは」

「いや、待ってくれ、それは誤解だ」

　慌てて否定しようと手を振る万三郎に、祖父谷は言葉をかぶせる。

「おお、そうか誤解で、何十人ものワード社員たちがぶん殴られて、無理やり無茶苦茶な編成のシートレに乗せられて、上空で起爆ボタンを押されたのか、そうか誤解で、なあ」

　万三郎は声を失った。事実と虚構が入り混じっていて、どこを否定し、どこを認めるか迷ってしまったのだった。万三郎はただ、下唇を噛んで、祖父谷の非難に耐えなければならなかった。

九

壁にぴったり背中を付けて、万三郎と距離を取っていたギャル風の女が、ただそこに佇んでいるだけの万三郎に向けて「はっ」と息を吐き、それからコツコツと入口の方のカウンターへ歩いて来た。ギャル女は、ユキの目の前で足を止め、ユキに正面から向き合うと、突然ユキの胸ぐらをぐいっとつかんだ。

「きゃっ」

ギャル女は、ユキの襟についた鴨の社章を至近距離で確かめる。ハエトリソウを思わせるまつ毛が、わさわさと音を立てて 瞬（またた） いているようにユキには感じられた。

「ふーん、本物のＥＴやね、おたく、名前は」

「そっ、その前に、手を離しなさい！」

ユキは自分の襟元をグイッとつかんでいるギャル女の手を払いのけた。

「うちは、 四葉京子（よつばきょうこ） 。おたくと同じ、ＥＴやで。で、名前は」

「福沢……由紀」

「ええっ、何て？　声、ちいそうて聞こえへん！」

まつ毛をわさわささせて女が訊く。

その時、テーブル側から祖父谷が、女に制止の手を上げて言う。

「京子、もういい。そのコは福沢由紀さんだ。みどり組の組員だよ」

四葉京子と名乗ったギャル女は、「ふうん、みどり組……ねえ」としばらくユキから目をそらさずにつぶやいた。そして隣の杏児をちらっと見ると、「プッ」と噴き出した。

「みどり組っちゃあ、また思い切った自虐趣味なチーム名やなあ。味があるわあ」

　杏児は、四葉京子の思わぬセリフに、ことの真意をはかり兼ねてぽかんとしていた。だがユキの方は、怒りと羞恥でわなわな震えだした。ユキは、目の前の四葉京子よりむしろ、向こうにいる祖父谷に向かって噛みついた。

「なんで私の名前を知ってるわけ？　それに、『組員』って言い方、止めてほしいんだけど」

　祖父谷義史はユキの方を向いて答える。

「今日、研修中に新渡戸部長から聞いたんだよ。君の名前も。『みどり組』ってチーム名も」

　それを聞いて万三郎がいぶかしむ。

「今日、研修室にいたのは俺たち三人だけだ」

「それは第三研修室だろう？　俺たちは第二研修室だ。まあ、もっとも、明日からは時々、合同研修になるようだけどな」

　そう言うと祖父谷はあらためて万三郎の顔を指さした。

「おい、中浜、明日から合同研修になるという、その前夜にここで会ったのは偶然だが、ちょうど良い機会だからこの際、言っておく。いいか、お前たちに対するワーズたちの評価は最悪だ。お前たちのような野蛮で無能なＥＴは、決してエグゼキュティヴにはなれない。俺たちは、お前たちと共に講義は受けるが、仲間にはなれない。俺たちはみどり組とは違う。より優秀で優越した存在であり続ける。俺たちは『チーム・スピアリアーズ』だ。覚えておけ。あ、ハンバーグ定食、こっちへ。ありがとうございます」

十

「万三郎とやら、これはどうやって食べるのです」

マサヨが三人のハンバーグ定食を配膳し、ライスを取りに戻っている間に、万三郎の目の前の美女が自分のハンバーグを見下ろしたままで訊いた。四葉ギャル子も、ユキに敵対的な視線をたっぷり、送れるだけ送ると、コツコツと靴音高く自分の席に戻ってきた。祖父谷も着席する。一人話しかけられた万三郎だけが、自分のカウンター席に戻ることもままならず、取り残されたように、その場に茫然と立ち尽くしていた。

「これ、万三郎とやら」

美女が呼ぶのを無視して万三郎は祖父谷に呼びかける。

「おい、祖父谷」

だが、祖父谷もまた、万三郎の呼びかけを無視している。

「旨そうだ。いただきます」

「万三郎、おまえに訊いているのです」と美女。

「おい、祖父谷」と万三郎。

「旨い！　こりゃ旨い」と祖父谷。

「ほんまや、旨いわあ、これ」と四葉京子。

「万三郎、この食べ物はどうやって食べるのかと訊いています」

「おいっ、ヨッシー！」

苛立つ万三郎に、ようやく祖父谷が反応した。祖父谷は箸を止めて万三郎をまっすぐにらみつける。

「お前、なんで俺の子どもの頃のあだ名を知っている」

「義史（よしふみ）のあだ名は、おおかた『ヨッシー』だろうよ。そんなことより、この人にハンバーグの食べ方、教えてやれよ」

　万三郎は、目の前の女を目で示した。

「お前が訊かれているんだろう、お前が奈留美（なるみ）に教えてやれ」

　祖父谷は、奈留美と呼ばれた女の向かいの席が空いているのをあごをしゃくって示した。

「馬鹿な。どうして俺が向かいに座って、知らない人にハンバーグの食べ方を教えなくちゃいけないんだ」

　祖父谷はもう知らん顔で食事を再開している。

「おい、ヨッシー」

　祖父谷はぎろりと万三郎を見た。

「中浜万三郎、お前にあだ名で呼ばれる筋合いはない。二度と呼ぶな」

「そんなこと言ったって、この人を……」

　口ごもる万三郎に向かって、奈留美が美しい唇を尖らせる。

「万三郎、はやく教えなさい」

「いや、隣を見りゃいいじゃん！　ヨッシーのやってる通りやれよ」

　その時、万三郎に水が飛んできた。

　バシャッ！

「な、な、何をする！」

　万三郎は顔にとんだ水滴を吹き払いながら祖父谷に怒りの顔を向けた。祖父谷が自分のコップ

の水を万三郎に掛けたからだった。

「二度と言うなと言ったはずだ」

「おい、喧嘩なら外でやってくれ！」

　マスターの怒号がカウンターの向こうから響いた。

　しーん。店内は一気に緊迫した空気に包まれる。

十一

「奈留美さあ、お箸やから食べられへんのやろう？　ナイフとフォークもらったら」

四葉京子が張り詰めた空気を破った。マサヨが即反応する。

「あ、そうなんですか。すぐお持ちしますね」

「ああ、お手間をかけますわね、そうしてくださるかしら」

「綾目小路奈留美（あやめこうじ なるみ）は没落貴族の娘やからねえ。庶民の食べ物は慣れてないんよね」

そう言うと京子は、箸で切り分けたハンバーグをあーんと自分の口に運んだ。

「京子さん、没落貴族とは何という言いぐさですか！　庶民派貴族とおっしゃい」

「はいはい、お嬢様。うちら庶民の文化を理解するのは大変やでえ」

「庶民は食事を摂る時、スカートのウエストを緩める文化があるのですか」

京子はたちまち赤面する。

「いややわ、この人、見てたん？　このスカートあまりにもキツイんよ」

「京子さん、豪快に食べ過ぎですよ。それより、食べ方を訊いただけですのに、庶民の方にこんなに冷たくあしらわれたのは初めてですわ」

奈留美はそう言うと恨めしそうに万三郎を見た。万三郎はハンカチを出して一心にスーツに撥ねた水を拭いていたが、ふとその手を止め、奈留美の方を向いて言った。

「あのさ、あんたら三人とも、どういう経歴の持ち主で、どういうなりゆきでＥＴになったの？　みんな、あまりにも個性的過ぎる」

そこへマサヨがナイフとフォークを持って奈留美のところへやって来た。

「気が利きませんでした。どうぞお使いください」

「まあ、ありがとう。それからね、マサヨたん……」

　マサヨは驚いた。

「どうして、私の名前を」

「あら、入店した時に、店長さんがあなたにおっしゃってましたわ。『マサヨたん、奥へ』って。『マサヨたん』て。わたくし、ちょっと引きましたわ。それで覚えていましたの」

　マサヨが恥ずかしそうにうつむいた。喧嘩になりはしないか厳しい目でなりゆきを見守っていたマスターも、動揺してテーブルからちょっと目を逸らした。カウンター席のユキだけが、どや顔でマスターを見つめる。だが隣の杏児は、奈留美を遠目に見ながらつぶやいた。

「あんたのキャラの方が引くわ」

　ふいに奈留美は、それまでのおっとりした表情から、苦悶の、そして何とも悩ましい懇願の表情に変えてマサヨに訴えた。

「それよりマサヨたん、痛み止めのお薬って置いてありませんこと？　世界が終わるのではないかと思うほど激しい頭痛が、わたくしを今にも襲おうとしている予感がするのですわ」

　万三郎が言う。

「まだ、痛くないんでしょ？」

　奈留美は口を尖らせた。

「今、頭痛の気配を感じるのです。今日は、転ばぬ先の爺やがおりませんから、念のためです」

「あっ！」

　万三郎は奈留美を二度見した。いや、正確には奈留美の胸のＫＣＪ社章を見たのだった。それから万三郎は、祖父谷の社章、京子の社章を凝視した。そして自分の社章も手で持ち上げて順番に観察した。

万三郎の社章は光っていなかったが、三人のＥＴの鴨の目はうっすらと赤く光りを放っていた。

十二

祖父谷がハンバーグを口に入れたまま言った。

「過去を訊くな。気分が悪くなって、せっかくの旨いメシが不味くなる」

「おいヨッシー」

祖父谷は怒気に満ちた顔を万三郎に向ける。

「あ、済まん。それより、お前の社章……」

万三郎に指摘され、祖父谷は自分の鴨の目が光っているのに気付き、驚く。そして万三郎に向き直った。

「中浜、お前の鴨の目もさっき光ってたんだ」

万三郎は、発光していない自分の社章をまじまじと見つめ、それから顔を上げた。

「そうか、分かったぞ。ＧＰＳで定期的に現在地情報を本社に発信しているのかも知れない。それでこの店、ティートータラーにいると分かったら、俺たちの給料から飲食代が天引き精算されるって寸法なんじゃないか」

祖父谷が答えた。

「お前、馬鹿だな。そんなくだらない使い方ではなくて、緊急事態に本社に召喚できるように、現在地を把握されているのだろう」

万三郎はふてくされる。

「緊急事態って、なんだよ」

祖父谷は手元のハンバーグの最後のかたまりを箸でつまむ。

「知らんよ」

　そう言ってからハンバーグを口に入れる。もぐもぐ口を動かしながら空のグラスを手に取って言った。

「まあ、緊急招集がかかるのはお前ら、みどり組じゃなくて、俺たちだけだろう。すみませーん、水ください」

「チーム・カフェテリアーズか……」

「スピアリアーズやで」

　京子が訂正してきた。

「優れた人たちって意味や。英語力、外見、人間性、使命感、行動力、すべての面において、うちらの方が、上や」

　そう自慢げに言う京子の鴨の目はもう発光していなかった。

　カウンター席から負けず嫌いのユキの声が飛ぶ。

「へえ、まつ毛の長さだけじゃないの？　あなたの方が上なのは」

　京子はそれを聞いてすっくと立ち上がった。

「な……何よ」

　ユキはたじろぐ。奈留美がハンバーグをナイフで切り分けながら澄ました顔で言った。

「ダメよ、京子さんのまつ毛を冒涜するのは自殺行為ですわよ」

「あっ、ダメだ、何するつもりだ！」

　席を立ってユキの方に向かっていこうとする京子の前に万三郎が慌てて駆け寄って立ちふさがる。小柄な京子は万三郎を見上げて脅すように言葉を吐いた。

「ちょっとあんた、何カッコつけてんねん。うちら女同士の話、しに行くとこや。のいたって」

　万三郎は両手を広げ、かぶりを振った。

「いや、ダメだ。みどり組の仲間がやられるのを見過ごすわけにはいかない」

　その時、それまでじっと成り行きを聞いていた祖父谷が、口を拭っていたナプキンを置いて、ゆっくりと席を立った。

十三

がっしりしたスポーツマン体格の祖父谷が立ち上がったので、たちまち緊張感が最高潮に達した。

「おい、店内で暴力沙汰はごめんだよ、外でやってくれ」

マスターが再び怒った声で言う。

「マスター、こっちから手は出しませんよ。こいつらとは違います」

祖父谷は不敵な笑みを浮かべ、マスターにそう答えると、悠然とユキの方へ向き直った。そして、京子と万三郎の頭越しに、カウンターのユキに声をかけた。

「福沢さん、いや、ユキちゃん、君は野蛮な男たちとは違って、きっと優れている。特に容姿が優れているから、スピアリアーズにおいでよ、歓迎するよ」

「何言ってんだ、ヨッシー！」

そう叫んだ万三郎を祖父谷はちらりと見たが、放っておいて、ユキの方へ一歩歩み出した。

ユキは気が動転する。

「な、何？　来ないで」

祖父谷が歩き出すのを見て、京子は万三郎の横をすり抜け、祖父谷を遮ろうとした。

「ちょっと、義史（よしふみ）、うちがあの子と話あんねん。邪魔せんといてくれへん？」

その京子の腕を、万三郎は後ろからつかんだ。

「いや、君もダメだ。『みどり（うち）組』のユキに、何もするんじゃない」

「ちょっと、あんた、うちに触らんどってよ！」

　京子は万三郎の手を振り払いながら、その前を行こうとする祖父谷の肩をつかもうとした。だが、小柄な京子の腕は、一歩先行く祖父谷の肩に届かない。

　そこへ、盆にグラスを乗せてカウンターから回り込んできたマサヨが、ユキへ向かう祖父谷の進路をふさぐように立った。

「お客様、水をお持ちしました」

　立ち止まった祖父谷は、わずかに屈んで、マサヨの目の高さでニッコリと微笑みかける。

「ありがとう。僕の席に置いておいてください」

　そう言って、マサヨの両肩を優しく抱え、少し力を加えて、脇へ避けさせた。

　そのすぐ後ろで、京子が叫ぶ。

「ナイス、水。福沢！　よくも、うちの自慢のまつ毛を侮辱したな。くらえ！」

　京子はマサヨの盆から水のグラスを取ると、ユキに向かって中の水をぶちまけようとするそぶりに入った。

　その京子を止めようと、後ろから瞬時に万三郎が一歩前へ踏み出した。

「ダメだ、ユキに手を出すなッ！　あッ！」

十四

さっき万三郎の顔めがけて祖父谷が放った水が溜まっていた床に、踏ん張った方の足を取られて、万三郎は前につんのめった。勢いで前に倒れる時、夢中で両手でつかんだのは、京子のスカートだ。スカートは無残にも引き下げられ、投げの姿勢に入っていた京子は、ずり下がってきたスカートに膝の自由を奪われて、勢い余ってこれも前につんのめった。

京子が前に倒れる勢いで、グラスの中の水は天井に向かって放たれる。京子はそのまま床にうつ伏せに倒れ込んだ。

スカートをつかんだまま、こちらもうつ伏せに倒れ込んだ万三郎の顔は、京子の下着の尻にすっぽり収まるはめに。

一方、倒れるさ中も京子がしっかりつかんで離さなかったグラスが、ユキに向かって再び歩き始めようとしていた祖父谷の後ろ脚の膝の裏を直撃した。

祖父谷は「膝カックン」をされた格好になって、天を仰ぐように後ろ向きに倒れ込んだ。

結果、祖父谷の股間から京子が頭を出す形になった。

京子は、床に口づけをした状態で祖父谷に馬乗りに乗られ「ふんぎゃあ」と言った瞬間に、自ら放った水が後頭部を直撃して、見るも無残な姿をさらした。

祖父谷の方も、おもらしをしたようにズボンの股間を濡らし、仰向けに倒れた勢いで、自分の後頭部を万三郎の後頭部にしたたかにぶつけるはめになった。

金槌で打たれた釘のように、万三郎の顔は京子の尻にさらに埋まった。

「ファンフェ、フォッファイ、フォーリー、マッファラル」

ユキと隣の杏児は、ただただ目を見張って言葉を失っている。惨憺たる光景を前にして、奈留美がナプキンで口を拭いながら言った。

「庶民のなさることは、よく分かりませんわ」

マスターは杏児に耳打ちした。

「確かに三人来た。だけど、良い客だとは、とても……」

第六章　ワーズ（一）（1）

　一

　新渡戸部長がゆっくりと六人を見渡す。

「今日のＥＴ合同研修、ワーズ・トークの時間は、ワーズ社員の中でもトップクラスの大物にゲスト講師として来てもらうことになっている。しっかり勉強させてもらおう」

　そう言って新渡戸は腕時計を見る。

「もう、来てもいい頃だ。だが、超多忙な二人だから、少々遅れるかな……」

「部長、今日の、トップクラスの大物ゲストって、二人いるんですか？」

　二列目に座っている祖父谷義史が訊いた。

「ああ。be動詞、そして助動詞doだ」

　新渡戸は答えの途中で手にしている書類から祖父谷に視線を移しながら答える。

　一列目奥の席に座っている杏児が反応する。

「おお、確かに大物たちだ」

　新渡戸はまた書類に目を落とす。

「ただ、今日のゲストたちは今、それぞれ、【西園寺be子（さいおんじ びーこ）】、【東醍醐do麻呂（ひがしだいご どぅーまろ）】と名乗っている」

「西園寺？　東醍醐？　なぜそんな苗字を……」

　万三郎が訊いたが、新渡戸は首を傾けるばかりだ。

「私にもよく分からん。【be子】については、今日の面談の時間を連絡するのに電話した折に、『ハイ、西園寺です』と名乗った。以前は武者小路さんだった。気分で苗字を変えるらしい。まあ、社員名簿には【be子】で載っているから、お遊びのつもりなら、好きに名乗っても構わん

のだがな。【東醍醐do麻呂】については、ただ単に、【be子】にライバル意識を持ってのことだと思う」

　四葉京子が、隣に座っている綾目小路奈留美に訊いた。

「二人とも、あんたの知り合いとちゃうん？」

　奈留美は澄ましてかぶりを振る。

「わたくしには友達がおりませんの」

　京子は苦笑した。

　ユキが新渡戸に訊く。

「普通に【be動詞】さん、【助動詞do】さんでいいのに。何か、おかしな感じの人たちなんですか」

新渡戸は少し目を泳がせたが、気を取り直してユキに答える。

「二人ともセレブな美男美女だよ。ちょっと派手だがね。二人とも、揃いもそろって、ＫＣ（うち）Ｊではいったい、働いているのか異性ワーズたちとデートして惑わせているのかよく分からんが、とにかく、うちにとっては二人とも非常に大事な存在なんだ。君たちはＥＴとして、しっかり二人のキャラクターをつかんでくれ。ただし……」

　新渡戸はそこで黙り込んだ。話を続けるかどうか、一瞬迷っているようだった。

「ただし？」

　ユキが促す。新渡戸はため息をついた後、声をひそめて、飲みこみかけた言葉を続けた。

「彼女は、多重人格者なんだ。【be子】は、ベースの人格は【be】、つまり【西園寺be子】なんだけど、状況によって、特にデートする相手によって人格が変わるんだ」

「は、はあ……」

「それは、彼女をシートレに呼ぶ時にも関係してくる。車両に乗せる主語によって、彼女は人格

や姿を変えるから、現場で間違えないようにしっかり覚えるんだ」

「なんやそれ。それって、男ウケめっちゃええけど、女からは、めっちゃ嫌われるキャラちゃうのん？」

　京子の言に新渡戸は困った顔をした。

「西園寺さんは、自分が六人姉妹の一人だと思い込んでいる。つまり、六人の人格を持っていることを自覚していないようだ。その点を踏まえて言い分を聞いてやって欲しい」

二

ドアのノックというのは不思議なものだ。ただの音なのに、ノックした人の感情が本当によく伝わって来る。短い間隔で性急にノックされたドアに向かって新渡戸部長が「どうぞお入りなさい」と答えた。

第三研修室のスライドドアがガタガタとぎこちない音を立ててやっと開いた。

「んーもう！　このドア、ムカつく！」

真っ赤なスーツをまとい、ひざ上十五センチのスカートからすらりと伸びた足を見せつけるように、髪の長い｜細面《ほそおもて》の美人は、入室早々ドアにブチ切れて、蹴りつけるような仕草をした。

ＫＣＪ規定に従って、彼女の頬には【be】の文字が浮いている。間違いなく超大物ワーズ社員、【西園寺be子】だった。

彼女は教室に入ると、勢いをつけて首を回し、長い髪をさわっと一回転させた。そして右手で髪を掻き上げ、不機嫌そうに言った。

「新渡戸部長、お呼び出しなのでやってまいりました。でもあたし、たいぃぃっっっへん、忙しくってよ」

新渡戸は申し訳なさそうに【be子】の機嫌を取る。

「ああ、【be子】さん、君の忙しさはよく分かっているよ。だが、将来君と共に仕事をするかも知れない、いや、君の上司になるかも知れない人たちに、君を紹介しないわけにはいかないからね」

【be子】はそこまで事前に聞かされていなかったのか、あるいは聞かされはしたものの、忙しさのあまり忘れてしまっていたのか、「初めて聞くわ」という顔をして、教室に座っている六人のＥＴたちに目をやった。

「何とおっしゃって？　あたしの上司ですって？」

「ああ、そうだ」

　新渡戸はそう言ってＥＴの方に目をやった。

　六人は反射的にその場に起立した。

「初めまして、ＥＴの中浜です」「三浦です」「福沢です」「祖父谷です」「四葉です」
「綾目小路でございます」

「ふーん……」

　わざわざ顎を上げ、目を半眼に細めて、「上から目線」を演出すると、【be子】は社内用にしては少々高すぎるヒールの靴音をわざとコツコツと鳴らしながらＥＴに近づいてきた。

　そして、これも社内では目立ちすぎだろう香水の匂いを派手に振りまきながら、彼女はユキの前に立った。

「あなた、あたしの上司になるの？」

　ユキは明らかにビビった様子で答えた。

「ま、まだ分かりませんし、も、もし幹部候補選考に残ったとしても、それは何年も先の話で……」

「そーぉよね、何十年も先の話よね！」

それから【be子】は、雌豹のような眼で、ユキの後ろに座っていた祖父谷を上から目線で見つめた。

「ほー、いい面構えね。あなたが上司ならいいかもね」

　【be子】はそう言って祖父谷の頬から顎へ、触れるか触れないかくらいの距離感で手のひらをエロティックに這わせた。その手が顎に達すると、小指から順にスナップを効かせてくるりと空気を巻き、品定めをするようにさらに隣り前列の万三郎に近づいた。

「この子も素敵ねえ。おいしそうだこと……」

正面から見つめられた万三郎は思わず顔をそむけた。

新渡戸が咳払いをした。

三

さすがの【be子】も我に返り、おほんと言って、ＥＴたちに着席を指示した。彼らが着席している間に彼女は教壇に上がり、教卓の縁に両手を掛けてＥＴたちに言った。

「あたしの名前を知らない人、この中にいる？　いたら手を上げなさい」

六人の誰一人として、手を上げなかった。

「もちろん、そうよね。あたしを知らないＥＴなんて、もぐりだわ」

当然という表情で目を閉じた彼女は、突然くわっと目を見開き、凄みを効かせて早口言葉のように、一気にまくしたてた。

「そう！　あたしが、『あるいるクラブ』会長、『ですますクラブ』会長、『進行形制作委員会』委員長、『受身形制作委員会』委員長、株式会社ことだまカンパニー・ジャパン英語事業部傘下ワーズ営業部所属、第一文型課課長兼第二文型課課長、原付免許取得済みの……」

そこまで一気に言うと、彼女は首を一ひねりして長い黒髪をわさっとなびかせた。つややかな髪は、シャンプーのコマーシャルで見るように彼女の頭の周りをしなやかに一回転して、健康的に弾む。ダイナミックでエレガントなキメのポーズを、彼女は自分の名前で締めくくった。

「西園寺【be子】よ」

ポーズに少し余韻を持たせておいて、【be子】は付帯情報を小さく早口で言った。
「講演の依頼やファンレターはプライベートオフィスを通してね。『なさい県、文頭郡、助動詞ノ後町、頻度副詞前一の一 Amisare(アミザーレ)和津羽(わづわ)一〇四号室』よ」

万三郎たち「みどり組」の三人は、【be子】の前置きのような話さえも、さらさらとノートに書き取っていく。

【be 動詞】
・「ある」「いる」を言うときに使う動詞。
・「です」「ます」を言うときに使う動詞。
・「進行形」を作る形の一部に使う。

・「受け身形」を作る形の一部に使う。
・第一文型と第二文型で使う。
・文頭に置くことで、「でいなさい」という命令文になる。
・助動詞の後に置く。
・頻度を表す副詞の前に置く。

四

実は昨日、「チーム・スピアリアーズ」より先にバー・ティートータラーを出て寮に帰る途中、「みどり組」の三人は、あいつらにだけは絶対負けたくないから、勉強の姿勢から変えていこうよと、申し合わせたのだった。知ってることも、知らないことも、初心に返って、聞き漏らさないように熱意を持とうよと、これはユキが提案したことだった。万三郎も杏児ももちろん賛成した。

その「みどり組」の三人が、前列の机で三人並んで懸命にノートを取っているので【be子】は俄然、機嫌が良くなる。

「あなたたち、殊勝じゃない。あたしのこと、もっと聴きたい？」

すかさず万三郎が答える。

「もちろんです、会長」

「か、会長……」

【be子】は少なからず感動した。

「あなた……あたしのさりげない自己紹介で、『あるいるクラブ』会長と言ったひと言をちゃんと覚えてたの？」

「はい、会長」

「ふうん……。おいしそうな顔のあなた、名前は何だったっけ」

「はい、中浜です。中浜万三郎といいます」

「そう、万ちゃんね。あなた、いい子ね。覚えておくわ」

「ありがとうございます、会長」

万三郎はそう言って、屈託のない笑顔で【be子】に応えたので、【be子】は嬉しくてすっかり

饒舌になった。

「くっ、おべんちゃら言いやがって……」

　斜め後ろの席から祖父谷が万三郎の背中を睨んで、声にならないつぶやきを発する。昨夜万三郎とぶつけ合った後頭部がまだ傷むのがムカついた。

　【be子】は滑らかに話し始めた。

「あたしの自宅の住所は、ストーカー対策で言えないけど、あたしは五人の妹たちと同居してるの。今日は来てないけど、【am子（あむこ）】、【is子（いずこ）】、【are子（あーこ）】、【was子（わずこ）】、【were子（わーこ）】よ。西園寺六姉妹って、業界では評判なんだけどね」

　杏児は新渡戸の方をそっと見る。新渡戸はかすかに頷く。なるほど、これがさっき部長の言っていた、多重人格なんだと杏児は合点がいく。すると杏児の後ろから四葉京子が口を挟んだ。

「それ、『六姉妹』やなくって『六変化（へんげ）』の間違いとちゃいます？」

「あっ、シーッ！」

　杏児は思わず後ろを振り向いて、黙ってと京子にジェスチャーをする。【be子】は自分自身が変身しているのだとは思っていないのだ。

　案の定、【be子】は京子を聞きとがめた。

「どういう意味よ、そこの、目が全部黒目の女子？」

　五

　京子はうっかり要らぬことを言ったと後悔しつつ目を伏せる。

「いえ……何でもありません」

　数秒の間、【be子】は京子を睨んでいたが、やがて気を取り直して続きを話し始めた。
「六姉妹、仲好しだと思う？　意外に思うかもしれないけど、あたしたちが一緒に仕事することは、まずないわ。それぞれ単独のお仕事ね」

　【be子】は教卓で腕を組む。

「それに、あの子たち、恋人関係をすぐ職場に持ち込むの。よく手を取り合ってカートから降りて来て、いちゃつきながらプラットホームをのんびり歩いて来るんだから、うらや……いやらしいわよね」

　腕を組んだ【be子】が教卓から見下ろすと、万三郎をはじめとして、前列の三人がペンを片手に、爛々とこちらを見上げていた。

――この子たちは、待ってる。

　【be子】は自尊心が満たされる喜びを再び感じる。

「万ちゃん、あなた、もっと聞きたいの？」

　万三郎は力強く頷く。

「はいっ」

「そう。じゃあ、今日は取っておきの特ダネ、教えてあげる。西園寺家ドロドロの人間関係よ」

　【be子】は組んだ腕をほどいて、人差し指を立て、ひとつひとつ確認するように指を揺らしながら話し始めた。

「【am子】の彼氏は【　I介（あいすけ）　】くん。あの子は誠実。ずっと【I介】くん一筋ね。

【are子】は、一見（いっけん）【you太（ゆうた）】くん一筋のように見えるけど、実は【they吾（ぜいご）】とも付き合ってるわ。いわゆる二股ってやつね。自分ではバレてないと思ってるみたいだけど、バレバレよね。

【is子】は、あたしの妹ながら悪い女よ。誰とでも二人で出かけるわ。節操がないのよね。でも、さすがに【am子】や【are子】の彼は奪わないわ。

人としてどうかと思うのは、【was子】。あの子、【is子】の遊び相手全員と昔、遊んでた。それだけじゃなくて、【am子】の大事な彼、【I介】の元カノでもあるの。黙ってるけどね。ひどいわよね。

そして、妹の中でも最低最悪なのは、【were子】。同時に複数の男たちと付き合ってたの。【are子】の遊び相手は全員、昔【were子】と遊んでた。【they吾】ですら、昔は【were子】の男だったの。

「みどり組」の三人は熱心にノートを取っていく。

・am / is / areは現在、was / wereは過去
・I am / I was
・You are / You were
・is は、I , you 以外すべての単数につく（一人または一つ）
・was は、you以外のすべての単数につく（一人または一つ）
・They are / They were

六

奈留美が訊く。

「あのー、【be子】さんって、男性に、とってもおモテになるんじゃなくって？」

【be子】は、初めて質問主をまじまじと見つめる。

「まあ、あなた、えらく美人ね」

基本的に美人と美人は親和性がよくないのではないか。このわずかな間のアイコンタクトにおいても、女と女の火花が一瞬散ったように、ユキには感じられた。

【be子】は一見、余裕の表情で、でも口の端をわずかに引きつらせながら答える。

「たぶん、あなたほどはモテないと思うわ……」

【be子】はそう言うと、一瞬沈黙し、それから遠くを見るような目になった。

「あたしは、素のままの自分でいたいの。命令文で駆り出される時が一番自分らしいと思う。ありのままの姿で先頭に立つの」

【be子】は目をキラキラさせて両手を胸の上で重ねる。

「だってあたし、自己主張が強くて、【is子】みたいに八方美人になれないから。だけど、いつでも先頭って訳じゃないのよ。助動詞のすぐ後ろにいるのは幸せなの。だって、助動詞たちって皆とっても優しいのよ。『【be子】ちゃん、君は何も着飾る必要ないよ、僕らは、ありのままの君が好きなんだ』って。だからあたし、助動詞なら誰でも好き」

その時、突然教室の前方のスライドドアがガタガタとぎこちない音を立てて、一人の男性が入ってきた。黒い烏帽子をかぶり、涼しげな色合いの平安時代の貴族の衣装、直衣（のうし）を身にまとった男性の左頬には【do】、右頬には括弧書きで〈助動詞の方の〉と彫ってある。倉間ほうぶん先生が登場したときの着物姿には驚かされたが、ワーズや先生たちの風変りなコスチュームに、もはやＥＴたちは慣れっこになっていたので、眉の一つも動かさない。

　【be子】は忌々しげに言い放った。

「ただ一つの助動詞、【do】を除いてはね！」
　だが彼は、そんな【be子】をはなっから無視して新渡戸に軽く頭を下げた。烏帽子が大きく前へ傾く。

「部長、遅れてすんません。｜【東醍醐do麻呂】《ひがしだいご どぅーまろ》こと助動詞【do】、ただ今参上」

　【do麻呂】は手にしていた扇を手慣れた仕草でさっと広げ、ポーズを取った。扇には中央に日の丸が描かれ、「日本一」と墨字で書かれていた。スピアリアーズの三人は、その、あまりにステレオタイプな扇の柄に一様に目を丸くした。

　一方で、そうした小道具にも集中力を損なうことなく、事態の急な展開に遅れまいと、みどり組の三人は急いでペンを走らせている。

・be は「～でいなさい」という命令文の時に文頭に来る。
・助動詞の直後では、be動詞は、原形（be）のまま。※助動詞doを除く（後述）。

七

「ハーイ、【be子】ちゃん、ごぶさたー。話の腰折ってごめんねー」

目にも止まらぬ速さで扇を畳んで落語家張りにパシッと手のひらを打つ【do麻呂】。
【be子】は渋い顔をしてプイと横を向いた。

「やあ、皆の衆、初めましてーってか。どうしたの、みんな、そんな真面目くさった顔して。さてはビー子ちゃんの失恋話でも聞かされてたか」

それを聞いた【be子】が憎々しげに【do麻呂】に噛みつく。

「あのねー、あたしはセレブなのよ。かわいらしい少女路線じゃないの。『ちゃん』じゃなくて『さん』づけで呼んでちょうだい」

すると【do麻呂】はにやりと笑って言い返す。

「呼んでもいいけど、『ビー子さん』ってなんだか、『二号さん』みたいな感じがするよ、正妻Ａ子さんの次ってイメージ。それでもいいの？」

「違う！　漢字表記なら『美しい子』で『美子（びーこ）』！」

「へえ、漢字あったんだ。それなら、『よしこ』とか『みこ』とかの呼び名にしたらよかったのに、『ビーコ』て、君、奇特というか……」

奈留美が笑いをこらえ、下を向いて震えているのを見て【be子】は逆上した。

「うるさいわね【do麻呂】！　親のつけた名前にあなた、文句つけようって言うの」

「あっ、ひょっとして君の母親の名前は……」

「栄子（えいこ）よ、西園寺栄子。栄える子と書くのよ」

【do麻呂】は立ったまま腹をよじった。

「うわ、マジそれ？　Ａ子の娘がＢ子……？　二世代かけてギャグやってるの」

　奈留美が「ク……クォ……ホン」と向こうを向いて不自然な咳をした。【be子】はいよいよ怒りに打ち震える。

「ああーっ、本当にこの男、嫌いっ！　こんな業務命令の講演でもなきゃ、絶対会いたくなかった。今日は何てついてないのかしら」

　新渡戸が、そばにいたユキや祖父谷に素早くつぶやいた。

「【do麻呂】くんは【be子】さんと張り合っているんだ。だから煽っている」

　そして新渡戸は、たまりかねた様子で二人に割って入る。

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

　新渡戸は二人を交互に見て説得するように落ち着いた声で言う。

「二人とも、職務的には確かに似ていると思うが、何もそこまで張り合わなくても……。現場では違うタイプのオーダーに対応することが多いから、二人は普段、｜素《す》の姿で会うことはないじゃないか」

　【be子】がぷうと膨れて脇を向いた。

　ユキが訊く。

「【be子】さんはさっき、助動詞大好きとおっしゃっていたのに、どうして助動詞【do麻呂】さんだけが例外なのですか」

　【be子】はそっぽを向いたまま、ユキに答えた。

「この男は変わり者なのよ。他の優しい助動詞たちとは違うの」

　【do麻呂】が指で扇をバチンと弾いて口を挟む。

「『特別な』助動詞と言って欲しいな」

ユキが問いを重ねる。

「何が、特別なんでしょうか」

【be子】はあざけるように言った。

「この人は、空っぽ。意味のない助動詞なの」

　八

「え？」

　ユキには【do麻呂】の言っている意味がよく分からない。だが【do麻呂】は、自らも自慢げな顔で目を閉じて答えた。

「そうなんだ。僕には、役割はあっても、意味はない」

　そして【do麻呂】は、壁際に立つ新渡戸に尋ねた。

「部長、僕がここに呼ばれた理由（わけ）は、僕自身のことについて詳しく話せ、ということですよね？」

　新渡戸が答える。

「【do麻呂】くんのすべてを、この短い時間で語り尽くせとは言わない。いずれまた、ゲスト講師として二回目、三回目と呼ばせてもらうと思うよ」

「分かりました。じゃあ今日のところはこの話の流れに沿った部分だけ……」

　そう言うと【do麻呂】は、【be子】に向き直って言った。

「その前に、そこに立たれると目障りだから、ほら、その教壇の一番奥辺りに椅子置いて座って、お利口にしててよ」

　【do麻呂】は、その辺りに控えておれとばかり、扇で場所を差し示した。

「まあ、失礼な！　もっと言い方ってものがあるでしょう！」

「服がどぎつい赤ってだけで、もう目障りなんだよ。香水もきつすぎ」

　ただでさえ気難しいセレブの【be子】に対して澄ましてそう言ってのける【do麻呂】。【be子】は怒髪天を衝かんばかりとなった。

「きぃー、このおたんこなす！」

　京子は目を丸くして小さくつぶやく。

「きぃー、このおたんこなす？」

　【be子】を復唱して京子は笑いをこらえ、下を向いて震え始めた。そして不運にも、それはすぐに【be子】の目に留まった。

「何がおかしいのよ、そこの黒目！」

　まずい。ますますヒステリックになってしまう。万三郎は隣の杏児の方を向いた。杏児は心得て万三郎に頷き、慌てて席を立って、京子の後ろの机から椅子を引っ張り出して抱え、教壇の端に置いた。

「【be子】会長、どうぞこちらへ」

　杏児はそう言うと、自分のハンカチを取り出して広げ、座面に敷いた。もちろん、座面が汚れている訳ではなかったが、【be子】にしてみれば、自分が大事にされているように感じたのか、少し表情が和らいだ。

「あら、あなた、万ちゃんに優るとも劣らないおいしそうな男の子ね。優しいのね。お名前は何だったかしら」

「はい、三浦杏児と申します」

「杏ちゃんね。ありがとう、杏ちゃん」

「いえ、これしきのこと、お安い御用です、会長」

　【be子】は杏児にニコリと微笑みかけると、椅子に腰を下ろし、背もたれに挟まった髪をわさりとオーバーに掻き上げて、最後に空中を蹴りあげるようなジェスチャーで長い脚を組んだ。

　教室入口側の二列目に座っている祖父谷は、同じセリフを、今度は声に出してつぶやいた。

「くっ、おべんちゃら言いやがって……」

　九

　ようやく落ち着いた【do麻呂】は、ＥＴたちに向き直った。

「僕がなぜ特別な助動詞なのか、さわりだけ説明するね」

　ここはさすがに、みどり組の三人のみならず、チーム・スピアリアーズの三人も、ノートをとるべくペンを構えた。

「助動詞ワーズたちは皆、ＫＣＪの契約社員になる条件として、三つの職務を果たすように言われている。『あなた方助動詞の主業務は、一人一人の個性を活かして、正社員である動詞ワーズたちのアシスタントをすることです。クラフトマンが、クライアントからのオーダーに応じて、あなた方の中から適切な人選をして出動を命じることがあります。出動を命じられた時は、
①動詞の前で、ありのままの姿の動詞を守るようにシートレに座ること、
②疑問文の編成時には、疑問詞がいる場合を除いて、進んで文頭に出ること、
③否定文のときには、あなた方助動詞が、必ずnotを身に着けていくこと、
この三つをしっかり守ってください』とね」

　そこまで言うと【do麻呂】は思わず話を中断した。六人のＥＴがあまりにも一生懸命ペンを走らせてノートを取っているからだった。彼に限らないが、ローンチング・ステーションでの現場作業がほとんどであるワーズたちが、ゲスト講師として研修に呼ばれて、自分のことを自由に話し、それをノートまでとって真剣に聴いてくれることなどなかなかないことだった。

「うーむ、気持ちいい……」

　彼の自尊心は満たされていった。

【助動詞】
・動詞の意味を助ける。
・動詞の前に置く。助動詞の後の動詞は原形。
・疑問文の時は、文頭に置く（疑問詞があるとき以外）。
・否定文の時は、助動詞にnotを後置する。

　一番書くのが遅かった、綾目小路奈留美が書き終えて顔を上げるまで待って、【do麻呂】は話を再開した。

「だけど、当時の人事担当者が僕に言ったんだ。『【do麻呂】さん、あなた、普通の助動詞たちの役割に加えて、
④強調のとき、
それに、
⑤否定の命令文の編成のとき
――にも、出動してくれませんかね』と。
僕は難色を示した。なんだって僕だけ、二つも余分な業務を押し付けられなくちゃいけないのか。そこで僕は訊いてみた。『報酬は、その分増やしていただけるんでしょうか』。だが、『いや、申し訳ないけど、それはできません』との答えだった。僕は、『でしたらお断りします』と言いかけたんだけど、『それならあなたはクビだ』と宣言されることを僕は恐れた。だって僕は、同僚の助動詞【will（つもり）】くんとか、助動詞【can（できる）】くんみたいに、身を立てていける個性的な能力をあまり持っていなかったから。だけど、没落しつつある東醍醐家の御曹司としては、収入源がなくなることだけは避けたい。そこで僕は駆け引きを試みたんだ。『では、その二つの役割を引き受ける代わりに、私の不得手な、動詞の「意味」を助けることを免除していただけませんか』と。人事担当者はしばらく腕組みをして考えていたけど、ついに笑って、『いいでしょう』と言ってくれた。そういう経緯で、僕には意味がない。だけど、他の助動詞にはできないお役を引き受けているんだ」

【助動詞do】
・動詞の意味を助けない。do自体に意味はない
・疑問文の時は、文頭に置く（ただし、疑問詞がある場合は疑問詞を文頭に置く）
・否定文の時は、助動詞doにnotを後置する。
・否定の命令文の時に、Don’tの形で文頭に置く。
・動詞を強調したい時に、動詞の前に置く。

十

杏児が手を挙げた。

「先生、質問です」

「せ、先生……この僕を、先生と？」

【do麻呂】は、感動してつぶやいた。

「そこの君、な、何かな」

「はい、質問は、大きく分けて三つあります。第一に、先生は、『僕は動詞の意味を助けない』と言われましたが、『強調』という、個性的な意味があるのではないでしょうか。訳語も、『たしかに』を当てればよいと思われませんか」

そう言っておいて、杏児は万三郎の口癖を例に取り上げて【do麻呂】に示した。

I say “Holy mackerel!” from time to time.（１）
私は時々、「ホーリー・マッカラル（なんてこったい）！」と言う。
I do say “Holy mackerel!” from time to time.
私は時々、たしかに、「ホーリー・マッカラル！」と言う。

「ちょ、ちょっと待って」

二つ目の質問を口にしようとする杏児を手で制して、【do麻呂】は、質問の意味を口に出して反すうした。

「僕は、助動詞としての意味を持たないで良いという、役割を一つ減らしてもらうことと引き換えに、動詞を強調したいときと、否定疑問文のときに駆り出されるという、二つの役割の増加を了承した。だけど僕には今も、『強調――たしかに』という意味があるままだ。……ということは、実際には仕事は一つも減っておらず、僕はあの時、人事担当者にまんまと騙された……という……こ……と？」

そうつぶやきながら【do麻呂】は新渡戸人事部長の方を向いて、次第に表情に怒りの色を加え

ていった。新渡戸は、「え、なんで私を睨む」と不可解な顔をして目を丸くする。

「新渡戸部長！」

　ついに【do麻呂】が新渡戸を糾弾するような声色で呼んだ。再び扇がバチンと鳴る。

「昔、僕の採用を決めた人事担当者が、今もこの会社で働いているのかは知らない。だが、人事部の責任者は、今はあなただ」

　そう言いながら【do麻呂】は教壇から降りて新渡戸の方に歩み寄りかけた。

「教えてください、人事部は、僕を……僕をたばかったのですか！」

　思いがけない展開に、新渡戸は、顔の前で手を振って【do麻呂】を制止しようとした。

「いや、ま、待て【do麻呂】くん……」

　その時。

「先生、早まらないでください！」

　そう言って【do麻呂】の前に立ちはだかったのは、ユキだった。

十一

「先生は誤解しておられます。ちょっと聞いてください」

そう言いながらユキは、興奮冷めやらぬ【do麻呂】を教壇まで押し戻した。

「何が誤解なんだよ」

「先生、杏ちゃんは、先生がたばかられたなどという指摘、していません」

ユキは【do麻呂】が話を聞く気になってくれたのに安心しつつ説明した。

「【do麻呂】先生が『強調』の意味を持つのは、平叙文の時だけです。疑問文や否定文の時には、先生が強調の意味を持たなければならないなんてこと、ありません」

ユキはそう言って例を示す。

Do you also say “Holy mackerel”?
（あなたも「ホーリー・マッカラル」と言いますか？）

No. I don’t usually say it. I say “Holy cow!” instead.
（いいえ。普段それは言いません。代わりに「ホーリー・カウ！（なんてこったい！）」と言います）

「お分かりのように、疑問文や否定文において、【助動詞do】は、特に強調の意味など持っていません。『たしかに』などと訳出する必要はありません」

ユキのその意見に、万三郎も付け加えた。

「先生、平叙文のときに、動詞を強調する目的で先生が駆り出されることなんて、そうそうないのではないですか。ですから、先生の負担は、目くじらを立てなくてはならないほど増えてはいないのです」

【do麻呂】は目を白黒させて答える。

「うっ、そ、そうか……そうだ……な」

　杏児がさらに釈明する。

「先生、僕は、先生に自信を持っていただきたくて、あの質問をしました。先生は先ほど、【will】や【can】のような同僚の助動詞とちがって、特別な能力を持っていないようなことをおっしゃっていたから、いや、そうではないのではないですか、【do麻呂】先生は、他のどの助動詞も持っていない、立派な個性的能力をお持ちじゃないですかと、それを申し上げたかったのです」

　【do麻呂】は、ユキと万三郎と杏児の三人を交互に見ながら、やっとの思いでかすれた声を上げた。

「君たちは、そんなにも僕のことを分かってくれているのか。ありがとう。嬉しいよ」

　椅子に座って一部始終を見ていた【be子】が高笑いをして言った。

「おーほっほっほっ。新渡戸部長、この子たちのお蔭で、面倒な釈明を免れましたわね。理解力、状況判断力、問題解決能力、人心掌握術、チームワーク。前列の三人、なかなか良い感じですわよ。前途有望なＥＴであること、お認めしますわ」

◆◆◆

（１）from time to time　時々

第七章　ワーズ（二）（1）

―

「はい、モモ四本とつくね四本、お待ちどうさま。軟骨とハツは今焼いていますんで、もうちょっと待っていてくださいね」

「はい。あ、それから、生ビール、お代わりください」

「あたしも、もう一杯いただこうかしら」

「はい、生ビールお二つ追加で」

その時、向こうのテーブルから、仲間とワイワイやって上機嫌なおじさんの声がした。

「おーい、五郎八（いろは）ちゃん、大瓶三本追加」

「はーい、すぐお持ちしまぁす！」

伝票にすばやく書きこむと、茶羽織（ちゃばおり）の若い女性は、こちらの心までウキウキするような笑顔を見せる。首もとで切り揃えられた、しなやかなストレートの黒髪が揺れる。

「生中（ナマチュー）お二つ、すぐお持ちしますね」と言うと、急いで厨房に戻って行った。

「可愛い娘（こ）でしょ。ここの看板娘よ」

そう言って【be子】はジョッキの底に一口分残っているビールを飲み干した。

「ええ。繁盛してますね、ここ」

万三郎のその言葉に、ユキも杏児も改めて店内を見回した。

【be子】に連れられて入店した時は、十ほどあるテーブルも、カウンター席もまだ埋まっていなかったが、日がとっぷり暮れると、それほど広くもない店内はたちまち混雑し始めた。

「この子たち、ＥＴなの。あたしの上司になる子たちよ」

カウンターに座るなり、【be子】が、この店「焼鳥いろは」のおやっさんに万三郎たちを紹介した時には、おやっさんはわざわざ仕込みの手を止めて、「おっ、未来のホープだね、今のうちにサインもらっとこうか」なんて冗談を飛ばしながら、屈託のない笑顔を見せてくれたが、今や彼は、もうもうと煙を吐くロースターの前で、極限まで気を集中させて、数十本の串をクルクル回しながら同時に焼き上げていくという神業をやってのけていた。

客が増えるまではホール担当だったおかみさんも、娘の五郎八が出勤してきたタイミングでホールは完全に五郎八に任せ、厨房に引っ込んで、串もの以外のメニューをこなすのにかかりっきりになっていた。

これだけのテーブルを親子三人で捌くのは、超人的だと万三郎は感心する。その万三郎の考えを見透かしたように、【be子】が言う。

「おかみさん曰く、アルバイトの子が二人とも今日は来られないんだって」

杏児が感慨を口にする。

「ものすごく忙しい時に、あんなに爽やかな笑顔ができるなんて、あの娘、若いのにすばらしいですね。応援したくなってしまう」

【be子】は笑った。

「五郎八ちゃんに惚れたなら、ＥＴ辞めて、おやっさんの元で焼鳥修行しないとダメよ」

その【be子】に呼応するように、すぐ間近で声がした。

「ふふっ、こんなイケメンのお兄さんがこのお店で働いてたら、私、気になって仕事になりません」

杏児がびっくりして振り返り見上げると、その看板娘の五郎八が、両手にビールジョッキを持って、ニコニコしながら杏児の後ろに立っている。杏児は面食らってどぎまぎしたように言った。

「あ、ビールは【be子】会長と、万三郎だね、そっちです」

「そうですか、はい、おまちどおさま」

　そう言いながら左手のジョッキを【be子】の前に、右手のジョッキを万三郎の前に置いて、五郎八は前掛けで手を拭う。

「イケメンのお兄さんは、お代わりよろしいですか？」

　問われた杏児は慌てて視線をあらぬ方向へ泳がせる。その挙動が不自然だと自分で気がついて、ようやく五郎八の目をまっすぐ見て答えた。杏児の顔が少し紅潮していたのは、ビールの酔いではなく、すばらしいと褒めたところを五郎八本人に聞かれた恥ずかしさからだった。

「あ、やっぱり僕も、お代わりください」

「はい」

　値千金の笑顔で、五郎八は杏児に返事をした。

　いそいそと厨房に引き上げる五郎八を目で追いながら、【be子】がまた声を上げて笑った。

「ほうら、そうやってみんな五郎八ちゃんの笑顔に財布が緩むのよ。看板娘だけのこと、あるよね」

　二

「それにしても、こんなにおいしいお店、どうして【do麻呂】先生も誘わなかったのですか」

　ユキが【be子】に訊いた。

「はっ、冗談はやめてよ」

　串を持ったまま天を仰ぐように吐き捨てる【be子】。

「あんな奴連れてきたら、あなたたち、あたしとあの男の串の刺し合いに巻き込まれるわよ」

「ははっ、過去にそんなこと、あったんですか」

　万三郎が冗談だろうと笑って突っ込んだのだが、【be子】は意外にも、ビールジョッキを眺めながら言う。

「過去には、ね」

「えっ、過去に【do麻呂】先生とこの店に来たことがあるのですか」

　驚いて訊き返すユキの後ろから、看板娘、五郎八の声が聞こえたので、杏児はさらに驚いてそちらを振り返った。杏児のビールをカウンターに置きながら五郎八がこう言ったからだ。

「なんだか懐かしいお名前が聞こえました。【be子】さん、もう長い間【do麻呂】さんとご一緒じゃあないでですね。【do麻呂】さん、お元気ですか」

　杏児は五郎八の質問を聞いて、思わず【be子】をうかがう。【be子】は万三郎やユキからも同様に驚きの目で見られていることを分かっているのだろう、少し恥ずかしそうにうつむいて、小さな声で五郎八に答えた。

「ええ、元気よ」

　【be子】はその後に当然期待される説明をごまかすかのように、自分のビールをぐいぐいあおる。ぷはあと言って口を拭ってから、傍らの万三郎に言った。

「あんな男のことより、あなたたちＥＴのあと半分、後ろの席の子たちはどうして来なかったのかしらね。あたしが、黒目と元貴族の娘を叱ったからかしら」

　五郎八は話題が変わったと思い、目礼して去っていった。

　万三郎が答える。

「【be子】会長、彼ら三人のチームは、僕ら三人のチームとはライバル同士なんです。今日は僕らが熱心に講義を聴いて評価されたので、彼らはそれが面白くなかったのでしょう」

「ふうん、チーム対抗なんだ」

　【be子】は今日一緒に来なかった三人の言動を思い出している風だった。だが、好奇心優先の杏児は、チーム・スーペリアのことよりも、先ほどの五郎八のセリフが気になってたまらず、ついに【be子】に訊いてしまった。

「【be子】会長、立ち入ったことですが、大きく分けて三つ、質問があります。第一に、会長は【do麻呂】先生と、以前は仲が良くて、このお店に一緒に来られていたのですか？　第二に、過去にこのお店で【do麻呂】先生と串の刺し合いみたいな喧嘩をされたのですか？　第三に、どうもそれから何年も経っているようですが、今日もあまり仲好さそうではありませんでした。その喧嘩のせいですか？」

　五郎八が置いて行った杏児のビールジョッキの水滴が大きくなって、一筋、二筋と表面を流れ落ちるさまをしばらくの間じっと見つめていたが、ふっと目を上げてニコリと杏児に笑いかけた。

「杏ちゃん、あなた、いいＥＴになるわね」

「は、そうですか？」

　【be子】はアルコールで火照った顔を冷ますように、髪を一度わさりと掻き上げた。そしてほろ酔いで気持ちが大きくなったのか、ふっきれたように言った。

「よし、あなたたちには、あたしの秘密、教えてあげよっかな」

　その言葉を聞いた三人は、素早く内ポケットやらハンドバッグからメモ帳を取り出し、ペンを

手に取ってスタンバイする。その三人一致した素早い動作に【be子】は目を丸くして唸った。

「うーん、あなたたち、若いのに本当に優秀なＥＴね」

三

「あたしがもっと若かった頃の話よ。高齢の母の代わりに、あたしがワーズ年次総会に出席するようになっていたの。みんな、自分が新しい役員に選ばれるのを避けたい一心で、若いあたしに何でも押し付けようとしたわ。毅然として断りきれないあたしには、結局、責任の重いお役ばかり押し付けられた。あたしは、存在感のあった母のせいで少々目立っていたから」

杏児はペンを止めて顔を上げる。前方虚空を見つめる【be子】越しに杏児と同様、万三郎とユキがこちらを見ていた。同じ思いなのだろう。

――目立っていたのは母親のせいではなくて、あなたの服装や立ち居振る舞いが派手だったせいでは……？

三人のそういう思いなど気付くはずもなく、【be子】は遠くを見つめる目のまま、三人に語り始めた。

＊＊＊

「では次の議題に移ります。えー、今回先ほど採択しました、『受け身形の創設に関する規約』第二条に規定されることとなります、『受け身形』であることを示すための委員の選出に関して、立候補または推薦をいただきたいと思います。どなたか、この、過去分詞の前に定置するのにふさわしいワードさまはいらっしゃいませんか」

一同はざわついた。これは非常に重大な役目だと、皆が即座に理解していた。

受け身形制作委員会――その委員の苦労は察して余りある。相当な出動頻度が見込まれるので、かなりエネルギー・レベルの高い、メジャーなワードでなければつとまるまい。

当然、皆の目は自然に大物ワーズたち――【make】とか、【get】とか、【take】とか――に集まる。しかしこれらの大物たちは皆、一様に目を伏せた。

彼らは普段から数多くのイディオムたちをしたがえているので、「これ以上、新たなお役を受けるのはごめんだ、第一、歳（とし）を考えてくれ」と言わんばかりの態度だった。

すると、【lightweight（ライトウェイト）】（取るに足らない人）とか、【nobody（ノウバディー）】（雑魚）とか、【

irresponsible】（無責任な人）といった、年増ワーズ連中が、わざと回りに聞こえるようにヒソヒソ話を始めた。

「【be子】ちゃんとか、いいんじゃない」

「そうだわ、いいんじゃないかしら」

「そうねー、若いし、お母さんもすばらしかったしねー」

　そうすると、その辺りのワーズたちがみな、若くて派手なその見かけゆえに今回も開会前から人目を惹いていた【be子】を見つめた。

　【be子】は当惑する。

――何？　この、自分ではない誰かに向けて、抗い得ない流れをみんなで創るオバサンたちの言動は？　これが噂に聞く、「年度変わりの総会現象」なの？

　【be子】はたまらず、会場内で少し離れて座っていた【do麻呂】に助けを求めて視線を送った。

――【do麻呂】助けて……。

　しかし、【do麻呂】はそ知らぬ顔で手元の資料を読み返すふりをしている。

――あたしに決めそうな周りの声が聞こえているはずなのに……。

　【be子】はピンチを無視する【do麻呂】がうらめしかった。

第七章　ワーズ（二）（4）

四

【be子】は、ワーズ総会に出席している皆の無言の視線にさらされて、何か言わずにはおられない、重苦しい気持ちに襲われた。

【be子】はおずおずと立ち上がる。

「あ、あたしは、皆さんご存知の通り、すでに前回の総会でも決まったお役をいただいています。ですから、このお役は誰が他の方へ……」

【be子】の訴えは切実だった。

前回の総会では、すでに創設が決まっていた「進行形の創設に関する規約」に基づく「進行形制作委員会」の委員の選考が行われ、現在分詞の前に定置して、進行形をつくるための委員として【be子】が推薦され、たちまち全会一致で【be子】に決まったという経緯があるのだ。

これだけでも相当な重責である。【be子】としては、これ以上激務が増えるのはどうしても避けたかった。

「でもさあ、後ろに続くのが過去分詞か現在分詞か、それだけの違いで、違う意味で作文できるわけだから、とっても分かり易くていいと思うのよね。ねー、奥さん！」

【lightweight】が、【nobody】に同意を求める。心得たとばかりに【nobody】はその提案を補強する。

「後に分詞をしたがえるなんて、【be子】さんの存在感って、うらやましい限りだわあ。それに、まだお若いんだから、いい経験になるのではなくて？」

すかさず【irresponsible】が合いの手を入れる。

「ほぼ決まりね。【be子】さんよりこのお役にふさわしい方って、ちょっと思いつかないわ……」

【be子】は唇をかみしめた。

——これだわ。こうしてこのオバサンたちはいつだって、若くて、まだきっぱりと辞退できるしたたかさを持ちあわせていない、あたしみたいなワーズにお役を押し付けて、とっとと家に帰って人気のドラマでも見たいんだわ。エゴの塊なんだ、この人たちは。

　【be子】は辟易しながら、それでも他の人目があるので、角が立たないよう、遠慮がちに反論を試みる。

「でも……『受け身形』、『進行形』両方をあたしがやるときっと混乱します」

【be子】は本当にそう考えていた。

——だって、「受け身」は「受動態」ともいって、文の、いわば縦柱である「態(voice)」の一つ。それに対して「進行形」は、文の横柱である「時制(tense)」の一つ。だから、縦と横の組み合わせによっては、「受け身の進行形」なんてのもあるわけで、そんな場合はあたしが二つの役割を同時にこなすなんてことになる。あたしは疲れるやら、学習者は混乱するやらで、良いことなんかひとつもないわ。

　うら若き【be子】は、【lightweight】や【nobody】や【irresponsible】を精一杯睨んだが、彼女らはひるむ様子もなく、議長の裁決をしれっと待っている。

「優秀なお嬢さんにお任せして、私たちはもう帰りたいわあ」

——この人たちは、混乱の危険性なんて百も承知であたしに役を押し付けているんだわ。ああ、この人たちが早く帰ってドラマを見たいという理由で、後の英語学習者は、こんな複雑な文法を学ぶことになるんだわ……。【do麻呂】、助けて！

　【be子】がすがるような目で【do麻呂】を再び見ると、彼は、あらぬ方を向いて鼻をほじっていた。【be子】は【do麻呂】のその無神経な態度に立腹して思わず歯噛みする。

——きぃー、このおたんこなす！

第七章　ワーズ（二）（**5**）

　五

「『きぃー、このおたんこなす！』って思ったわよ」

　【be子】は、三人のＥＴにそこまで話をしたところで、我に返って思わず周りを見渡した。自分の話が周りに聞こえているのではないかと恐れたようだった。

　だがそれは杞憂だった。「焼鳥いろは」の店内は、満員の客でいよいよ活況を呈していて、喧騒の中、他の客は誰も【be子】の話に注意を払っている様子はない。だが、見回しているうちに彼女は知り合いのワーズを見つけて声をかけた。

「あっ、【so太】くんじゃない！　昨日はどうもー」

　【be子】は大きな声で向こうのテーブルで仲間たちと語らっていた男に声をかけた。
「あっ【be子】さん、来てたんだ。君、昨日僕と一緒に仕事したときも、毎日すごく忙しくしてるって言ってたのに、『いろは』に来るなんて珍しいね」

「今夜は、かわいい子たちに、ここの焼鳥を食べさせたくてね」

【so太】と呼ばれた気さくそうな男は、にこやかな表情のまま三人をちらと見やる。三人は軽く頭を下げる。

「そうかあ、ま、楽しんで」

「そっちもねー」

　【so太】は、テーブルの他のワーズたちと話が弾んでいたのか、【be子】への挨拶もそこそこに、再びおしゃべりに興じていった。【be子】はそんな【so太】に笑顔で軽く手を振ってからカウンターに向き直った。

「ええっと、どこまで話したかしら」

　ユキがすかさず答える。

「おたんこなす、までです」

「ああ、そうね。あの頃の【do麻呂】はね、あたしとは逆に、いろいろな役を引き受けて、自分に箔をつけたがってた。若いから背伸びしたかったのね」

　【be子】は自分のビールをあおる。

「それならなぜその時、【do麻呂】先生は【be子】会長の代わりに、受け身形委員に立候補しなかったのでしょうか」

　万三郎の質問に、【be子】はジョッキを置いてニッコリ笑った。

「たぶん【do麻呂】はね、自分が『助動詞』で、動詞の原形の前にしかつくことができないから、受け身形が過去分詞を伴う以上、自分は対象外だと思っていたはずよ。あたしはあの頃はまだ若くて、そのことをよく分かっていなかったんだけど、彼はすでにそれを知っていたんでしょうね、たぶん」

　そう言ってまた髪をさらりと掻き上げる【be子】に、今度はユキが尋ねた。

「あのう、それならなおさら【be子】会長が、他のワーズではなくて、【do麻呂】先生に助けを乞うたのは、どうしてですか」

　【be子】の手は髪の中ほどで一瞬止まった。うろたえたような【be子】の視線が、目の前のビールジョッキに意味もなく固定された。数秒の間があって、【be子】は顔を上げて、ユキを見て笑った。

「その頃から付き合ってたのよ。あたしたち」

第七章　ワーズ（二）（6）

六

万三郎も杏児もユキも、一様に目を丸く見張り、口が半開きになった。

「そ、『その頃から付き合ってた』って、今も付き合っているんですか」

ユキの問いに【be子】は「ええたぶん」と柔らかく答える。

「あたしは、まだ終わってないと……思うわ」

「たぶん思うわって、そんな曖昧な……」

呆れるユキに代わって杏児が問う。

「ですが、【be子】会長は昼間、助動詞の中でも【do麻呂】先生だけは嫌いだと言ってたじゃないですか」

【be子】は前を向いたまま、かぶりを振った。

「杏ちゃん、研修室でのやり取りは、演技。芝居よ。少なくともあたしはね」

「芝居ィ？　すごくリアルに嫌っていたように見えましたけど？」

【be子】は杏児の方を見てウインクした。

「杏ちゃん、女って、嘘が上手いのよ。杏ちゃんも万ちゃんも、気を付けることね」

そう言われた二人の男は、【be子】を挟んで思わず顔を見合わせ、それから揃って杏児の向こう隣に座っている、ユキの顔を見た。ユキはきまりが悪そうにコホンと言って下を向いた。

杏児が【be子】に訊く。

「でも、なんで演技を……？」

「新渡戸部長があそこにいたからよ」

「はあ……」

「あたしたちの関係、会社にばれたくないの」

　ユキが自分の手帳を開いたまま、新聞記者のように手にしたペンを立て、すかさず突っ込む。

「関係がばれたくないって、【be子】会長！　あなたは昼間、西園寺六姉妹は交際し放題だと、部長の目の前でおっしゃっていましたけど？」

　【be子】は平然と頷く。

「ええ、あたし、【be子】を除いてはね」

「それは、どういうことでしょうか」

「会社には、あたしは、六姉妹の中でいちばん貞操観念の強い女で通ってるの。そのイメージを崩したくないの。それに……」

「それに？」

　【be子】は、ペンを手に、あまりに爛々と目を輝かせて質問してくるユキを見て、ふっと笑いかけてから口を尖らせ、声を低くして言った。

「書かないでよ」

　ユキはハッと気がつくと、手帳を閉じ、ペンを置いて苦笑いした。

「すみません。そんなつもりじゃあ……」

　【be子】は笑って頷いて、答えを続けた。

「ーーそれに、妹たちならともかく、『あたしは他の男と遊び歩いてます』なんて、好きな男の前で自分から言うと思って？」

七

万三郎が確認する。

「その『好きな男』って……【do麻呂】先生のことですよね」

【be子】は頷いた。

「あたしは助動詞が好き。ありのままのあたしでいられるから」

杏児が首をひねる。

「でも……でも、他の助動詞はともかく、【do麻呂】先生は例外だとおっしゃっていたではないですか」

【be子】は寂しそうに笑った。

「杏ちゃん、【do麻呂】は、『自分は特別な助動詞だ』って言ってたでしょう？」

「はい、『役割はあっても意味はない助動詞だ』と」

「もう一つ特別な特徴があるの。【do麻呂】は、他の助動詞たちと違って、普段は『一般動詞』のワーズとだけ仕事するのよ。『be動詞』であるあたしとは、ほとんど一緒に仕事しないの」

杏児は少し思案する風だった。

「そういう意味でも、例外……」

「そう。あたしは彼とは、ほとんど会えない」

うーんと唸った万三郎が口を開く。

「シートレ編成に出動していない合い間の時間帯に、二人で会うことはできないのですか」

「【 I介（あいすけ） 】と【am子】みたいな調子で、【do麻呂】とあたしが一緒にいるところをもし職場で

見られたら大変な噂になっちゃうわ。一緒にいてはいけない禁断の恋だって」

「うーん、そうですかねえ……」

　首を傾げる万三郎に【be子】は説明した。

「”〜ing” を身にまとうとか、『不定詞の前のto』を伴うとかすれば、仕事で会っているとは思うんだけど、その時は直接顔を見ないから分からない。むき出しのあたしたちが直接現場で顔を合わせることはほとんどないわ。みんなそれを知ってるだけに、下手に一緒にいるところを見られると、すぐ噂になる」

　ユキが訊く。

「それで、仕事が終わってから二人でこの店へ？」

「あたしたち、二人とも忙しいの。それでも、仕事が終わってお互いのタイミングが合う数少ない機会に、この店でよく会ってた。この店に来るのは、あたしたちの関係を知っていても、秘密を守ってくれる、信頼できる同僚たちばかりだったから」

　【be子】はユキにそう答えて、向こうのテーブルでおしゃべりに夢中になっている【so太】たちを目で示した。

　杏児が問いを重ねる。

「さっき、五郎八ちゃんが、長らく【do麻呂】さんを見てないって言ってましたけど……」

「そうね、少なくともあたしとは、もう長い間ここへは来てないわ」

　杏児は即座に言う。

「今日、昼間会ったじゃないですか。やっぱり誘えばよかったんじゃないですか」

「彼の顔見たの、久しぶり」

　必ずしも杏児への答えになっていない返答の後、【be子】はジョッキを傾ける。【be子】が飲み干すのを待って、万三郎が訊いた。

「今日、ワーズ・トークに呼ばれているということを、お互いに知らなかったのですか」

「あたしは知らなかったわ。おそらく彼も知らなかったのだと思う。登場して、あたしを認めてからのテンションがおかしかったもの。慌てて取り繕ってる感じだった」

「では、【do麻呂】先生も、新渡戸部長に二人の関係を悟られまいとして？」

「そうだと思う。いや、でも……」

「でも？」

「ひょっとしたら、そうじゃなくって、本気であたしを挑発していたのかも」

第七章　ワーズ（二）（8）

八

三人のＥＴにとって、【be子】のこれまでの告白は、驚きの連続だった。【be子】は、酔いに任せてなのか、自覚した上でなのか、とにかく若い三人に対してあけすけに真情を吐露するほど心を開いていた。三人はいつしか【be子】の恋バナの聴き手になっている。

杏児が気を効かせて、そばを通りかかった五郎八に、【be子】のためのビールのお代わりを頼んだ。

万三郎が訊く。

「どうして本気で【be子】会長を挑発する必要が？」

【be子】は再び両手で髪を内側から掻き上げて、酔いで火照った顔の周りの温まった空気を逃がした。

「ワーズ総会で、あたしが進行形制作委員会の委員に決まった時、あたしはちっとも嬉しくなかった。だけど、彼はあたしのことがうらやましかったみたい。彼は、大切な役をもらって自分に箔をつけたいと考えてたのに、逆にそういうことを望んでいなかったあたしに白羽の矢が当たったから」

杏児が突っ込む。

「でも、今日の研修では、【do麻呂】先生、『僕はうまく言いくるめられて役を押し付けられたのか』と言って、新渡戸部長に詰め寄りかけてたじゃないですか」
「それは現在の心理状態。きっと歳取ってきて、疲れたのよ。若かったあの時は違ってた」

「【be子】会長に嫉妬していたと？」

「さっきの話、受け身形制作委員会の委員に、結局あたしが無理やり選ばれたんだけど、その総会が終わってから、ここ、『いろは』に一緒に来たの。最初は我慢してたけど、お酒が入ってあたしは彼に喰ってかかったわ。どうしてあたしに助け舟を出してくれなかったのかって」

「そしたら？」

「『あの場面で僕にどうしろってんだ。僕が代わりを務めてやれない限り、どうしようもないじゃないか。僕がやれるんなら、喜んで引き受けてたよ。受け身形なんてメジャーな委員会の委員長なんて名誉なことなんだから、喜んで引き受けて、死ぬ気で働けよ』だって」

　杏児が確認した。

「【be子】会長、落ち込んでいたのに、【do麻呂】先生の嫉妬で突き放されたわけですね」

　ユキが怒った口調でつぶやく。

「【do麻呂】先生、男としてサイテー」

　九

　ユキが共感してくれて嬉しかったのか、【be子】は、手元の竹筒に束になって入っていた、自分たちが食べ終えた焼鳥の串から一本引き出すと、串の根元を軽く指でつまんだ。そしてユキの手前にいる杏児に向け、手首のスナップを効かせて、串をクイッと前後に動かす素振りをした。

「彼も酔ってたからそんな風に言ったのかも知れないんだけどね。でも、売り言葉に買い言葉、ついにあたしもカッとなってしまって、串をプスリと、こう……」

「『プスリと』って、刺したんですか！」

　串先を向けられた杏児が素っ頓狂な声を上げる。

「あたしも、仕返しに刺されたわよ」

　【be子】は笑いながら、髪の上から自分の頬に串を刺すようなジェスチャーをした。

「ほ、本気で？」

　【be子】は笑いながら、そんな馬鹿な、と手を振った。

「ふふふ、昔の話よ。やめておくわ」

　しかし、杏児はユキを振り返って感慨深げにつぶやいた。

「なんか、誰かさんと同じ匂いを感じるなあ」

「な、何よ！」

　ユキは、眉を吊り上げて杏児に喰ってかかった。

「終わったことを蒸し返すんなら、割り箸でででもペンでででも、また刺すわよ」

　ユキはそう言って、再び手にしていたペンを顔の横に立てて握って見せた。依然眉は上がっていたが、いくばくかの笑顔が混じっている。

「やめてくれ。僕にとっては、嘘が上手い女より、刺す女の方が怖い」

　【be子】とユキは声を揃えて笑った。

　反対側から万三郎が訊く。

「じゃあ、もう何年も経った今でも【do麻呂】先生は【be子】会長に嫉妬を？」

　【be子】はため息をついた。

「分からない。今日のあの態度。どうなんだろう。今もまだ、そうなのかしら……。もし、そうだったら、あたし、どうしたらいいのか、分からない……」

　そうつぶやいて、【be子】は寂しそうに微笑みながらカウンターに頬杖をついた。

　万三郎は、そんな【be子】越しに杏児やユキと顔を見合わせた。

――【be子】会長、まだ【do麻呂】先生のことを……。

　昼間の派手な振舞いからはおおよそ想像がつかない、【be子】のウブで一途な側面に触れて、三人は痛感していた。

――ワーズたちを深く知るには、しっかり語り合うことが必要なんだ……。

　そこへ五郎八がビールを持ってきた。

「【be子】さん、おまちどおさま」

「あ、五郎八ちゃん、ありがと」

　【be子】は表情から寂しさを消しきれないまま、五郎八を振り返って礼を言った。

十

「五郎八ちゃん、ごちそうさん」

「はい、【bar-hopper（バー・ホッパー）】（飲み歩き好きな人）さま、【 juicer（ジューサー） 】（大酒飲み）さま、またお越しください、お気をつけて！　あ、いらっしゃいませ、何名様でしょうか」

「焼鳥いろは」の客足もピークを越えつつはあったが、三組帰れば二組が来店するといった感じで、各テーブルは二回転目の客を迎え始めた。あいかわらず、おやっさんとおかみさんは厨房にかかりっきりになっているし、五郎八も店内を忙しく駆けずり回っていた。

未来の上司たちとはいえ、まだ駆け出しの三人の若者と一緒に、久しぶりに着飾らない時間を過ごしている【be子】の口は滑らかに動き続けた。彼女は、店を変えて今の話題をリセットするつもりはないようだ。

早速【be子】への質問を再開した杏児も、そして他の二人も、リラックスはしているものの、アルコールの量を意識的にセーブしている。今日【be子】から、「あなたたち、あたしの話をもっと聴きたいなら、夕食一緒に食べてもいいわよ」と言われた時から、こんな忙しいワーズと時を過ごせるなんて、またとない勉強の機会だから今夜は酒におぼれまいと、みどり組の三人で事前に示し合わせていたのだ。

「妹たちがうらやましいと思うことも、あるわ。【I介】とラブラブな【am子】以外は、みんな恋多き人生を送ってるもの。あたしみたいに、報われない恋に執着してないもの……」

――いや、あなた。妹さんたちの人格で恋多き人、やってるんですよ！

突っ込みたくてもさすがにそうは言えない杏児や万三郎は、どんな言葉で【be子】を慰めてよいのやら分からずに、ただ【be子】同様、自分のビールジョッキを意味もなく見つめるはめになっていた。

【be子】がため息をついて口を開く。

「あたしが【do麻呂】と一緒に仕事できるのは、本当に限られた時だけ」

男性ＥＴたちより幾分【be子】に共感気味のユキが優しく訊く。

「限られた時って、具体的にはどんな時なんですか」

　その時だった。

「きゃあああっ！」

　テーブルの食器類が床に落ちて料理が飛び散り、女の叫び声が店内に響き渡った。喧騒は一瞬にして静まり返り、【be】子もＥＴたちも店内の他の客も、皆が声の源を見た。

十一

【so太】が、今入店してきた三人の男たちの一人に胸ぐらをつかまれていた。つかんでいる男は大柄で、筋肉質な肉体をしている。金糸で昇り龍が刺繍された黒地のＴシャツから伸びる太い腕にはタトゥーが入っていた。

【so太】は椅子から無理やり引き上げられ、つま先立ちの状態になって、恐怖におののいた目で男を見ている。

少し遅れてテーブルからこぼれ落ちた、汲み出し豆腐が入っていた木製の大椀が、静寂の中、「おわんおわん」とひとり音を立てながら床をコマのように回転し、音の周期が早くなったかと思えば、ついに床にうつぶせになって制止、乾いた音を止めた。店内のすべての音が封じ込められたように静まったため、【so太】の胸ぐらをつかんだ男の低い声が際立つ。

「おい、お前、通路に足、出しちゃいかんな。他の客が躓いたらどうする。あん？」

そこへ、もう一人の細身のチンピラ風の男が、【so太】と同じテーブルの女に歩み寄って行った。この男も、黒の、胸板のラインが出るようなきつめのシャツを着ており、その第二ボタンまで外した間から金の太いネックレスがのぞいている。

「おっ、この女、叫び声もかわいかったけど、顔もチョーかわいいじゃねえか。ちょっと、ほっぺたを見せてみろ。ほう、【babester（ベイブスター）】（かわいこちゃん）ってのか、いい名前じゃねえか……ってか、名前、俺と似てるなあ。俺はよ、【sinister（シニスター）】（邪悪な）ってんだ。似た名前のよしみで、こっち来て俺に酌してくれよ」

そう言うと、【sinister】と名乗る男は【babester】の手首をつかんだ。

「や……やめて」

恐怖に顔を引きつらせて【babester】はその手を振りほどこうとする。そこへ、「何するんだ、嫌がっているだろ！」と、【so太】や【babester】と一緒に来店していた同僚の男が、仲間の女性の手首をつかんでいる【sinister】の間に止めに入る。

とたんにその男は、テーブルの上に身を投げ出した。テーブルに残っていた皿やジョッキが男の身体と一緒に、壁に当たって床に零れ落ちた。【sinister】のげんこつが彼をぶっとばしたのだ

った。

「おっと、元ボクサーの悪いクセが出ちまった」

「きゃあああっ！」

　【babester】は、ヒステリックに泣き叫ぶ。

「おい、【sinister】、一般人ワーズに手を出すな。止めておけ。おい【 evil（イービル） 】（邪悪な）、お前も【so太】を離してやれ。俺は騒がしいのは好きじゃないが、こんな、お通夜みたいな静けさも好まん」

　低い、落ち着いた声で連れの二人にそう言った三人目の男は、店の客が固唾を飲んで見守る中、今しがた客が帰って空いたテーブルの一席に腰かけ、そして入口のところで完全に凍りついている五郎八に静かに呼びかけた。

「お嬢ちゃん、びっくりさせて申し訳なかった。悪いが、このテーブルを片付けて、生ビールを三つ、持って来てくれるかな」

「は……は、はい！」

　我に返った五郎八は、静寂の中、あわててテーブルに駆け寄ってきて、前の客の皿を片付け始めた。

　そこへ厨房からおやっさんが出てきて、五郎八をかばうようにして、ビビりながら三人目の男に言った。

「あ、あんたたち。店で騒ぎを起こすようなら帰ってくれ」

十二

三人目の男は、連れのチンピラ共とは違い、仕立ての良いアイボリーのスーツを着てネクタイを締めていた。ただ、外は夜だというのに、フレームの細いティアドロップ型のサングラスをかけていた。ブラウンカラーのレンズを通して、うっすらと目が見える。男は顔を上げて、声を震わせながら訴えるおやっさんを見ると、その場に立ち上がった。おやっさんは娘を背中にかばいながら男を見上げ、思わず後ずさりする。

万三郎が目視でおやっさんの身長と比べると、サングラスの男は大きかった。【so太】の胸ぐらをつかんだ【evil】という男と同じくらいか、もっと大柄かもしれない。

立ち上がった男は、おやっさんに頭を下げた。

「ご主人、申し訳なかった」

おやっさんの驚いた顔をよそに、男はチンピラたちの方を向いてわずかに声を荒げた。

「おい、お前らもこっちへ来て、謝れ」

「……はい」

【so太】から手を離した大柄な【evil】と、女の手をようやく離した、目つきの悪い【sinister】が、三人目の男のところへ寄ってきた。
サングラスの男があごをしゃくると、二人は仕方なくおやっさんに向かって頭を下げた。

「この通り、二度と面倒起こさせませんので、今回は勘弁してやってもらえませんか」

丁重にそう言ったサングラスの男は、スーツの内ポケットから財布を取り出すと、万札を十枚ほど束ねて、おやっさんの調理服の襟元へそっと差し入れた。

「こいつらが食器、割っちまって……」

続いて男は【so太】たちのテーブルの方を向いた。

「あんたらにも、すまないことをした。ここの勘定は俺に支払わせてくれ」

　さらに店内をぐるりと見回しながら言う。

「お客さんたち、済まなかった。さあ、食事を続けてくれ」

　客は次第に、この男から自分たちの同席者に視線を戻していったが、喧騒が戻るにはなお時間が必要だった。あちこちのテーブルでひそひそと会話が再開されたのは、おやっさんが男のテーブルを片付けてから厨房に戻り、おかみさんが男たちにビールを運び、五郎八が床に散乱した料理や皿を片付け始めてからだった。

　三人のＥＴは、カウンターから一部始終を見ていたが、その間、【be子】はジョッキを手にしたまま、男たちに丸めた背を向けていた。

　万三郎がその【be子】に声をかける。

「【be子】会長のお友達の【so太】さんたち、災難でしたね」

「シーッ！　あたしの名前を言わないで。殴られた【pity（ピティ）】（可哀そうな）、大丈夫そう？」

「えっ、ええ、隣の【babester】さんが、その方の口元の血を拭ってあげています」

「そう。あいつらは、どうしてる？」

「あいつらって、あの三人ですか。今は静かに飲んでますよ。五郎八ちゃんがさらにビールお代わり持って行きました。【be子】会長、もう普通にして大丈夫みたいですよ」

　【be子】は押し殺した声で万三郎を叱った。

「あたしの名前を呼ばないでって言ってるでしょ！　それと、五郎八ちゃんの手が空いたら、お勘定してってこっそり言って。大きな声で呼びとめたらダメよ、分かった？」

「わ、分かりました。でも今彼女、忙しそうです」

　【be子】は前を向いたまま失望したように肩をすくめて小さく手を広げた。

十三

次第に店は平穏を取り戻していった。テーブルによっては笑い声が出るなど、何事もなかったように喧騒が戻りつつある。

荒くれ男たちは時折り会話を交わしながら飲食をしていたが、彼らの話す内容はその喧騒に埋没して万三郎たちには聞き取れなかった。

口からの血が止まった【pity】は、今夜はケチがついたからと、心配してくれる【babester】を伴って先に店から帰って行ったようだ。一方、【evil】に胸ぐらをつかまれた【so太】は、そそくさと逃げるように店を出るのが嫌らしく、意地になってテーブルにひとり残って、もくもくと焼鳥の串をしごき、酒をあおっている。

「五郎八ちゃんは、まだ？」

丸めた背中が幾分まっすぐになってきた【be子】が、万三郎に訊く。

「はい、伝票は持って行きましたけど、計算する時間がまだないみたいですね。このお店はＫＣＪ指定店じゃないんですか」

「違うわ。だからこそ昔は【do麻呂】と密会できる店だったの。ＫＣＪ指定の店では、ワーズＩＤから、誰といたかが人事部にばれてしまうでしょ」

杏児が、このテーブルも気分を一新しようと、わざとポンと手を打って【be子】の関心を引いた。

「そうそう、思い出した。【be子】会長、さっき話が途中で止まっていました。会計が済むまでの間に教えてください。どんな時に【do麻呂】先生と一緒に仕事ができるのですか」

【be子】が口元に人差し指をあてて杏児の方を向く。

その時、五郎八が、一人で入店してきた新しい客に声をかけた。

「いらっしゃいませ。あっ、【do麻呂】さん！」

「【do麻呂】さんだって？」

　杏児が思わず驚きの声を発する。

【be子】はぎくりとして入口の方を向き、入口に立つ【do麻呂】と目が合った。【do麻呂】は、頭に黄色い烏帽子をかぶっている。昼間は黒だったが、色違いを常に携帯しているのだろうか。酔っているようだったが、何か、思いつめたような深刻な表情だ。

「ド、【don't】……どうして？」

　【be子】は驚いた顔でつぶやく。

　驚いたのは、万三郎たち三人のＥＴも同じだったし、五郎八も思わず入口に駆け寄って行って、【do麻呂】に伝える。

「【be子】さん、あそこに来られていますよ」

「ああ」

　【do麻呂】は、思いつめた表情のまま、つかつかとカウンター席の【be子】に歩み寄った。カウンター席もいっぱいなので、ユキと杏児は、自分たちが【do麻呂】のために席を空けなければと、席を立とうとする。それを【do麻呂】は手で制して、【be子】の前まで来て、立ったまま【be子】に言った。

第七章　ワーズ（二）（**14**）

　十四

「まさか今日、社内で君に会えるとは思ってもみなかった」

【be子】も【do麻呂】の真意を読みかねて当惑しながら答える。

「あたしも。【do麻呂】、あなた、酔ってるの？」

「君がみどり組の連中を晩メシに連れて行くと昼間言っていたから、僕はチーム・スピアリアーズの連中に誘われるがまま、さっきまで別の店で飲んでた。君らはきっとここだと思っていた」

　【be子】の表情が曇った。

「あたしに張り合ってのことなの？」

　【do麻呂】はかぶりを振る。

「僕は気が動転していた。君と向き合う覚悟ができていなかったから」

　【be子】は悲しい顔をして【do麻呂】に言う。

「じゃあ、なぜここへ？」

「スピアリアーズの連中から、なぜ僕が君と仲良くないのか訊かれた。説明しているうちに、君にどうしても会いたくなった。彼らと別れてから、僕は一人でここへ来た」

「それで【not】をかぶり直して来たの？」

　ユキが杏児に耳打ちした。

「ほうぶん先生が言ってた。【not】は、黄色い何かなんですって。ワードの気分次第で、身に着けるアイテムは黄色でさえあれば何でもいいんだって」

　説明は聞こえていたが、【do麻呂】は二人の方を見もせずに言葉を続ける。

「君に会える確率を少しでも高くするなら、【do】より【don't】の方がいいと思って」

　【be子】はうつむいた。

「そう……。正式に別れを言いにでも来たの？」

　【do麻呂】はそれには答えず、うつむいている【be子】をまっすぐ見て、その両肩を持って自分の方を向かせた。【be子】はびっくりして顔を上げる。【do麻呂】は一度唾を呑んで、はっきりとした口調でゆっくりと言った。

「【be子】、僕は君のことが好きだ」

　周りのＥＴたちは、思わず声を上げそうになるほど驚いた。だが、一番驚いたのは【be子】本人だ。

「よ、酔った勢いで、調子良いこと言って。だったら、どうして今まで何年も、つれなくしてたのよ」

「ごめん……」

　【be子】の目がみるみるうちにうるみ始める。

「もうあたし……あきらめかけてた」

「僕はあのとき、たしかに君に嫉妬していた。大きな役割を担う君が眩しかった。だが、君につれなくしたのは、それだけの理由じゃない。とても大切なことを君は知らなかった。僕がそれを教えるべきか、それをずっと悩んでいた」

　昼間とはうって変わって真剣なまなざしの【do麻呂】の横顔を間近に見ていて、ユキは、【do麻呂】の美男子ぶりにうっとりしていた。

　その【do麻呂】を、【be子】が正面から上目使いに見上げる。

「何？」

「【be子】、実は君は……」

「おう、兄貴。あっちに珍しい男と女がいるぜ」

　【do麻呂】を遮るように大声を出したのは、荒くれ者のテーブルの、目つきの悪い【sinister】だった。

　カウンターの五人は思わずそちらのテーブルの方を見た。【be子】はテーブル席からこちらを向いているサングラスの男と目が合ったような気がした。

「最悪……」

　【be子】は思わず目を閉じて舌打ちした。

　十五

「あっ！」

　振り返った【do麻呂】も、事態を理解して告白を中断し、警戒の表情を浮かべた。

　サングラスの男は事態を理解すると、にやりと片方の口辺を吊り上げて、おもむろに席を立った。あれから三十分以上経って、三人にかなりのアルコールが入り、先ほどまでの自制心が保たれているとはもはや信じがたい。

人々はおしゃべりをやめた。店内に再び緊張感が走る。

「ほう、誰かと思ったら、面白い取り合わせの二人じゃないか。好きだの眩しかっただの、えらくロマンチックな言葉が耳に入ってきたが、お前ら、一緒になっちゃ、ＫＣＪ的にマズいんじゃないのか？」

　サングラスの男はしゃべりながらゆっくり歩み寄ってきた。その後ろに、【evil】と【sinister】が従う。

「【be子】、お前、またいっそう綺麗になったな」

　男の語りかけに【be子】は顔をそむけてそっけなく答えた。

「そう、それはどうも」

　【do麻呂】が勇気を振り絞って、【be子】をかばうように前に出て言った。

「おい、あっち行けよ。今、大事な話、してんだから」

　だが、サングラスの男の後ろから前に出てきた【evil】が、その【do麻呂】の肩をつかんで強引に横に避けさせた。【do麻呂】は抵抗したが、直衣姿のまま【evil】に羽交い絞めにされて動けなくなった。

「兄貴の話より大事な話ってのは、ない。【do麻呂】、覚えておけ」

　サングラスの男はそう言う【evil】を手で制した。

「おい【evil】、手荒な真似はするなよ。さっき、ここのおやじに謝ったばかりだ」

【sinister】は、万三郎ら若い連中を、すごみを効かせて無言で睨め回す。サングラスの男は【be子】の目と鼻の先まで近づいてきて言った。

「【is子】とはしょっちゅう一緒に仕事してるぜ」

「あの子はあの子、あたしは関係ないわ」

　恐怖の色を浮かべながらも、【be子】は気丈にそう言って脇を向いた。

　男はフッと笑う。

「姉妹じゃねえか。関係なくはねえ。実際、【is子】によく似てるぜ、お前は」

　男は【be子】のあごをつかんでクイと顔をこちらにむけさせる。【be子】は喉の奥で小さく「ヒッ」と言ったものの、それでも強がって口ごたえする。

「だからどうだっていうのよ」

「なあ、【be子】、そうつれなくするなよ。一緒に一夜過ごした仲じゃねえか」

　男は【be子】のあごから頬へ、そして耳へとゆっくり指を移動させる。【be子】はそれを手で払いのけた。

「だからそれは、あたしじゃなくて、【is子】だって、以前から何回も言ってるでしょ！
　人聞きの悪いこと言わないで」

　男に食って掛かった【be子】は、身体を押さえられている【do麻呂】の方を向いて、懇願するように言った。

「【do麻呂】、信じて。あたしはそんなこと、してない」

　杏児は唇をかみしめて【do麻呂】の様子をうかがう。

――多重人格者の【be子】会長が、【is子】の人格のときに本当にこの男に身を任せたのだとしたら、【do麻呂】先生は、【be子】を許せるのだろうか。

　まったく時間をおかずに、【do麻呂】が【be子】に答えた。

「もちろん、君を信じてる」

十六

「もちろん、君を信じてる」

【sinister】はおどけた調子で【do麻呂】のセリフを真似した。そして、「やさ男が。調子こいてんじゃねえぞ！」と言って、【evil】に後ろから羽交い絞めにされて身動きの取れない【do麻呂】になぐりかかろうとした。

「あっ！　あいたたた……」

次の瞬間、【sinister】は脚をかかえて床に転がった。【sinister】と【do麻呂】の間に素早く割り込んできたのは、【so太】だ。彼は一人、焼き鳥を喰っては串立てに立てていた串の束を持って、ピンチの同僚ワーズたちにそっと近づいてきていた。そして【sinister】が【do麻呂】になぐりかかるタイミングで、姿勢を低くして【sinister】にタックルするように飛び込み、串の束を、奴の踏み込んだ太ももに思いっ切り突き立てたのだ。串の束は、脚に刺さりこそしなかったが、奴のズボンの下では、少なからず血がにじんでいることだろう。

「さっきのお返しだ」

「野郎！」

【do麻呂】の拘束を解いて、【evil】が【so太】の襟首を後ろから引っつかまえた。
拘束を解かれた【do麻呂】は、数歩、前に駆けて、勢いでサングラスの男に体当たりして、突き飛ばそうとした。だが、男は素早い身のこなしで【do麻呂】の体当たりをひらりとかわす。バランスを崩した【do麻呂】を万三郎が抱き留めた。

「待って！」

本能的に次の反撃アクションに移ろうとする男の前に【be子】が真っ直ぐ手を横に伸ばし、手のひらを広げる。

「うっ……」

サングラスの男の動きが停止する。同時に、【so太】は、襟にかかった【evil】の手を振りほどいた。

【be子】が手のひらを広げたまま、男から目をそらさずに言った。

「杏ちゃん、万ちゃん、ユキちゃん。【do麻呂】と私が一緒に働ける、数少ないケースが、
今よ！」

「はい？」

【be子】がまさかこんなところでさっきの自分の質問に答えるとは予想しておらず、杏児はきょとんとした。

【be子】のセリフを聞くと、黄色い烏帽子をかぶった【do麻呂】も【so太】も、サングラスの男の方に向いて並び立った。そして【do麻呂】が、次に【be子】が、さらに【so太】が順番に口を開いた。

“Don’t be so …”

最後は三人が口を揃えた。

“bad!”

【do麻呂】の扇がバサリと全開し、ポーズが決まって「日本一！」の文字が映えた。

十七

今度は、サングラスの男の方がきょとんとした。そして、しばらく正面の【be子】をサングラス越しに眺めていたが、ついに笑い始めたのだった。

「ふっ、ふふっ、ふはははは、あはははは……。

“Don't be so bad!”（そんなに悪ぶるな）か。よくできたシャレだな……。だが俺はあいにく知的なものより、本能的なものに反応するんだ。来いよ【is子】、いや【be子】」

男はにやけながら【be子】の伸びた手首をつかんで自分のところへ引き寄せようとした。

「やめなさいッ、いい加減になさい！」

そう言ったのは、【be子】ではなくて、ユキだ。ユキが男の前に歩み出て来たので、万三郎と杏児も慌てて彼女の両横に並んだ。

脚の痛みをこらえて立ち上がった【sinister】が、怒りに燃えて三人に近づき、因縁をつける。

「なんだぁ、今度はガキどもがシャレを言うのかあ？」

「うっ！」

そのとき突然、サングラスの男の眉間に皺が寄った。

「ま、まさか……」

茶色のレンズの向こうで男が目を凝らして見ていたのは、三人の男女の胸に光る金の鴨だった。

「い……ＥＴ……か！」

そして彼は、【sinister】と【evil】に鋭い声色で言った。

「おいっ、お前ら、絶対に手を出すな！」

【sinister】は驚いて動きを止める。

　それから男は、金鴨をつけたユキをにらむようにして訊く。

「あんた、名前は？」

　極度のあがり症のユキは、震えながらも気丈に口ごたえする。

「そそそっちから名乗るのが、れれ礼儀でしょう」

　男はぐっとユキに近寄ったので、周辺の全員がすわと身構える。

「あんた、このほっぺたの字、読めるか」

　男はユキの目の前に自分の頬を近づけ、人差し指で示した。

「【bad!】……」

　つぶやくように言うユキに、男は大きめの声をかぶせて、ユキの目の前に、その人差し指を「！」のように垂直に立てて見せた。

「ベャアーッド、ハッ！　だ。『！（エクスクラメーション・マーク）』がついているだろう。これが大事だ。ＫＣＪのワーズ社員には俺の他にも【bad】がいるが、この『！』のあるなしで俺と区別する」

　【bad!】はそう言うと、自分でサングラスを取った。切れ長の一重まぶたがピタリと、今度は万三郎の目の上に据えられた。

　【bad!】が低い声で凄みをきかせる。

「この店で俺達がやったこと、人事部にチクったら、あんたら、ただでは済まんぜ」

　万三郎はやっとの思いで【bad!】に答える。

「あ、あなたが、【do麻呂】さんと【be子】さんの関係を、人事部にばらすと言うなら、僕らもあなた方の暴挙を報告します。あなた方が言わないなら、私たちも言いません」

　【bad!】が数秒の間、目を細めてじっとこちらの目を見ている時、万三郎は猫に見すえられたねずみのように、身のすくむような恐怖に襲われていた。だが【bad!】は、ふっと笑うと再びサングラスをかけた。

「よし。取引成立だ。俺は名乗った。あんたら、名前は」

「中浜万三郎」

「三浦杏児」

「福沢由紀」

　【bad!】は三人の目を刺すような視線で順番に見て、静かに言った。

「覚えておこう。次に会う時は、もっと友好的に会えたらいいな」

　【bad!】は意味深な笑いを浮かべつつそう言うと、【evil】と【sinister】を従えて、店の入口にゆうゆうと歩いて行き、そこで凍ったように直立していた五郎八に、胸ポケットから再び札束を数枚出して受け取らせた。

「お嬢ちゃん、済まねえな。またやっちまった。これで許してくれ」

　【bad!】たちはそう言って「焼き鳥　いろは」を出て行った。

十八

ユキはカウンターの椅子にへなへなと座り込んだ。万三郎と杏児はそんなユキを両側から気遣いながら言う。

「ユキ、君すごいなあ。勇気ある行動だったよ」

「ああ。【be子】会長の危機を救ったんだもんな」

【so太】がそのユキや万三郎たちを交互に見ながら言った。

「驚いた。あんたたち、ＥＴだったんだ」

【do麻呂】は、その【so太】の前に立って、着崩れたスーツの上着をただしてやる。

「【so太】、さっきはありがとう、助けてくれて」

【so太】は頭を掻く。

「いや、せっかく数年ぶりに【do麻呂】と【be子】のよりが戻りそうなのに、邪魔立てする奴は許せなかったんだよ」

今度は【do麻呂】が【be子】の方をちらりと見て頭を掻いた。その時、自分がかぶっている黄色い烏帽子に気付き、【do麻呂】はそれを外した。

【be子】は、【bad!】たちがからんでくる前に【do麻呂】との間に起こっていた会話を思い出したようで、彼に向かってどういう態度を取ればよいのか分からず、その戸惑いを誤魔化すように【so太】の方を向いて言った。

「そ、それにしても、ザックリ派手に刺したわね」

「まあね。だけど見かけほど深くは刺さらないもんだって」

そう答えた【so太】に付け加えるように、杏児が【be子】に笑いかける。

「【be子】会長は体験的にそれを知ってるはずですよね、【do麻呂】先生とのバトルで」
　万三郎とユキが思わず顔を見合わせ、ユキが後ろから杏児のスーツの裾を軽く引っ張って声をひそめて杏児を諫める。

「ちょっと杏児、余計なことを……」

「なんだ、ひょっとして【be子】から、昔のケンカの話を？」

　【do麻呂】はちょっと驚いた風だったが、【be子】に向き直って言った。

「あのときの痛みはまだ癒えてないよ」

「え？」

　顔を上げた【be子】に【do麻呂】は寂しそうに笑いかけた。

「いや、心の痛みのことだ。だって、あの時から今日まで、僕の気持ちはずっと変わっていないから」

「だったら！」

「だったらなぜあの日、離れていったのよ！　と、君は訳が分からず、僕を恨んでるんだろう？」

　【be子】は下唇を噛んで上目づかいに【do麻呂】を睨んだ。

「【be子】、聞いてほしい。君も僕も勘違いしていたんだ」

「勘違い？」

「君には、もうひとつの人格があるんだ。君は、僕と同じ、助動詞でもあるんだ」

　【be子】は睨んだ目を次に大きく見開いて、それから悲しそうに目を伏せて頭を横に振った。

「それは……ないわ。あたしの後ろには、動詞の原形は来ないもの」

　すると【do麻呂】は、【be子】の両肩を抱いて言い聞かせるように訴えた。

「いや、助動詞の君は、ただの助動詞じゃない。現在分詞や過去分詞の前に座ることができる、『特別な』助動詞なんだ（１）」

「……」

「進行形、受け身形は、君じゃなければ完成しない。進行形が君の役割になったから、僕は君への対抗意識もあって、受け身形の役割を狙っていた。僕は若くて何も知らなかったから、自分は何でもできると無邪気に信じられたんだ。そうしたら、総会の前夜、もう引退していた親父が僕に言ったんだ。

「【do麻呂】、お前、明日の総会で受け身形制作委員会の委員に立候補しようと思ってるだろう」

「えっ、親父、どうしてそれを？」

「我がせがれの考えることなど、おおよそ見当がつく。いいか【do麻呂】、よく聞け。お前にはあの仕事はできん。立候補はあきらめろ」

「な、なんでだよ、そりゃ僕はまだ若いよ。だけど、そんなの、やってみなけりゃ分かんないだろ！」

「いや、そうじゃない。お前の能力の問題じゃないんだ。今から俺が大事なことを話す」

十九

「そうして僕は、親父から真実を知らされた。受け身形の委員たちは過去分詞たちだ。後ろに必ず動詞の原形が来る僕には、彼らと仕事をすることができない。僕には決してできない役割だった。天分を知らされたってわけさ」

【do麻呂】は自嘲気味に片方の口辺を上げた。【be子】は身じろぎひとつせず、【do麻呂】の目を見すえて、真剣に話を聞いている。

「だからあの時、君が僕に助けを求めていたのはよく分かっていたけど、僕は君にそっけなく振る舞った。あんな華やかな重責を担える君が眩しかった。そして、若かった僕は素直になれなかった」

「だけど……だけど、だからといって、何年もあたしを放っておくことないじゃない！」

【be子】は髪を掻き上げて、改めて【do麻呂】をキッと睨んだ。酔いが回っているせいか、それとも涙ぐんだせいか、【be子】の目尻はほんのり赤みを帯びて、眉が吊り上ってなかったら、その艶やかさに【do麻呂】ならずともドキリとさせられたに違いなかった。

「君とは一緒にいられない、と僕は思っていた」

「どうして？」

【do麻呂】はため息をつく。

「君は特別な助動詞だと、あの時親父から聞いた。そして、その上で親父がこう言ったんだ。『風の噂で聞いて知っている。お前は【be子】と付き合い始めたそうだが、あの子は自分では気づいていないかも知れんが、お前と同じ、助動詞だ。よく考えてみろ、これからどれだけあの子と会えると思っているんだ』」

「……どういう意味？」

「助動詞は、一つの文に二つは入れない（２）。例えば、【may（めい）】ちゃんと【　can（きゃん太郎）　】くんは一緒になれない。僕と【be子】も……」

「一緒にいられることがほとんど、ない……」

　言葉を継いだ【be子】に、【do麻呂】が頷いた。

「前夜、親父が言った言葉が、総会の間もずっと胸に渦巻いていた。『ほとんど会えない相手と、これから末永く、お前は付き合っていけるのか。心の傷が深くなる前に彼女とは別れた方がいいんじゃないか』」

　【be子】は黙っておられず、何かを言おうとして口を開きかけた。だが言うべき言葉が思いつかず、ただ無言で【do麻呂】の目を見て、想いを訴えるしかなかった。

　【do麻呂】は続ける。

「実際、ここ数年、君とはほとんど会うことがなかった。数回、シートレに乗り合わせたが、【not】を伴うオーダーばかりだったから、君と素顔で居合わせたくなかった僕は、これ幸いと、直衣を脱いで、黄色い全身タイツを着て、サングラスをかけて君の前に現れたんだ」

「ええッ、何も、黄色い全身タイツなんか着……あ痛ててっ！」

　二人の会話を横でじっと聞いていた杏児が反応しかかったが、場を茶化すのをユキが許さなかった。彼女は焼き鳥の串先で、後ろから杏児の手の甲をプッと突っついたのだ。

　【do麻呂】はちらりとＥＴたちに目をやり、そのままつぶやく。

「だけど……」

「だけど……？」

　続く言葉を待つ【be子】にまっすぐ向き直って、【do麻呂】は心情を吐露した。

「何年経っても、君を忘れることはできなかった」

「……」

「そして今日、部長やＥＴたちが見ている前で君と鉢合わせになって、僕は気が動転して、どうしたらいいのか分からなくて、つい不自然な態度を取った」

「……そうだろうと思ったわ」

「僕は自己嫌悪に陥っていた。講義が終わったら早々に一人になりたかった。だが、君がこの子たちと部屋を出て行ってすぐ後、後列の三人のＥＴたちが、ぜひともと言って僕を飲みに誘ったんだ」

　セリフの途中から【do麻呂】は、視線を万三郎たちに向けた。

「実は、ほうぶん先生も一緒だったんだ」

「ええっ？」

　万三郎は驚いてユキと顔を見合わせる。

――ということは、スピアリアーズの連中、俺たちを出し抜いて、ほうぶん先生と……。

　万三郎もユキも、そして杏児も、しまった！　という顔をした。

――あいつらに一歩先んじられた。

　【do麻呂】は、万三郎たちのそのような思いに頓着することなく、改めて【be子】を見つめる。

「そして、ほうぶん先生から教えてもらったんだ」

　二十

「おぬしと【be子】どの。二人はなぜそんなに仲が悪いのか、それがしにはとんと合点がいかぬが」

「先生、二人とも助動詞だから合わないんです。物理的にも性格的にも」

「おぬしらは、動詞として働く場合もあろう？　助動詞プラス動詞で、二人で力を合わせて仕事することもあるではないか」

「”Don’t be～”でしょう？　その時は、僕は黄色い全身タイツを履いてグラサンかけて、直接の接触を避けることにしています」

「いや、【not】を伴う場合が多いには多いが、【not】を必要としない場合も、ある」

「何ですって？」

「ははは。長年、文法を研究してきたそれがしの言うことは、信じられぬかな」

　＊＊＊

　【do麻呂】は今や自信ありげに言い切った。

「doとbeは共存できる。ほうぶん先生に教えてもらって、僕はようやく、罪なき親父から植えつけられた思い込みの呪縛から自分を解き放った。それは【be子】、君の本質を僕が思い出したからだ。そしたら、いてもたってもいられなくなった。【be子】、君への想いがあふれて……」

「すてき……」

　いつしかＥＴたちと一緒になって話を聴いていた若い五郎八が見とれて思わずつぶやく。我に返った万三郎が店内を見渡すと、テーブルの客はみな、声をひそめてこちらを向いて、ことの成り行きを固唾を飲んで見守っていた。

　もともとイケメンの【do麻呂】だった。その彼が【be子】の両手を両手で包み、【be子】を見上げるようにして切実に訴える姿は周りの心を打った。たった一人を除いて。

「黄色い烏帽子で良かったよ。いくら想いがあふれたからといって、黄色の全身タイツ着てここに現れたりなんかしたら……あ痛たたた！」

　ユキは【do麻呂】と【be子】を見つめたまま、さっきより強めに杏児の手を刺していた。

「【be子】、これまでつれなくしてごめん。だけど……」

　【do麻呂】はそこまで言うと、【be子】の手を包む両手にグッと力を入れて、泣きはらしたように目尻に朱を注いだ【be子】をまっすぐ見すえ、強く訴えた。

「僕はやっぱり、君が好きだ」

「【do麻呂】……」

　店内の誰もが【be子】の次の言葉を待っていた。

　ところが【be子】は、【do麻呂】の手をそっと振りほどくと、背中を向けて顔をうつむけたのだ。長い髪がさらさらとすだれのように彼女の顔を傍目（はため）から覆い隠した。

「【be子】……」

　沈黙が店内を支配する。

　その時、顔をうつむけたままの【be子】の口から英語が漏れた。

“I hate（ヘイト）…”

――え？

　ユキの胸に黒い影がよぎった。いや、ギクリとしたのは、ユキだけではないだろう。

【be子】は声を詰まらせながら、懸命に言葉を続ける。あるいは泣いているのではないかと思われた。

“I …hate …ever to be left alone.”
（あたし、ひとりぼっちにされるのはもうイヤ）

それから【be子】は顔を上げ、振り向いて【do麻呂】に強い口調で言う。

“Do be…!”

そこで言葉を切った【be子】は、声のトーンを下げ、表情を和らげて言い直した。

“Do be nice to me from now on. You see?”
（これからは本当に、あたしにちゃんと接すること。いいわね）

　【do麻呂】を見上げる【be子】の目は、笑みと涙を同時にたたえている。その笑みと涙はたちまち【do麻呂】に伝染した。

“I see.（分かったよ）”

“Swear?（誓う？）”

“I swear.（誓う）”

　数年越しの安堵の日本語は、【be子】を抱き寄せた【do麻呂】の胸の中で発せられた。

「よかった……」

「イヤッター！」

　それを合図に、店内から一斉に歓声と拍手と口笛が上がった。

二十一

【so太】はもちろん、別のテーブルにいた「薬味ワーズ連合会」の皆さん一一【condiment（カンディメント）】（薬味）会長も、【seasoning（シーズニング）】（調味料）副会長も、【ichimi】（一味）も、【shichimi】（七味）も、【sansho】（山椒）も、さらに、「焼き鳥めぐり友の会」のワーズたち一一【yakitori】（焼き鳥）会長はもちろん、【char-broiled chicken（チャー・ブロイルド・チキン）】（炭火焼き鳥）副会長、【skewered chicken barbeque（スキュワード・チキン・バーベキュー）】（串焼き鳥）、【bamboo skewers（バンブー・スキュワーズ）】（竹串）、【naganegi leeks（ナガネギ・リークス）】（長ねぎ）、【seasoned cabbage leaves（シーズンド・キャベッジ・リーヴズ）】（おつまみキャベツ）の皆さんも、ここに居合わせた皆が、【do麻呂】と【be子】をお祝いしている。

彼らは恋の成就を肴にそれぞれのテーブルでワイワイと宴会を再開した。いろはのおやっさんもおかみさんも、また忙しくなった。

当の二人はカウンターに座って何やら親しげに言葉を交わしている。いいムードだ。もはや若い三人のＥＴはこの場にお呼びではなかった。

「こっち、おいでよ」

【so太】がカップルにちらりと目をやって、苦笑いしながら、三人を自分のいたテーブルに誘う。三人は、【so太】の誘いに従うことにした。テーブルにつくなり、杏児は手帳を取り出し、カリカリと書き始める。

・doもbeも特別な「助動詞」。
・法助動詞（will, can, mayなど）は、原則として一文に複数個置けない。
・doとbeが原形のまま並置されるのは、①否定の命令文をつくる場合、②beを伴う命令文を強調する場合、である（３）。
（否定の命令文の例）Don't be so bad.
（強調された命令文の例）Do be nice to me from now on.

「へえ、なんだか難しいこと書いて……さすがＥＴだね、勉強熱心なことで」

杏児の手帳をのぞき見ながら【so太】が言う。ユキは、杏児がdoとbeが一文中に併存する場合の例文を書いているのを見ながら【so太】に言った。

「でも、もう仲を隠す必要もないですよね。二人がありのままで共存するケースがちゃんとある

んだから、何も遠慮することはないわ」

　【so太】は、笑いながら答える。

「そうさ、なんで隠す必要があるんだっつうの。あいつらの先代のdoとbeなんか、仕事なんて関係なし、意味なく裸で付き合ってたってのにさ」

「ええーっ、意味なく？」

　杏児が手を止めて【so太】を見上げる。

二十二

「あいつら二人に聞かせたかったんだが、こんな小噺（こばなし）、聞いたことあるかい（４）」

【so太】は、ジョッキに残っていたビールを飲み干して話し始めた。

「イギリスの偉大な哲学家、ジョン・スチュワート・ミルが言ったんだ。

“To do is to be.”
（何かを為すということは、存在するということと同義だ）

そして、フランスの偉大な哲学家、ジャン・ポール・サルトルが言った。

“To be is to do.”
（存在するということは、何かを為すということに他ならない）

さらに、アメリカの偉大なジャズ・ポップシンガー、フランク・シナトラが歌った。

“Do be do be do.”
（ドゥビ、ドゥビ、ドゥ）」

万三郎が訊く。

「前二者のコメントは深い哲学的洞察を示唆していると理解しますが、最後、フランク・シナトラの言葉は、どういう意味ですか」

「意味なんか、ない」

「へ？」

「歌の最後にスキャットしただけだ。♪ハァーソレソレ！　と同じようなもんだ」

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル」

万三郎は思わずつぶやいた。

【so太】は三人を交互に見ながら言う。

「いいか、若いエリート衆。コトバは、自由だ」

シナトラの言葉を書き取ろうと再び手帳に目を落としていた杏児も、顔を上げて【so太】を見た。【so太】は店の天井を通して、チンステのドームすら透かして、夜空いっぱいに広がる宇宙を眺めるような目つきになっている。

「人間が生み出した道具ゆえに、コトバってのは、人間の想像力（イマジネーション）や創造性（クリエイティヴィティー）と同じだけ自由なんだ。そして、人間の想像力と創造性は日々進化し、躍動している。だからコトバも、日々生まれ、進化し、躍動するのさ」

【so太】は、杏児の開かれたメモ帳のページをちらりと見やって続けた。

「コトバに関するいろいろな決まりごとはもちろん大事だ。だけど同時に、制約からは新しいものは何も生まれないってことも、また真実だ。フランク・シナトラの、意味のないドゥビドゥビ。結構じゃないか。彼は、即興でドゥビドゥビ歌って、その曲が全米チャートで一位になった。売れに売れて、そしてドゥビドゥビは伝説になった（５）。コトバは自由に躍動しているってこと、そしてそれがどんなにすばらしいことなのかってことを、いずれ俺たちを仕切る君たちには知っておいてもらいたいんだ。もちろん、頭の堅い、あの二人にもね」

【so太】は【do麻呂】と【be子】が、カウンター席を立ってこちらへ向かってくるのを横目に、大仰に天を見上げて手を広げた。

“The sky is the limit. It’s SO free!”
（果てしない可能性がある。それは、とぉっっても自由だ！）」

二十三

【do麻呂】と【be子】が手をつないでこちらのテーブルまでゆったりと歩いてきた。【be子】が、三人のＥＴの顔を代わる代わる見ながら言う。

「万ちゃん、杏ちゃん、ユキちゃん。あなたたちと飲めて楽しかったって【be子】が言ってたわ。お代はうちが払っておくわ。じゃあ、お先にね」

――【be子】会長が、どうして「【be子】が言ってたわ」なんて言うんだろう。それに会長は、自分のこと「うち」なんて言わないのに……。

そう考えながら【be子】を見ていたユキの顔色が変わる。慌てて【do麻呂】に尋ねた。

「【do麻呂】先生、あの……この女性を愛していらっしゃるのですよね」

「あ？　うん」

「どんな時も？」

「ああ、どんな時も。だが、どうしてそんなことを訊く？」

「い、いえ。そうですか。どうぞお幸せに」

冷や汗を拭うユキに一瞬いぶかしげな視線を投げかけたが、気を取り直したように【do麻呂】は、パートナーの肩を抱き、二人で店を出て、夜の街に消えて行った。

その様子を目で追っていたユキに、万三郎が訊いた。

「ユキ、どうかしたの」

【so太】が酒類のメニューを開いて五郎八に銘柄の質問をしている隙に、ユキが小さな声で万三郎に答える。

「会長の頬、beの文字が消えかかって、is が代わりに浮き出てきてた」

　万三郎も驚く。

「え？　会長が悪女だって言ってた、【is子】の人格が現れつつあったってこと？」

　ユキは万三郎を見たまま下唇をかみしめてかすかに頷いた。

「なんてこったい、【is子】は【do麻呂】先生とはうまくいかないはず……」

　万三郎は店の入口まで駆けていって、扉の外へ出て左右に目を凝らしてみたが、こちらのテーブルを振り返って首を横に振った。

ーー行っちゃったか……。何も起こらなければいいけど……。

「なんだ、どうかしたのか」

　注文を終えた【so太】が心配そうな顔をしているユキに関心を向ける。

「いいえ、何でもないです」

　そう答えて取り繕った笑いを浮かべるユキの隣りで、右手で串を持ち、冷めきった砂肝を歯でこそげ取りつつ、杏児が他人事のようにつぶやいた。

「【is子】よ、いずこへ、なんちゃって……あ痛っ！」

「杏児、気付いていたのか」

　万三郎は驚いただけだが、ユキはテーブルに置いた杏児の手の甲に、さっきより強めにプスリとやっていた。

◆◆◆

（１）助動詞のdo, be, haveは、それ自体が特に意味を持つわけではないため、第一助動詞（Primary Auxiliary Verbs）と呼ばれ（「第一助動詞」という文法的呼称にも諸説あり）、それ自体が「可能」や「義務」など、意味を持つcanやmustなどの法助動詞（Modal Auxiliary Verbs）と区別される。

第一助動詞の役割は次の通り。
・「第一助動詞do」…… ①否定文を作る　②疑問文を作る ③禁止の命令文を作る ④一般動詞を強調する
・「第一助動詞be」……①進行形を作る　②受動態を作る
・「第一助動詞have」……①完了時制を作る ②have toを作る

（２） mayやcanやwillといった法助動詞は、単文の中では原則として一文に二つ以上並置できない。
（例） *I will can drive a car next year. （*はこの文が正しくないことを示す）
「第一助動詞do, be, have」については、複数配置や法助動詞との並置が可能な場合もある。ただし、第一助動詞doは、法助動詞とは並置できない。
（例）　The mountains have been covered with snow since last month.
（例） I would have done much better in life had I worked harder.
（例） *Do you can drive a car? （*はこの文が正しくないことを示す）

（３）本文中に登場する、do/don'tとbeが並置されるいずれの場合も、doが第一助動詞、beが本動詞（この文の述語動詞）として機能している。
〈おことわり〉本章では【be子】の場合は、「助動詞be」と「自動詞be（いわゆるbe動詞）」の二つの役割を一人で担わせています。これに対して、前章および本章に登場する【do麻呂】は、冒頭に描写した通り、「助動詞」としての役割のみを反映させています。本作で後述しますが、彼女らワーズは、ことだまというエネルギー体が人格を持つという設定上の作者の都合によるものです。

（４）欧米では知られた三段落ちジョーク。多彩なパターンの変遷を見る。本作では、ケンブリッジ大学図書館の男子トイレにあった落書きを英タイムズ紙がコラムで紹介したとされるものを採用。最初の二作は、プラトン、アリストテレス、カント、ヘーゲルの作とされるなど諸説あるが、三つ目の"do be do be do..."は一様にフランク・シナトラの作とされる。（参考website：Quote Investigator, http://quoteinvestigator.com/2013/09/16/do-be-do/#note-7237-13）

（５）曲の最後の即興のスキャット部分で大いに有名になったこの曲、"Strangers In The Night"は、一九六六年リリースの同名アルバムに収録。同曲は、ビルボードのホット一〇〇チャートおよびイージーリスニングチャート、さらに全英シングルチャートの一位となり、翌年グラミー賞で三部門を受賞、シナトラの、商業的にもっとも成功した曲とされる。なお、スキャット部分の綴りは、本作にある"do be do be do..." 以外にも、"doo-be-doo-be-doo", "do do dy doby do"など、さまざまに表記される。（参考website : Wikipedia, http://en.wikipedia.org/wiki/Strangers_in_the_Night）

第八章　善悪（1）

　一

「これが、わが社の誇る、第三文型モデルのシークウェンス・トレイン、ＫＣＪ一英三百系の基本編成でござる。この先頭車両は、『ダサシ三〇Ｘ』、二両目は『ダサド三一五、タドウシＶＴモデル』」

　ほうぶん先生が、先頭車両の流線型のボディーを愛おしそうに撫でながら言った。だが、そのボディーは木製で、表面に塗られた緑のペンキは完全に干からびて、うろこのように浮き上がっていたので、ほうぶん先生の手が往復するたびに細かい破片となってバラバラとはがれ落ちた。

　杏児がストレートに感想を口に出す。

「ダサシ……って、なんだか、ダサい響きの車両名ですね」

「第三文型の主語、略して『ダサシ』でござる」

「じゃあ『ダサド』は……」

「第三文型の動詞ゆえだ」

　ユキのそんな質問にも、ほうぶん先生は澄まして即答した。万三郎は半ばあきれ気味に、この古ぼけた木製ジェットコースターの三両目の車体に触れながら訊いた。この車体は青に塗装されていたが、その青いペンキの破片がパラパラとこぼれる。

「じゃあ、この三両目は目的語だから、『ダサモ』……？」

　ほうぶん先生は満足気に頷いた。

「いかにも。『ダサモ三〇八』でござる。中浜どの、おぬし、察しがいいな」

「ほうぶん先生の講義をしっかり聴いていましたから」

　褒められるほどのことではないと、万三郎はわずかに苦笑いする。

「ふん」

　万三郎の答えを聞いて挑戦的にそっぽを向いたのは祖父谷義史だ。万三郎はちらりと祖父谷を見たが、何も言わなかった。

「おのおの方、よいかな。研修室で説明した通り、『誰々が何々をどうかする』と言いたい場合、この第三文型の編成、『ダサ』シリーズを呼び出すのが基本でござる。覚えておかれよ」

「先生、うちら、乗られへんのですか」

　挙手してそう質問したのは、四葉京子だ。

「ワーズの人らが乗るんでしょう？　うちらも乗り心地とか、知っといた方がええのちゃうかなあ思うて」

　ほうぶん先生は少し考えた風だったが、やがて頷いた。

「よかろう。実はこの三百系は相当年季ものだ。今は主力の新型、英三百四十系の予備役に回っておって、ほとんど出番がござらん。いずれ引退となるが、久しぶりにちょっと散歩でもさせてやってくれ」

　ほうぶん先生は、三人ずつ二回に分けて、チンステのドーム内をひと回りずつ飛んでくるように言った。最初のフライトは、杏児と、京子、そして綾目小路奈留美の三人となった。ほうぶん先生の狙いはいつも、チーム横断的親睦であるので、もっともな混成チームだ。

「ほれ」

　先頭の「ダサシ」に杏児、二両目の「ダサド」に京子、三両目「ダサモ」には奈留美が乗った。

「先生、これ、どう操縦すれば？」

「おぬしたちはヒューマン社員ゆえ、ワーズ社員たちと違って頭で考えただけで自在に操縦できる。ただ、意味のあるシークウェンス、つまり、文にはなっておらぬから、車両同士の結合が弱い。三人の意思の調和が大切でござる」

　先頭の杏児は、にわかに意味が理解できず頭をひねったが、ま、いいやと考え直して、後ろを振り返って言った。

「四葉さん、綾目小路さん……じゃあ、行きますか」

　するとほうぶん先生が言う。

「三浦どの、何やら堅いな。それに、おのおの下の名前、ファースト・ネームで呼び合うというルールを忘れたか」

「あ……。き、京子さ……、いや、京子、奈留美、行きますよ」

　二人が答える。

「イエーィ、杏児、行こうぜぃ！」

「ねえ、この椅子とても狭くてよ。居心地よろしくありませんわ。すぐ帰って来ましょうね」

　ほうぶん先生が「ダサシ」から少し離れた。

「よいかな、飛び交う他のシートレは皆、職務遂行中でござるゆえ、くれぐれも邪魔にならぬよう」

　杏児が頷くと同時に、三両編成の三百系シートレは、旧式のジェットコースターよろしく、軋みながら急発進していった。

「うわッ！」

「きゃっはは！」

「あれえ！」

二

ローンチング・ステーション、通称チンステ構内は、一つの巨大な街が、すっぽりドームに覆われたようなつくりになっている。ワーズたちが乗った、実務上のシークウェンス・トレインは、チンステから空中に開いた細長い隙間（スリット）から外界へ出入りする。

勢いよく出発して十分後、そうした他のシートレが飛び交うのをかわしつつ、ドーム内の空間を存分に飛び回った「ダサ」三百系は、ほうぶん先生たちが待つ実地研修用プラットホームに戻ってきた。シートレは相当な勢いで入線すると、目一杯急ブレーキをかけて、ようやく止まった。

「やあ、初めてにしては操縦が上手でござるな」

上機嫌で声をかけるほうぶん先生に、やっとのことで杏児が答える。

「こりゃ、すごいですね。スリル満点でした。京子は協力的なんだけど。その後ろの奈留美が帰ろう帰ろうと念を入れてくるから、ハンドルを取られる感じで操縦しにくかった」

そう言って杏児は後ろを振り返った。その杏児の目の前には、顔を紅潮させた京子がいた。白目と黒目の境目がわかるほど、彼女は目を見開き、興奮していた。

「最高！　これ、まじやばいわ！　やけど先生、このシートレおんぼろやから、うちの後ろで連結、切れそうやったよ」

「そうか。それは綾目小路どのが、前の二人とは違う思いを入れておったゆえ、推進力や進行方向にずれがあったためであろう。シートレの車両は、ずれがあまり大きいと、千切れたり捩じれたり、さらには墜落することもあるゆえ、実務のとき、間違った場所にワーズを乗せぬよう、心得ておきなされ」

ほうぶん先生が、杏児や京子と、プラットホームで見学していた万三郎たちとを交互に見ながら説明していたら、奈留美が三両目の「ダサモ」からほうほうの体でホームに降り立って愚痴る。

「んもう！　わたくし、こんな狭苦しくて乗り心地の悪い乗り物、二度と乗りたくございませんわ。お尻が痛くて死にそう……」

　杏児は車両から降りると、ほうぶん先生に訊いた。

「上空から見下ろすと、本当に街が広がっていますね」

「いかにも。ほとんどがワーズたちの居住区でござるよ。わがＫＣＪのワーズ社員の数は、古英語や外来語、熟語や慣用句、方言など全部合わせて百万とも言われておるからね(1)。出動命令が来ると、それぞれの自宅からこのステーションにやって来るのでござる」

「百万……そんなにたくさん、僕はとても覚えられそうにない」

　杏児がひるむと、ほうぶん先生は笑った。

「安心めされ。おぬしらＥＴが使いこなさなくてはならぬワーズは、せいぜい一万から、多くても三万だ」

　三人が「ダサ」シリーズ三百系から降りると、今度は万三郎たちの番だった。

「中浜どの、おぬし、先頭に乗るか」

「はい」

　ほうぶん先生に頷いて、先頭の「ダサシ」に乗ろうとドアを開けた万三郎の肩をぐいっと手前に引っ張ったのは、祖父谷だった。万三郎はよろめいてホームに尻もちをついた。

「先生、私を先頭に乗らせてください。みどり組の連中に二回とも先頭に座らせるのは納得がいきません」

　万三郎は立ち上がると、むきになって祖父谷の肩に手をかけた。

「おい、祖父谷！　先生は俺を指名したんだよ」

　祖父谷は万三郎の手を荒々しく払いのける。

「中浜、お前は劣っているんだから、俺のやり方を見て学べ。俺が前に乗る」

「何だと。なんで俺が劣ってるんだよ」

二人は向き合ったが、ほうぶん先生がまあまあと制した。

「ほら、おぬしら。友情を深めるために、ファースト・ネームで呼び合うのを忘れておるじゃないか」

祖父谷がニヤリと笑った。

「中浜、『ネイム・ファイブ・イン・テン・セカンズ』で決めよう」

三

「う……」

万三郎は怯んだ。すると祖父谷はいよいよ得意気に、万三郎を見下した目つきで挑発してくる。

「どうした、この間やってみて俺にはかなわんと悟ったか。そうだ、お前は俺より劣っているんだよ」

万三郎は思い出していた。先日再び、ティートータラーでスピアリアーズの連中と鉢合わせした時、成り行きで祖父谷と、この英単語の知識対決をして、コテンパンにやられ、さんざん馬鹿にされたのだった。

「あ、あの時は酔っていたから……」

「では、今日、シラフでもお前が劣っていることを証明しよう」

――くそッ、馬鹿にしやがって……。

万三郎は祖父谷の目を見据えて言い返す。

「いいだろう祖父谷。十秒で五個以上だったな」

さっき無視されたほうぶん先生はもう一度二人をなだめようとした。

「ほら、おぬしら、仲良くなるために、ファースト・ネームで……」

「よし中浜。では俺からお題を出す。お題は……頻度の副詞！」

万三郎は内心、喜んだ。昨夜、自分の部屋で勉強して覚えたばかりの項目だったからだ。万三郎はしてやったりの笑みで次々答えていった。

「always, almost always, usually, often, sometimes, rarely, seldom, almost never, never …」

「ストップ、十秒だ。occasionally」

「うっ……では、俺の番だ。いくぞ祖父谷。学問！」

　ところが祖父谷もさるもの、すらすらとよどみなく挙げていく。

「cosmology, physics, zoology, botany, mathematics, psychology」

「ストップ、十秒！　えーっと……」

　万三郎はパニックになった。自分が言おうと思っていたpsychologyを祖父谷に言われてしまったからだ。

　すかさず祖父谷がカウントし始める。

「一、二、……」

「メ……medicine!!」

　祖父谷は片頬を吊り上げて笑った。

「危ないところだったな」

「ま、まだ三秒経ってなかったろ！」

「大目に見てやる。次、『大きい、巨大な！』」

「big, large, huge,……ええっと、ジャ、……giant　ううう……」

「よし十秒！　お前、四個しか言えてない。じゃあ、great」

「くそ……」

「はい俺の勝ち。お前、敗北者。負け犬。力量不足。劣等。ざまあ見さらせ河童の屁」

　四

「では行ってきます」

　先頭の祖父谷がご機嫌でほうぶん先生に挨拶する。

「くれぐれも他のシートレの邪魔にならぬようにな」

　強い加速度がかかって、のけぞり気味の祖父谷に続き、ふて腐れ顔の万三郎、きつく目を閉じて歯を食いしばっているユキがプラットホームから滑り出して行った。

「ひょう！」

――パラグライダーで飛び立つときに斜面を駆け下りて、足がつかなくなった時みたいだ！

　万三郎は「ダサド三一五、タドウシＶモデル」の車両脇から見える地上がどんどん遠ざかっていくのを見下ろして、思わず声を発した。

「ユキ、すごいな！」

　そう言って後ろを振り返るとユキは自分の前の車両の縁に両手でつかまったまま目を閉じ、うつむいている。

「大丈夫か、ユキ？」

　万三郎が大声で訊くと、ユキは下を向いたまま頷き、言った。

「高所……恐怖症……」

「ええっ、そうなの？　なんで乗ったんだ」

　ユキは、一瞬目を開けてちらりと万三郎を見て、すぐまた目を閉じてうつむいた。

「劣ってないよね」

「は？」

　万三郎は一瞬ユキが何を言っているのか分からなかった。ユキは、下を向いたまま、万三郎に聞こえるくらいの声量で続ける。

「私たち、負け犬じゃない」

――ああ、さっきのことか。

　祖父谷と勝負して負けたのは自分なのに、ユキが「みどり組」という括りでチーム意識を持ってくれていたのが、万三郎は嬉しかった。今はもう上空だ。ユキを心配したところでどうにもならない。

「ああ、そうだな。負け犬じゃない。ユキ、がんばれ」

　万三郎は、前に向き直る。もっと勉強に励もうと改めて思った。

五

木製三両編成の三百系シートレは、ギシギシ音を立てながら、これまでぐんぐん上昇してきていた。ちゃちなボディーなのに、すごい馬力だ。

その時、シートレが大きく左にカーブした。祖父谷の意思を反映して曲がったのか。

「おい、中浜」

祖父谷が顔だけ半分後ろを振り向いて言った。

「見ろ、この下に広がる景色を」

シートレは左斜め上に急旋回している最中だ。車体が内側に傾斜しているので、万三郎は言われるままに、左下に広がるワーズたちの居住区だと思われる家々を見下ろした。

「百万のワーズたちが、ここで暮らしている」

「ああ。ほうぶん先生がそう言っていた」

「中浜、俺は、ここに住む無数のワーズたちを、適材適所に配置したシートレを自在に編成できる能力を身につけたい」

「ああ、俺もだ」

「いや、そうなれるのは、俺であってお前ではない」

万三郎はムッとする。

――なんだって、こんな上空で不愉快なこと言うんだ、こいつは！

「そうなれるのは一人だけというわけではないだろう？」

「中浜、お前、古都田社長から言われなかったのか、競い合いたまえと」

「……言われた」

――確かに、社長からは競い合えと言われた。だが、あの時点で俺は、お前たちスピアリアーズの存在を知らなかった。だから祖父谷、お前とは……

「一年だ」

　祖父谷の言葉の意味が万三郎にはよく分からなかった。

「えっ？」

「いいか中浜、正直に言う。今の俺の英語能力はお前とそう変わらんかも知れん。しかし、俺は人に負けるのは大嫌いだ」

　シートレは転回し終わり、今度は少し下降しながら、数キロ先に見える実地研修用プラットホームに頭を向けたようだ。万三郎は後ろを振り返ってみる。ユキはじっと目を閉じて恐怖に耐えている様子だった。

　祖父谷が言う。

「お前、社長室で行進したらしいな」

――なんでこいつが知っている。

　万三郎は恥ずかしさのあまり、無言でいた。

「中浜、俺はな、特にお前のようなすっとぼけた、向上心のぬるい奴に負けるのが大嫌いなんだ」

「……」

「俺は今から一年で英語をモノにする。英語を、キャリアアップのスキルにしたいと本気で考えるなら、人生八十年のうちの三年。一つの言語の習得にそれ以上時間をかけるのは無意味だ。だが俺たちは英語学習そのものが業務だから、普通の学習者の三倍は時間が使える。なら会社がＥＴに求めるレベルに、俺は一年で到達する」

「……」

「ワーズたちは俺たちがＥＴだと言うだけでちやほやするかも知れんが、俺たちＥＴは所詮、見習いにすぎん。そして将来、本当のエグゼキュティヴになれるのは、ＥＴの中の一部、ＥＴが俺たち六人だけだとしたら、おそらくその中の一人か二人だと、俺は読んでいる。その一人か二人に、俺は必ず入る。そして……」

「そして？」

　祖父谷が振り向いて言った。

「そして中浜、お前はあと一人には入らない」

「う……」

　万三郎は言葉を失った。すると、後ろから叫ぶような声が聞こえた。

「その時は、わわ私があと一人に入るわ！」

　万三郎もびっくりして後ろを振り返る。ユキが蒼白な顔で眉を立て、歯を食いしばって祖父谷を睨んでいた。

六

「そそそ祖父谷くん、あなた、かかかなり負けず嫌いみたいだけど、負けず嫌いはあなただけじゃないわよ。うちのチームの万三郎のこと、よくもコココケにしてくれたわね」

祖父谷は慌てた様子でユキの機嫌を取るようにその場を取り繕う。

「いやユキ、君は有能だ。こと英語に関しては、俺より優れている。いずれはわがチーム・スピアリアーズに来てほしい。歓迎する」

高所恐怖症に加え、万三郎への侮辱を聞いて不機嫌極まっていたユキは、吐き捨てた。

「ふん、あんなバババタフライ女のいる組なんて、か、考えられないわ。いい？　もし万三郎が負けるようなことがあっても、その時は、わわ私が必ずエグゼキュティヴになるわ」

胸のすくようなセリフだった。この、高度数百メートルの恐怖に震えながら、よく祖父谷の挑発に反ばくしてくれたと万三郎は称賛を込めた眼差しでユキを振り返り、サンキュ！　とウインクしてみせた。

その万三郎にユキはたちまち噛みついた。

「何よ、その、してやったりみたいな表情は！　まま万三郎あなたねー、あれだけ言われてどうして何も言い返せないの？　反論して相手を説き伏せる説得力も、ＥＴに必要とされる技術のうちでしょ。なな何よ、『う……』って。言いたいことをはっきり言えないようじゃあ、本当、エグ、エグゼキュティヴになんか、なれないわよ。しっかりしろ！　この、タタコ！」

「タ、タタコ……？」

万三郎は愕然とする。そして、ユキにそこまで言われて、すぐに何も言い返せない自分をあらためて認識した。

「う……」

それを見るとユキは舌打ちして吐き捨てるように言った。

「それよッ！　あー、ムカつく！」

「ハッハッハ！」

　やりとりを聞いていた祖父谷が前を向いたまま大笑いした。そしてユキに聞かせるように、頭だけ半分振り返って言った。

「ユキ、君、気が強いね。ますます気に入った。そのうち君を、俺のチームに引き入れて見せる」

　そのまま祖父谷は、完全に後ろを振り向くと、目の前の万三郎を全く無視して、ユキを見る。

「必ず君にイエスと言わせてみせる。必ず……ね！」

　そう言うと祖父谷はユキにウインクした。万三郎は目を丸くして思わずユキを振り返る。ユキも同様に目を見張り、口をあんぐり開けて赤面した。

「この男、懲りてない……」

　独り言のようにつぶやくと、ユキは思わず目を逸らして舌打ちした。

　その時、万三郎が目を大きく見開いて大声を上げる。

「わあっ、祖父谷、前ッ！」

七

「うわああっ！」

接触事故だ。避ける間もなく、激しい振動がダサ三百系を襲う。ワーズたちが乗った、七、八両編成のシートレが、ゴリゴリ摩擦音を立てながら、こちらの車両とすれ違っていく。相手の車両に乗っているワーズたちは一様に目をかっと見開いており、中には万三郎が見知った顔もあった。

――あ！　【sorry】……。

最後尾の車両に座っていたのは、あの【sorry】だった。

一方、【sorry】の方も万三郎に気付いたようだ。「またあんたかッ！」という声がドップラー効果のように近づいて、遠ざかっていった。

――正面衝突でなくてよかった。

万三郎はとっさにそう思う。接触した瞬間、このオンボロ木製シートレが空中分解しなかったのは確かに幸いだった。

車両同士が完全にすれ違い終えてすぐ、万三郎が後ろを振り返ると、【sorry】たちのシートレは大きくカーブしてその全容を見せつつ、ダサ三百系から離れて上昇していく。

"Bob, I’m not a very good student, sorry."

衝突角度が十分小さかったため、相手のシートレは、どの車両も擦り傷程度で大きなダメージはないようだ。万三郎がしばらく見ていても、ふらつきこそすれ、墜落するようなことはなく、無事スリットへ向かって飛んでいった。

だが、はるかにオンボロな、こちらのシートレにはダメージがあった。車体の下で何かがカラカラと乾いた音を立てて空回りしている。祖父谷がうろたえる。

「まずい、異常に高度が落ちている。戻せない！」

　万三郎が慌てて提案した。

「三人の思いを統一しよう」

　ユキが半ばパニックになりながら返す。

「飛べとイメージすればいいの？」

　だが、ぶつかった時に何かが狂ったのか、ダサ三百系は急速に制御を失い、ワーズたちの居住区へと急降下していった。

「いかん、墜落する！」

　祖父谷は、刻々と迫ってくる地上を睨んで歯を食いしばる。万三郎が叫ぶ。

「祖父谷、それからユキ、せめて軟着陸をイメージしてくれ！」

「きゃああ！」

　飛行機が大都市の空港に着陸する寸前の地上の風景のようだ。高速で後方に流れていく地上は、何かの映画で見たことがあるような、赤茶けたレンガ造りの民家やボロアパートが密集したエリアだった。

　万三郎たちのシートレは、子供たちが草野球しているグラウンドの上空を横切り、背の高い街路樹の先端をかすめていく。低層の建物が面している道をまたいだその先にある、石畳の、小さな広場のような幅の広い道に沿って、万三郎たちのシートレは、ガリガリと不時着、突き辺りの飲食店らしき店の大きなスモークガラスを突き破ってようやく止まった。

　掃き出しガラス大窓の方は粉々に割れたが、シートレの方は、車体が炎上することはなく、ただ埃が立ち昇っただけだった。

　三両のシートレの全体が店内に入り込んでいたが、幸いにもガラス以外に衝突した人や物はなかった。リノリウム張りのホールのようになっていたからであった。

　祖父谷も万三郎もユキも、シートレの着地後は、目の前にある操縦桿――ワーズたちには必要なのだろう――あるいは手すりバーをしっかりつかんだまま、上体を伏せてショックに備えていた。万三郎がむっくりと上体を立てて、そっと辺りをうかがう。

　店内はレゲエのようなダンス・ミュージックが大音量でガンガン鳴っている。割れた大窓から明るい陽光が差し込んでいて、舞い上がった埃がその光を反射してキラキラ光っている。光線が差し込んでいる区画とのコントラストが強すぎて、店内はなお薄暗く、全体はよくわからない。

　万三郎は振り返った。

「ユキ、大丈夫か」

　万三郎はユキの至近距離で声をかけたのだったが、大音響にかき消されて伝わっていなかったかもしれない。万三郎がそう思ったとき、ユキは恐る恐る顔を上げた。無事だった。万三郎は、ユキが怪我をしていないことを目で確認し、頷いて前に向き直る。すると、先頭車両の祖父谷もゆっくり顔を上げた。

「良かった、全員無事だ」

　ホッとして万三郎は大き目の声でそう言ったが、祖父谷は後ろを振り返ることなく、緊張感のある声で答えた。

「いや、良くはなさそうだ」

八

耳障りなダンス・ミュージックは止まらない。

埃が収まって店内の暗さに目が慣れてくると、三人は、七、八人ほどの男女にシートレが取り囲まれているのに気付いた。

突っ込んだここは、ダンスホールのようだ。先頭車両の少し奥にバーカウンターがあった。金属のバーチェアがいくつか並んでいる。何人かはその辺りに立っていた。

肌の露出の多い、派手な色のタイトなワンピースを着ている若い女たちは、それぞれ恋人とおぼしき男の影に隠れるようにしてこちらを見ている。表情は一様に険しい。

そして男たちは皆、手にビール瓶やフォールディングナイフを構えてこちらを窺っていた。男たちはそれぞれ、オールバック、モヒカン、リーゼント、金髪ロン毛で、全員、むきだしの肩にタトゥーが彫ってあった。

真っ昼間であるせいか、他に客はいなさそうだ。いや、彼らとて客ではなく、営業時間外に自分たちの店でただたむろしているスタッフたちなのかもしれない。

けたたましい音楽の中、収まった埃の代わりに、尋常ではない殺気が辺りの空気を支配し始めている。

一番前に座っている祖父谷が、彼らとのコミュニケーションを試みる。正面にいる、モヒカンで眉毛のない男に、上目使いでぴょこりと会釈してみた。

「す、すいません、なんだか驚かせちゃって……」

ナイフを構えているモヒカンは、祖父谷の声を聞くと、丸くしていた目をゆっくりと細めた。頬には、【brutal（ブルータル）】（残酷な）と浮き出ていた。

万三郎は、モヒカンの感情を逆立てないように、祖父谷に続けて何か言おうとして、「あー」と口をもぐもぐしながらダサドの席から立ち上がろうとした。すると、とても楽に立ち上がることができた。……と思ったら、そのままスーツの後ろ襟辺りを支点に、上向きに引っ張られる力を感じた。万三郎が振り返ると、万三郎より一回り背丈が高い、サングラスをかけたスキンヘッ

ドの男が、筋骨隆々の腕で万三郎の襟首を後ろから吊り上げていた。

「あ、立つの、助けていただいて、どうも。……だけど、もう充分です」

　吊り上げられて爪先立ちの万三郎が、斜め上を振り返りながらそう言う、その喉元にナイフがピタリと当てられた。

　自分たちが突き破った穴を通して入ってきた外の光が自分の喉元でキラリと反射したので、それがナイフだと万三郎は悟ったのだ。

――なんてこったい、ホーリー・マッカラル。

　万三郎の頭の上、至近距離で声が聞こえる。

「うッ、この鴨は……」

　それから、このスキンヘッドが大声を上げた。

「音楽、止(と)めろ！」

　バーカウンターの向こうで、店員らしき細身の男がリモコンを操作して、音楽がピタリと止まった。おかしいくらいの静寂が場を包む。ボトル棚の上の壁面に筆記体風に曲げられたネオン管が蛍光グリーンの光を発している。”Salamander”と読める。店名か。

　腕が緩んで背中の吊りが弱まったので、万三郎はかかとを床につくことができた。だが、スーツの首根っこをつかまれていることには変わりない。

　万三郎の目の前に、横からスキンヘッドの顔がにゅっと突き出た。

「あんた、何者(なにもん)だ」

　外からの光でサングラスから透けて見える鋭い眼はまっすぐ万三郎の両目を捕らえていて、万三郎は思わず目を逸らした。その頬には、【nefarious(ニフェアリアス)】と浮き出ているが、万三郎にはどういう意味か分からなかった。

「お……俺は……」

　その時、前に座っていた祖父谷が急に立ち上がりながら、万三郎をつかんでいるスキンヘッドの【nefarious】と、自分の目の前のモヒカンの【brutal】を交互に見て、大きな声で叫んだ。

「俺たちは、ことだまカンパニー・ジャパンのＥＴ、エグゼキュティヴ・トレイニーだ。あんたたちの上司だ」

　祖父谷が立ち上がるのに応じて、構えたナイフの角度を変えたモヒカンが、細めていた目を再び見開いてつぶやいた。

「上司……」

　九

「あいたた……」

「ちょっと、そんなにきつくしないで！」

　スキンヘッドを先頭に、祖父谷、万三郎、ユキの三人は、それぞれ屈強なワーズたちに片腕を背中で折り曲げられた状態で後ろから押されつつ、店の奥の階段から二階へと追い立てられていった。

　スキンヘッドは、二階のドアをノックする。

「【nefarious】です。今、ぼろいシートレで下の店をぶち破ってきた者ども三人を連れてきました」

　すると、部屋の中から声が返ってきた。

「入れ」

「失礼しまっす」

　スキンヘッドが自分のサングラスを取って、部屋に入った。

「行け」

　祖父谷が後ろから促される。部屋に入った順に、三人はその場に凍りついた。

　広めの部屋の左右には、開襟シャツにスーツを羽織った二人の男たちが、一人ずつ分かれて、こちらに向かって立っていた。前の男は日本刀を構えている。後ろの男は直立しているが、右手を、前ボタンを外したスーツの胸辺りに入れていた。
そして……。

　部屋の左右には革張りのソファーが置かれているが、ソファーに対応するローテーブルは、こちら側、つまり入口の方に表面を向けて立てられていて、そのローテーブルの前に男が一人立っているのだった。

テーブルの前の男は、きちんとネクタイを締めて品の良いスーツを着ている。スキンヘッドのものとは違い、もっとフレームの細い、薄めの色の入ったサングラスをかけていた。彼は両手をポケットに入れていたが、三人を見ると、右手を出して、親指と人差し指を自分の額にあて、少しうつむいてフッと笑ったように見えた。

「なんだ、ＥＴか」

スキンヘッドが、四指を握り親指だけを立てて、その親指を仰向けにグッと突き上げるようにして祖父谷を指し示して言う。

「こいつが、『俺たちは、あんたたちの上司だ』と」

それを聞いて、ネクタイの男はプッと噴き出した。

「そうか。で、ボディーチェックは？」

「武器らしいものは持っていませんでした」

ネクタイの男は、スキンヘッドの答えを聞くと左右を見回しながら言った。

「仕舞え」

それを受けて、両脇の二人の男たちは、刀を鞘に納め、胸元から手を出して上着のボタンを留めた。

ネクタイの男は、たまたま真ん中に立っていた万三郎に向けてコツ、コツ、と、ゆっくり二歩歩み寄ってきて訊ねた。

「事故か、故意か」

間近で見る男の頬には【ruthless（ルースレス）】（無慈悲な）という文字が浮いている。

入社の初日、古都田社長に見すえられたときの緊張感に似た感覚が万三郎を襲う。ただ、日本語で聞かれた分、まだましかも知れなかったが。

「事故です」

　万三郎が答える。

「そうか」

　ネクタイの男はそう言うと、片手を自分の頬に当てて、まるで電話の相手に語りかけるような口調でしゃべりはじめた。

「お聞きの通りです。どうします、会われますか」

十

「はい、分かりました」

ネクタイの男はそう答えると、手を下ろして、左右の男たちに命じた。

「テーブルを戻せ」

このネクタイの男の部下とおぼしき二人の男たちは、言われた通りテーブルを元に戻し、部屋の両脇に分かれて立った。

――スーツの腕にインカム・マイクを仕込んでいるのか。セキュリティーサービスみたいだな。ここは組事務所か、アジトか何かか。

万三郎がそう警戒して部屋の中をあらためて見回す間もなく、奥の、ただの壁だった部分が音もなくスーッと開き始めた。

ネクタイ男【ruthless】は、開いた壁の傍らに立って、その向こうに向けて敬礼する。
スキンヘッド【nefarious】が小声で三人に言う。

「お前ら、頭を下げろ」

それからスキンヘッド自身もネクタイ男と同様に上体を折った。頭を下げろと言われても、今まで壁だったところが開いて、いったい何が現れるのか、興味と恐怖で三人はその場に茫然と立ち呆けている。

開いた壁の向こうに、こちら側の半分ほどの大きさの部屋が現れ、その中央辺りに、古都田社長の社長室に置いてあったものと同じくらいの大きさの机がひとつ、どんと鎮座していた。

そして、机の向こうに二つの人影があった。

一つは、こちらに背を向けて車椅子に座っている、やせ気味の男のようだった。

そして車椅子の傍らにこちらを向いて立っていたもう一つの人影は、アイボリーのスーツを着てネクタイを締めた長身の男で、サングラスをかけてこちらを向いていた。立っている男を見た

ユキと万三郎が、驚いてほぼ同時に声を上げる。
「ああッ！　あなたは……」

　驚かれたその男は、にやりと片方の口辺を吊り上げて、それからサングラスをゆっくり外した。見覚えのある切れ長の一重まぶたが現れ、鷹のような目で、三人をねめ回した。

　男は万三郎たち三人を自らの目で確認し終えると、静かな声で言う。

「ここのモニターで一階の様子を見ていてまさかとは思ったが、やはり、あんたたちだったか」

　再びサングラスをかけようとする男の方を見ながら、祖父谷は小声で万三郎に訊く。

「顔見知りなのか」

「ああ、ワーズ社員【bad!】だ」

　万三郎が答えたその小声は、男の耳にも入ったようだ。男は、かけようとしたサングラスの手を止めて、突然、威圧的な大声を出した。

「おい小僧、【　bad!　】だぜ。この社会にゃ【bad】は何人もいるが、俺はそいつらとは違うんだと、この間も言ったはずだ。気をつけろ。『ベアーッド・ハッ！』と発音するんだ。そして、書くときゃ『！』をつけるのを忘れるなよ」

　ドスの利いた声に驚いて、万三郎は再び【bad!】の方を向いて硬直した。

「す、すみません」

　車椅子の、やせ気味の男が、こちらに背中を向けたまま傍らの【bad!】に静かに訊く。

「で、間違いないのか」

　【bad!】はたった今とはうって変わって、少し身をかがめるようにしてかしこまって答えた。

「はい、雉島さん。三人のうち二人を、俺は知っていますが、さっき一階で自分たちはＥＴだと喋った男も、金鴨の社章を着けています。間違いなく」

　それを聞くと、車椅子に座っていた男は、車椅子をゆっくり回転させて、三人の方を向いた。

十一

年の頃は五十代半ばくらいか。ネクタイをしていない白いワイシャツにチャコールグレーのスラックス姿の痩せ型。車いすに座っているのを別にすれば、街ですれ違っても気にもとめないくらい、普通すぎるいでたちだった。

「ようこそ、若いＥＴの皆さん。よくここが分かったな。古都田のやつ、よく調べている。偵察にしては派手な登場だったが、まあいい。最初は手入れかと思って驚かされたが、お互い血を見なくてよかった」

少しやつれたような顔立ちではあるが、端正で理知的な印象のその男は、涼やかな眼差しで三人に言った。

相手が、およそ荒くれ者たちの統領らしいいでたちではなかったことに少し安心して、万三郎が口を開いた。

「お店を、壊してしまって申し訳ありません」

男が笑って尋ねる。

「古都田から何か言い含められて来たのか」

ユキが万三郎の代わりに問い返す。

「古都田って、社長のことですか」

「そうだ」

「何かとは？」

男は少し声を低くして答える。

「計画のこととか……」

「計画？　英語の学習計画のことなら、もうオリエンテーションは受けましたが……」

　すると【bad!】が再び凄みを利かせた声で割って入った。

「おい女、ふざけているとためにならんぞ」

「わ、私たち、ふざけてなんか……」

　車椅子の男が怪訝な顔で問い返す。

「ひょっとして……、本当に何も知らないのか」

　ユキは当惑して万三郎と顔を見合わせた。

「ですから、なな何をです？」

「ふうん……」

　男は電動車椅子のリモコンを操作し、机を回りこんで三人に近づいた。場に緊張が走る。

「き、雉島さん、大丈夫ですか」

【bad!】が一瞬引き留めようとするのを、男は手で制した。三人のすぐ後ろで、サングラスのネクタイ男【ruthless】が低い声でつぶやく。

「お前ら、怪しい動きを見せりゃ、この場で始末するぞ」

　その声に続いて、スキンヘッドの【nefarious】が指の骨を鳴らす音が聞こえた。

　車椅子の男は、三人が棒立ちしているところまで寄ってきて、一番右の万三郎をまっすぐ見上げた。

「名前は？」

「僕ですか、僕は中……」

「ひひ人に名前を訊くんなら、じ、自分から名乗るのが、す、筋じゃあないんですか」

万三郎が答えようとするところに割って入ったのは、その隣に立っていたユキだった。

十二

ユキはまた緊張のあまり、足を震えさせながら、それでも気丈に食って掛かった。

「雉島さん、その女、気が強いですよ。この間も……」

【bad!】が男の後ろからユキを睨んで言った。

ユキが【bad!】に必死に言い返す。

「あ、あなたが【be子】さんに、かか、絡むからじゃないですか」

車椅子の男はユキに視線をまっすぐ向け直し、わずかに目を細めて右の口角を吊り上げた。

「そうかな、人のテリトリーに入って来た者の方が先に名乗るのが礼儀だと思うがな。まあ、いい。俺の名は、雉島一途（きじしま かずと）だ」

一番左に立っていた祖父谷が男に訊く。

「雉島さん、あなたの頬には文字がありませんが、あなたはワーズ社員ではないのですか」

【ruthless】が祖父谷の肩に手をかけた。

「おい、お前、出過ぎた質問を……」

雉島と名乗った男が片手を挙げて「よせ」と軽く振ったので、【ruthless】はチッと舌打ちをして祖父谷の肩から手をのけた。

雉島が言う。

「お前ら、ちょっと後ろに下がってろ。俺はこのＥＴたちと冷静に話をしたい」

言われて、三人の後ろのワーズ二人は低い声で「はい」と答えて、数歩後ろへ下がった。代わりに【bad!】が雉島に近づいた。それを見届けて雉島は祖父谷の質問に答える。

「ああ、俺はワーズではない。俺はソウルズだ」

「ソウルズ？」

　怪訝な表情を浮かべる祖父谷をはじめ、三人の顔を順番に見ながら雉島は逆に問う。

「それよりお前たちは、自分がなぜＫＣＪにいるのか分かっているのか」

　ユキが軽く頭を左右に振りながらため息をつく一方で、万三郎は思わず少しかがんで、雉島に顔を近づけた。

「き、雉島さん、あなたには僕たちがＫＣＪにいる理由が分かるのですか？」

「おいッ、雉島さんに近づくな！」

　【bad!】が語気を荒げたが万三郎はひるむことなく雉島の目をまっすぐ見つめた。

「分かるのなら教えてください！」

「こいつら、何を言い含められて来たんだ。おい、言えコラア！」

　凄みながら【bad!】がさらに一歩、三人に近づいたため、緊迫した静寂が一、二秒、部屋を包み込んだ。次に誰が口をきくのか。

「【bad!】」

「はい」

「俺は、こいつらは古都田から何か言い含められて来たわけではないと思う」

「そうですかねえ。雉島さん、油断は禁物です」

「まあ、しばらく下がって黙ってろ」

　雉島は軽く手を立てて、翻した手のひらを二回後ろに振った。

「……はい」

【bad!】は雉島のジェスチャーに従って、さっきいたところまで後ろに下がった。

十三

「いつ入社した？」

万三郎は唐突に訊かれ、言葉に詰まる。

「た、たぶん、四月一日……です」

雉島は無言で視線を祖父谷に移す。

「たぶん、同じ日です」

ユキは雉島に見られるとうつむいた。

「私は……分かりません」

雉島は万三郎に視線を戻し、さらに問うた。

「四月一日より前にはどこで何していた」

万三郎の目をまっすぐ見入ってくる。ぞっとするほど冷たく、暗い目だ。しばらくの沈黙の後、万三郎は思わず目を逸らした。

「お、覚えていません」

万三郎が言い切ってなお、雉島は万三郎を目で追った。そして上目使いで睨むように祖父谷に視線を移す。

祖父谷は口をもごもごさせた。

「私は……」

さらにユキは下を向いたままだ。

万三郎は例の頭痛にさいなまれていた。雉島は三人の襟元の、鴨の社章を交互に見つめる。そ

してそれらが赤く光っているのを認めてフッと笑みを浮かべた。そして次の問いを祖父谷に発した。

「英語学習は、好きか？」

　雉島と目があった祖父谷は、気圧されまいとぐっと目に力を入れて雉島を見返す。

「はい、大好きです」

　雉島は祖父谷から目をそらすことなくニヤリと笑う。二秒ののち、ようやく視線をユキに移した。

「お前は？」

　ユキは顔を上げて、これも気丈に雉島を睨み返す。

「仕事です」

「ふっ、いい答えだ。嘘はついていないものな。じゃあ、お前は？」

　雉島の視線は万三郎に戻ってきた。万三郎は顔をしかめて額に手を当てたまま、顔を上げて、それでも答える。

「好きに、なって、きました」

「ほう。では好きになる前は？」

「……大嫌いでした」

　雉島は声に出して「はっは！」と笑った。

「正直でよろしい」

　雉島は万三郎に特に興味を抱いたようだ。車椅子を少し動かして、万三郎の正面に定置して、改めて万三郎を見上げる。

「名前は？」

「中浜、万三郎です」

「中浜。では、その大嫌いな英語を、どうしてお前は学ぶことに決めたのだ？　社長室で、古都田に何と言われた？」

　万三郎は雉島の、冷たく暗い目に視線をからめとられたまま、記憶をたどり、やがて答えた。

「『ＫＣＪで英語を学ぶことは、自分が変わることを学ぶということだ。考えるよりやってみろ、扉があるなら、とにかく開けてみろ。チャンスの階段は、扉の向こうにしかない』と、言われました」

　その途端、雉島は爆笑した。あまりの大声に三人はビクリとした。

　もちろん万三郎はなぜそんなにおかしいのか分からない。

　笑いが収まったのち、雉島は挑戦的な面構えになって万三郎に向かって言った。

「恐ろしく安っぽいセリフに煽られたものだな、お前も」

十四

万三郎は最初きょとんとしたが、馬鹿にされているとわかり、ムッとして言った。

「どうしてそんなこと、訊くんですか」

「なぜＫＣＪにいるのか、知りたいと言ったのはお前たちだ。それを教えてやろうと思ったが、今の話で気が変わった。お前たちにはまだ早い」

「あの！」

万三郎が何か口ごたえするより先に、祖父谷が食い下がる。

「雉島さん、こいつにはまだ早いかもしれませんが、こいつと一緒にしてもらいたくないです」

雉島は祖父谷に向き直る。

「英語が嫌いだから教えない、大好きだから教える、というわけではない」

「いえ、俺もそこを言っているのではないです。俺はこいつより優っている、こいつは俺より劣っていると言いたいのです」

「おい、祖父谷！」

万三郎は隣の祖父谷に食ってかかろうとしたが、祖父谷は無視した。

雉島はわざわざ祖父谷の正面まで車椅子を移動させて、下から睨め上げるように厳しい目を向けた。

「祖父谷というのか」

「はい」

すると突然、雉島が英語で祖父谷に何か言った。

“Tell me the cumulative time you’ve spent on English studies so far.”

　流れるように滑らかで発音もネイティヴのようであったので、祖父谷以下三人のＥＴは目を見張る。

「は？」

　祖父谷はそう訊き返すしかなかった。

「やれやれ。誰が優っているだと」

　雉島のずっと後ろに控えている【bad!】が笑っているのは、その口元を見れば明らかだった。祖父谷はたちまち顔を赤らめて、うつむきそうになるが、うつむいたその視線の先に車椅子の雉島がいるので、小さい声で言わざるを得なかった。

「も、もう一度、お願いします」

　雉島はもういい、といった感じで顔を一度左右に振り、今度は日本語で訊く。

「お前、大好きな英語を学び始めて、累積で何時間になる？」

「え？」

「日本人が実用レベルの英語を身に着けるのに必要な時間は、三千時間と言われている(2)。中学から大学までやって、多い者でもせいぜい千五百時間だ(3)。お前もその辺りだろう」

「……」

「さて、お前は今からあと最低千五百時間を、英語学習に費やすのだな」

「……そ、そうなります……かね」

十五

「一般的な日本人が英語を習得するまでの三千時間。英米人は他のことに費やすことができる。日本人は三千時間分のハンデを背負っているわけだ」

「……」

「日本の中学、高校、大学で英語を学んでいる学生の数はざっと一千万人。一千万人×三千時間。それだけの生産性が英語のために費やされている」

「……」

「祖父谷、そのことに対するお前の意見を、今聞きたい」

「……あ……いや、それは……」

祖父谷は顔を赤らめ、口を半開きにして、両手を胸の辺りに持ち上げたまま、ゆらゆら震えるように揺らした。考えは、まとまらなかった。というか、なかったのだろう。
充分待ってから、雉島は元の冷たい目に戻って車椅子を転回させた。

「だめだ、やはりまだ早い。おい、この三人をチンステに送り返してやれ。丁重に、な」

「はい」

【bad!】が返事をして、部下に目で合図をする。心得たネクタイ男【ruthless】と、スキンヘッドの【nefarious】が三人のＥＴの背後から近づいてきて言った。

「雉島さんに感謝しろよ。無傷で帰れるなんざ、運のいい連中だ」

「ま、待ってください！」

ユキが雉島の後ろ姿に声をかける。

「あなたは、ソウルズとおっしゃいました。何者なんですか」

「てめえ、時間切れだ。痛い思いしたくなけりゃ、質問の時間はなしだ」

　【nefarious】がユキの背後でポキポキと指を鳴らす。去っていこうとしていた雉島は頭だけ振り返って言った。

「もはやリアル・ワールドに肉体を持たない人間だ。死者の霊魂と言った方が理解が早いか。古都田に言っておけ。レベルの低いＥＴの方が　支配（コントロール）　しやすくていいと思っているのか。だが、その判断はお前にとって命取りだと」

　再び動き出した車椅子の背中に万三郎が声を投げた。

「雉島さん、あなたは古都田社長の何なんですか！」

　車椅子がくるりと万三郎に向いて、雉島がニヤリと口元を緩めた。

「敵だよ」

◆◆◆

（１）The Global Language Monitor （GLM） ：米テキサス州オースティンに本社を置く、特に英語に関するトレンドやメディア分析によるデータを加工、提供する企業。"Word of the Year"などの賞の主催で有名。
http://www.languagemonitor.com/category/number-of-words/

（２）English Tutors Network http://www.etn.co.jp/approach/period.html

（３）同上

第九章　危機（1）

　一

「やあ、遠くからお呼びたてして申し訳ない。石川くんを呼ぶ前に、あなたに確認しておきたかった」

　部屋へ入ると、なじみの切れ長の目をした男が笑顔でそう言いながら正面から歩み寄ってきた。

　男にお辞儀をした時、ワイシャツの上を滑る上着の抵抗が緩く感じられ、内村鑑三郎は往時より自分が痩せたことを再び実感する。一度目は今朝、家を出る時だった。すっかり袖を通すことの少なくなったスーツの肩が落ちたような気がしたのだ。

　内村はふと思う。

――俺は今、みずぼらしく見えていないか。

　そこで、腰を折ってお辞儀をした後、意識的に胸を張って現役時代の威厳を演出してみた。

　視界の隅に毛利の姿が入った。

　内村を案内して先に入室した毛利正文（もうり まさふみ）官房長官は、そのまま部屋の脇に居流れていた。官邸ヘリポートまで迎えに出ていた彼と握手を交わした時にも思ったが、こうして室内に入ってこちらに顔を向ける彼に目をやれば、やはりテレビで見るより顔色が悪い。日々の激務に加えて、取り組むべき重要な案件がたくさんあるのだろう。そして、自分もその取り組みの一環で、山梨県の山奥からわざわざ呼び出されたのであろうことは想像に難くない。

「内村さん、疲れていませんか」

　切れ長の目の男が握手を求めながらそう訊いてきたので、内村は毛利から男に向き直って、握手に応えながら言った。

「山梨県庁からこんなに早く飛んで来られるのですね。あっという間でしたので疲れてはいませんが……もう引退して四年にもなる老いぼれに、このお呼び出しは大そうな刺激ですよ」

　男は手を握ったままもう片方の手を内村の背中に添え、身体の向きを変えて内村をソファーへ

と促した。

「はは、内村さん、老いぼれと申されますな。いまだ後輩の高級官僚たちがあなたの見解を伺いに、ご隠居先の山村まで度々押しかけているというじゃあないですか。老いたる馬は道を忘れずという。皆があなたを慕い、現状打開のヒントを乞うておるのでしょう？」

「いや、さすがに最近はそういうことも減ってきました。年寄りと釘の頭は、本来、引っ込むのがよいのですよ」

　そう答える内村を座らせた男は、テーブルを挟んだ向かいの椅子に回り込んで腰を下ろす。毛利官房長官も男の隣に座った。

　内村は表情を引き締めて、向いの男が腰を下ろすなり尋ねる。

「それよりも、明日で三月も終わりです。今年は本予算こそ早くに成立して、めでたい限りですが、年度末ですのに国会も審議停止、加えて国会議事堂や官邸周りはこのデモ。ヘリから見ましたがかなりの人が集まっていますね。大丈夫なんですか？」

　部屋の扉脇には秘書官と思われる若い男が一人だけ立ち、他の人間は部屋から静かに出て行った。入れ替わりに、お茶を載せた盆を掲げて官邸職員が入室してくる。

「そう、それらの対策でこの後の予定が押しているので、単刀直入に本題に入りたい。内村さん、私にもお力をお貸しいただきたいのです」

「大泉総理、いったい何事ですか」

　職員の女性が手際よくお茶を出し終えて引き下がるのを待ってから、内閣総理大臣
おおいずみ まんざぶろう
　大泉万三郎　は、内村の問いにゆっくり答えた。

「あなたが東京に残したアレで、ひとつ、世界を救ってはいただけませんか」

二

「二週間前に、米国が緊急改造したＩＣＢＭ『ミニットマン３』が十六発、ロシアの『ＳＳ一十八』が十六発、合計三十二発の大陸間弾道弾が発射されました」

「ほう、それは一大事ですね」

内村は大泉に笑いかけた。毛利が真顔で口を挟む。

「内村さん、総理は事実を言っておられます」

そこで、内村も毛利に顔を向け、真顔になって答えた。

「ああ、そうでしょうとも。わざわざ山梨から冗談を聞くために上京してきたわけではないですからね」

語尾にわずかに笑みを含むことで、こんなバカげた、愚にもつかぬ冗談を口にする総理大臣を非難する代わりに、毛利をちくりと刺した。それから内村は大泉に視線を戻す。

「総理、ミサイル話はもう結構です。単刀直入にとおっしゃったじゃないですか。で、何があったんです？」

大泉は下唇を噛んで、それからため息をついた。

「信じ難い話だと思いますが、内村さん……」

「はい」

「六日後に地球に小惑星が衝突するのです」

「は？」

「計算によると、日本時間で四月五日木曜日五時十四分、小惑星アポフィスが、日本近海の太平洋に衝突します」

「……」

　内村はぽかんとして大泉を見つめた。この人は何を言っているのか。それとも自分の方が何か夢を見ているのか。

「アポフィス……あのアポフィスですか。地球にぶつかるかも知れないという」

「そうです」

　大泉はまっすぐ内村を見返して頷いた。しかし内村は首を傾げる。

「ですが、去年の……そう、五月だ。アポフィスの軌道を逸らせるプロジェクトが成功したはずです。テレビでやっていました。いくら私が隠遁生活でニュースに疎いといっても、それくらいは知っています」

「……」

「総理……？」

　大泉が何も言わないうちに、内村は彼が言わんとすることを悟った。大きく目を見開く。

「で、では、あの報道は全て嘘だったと……総理は、そうおっしゃるのですか」

「……」

「い、いや、そんなバカな……」

三

内村は天を仰いだ。必死に考えを巡らす。そう、そんな突飛な話がにわかに信じられるはずがない。何の陰謀でこの人は私をたぶらかそうとするのか。テレビのドッキリ・バラエティー企画か？　こんな官僚崩れの老いぼれなどだまして、何の面白い映像が取れるのか。いや、バカな……。落ち着け、落ち着け……。

気の毒そうな表情で毛利が訊いてくる。

「内村さん、アポフィスの、プロジェクトの経緯をご存知で？」

「テ、テレビの特集で見た限りですが。小惑星アポフィスが将来地球に衝突する可能性が否定できないから、先進何か国かの共同開発で無人の宇宙船を打ち上げて、至近距離から核を撃ち込んで軌道を変えるというシナリオではなかったですか」

「それが、どうなったかは？」

「どうなったかって、だからＮＡＳＡの発表で、軌道をずらすのに成功したとテレビで言ってたじゃないですか」

「それが真実だと、誰が確かめることができる？」

「ちょっ、ちょっと待ってください」

じっと大泉を見る。そのシルバーグレーの豊かな頭髪の下にある、切れ長の目をめがけて、確かめるように言葉をねじ込む。

「何らかの理由で、プロジェクトは失敗した、ということですか」

大泉は反応しない。さらに内村に言わせようとする。だがそれでは、自分の推論が、もっとも恐ろしい結末へ流れて行ってしまうではないか。時間が押しているといったくせに、ずるい人だと内村は思った。だがともかく内村は、少しずつ思考を前に進める。

「アポフィスは、地球に、向かっている。それで、アメリカとロシアは、大陸間弾道ミサイルを、発射した……そして、ミサイルは……」

大泉が寸分も否定しないので、内村はたまらず毛利に目を逸らした。

「……外れ……た？」

毛利は黙ったままかすかに一度、首を縦に振る。当然だろう。ミサイルで問題解決していたら、自分がここに呼ばれるはずもないのだから。

大泉が静かに言った。

「今朝早くにホワイトハウスから、駄目だったと連絡があった」

一人で作業するにはそこそこ広い畑に種イモの畝を作り、植え付けを済ませた。紫外線が弱いこの季節であっても、一日外で作業していれば日焼けもする。そんな地黒な顔が恐怖で青く変わったところでそう容易に悟られないのが幸いだった。内村は総毛立っていた。

「せ、世界の一般の人たちは……日本……国民は、それを知っているのですか」

大泉が初めて口をきく。

「どの政府も厳しく箝口令をしいているが、民間が気付き始めています。日本においても世界においても、もう持ちこたえられなくなるのは時間の問題です」

「ひょっとして失敗は、ベテルギウスの超新星爆発のせいですか」

内村の問いに大泉は静かに頷いた。

「うーむ」

数秒の沈黙がある。そこまでは何とか腑に落ちた。

最近、後輩官僚たちの来訪が急に途絶えたのにも納得がいった。相手が内村といえども、さすがに彼らが秘密を不用意に口にすることはなかった。内村に相談すべき彼らの行政方針はすべて中断され、アポフィス関連の対応を優先したに違いない。

それから内村は声を低くして大泉に問う。

「で、私に何をしろと……」

「そこです。内村さんの長年の研究成果を発揮する時が来ました」

　内村の表情が厳しくなった。

四

「『あなたが東京に残したアレで一一』と聞こえたような気がしましたが」

ここまで来るともう状況説明は十分だとばかりに、毛利が畳み掛けるように話を進めていく。

「あなたの部下にして継承者、石川卓内閣府審議官を呼んでレクチャーを受けました。あなたが、そして今は石川くんが、二代五十余年にわたって、ことだまの、霊的・精神的なものではなく、物理的なエネルギーに関して、ひそかに研究・実験を積み上げてきたことを」

「……」

「そして、それが一定の成果を収めつつあるということを」

内村は慌てた。

「ちょっと、ちょっと待ってください。すると総理は、ことだまの力で、アポフィスの軌道をそらせろと、こうおっしゃりたいのですか」

「そうです」

「そんな荒唐無稽な……いいですか、その小惑星って、どれほどの質量があるのですか！　それも高速で地球に向かってきている天体の軌道を、地球にとって安全な角度まで曲げろなんて、どれだけ莫大なエネルギーが必要になると思ってるんです？　これまでことだまの力で成し得たことなど、いわば、本のページをめくるそよ風みたいなものに過ぎないのですよ。総理、官房長官。失礼ながら、お気は確かか？」

すると大泉が静かな口調で反論する。

「石川くんの説明によれば、もう少し進歩しているように聞こえましたが……？」

内村は一瞬沈黙したが、気を取り直して大泉に訊いた。

「石川は……彼は、あなた方にどのように説明しましたか」

「うん、まずあなたや石川くんだけではなく、何人かの人物は、『ことだまワールド』と言うのですか、言葉のエネルギーが蓄積される場に自由にアクセスできるそうですね」

「……はい」

「次に、あなた方はその『場』にあるエネルギーを取り出して、この世界に物理的に作用させることができる。いわゆる、サイコキネシスですかな」

「そこです。実際は、この世界に小さな物理的力を及ぼそうとすると、大きなエネルギーを必要とするのです。非常に小さな力であってもです」

　大泉は上半身を内村の方に傾けてさらに突っ込む。

「では、非常に大きなエネルギーを作ればよい。内村さん、あなた方の力で」

「総理……。仮に私が、この老いぼれが、死を覚悟して、持てるすべてのエネルギーをこの世界の物理的な力に注いだとしても、たかが知れています」

　大泉はその切れ長の目で内村を射るように見つめながら、静かに言った。

「強いエネルギーを持つ、若い連中がいるらしいですな」

五

内村は再度、一時沈黙する。ようやくぽつりとつぶやいた。

「……石川が、そう言いましたか」

大泉はかすかに頷く。内村はその大泉に訴えるように答える。

「彼らは……まだ養成中なのです。そもそも、若くてエネルギーが強いだけでは使いものになりません。そして訓練により、使いものになったとしても、彼ら全員が命を投げ出したところで小惑星を動かすなど、とてもとても……。むしろ、無理な訓練により、人格的に問題が出る恐れがあるのです」

大泉は再び頷いて言葉を継いだ。

「石川くんも、目下それを検証中だと言っていました。内村さん、私は石川くんに質問しました。そもそもエネルギーの源泉は、あなたや彼ら若者の生命というより、言葉そのものなのではないのかと」

内村は視線を上げて大泉に強く同意した。

「総理、その通りです。言葉自体にエネルギーがあるのです。人間は、自分自身が若さに応じたエネルギーを持つと同時に、言葉のエネルギーの生産者、そして利用者でもあるということです」

「では、日本語の言葉にも、エネルギーがあるということですね」

「そう考えるのが自然ですね」

「内村さん、なぜ日本語エネルギーの研究をなさらない？」

思いがけない質問に、内村は口を閉じて顔をしかめた。

国家存亡、いや地球滅亡の危機だということは分かった。このような重大局面で首相官邸に呼び出される以上、内村自身のことや、内村が極秘裏に進めてきたことだまプロジェクトのことは

、石川のレクチャーを受けるより先に、人を使って徹底的に調べ上げているに違いないのだ。内村がどういう経緯で、日本語ではなく、英語ことだまの研究に取り組むことになったのか、国家行政の長たるこの人には、今や手のひらを指す如く明白であると、国家機関で長年働いてきた元官僚の内村にはよく分かっていた。

――なのに、訊く。

　この総理の問いに何らかの意図があるのだと、内村は読んだ。おそらくは、この問いの返答によって望む方向へ話を誘導したいのだ。

――その方向とは……？。

　内村は、目に力を込めて大泉をじっと見返し、慎重に答えた。

「……いずれお話しする機会があれば」

　今度は大泉の目がキラリと光った。

六

すでに退官しているとはいえ、官僚はふつう、最高上司である内閣総理大臣からの問いに対して、このような答え方はしない。ゆえに大泉も、内村が簡単には誘いに乗ってこないと気付いたようだ。

「いいでしょう。英語のエネルギーの話に絞りましょう。繰り返してお訊きしますが、その、英語エネルギーの使い手たる若者たちは、まだ使いものになりませんか」

「そう聞いておりますが、その辺りは石川の方が私より詳しいかと」

これも総理は分かった上で訊いていると、内村は即座に気づいた。ただ、その意図を図りかねているのだ。

果たして大泉は、やはり石川から聞いていたようだ。

「うむ。彼の説明によると、今の技術では、検体の全人的保全が担保されないと」

内村は目を伏せる。

検体……。石川が自ら検体という用語を使ったのだろうか。いや、おそらくあいつは、このプロジェクトの意義をよく知らぬ者に説明するのに、その呼称を不用意には使うまい。ということは、大泉の命でプロジェクトを調査した者が、書類の中で使われていたのを大泉への報告でそのまま使用したのだろう。

――ということは……。

「総理、彼らはまだ、私や石川のようには熟練しておりません。若さゆえに本質的に持っている強いエネルギー、彼らはまだ多くをそこに依存しています。つまり、未完成です」

今度は大泉がしばらく黙った。すると毛利が代わりに訊いてきた。

「全人的な保全は、そんなに大事なことなのですか」

内村はハッとして顔を上げ、毛利を見る。毛利は険しい表情を崩さず、内村の目をじっと見返

している。

　内村は電撃的にすべてを理解した。

　この部屋に入って間もなく、大泉がおっとりと言ったあの言葉は、とてつもなく重かったのだ。

　あなたが東京に残したアレで、ひとつ、世界を救ってはいただけませんか。

　否とは言わさぬこのシナリオが、綿密に打ち合わされたものなのかは知らないが、否とは言わさぬという結論は、最初からあったようだ。内村の胸には、口惜しさと諦めが交互に去来した。

――せめて、せめて自分の意志で決めてやる……！

　年甲斐もなく泣きそうになりながら、内村はわざと、仕込まれたプロットを踏んでいった。

「全人的な保全は、大事です。彼らは、生きているのです」

　案の定、毛利はニコリともせず言ってのける。

「すでに何人もの検体に異常が発現したと石川くんは言っていましたが、実験に失敗はつきものなのでは」

　内村は目を見張った。

　毛利の人格を疑ったのではない。そのような意味のことを言い返されるであろうと予想はしていた。毛利が官房長官になる前から内村は彼のことをよく知っていた。彼は温情あふれる政治家で、国会議員の中でも特に尊敬に値する志士であると内村はかねてから思っていた。その人物をしてこうはっきり言わしめる状況が、いかに切迫したものかを、内村は改めて悟ったのだった。

　内村が黙っていると、今度は大泉が言葉を継いだ。

「未完成の検体を早く完成させるために、学習プログラムのスピードを早めることは、物理的には可能らしいですね」

「……」

　内村が目を伏せるのに構わず、大泉が言う。

「石川くんは渋っていましたが」

――なるほど、それで私を落とそうと……。

「だが石川くんはこうも言った。すべての検体に異常が現れるわけでもないと」

「……」

　内村が黙り込んでしまったので、説得できていないのだろうと思った毛利が、内村の予想通りのプロットを進める。

「内村さん。あなたは、定年を迎えられた後、他の事務次官とは違うキャリアパスをたどられましたね。再雇用プログラムに乗っかる、いわゆる天下りをされなかった。それはとりもなおさず

、秘密と情報を守ろうとしておられたからですよね。つまり、他の任務に就くことなく、ご自身が育てたプロジェクトをそっと見守る道を選ばれた」

　内村は顔を上げ、毛利たちが持ち込みたい筋書きに沿うように釈明した。

「ことばのエネルギーを引き出すことができるのだと、ひとたび表に出れば、すぐにアメリカが共同研究の話を持ちかけてくるに決まっています。日本ごときにこのような重大な成果を独り占めさせてなるものかと。ですがこれは、国家機密事項には指定できない。国の承認を得ていない私的研究ですから。公的に他へ委任することでは、プロジェクトは守れないと思ったのです」

　毛利はそっと大泉と目交ぜした。内村は目を伏せて見て見ぬふりをする。

「内村さん、あなた、国家が承認していないプロジェクトに、長年にわたって特別会計から上手に予算をひねり出してきましたね。これは複数の法令に明確に違反する行為です」

「……」

八

内村は毛利に最後まで言わせるつもりだった。毛利はちらりちらりと内村の反応を見ながら続ける。

「しかし、それは決してケチな不正蓄財などではない。今回のような国家存亡の危機に、国民の生命と財産を守るべく、国家国民に命を奉じる覚悟、大志ゆえと信じております」

毛利は内村の目にじっと見入った。

「違いますか？」

「……」

内村が黙っていると、毛利はたまりかねて言いたいことを言い切った。

「その大志を発揮するべき時はまさしく今、この時ですよと、こう鼓舞激励したくて、総理はあなたをここにお呼び申し上げたのです」

内村は、目を閉じる。

石川に、そして石川が古都田に引き継いでからの期間を含めると、毛利が言ったように、五十年を超えるプロジェクトだった。内村が、あの事故で生死の境い目をさまよった時、意識が初めて迷い込んだことだまワールドは、今とは比べるべくもなかった。琴代志乃（ことしろ しの）との出逢いが内村の人生を変えた。以来、自力レシプロケーションの方法を編み出し、志乃と協力してこの国の国民の英語力の強化に寄与してきたという自負が内村にはあった。それはすでに、時間的にも内容的にも内村の人生の大部分を占めている。ここへきて、その人知れぬ苦労など何も知らぬ人間から、どうこうせよと命令を受けたくはなかった。しかしながら、国家存亡の危機にあって、協力を拒否する選択肢などありようがない。国が、世界が滅びては元も子もないのだから。だが、協力したところで危機が回避できるとはおよそ思えない。大泉たちが希望をつなごうとする「未完成の若者たち」を、仮に完成させ得たとしても、それがアポフィスの軌道をそらせるだけの力を持つなどどうして言えようか。そもそもそのようなことを想定して進めている研究ではないのだ。

しかし同時に、はなはだ不確定な可能性に賭けざるを得ないほど追い詰められている大泉や毛利の苦しさもよく理解できた。内村を脅してでも従わせようとしているのだ。

――ここが、俺の命の捨て所か……。

　その時、内村は当たり前のことに気付いた。アポフィスが東太平洋に衝突したら、日本など真っ先に消えてなくなるのだ。自分はおろか、皆にとって命の捨て所なのだ。
是非もない。

――であれば、違法行為などと責められるよりは……。

「官房長官、石川審議官をここへ」

「は？」

「もう来ておるのでしょう？　彼をここへ呼び入れてください」

　毛利は目を丸くしたまま、大泉の方を見た。

「内村さんのおっしゃる通りに」

　大泉は毛利に頷く。毛利は席を立ってドアのところに出て行った。大泉が内村に小声で言う。

「よくお見通しのあなたに、失礼な流れになりましたね」

　内村は大泉の切れ長の目を見つめて違うことを言った。

「国家の危機に、その責任者を務められる総理のお気持ちはどのようなものか、私のような小心者には計り知れません」

　切れ長の目がさらに細くなった。

「私も人の子です。あなたと同じですよ」

　内村は小さく、屈託なく笑う。

　ノックがあり、石川を伴って毛利が再入室してきた。

「総理、内村さん」

「石川くん」

　石川が内村の横に立った時、内村が立ち上がったので、大泉もその場に立ち上がった。毛利は大泉の横に立つ。

　内村は、すでにサイズの合わなくなったスーツの下で精一杯胸をそらせ、顎を引いて腹から声を出した。

「大泉総理、毛利官房長官。私は元内閣府事務次官として、このたびの国難に際して、身命を賭して国家に奉じることを誓います。また、石川卓内閣情報調査室審議官が統率しているプロジェクトを、国家救済に役立てるべく、彼がその職責を全うすることを希望いたします」

　言い終えると、大泉に向かって一礼する。上着の滑りが良い。礼から直ると、大泉が内村の手をしっかり握ってきた。

「内村さん、ありがとう」

　内村はすがすがしい笑顔で答えた。

「年寄りと釘の頭も、引っ込まずにおれば、誰ぞ引っかかって助かるかもしれませんな」

　石川はそっと内村に向かって敬礼した。

九

その石川は、二時間後、首相官邸から少し離れた、都内民間病院高層病棟の最上階にあるＶＩＰ用待合室の大窓からひとり、街を見下ろしていた。

春先の小雨は路面を艶めかして、カラフルな傘の小花を躍らせている。自動車やバスやトラックも、秩序正しく動き、止まり、曲がっていく。そこには一見、日常と変わらない街の姿があった。

日本人というのはつくづく真面目な民族だと石川は思う。この星が直面している真実について、確かに日本政府は何も発表していない。だがもちろん、アマチュア天文学者や、ジャーナリストや、インターネット上の扇動家に端を発した様々な噂は、信ぴょう性の高いものとデマがごちゃまぜになって、すでに国民の大多数が知るところとなっている。

日本に限らず、世界各国の政府や国際機関が情報隠蔽疑惑を疑われていて、インターネットを介して、不穏な空気が世界中に共有されているのだ。

情報統制をしている国はもちろん統制を強化して不穏な情報を封じ込めようといるし、独裁国家では、すでに軍を総動員して治安の維持に努めている。それらの国々では不信が即座に不満と結びついて暴動に発展するからだ。

これらの国々を含め、政府に対する民衆の不信は、世界のどの国でも予断を許さないほど高まっているのだ。

実はアポフィスは破壊されていなかったのではないのか。アポフィスもしくは未知の小惑星が近く地球に衝突するのではないのか？　政府はなぜそれらの噂がデマであることを裏付ける証拠を提示しないのか。

テレビもラジオも連日途切れることなく噂を検証し続けている。その影響で大衆の不安があおられ、水、食料品、日用品、ガソリン、電池などは、すでに入手困難な状況になっていた。

また、学生たちが春休みに入っていることもあり、国会議事堂前では、連日大規模なデモが行われている。シュプレヒコールは日増しに激しくなってきていた。だがそれでもこの国では、それが暴動にまでは発展していなかったし、この機に政府に揺さぶりをかけようとするテロも発生していなかった。

もちろんそれは、警察が主要施設の警備を強化していることや、政府関係者が各方面で不安の鎮静化に全力を挙げているためでもある。

実際、金融証券部門については、世界各国政府で歩調を合わせた、秘密かつ空前の大規模市場介入によって、株価の暴落をかろうじて食い止め得ているし、日銀も特例的に市場銀行に無制限に現金を貸し出し、取り付け騒ぎの火種を断固として抑え込んでいた。

だが、治安がぎりぎりのところで保たれている何より大きな理由は、それ以外の社会が普通に機能している事実だろう。行政機関は動いているし、大企業も多くは通常業務を行っていた。

一億二千五百万の人口を擁するこの経済大国が、比較的冷静な状態を保っているのはまさに奇跡だと、細かい雨粒に曇る摩天楼を見ながら石川は思った。

歩行者信号が青になったのだろう。いくつもの傘が横断歩道を行き交っている。遠くに雲の切れ目が見え始めた。たそがれ時には雨が上がり、陽が差すのではないだろうか。

その時、セキュリティーのしっかりした奥のドアが開き、古都田誠が待合室に入ってきた。

「石川さん、お待たせしました」

十

「官邸にいらっしゃったのでしょう？　わざわざここまで来ていただかなくても、リンガ・ラボまで私が戻りましたのに」

「いや、古都田社長、我々も正念場が近づいている。こちらの『離れ』から俺がレシプロする日も近いと思って、その下見を兼ねて、ね」

古都田の顔が曇った。

「正念場、ですか……」

石川は大窓から離れてソファーに腰かけ、古都田にも向かいに座るよう、手で促して言った。

「内村さんに会ってきたよ」

古都田はソファーに腰を下ろすときに、少しふらついた。

「失礼しました。どうも歳を取るとつい、楽なカプセルに頼りがちになるのですが、セルフと違って、戻って来るとなぜか足もとがおぼつきません」

石川は小さく頷くと、古都田を気遣いつつも、率直な気持ちを口にした。

「俺も同じようになるかもしれんが、ここは病院だ。何か副作用が出ても、すぐ診てもらえる。俺もできれば毎回、ここからカプセルでレシプロしたいものだよ、楽だからなあ」

そう言ってフッと笑う石川に一瞬同調の笑みを浮かべると、真顔に戻って古都田は訊いた。

「石川さん、内村さんはお元気でしたか」

「ああ、少し痩せられたがな」

石川もまた、表情と声色を厳しく変えて本題に入る。

「古都田くん、ＥＴたちの現況を教えてほしい」

「ああ、たった今、ことだまワールドで彼らに接触していました」

「ＥＴたちのプロジェクトの進捗度合いは？」

「新渡戸くんのレポートでは、九十二パーセント程度です」

「あと二日で仕上げてほしい」

　古都田は目をしばたたいた。

「は？　こちらの時間でですか」

「そう。リアル・ワールドの時間で、四月一日朝までに」

「あ、明後日まで……あと二日で八パーセントを仕込めと？」

「仕込めなくても、もう、使う」

　石川は古都田の抵抗を読んだ上で言葉をかぶせるようにそう言い切った。古都田は目を丸くして、それから厳しい目つきになって、右上を睨み、石川を睨んだ。

「今ここまで、平時十二倍速でクルーズしています。そういうことであれば、すぐに十五倍速……いや、修了試験実施の時間も加味すれば、二十倍速に上げなければ間に合いません。しかし……」

「古都田くん、やってくれ」

　古都田は、厳しい表情で石川を睨んだままつぶやく。

「また……出ますよ、　ＳＳＥ（エス・エス・イー）　が……（1）」

　石川も古都田を睨み返している。

「やむを得ん」

　それでも古都田は食い下がる。ほとんど怒っているように見える。

「ですが、もし、全検体にＳＳＥが出たら？」

「その時は古都田くん、彼らの上司である君に、責任を取ってもらう」

古都田はピクリと動いた。構わず石川が言葉を継ぐ。

「俺と一緒に……な」

石川は古都田の双眸をまっすぐ見据えた。命を懸けろと言いたいのだ。

古都田は小さくつぶやいた。

「正念場か……」

それから古都田はニコリと相好を崩した。

「石川さん、我々二人の命では、足らないかもしれませんよ」

石川の口の端がニヤリとわずかに引き上げられた。

「全人類が責任を取らされるかも、な」

◆◆◆

（１）ＳＳＥ……Severe Side Effects（重篤な副作用）

第十章 鴨焼（1）

一

中村美耶が通う中学校では、一学期の期末テストが終わった後も、終業式までの数日間、二学期と称して夏休み前に授業が行われていた。だが一年生に限って言えば、もう生徒たちは気もそぞろだ。晴れ晴れとした表情を隠しきれず、授業中でさえ浮かれ騒ぎする生徒がいる始末だ。今になって思えば、『無理もない、こいつらは半年前はまだ小学生だったのだから……』そう、先生も大目に見ていたのだろう。

「こら、大輔！　いい加減どおくるん(1)やめろ。聞こえちょったぞ。何が『冷麺、ラーメン、そうめんそーれー』じゃ。お前、家族で沖縄旅行に行くんちお盆(2)じゃろ？　テンション上がるんが早すぎるんよ」

英語担当でクラス担任の太田圭司先生が苦笑いしながら注意する。先生が大輔の下手なダジャレをそのまま真似して言ったので、クラス中が大爆笑だ。注意された園田大輔は、ウケたのが嬉しくて頭を掻いている。

「じゃあ、大輔！　お前、次、読んじみい」

「えーどこどこ？」

すぐさま隣近所の女子たちが教科書を指さして「大ちゃん」に教えてやる。

「えーっと、アイ・ワント・ツー・ビー・ア……ア……コック」

「クックや。日本語ではコックじゃけど」

「えー、シェフやろ」

「シェフはフランス語由来なんよ。次、読んで」

「オー、ザッツ・グレート！」

「よし、そこまでや。大輔、お前、沖縄言葉もいいんじゃけど、英語ちゃんと覚えよな。料理人は英語で？」

「コ……コッ……ク」

「クックや」

　教室が笑いに包まれる。伊藤航平も笑っていた。その航平の横顔を教室の後ろの席から遠目に見て、美耶はいよいよ陰鬱な気分になる。同じクラスで毎日顔を合わせるだけに、そのダメージは計り知れない。事情を知っている友人たちからの同情の視線も今朝から加わって痛みをさらに増幅させている。夏休みに入るまであと三日。痛みに耐えながら、ひたすらおとなしく、目立たなくしていようと美耶は固く心に決めていた。

　本当は、心の奥深くにしまい込んでおくべきだったのだ。詠美たちにそそのかされた自分が今は愚かしい。

「大丈夫やけぇ、美耶ならいけるで」

　体育倉庫の裏に航平を呼び出した。マンガのように物陰から顔を出す詠美と友麻。控えめな性格に育った美耶の十三年間の人生で、たぶん一番勇気を振り絞った瞬間だった。

　航平が言った。

「俺、お前んこと、そげん対象で見たことなかった」

　それで充分だ。日本人なんだから、それだけでちゃんと意味が理解できる。そこへ航平がさらに付け加えた。

「中村、ずっと思っちょったんやけど、お前、何でいつもほっぺたが赤いん？　アニメとかで出てくる昭和の子供みたいや。いつも何か恥ずかしがっとるみたいでおかしい。男子はみんなお前んこと『赤ホッペ』っち呼んどる。俺、赤ホッペとはよう付き合わん」

「……分かった。ごめん……」

　教室の笑いはいったん収まったのに、先生が黒板に、”I want to be 〜.”と書いている短い間に、皆のおしゃべりがまた大きくなる。そんな中、自分一人だけ、聞こえる声が小さくこもって、何も見えなくなって、息が苦しくなった。小学六年生の修学旅行の夜、ふざけて友人たちに布団で顔を覆われたときのように。

ーー私、どうして昨日あのとき、謝ったのだろう……。もちろんほっぺたのことは自分も気にし

ていたけれど、そんな、マンガみたいに、そこまで赤いわけじゃない。

二

小学校の時とは違って中学に入ると、髪型についてうるさく言われるようになった。短めに切るか、くくれ。額と頬を出せ。気がつけば美耶はこの一学期の間に、両手で頬を隠すように深い頬杖をつくのが癖になった。

今もそうして目を伏せていたのだ。

「中村、どげぇした浮かん顔して」

板書を終えて振り返った先生がうつむく私を認め、心配する風な顔でわざわざ生傷をえぐる。皆の視線が美耶に集中する。そりゃあそうだ。浮かない顔ってどんな顔なのか、誰でも興味がある。

「じゃあ次、中村、読んじみい」

教科書を持って起立すると、針の束で刺されるような気分だ。それらの針のうち一本は航平だろう。美耶は元々英語に苦手意識があり、どちらかというと嫌いな教科だった。

「アイ・シンク……」

「スィンクや。こう、歯と歯の間に舌を挟んで息を出す」

まるで窒息寸前までビーチボールを膨らませ続けろと言われている気がする。少しつまむと空気が逆流してくるイメージが浮かんで、息苦しさにすべてを投げ出したくなるのを危うく抑える。

「アイ・スィ……スィンク・ユー・キャン・ドゥー・イット」

「続けて」

「アイ……アイ・ホッ……ペ……ユア・ドリーム・ウィル・カム・トゥルー」

「中村、ホッペじゃねぇで、ホープや。希望を持つっち意味やな」

　教室の半分は爆笑、もう半分ははにかんだような笑いに分かれた。そのとき美耶は自分がどういう表情をしていたか分からないが、顔のどこの筋肉がどんな緊張をしていたかは感覚ではっきり覚えている。だがきっと二度と再現できないだろう。

　調子に乗った大輔が立ち上がり、大声でおどけた。

「ホッペち……赤ホッペ、自爆やん。女子から聞いたんじゃけど、お前、昨日航平にコクって断られたち？　そらあそうじゃろ、ホッペ赤いもん。無理。希望なし。ノー・ホープ。はい、赤ホッペ終了」

　再度、クラスの半分は大爆笑だった。おそらく昨日のことを最初に漏らしたであろう詠美と友麻は大輔に抗議した。

「園田サイテー。なんでバラすんよ！」

　クラスが騒がしくなり始めたので太田先生が言った。

「大輔、もういい座れ。中村も座れ」

　それから太田先生は黒板に“cheeks”と書いた。

「頬っぺたはチークや。左右あるけぇ複数形にする。『赤い』は“red”もねぇことはねぇけど、“rosy”の方がいいな。『バラ色の』ちゅう意味や。伊藤、中村は赤ホッペじゃねぇで、バラホッペやで。返事、考え直したらどげぇな」

　航平は皆の手前、多少の照れがあったのだろうが、本当に迷惑そうな顔をして、それからかすかにかぶりを振った。

　そして、この瞬間、美耶は英語が大嫌いになった。

三

――待って……。

潮流が速すぎて、バディを見失いかけていた。力強くフィンをストロークしているつもりなのだが、まったく追いつけない。スキューバ・ダイビングについては就職の内定をもらってから始めたばかりで、まだ間違いなく初心者レベルだった美耶はパニックになった。スクールの座学では、トラブルに際しても冷静に、呼吸を深くゆっくり保つようにと習ったが、実際自分がその状態に遭遇すると、その恐怖心は尋常ではない。焦りが自然と呼吸を早める。

――と、とりあえず浮上しないと……。

浮力調整ジャケットの給気ボタンを目いっぱい押し込む。深度計を見ると確かに浮上している。

早く、早く……と焦っていると、腕のダイブコンピューターが警報を発しているのに気付いた。

ピーピーッ、ピーピーッ、ピーピーッ。

浮上速度が速すぎたのだ。

――あ、そうか。止まらなきゃ……。

そう思ったのが、理性的判断が頭をよぎった最後だった。息が苦しい。胸が痛い。今、上を向いているのか下を向いているのか。前後不覚に陥る中で、自分がどんな動作をしているのかも分からなくなっていった。

――苦しい。痛い。ああ……。

すでにぼんやりしていた視界の明度が落ち、ブラックアウトしていく。もはや、鳴り続けているアラーム音だけが、環境と意識を結びつける唯一の存在になった。
ただただ、息が苦しい。

ハア、ハア、ハア……いッ……いーッ……

「いやあーッ！」

　目を大きく見開き、がばっと勢いよくベッドから上半身を起こした。

　汗で頭がびっしょり濡れている。

　息は……できる。肩で目いっぱい息を吸い、吐いている。

　見ると、お腹のところに自分の肩掛けバッグが転がっていて、中身の一部が飛び出して、腰の辺りに散乱していた。起き上がることで、もともと胸の辺りにあったバッグが転がって、中身が散らばったようだ。

　ピーピーッ、ピーピーッ。

　枕元に置いていたスマホのアラームが鳴っているのに今になって気付いた。アラームを止めてスケジュール画面を確認する。

「懇親会@いろは・十九時」

　慌てて時計表示に切り替えてみる。

　十八時三十四分！

「冗談でしょ！」

四

急いでベッドから起き出すと、散乱した小物を手早くかき集めてバッグに戻す。

今日は終業後、各々いったん自分の部屋に戻り、「いろは」に再集合して、先生方とみどり組の懇親会をすることになっていた。夜が遅くなりそうなので、スマホで手早く日次報告を済ませようと考えたところまでは良かった。送信ボタンを押したところで、疲れからつい眠気を催し、ベッドにごろんと横になったのだった。

――十五分だけ……。

十五分後にアラームをセットすると同時に眠りに堕ちた。起きて画面を見たら、すでに何回目かのスヌーズだったようだ。

――着替える時間はない……。

ドレッサーの前に座って髪をときながら考える。どうして、はかなく散った……いや、無残に砕け散った、思い出したくもない中一の初恋の夢を見たのだろう。

――あのせいだわ、きっと……。

ベッドの上のスマホを恨めしそうに睨む。

せわしいはずなのに、髪をとく手を止めて、鏡に映っている自分の顔に見入った。大人になって、赤ホッペはずいぶんましになった。だが、地の皮膚の色がもともと白いので、チークを入れなくても頬には赤みが浮かぶ。その赤みのある両頬の上に、憂いをたたえた双眸。眉尻の上がった、腹立たしげで哀しげな、女の顔がそこにあった。

――私はどうするべきか……？

鏡の自分に問いかける。

一度手にとった髪ゴムを置いた。そして長い髪をくくらないまま、ヘアスプレーで柔らかくセットした。メイクについては時間がないので直すのが精いっぱい。でも、口紅はいつもより強めのトーンを引いた。普段はつけない香水もつけた。

鏡の前で爽やかににっこり笑ってみる。次に、少し媚をたたえてあでやかに笑ってみた。艶(つや)めいたローズピンクの口紅を引いた唇を丸くすぼめて、声に出すことなく、口真似で言ってみる。

「万三郎……私、酔っちゃったかも」

言い終えて二秒の沈黙の後、吐き捨てるように脇を向く。

「バッカみたい」

手早くバッグとスマホを持つと、福沢由紀はそそくさと部屋を後にした。

五

お店の看板娘、五郎八（いろは）の弾んだ声が聞こえた。

「いらっしゃいませ！　あ、ユキさん、あちらに皆さんいらっしゃいますよ」

ほうぶん先生がここだと手を挙げる。ユキは笑顔で応え、五郎八に「生ビールを」と注文しておいて、あらかじめ空けておいてくれていた杏児と万三郎の間の席についた。

「先に始めておった。許されよ」

「こちらこそ、遅れてすみませんでした」

「あらっ、ユキちゃん、なんだか色っぽいわね。髪をほどいているからかしら」

――さすが同じ女性。甲斐先生、私が気合い入れて来たの、すぐ気づいたわ……。

「ちゃんとまとめる時間がなくて……」と笑顔で返す。それからちらりと万三郎の方を見た。けれども万三郎は、特段私に関心を示していないようで、手元のお通しに箸をつけている。

着席するなり、隣に座っていた戸井久美子先生が耳打ちしてきた。

「二時間飲み放題なんだけど、テーブルごとのスタートだから、私の時計を基準に進行してるの。途中、スタート時間が遅かったからとか、注文が通っていないなどの理由による、飲み放題時間の延長ややり直しは一切認められないから、そのつもりでね。それから……」

ビジネス英語のテスト前さながらの注意事項の伝達を愛想笑いで受け流しながら、戸井先生をマジマジと見つめる。髪は束ねられ、眼鏡もかけていて、アクセサリー類も小さく地味なものしかつけていないのは相変わらずだけれども、黒いスーツの下に着ている白いブラウスの前面に、控えめなフリルがついていた。

すかさず褒める。

「戸井先生、今日は、オシャレされてますね！」

　それまで淡々としゃべっていた戸井先生の言葉が突然止まった。髪を束ねているせいで露出している両耳がみるみる赤く染まっていく。視線が右に左に目まぐるしく動いて、声は上ずった。

「そ、それから、メニューに関する質問には一切お答えできません」

　ブラウスのフリルが精いっぱいのオシャレなんだわ。戸井先生、カワイイ！……とは思ったが、目上の方に失礼な言い方かもと、あえて口には出さず、表情だけにしておいた。

　うろたえても口上だけは途中で止めるわけにはいかないらしい。

「そ、それから、体調がすぐれないとき、および、お手洗いに行きたいときは、静かにその場で手を上げて、試験監督者にお知らせください。それではこのまま、試験開始までしばらくお待ちください」

「はい、分かりました、戸井先生」

　あえて試験関連のおかしな言葉はスルーして、戸井先生に柔らかく微笑んで会釈しておく。

「おお、今夜の福沢、マジかわいくね？　女子力、神（かみ）ってんじゃん」

　そう嬉しそうに言う文ちゃん先生こと片井文吾郎先生を、ほうぶん先生が苦笑いして諫める。

「先生、ダメでござるよ、先生が生徒に手ェ出しては」

　文ちゃん先生はあわてて咳払いをして釈明する。

「はあ？　ほうぶん先生何言ってんの、チョー訳わかんね。俺が出すのは手じゃなくて、メニュー」

文ちゃん先生が差し出す、塩ビのシートに入れられたメニューを苦笑しながら受け取った。

「文ちゃん先生、ありがとうございます。えーっと、何頼もうかな……」

六

目はメニューを追いながら場の話の流れをつかむため耳をそばだてる。杏児が甲斐先生に問いかけるのが聞こえた。

「先生、前からお聞きしたいと思っていたんですが、バナナ虫の飼育、されているんですよね？」

甲斐和月先生は、紫外線と潮風でごわついているけれど、自慢のストレートヘアが垂れて来るのを左手で押さえ、揚げ出し豆腐を箸でつまんで口に入れたところで、杏児から質問を受けた。

「昔の話よ。今は鷹匠（たかじょう）になるために猛勉強しているわ」

「鷹匠って、鷹を操る人……ですか？」

「そう。鳩の駆除で需要があるのよ」

「……って、甲斐先生、転職考えているんですか」

続いてビールをグイッとやる。なかなか豪快な飲みっぷりだ。

「去年は、うなぎのかば焼き職人を目指してたんだけどね、うなぎが獲れなくなって、今から目指すのは厳しいかなと」

「甲斐先生、一昨年は、飛行機の誘導をするマーシャラーを目指しておられたのござろう？　やめられたのかな」

ほうぶん先生が酒蒸しのアサリの身を口先でこそげとって、殻を手で取り出しつつ訊く。

甲斐先生は頷いた。

「空港がないのよ。チンステしかないの。だから需要がない」

杏児が何か言いたそうな顔をしているが、口は開かない。普段思ったことをすぐ口に出す杏児でも、言葉を飲み込んだようだ。おそらく、「先生、よく考えてから始めればいいのに……」と

言いたかったが、さすがに失礼と考えたのだろう。

　ユキを挟んで反対側に座っている万三郎が、少し身を乗り出すようにして、甲斐先生とほうぶん先生を等分に見ながら問いかける。

「空港がないこととか、逆にチンステがあることとか、そういう事実については、先生方は何の疑問も抱かれないのですか」

七

メニューの塩ビシートを見ていたユキの視線が、万三郎に注がれる。同席の皆が一瞬、静まり返った。

同調したのは杏児だ。

「そう、そうなんだよなあ……。頬に入れ墨のある連中がジェットコースターみたいなのに乗って空飛んでくんだもんな。なんか、非現実的な……」

すると甲斐先生が、「何言ってるの、それはそういうもんじゃない？」という表情で両腕を軽く広げ、手のひらを上に向けて、アルファベットの「W」のようなジェスチャーをする。

“That’s the way it is.（3）”

杏児の方を向いて「ねっ！」と軽く首を傾げる甲斐先生に続いて、ほうぶん先生が口を開いた。

「杏児くん、そして万三郎くんも、店内を見なされ。今、われら以外の客は皆、ワーズたちでござる。さっき、皆こぞって我々に挨拶しに来たではござらぬか。これは夢まぼろしでござるか？
そうではあるまい。彼らはことだまとして厳然と存在してござる。そしておぬしらはＥＴ、彼らを管理監督するヒューマン、それがしや先生方はその、ＥＴを育成するヒューマンでござる。事実は事実、それ以上、疑念を持つのは無意味ではなかろうか」

ほうぶん先生のこの説得には、まるで論理性がないとユキは思った。答えになっていない……というより、ちょっと穿って考えてみると、話をはぐらかそうとする意図がありありと見える。案の定、万三郎は食い下がってきた。

「ほうぶん先生、『ことだま』って、ワーズ社員を指して言った言葉ですよね。ことだまって、そもそも何ですか？」

「ＫＣＪ、ことだまカンパニー・ジャパンの『ことだま』だが」

とぼけるほうぶん先生に、いやそうじゃなくて……と言おうとして、万三郎は急にこめかみを押さえて顔をしかめ、口をつぐんだ。

　代わりに杏児が口を開く。

「『ヒューマン』って、人間っていう意味ですか」

　再び、一瞬の無音がテーブルを支配する。即座に、場を茶化すように文ちゃん先生がおどけた。

「かーっ、チョーめんどくせー。今、授業中じゃねえし、そんな香ばしい質問、やめてくんねー」

「こ、香ばしい質問……？」

　まだ何か言いたげな杏児だったが、彼もまた突然、顔をしかめて片手で両目を覆った。

　戸井先生が即座に言う。

「試験中、気分が悪くなられた方は、その場で静かに手を上げて……」

　ほうぶん先生が畳みかける。

「さ、二人とも、難しい質問はやめにして、ユキどのを交えて改めて乾杯といくといたそう」

　だが万三郎はこめかみを押さえたままじっとテーブルを睨んでいる。

「なんでだろう、いつもこうなんだよなあ……なんか、この世界って、いまいち実感がないんだよなあ」

「酔っておるせいでござるよ」

　ユキは万三郎と杏児のラペルピンの鴨が赤く目を光らせているのをちらりと見てから、大きな声で誰にともなく言った。

「鴨焼き串って、あるのかしら」

八

ユキの質問の直後、なぜか微妙な空気が場に広がった。ほうぶん先生が「ファウル・チップ」と意味不明なことをつぶやいた。

「ぢゃ、訊いてみっぺ」

この空気を破ろうとしてか、文ちゃん先生が五郎八を呼んで訊く。

「おれっち、昔、裏メニューで喰ったことある的な感じすんだけどさ……」

「厨房に訊いてきますね」

五郎八を見送ると、皆が万三郎と杏児の胸元に視線を戻す。鴨の目はもう光っていなかった。おかしな緊張感のある場の空気がようやくほぐれたように感じられる。万三郎が顔を上げて、誰にともなく訊いた。

「鴨……そういえば、前から思ってたんですけど、ＥＴの社章、どうして鴨なんですかね」

皆の視線が万三郎の社章にいく。

鴨の目は、光っていなかった。

それを認めて、ほうぶん先生も、いくぶんホッとした表情に戻った。

「その件に関しては、文ちゃん先生が事情に明るいと存ずる」

今度は皆の視線が文ちゃん先生に集まる。先生は咳払いをして、ポケットから取り出したハンケチで額を拭った。文語的な、片井文吾郎モードに変わったようだ。

「鴨族（かもぞく）――」

文ちゃん先生は、ナプキン立てからペーパーナプキンを一枚抜き出して、内ポケットから取り出したボールペンで、漢字を書き始める。

「漢字で書くと、『鴨』とも『賀茂』とも『加茂』とも『賀毛』とも書く豪族が、弥生時代中頃に、今の奈良県御所市近辺、葛城山南東麓に住んで、水田を開墾し、米を作っていたという伝承は……」

　ナプキンの漢字を皆に向けてしっかり見せながら言う。

「……疑義を差し挟む余地これなきにしもあらずと人をして言わしむるほど確度の高い史実であるとはいまだ断言出来かねるゆゆしき論争のさなかにあるともないともごにょごにょごにょ……」

　そこへ五郎八が戻って来た。

「鴨、今日は入っているので、お出しできるそうです。おいくつお焼きしましょうか」

　すると、まだほんのりと耳の赤い戸井久美子先生が急に、バリトンの効いた中年男性のような低い声で万三郎に呼びかけた。

「中浜さん、よい練習の機会です」

「うわっ！」

　戸井先生のその声色に激しく驚いたのは、実は杏児だけだった。他の先生やＥＴは、戸井先生がこの声を出せることを体験的に知っていたので、特段驚きはしない。戸井先生は杏児を無視して、感情のない声で万三郎に指示した。

「次のＡ、Ｂ、あるいはＣの中から、ベストなレスポンスをセレクトしなさい。それらはテストブックには印刷されていません。ナウ・レッツ・ビギン」

　そのセリフの内容にも、杏児以外は皆、特段の驚きを示さない。

　戸井先生は、しばしば自分の世界に入り浸って、何かのきっかけで突然、ビジネス英語試験の問題を出す癖があるのを、万三郎はこれまでの授業でよく知っていた。いわば発作みたいなものである。この癖が災いして、三十になっても結婚できないのだと万三郎はひそかに思っている。だがともかく、ノッてやらないと機嫌が悪くなり、授業が終わってから「登録内容変更届」と彼女が呼んでいる反省文を提出するよう求められるので、万三郎は、戸井先生の突然の出題に極力付き合うことにしていた。付き合うと先生は機嫌が良いのだ。

　今回も万三郎は、慌てることなくペーパーナプキンを抜き出し、文ちゃん先生からボールペンを借り受けて、スタンバイするのだった。

　戸井先生は、中年男性の声で静かに言った。

「ナンバー・イレブン（出題番号十一番）」

　皆が沈黙する。

　そうした戸井先生の事情を知らない五郎八は、先ほど訊いたことが無視されているかと思い、おずおずともう一度訊いた。

「あの……鴨、何本お焼きしましょうか」

　即座に戸井先生が、おっさんの声で選択肢を示す。

「Ａ『とりあえず、十本お願いします』、Ｂ『はい、それはとても良くできた鴨です』、Ｃ『ハモを食べるなら夏がいいですよ』」

　万三郎は即座にペーパーナプキンに「Ａ」と書き、その下に楕円を書いて黒く塗りつぶすと、ナプキンを手に持って五郎八に示した。

「Ａでお願いします」

九

片井文吾郎先生の堅苦しい由緒解説は、五郎八がオーダーを受けてから、結局、十本の鴨焼き串が運ばれてくるまで続いた。その間、生徒であるＥＴたちはもちろん、文ちゃん先生をリスペクトしているほうぶん先生も、一言も口を差し挟むことがなかった。しゃべらない分、時折文ちゃん先生の話に頷きながら、皆、飲み食いで口を使った。その話は、要点をかいつまめば、だいたい次のようなものだ。

鴨族は、住まう地域に、上鴨社、中鴨社、下鴨社と通称される三つの神社を創建した（4）。うち二社では、あの出雲大社の御祭神、　大国主命（おおくにぬしのみこと）　の子である、　事代主命（ことしろぬしのみこと）　が、一社では、その事代主の妹の　高照姫命（たかてるひめのみこと）　が、それぞれ御祭神の一柱として祀られている（5）。事代主は、言代主とも書かれ、　事（できごと）　と　言（ことば）　を同一のものとして扱う、託宣（神のお告げ）をつかさどる神である。

博学で知られる文ちゃん先生は、ひとしきり演説をぶつと、再びハンケチで額を拭い、咳払いをして、その喉を生ビヤーで潤した。

「はい、おまちどおさまでした。鴨串十本です」

五郎八がテーブルに皿を置くのももどかしげに、甲斐先生が早速串に手を伸ばす。

「おいしそう！　いっただきまーす」

皆の関心が鴨焼き串に向かったのを悟って、文ちゃん先生は手早く結論をまとめた。

「　　ＫＣＪ（ことだまカンパニー・ジャパン）　　は、ことだま、すなわち言葉と出来事が不可分になったものを扱う会社であるからして、鴨社にて言代主を祀った鴨族を象徴する『鴨』がモチーフになったのではないかというのが、小生の考えるところではありますな。

甲斐先生がその大きな口を開け、前歯で鴨肉をこそげながら訊く。

「文ちゃん先生、その辺りに鴨がいっぱい棲んでいたの？」

「いや、古代には、この一族が住まう地域に特徴的な、山裾に平野が切り込むように深く入り込む地形を『カモ』と言ったらしく、そこから鴨族の名称が生まれた由。この音にさまざまな漢字

があてられたので、鴨も加茂も賀茂も、もとは同じ部族名に由来する。また、『カモ』は『カミ』であり、『気』が放出しているさまを表しているという」

　万三郎が確認する。

「『神聖な雰囲気をカモシ出す』……といった風に？」

「まさしく」

「へえー……なんだかすごいですね」

　万三郎は感慨深げにそう言いながら襟を立てて、自分の金鴨をまじまじと見つめた。ユキはそんな万三郎をまた注意深く見つめている。

　ほうぶん先生がパンと一回手を鳴らし、声色を変えて皆に言った。

「さ、社章の鴨の話はそろそろ終わりにして、焼き鳥の鴨の話題に移るとしよう……」

　ほうぶん先生がそう言ったのが、杏児には聞こえていなかったようで、まだ社章の話を続けようとした。

「そうそう、時々、社章の鴨の目が光るんです。ＧＰＳか何かなんですかね。僕の推理では、可能性は大きく三つ……」

　杏児がそう切り出したとき、ほうぶん先生がおどけた調子で大きめの声をかぶせてきた。

「ロシア人女性は美しいと思われぬか、おのおの方？」

十

ＥＴの三人には、普段なかなか見られない先生方のはしゃぎようが新鮮だった。ほうぶん先生や甲斐先生が明るく多弁なのは分かっていたが、博学ながらシャイでピュアな片井文吾郎先生は意外にも場の中心にいるのだった。もっとも、文ちゃん先生モードになると少々うざったかったが。

「しかるに！」

文ちゃん先生が杏児と甲斐先生にくだを巻いている。いつの間にか日本酒をやっている文ちゃん先生の猪口（ちょこ）に、甲斐先生がかいがいしく酌をしてやっていた。くいッとあおってポッと眼鏡を曇らせると、文ちゃん先生は杏児に向けて上半身を乗り出す。

「単語学習、すなわちワーズたちと一人でも多く親しむことは、語学学習の要諦なのであるよ。それは、 経糸（たていと） であり横糸でもあると言って過言ではないほどの……うぉっほん、ゴホン……。

「はい、センセ、こっち、水、水」

上下十五センチメートルほどは顎を動かして大仰に頷く甲斐先生は、熱くなりすぎた文ちゃん先生が咳き込むと、はいはいとグラスの水を飲ませる手際の良さだ。語りかけられる杏児も、酒の力で饒舌になっている博学な文ちゃん先生に、熱心に耳を傾けていた。

向かいに座っている戸井先生はといえば、ユキに褒められたのがよほど嬉しかったようで、お酒が進むにつれて、耳だけではなく頬も少し赤らめて、ちょっと艶やかな雰囲気を醸し出していて、意外に思える。当の彼女は今、なにやら真剣な表情で、隣の、ほうぶん先生の話に聴き入っている。耳を澄ますと、どうも戸井先生の婚活についてほうぶん先生が熱心にアドバイスをしているようだ。

「ビジネス英語検定の話は、そうした場では控えられたらいかがであろう。そして、男性と顔合わせの時は笑顔。これでござるよ」

戸井先生は真剣なまなざしで頷きながらメモを取り始めた。

「体調がすぐれない時には、黙ってその場で手を上げるよう、あらかじめ言っておかなくてよいのでしょうか」

「必要ござらぬ」

「黄色い警告カードなどは必要ないと？」

「必要ござらぬ」

「受験のしおり、筆箱も含めて、カバンの中か机の下にしまう必要は？」

「必要ござらぬ」

　ユキが振り返って隣の万三郎を見ると、万三郎も戸井先生の健気な様子をほほえましく見ている。万三郎と目を合わせ、声を出さずに笑った。

十一

ユキは少しうつむき、両手で頬を包んで火照りを覚ますような仕草をしておいて、ほっと小さなため息をつく。それから上目遣いに万三郎を見上げて、とろりと言ってみた。

「万三郎……私、酔っちゃったかも」

万三郎は軽く驚いた風で、ユキの目の前にあるグラスに目をやる。

――さあ、どう来る？

「そうかあ？　ユキの酒量ってそんなもんじゃないでしょ。最初の日にティートータラーで飲んでた時はもっとすごくなかった？　浴びるように飲んでたじゃない」

ユキは口を尖らせてそっぽを向く。

「デリカシーのない男ね。そういうところは覚えていても言わないもんよ。何よ！　浴びるように……って」

実際ちょっとカチンときたユキだが、ここで万三郎がごめんごめんと謝ってきたら、今度はアヒル口で「本当に悪いと思ってる？」と、うるうる見上げながら訊いてやろうと思っていた。

「まあ、どじょう掬いを踊り始めるようなら止めてあげるよ。だけど見たところ、頬っぺたの赤さもいつもと同じくらいだし、まだ大丈夫だろう」

ユキがテーブルをドンと叩いたので、その辺りの食器やジョッキが揺れた。ほうぶん先生も戸井先生もぎょっとして話をやめる。もちろん、一番驚いた表情をしているのは万三郎自身だ。

うつむいているので、髪に隠れて万三郎からは表情が見えない。だが、テーブルに置いた手をわなわなと震わせているから、万三郎が固唾を飲んでそこに固まっている。どんな怒号が飛んでくるかと気が気でないのだろう。

ユキは突然、笑顔混じりのおどけた声で万三郎を除く皆に言った。

「私、酔い覚ましにちょっと夜風に当たってきます。十分ほどで戻ってきます」

　甲斐先生たちと喋っていた杏児も、呆気に取られた様子でユキを見ていたが、文ちゃん先生が「うむ、行ってらっしゃい」と頷いたので、「あ、ああ、分かった」と了承する。

　バッグを持って席を立つとき、万三郎が「あひ」と言った。

「あら、中浜さん、ごめんあそばせ。でも、割りばしで頬っぺた突き刺されるより痛くないでしょ」

　ユキはとても酔っているとは思えない足取りで店を出て行く。背中でうろたえた声が聞こえる。

「おい万三郎、何があった？」

「ユキのやつ、ヒールで俺の足、踏みつけていきやがった」

「そりゃ、なんだか知らないが、きっとお前がユキを怒らせたからだ。とにかく行けよ。行って謝って来いよ」

　ユキは店の引き扉を後ろ手で荒々しく閉めた。

十二

「いろは」を出てすぐ左に十メートルほどのところ、シャッターの下ろされた商店の脇にある電柱の陰に、建物の壁にもたれかかるようにして立つ。

自分の本当の気持ちが分からなくなってきていた。

――今、私は怒っているのか、悲しいのか、それとも、ホッとしているのか……。

そのどれもが正解のような気がする。

店を出た万三郎が右を見て、左を見て、目を凝らせばすぐ見つけられそうなこの場所に立っておいて、スマホを取り出す。今日部屋を出る少し前に着信したスマホのメッセージを再び見る。

〈恋人同士の方が、何かと便利だからだ。分かったら動け〉

あの人の声さえ聞こえてきそうな字づらが恨めしい。

「ユキ！」

名前を呼ばれて、スマホを自分の胸に当てる。それから目を閉じて大きく息を吸った。今、呼ばれて確かに胸が高鳴った。そのことは、否定できない。

これから目を開ける。きっとそこに万三郎がいる。おかしな顔をして。

――どうしてあれくらいの冗談を真に受けて、そんなに怒っているのか納得できないけれど、放っておくと後々面倒くさいから謝っておこう。それにしても、どうしてあれくらいの冗談で……という顔よね。分かってるわ。

そうっと目を開けた。果たしてそこに万三郎がいた。おかしな顔をして。

止めていた息を大きく吐き出してからできるだけ平静を装って言う。

「すぐ謝りに来たことだけは、褒めてあげる」

「ユキ、ごめん。俺が悪かったよ」

　ユキが激怒してなさそうなので、万三郎は安心したように一歩歩み寄ろうとした。

　そこにたまたま空き缶があった。万三郎は空き缶に気付かず左足で勢いよく蹴とばしてしまった。

　カン！

　缶が飛んで行った先は、ユキがもたれかかっていた店舗の壁のすぐ横、隣の建物との間のわずかな隙間だ。低い弾道を描いて勢いよく暗がりに飛び込んだ空き缶は、何か不安定に積み重なった荒ごみか何かに激突したようだ。

　ガッシャーン！

　その小さな衝撃がきっかけとなって、おそらく、がれきが倒壊した。

　と同時に、

「フンギャオーッ！」

　という激しい叫び声が聞こえて、暗がりから突然、黒い何かが二つ、三つ、疾風のように飛び出して、電柱の陰に回ったかと思えば、万三郎とユキの目の前に急に現れ、高速で駆け抜けていった。

「うおっ！」

　万三郎は驚いて声を出す。そのときユキは、恐怖のあまり、万三郎の胸に飛び込んで両手で万三郎のシャツの両脇の生地をしっかり握りこんでいた。

十三

驚きのすぐあとに万三郎はユキを認識する。無意識に回していた腕でいたわるようにユキの背中をポンポンと軽く叩いた。

「猫だった。何匹かが逃げて行った」

万三郎がそう言う。上体こそ万三郎から離れたものの、ユキはそのまま万三郎のシャツをつかんでいる。

「ユキ……大丈夫だよ」

「……」

ユキは何も言わず、依然シャツをつかんだまま、再び額を万三郎の胸に預けるような姿勢になった。頭の重さを万三郎は感じているはずだ。

「ユキ……」

しばらくするとユキはにわかに顔を上げて、怒ったような表情で口を開く。

「万三郎、私がどじょう掬い踊ったの、覚えてたわね」

目をしばたたかせながら万三郎が答える。

「ああ、覚えてるよ」

「なんで覚えてるのよ！」

「そんなこと言われても」

その会話の間もユキは動かない。目も逸らさずに万三郎をまっすぐ見返しつつ尋ねてみた。

「あの時、私のこと、どう思った？」

　万三郎は戸惑いながら答える。

「どうって……踊り、下手だなって」

「ごまかさないで！」

「どう答えてほしいんだよ」

「考えて」

　万三郎を見上げたまま、しばらく待つ。万三郎は同様にユキの目を見つめ返して、やがて一言だけつぶやいた。

“ Pussycat（プッスィーキャット）. （6）”

さらに三秒、微動だにせず万三郎と見つめ合って、そっと訊いてみる。

「猫つながり……ってか？」

　万三郎も表情ひとつ変えず、言葉だけで「うん」と答えた。

　ユキは、やがて徐々に相好を崩し、いたずらっ子のような、含みのある笑顔になって、ひとこと、言った。

「……許す」

十四

万三郎はユキの背中を再びポンポン叩いた。

「さ、あまり遅いとみんなが心配するから、そろそろ店に戻ろう」

いまだ万三郎のシャツのウエスト辺りをつかんでいる手に少し力を入れる。

「まだ、三分ある」

抱き合っている二人の後ろを別のカップルが「ヒュー」と小さくはやしながら通り過ぎて行く。

ユキは、万三郎の片腕が背中を離れて、おずおずと頭頂部に置かれ、そこから髪の毛に沿ってかすかに撫で下ろされていくのを感じて、再び胸の高鳴りを覚える。息が苦しくなった。

――この気持ちは、決して、偽りじゃない……。

ユキは万三郎の胸の中で目を閉じて考える。

〈恋人同士の方が、何かと便利だからだ――〉

目を閉じたまま、ほんの僅かかぶりを振った。

――私がこうしたいから、こうしてる。あの人の言いなりになってるんじゃない。雉島さんは、自分はあの人の敵だと言っていた。私は本当にあの人を信じて良いのだろうか。私はあの人に、魂を売り渡してしまおうとしているのかな？

そう考えると、苦しさで息が詰まる。そこへ、万三郎の手が髪を滑る。すると、たちまち苦しさは上書きされて、嬉しさで息が詰まるのだった。

ユキは顔を上げて訊いてみる。

「ねえ、私の頬っぺたって、人より赤い？」

「何だよ、また唐突に」

　万三郎の笑顔は引きつっている。答えによってはまたユキを激怒させかねないと慎重になり過ぎて、答えに窮している風だ。

「そ、そうだなあ。人並みだと思うけどなあ」

「何、模範解答してるのよ！」

「正直言っていい？」

「言ってみ」

「どじょう掬い踊りやるなら、もっと赤くて丸くないとダメだ」

「……バーカ」

　ユキはこのとき心に決めた。自分の気持ちに素直でいようと。

◆◆◆

（１）（大分弁）ふざけるのやめろ。

（２）大分地方では一般的に八月にお盆休みを取る。

（３）「それは、そういうものだよ」の意。

（４）上鴨社は正式には高鴨神社、中鴨社は葛城御歳神社、下鴨社は鴨都波神社。中鴨社の御祭神は、御歳神（みとしのかみ）であり、高照姫命（たかてるひめのみこと）は相殿にて大年神（おおとしのかみ）とともに祀られている。

（５）事代主命（ことしろぬしのみこと）は上鴨社の御祭神の一であるが、主祭神は、阿治須岐高日子根命（あじすきたかひこねのみこと）またの名を迦毛之大御神（かものおおみかみ）である。しかしながら、アジスキタカヒコネとコトシロヌシは同一神であるという説もある。

（６）「（思っていたよりも）いい人」

第十一章　裏表(1)

　一

「花より団子」でも、「団子より花」でも良いけれど、「花も団子も同時に……」というのは、やっぱりいただけないと、万三郎はわずかに顔をしかめた。

　うっとりするほど上品で、かすかに甘く、それでいて爽やかさを失っていないフローラル系のベースノート。対照的に、糖とアミノ酸の絶妙なメイラード反応によって、唾液腺をガンガン刺激する、ジューシーなお肉の、濃厚な香気。それら二種類の匂いが混然一体となって、いわく形容しがたい不快感を万三郎の脳にもたらしているからだ。

　南国の花薫る、壁のないレストランで、ハワイアン・ハンバーグステーキを食べるシーンをイメージして、快適なのだと思い込もうとしたのだが無理だった。いっそもう、両者から距離を置きたかった。

「ほら万三郎、ごらんあそばせ。こんなに上手く切れましてよ」

「いやお嬢、あんた全然力を入れてないじゃん。これはほとんど俺が切ってるよ」

　万三郎は奈留美の後ろに立って、箸を握る奈留美の手に、自分の手を添えているのだった。奈留美に乞われて、箸でハンバーグを食べる練習をしているのだ。

「この、ちぎれた破片を、どうやって口に運べと言うのです？」

「いや、だからこうして箸でつまんで……」

「はっ？　ソースが滴るではないですか」

「そこはほら、口の方を迎えに行ってやって、滞空時間を短く……」

「前かがみになれと？　所作が美しくありませんわ。万三郎、わたくしはこうして、背筋を伸ばしたまま口を少し開けて待っていますから、ほら、口まで運んでくださらないこと？」

　万三郎は一瞬天を仰ぐと、決然たる声で言った。

「マスター、やっぱりお嬢にフォークとナイフを！」

　マスター・ジロー白洲田は苦笑しながらマサヨに視線を向けて頷く。心得たマサヨが用意し始めた。

「……ったく。フォークでもソースは滴るだろ」

　万三郎は奈留美に箸を置かせておいて、両肩をつかんでこちらを向かせた。奈留美を乗せたバーチェアの座面は音もなく回転する。フローラルの香りがまたハンバーグの匂いをかき混ぜた。

「いいかお嬢、あんたが『あーん』としていたらそこに食べ物を優しく放り込んでくれる人工知能搭載ロボットがもうちょっとしたら開発される。あんた貴族なんだから、それ買いなよ。箸の使い方なんて学ばなくていいからさ」

　両肩をつかんだままそう言う万三郎を奈留美はじっと見上げていたが、ふと全然違うことを口にした。

「はっ。お友達が……来ますわ」

「え、何だって？」

　万三郎が訊き直した瞬間、カランカランとドアベルが鳴って、杏児が入店してきた。顔を上げたそこには、万三郎と奈留美が見つめ合っている｜画《え》があった。

「あ、失礼……」と思わず目を伏せかけて杏児は二人を二度見する。

「ええーっ、お前ら……ええーっ？」

　二

「それにしてもお嬢、どうして杏児が来るの、分かったの」

　杏児の誤解が解けて安心して座り直した万三郎が隣の奈留美に訊く。

　フォークとナイフでハンバーグを切り分けては口に運び、きちんと飲み込み終えてから奈留美が答える。

「急に、イメージが降りて来たのです」

　マサヨが目を丸くして顔を上げる。

「奈留美さん、未来を予知できるんですか？　すごいじゃないですか」

奈留美の反対側の隣に座ってマスターにビールを注文した杏児は、それを聞いていて驚く。

「奈留美さん、僕が来るの、予知してたの？」

「予知といっても、ほんの少し先しか分かりませんから、あまり役に立たないのですわ」

「それでも十分すごいよ」

「わたくしがしゃべるスピードが遅いので『祖父谷くん、そこの小石にお気をつけあそばせ』と、注意しているさ中につまずいて、予知通りコケてしまうのです」

　杏児のビールを注ぎながらマスターが笑っている。

　杏児が訊いた。

「ところで奈留美さん、祖父谷と京子さんは？」

　最後のハンバーグのかけらを食べ終え、ナプキンで口を拭った奈留美は、思い出したように答える。

「そうなのです。今日わたくしは、確認テストの結果が芳しくありませんでしたので、居残りを命じられて、教室を出るのが遅くなったのです」

　杏児が苦笑する。

「僕と同じだ。隣の教室には奈留美さんが居残っていたのか」

「祖父谷くんが先にそそくさと出て行って、次に京子さんが出て行ったの。私が建物の外に出た時、遠くに祖父谷くんが誰かと並んで歩いていくのが見えましたの。きっと待ち合わせでどなたかと落ち合ったところだったのでしょうね。最初、京子さんかなと思ったのですが、あれはユキさんだったのかもしれません。たそがれ時でしたからよく分からなくて……」

　万三郎が驚く。

「何だって？　どうしてユキが祖父谷と……」

「二人は｜角《かど》を右に曲がって行ったので、京子さんかユキさんのどちらだったとしても、こちらのお店に向かっているのだろうとわたくしは思いましたのよ」

「それこそ、予知しなかったの？」

　万三郎の問いに、奈留美は無邪気にかぶりを振った。

「わたくしが意識して予知できるのではないのです。ふとした瞬間に突然イメージが降って来るのです」

　杏児がビールジョッキを手にしたまま、怪訝な表情を浮かべて静止している。

「僕も、万三郎とユキが先にティートータラーに行ってるんだと思って来たんだけど……」

　だが、万三郎が虚空を眺めて黙り込んだのを見て、杏児は急に声色を明るく切り替えた。

「きっと京子さんなんだろう。ユキが祖父谷と二人っきりで会うなんてのはちょっと考えられない。理由は大きく三つある。第一に……」

三

その頃、ユキはホテルのフレンチレストランで、祖父谷と二人っきりで食事をしていた。

「どう？　ここ美味しいだろ？」

「うん、美味しい」

祖父谷は向かい側に座っているユキにどや顔を見せながら、指をパチンと鳴らしてソムリエを呼んだ。その様子にユキは苦々しくぎこちない笑顔を浮かべたが、あえて何も言わずにやり過ごした。

グラスの脚をつまんで傾け、鼻の孔を膨らませて匂いを嗅ぐ様子がどことなく下品だ。グラスに残ったワインをぐっと一口で空けて、口の中で転がし、芳香を楽しむその様子がなぜか、まるで老人が入れ歯を外した後にお茶でうがいをするところに見えてしまって、どうにも仕方なかった。そして祖父谷は、その口の中のワインをごくりと呑み込んだ。なぜだろう、まったく板についていない。ユキはワインが内側を流れていく祖父谷の喉から思わず目を逸らした。

「今度は、ボルドーのグラン・クリュを」

「シャトー・ラトゥールの一九九八年はいかがでしょう」

「若いな」

「では、少し値が張りますが、ラトゥールの七十五年がございますが」

「じゃあそれ、フルボトルで。ユキ、君も飲むだろ」

祖父谷は、目はユキをどや顔で見つめたまま、ソムリエに向けて飲み干したグラスを軽く掲げ、じゃあ頼むよといった感じの仕草をした。

「かしこまりました、ムシュー」

ソムリエが去るとユキが心配そうに小声で言う。

「ちょっと！　高いんじゃないの？」

　祖父谷は人差し指を立てて顔の前でチッチッと振る。

「ユキと一緒なら、それを開けるだけの価値がある。世界はきっと頷くよ」

　一本目のワインも大半はこのバカ男が飲んだ。ユキは酔っぱらってもいないのに恥ずかしさで頬を赤く染めた。

　テーブルについてからは、ユキと呼び捨てにするようになった祖父谷。入り口にＫＣＪ指定店のシールが貼ってあった。ＥＴの特権で、ワイン代は食事代とともに、福利厚生費としてＫＣＪが負担するのだ。それをいいことにこの男、高そうなワインを二本も頼んでどや顔をしている。その片棒を担いでいるようで、ユキは居心地が悪かった。

「いい店なんだ。どう、これからもちょくちょく来ない？」

「ねえ、そんなに飲んで酔っ払ったら、ちゃんと質問できなくなるんじゃないの？」

「ん、質問？」

　とぼけた｜面《つら》がついにユキの癇に障った。グラスの水をひっかけてやりたかったが、お店に迷惑をかけてはと、ぐっとこらえた。前かがみになって、低い声でユキは言う。

「先生方やスピアリアーズの二人にはとても恥ずかしくて訊けないほど初歩的な英語の質問があるから、こっそり教えて欲しいと私に頼んできたのはあなたでしょう。忘れたの？」

第十一章　裏表(4)

　四

「これは心外だなあ、ユキ。忘れてなんかいないさ」

　ワイングラスをテーブルに置くと、祖父谷は肩をすくめながら大仰に両手を広げる。心外だという表情にも、どや顔の要素が何割も含まれていて、見るに堪えない。

　昨日、終業直後のユキを呼び止めて、相談に乗って欲しいと頼んでおいてからの祖父谷の「釣り言葉」を、ユキは思い返していた。今思えば、いかにもわざとらしい。

「……いや、いくらユキちゃんでも、分からないかもな。答えられなくて恥かかせちゃ悪いから、やっぱり訊くの、やめとこうかな」

　ライバルチームの男の誘いだからユキは警戒していたが、この言葉にひっかかってしまったのだ。そんなに初歩的な質問を私が分からないと思うのならなんで私に訊くのだ。負けず嫌いな性分が災いして、こんなところまでのこのことついてきたことで、ユキは自己嫌悪に陥りかけていた。

「お礼に食事、おごるからさ」というのは、ティートータラーのハンバーグ定食のことだと思い込んでいた。ふたを開けてみれば、ハイクラスのシティーホテルに入っているフレンチレストランだったので、最初驚きはしたものの、それはそれで新鮮ではあり、少し気を良くしていたのは確かだ。とはいえ、こんな遠くの繁華街にまで活動範囲を広げている祖父谷を、ユキはやはり警戒した。

　祖父谷は悠々として笑っている。

「心外ではあるけれども、ユキの疑問ももっともだ。訊きたいことはちゃんとここにある」

　祖父谷は自分のこめかみ辺りを人差し指でツンツンと二度つついた。

「ただ、もう少しだけこうして、花も団子もワインも、同時に味わっていたいな」

　ユキは眉を顰める。

「花って……」

「もちろん、君のことさ。ユキ」

　祖父谷はウインクした。

　ユキが声を殺して叫んだ。

“You obnoxious plonker!”（気持ち悪いのよ、この飲んだくれ！）

「え？」

　突然の英語を聴き取れなかった祖父谷は、まあいいや、と表情を和らげてポケットをまさぐる。

「ユキ、もう一本空けたら質問したい。場所を変えてね」

　ユキは目を丸くした。目で追っているのは祖父谷の指先でくるくる回っているホテルのルームキーだ。

「今ッ！」

　食事中の周りの客が振り向いた。それくらい大きい声をユキは上げた。そして人目を憚らず祖父谷に言う。

「今、ここで、質問しなさい！」

　祖父谷にとっては思いがけない展開だったのだろう、ユキの鋭い視線とは対照的に、今度は祖父谷が目を丸くする。しかし驚きの表情は、次第に不敵な笑みへと変わっていった。

「ふふふ、そうだな。仕事を終えてすっきりしてから、場所を変えた方が良いかもね」

「質問はッ？」

　鋭い声で促すユキに、祖父谷はゆったりと人差し指を立てた。

「一つだけだ。この日本文を、英語でどう言えばいいのか教えてくれ。『ユキ、スピアリアーズに、来ないか』」

五

このレストランはホテルの一階にあった。レストランの出口はホテルのロビーと直結している。ホテルの玄関の自動ドアが開くのももどかしそうに、ユキが勢いよく飛び出してくると、コツコツと靴音高くステップを降りる。道の左右を確かめるが、彼女が探しているであろうタクシーは辺りに一台も客待ちしていなかった。

「もう！」

意を決してユキは一方向に躊躇なく歩き出す。ほとんど閉じかけていた自動ドアが、新たな通過者の存在を感知して再度開く。が、間に合わず、祖父谷は体をドアにぶつけてよろめいた。

「痛てッ！　ユキ、待って！」

呼びかけたところで、怒りに任せてさっさと歩き去ろうとするユキが足を止めるわけがない。祖父谷はよろめきながらも慌ててユキの後を追いかけた。

「待ってよ、ユキ」

「最悪。呼び捨てにしないで。返事しないから」

「分かった、ユキちゃん。だから、待って」

「私はワイン二本と食事一回で落ちるほど安くないわよ。手に持ってるそのワイン、ホテルの部屋に持ち込むといいわ。一人で高級なヤケ酒、飲んでなさい」

ユキの言葉通り、祖父谷は右手にワインボトルを持っていた。席を立ったユキを追うため出口に向かおうとした時、ちょうどソムリエがワインクーラーのカートを押してきたのと鉢合わせになり、身をひるがえしざまに抜き取ってきたのだ。

「どこ行くの」

「あなたから一番遠いところ」

ユキは祖父谷を振り向くこともなく、歩調も緩めない。だが、どうもホテルを出た時、最初に

決めた方向が間違っていたようだと心中後悔し始めていた。

　繁華街の賑わいが、歩いていくにつれて急速に失われつつある。中心街とは反対に向かっているらしい。通りの両側は、怪しげな極彩色のネオンサインを灯した小規模な飲食店は点在するものの、スラムを思わせるような赤レンガの古びたアパートメントが混じり始めている。人通りも減って、その顔ぶれもどこか胡散臭い。

「待てよ、ユキちゃん。君を誘い出すのにフェアじゃない理由をでっちあげたことは謝る。だけどああでもしないと、劣った奴らを引き離して君を連れ出すことなんてできなかったから」

　ついにユキは｜人気《ひとけ》も車通りもないＴ字路に差し掛かったところで足を止めた。傍らの祖父谷に面と向かって仁王立ちになり、激しく噛みつく。

「劣った奴らってねー、あなた自分を何様だと思ってるの！　この際はっきりさせとくけどね、私は……」

　そこでユキは、まるで時間が止まったかのように、口を開けたままそこで静止した。

六

祖父谷は一、二秒の間、あえて口撃を受け入れるつもりか、ユキに向き合ったまま黙って立っていたが、酔っている時に速足で歩き続けたためか、平衡感覚を失ってよろめき、思わず近くのランプポストに体をもたれかけた。それでもユキはそんな祖父谷に気を留めることなく、前を向いてじっと立ち呆けている。

やがてユキは前を見たままぽつりと呟いた。

「サラマンダー……」

ワインを手に祖父谷が訊く。

「何？　何だって」

そこで初めて祖父谷は、ユキがＴ字路の突き当りにある、ネオンサインのある店をじっと見つめていることに気が付いたようだ。ユキと同じく、対象に目を凝らす。

「あっ……あれ？」

このＴ字路は、車道というより、ちょっとした広場ほどの幅があった。石畳が敷き詰められている。そしてユキも祖父谷も、この石畳み敷きの広場に見覚えがあったのだ。
突き当りの店は、左隅の入り口の上に、筆記体のネオンサインをピカピカと点滅させている。
緑で”Club”、赤で“Salamander“、店の名前だ。

「ユキちゃん、あの店はひょっとして……」

ユキは初めて祖父谷に目を移して頷いた。

「昼と夜の違いはあるけど、同じ店よね」

シートレがぶつけて粉々になった店の正面のスモークガラスは、すでにきちんと修理され、復旧している。

ユキと祖父谷の間を、カップルが連れ立って通り抜けて行こうとした。

「ごめんねー、通るよ」

　街灯の光を反射した二人の頬を見ると【playboy】と【playgirl】だ。あの店に向かっていると確信したユキは、二人に声をかけた。

「す、すみません。あそこ、どんな感じのお店ですか」

　【playboy】が【playgirl】の腰に手を回したまま振り返る。

「うん？　ああ、サラマンダー？　ゴキゲンな店だよ」

「ゴキゲン……というと？」

　すると【playgirl】がユキに向き直って、傍らの祖父谷と交互に目をやりながら言った。

「あんたたち、初めて？　怖そうなお兄さんたちが入り浸ってるけど、あそこはキジシマ系列の店だから、ルールさえ守って遊べば、危ないことはないわ。楽しめるわよ、じゃあね、チャオ！」

【playgirl】はウインクして【playboy】に体をもたれかからせつつ、店へと歩いて行った。

　幾分酔いから覚めた様子で祖父谷が近づいてくる。

「ユキちゃん、帰ろう」

　祖父谷はユキの手をそっと取って、来た道を戻ろうとする。その手を振り払いつつユキは、祖父谷に向けてか、独り言か、不明な言葉をつぶやいた。

「雉島さんに、会えるかな……」

七

「そうだ。雉島さんに会う危険がある。まさか、再びこの店の前に来てしまうとはな……。ユキちゃん、急いで帰ろう」

しかし、再び手を取ろうとした祖父谷を振りほどいて、ユキはふらりと店に向かって歩き出した。

「おい、どこへ行く、ダメだ！」

祖父谷が慌ててユキの前へ回り込んで立ちはだかるが、ユキはその体を勢いよく押しのけようとした。

「どいて！」

何でもない力でも、祖父谷はバランスを崩して後ろに倒れ、尻もちをついた。ワインボトルは割れずに傍らにゴロリと転がった。自分のせいで転ばせてしまった祖父谷をさすがに気にかけてユキは言う。

「祖父谷くん、あなたはついて来なくていい」

「何言ってる！　危険な場所に一人で行かせられるか」

ユキは一瞬口元を緩める。

「あのレストランにあなたといる方がよっぽど危険だったわ」

「ダメだ、ユキちゃん。行かせられない」

立ち上がってなお制止しようとする祖父谷に、軽くため息をついてユキは言った。

「私、雉島さんに会って、訊きたいことがあるの」

「何だよ、訊きたいことって」

「ＥＴを続けていく上で、私にとって、とても大切なことなの」

　ふらつきながら祖父谷は両手を広げる。

「訊きたいことが何だかは知らないけど、ＫＣＪの役員でもない雉島さんが何を知ってるっていうんだよ。ダメと言ったらダメだ。ここから先へは一歩も行かせないぞ」

「あっ！　祖父谷くん、高級ワインがこぼれてる」

　ユキは地面に転がったままのワインボトルを驚いた風に指さした。

「えーっ？」

　祖父谷が驚愕して振り返り、ボトルの前に跪いて確かめるその脇を通って、ユキはすたすたとクラブ・サラマンダーの入り口へ歩いて行った。扉を開ける前に祖父谷を振り返る。

「嘘よ。それからさっきの英文を教えるわ。”Will you join us?”そして私の答えは、”No, I won’t.”よ」

　ユキはそう言い残してクラブ・サラマンダーの扉を開け、中に入って行った。

　そして即座に、回れ右して店を出たい衝動に駆られた。外からはまったく予想できなかったが、店内は超満員だった。それも身動きするのも困難なくらいの混雑だ。大音響のダンス・ミュージック。むせかえるような汗の匂い。飛び交うカラーレーザー光に、ミラーボールの反射光が交互にユキを襲う。他人と触れ合わないと、移動するのはおろか、じっと立っていることもおぼつかない。しかも皆それぞれグラスやボトルを手にしたまま音楽に合わせて体を揺らしている。きわどい服装をしている女性も多い中、会社を出た時のままのビジネススーツ姿で入店したユキは浮きまくっているはずだが、周りの人と体がほぼ密着して見えないためか、誰も意に介していないようだ。

　ユキの後に二、三人入店してきて、その後に祖父谷がユキを追って入店してきたが、ユキはすでに店内に押しやられていて容易に近づけない。

「ユキちゃん！」

　そう遠くにいるわけではないユキを呼んでも、すべてガンガンに流れる音楽にかき消された。
　ユキは祖父谷に気付かないまま、意を決して不時着した時に見た記憶を頼りに、注文カウンタ

ーへと少しずつ向かっていく。

　その時、ユキの前にいて、連れとの大声のおしゃべりに夢中になっていた一人の男性客が手にしていたグラスが、誰か他の客とぶつかって大きく揺れた。

「キャッ！」

八

結構な量の中身がユキの上着にかかった。当の客は自分のグラスの中の飲み物がユキにかかったことに気付いていない様子だ。ユキはムッとして、その男性客の背中をトントンと叩いたが、相手は話に夢中でまったく気付く様子はない。

「あのー、かかったんですけど！」

まったく無駄だった。腹も立ったが、ユキもついに文句を言うことをあきらめて、先へ進むことにする。そのままずっと押し合いへし合いされながら、ようやくカウンター近くにたどり着いた。

カウンターの右奥には、バーチェアのような椅子と簡易な丸テーブルがいくつか備えられていることもあって、入り口からホールに比べると幾分｜空《す》いていた。さっきの液体がブラウスに染みて来るのを避けたいユキは、身動きできる場所にたどり着いたのを幸いに上着を脱ぎ始めた。とたんに回りの男性たちが拍手している。音楽で聞こえないが、指笛を吹いている仕草を見ると、ストリップショーでも始まるのかと囃し立てているのだろう。実際、一人の男が近寄ってきてユキの耳元で、いいぞ、もっと脱げと大声で言った。ごそごそとした触感に気付いてハッと胸元を押さえると、まさにその男がユキのブラウスの胸ポケットに、折りたたんだお札を差し込んでいるところだった。

「やめて！」と慌ててそのお札を取り出して男に押し付けたら、男は肩をすくめて首を横に振り、腕組みをして失望のまなざしでユキを見やった。

その男から急いで離れて、脱いだ上着を畳んで腕にかけ、ユキはほうほうの体でカウンターへたどり着く。そしてビールを注文してから店員に大声で訊いた。

「キジシマって人に、会いたいの」

「何？」

「キジシマって言ったのよ、キ、ジ、シ、マ！」

がたいの良い、黒いタンクトップ姿の店員の男は、眉を顰め、ユキをじろじろと見て、それから言った。

「知らねえよ、そんな名前の人は」

「本当か【tapster】（バーテンダー）？　もう一度よく考えてくれよ」

　背中越しに聞こえたその声にびっくりしてユキが振り返る。大声で店員にそう言ったのは、ようやくユキに追いついた祖父谷だった。

　男の出現に【tapster】と頬に刻んだ店員はいっそう警戒の表情を浮かべる。

「あんたたち、そのキジシマって人に何の用だ」

　ユキが大声で答える。

「訊きたいことがあるの」

「訊きたいこと……？」

　【tapster】は厳しい表情のまま、再び二人をじろじろと見た。

「うっ……！」

　祖父谷を見た【tapster】の表情が明らかに変わる。二人はその表情の変化に気付いた。だが店員は苛立たしげに二人に答えた。

「とにかく、そんな人知らねえ」

　【tapster】は注文を受けていたビールをユキに手渡すと、別の客の応対を始めた。

「ユキちゃん、知らないってさ。帰ろう」

「……」

　ユキは首を傾げる。どうしようか思案している風だ。

　その時、祖父谷が苦しそうな表情を浮かべ、ユキの耳元で声を振り絞った。

「ちょっと、ちょっと待ってて。気分が悪いんだ。トイレ、行ってくる」

　酒酔いに加えて店内の人いきれに酔ったのをついに我慢しきれなくなったのか。ユキは、仕方がないわねという表情で、ジャケットを掛けていない右腕を、手のひらを上にして持ち上げ、どうぞ行ってらっしゃいというジェスチャーをした。祖父谷は蒼白な顔をしてトイレがあると思しき方向の人の群れに飛び込んでいった。

　九

　たまたま｜空《あ》いた、座面の高いバーチェアに乗っかるように腰を預けて、ユキは思案顔でビールを啜った。雉島に会えないのなら、残念だが長居は無用と思われる。だが自業自得とはいえ、入店したユキを心配して追って来た祖父谷を一人、放っておいて帰るわけにはいかない。仕方なくユキは祖父谷がトイレから戻るのを待つことにした。

「こんばんは！　今日は仕事帰りかい？」

　ユキが一人でいるとすぐに男が声をかけてくる。頬に【spooney】（女好き）と彫ってあるのでワーズ社員だ。当然、ユキがＥＴであることを知らない。ユキはすまして答える。

「屈強なカレがトイレから戻ってくるのを待ってるの。あなた、カレが戻ってくる時に私の前にいない方が身のためよ」

「なんだ、男付きか、チェッ」

　【spookey】が別の獲物を求めて立ち去ると、一分もおかずに次の男が声をかけてくる。

「そのビールのお代わりおごるからさ、一緒に踊ろうよ」

　頬には【impurity】（不純）とある。ワーズ社員だ。ユキは軽くあしらう。すると今度は女が近づいてくる。

「さっきから見てたらあんた、オトコに興味なさそうね。オンナ同士でどう、楽しまない？」

　ユキの耳に唇をつけんばかりにしてそう囁いてくる女。ユキはうわっとのけぞって耳を手で押さえる。その体勢のまま女に向けて勢いよくかぶりを振った。女は【sensuality】（好色）と彫られた頬をフンとそむけ、諦めて人ごみに消えていく。

　そうしたら次だ。ユキのすぐ後ろから、今度は肩に手を置いて耳元で囁いてきた。

「ちょっとあんた、オンナ同士の話があんねんけど」

　ユキは驚いて大きく息を吸ってから、肩に置かれたその手を払いのけ、バーチェアから滑り降

りると、振り向いて相当な剣幕で声の主を怒鳴りつけた。

「いい加減にして！　私はＥＴよ。失礼なことしないで！」

　すると金色に髪を染めてウェーブをかけたその女も、黒々と盛られたつけまつ毛をばさりと羽ばたかせながら大声で答えた。

「ええ加減にしいや！　うちもＥＴやで。失礼なんはあんたやろ。人のチームメイト出し抜いて！」

十

げっそりした表情でトイレから出てきた祖父谷は、いまだ酔いが収まらずよろめいて、体を支えようと思わず踏ん張った結果、そこにいた男の足の甲を力任せに踏みつけてしまった。

「痛ーッ！」

「あ、すみません……」

慌てて足をずらせることでもう一度ふらついてしまった祖父谷がようやく顔を上げると、男は相当の長身で、当然ながら祖父谷を睨みつけていた。祖父谷は目を見張って身をすくませる。知った顔のモヒカン男だったからだ。頬にはっきり【brutal】とある。

「あ……！」

あの時の記憶が戻って来た祖父谷を見下ろしながら【brutal】は大きく息を吸った。すると隣の男が小さく「おう？」と疑問の声を上げる。その声の主に目を向けて、祖父谷はさらに驚愕した。声の主はスキンヘッドで、頬に【nefarious】と彫ってある。祖父谷の身体を恐怖の電撃が駆け抜けて、酔いが一気に吹き飛んだ。

「おいこらァ、誰の足、踏んどるんじゃあ！」

息巻くモヒカン【brutal】をまあ待てと腕で制して、スキンヘッドは目を細めて顔を近づける。祖父谷は大きく目を見張る。

「おい、どっかで見た顔だな」

「お……お久しぶりで」

「あん？」

【nefarious】は細めていた目を丸くした。襟元の金鴨の社章に気が付いたからだ。

「おっ、おっ、おーっ！」

立ちすくむ祖父谷を前に、【nefarious】が記憶の糸をつなげていく。

「じゃあ、また……」

立ちすくんでいる場合ではないと、祖父谷は手にしているワインボトルを乾杯のように軽く掲げて、二人の長身の男たちの間を縫ってホールに戻ろうと歩き始めた。

「いやいやいやいや……」

そう言って【nefarious】は祖父谷の襟首をつかむ。祖父谷は歩みを止められてよろめく。

自由のきかない祖父谷の至近で【brutal】が凄んだ。

「おい、こら小僧。人の足踏んどいて、『じゃあ、また』では済まねえよ」

「いや、だから最初にすみませんと……」

「じゃかあっしゃあ（やかましい）！」

つばが飛んで祖父谷の顔に当たる。これで足踏んだのとおあいこじゃないかと思いながら祖父谷はボトルを持った方の腕で顔を拭った。

「まあ、【brutal】ちょっと待て。こいつあ一応、上司だ。おい、あんた。名前、何てったっけかな」

「祖父谷です」

「下の名前は？」

「｜義史《よしふみ》」

「よし、ＥＴ祖父谷、あんたなんでここへ来た」

そう訊かれて祖父谷は押し黙った。もちろん、雉島に会いたいという同僚に付き合って来たなどとは言うべきではない。危険がユキに及ぶ。そもそもシートレが不時着したあの時に同乗していたＥＴが、今夜もこの店に来ているとは知られない方が良いだろう。古都田社長に命じられて偵察に来ているのではないかとこいつらは警戒しているのだから。しかし、ユキは雉島から何か

を聞き出したいと言っていた。もしこいつら経由で雉島と会えるのなら、ユキではなく自分が会うことで、あるいは何か近いことを聞き出せるのではないかという思いが胸をよぎる。

――よしッ。

祖父谷は手にしていたワインボトルを顔の高さにゆっくり持ち上げた。

「近くまで来たものだから、雉島さんにこれを手土産に」

　その時だった、祖父谷の後ろから手が伸びてきて、ワインボトルは奪われた。祖父谷は驚いて後ろを振り向く。店内だというのに、なぜサングラスをしているのか、レンズ表面にミラーボールの光を反射させた男が、手にしたボトルをその光にかざすような仕草をしている。

「ほう、これを手土産に……か」

「バ……バッ……」

「ベヤァーッド、ハッ！　だ。命が惜しけりゃ、間違えるな」

　【bad!】はそう言いながら、わずかに顔を動かした。ボトルから祖父谷に視線を移したのだろう。

【nefarious】が訊く。

「ああ、【bad!】さん、今報告しようと思ってたんですよ。どこいってたんすか」

　【bad!】は親指を立てて肩越しに後ろを指さした。

「『おトイレ』だよ。大きな方の｜用事《ビッグ・ビジネス》だ。隣の個室でオエー、オエーってえづいている奴がいやがって、不愉快極まりなかったぜ。俺が尻拭き終えるまでに出て行ってなけりゃ、隣の奴、便器に沈めていたところだ」

　祖父谷は身震いした。【bad!】は気付いていないようだが、まさか自分の隣の個室で【bad!】が便器にしゃがんで大便をしていたとは！　【bad!】が尻を拭くのが遅かったおかげで祖父谷は命拾いしていた。

十一

「どうして、ここにいるの！」

ユキは四葉京子の登場に心から驚いていた。しかも京子は、ユキが祖父谷を誘い出したと思い込んでいるようだ。京子は後ろからユキの隣の椅子に回り込んできた。

「喉渇いてんねん。ちょっともらうで」

呆気に取られているユキからビアグラスをもぎ取ってゴクリとやった。小さなテーブルにグラスを置くと、椅子に腰かけ、音楽に負けないように声を張り上げて言った。

「仕事終わってからヨッシーの挙動がおかしかったから、うち、ずっと後をつけてきとってん。まさかあんたと食事へ行くとは思わんかったわ。福沢、あんた、なかなか大胆やな」

「私からじゃない。祖父谷くんが相談したいことがあるっていうから」

京子は露骨に眉を顰めて言い返す。

「違うチームのあんたに何を相談するいうねん。それに乗っかるあんたが悪いわ」

「どうして私が悪いことになるの！　私から誘ったんじゃないのよ？　本人に訊いてみればいいじゃない」

「その本人はどこへ行ってるん？」

「トイレ！」

京子はいったんユキから視線を逸らし、店内をぐるりと見まわす。例の黒いタンクトップ姿の店員【tapster】と目が合った。厳しい表情ながら、カウンターから手招きしている。京子はジェスチャーで「うちのこと？」と訊くと、頷いている。

京子は首を傾げ、しかし、とりあえず店員を無視してユキに訊く。

「で？　ヨッシーの相談って？」

　ユキも店員の手招きを目で追っていたが、京子に向き直る。

「私に、スピアリアーズに入らないかって」

「はッ！　あんたなんか絶対お断りや」

「私だって断ったわよ！」

「ヨッシーはなんであんたを誘うんやろうな、腹立つ……」

　京子はあらぬ方向を見つめて爪を噛んだ。

　ユキはハッとする。

「京子、あなたひょっとして、祖父谷くんのことを……？」

　すると京子はユキをキッと睨み、噛みつかんばかりに声を張り上げた。

「何言うてんねん！　全然ちゃうわ！」

　ユキはフフンと笑ってビールが少し残ったグラスに手を伸ばす。

「そうかあ、そうなんだあ」

　京子は激しくつけまつ毛を瞬かせた。

「福沢！　あんたなー、みどり組の他の二人とは何かちょっとちゃう感じが前からしてんねん。なあ、あんた、ほんまは、誰やのん」

　ユキはぎょっとして京子を見る。

「な、何よ、ちょっと違うって？」

　ユキはあらぬ方向に目を逸らしたが、慌てて視線を京子に戻し、言葉を継ぐ。

「まま、万三郎と杏ちゃんは男、私は女……ちょっとじゃなくて、全然違うわ」

「そんなこと言うてんのんとちゃうって、分かってるくせに」

　京子はユキの目をじっとのぞき込むような仕草を見せている。

「あんた……何か、うちと同じ『ニオイ』がすんねんなあ……」

　ユキは顔を背け、一瞬だけ京子と視線を絡めて、それからはそっぽを向いて言った。

「そそ祖父谷くんも、ささすがにもうすぐ戻って来ると思うわ。あ、あなたが来たから、私はもう帰ってもいいわね。あ、後は『ヨッシーくん』をよろしくね」

　ユキは上着を持って立ち上がろうとした。

　そこへ【tapster】が、ビールをいっぱいに注いだグラスを両手に持って歩いてきて、二人の前のテーブルにトンと置いた。二人が呆気に取られていると【tapster】が言う。
「呼んでも来ないから持ってきてやったぜ。これはキジシマさんのおごりだ。もうちょっとかかるから待ってろって」

「雉島ですって！」

　ユキが素っ頓狂な声を上げる。

　【tapster】が京子の襟元を指さしながら言う。

「あんたら、三人ともＥＴだろう？　連れの男もさ」

　ユキは目を丸くする。【tapster】は黙って親指を立ててグイグイと二回ほど手を上下に動かした。そうして差し示された天井には、黒い、半球型のモニターカメラがぽつんと赤いＬＥＤを灯していた。

「全部、見られてるんだよ」

十二

「祖父谷くんは、雉島さんと会ってるの？」

「知らねえよ」

「私も会いたい。会わせて」

「知るかよ」

　カウンターの向こうに戻った【tapster】に、ユキがいくら懇願しても【tapster】は首を縦に振らなかった。それなら自力で……と、前回、昼間に不時着した時に誘導された、二階へ上がる階段の方向をうかがうと、階段を数段上がった辺りにはすでにスキンヘッドの男とモヒカンの男が陣取っていて、ひしめく他の客の頭越しに、ユキと京子の方をじっと見ている。

「すでに監視されている……」

　自分たちが監視されていると知ると余計にユキは祖父谷のことが心配になった。
他の客の注文に対応している【tapster】に訊く。

「彼は、無事なの？　ねえってば」

　カウンターの向こうをしかめっ面して行ったり来たりしていた【tapster】はついにイラついて、ユキの前に立ち止まり、上半身を前のめりに傾けて大声で言った。

「いいか、ＥＴさんよう。俺は雉島さんから伝えろと言われた通りあんたたちに伝えただけだ。あそこ、ほら、あんたらのビールだ。待ってろと雉島さんに言われたんなら、あれ飲んでお利口に待ってろ、いいな！」

　ユキはついに閉口する。

「それから、あんた！」

【tapster】は隣の京子に厳しい目を向けた。

「さっきからモニターカメラに向かって、ゴリラの物まねしたり、中指を立てるポーズしたり、リオのカーニバルみたいに踊ったりしてるけど、そんなことで雉島さんの注意を引こうたって無駄だ。それどころか下手すりゃご機嫌を損ねて、連れの男の安全にかかわるぜ。それに、営業妨害なんだよ。あんたもあっちで静かに待ってろ」

【tapster】は京子を睨み付けた後は、ぷいと後ろを向いて何か仕事をし始めた。

「ヨッシーの身に何か起こったら、福沢、あんたのせいやからな」

　京子は、音楽に負けない程度の声量でユキに言い捨て、テーブルに戻っていく。ユキも仕方なくテーブルに戻った。

十三

大音響のダンス・ミュージックとギラギラの光線、座り心地の悪い椅子、どれもが心配しながら人を待つ環境には適していない要素だ。二人は言葉も交わさず、ビールも口にせず、声を掛けて来る男どもを煩わしそうにあしらい、じっと待っていた。

階段の手すりにもたれて飲んでいたモヒカンとスキンヘッドに動きがあった。ユキと京子はすわと人をかき分け、階段へと駆け寄る。

二人が見上げると、とぼとぼと祖父谷が降りてきた。

「ちょっと、どいてんか！」

ユキを押しのけ、階段を下り切ったところの正面で待ち受ける京子。

「ヨッシー！」

酔いが残っているのか、足を踏み外すまいと注意深く足元を見ていた祖父谷が、ようやく顔を上げて迎えに出た二人に気付く。ユキを見て表情を変えなかった祖父谷だが、次に京子を認めて声を上げる。

「京子！　どうして来てんだ」

京子は黒く着色したハエトリソウのようなつけまつ毛をわさわさと扇ぎながら「心配してやんか！」としおらしい声を出した。

祖父谷のすぐ後ろから【bad!】が降りてきた。

「ＥＴ福沢、デートの邪魔したな」

ユキはまなじりを上げて【bad!】を警戒する。

「デートなんかじゃ……」

「ほう？　祖父谷はデートの途中だと言っていたが」

【bad!】はとぼけた風に眉を開いてサングラスを外した。一重瞼の細い眼が京子の方を向く。

「ＥＴの新顔か。モニターカメラの前でゴリラの真似していた奴だな。おい、あんた。あんたの映像、ちゃんと映ってたぞ。雉島さんが、似てると笑いながら、この男を早く返してやらんといかんな、と言った。報われて良かったな、ミズ・ゴリラ」

京子は驚きと喜びを半々に交えた表情を控えめに浮かべてつぶやいた。

「似てたんや……」

ユキは祖父谷の反応を見る。さっき京子を最初に見た時の驚きの軽さから、彼も上でモニターを見て、京子が来ているのを知ったのだろう。京子にお礼を言うのかなとユキは思ったが、意外にもただ黙ってうつむいているのみだ。暗いのでわかりにくいが、顔面はこの人らしくなく蒼白に見える。

【bad!】が、ＥＴたちを挟んでいる手下の一人に振り向いて言う。

「それにしても古都田社長もおかしな奴をＥＴに採用するもんだな。人材難なのか？」

軽く笑ったスキンヘッドの【nefarious】が思い出したように真顔になってポケットから取り出したものを祖父谷の前に差し出した。

「そうだ。さっきボディーチェックの時に預かった鍵、返すぜ」

「どうも……」

祖父谷は鍵を受け取るも、伏し目がちに肩を落とし、覇気がない。それに、【bad!】以下のワーズたちが、いやに友好的なムードだとユキは感じた。

【bad!】がその、憔悴したような祖父谷の肩をポンと叩いて機嫌良さそうに言う。

「おい兄弟、あのワイン旨かったぜ。また持って来いよ」

十四

その時、階段の上から黒いドレスシャツに赤いネクタイの男が降りて来て、おどけた調子で三人のＥＴに言った。

「おっ、珍しい客だよ。本日はご来店ありがとうございます」

男は、ユキたちが不時着して連れてこられた前回、二階で番人の役割をしていたネクタイ男【ruthless】だった。

【ruthless】は、声色を戻して用件を伝える。

「おい、雉島さんがあんたらのためにタクシー呼んでくださったそうだ。あんたら女ＥＴによろしくとよ」

「あの！」

【ruthless】は、そう声を発したユキをジロリと見た。

「私、雉島さんに訊きたいことがあるんです。会わせてください」

【ruthless】は表情を変えず答える。

「だめだ」

「どうしてですか！」

「バーテンの【tapster】から報告が入っている。にもかかわらず雉島さんはあんたを二階へ呼ばなかった。今も、あんたによろしくと言った。雉島さんはあんたには会わない、ということだ」

「納得できない。なぜ！」

祖父谷をよけて、今にも自ら二階へ上っていこうかというユキの前に【bad!】がすっと立ちはだかった。

「福沢、ひとつ教えてやろう。あんたは『におい』が強すぎるんだよ」

「はあァ？」

　ユキは首を傾げて、それから自分のブラウスの脇に顔をうずめてみる。それを見て【bad!】は「はッ！」とあざ笑うような仕草を見せた。

「古都田から何か言い含められて動いている、そんな『におい』がプンプン臭う、という意味だ」

　ユキは愕然として言葉を失った。

　その古都田のことを果たして信じて良いのか、それがまさしく雉島に会って確かめたいことだった、二人の間にいったい何があったのか、聞いた上で自分なりに判断しようと決めていたのに……。

「こ……古都田社長のことを、信じられないと？」

　ユキがようやく言葉を絞り出すと、【bad!】は手に持っていた、折りたたまれたサングラスを胸ポケットに挿した。

「ああ、信じられないねえ」

　それから【bad!】は、数段下に立つユキとの身長差に合わせてその場にしゃがみ込み、言葉を継ぐ。

「いいかＥＴ福沢、俺たちは一応、ＫＣＪのワーズ社員だ。だが会社組織ってのはおしなべていつも一枚岩ってわけじゃあない。ましてこんな超巨大企業、みんなが一緒の考え方なんて方がおかしい」

　しゃがんだまま【bad!】は後ろを振り返って手を伸ばし、二、三段、階段を上がった後ろにいる【ruthless】から一万円札を受け取った。それをつまんで、ひらひらとユキの前にかざす。

「見ろ。諭吉さんが載っている方が表だ。だが裏には、載っていない」

　【bad!】はお札の裏をユキたちに見せながら続ける。

「世の中ァ、裏と表がある。表だけでは成り立たないんだよ。そして福沢、あんたや古都田社長は俺たちと違って、こっち側の人間じゃあない。表に住むやつにゃ、裏のことは分からない、と、まあそういうことだ。ほら、タクシー代だ。雉島さんに感謝しろよ」

　【bad!】はそう言って、つまんでいた一万円札をユキの目の前で離した。ひらりと舞い落ちるお札を、ユキは反射的に捕まえる。

　それを見届けた【bad!】は立ち上がって、上機嫌で祖父谷に言った。

「じゃあな、兄弟」

十五

「ヨッシー、その鍵は何やの？」

後部座席に、ユキと京子に挟まれて小さくなっている祖父谷は、借りてきた猫のようにおとなしい。というより、やっぱり顔色が悪かった。乗り込む前から終始うつむいていて、明らかに異常だ。

「まだ気分悪いの？　吐きそう？」

ユキの問いかけを背中で聞いていた運転手がバックミラー越しにわずかに声を荒らげる。

「お客さん、車内で吐くのは勘弁してくださいよ」

祖父谷が蒼白な顔を少し上げて答える。

「だ、大丈夫です。車出してください」

タクシーは繁華街の中心地方面の駅へそろそろと動き出した。ユキは即座に訊き始める。
「祖父谷くん、雉島さんと何の話をしたの」

すぐ隣の祖父谷の口からぼそりと言葉が漏れ出る。

「お……俺達は、どうしてＫＣＪにいるのか」

ユキは頷く。

「この間会った時に訊きたかったことだわ。それで？　それで雉島さんは何と……？」

祖父谷は顔を上げ、ユキの目を見た。信号で止まったタクシーの窓から緑のネオンサインの点滅光が差し込み、そのたびに祖父谷の目の毛細血管を黒く目立たせる。あるいは泣いていたのか？

祖父谷の答えはつれないものだった。

「言わない。ユキちゃんには、関係ない」

「はァ？　どうして」

　祖父谷は手にしていた一万円札を裏返した。お札（さつ）なら自分のエネルギーで間に合っているからと【bad!】に返そうとしたユキに、「雉島さんの好意に失礼だから」と言って代わりに受け取ったお札だ。【bad!】は「分かってんじゃねえか、兄弟」と満足そうだった。

「ユキ。君は、俺たちスピアリアーズとは違うから」

　そう言いながら、ふと思いついたように祖父谷は、ユキの肩越しに一万円札をネオンサインにかざしてみる。

「でも諭吉さん、透かせば裏からでも見えるんだよな……」

　反対の隣に座っている京子がその様子を見て何ともなしに言う。

「その、裏に載ってる鳳凰って、うちらの社章と似てるな」

　数秒の沈黙があった。すると祖父谷が下を向いて「くっ、くっ」と言った。ユキは驚いて祖父谷を見る。最初、何かを思い出して笑っているのかと思ったけれど、彼は嗚咽していた。

――な、泣いてる！　祖父谷くんが？

　その向こうで京子も驚きで口を開けていた。それでも彼女は、数回つけまつ毛をばさつかせると、後ろから腕を回して祖父谷の背中を抱き、ポンポンと叩いた。

　祖父谷は、両肘を左右の膝につき、お｜札《さつ》とルームキーをつかんだまま、手を組んで背中を丸めた。フロントガラスに向けて祈るような姿勢で、歯を食いしばって嗚咽を噛み殺そうとしている。だが嗚咽は行き場のない憎悪か運命を呪う言葉に形を変えて、祖父谷の口から絞り出されてきた。

「くそっ！　なんだって俺はＥＴさせられてんだ！」

　ユキはただ目を丸くして祖父谷の尋常ならざる姿を見つめるのみで、かける言葉も思いつかなかった。一方、京子は同僚をいたわるように背中をさすってやった。

「ヨッシー、あんた、よっぽど辛いこと、聞かされたんやね」

　運転手が驚いてちょっと振り向く。

「あ、あんたたち、ＥＴなのか？」

　祖父谷の肩を抱く京子がはっと気付いて、祖父谷の手からルームキーを取り上げる。そのキーホルダーに彫られたホテル名と、タクシーの中から見える看板が一致するのを見て、慌てて言った。

「運転手さん、ここで止めてんか！」

　タクシーはホテル前に静かに止まった。

「福沢、あんたはこのまま乗って帰りな。うちら、この鍵、ホテルに返しに行かなあかんから」

　歩道側に二人を下ろすため、ユキもいったんタクシーから降りた。

　京子は珍しく白目と黒目が判別できるくらいにユキをまっすぐ見つめてきて、念押しするように言った。

「今日あったことは全部、誰にも内緒やで」

　結果的に祖父谷と二人で食事したこと、クラブ・サラマンダーのような危険な店に行ったこと、祖父谷が雉島と接触したこと、京子がゴリラの真似が上手いこと、祖父谷が人目をはばからず泣いたこと、そして泣くほどショッキングな何かを祖父谷が雉島から聞かされたこと。どれひとつとっても、誰かに言うことで誰かが幸せになる情報とは思えない。

　ユキは京子に小さく、しかしはっきりと頷いた。

　京子は降りてきた祖父谷から受け取った一万円札をユキに手渡すと言った。

「ほな」

「お客さん、行きますよ」

「お願いします」

後部座席の真ん中に座り直したユキが少し屈むように姿勢を変えると、バックミラーに後ろの光景が映り込む。京子に支えられるように寄り添われた祖父谷の姿が、小さく遠ざかっていった。

第十二章　騒乱（1）

一

業務が休みのある日、万三郎は、古都田社長の勧めで、ユキや杏児と一緒に、初めてホテル・セントラルＫＣＪに足を運んだ。大きなシティーホテルだ。ロビーにはたくさんのワーズたちが、あるいはチェックインカウンターに列をなし、あるいはソファーの前に立って談笑し、あるいはコンシェルジュに何か相談をしている。

三人はメインエントランスの傍らの液晶パネルに表示されている本日の会合一覧表を見やった。たくさんの会合の予定が記されている。

　each家・other家　結婚御披露宴
三階　宗吾の間

　ＷＨ-疑問文研究会月例ミーティング
七階　名瀬の間

　発音しない文字を読まれる悩み大相談会
六階　アイスルの間

　アクロニム団体名称略語読解評議会
四階　ＫＣＪホール

　地球サロン・人類希望の集い
一階　アトリウム

「ああ、あれだ」

万三郎が指さしたのは、古都田から、主催者に頼んでおいたから顔を出してみろと言われた交流会だ。

医学用語交流会
二階　胸焼けの間

「二階ね……」

ユキの言葉を受けて杏児が指を差して提案する。

「あのエスカレーターで行こう」

平面的にもかなり広がりのある建物だが、広々としたメインロビーは、十階の天井まで吹き抜けた贅沢なつくりだ。早春にさしかかり、ディスプレイは春を意識している。薄いピンクの桜の花びらを連ねたセンスの良い何十本もの飾り紐が、天井から緩いカーブを描いて、シャンデリアのように吹き抜けを彩っている。

一階ロビーから二階までが特別高さがあった。吹き抜けの空間を斜めに縫うように伸びる長いエスカレーターに万三郎が乗る。その後ろにユキ、さらに杏児が続いた。

見下ろすと、ガラスを多用して光を多く取り入れたロビーの向こうには、百席ほどの椅子を縦横四角にステージに向かって並べた一角もあり、何かの催しが始まりそうだ。

万三郎が物珍しそうにその様子を見下ろしていると、後ろからユキが言う。

「さっきあった『地球なんとか。希望の集い』じゃない？」

万三郎はちょっと振り向いてユキに訊き返した。

「ユキ、興味ある？」

「医学用語よりは……ね」

「古都田社長の顔を立てたら早めにおいとまして、あれに行く？」

「そうねえ……」

古都田社長は三人に言ったのだった。

「ＫＣＪ内では、ＥＴはどこでも受け入れられる。ホテル内の会合やイベントも基本的に飛び入りで参加可能だ。そして多くの場合、歓迎される。特に、普段出番の少ないワーズたちは、何とか諸君に名前を覚えてもらいたくて、握手なり名刺交換なりを求めて寄ってくるだろう。スティーブ・ジョブズ（１）が飛び入りで来場するようなものだ。諸君はある意味、スターなのだ」

二

ともあれ、三人は医学用語交流会の受付の前に立って係に名乗った。ＫＣＪ社長の威光がしっかり行きわたっているようで、万三郎たち三人は受付から、来賓テーブルへと丁重に案内された。丸テーブルに座っていたこの会の幹事と思われる面々が起立し、やや面倒臭い型通りの儀礼が始まる。

「やあ、お若いＥＴの皆さん、古都田社長からお聞きして、お待ちしておったところです。会長として心から歓迎します」

そのうちの一人、さぞや良いものを毎日食べているのだろう、高くない身長の割に肉付きの良い体躯をダークスーツできちんと包み込んで、中年の男性がにこやかに声をかけてくる。その頬には【hospital】（病院）と彫ってあった（２）。

「さ、さ、どうぞお掛けになって……」

同じテーブルの「お偉いさん」達との簡単な相互紹介を終えると、三人は促されるままに着席した。

交流会と銘打たれてはあったが、着席スタイルのビュッフェらしく、この宴会場には、三人が着席したのと同様の丸テーブルがざっと五十はある。ほどなくして、四百はあろうかという席数の大半が埋まり、会が始まった。【hospital】会長は早々に司会から紹介されて、目の前に登壇して、スピーチを行った。スピーチの内容はおおよそ次のようなものだ。

これからの季節、花粉症が増えてくるが、毎年【hay fever】（花粉症）氏だけが大忙しとなっている。彼は目を充血させ、鼻の頭を真っ赤にして激務をこなしており、家に帰らずチンステに泊まり込む日々が続いている。当交流会のメンバーには、他にも、【pollen disease】氏や【pollenosis】氏などが在籍しており、【hay fever】氏以外でも花粉症を表現することは可能だ。さらに本日はお越しではないが【somatokatarrh】氏という幽霊会員もおられる。下世話な話ではあるが、先日私が彼と会ったとき、彼は出番が少なすぎて収入が増えないとこぼしていた。

収入格差や、労働量の不均衡が起こるのは、口語英語の隆盛により、もっとも一般的なワーズにオーダーが集中し、相対的に難読なワーズの登場機会が減っていることがある。
花粉症の事例のように、別のワーズによる言い換えによって、特定の医療用語に過度の負担がかからないようになるのが望ましい。会員諸兄におかれては、クラフトマン等ＫＣＪ上層部に対

して、自らの知名度を高めるための営業活動に一層励んでいただきたい。

　それから【hospital】会長は、最前列のテーブルに目をやって続けた。

「今日は光栄なことに、本社からＥＴのお三方が来場されています。交流会なのですから、皆さん各方面におおいに自己アピールしてください」

　万雷の拍手に包まれて降壇してきた【hospital】会長は、着席前にどや顔で三人のＥＴに順番に微笑みかけ、会釈した。三人はどう反応して良いのか分からないまま、ぎこちない笑顔で会釈を返すのみだ。

三

司会者は、新入会員の紹介へとプログラムを進めた。【autophagy】（自食作用）や、【obesity】（肥満症）、【mammography】（マンモグラフィー）、【Ebola disease】（エボラ　出血熱）、【Zika fever】（ジカ熱）ほか、十人ほどのワーズが壇上に招かれ、それぞれ短い自己紹介をして会場から歓迎の拍手をもらっている。

中でもひときわ大きな拍手をもらったのは、【iPS Cells】（人工多能性幹細胞）だった。短髪でメガネをかけた理知的な紳士が「よろしく」と挨拶すると、会場は割れんばかりの拍手に包まれた。

乾杯の音頭を【Minister of Health, Labour and Welfare】（厚生労働大臣）が取って、会はビュッフェスタイルのランチョンとなった。

【hospital】会長に促されて、三人は料理を取りに並ぶ。三人の頬に刻銘はなく、胸元には金色の鴨の社章が輝いているので、前後のワーズたちはすぐに、彼らが、先ほど会長がスピーチで言っていたＥＴであることに気付いた。

「あっ、ＥＴの方々！」

「えっ？　ほんとに？」

前後の男性ワーズたちが驚き、次に畏敬の眼差しで握手を求めて来る。その都度三人は手にした皿を片手で持ち直し、もう片方の手で握手に応じるのだった。愛想笑いと会釈で彼らをやり過ごすものの、そのうち、三人が並んでいるところに、列に並んでいない女性のワーズたちまで二、三人で寄って来ては、「すみません、写真、いいですか」と言って、三人のＥＴを左右から挟むようにしてスマホに向かってピースをするのだ。

「すみませーん、イチ足すイチはァ……？」

三人はひきつった愛想笑いをカメラに向けるしかなかった。

「済んだ？　じゃあ次、私たち、お願いします」

「その次は私たち、お願いします」

「ちょっとあなた！　順番ですよ。私たちが先に並んでいます！」

　女性ワーズたちを交えての撮影会は、ＥＴたちが料理に並んでいる間、十五分間ほどひっきりなしに続いた。

　ユキが女性ワーズに込み入った質問をされて料理台から離れられないところを無情に見捨てて、万三郎と杏児は、すでに冷めた料理を皿に、ようやくテーブルへと戻ってきた。今度は飲み物を取りにテーブルを離れようとしたのだが、その矢先、万三郎が呼び止められた。

　声の主は、太ったシャツの、ネクタイが苦しそうな男性で、彼はしきりに首筋の汗を拭きながら万三郎に語りかけた。

「あー、初めまして、私、代謝症候群【metabolic syndrome】と申します」

　杏児は万三郎を見捨ててドリンクコーナーへ向かう。その後ろ姿を恨めしく思いながら、「あ、これはどうも」と万三郎は仕方なく挨拶を返した。

四

「連れを紹介します。こちらは、高血圧症【hypertension】、そしてこちらが高脂血症【hyperlipidemia】、あちらで料理を皿に取っているのが、二型糖尿病【type 2 diabetes mellitus】です。以後、お見知りおきを」

「こ、こちらこそ、よろしくお願いいたします」

そこへ新たな男性がやってきて積極的に名刺を差し出してくる。

「私も自己紹介をさせてください。私は、白癬菌症【Trichophyton fungus】と申します」

「トリコ……失礼、もう一度……」

「トリコファイトン・ファンガスです。まあ、水虫、たむしですな」

さらに続々と自己紹介の男性たちが名刺を手に我先にと集まってきていた。

「どうも、こんばんは。【parotitis】耳下腺炎と申します。こちらは双子の弟、【the mumps】おたふく風邪です。花粉症のお話と同じく、私たちも同じ意味のワーズです」

「初めまして、【osteoarthritis】変形性関節症と申します」

「初めまして、【juvenile rheumatoid arthritis】若年性関節リウマチです」

「どうも。【hepatitis A】Ａ型肝炎です」

「どうも。【hepatitis B】Ｂ型肝炎です」

「どうも。【hepatitis C】Ｃ型肝炎です」

「【subacute bacterial endocarditis】亜急性細菌性心内膜炎です」

「【thrombotic thrombocytopenic purpura】血栓性血小板減少性紫斑病です」

「ちょっ、ちょっと待ってください」

　自分を取り囲んで次々と名刺を差し出してくる病名ワーズたちに当惑して、万三郎は両手のひらを前に向けて彼らを制止した。名刺を受取ってもらえない血栓性血小板減少性紫斑病は、怪訝な顔をして万三郎を見上げた。その左頬いっぱいに、三行にわたって名前が彫りこまれている。

「すみません、ちょっと気分がすぐれなくて、お手洗いに……」

　万三郎は済まなさそうに申し出た。

「気分がすぐれない……」

　血栓性一一はそう繰り返すと、はっとしたように後ろを振り返った。彼の次に名刺を渡そうとしていた、つやのない、長く黒いストレートヘアの、見るからに顔色の悪い女性がびっくりしたように血栓症を見て一歩後ずさった。

「な、なんですか？」

「【nausea】（吐き気）さん、中浜さんが気分悪くなったのは、あんたの発する毒気のせいじゃないのかね」

【nausea】と呼ばれた女性は片手に自分の名刺を持ったまま大きく目を見開いた。

「何ですって！　この医学用語交流会で、『毒気』なんて非医学的用語を使って濡れ衣を掛けないで！」

　万三郎は慌てた。

「待ってください。この方のせいではないです。私が悪いんです」

　右手を自分の胸に当てて、気分が悪いのだとジェスチャーをしながら、血栓症たちにとってつけたようなお辞儀を残し、万三郎はその場を離れた。出入り口に待機するホテルスタッフにトイレの場所を聞き、会場の扉を開けてもらう。

「あちらにエスカレーターがございますが、その隣りから吹き抜けに沿った廊下をお進みください。すぐにお手洗いがございます」

「ありがとう」

　本当は行きたくもないトイレへと万三郎は足を進める。

――こりゃあ、気を遣うなあ……。

五

さっき一階ロビーから昇ってきたエスカレーターの降り口手前辺りで右側を見ると、なるほど向こうにトイレの表示が見えた。

各階の吹き抜けを縁取る廊下を歩きながら、万三郎がふと階下のアトリウムを見下ろすと、例の集いの会場が何やらざわついている。ステージの上で数人の男たちがもみ合いになりながら肉声で何かを罵り合っているようだ。一人の男がマイクを手にしきりに何か言っているが、マイクのスイッチが切られているようで聞こえない。聴衆も半分ほどはその場で立ち上がってステージに向かって何か言っている。数人のホテルスタッフたちが心配そうに会場を取り巻いて、騒然たる事態を見守っていた。

何かトラブルが起こっているなとは思ったものの、さほど真剣に気に留めることもなく、万三郎はトイレに入る。

せっかくだからと用を足して、洗面台で手を洗いながら、鏡に映った胸元のタックピンを見やった。

――こんなちっぽけな社章が、こんなに強烈な影響をワーズたちに与えるんだな……。

そのとき、トイレのドアが開いて入って来たのは、杏児だった。

「おい万三郎、大丈夫か」

「心配して来てくれたのか」

「いや、飲み物持ってテーブルに戻ったら、難しいワーズたちの自己紹介ラッシュだ。万三郎はどこかと訊いたら、『なんでも、ご体調がすぐれないとのことで……』だと。うまく逃げたなと思ったから僕も真似した」

「ユキは？」

「女性ワーズの集団に絡め取られていった。どこかのテーブルで軟禁状態になっているだろう」

「可哀そうに……」

　杏児は澄ました顔で万三郎の横に並んで鏡を見ながら身だしなみを整える。

「なあ万三郎、今さらだけど、ＥＴって、すごいな」

「ああ。だが、勘違いしちゃいけない。ＥＴというステイタスに皆集まって来ているだけだからな。俺たちはまだ駆け出しでしかない」

　杏児は鏡越しに意地悪く笑いかける。

「だったらＥＴ中浜さん、戻って一人でも多くのワーズの名刺もらって顔を覚えておいた方がいいんじゃないのか」

「そうかもしれないけどさ、小難しい病名とか、なかなか使う機会がないんじゃないか。そのうち、名刺もらったことも忘れちゃうよ。俺たちはまず、もっと基本的なワーズたちを使いこなせるようにならなくちゃいけないんじゃないのかな」

　その時、結構な勢いで再びトイレのドアが開いた。明るいグレーのスーツを来た男が入って来た。

「あっ！」

　鏡に映り込んだ男を含めた、三人が同時に驚きの声を上げた。男は、祖父谷義史だったのだ。

六

「お前たち、ここで何してる」

祖父谷は威嚇するような低い声で二人に訊く。万三郎が答える前に、祖父谷により近いところにいる杏児が祖父谷に向き直って答えた。

「トイレでやれることはそう多くない。僕たちはもう用は済んだ。祖父谷、お前も、用があるのは僕たちじゃなくて、あっちじゃあないのか？」

杏児は祖父谷を見たまま、後方に三つほど並んだ男性用小便器を指差す。祖父谷はそちらをちらりと見て杏児に言った。

「このホテルで何をしていると訊いている。まさか、『集い』に関わっている訳じゃないだろうな」

祖父谷の眉根に立て皺が寄った。どうも彼の意に沿わぬ行動を二人が取っているのではないかと疑っているようだ。

「何だ、『集い』って？」

万三郎が祖父谷に訊き返す。すると祖父谷はわずかに表情を和らげた。

「なんだ、違うのか」

「祖父谷、お前こそ、このホテルで何してる」

祖父谷は問いを連ねた万三郎の方に目をやって、答える代わりに逆に質問してきた。

「ここに小学校高学年くらいの子どもが来なかったか」

「いいや」

「そうか、来てないか……」

「なあ祖父谷、お前こそ何やってるんだ、なんで子どもを探してるんだよ」

　万三郎が再度問うたが、祖父谷はそれを無視して身を翻して出て行こうとした。その背中に杏児が声を投げかける。

「おい、用を足して行かないのか」

　祖父谷はトイレのドアを開けかけたまま立ち止まって振り返り、二人を代わる代わる見ながら言った。

「ここは空気が悪い。劣った者たちの臭いがする。場所を変えることにする。いいかお前ら、俺の邪魔をするなよ。こんなところでうろうろしてないで、良い子は早く家へ帰れ」

　そう言い捨てて、祖父谷は出て行った。残された二人は目を見合わせる。

「くーっ！　本当にいちいちむかつく奴だよ。よくよくついてないな、こんなところでさえあいつに会うなんて……」

　杏児はそう言って怒りを露わにしたが、万三郎は冷静だった。

「杏児、祖父谷がどこへ向かうか見届けてくれよ」
　万三郎の言葉にハッとした杏児は、分かったと頷くと、急いでトイレから出て行った。
　残された万三郎は、祖父谷の追跡は杏児に任せて、自分の濡れた手をまず乾かそうと、ハンドドライヤーに手を入れた。

　ウイイーン……。

「万三郎……」

　勢いよく温風を拭き出す音に混じって、ふとどこからから自分を呼ぶ声が聞こえたような気がして万三郎は振り返る。そして声を上げて仰け反った。

「うわッ！」

　黒い半ズボンをサスペンダーで吊るした、小学校高学年くらいの男の子が一人、そこに立って万三郎を見上げていたのだ。その頬には【hope】（希望）と彫られている。

「万三郎、僕を助けて」

七

「うわッ！」

すぐに戻って来た杏児も、少年を見るや同じ驚きの声を上げる。【hope】は杏児にも同じ言葉を吐いた。

「杏児、僕を助けて」

杏児は目を丸くしたまま万三郎に視線を移す。万三郎がその視線を受けて少年【hope】に向き直った。

「個室にいたの？」

【hope】は頷く。

「話、聴いてた」

万三郎はやれやれといった体でその場にしゃがんで、【hope】と同じ目の高さで彼を諭すように言った。

「あいつ、君を探してた。何があったか知らないが、心配かけてるんじゃないのか。さ、行こう」

そう言って【hope】の手を取って立ち上がろうとした万三郎を【hope】は強く振りほどいて言った。

「祖父谷は敵の手先なんだ」

万三郎は振り返って杏児を見た。どういうことだ？　杏児は一度首を横に振ると、【hope】に直接訊く。

「君はなぜ僕たちと祖父谷の名前を知っている」

【hope】はあからさまに杏児を馬鹿にするように天井を仰いだ。

「話、聴いてたって、言ったろ」

　子どものクセに大人を馬鹿にしたような仕草に万三郎は思わず苦笑しながら【hope】に問い返す。

「敵って、あいつがか？」

【hope】がこくりと頷く。

　杏児も万三郎につられて苦笑いを浮かべた。　杏児も万三郎同様、【hope】の前にしゃがんで目線を同じ高さに合わせて、言い含めるように説明する。

「君、【hope】……だよね。いいか【hope】、祖父谷はさ、確かにいけ好かない奴ではあるけれど、俺や万三郎の同僚だよ。敵とかじゃない」

　すると【hope】は、サスペンダーをした黒い半ズボン姿のまま、肩をすくめてチッと舌を鳴らし、杏児をまっすぐ見つめて言った。

「杏児、あんたのその目は節穴か」

　面と向かってそう言われて、さすがの杏児もむっとした。

【hope】は言う。

「祖父谷は心配していたと思う？　本当に心配していたらこう言わないか？『見つけたら知らせてくれ』と。だけど祖父谷はあんたらにそうは言わなかった。あんたらが先に僕を見つけたら面倒くさいことになると分かっていたからだ。その証拠に奴は何て言った？
『俺の邪魔をするな、良い子は早く家に帰れ』と言わなかったか？」

「良い子って、【hope】、君のことだったのか？」

「馬鹿、あんたらのことだよ！　奴は僕が個室にいることなんて知らなかったんだから、僕じゃないのは当たり前じゃん、鈍い奴だなあ」

八

子どもにそこまで言われて杏児は何か言い返そうとしたが、【hope】の言っていることはいちいちもっともだったので、グッと言葉に詰まった。

「あのさあ【hope】、質問が大きく分けて、えーっと、三つあるんだ。答えてくれるかな？　まず一つ目は……」

皆まで言わさずに【hope】が杏児を遮る。

「一つ目、『君ずいぶん上から目線でもの言ってるし、僕たちを呼び捨てで呼んでいるけど、僕たち、一応ＥＴで君らワーズの上司なんですけど……上司って意味、ボク、分かるかなあ？』の答えを言うね。僕は、平安時代後期にはもう日本にいた。ＫＣＪのワーズ社員になったのは明治以降だから、僕の年齢は八百歳弱、社員歴は百五十年くらいだ。つまり、創業時からの社員。だけど『将来が楽しみな無限の可能性』を演出するイメージ戦略上、見かけは半ズボンを履いた少年の姿でいる。プロの【hope】だからね。僕はそういう部下ですが、何か？」

万三郎も杏児も目を丸くして黙っている。そんな二人をよそに、【hope】は小便器の前まで歩いて行って、ズボンのサスペンダーを両肩から外し、前ボタンを開けてパンツ共ども半ズボンをずり下ろした。尻を半分出したまま、用を足しつつ【hope】は続ける。

「二つ目、ワーズの間でも、水面下でキジシマ派の勢力がじわじわと浸透している。もちろん穏健派が大部分なんだけど、権力闘争の勝算がついたのか、ここへきて急進派が本格的に活動を開始したと僕の耳にも入って来ていた。現場指揮官は【bad!】だ。キジシマ派は、一連の作戦行動を『【bad!】の乱』と呼んでいるらしい」

【hope】はぷるぷると下半身を振り、滴を切ってズボンを上げる。

「三つ目、その【bad!】の乱の先遣隊が今日の『平和の集い』に紛れ込んでいたんだ。メイン・ゲストである僕を拉致、軟禁するために。やつら、僕を洗脳して、自分の陣営に引き込もうとしているんだ。僕を擁する反乱軍は『希望』を手にすることができる。反対に保守派は希望を失う。だけど、そこまで手荒なことをやるということは、いよいよ山が動き始めたということだろうなあ」

言い終わると【hope】は二人のところに戻って来て、洗面台で手を洗う。洗い終えると子ども

らしく濡れた両手をズボンで拭った。

「だから、僕を助けて」

　饒舌な少年は、おそらくイメージ戦略上プロとしてそうしている、瞳を輝かせながら二人を見上げた。

　九

「【hope】、君は、祖父谷は敵の手先だと言ったが……？」

　万三郎に問われて【hope】はポンと手を打った。

「あ、そうか。それを言うの、忘れてた。僕が祖父谷に騙されて、連れ去られるところだったんだ。さっきまでアテンドしてくれていたお姉さんは頬に【attendant】（案内人）って彫ってあったのに、突然、頬に何の表示もない男ーー祖父谷のことだよーーが僕の控え室まで迎えに来たんだ。『そろそろ出番です』って。僕はおかしいと思った。だけど角を曲がるまで廊下を黙ってついていった。そしたら少しだけ開いた従業員専用の扉の向こうからお姉さんのうめき声が聞こえて、一瞬立ち止まった僕の足元に、お姉さんの名札が落ちてたんだ」

　【hope】はそう言いながらポケットをまさぐり、【attendant】のネームプレートを取り出して見せた。

「名札？　名前なら顔に彫ってあるだろう？」

「ホテルの従業員であることを示すためじゃないか。あんた、ほんと馬鹿だなあ」

　万三郎はうかつなことを訊いてしまったと一人苦笑した。油断すると【hope】の毒舌を食らってしまう。

　【hope】は続けた。

「部屋は覗けなかったけど、呻き声に続いて『こら静かにしてろ』って押し殺した声。あれ、たぶん【bad!】だよ。それで僕は策略に気付いた。前を歩いていた祖父谷に気付かれないようにこの名札を拾って、何食わぬ顔でついていった。少し行ってから『トイレ！』って言った。祖父谷は『しかたがないなあ、じゃあ待ってるので早く』とロビーに出たところでトイレを指さした。僕は、祖父谷がわずかに視線を外した隙に、トイレからちょうど出てくる大人の陰に隠れて、そのままエスカレーターに乗ったんだ。僕は子どもだから、祖父谷の場所から見上げても、角度的にエスカレーターの手すりに隠れて見えなかったと思う。それでこの二階のトイレに逃げ込んで、これからどうしようか考えていたところだったんだ」

「奴は君をどこへ連れて行こうとしていたのかな」

「僕自身にも感づかれずに、ロビーの人混みを縫って、車が待つ正面玄関の外へ誘導したかったんじゃないかな。キジシマ急進派のワーズたちの顔を僕は知っている。頬に刻印を持たないヒューマンの祖父谷なら、僕に騒がれずに外へ連れ出せると思ったんだろう」

　万三郎がため息をついた。

「うーん、君の言うことが本当だとして、なんで祖父谷がそんな良からぬ企みの片棒を担ぐのかな」

　杏児が言う。

「万三郎、【hope】の言うことは本当らしいぞ。祖父谷は二、三人の男たちと手分けして【hope】の行方を捜していたようで、ここを出てすぐ、エスカレーター前で集まってそいつらと言葉を交わして、それぞれエスカレーターを上と下に分かれて行った。祖父谷は下へ降りて行ったよ。それと、その『集い』って、一階でやっているやつだよな？　大騒ぎになってた」

　【hope】の顔がにわかに曇った。

「メイン・ゲストの僕が行方不明になっているからだ……」

　万三郎と杏児は顔を見合わせる。【hope】は歯ぎしりしながら鏡の自分を睨んだ。

「皆に心配と迷惑かけてる……イベントが台無しだ。クソッ！　【bad!】の乱のせいだ」

　数秒の後、万三郎は、【hope】の肩に手を置いて、鏡の中の【hope】に話しかけた。

「俺たちが護衛していたら、行けるか？」

「えッ？」

　【hope】が万三郎を見上げる。万三郎は、同じく鏡に映った杏児の目を見る。杏児が頷く。

「よもや、衆目を前にして君を拉致したりはできまい」

「杏児、万三郎……」

　万三郎がニコリと頷く。

「行こう、まだ間に合う。みんなが待ってるんだろ？」

「……で、でも……」

　杏児が【hope】のサスペンダーを背中で軽く引っ張ってパシッと弾いた。

「君の名前は、【hope】、希望だろう？　うまく行くって。出演後、どうやって脱出するかは後で考えよう」

十

聴衆がざわめきながらしきりに指を指しているので、祖父谷も思わず振り向いて見上げた。桜の装飾紐越しに、エスカレーターを下ってくる人影があった。前後に立つのは万三郎と杏児。真ん中で身を乗り出して聴衆に手を振っているのは【hope】だった。

司会者がホッとした様子でアナウンスする。

「皆様大変お待たせいたしました、【hope】さんです！　本日のメイン・ゲスト【hope】さんが何と二階からの登場です。大きな拍手でお迎え下さい」

状況を理解するにつれ、強く唇を噛む祖父谷の横で、ドスの利いた低い声で女がつぶやいた。

「祖父谷、貴様ヘマしやがって……穏便に済ませられなくなっちまったじゃねえか」

祖父谷が振り向いて女に耳打ちする。

「すみません、【bad!】さん」

すると女はさらに声を潜めて祖父谷を叱った。

「馬鹿野郎、俺ーーあたしは【bad!】じゃねえ。人に聞かれたらどうする！」

「す、すみません……」

祖父谷の横に座っているのは、金髪のロングストレートヘアーで、サングラスをかけた、祖父谷より背が高く、がっしりした体格の女だった。赤いワンピースのドレスのラインが不自然に筋肉をなぞっている。彼女の右頬の一部には、目立たぬよう肌色の、四角い小さな湿布薬が貼られており、その上にマジックで何やら書き足されていて、全体として【iPad!】と読める。

【iPad!】は一階に降り立とうとする【hope】をサングラスの奥で追いながら、手首に巻いたブレスレットの手のひら側を口に近づけ、つぶやいた。

「まあいい。獲物は目の前だ。お前ら、しばらく待て。俺ーーあたしがサングラスを取ったら、それが合図だ」

　万雷の拍手の中、【hope】は万三郎と杏児に前後を守られ、【iPad!】の目の前を通ってステージに登って行った。一行に気付かれぬよう、祖父谷は顔を伏せている。

　一時はどうなることかと色を失った司会者の声も弾んだ。

「それでは、『地球サロン・人類希望の集い』、いよいよメイン・イベント、ビッグワーズである【hope】氏によるハロー・トークです。では【hope】さん、よろしくお願いいたします」

　客席に作られた通路を通って、【hope】を前後に挟んだ万三郎と杏児は、ステージ手前最前列のところで左右に分かれて、そのまま両脇まで歩いて行き、聴衆の方を向いて立った。一方で【hope】はそのまままっすぐ階段から登壇した。

「みなさんこんにちは、【hope】です」

　【hope】は演台に設置されたマイクスタンドからワイヤレス・マイクを取り外すと、手慣れた様子でマイクを片手に、演台から離れ、ステージ前方に歩み出た。

「僕はもう来ないと皆さん思いましたか？　僕自身も、もうダメかと思いましたね。いえ実は、お腹くだしてトイレに座ってたんですよ。だけど僕は希望を捨てなかった。負けるもんかと。そしたら奇跡的に回復して、こうしてみなさんの前に立つことができました」

　会場はやんややんやの拍手喝采となった。

　ステージ下でその様子を見ていた万三郎は舌を巻く。

――すごいな。のっけから、下痢が止まった話をつかみで使う方も使う方だが、それで拍手を贈る聴衆もえらく【hope】をカリスマ化したもんだ。

　【hope】は場数を踏んだ講演家のように、本題に入っていった。

十一

「神々の時代、プロメテウスはあまりに悲惨な人間たちを救うため、ゼウスの言いつけを破って人間に火の起こし方を教えました。ゼウスの怒りにふれたプロメテウスは罰を受け、死んでしまいます。弟エピメテウスは、兄プロメテウスから『決して開けてはならない』と一つの箱を託されていたのですが、ゼウスが送り込んだ好奇心の強い妻パンドラにせがまれて、箱を開けることを許してしまいます。パンドラが箱を開けると、箱の中に封じ込められていた世の中のあらゆる悪が、世界中に解き放たれていきました。【horror】（恐怖）、【sorrow】（悲哀）、【poverty】（貧困）、【disease】（病気）、【misery】（みじめさ）、【grudge】（恨み）、【pain】（痛み）そして【death】（死）。パンドラは深い失望に打ちひしがれ、慌ててふたを閉めます。すると、箱の中から弱々しい声がする。『私も外へ出してください』パンドラが誰かと訊くと、か細い声は答えました。『私は、【hope】（希望）です』ふたを開けてやると、【hope】は箱から飛び立っていきました。こうして人間は、数々の悪にさいなまれても、最後に希望を持つことが許されたのです」

ステージ中央、ほとんど前縁まで聴衆に歩み寄り、上体を前傾させ、マイクを持っていない方の手を大きく横に開いて、ジェスチャーたっぷりに訴えかける【hope】は、次にその手を心臓に当てて言った。

「僕は、そのご先祖の血をひいて現代に生きています。僕の使命はもっともっと働くこと。より多くの人間が僕を要請してくれるようになればいい。僕はその要請に応えて、ＫＣＪのシートレに乗って、どんどん飛んでいきたい。それが、人類を、そして地球を救うことになると信じているからです。そう、私は【hope】です。ご清聴ありがとうございました」

【hope】がマイクを口から離すと、客は総立ちで割れんばかりの拍手が巻き起こった。スタンディング・オベーションだ。半ズボンのヒーローはステージ上で右手を軽く上げて、鳴り止まない拍手に応えている。

聴衆の中にあってひときわ異彩を放っていた筋骨隆々の赤いドレスの女が、ゆっくりと立ち上がった。背の高い女は、立ち上がると頭一つ分、周りより突出している。【hope】を見据えたまま、女はゆっくりとサングラスを外した。

十二

「この偽善者！」

ようやく拍手が収まろうかという間際、客席から鋭い叫び声が飛んだ。聴衆は皆びくりとして固唾を呑む。もちろん【hope】も表情を引き締めた。

「偽・善・者！」

司会の女性が慌ててマイクを通してたしなめる。

「御静粛に願います」

すると登壇通路の辺りがざわめき始めた。誰かが壇上へ上ろうとステージに向かっている。すわ、万三郎は階段まで駆け寄ろうとしたが、突然後ろから羽交い絞めにされた。

「うっ……誰だ」

身体を拘束している男が後ろから耳元でささやく。

「おとなしくしていれば、痛い思いはせずに済む」

万三郎は二度、三度と身体を揺すってみたが、男はより強い力で万三郎を抑え込んできた。ふと前を見ると、ステージの反対側の脇で、杏児も同じように後ろから拘束されているようだ。

――くそッ、油断した。

万三郎は杏児と目交ぜした。

その視線を遮るように、小さな人影が、落ち着いた様子で階段を上り、ステージに並び立った。【hope】は驚愕の表情を浮かべている。

小さな人影は、【hope】に瓜二つだった。半ズボンを履いた少年だ。遠巻きに見て違うのは、ズボンの色くらいか。そう、今上って来た少年は、緑と赤の、まるでクリスマスを彷彿させる色の服装だ。

　その少年はやにわに【hope】の手からマイクを奪うと、二、三歩下がって【hope】を指さし、こう言ったのだった。

「皆さん、こいつは偽善者です！　僕はこいつの話を聞いていて、虫唾が走る思いに我慢がならず、ここへ上って来た」

　茫然としていた【hope】は、我に返って、後ろの司会者用ワイヤレス・マイクを借り受けるとステージ中ほどに戻り、自分を指さす少年に対峙した。

「【wish】、何のマネだ」

「【hope】、お前の言っていることはきれいごとだ」

「【wish】、ここで、この壇上で僕を全否定して何の得がある」

「【hope】、頼む。僕の言うことを聞いて、考えをあらためてくれ」

「なんだと」

「頼む、一度、雉島さんの話を聴いて欲しい」

「……お前……キジシマ派に加担しているのか！」

「双子の兄弟のよしみで誘っている。僕が口利きをするから」

　【hope】はわなわな震え始めた。

「【wish】、お前、自分が何を言っているか分かっているのか。いくら兄弟だからって、許さんぞ！」

「これだけ頼んでも分かってもらえないのか」

「当たり前だ。ステージを降りろ！　ここはお前の出る幕ではない」
半ズボンを履いた双子の兄弟二人がステージで罵り合っている。聴衆も司会者も固唾を呑んでこの異常な光景をただ見守っていた。二人の声はマイクを通してこのホテルの吹き抜けいっぱいに響き渡っている。

十三

【wish】は聴衆の方に向き直った。

「地球サロン・人類希望の集い」にお集まりの皆さん、皆さんは世の中がそんな単純な希望に満ち溢れている訳じゃないと、実はよく知っているのでしょう？」

「黙れ、【wish】！」

「いいや、黙らない。その事実を知っている人があえて希望を口にするのはいい。だけどそれは時に、純情な人が真実を知ることを妨げ、思考停止に陥らせ、進む道を誤らせるんだ」

「【wish】！」

【hope】は、【wish】に飛び掛かってマイクを奪おうとしたその時、後ろからその両肩をグッとつかまれ、動きを封じられた。

【hope】が振り向くと、そこには祖父谷がいた。

「探す手間が省けたよ。守られて堂々とここに出てくるには少々頼りない護衛だったな」

祖父谷が顎で示す方に目を向けると、ステージ下では万三郎が同様に羽交い絞めにされたまま、唇をかみしめてこちらを見ている。ハッとして反対側に目をやると、同じ目に遭っている杏児と目が合った。

「祖父谷ぃ！」

杏児は声を出したが、祖父谷は逆に鋭い眼で杏児を睨み返した。

「邪魔をするなと警告したはずだ。愚かな男だ」

身動きできないまま、【hope】は肉声で叫ぶ。

「【wish】、僕とお前の兄弟二人で世界を少しでも幸せにしていこうと働いてきたんじゃないのか！　人類に希望をもたらそうと以前一緒に話し合ったじゃないか！」

【wish】はちらりと【hope】の方を見たが、聴衆の方に身体を向け、マイクを握りしめた。

「誤った希望を抱くことでいかに人類が不幸を舐めて来たか、皆さん、思い返してみてください」

会場はざわついていた。あちらこちらで当惑したようにお互い顔を見合わせる聴衆たちの中にあって、サングラスを取った【iPad】は鋭い眼を細めて混乱を喜んでいるようだった。

【wish】は続ける。

「実際のところ、問題なくうまく行くのが当たり前のことには、人間は希望を持たない。持つ必要がないから。成功するか失敗するか、どっちに転ぶか分からないものに対して、好ましい方に結果が出ることをささやかに希望する。これが【hope】の本来の立場なんだ。不肖【wish】もその領分の中で仕事をしてきた。楽しいクリスマスを、幸せな新年を――それが、僕ら希望の『｜分《ぶ》』というべき範疇だ。

【wish】は「そうだろうが？」と言わんばかりに顔を【hope】に向けた。そして、彼を睨み返す【hope】の眼前で、さらに聴衆に向き直って訴えを続ける。

「それがいつの間にか、あおられて、持ち上げられて【hope】はその領分を超えてしまった。つまり、運命すらも変えることができると勘違いしてしまったんだ。そうなると、事実関係の冷静な分析をやらない。データに基づく客観的な判断を下さない。たとえ、十中八九だめな場合でも、希望を持とうとする。いや、九十九パーセント失敗すると言われてもなお、一パーセントの希望にすがろうとする。『一パーセントでも希望があれば、私はあきらめない』と言えば、カッコ良いでしょう。でもそれを推奨するあまり、冷静に判断して九十九パーセントの常識に振れる人を、逆に意気地なしと批判的に見る向きがある。おかしいでしょう？」

十四

【wish】はこれまで余程腹に据えかねた思いがあったのか、立て板に水を流すように訴え続けた。

「貧困。日本でも多い。貯金の残高五百円であと三日間暮らさなくちゃいけない独り暮らしの高齢者に、希望を持てと言えますか？　心の病を患っている人に、希望を持ってがんばれと、あなた、激励できますか？　もっと大きなこともあります。地球温暖化。二酸化炭素の排出を減らさなくちゃいけないことは皆が認識しながら、国のエゴがぶつかり合って、問題が顕在化してから二十年以上たっても解決できない。それでも希望を持って良いのですか？　紛争と難民。かの国で長く続く内戦を絶好の商機ととらえて、政治的に終わらせないように画策する他国や武器商人が多いそうです。それでも、平和へ希望を持てますか？」

動けない【hope】が叫ぶ。

「それでも！　それでも……希望は、捨ててはいけないんだ」

【wish】は厳しい顔をしたまま、潤んだ目で【hope】を見た。

「【hope】に何が変えられるっていうんだ。いや、何も変えられない。僕らワーズに……そこまでの力はないんだ。力がないなら！　【hope】、それは根拠のない気休めじゃないか！」

「……」

「雉島さんが言ったことが、僕は正しいと思う。雉島さんは、こう言った。ささやかながら好ましい結果を願う、というなら構わない。だけど、希望を持つことで、あたかも結果を好ましい方向へ変えられるかのように吹聴するのは、偽善以外の何ものでもない」

【wish】は口元からマイクを離して、肉声で呼びかけた。

「【hope】、あらためてお前に言う。僕は、人間の『後悔』を運ぶ。人間の『できないこと』を表現する。雉島さんから言われたんだ。それが【wish】、お前の使命だと。それが、切望も失望も絶望も感じ得る、ありのままの人間の姿なのだと」

【wish】は再びマイクを近づけ、聴衆に向き直った。

「皆さん、パンドラが箱を開けなければ、【hope】はこの世界に存在しなかったでしょう。だけど、箱が開かなければ、そもそも、他のあらゆる邪悪なものが人類を悩ませることもなかったのです。パンドラは、

I wish I hadn't...（開けるべきではなかった）

……と後悔したはずです。いいですか皆さん、根拠のない希望は、何も変えることはできない。そんなものはまやかしだ」

「そ、そ、そんな……ことは……ない！」

　【hope】の顔面は蒼白だった。その【hope】の顔の真ん中にぴしゃりと指を指して【wish】は声を上げた。

「【hope】、今のお前は偽善者だ！」

「う……うぉ、うぉーッ！」

　【hope】は怒りに任せて身体を力任せに大きく揺すった。小学生の体格とはいえ、さすがに祖父谷も身体をつかみきれない。祖父谷の腕を離れた【hope】は【wish】にタックルするように身体をかがめて駆けだそうとした。

　次の瞬間、【hope】はもんどりうってステージの床に倒れ込んでいた。赤いヒールを履いた足に、【hope】は躓いたのだ。いや、足をひっかけられて、転倒させられたのだった。

　次に、倒れ込んだ【hope】の襟首をつかんで身体を引き起こしたのは、頬に【iPad】と書かれた、赤いドレスの筋肉質の女だった。【hope】をつかんだまま、女が低い声で言う。

「そこまでだ」

十五

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル……」

【hope】の転倒を目の当たりにした万三郎も杏児も、それぞれ拘束を振りほどこうと身体を揺すったが、【hope】を拘束していた祖父谷とは違い、二人とも屈強なワーズに自由を奪われているため、そう簡単にはいかない。

「【hope】ッ！」

ステージに向かって叫んだ万三郎の存在に気付いた【iPad】は、後ろから羽交い絞めにしている男に命令した。

「おい、そいつもここまで連れて来い。反対側のそいつもだ」

そして女は、床に転がった【hope】のマイクを拾い上げた。

「レディース・エンド・ジェントルメン。ショーは終わりです。こっそりコトを運ぶ作戦でしたが、ずいぶん予定が変わってしまいました。まあ、結局は狙い通り【hope】を捕らえることができたので、よしとしましょう。さあ、双子の兄弟の激論飛び交う討論会に続きまして、私こと【bad!】によります、終わりの言葉です」

【bad!】はそう言うと、頬の湿布薬を自分ではがした。

聴衆は敏感に反応する。

「ば、【bad!】だ……」

「スラムに住んでいるんじゃなかったのか……」

「こんな、ホテルなんかに出没するなんて、何があったんだ……」

聴衆は恐怖と警戒心を抱き、ざわついた。

「ここにお集まりの、根拠のない希望をもてはやして、地球人類を幸せにしようとお考えの皆

さん、皆さんは、目障りでーす。よって、このガスで、一斉に死んでいただきまーす」

　【bad!】はそう言うと、ステージの左端にいた別の部下二人に合図を送った。心得た彼らはその場で揃って防毒マスクを着用した。ハエの顔のような、あれだ。
何が起こるのか固唾を呑んで見守っていた聴衆に向けて、マスクの二人は、クーラーボックスのような箱を開けた。中から白い煙がもくもくと勢いよくあふれ出始める。

　マイクを持った【bad!】が言う。

「おっと、化学反応が予想より激しいな。この濃度だと、少しでも吸っちゃうと助からんかもな……」

　それを聞いて、隣にいた祖父谷が慌てた。

「【bad!】さん、それ、やばいガスですか？　何てことだ！　俺にもマスクを、早く！」

　それを聞いた杏児が叫んだ。

「祖父谷！　これは何のマネだッ！」

「ど、毒ガスを撒くなんて聞いてなかった……」

　そのやりとりを聴いて聴衆は悲鳴を上げ、パニックになる。

「毒ガスだって？　どういうことだ！」

「に、逃げろ、死ぬぞ！」

　誰かが叫ぶ。

「よく見ろッ！　煙は下に広がっている。空気より重いということだ。だから上へ……に、二階だ！　二階へ逃げろ！」

「うわーッ！」

　客席にいる聴衆と、先ほどから集まって来ていた野次馬の連中が一斉に逃げ出す。大変な騒動になった。【bad!】はそれを見て、ステージ上で笑っている。おどけたような声で【bad!】はマイ

ク越しにしゃべる。

「これにて、当集いは終了とさせていただきます。どなたさまもお気をつけてお帰りください。さよなら、さよなら、さよなら」

十六

その少し前、ユキは、ほうほうの体で会場を抜け出し、トイレに逃げ込んだ。

機嫌が悪かった。

――あいつらァー、私を置いてどこへ逃げたァ！

万三郎と杏児が二人して会場にいない間、ユキは女性ワーズからの記念写真攻撃と、男性ワーズからの名刺交換攻勢にさらされ続けた。いや、この中座でそれらが終わったわけではない。営業マインド旺盛なワーズたちは、少しでも他を出しぬいて特別な印象を得ようと、女子トイレの外で名刺を片手に待っているのを、ユキは知っていた。

「あのー、ユキさん、体調でも悪いんですかあ？　大丈夫ですかあ？」

さっきからユキに付きまとっている女性ワーズ【urinalysis】（尿検査）が、個室の外から心配そうにユキに話しかける。

ユキはため息をついた。

「大丈夫よ」

逃げ切れないと悟った。

いつまでも便座に座っている訳にもいかないので、ユキは鈍い動作で個室を出ると、尿検査に愛想笑いを見せた。

トイレを出ると案の定、スマホカメラを手にした数名の男女ワーズたちが、ユキを待っている。

「すみません、さっきから機会をうかがっていたのですが、他の方々とお話されていたので、近づけませんでした。私、【endoscope】（内視鏡）と申します……」

名刺を差し出そうとする内視鏡を出しぬいて、より積極的な【drip】（点滴）がユキに話しかけた。

「ユキさん、この吹き抜けに垂れている、桜の花の装飾をバックに私たちと写真撮っていただいていいですか？」

「え、ええ……」

　出しぬかれてあからさまに口を尖らせた内視鏡の名刺をとにかく受け取り、片手に持ったまま点滴に向かって頷く。頷きながらユキは、憎むべき同僚たちがどこかに隠れていないか、回りを見回す。

　見当たらない。つい不機嫌が顔に出てしまう。

　ユキの顔色を見て、【mastitis】（乳腺炎）が気を遣っている。

「ほらドリップさん、早く撮らないと、ユキさんはお忙しいんだから」

【drip】が謝る。

「はい、ごめんなさい、そうしたら、皆さん、ユキさんを中心に、そこの手すりのところに集まっていただけますか」

　こうしてユキが、【hand over】（引き継ぎ）、【autonomic ataxia】（自律神経失調症）、【laxative】（便秘薬）、【osteoporosis】（骨粗しょう症）などと記念写真を撮っているさ中、後方階下から叫び声が聞こえてきた。

「【hope】、今のお前は偽善者だ！」

「う……うぉ、うぉーッ！」

　声につられてユキは振り返って階下を見下ろした。

　半ズボンの男の子がステージの上で突っ伏している。それを、スーツ姿の男と、金髪で赤いワンピースの女が見下ろしている。もう一人の半ズボンの男の子はステージの端に数歩、後ずさりした。

「あっ！」

　ユキはその子のいる辺りのステージ下に、後ろから羽交い絞めにされた万三郎らしき人物がいるのに気が付いた。

　十七

「ユキさん、すみません！　こっち向いてください」

　撮影者が入れ替わって、再び撮影。ユキはカメラに向き直って愛想笑いした。

――あれは万三郎……？

　再び振り向いて階下に目を凝らす。

　ユキの隣に立っていた骨粗しょう症が、片手を顔の前で立てて、カメラを持つ便秘薬に謝る。

「やだ、私、目をつぶっちゃった……ごめん、もう一回、いい？」

「すみません、ユキさん、もう一回……」

　ユキは、顔だけはまたカメラに向けたが、後ろの動向にじっと耳を澄ましていた。野太い男の声がマイクを通して聞こえてくる。

「レディース・エンド・ジェントルメン。ショーは終わりです」

「はい、チーズ。今度は大丈夫よね。ユキさん、ありがとうございます」

「もう、いいですか」

　にぎやかな医療用女性ワーズたちがようやく立ち去ろうとしているところへ替わって、えっちらおっちら進み出てきたのは、先ほどからユキに話しかける機会を待っていたワーズ、【crutch】（松葉杖）だった。

「すみません、私も、記念に一緒にお写真、よろしいですかあ」

「は……はあ……」

「見てください、これ、最新式なんですよお」

　見かけは男性ながら、妙になよなよとした言葉遣いの【crutch】。どうも女性性がうかがえる。【crutch】は、その身体を支えていた松葉杖の一本を手に取ると、先端のゴム部分がキャップのようになっているのを引っ張って取り外し、中から金属製のスティック状の部品を十センチメートルくらい引き出すと、クリップのような部分で自分のスマホを固定した。

「自撮り棒内蔵型ジュラルミン製松葉杖なんですよお」

「はあ……」

　【crutch】は、どや顔でユキにそう言うと、ユキの隣に立ってスマホつきの松葉杖を斜め上方に構えようとした。

　その時、聞き覚えのある大声がユキの耳まで聞こえてきた。

「祖父谷！　これは何のマネだッ！」

　ユキは目を丸くして、思わず振り返り、手すり越しに階下を見た。

「あ……杏ちゃん？　祖父谷くん？　どういうこと？」

　ステージの前の人だかりが一斉にうごめき始めた。人々の叫び声が聞こえる。ステージの脇から白い煙が地を這うように流れ出ている。その近くにいるのは……。

「万三郎、杏ちゃん！　私を放ったらかして、あんなところに……」

　沸々と怒りが湧いてくる。ユキは拳を握りしめ、下唇をかみしめた。

「あの一福沢さん……こっち向いてもらっていいですかあ……」

「うるさいわね！　ちょっと邪魔、どけてッ！」

「きゃッ」

　ユキは【crutch】の自撮り棒を押しのけると、エスカレーターに向かって走った。

十八

「あの二人ィー、許さないッ！」

ところが、エスカレーターの降り口まで来てみると、一階へ降りる下りエレベーターを逆行して、たくさんの人たちが上ってくるのが見えた。鬼気迫る顔をこちらに向けて、足をフルに動かして上ってくるのだ。

「ええッ？」

ユキが掻き分けて進めるような人数ではなく、とても降りられない。

すると隣の、二階へ上がってくる上りエスカレーターから先に人があふれ出てきた。

「ここまでくれば安心だ」

「おいッ、降りても立ち止まるな！　後ろがつかえてるんだ！」

「前へ進んで！　怪我するから」

ユキの周りにどっと群衆がかたまり始めた。エスカレーターから次々補充される上に、二階の会場内からも、騒ぎに気付いた人々が出てきて混乱の輪が大きくなった。さっきトイレの前でユキを取り囲んだ女性ワーズたちも再びここまで出てきて騒いでいる。

「何があったのですか」

「毒ガス騒ぎだよ、毒ガス！」

「ええッ？」

ユキはついにエスカレーターで降りることを諦め、トイレの方へ駆け戻りかけた。その向こうにエレベーターがあるからだ。

だが、数歩戻りかけたところで、吹き抜けを縁取る左側の手すり越しに、一階で騒ぐ万三郎と杏児が見えた。二人ともステージの上に引き上げられ、依然として後ろから男たちに身体の自由

を奪われているようだ。

「放せ！　放してくれ。毒ガスにやられる！」

　暴れて拘束を振りほどこうとする万三郎と杏児の声が聞こえる。

――毒ガス……拘束……なんだか分からないけど、早く助けなきゃ。

　まだそこに【crutch】（松葉杖）がいた。

「あ、ユキさん、戻って来てくれたのね。じゃあすぐ準備しま……」

「邪魔よ、どいて！」

　【crutch】は再び突き飛ばされた。

　エレベーター扉の前でユキは愕然とした。カチャカチャと下ボタンを押した直後、タイミング良く開いた下行きのエレベーターが満員だったからだ。しかも一番前には、タキシードの新郎とウエディングドレスを来た新婦が立っているのだ。

「あ……」

　それでも一瞬、乗り込もうかと足を進めかけたユキに、新婦の後ろの、気難しそうな白髪のお爺さんが大き目の声で言う。

「まさか、乗るというのかね？」

「え、い、いや、あの、どうぞ……」

　新郎新婦をはじめ、後ろの親族一同からの冷たい視線を、閉まった扉がようやく遮ってくれた。

　二基のエレベーターのうち、もう一基は七階にあって、さらに上層階へと移動中だった。

「ああー、もうッ！」

十九

ユキが頭を抱えたその時、後方階下から複数の男たちが言い争う声が聞こえてきた。

「いやだ！　やめろッ！」

「おい【bad!】、【hope】に手荒なことするな！」

「止めろ！　放せ、クソッ！」

「【hope】！　おとなしく僕らと行こう」

誰が何を言ったのか、にわかに判じ難かったけれど、ユキが見ると、聴衆が逃げて、人気（ひとけ）がなくなったアトリウムのステージの上で、赤いワンピースの女が、半ズボンの子どものうち、一人を後ろ手に取っていて、それを見ているもうひとりの男の子がその傍らに立っていた。女に自由を奪われた方の子どもが暴れ、騒いでいる。その傍らで、万三郎と杏児がそれぞれ男たちに組み伏せられていた。そこへひたひたと迫りくる白い毒ガスの流れ。

「万三郎！　杏ちゃん！」

ユキは三たび走る。

そこにいた【crutch】が振り返る。

「あ……ユキさん」

ユキは、【crutch】の向こうのエスカレーター昇降口にまだ群衆がひしめき合っているのを認めた。

「それ貸して！」

【crutch】から最新式の杖を一本、半ばひったくるように受け取って、手すりから身を乗り出しながら、その松葉杖の先端を吹き抜けの空間に差し出した。

吹き抜けの天井からシャンデリア状に垂れ下がる何十本もの装飾ロープには、フェイクの桜の

花びらが多数あしらわれている。

　ユキが目一杯松葉杖を伸ばしたその先に、二階廊下の天井と三階廊下の床の境い目に固定されているそれらのロープのひとつが弧を描いて一番低く垂れている部分があった。

　うまく松葉杖に絡んだ。松葉杖を手前に引くと、ロープが手元に寄ってくる。ロープを手に、乗り出した身体を戻し、松葉杖を放り出してユキはロープを手繰り寄せる。最後には、頭上に固定された部分を力任せにグイっと引っ張った。つなぎとめられていた所がブチッと外れる。そのロープの端を手に、ユキは一度大きく深呼吸した。

【crutch】が叫ぶ。

「や、やだユキさん、まさか……」

　慌てる【crutch】を無視してユキはグイグイと二、三度引っ張ってロープの強度を確認すると、ロープを両手でつかんで、体重を預け、斜め後ろに勢いよくジャンプした。

「ユキさん、待って！　あのーー」

「待てない！」

　廊下の上一メートルに浮いたユキの身体は、ロープに引かれて吹き抜けの方向へ加速度を伴って戻り始める。ユキの両足は手すりの上に斜めに着地した。そこで勢いを和らげるようにいったん膝を折ると、足先を支点に身体が引き起こされる。ロープを手繰りながら、ほど良いタイミングでユキは曲げた脚をばねのように弾けさせた。さっきより高い位置の後方空間へ、身体が振れる。ところが、振れきったところに立っていた【crutch】が向こうを指さしてユキに叫んだのだ。

「エレベーターが来たのよ！」

「ええーッ？」

　左右の脚を揃えて水平に伸ばしきった瞬間、ユキは【crutch】と一瞬目が合ったが、もう遅かった。目一杯後悔しながら、ユキは吹き抜けに飛び出して行った。

　二十

「こら小僧、暴れるなって」

　手を振りほどこうと暴れる【hope】に引っ張られる形で【bad!】はステージの上を一、二歩前に歩み出た。

「あああああー、どいてぇー！」

　声のする方を振り向いた【bad!】の顔面にユキのパンプスのヒールが揃って直撃した。

「ぐあ！」

　油断していた【bad!】は、【hope】から手も離れ、もんどり打ってステージ隅に吹き飛んだ。多少勢いが緩んだものの、ユキはそのまま反対側に振れていく。

「おおユキッ！」

「ユキ、ナイス！」

　ロープの支点が十階の天井なので、振り子周期が長い。

「ごめんなさい！　私の通り道に急に出てくるものだから……」

　ユキは徐々にスローダウンするロープに両手でつかまったまま後ろを振り返っていた。

「【bad!】さん、大丈夫ですか！」

　万三郎と杏児を押さえつけていた男たちのうち、一人ずつが【bad!】の元に駆け寄る。
万三郎は、向こうへ振りきれて静止しているユキに叫んだ。

「ユキ、その少年を連れて逃げて！」

「えっ？」

「黒い半ズボンの子だ」

「どうして？」

「いいから！　とにかく逃げろ。【hope】、振り子の女性は味方だ。つかまって逃げろ」

　ユキが万三郎に叫び返す。

「万三郎！　毒ガスが……」

　間をおかず万三郎もユキに叫び返した。

「ドライアイスだ。その少年、【hope】を連れ去るのに邪魔な聴衆を追い払うための嘘だ。俺たちは大丈夫。だから少年と逃げろ！」

「わ、分かったわ」

　ユキは加速しながらステージに戻ってきた。その進路上に【hope】が立っている。

　その時、【hope】に向かって動く影があった。【wish】ではない。

「させるかッ！」

　それは祖父谷だった。ユキより先に【hope】を抱きかかえて連れ去るべく、ダッシュしようとしたのだ。

　だがその企ては〇・五秒で砕け散った。

「させるかッ！」

　杏児が手を伸ばして祖父谷の足首をつかんだからだ。

　祖父谷は素晴らしい勢いでステージの床に激突した。

「ああ、祖父谷さん！」

　彼らキジシマ派が擁するＥＴが目の前でダメージを受けたので、万三郎と杏児を押さえていた

男たちがひるんだ。

「今だ！」

　その隙に万三郎も杏児も背後の男たちを振り切り、素早く立ち上がる。そこへユキが最大速度で戻って来た。

「よしッ！」

　素晴らしいコンビネーションで【hope】はユキの腕に抱え込まれる。

「だめえ、重いッ！」

　腕を開きそうになりながら、それでも何とか【hope】を抱えて飛び去って行くユキを目で追う一方、万三郎は、そこにいる【wish】の手を取ろうとする。

「おい、一緒に行くか？」

　だが【wish】は万三郎の手を荒々しく振りほどいて、宙を飛ぶ【hope】の背中に大声で叫んだ。

「【hope】、お前は偽善者だ！　恥を知れッ、この、偽善者ーッ！」

　ユキは片手でロープを、もう片手で【hope】の身体をつかんでいたが、その重さについに力尽き、二人して落下した。そこに上りエスカレーターがあった。

「きゃあ」

　【hope】もろともエスカレーターにドスンと落ちて尻もちついたユキは痛みに顔をしかめる。騒ぎを聞きつけ、二階の会場から出てきて一部始終を見ていた医療用ワーズの救急チームが、たちまちエスカレーターを逆行して、二人のところまで駆け降りて来る。

「脈拍【pulseパルス】！」「はい！」

「瞳孔【pupilピューピル】！」「はい！」

「意識確認【consciousnessコンシャスネス】」

「もしもしユキさん、私の声、聞こえますか？」

「聞こえる！　聞こえるから、ペンライトで目を照らすの、止めて！」

「もしもし【hope】さん、大丈夫？　涙出るくらい痛むの？」

エスカレーターが二人を二階に運ぶ十秒ほどの間に、二人は完全な救急措置を受けた。

二十一

「おい万三郎、行こう！」

杏児に急かされ、万三郎も我に返る。その万三郎の後ろで【bad!】がむくりと起き上がった。サングラスはとうに外してしまっているし、金髪のズラはすでにどこかに飛んで行ったようだ。スポーツ刈りの大柄な男が、まず赤いワンピースの裾を自ら引き裂いて脚を動きやすくしてから、鼻の穴を指先で拭った。拭ってもなお、どろりと血が流れ出るのを確認してから、その鋭い眼光を目の前にいた万三郎に向けた。ある意味、阿修羅よりシュールで恐ろしい光景に、万三郎は総毛立った。

「あ、あ、杏児……早く！　行こ行こ行こ！」

「おのれらァ！」

【bad!】は足元にあったワイヤレス・マイクを拾うと、力任せに万三郎に向かって投げつける。万三郎は瞬間的にかがんでマイクをやり過ごし、そのままステージから飛び降りた。

そのマイクは、ステージに突っ伏して顔をしたたかに打ち、ようやくよろよろと立ち上がった祖父谷の顔面に直撃した。祖父谷は両手で顔を覆い、うーんと唸って再びステージに没した。

万三郎と杏児は、ドライアイスの煙で足元がよく見えない中、聴衆が逃げ出す時に配置が乱れた椅子に躓きながらも、やっとのことで会場を抜け出した。

「おいッ、お前ら、あいつらを捕まえろ！」

【bad!】に言われて我に返った男たちは、ステージを飛び降りて二人の追跡を開始した。【bad!】自身もそれに続く。

「【hope】の、バカヤローッ！」

涙声で叫んだのは、為す術もなくステージに立ち呆ける【wish】だった。

万三郎と杏児は、ユキや【hope】と合流しようと、先を争うようにエスカレーターを二階に駆け上がって行く。そしてそれを四人の男たちが追いかけてくる。

　万三郎が叫ぶ。

「ユキ、走れる？」

　二階でユキが立ち上がった。

「痛くて脚、あまり上がんないけど……一応」

「よし、逃げよう」

　ユキと【hope】を取り囲んでいた無数の野次馬たちは、エスカレーターを駆け上がってくる屈強な男たちの姿を認めると、パニックになって蜘蛛の子を散らすように逃げまどい始めた。

　そんな中、万三郎と杏児が合流、【hope】を含めた四人は、吹き抜け回りの廊下に沿って走る。

　前方には【crutch】（松葉杖）がいた。【crutch】が持つ一対の松葉杖のうちの片方、自慢の最新型松葉杖の先端部分の収納がうまく行かず、床に座り込んで、懸命にメンテナンスしているようだ。さっき、ユキがロープを引っかけて手繰り寄せた時に壊れたのかもしれない。

「あ、ユキさん……」

【crutch】が顔を上げた瞬間、メンテナンス中だった松葉杖は、先頭を走ってきた万三郎に蹴飛ばされて、ブンブン回りながら数メートルも前方にふっ飛んだ。そのあおりで先端部のクリップは完全に吹き飛んだ。

「あ……ごめん！」

　万三郎は顔だけ後ろを振り返って、唖然としている【crutch】に謝った。

　次を走っていた杏児が、その松葉杖を拾い上げた。

――武器になるかも……。

「使い物にならないだろうから、もらっていくね」

【crutch】は、相変わらずそこに座り込んだまま唖然としていた。

　先頭の万三郎は、エレベーター扉の前に到着するや、下ボタンをカチャカチャカチャと何度も押した。

「早く……早く！」

　四人が固まってエレベーターを待っているところに、奴らがやってくる。

　そのとき、こちらを向いてぺたりと座り込んでいた【crutch】が、急に我に返って、傍らの、もう片方の杖を手に急に立ち上がった。そしておそらく、すべてがうまくいかないことへの怒りによる暴れ始めのアクションだったのだろう、その杖の、先端部分の方を両手で持って、虚空に振り上げるや、野球のバットを振るように、ブンと勢いよく振り回したのだ。

「うがあ！」

　これまでのおネエのような声音ではなく、野太い、男のそれだった。最初ユキの前に近寄って来た時のような、松葉杖の助けを借りた、よたよたとした足取りとは対照的に、【crutch】は力強く両足を踏み込んで、フルスイングで松葉杖を振りぬいた。

　結果その杖は、万三郎たちを追って【crutch】の脇を一列に通り抜けようとしていた男たちのうち、先頭の一人の顔面に高速で喰い込んだ。その勢いで男は大きく後ろにのけぞった。そこへ二人目、三人目、四人目が相次いで激突した。大惨事だ。

「あの人、やるわね」

　ユキは【crutch】を振り返って感心することしきりだ。

　二十二

　しかし、先頭の男のダメージはともかく、二人目以降の奴らはすぐに立ち上がってくる。

「はやくはやくはやくはやく……！」

　チン！

　音が鳴ってから扉が開くまでの時間がもどかしい。

　スーッ。ようやく開いた。エレベーターは誰も乗っていなかった。

「乗って！　早く！」

　乗ってすぐ万三郎が「閉」ボタンと一階のボタンを押す。全員乗った。

――早く閉まれ！

　扉が閉まろうとする瞬間、扉の際に、手がガッと掛けられた。

「！」

　ひっかけた指先に力が入って扉の安全センサーが作動するより先に、杏児がその手の指先を反射的に松葉杖の先端で素早く突いて外した。

　ガッ！

「うがあッ！」

　手の主は手を引いて扉の向こうで絶叫し、扉は閉まった。万三郎たちにとってみれば、閉まってから動き始めるまでの二秒間が、無限の長さに感じられた。外で奴らが下ボタンを押せば、扉はいま一度開くと分かっていたからだ。

　だが扉は開くことなく、エレベーターのかごは、一階へとゆっくり動き始めた。【hope】を除く三人は大きくため息をつく。

チン。一階に着いた。扉が開く。

そこに仁王立ちしていたのは、凄まじい形相の【bad!】だった。

「おらァ！」

正面にいたのはユキ。ユキの隣りでは【hope】が、恐怖で絶叫する準備をするため、顔を歪めかけていた。しかし、「うわあああ！」と【hope】が実際に声に出して叫ぶ前に、
【bad!】の方が「う……」と低く呻いた。股間を押さえて前屈みになる【bad!】。ユキの金蹴りが見事に決まった瞬間だった。

「くうう……」

「みんな、出ろ！」

そう言うと万三郎はエレベーターの最上階である十階ボタン、続いて閉ボタンを押し、自らも身をよじって【bad!】の横から外へ出た。【bad!】の後ろ側に回った杏児がタイミングよく【bad!】の尻を松葉杖で突いたので、【bad!】はかごの中に倒れ込み、エレベーターの扉が閉まった。二秒後、扉上の表示ランプが二階、三階……と変わっていく。万三郎は横のユキを見た。

「ユキ、足、大丈夫だね。あんなに上がるなら」

「こ、怖かった……」

今頃になってユキは震えている。

杏児が笑いもせず、しみじみと言う。

「【bad!】の奴、自分で裾を破ったのが裏目に出たな。破らなけりゃ布が邪魔して急所直撃を免れただろうに……」

すると【hope】が動揺した声を上げた。

「隣のエレベーター、二階で止まった。あいつら、下りてくる！」

万三郎が指を差しながら叫んだ。

「正面玄関に走れ！」

二十三

「【each】くん万歳！」
「【other】ちゃん、お幸せにね！」

正面玄関横車寄せには、黒塗りのアメリカ製オープンカーに乗った新郎新婦が、有人知人家族親族に囲まれ、今に１１も出発しようとしていた。

「じゃ、行ってきます！」

新郎の【each】が、イグニッションキーを回した。そのとき、拍手をする取り巻きの後方から悲鳴とざわめきが起こった。すぐに三人のＥＴと【hope】が現れる。

「本日はおめでとうございます」

そう言いながら四人は車の扉を開けて、後部座席に乗り込んだ。取り巻きは何が起こっているのか理解できず、ただひそひそ話をするのみだ。

「新郎さん、行きましょう。出発しましょう」

万三郎は後ろから【each】の肩をポンと叩いた。助手席では新婦【other】が振り返って目を丸くしている。【each】が訝しんで訊く。

「いや、あんたら誰？」

「上司代表です」

「はあ？」

その時、再び後方で悲鳴とざわめきが起こった。

杏児が声を苛立たせる。

「新郎！　行くんだ、早く！」

「だって……」

「行けッ！　アクセル踏め！」

「早く！」

　万三郎と杏児のあまりの権幕に、【each】はアクセルを踏む。

　カラン……カラン、カラカラ……。

　ユキはぎょっとして後ろを振り向いた。車には何本もの紐の先に空き缶がたくさん結び付けられていたのだ。

「い……いつの時代の演出……？」

　そのユキの視線の先に、人混みをかき分けて、四人の男たちの姿が現れた。彼らは追いかけてくる素振りを見せている。

「新郎ッ、急いで！　もっと早く！」

「クソッ、何なんだ」

　そうぼやきながらも新郎【each】は、アクセルをふかした。カン、カラカラ、カラコロ……。奴らは追いかけては来ているものの、うまい具合に空き缶が邪魔になって近寄れずにいる。そしてついに追うのを諦めたのだった。

　小さくなっていく男たちを認めて、万三郎たちはようやく胸をなでおろした。安堵した万三郎は【hope】に笑いかけた。

「やれやれ。君のおかげで大変な事件に巻き込まれたよ……ん？」

　【hope】を見た万三郎も杏児もユキも、言葉を失う。

　【hope】は、泣いていた。

「僕は……僕は、偽善者なんだろうか……」

◆◆◆

（１）スティーブ・ジョブズ（一九五五ー二〇ーー）米アップル社の設立、経営に携わり、同社を世界的な企業に成長させた立役者として名高い。

（２）本章において登場する医学用語（ワーズ）の、カタカナ表記によるおおよその読み、意味と、追記事項を以下に挙げておきます。

・【hospitalホスピタル】病院
・【hay feverヘイ・フィーヴァー】花粉症
・【pollen diseaseポーレン・ディジーズ】花粉症。
・【pollenosisポーレノウシス】花粉症。綴りは、pollinosisとも。
・【somatokatarrhソマトカター】花粉症。somatoは「身体の。katarhhは、catarrhと同じで、「鼻・喉の粘膜の炎症」
・【autophagy】オート・ファジー】（細胞の）自食作用
・【obesityオビーシティー】肥満症
・【mammographyママグラフィー】マンモグラフィー（乳房エックス線撮影）
・【Ebola diseaseイボーラ・ディジーズ】エボラ出血熱
・【Zika feverズィカ・フィーヴァー】ジカ熱
・【iPS Cellsアイピーエス・セルズ】 iPS細胞　（Induced Pluripotent Stem Cellsインデュースト・プルリーポテント・ステム・セルズ（人工多能性幹細胞））
・【Minister of Health, Labour and Welfareミニスター・オヴ・ヘルス・レイバー・アンド・ウェルフェア】厚生労働大臣。Labourの綴りはLaborとも。長すぎるので、医療行政関係の文脈では、Mister of Healthなどと省略しても良い。
・【metabolic syndromeメタボリック・シンドローム】代謝症候群
・【hypertensionハイパーテンション】高血圧症
・【hyperlipidemiaハイパーリピディミア】高脂血症
・【type 2 diabetes mellitusタイプ・ツー・ダイアビーティス・メリートゥス】二型糖尿病
・【Trichophyton fungusトリコファイトン・ファンガス】白癬菌症
・【parotitisパロタイティス】耳下腺炎
・【the mumpsザ・マンプス】おたふく風邪　耳下腺炎の通称。
・【osteoarthritisオステオ・アースライティス】変形性関節症
・【juvenile rheumatoid arthritisジュヴナイル・リューマトイド・アースライティス】若年性関節リウマチです」

・【hepatitisヘパタイティス A・B・C】 A型・B型・C型肝炎
・【subacute bacterial endocarditisスバキュート・バクテリアル・エンドウカーダイティス】亜急性細菌性心内膜炎
・【thrombotic thrombocytopenic purpuraスロンボティック・スロンボサイトペニック・パーピュラ】血栓性血小板減少性紫斑病
・【nauseaノージア】吐き気
・【urinalysisユリナリシス】尿検査
・【endoscopeエンダゥスコウプ】内視鏡
・【dripドリップ】点滴
・【mastitisマスタイティス】乳腺炎
・【hand overハンド・オウヴァ】引き継ぎ
・【autonomic ataxiaオートノミック・アタクシア】自律神経失調症
・【laxativeラクサティヴ】便秘薬
・【osteoporosisオステオポロウシス】骨粗しょう症
・【crutchクラッチ】松葉杖
・【pulseパルス】脈拍
・【pupilピューピル】瞳孔
・【consciousnessコンシャスネス】意識・意識確認

第十三章　選別（1）

一

新渡戸部長がこれほど真剣な表情を浮かべるのは珍しかった。真剣というより、深刻といった方がふさわしいくらいだ。それは場の空気をおのずから引き締まったものに変える。みどり組だけではなく、スピアリアーズの面々もいつになく険しい表情で新渡戸の説明に聞き入っている。その中にあって、万三郎の集中力はふと理由なく途切れた。

第三研修室。思えばここを学び舎として、みどり組の三人のＥＴが腰を据えて英語を学び始めて、かれこれ一年になる。

一一もう、一年になるのか……。

アメリカの若きエリートたちが、日常生活に差し支えない程度の日本語をマスターするのに平均三千時間ほどかかるという雉島の話を、万三郎は思い出した。九時間×三百三十日で、ほぼそれと同等の時間になる。万三郎たちが業務として英語習得にかけてきた時間だ。もちろん、求められていたのは日常生活に差し支えないレベルではなく、もっと高度な英語の使い手の水準であり、その要請に応えるべく万三郎たちは、一日の業務が終わってからも教本を開いたし、問題集も解いた。休みの日には英語のことを考えないどころか、英語しか考えない日を多く過ごした。それらの時間を勘案すれば、日本語を学んだ米国のエリートより、もちろん努力してきたといえる。

もともと英語が苦手で嫌いだった万三郎にとって、初めの頃、業務としての学習が本当に苦痛だった。だが、さすがＫＣＪ人事部能力開発課が誇る優秀な講師陣だ。倉間ほうぶん先生をはじめとして、甲斐先生、片井先生、戸井先生が、卓抜なるティーチング・スキルをもって丁寧に指導してくれたおかげで、万三郎の頭の中の、蒙昧なる厚い雲の隙間から、光が一条、二条と差し込んできて、次第に空が明るく晴れ渡っていく爽快感を感じることができた。未知を既知に変えていく喜び。それは、黒から白へ、ドミノが放射状に倒れていくように、加速度を伴って広がった。

万三郎の変化は、この研修室だけでもたらされたわけではない。みどり組の三人はもちろん、スピアリアーズの三人も、バー・ティートータラーによく通った。マスター・ジロー白州田や、店員マサヨからも、この一年、英語に関する多くのことを学んできた。

みどり組の三人はまた多くの知己も得た。人間ではない、ワーズたちだ。彼らの多くには親兄弟や子供がおり、人間の親兄弟の顔が似通っているように、彼らもお互いによく似ている。万三

郎たち三人のＥＴは、努めて彼らと胸襟を開いていろいろな話をした。できるだけ彼らの話を聴き、彼らを理解しようとしてきた。さらに、多くの会合やサークルのイベントに顔を出すようにもしてきた。それに伴ってワーズの知り合いは今に至るまで加速度的に増えてきている。

　三人はまた、オン・ザ・ジョブ・トレーニングも数多くこなしてきた。すなわち、ローチング・ステーションのプラットホームに立って、実際にクラフトマンの業務を行うのである。初めて編成作業を行ったときは、万三郎と杏児は二人とも大失敗した。まさに、これから先が思いやられると二人とも落ち込んだものだ。一年経った今、あのときとは雲泥の差である。ユキは元々そこそこのパフォーマンスを見せていたが、そのユキを含め、みどり組のスキルは相当向上したと自負しているし、実際、新渡戸部長からもたびたび褒められた。

二

祖父谷たち、スピアリアーズについては、座学は、みどり組とは別の第二研修室で行われることが多かったし、フィールドワークも別だったので、その上達度合いは万三郎たちには分からなかったが、みどり組に激しくライバル意識を燃やして、「劣等的存在であるお前らには絶対に負けない」と豪語してきたのだから、それなりに上達しているのは間違いない。

とにかく、皆必死だった。そして、英語が分かれば分かるほど、万三郎には仕事である英語学習が楽しくなってきていた。

そう長く生きてきたわけではないが、我ながら人生は分からないものだと万三郎はしみじみと思う。

――あれだけ嫌いだった英語が、今ややりがいを覚えるまでに……。

目はしっかり新渡戸を見てはいるのだが、意識はいつしか飛んで、一人感慨を覚えていた。

「……違うということだ。分かったかな、中浜」

「は？」

新渡戸から名前を呼ばれて万三郎ははっと我に返った。新渡戸は一瞬、唖然としたが、気を取り直して繰り返す。

「今までのテストとは重要度がまったく違うと言ったんだ」

「な、何がでしょう？」

「……」

新渡戸の顔にたちまち怒りの表情が浮かんだ。同じ列の二つ隣に座っていた祖父谷がすかさず万三郎にかみつく。

「中浜……お前は救いようのないバカだな。こんな大事な話を集中して聞いていないなんて……」

　万三郎は慌てる。

「い……いや……あの……そのう……」

「しっかりしなさいよ、万三郎」

　後ろから背中をツンと突いたのはユキだ。

　新渡戸が低い声で言った。

「中浜、立て」

「は、はい」

　これはよほど怒っていると万三郎は感じた。

「私が言っていることを聞いていなかったのか」

「も、申し訳ありません」

　新渡戸はひどく怒っているようにも見え、また今にも泣き出しそうにも見えた。万三郎が知っているこれまでの温厚な新渡戸とは明らかに違って、激情をむき出しにしているように見える。新渡戸は万三郎の至近まで歩み寄ってくると、急に両手で万三郎の両肩をガッとつかんだ。必然的に万三郎はびくりと反応して目を見張る。新渡戸は押し殺した声で一言一言、噛んで含めるように言った。

「中浜、これは、真剣、勝負、だ」

「は、はい。すみませんでした」

　話を聞いていなかったので、何が真剣勝負なのか分からなかったが、もちろん聞いていない自分が悪いのだから、万三郎は重ねて謝った。

　新渡戸は厳しい表情を崩さず教卓に戻ると、何かに区切りをつけるかのごとく宣言した。

「諸君の即時適応能力を見るため、修了試験は、これからすぐ始める」

　万三郎を除く、一同に驚愕の声が広がる。

「ええーッ！　今からですか」

「そうだ。いいか、この修了試験はチーム対抗戦だ。社長によって勝ち負けがはっきり判定される。負けるな。とにかく負けるな」

　祖父谷が挙手して、京子と奈留美にちらりと目をやりながら訊いた。その目が幾分血走っているように万三郎には見える。

「部長、もし負けたらどうなるのですか」

　今日の新渡戸はもう、こわばった表情を変えることがない。

「とにかく、負けるな。負けてはいかん」

　答えの後半は、祖父谷だけではなく、まだ起立したままの万三郎にも均等に目をやりながら発せられた。

　ただ、新渡戸の答えは不自然だと万三郎は思った。祖父谷の質問に具体的に答えないまでも、勝つことよりも負けないことをいやに強調している。

「そうは言っても、どちらかのチームは負けるのですよね」

　杏児がそう言ったが、新渡戸は頷きもせず、じっと杏児を睨んだままだった。その新渡戸を、祖父谷が腕組みをして、血走った眼で睨みつけていた。

第十三章　選別（3）

　三

「万三郎、大丈夫か？　なんだってあんな大事な話のときに上の空だったんだ？」

　十五分後にチンステ百十七、百十八番ホームに再集合と言って新渡戸が部屋から出て行った直後に、杏児が歩み寄って来て、半ばからかい、半ば心配して言う。するとその杏児の後ろから祖父谷が言葉をかぶせる。

「教えてやる。それはな三浦、こいつがアホだからだ、アホ」

「ちょっと、そんな言い方ないでしょ！」

　ユキが万三郎の後ろからすかさず祖父谷に食ってかかる。そのユキに向かって祖父谷は真剣に訴えた。

「ユキちゃん、これが最後の進言だ。わがチーム・スピアリアーズにぜひ来な……」

「やめてんか！　こんな女誘い込むのは」

　祖父谷の言葉を言いきらせなかったのは、京子だ。一年経って、結局この女はユキと心を通わせ合うことがなかった。ユキもムッとした。

「誘いこまれても、あなたがいるチームなんか、こっちから願い下げだわ」

　祖父谷が鷹揚に言う。

「よさないか二人とも。どうか僕を巡って争うのは、やめてくれ」

「はあ？」

「はあ？」

「はあー？」

　三つ目は杏児の「はあー？」だった。

「祖父谷、お前と初めて出会って一年になるけれど、僕はいまだにお前のギャグが理解できないよ」

　呆れたように言ってのける杏児に、祖父谷はしれっと反論する。

「それは三浦、お前が劣等だからだ。無理もない。もう少し高等になれば分かる日も来るだろう。精進しろ」

「とにかく！」

　ユキが、目だけは京子を見たまま言う。

「私たちは負けないわ」

　祖父谷が残念そうな表情を浮かべた。

「残念だ。実に残念だよ、ユキちゃん。だが僕は、情に流されて手加減などしない。いや、ちょっとするかな。だってユキちゃんだもの……」

　ユキはたちまち耳たぶまで真っ赤にして、うつむいて震え始めた。

「ふふ、かわいいね」

　祖父谷はユキの頭をポンポンと軽く二回叩くと、ウインクを残して悠然と部屋を出て行った。京子は「へん！」とユキにあざけるような視線を向けて通り過ぎ、奈留美は「おモテになってよろしいですわねえ」とその後に続いて出ていく。

　万三郎は杏児と顔を見合わせた。杏児がつぶやく。

「あいつ、一年もユキに絡んで、何一つ学習していないな」

　万三郎はしかし、首を傾げて言った。

「杏児、あいつ、ちょっとおかしくないか」

　杏児は頷く。

「ああ、おかしいね。負けず嫌いのユキを上から目線で……。わざわざ違う意味でユキのハートに火をつけて行きやがった」

　杏児の言葉通り、ユキはわなわな震えながらつぶやいた。

「あいつ……ぶっ殺す！」

　万三郎はもう一度首を傾げる。

「いや、このところの祖父谷の言動、ちょっとおかしい気がするんだ」
「何言ってんだ万三郎、おかしいのはお前だよ、部長の大事な話の時にぼんやりしたりして。本当に大丈夫か」

第十三章　選別（4）

四

ＫＣＪ・トーキョー・ローンチング・ステーションとその周辺空域には、今日もひっきりなしにシークウェンス・トレインが飛び交っている。見慣れた車両編成のシートレがホームに入線しては、待機しているワーズたちが次々に乗り込み、クラフトマンがチェッカー・フラッグを進行方向に向けてバサリと掲げると同時に、急発進して飛び立っていくのだった。

ＥＴたちが集まったホームだけが、まだ車両もワーズたちもおらず、落ち着きを残していた。

万三郎は近隣のホームから今飛び立ったばかりのシートレに何気なく目を向け、「あ！」と驚きの声を上げた。杏児がつられてそちらに目をやる。

「おお、川井摘美鈴さんのオーダーじゃないか」

"Bob, you’re not a very good teacher, are you?"（１）

第二文型否定文に、付加疑問車両を連結した、「ダニヒフ三百四十系」の編成だ。付加疑問部分が輝いて見える。万三郎も杏児も、そしてユキもこのクライアントのオーダーを何度か処理してきた経験があった。英語を教える立場であるはずのボブ・タイラーが、クライアント川井摘美鈴を困らせるような小難しい内容のプリントをわざと作ってきて、解けないのをからかっているというのに、当の川井摘美鈴は、解けないのは自分の頭が悪いのだと卑屈になってボブに謝る、その謝罪の英文を、三人とも何度か担当したことがある。

「あなたの教え方が悪いって、どうして言い返さないんだろうね」

たまにティートータラーで彼女の話題になれば、三人はそう言ってもどかしがったものだ。

だが今飛び立って行ったシートレははからずも、ボブの教え方が悪いという内容のものだ。

「へえ、摘美鈴ちゃん、言うじゃない。ついにキレたのね」

　ユキも感心してシートレを見上げた。

「次の彼女のオーダー、何て来るのか楽しみだね」

　万三郎がそう言ってにこやかに杏児とユキを振り返ったその直後に、その向こうから渋みの効いたバリトンの声が発せられた。

「のるかそるかの真剣勝負を前にしてその笑顔とは、なかなか見上げた度胸だな、中浜くん」

　杏児とユキが驚いて振り返ったすぐ後ろに、古都田社長が部下たちを引き連れて立っていた。従えているのは、新渡戸部長、江戸ワード・スミス駅長、楠信太セクション・マネージャー、百十七番線、百十八番線専属クラフトマンの島田、斗南の両名、そして今神秘書室長だった。誰一人として笑っていない。

　古都田は例の、まばたきをしない眼力をもって万三郎をまっすぐに見据えた。

「しかし、君ごときの実力で、今ここで笑っているのは、はなはだ場違いのような気がしているのだが、中浜くん、私が間違っているかね」

　いつかの毒々しい毒エネルギーがまっすぐな視線を伝って万三郎に注ぎ込まれ始める。

――なんてこったい、ホーリー……

「ただいまより、修了試験を開始する！」

五

「第一問！　江戸ワード駅長の一存で選ぶ、リアルタイムの課題だ。エド、よろしく」

新渡戸のアナウンスに頷くと、江戸ワードは神妙な面持ちで手にしたタブレット画面に目を落とした。ふと画面を指さして、横にいる楠に、二、三度何かを小声で訊く。楠は画面をのぞき込みながら、「はい……はいそうですね」と同意している。

「よっしゃ、これや。信太、モードをこっちのプラットホームに切り替えてや」

「はい、直ちに」

数秒ののち、画面操作を終えた楠が江戸ワードに頷いた。百十七番線と百十八番線のホーム向けに並んで据え付けられている大型モニター画面に同じ映像が映る。江戸ワードが口を開く。

「日本人と中国人の修羅場や。クライアントは｜今井将也《いまい まさや》四十三歳、大手電機メーカー『マキノ』営業部長。妻美千代と、高校生の一人娘｜真里菜《まりな》の三人家族やけど、美千代の父親が同居していて、合わせて四人世帯。美千代の父親である｜河野源五郎《かわの げんごろう》が『マキノ』の重役で、その源五郎のコネで将也氏はここまで順調に昇進してきたんや。将也氏は河野家の婿養子ではないねんけど、源五郎が全額出して新築した二世帯住宅に住んどるから、いわゆる『マスオさん状態』に近い。つまり、公私ともに将也氏は源五郎氏に頭が上がらん。ちなみに将也氏は仕事柄、海外出張も多いから、英語をよう使う。｜ＫＣＪ《ウチ》の上得意や」

楠が江戸ワードの説明を引き継いだ。

「対する相手の中国人女性も、うちのクライアントだ。｜楊華音《ヤン・ホアイン》さん二十七歳。『マキノ』管理職御用達のクラブ『夢世界』のホステス。楊さんは将也に結婚を迫るため、将也の自宅を探し当てて、家の前で待っていた。高校から帰ってきた真里菜が楊さんを発見。将也氏に『お父さんのトモダチという女の人が来てるよ』とその場で電話した。間もなく将也氏は血相を変えて帰宅してきた。彼には身に覚えがあったようだ。楊さんが家の前でごね始めたので、ご近所を憚って、将也氏は取りあえず楊さんを客間に招き入れた。不審な顔の真里菜が、ともかくも来客にお茶を出している」

続いて江戸ワードが、クライアントたちが英語で話し合おうとする理由を説明する。

「将也氏は中国語はアカン。一方の楊さんはまだ日本語が不得手や。そのくせ、日本に来てから英語を学び始めてんねん。それがきっかけでうちのクライアントになったんや。将也氏は、もちろん娘の真里菜に内容を知られたない。ほんで、真里菜が英語が苦手なのを幸い、ここは英語で話し合いをしようやと楊さんに申し出た。楊さんは『ワカタヨ！』と了解した、と、こういう訳や」

　江戸ワードは手にしたタブレットを、ほいッと楠に手渡す。受け取った楠はそのタブレットを操作して何か情報を表示させながら、状況をまとめる。

「楊さんは、将也氏が妻美千代さんと離婚して自分と結婚するよう求めている。そして当の美千代さんは、まもなくテニススクールから帰ってくる。美千代さんと楊さんが鉢合わせしたら、修羅場になるだろう。時間がない。早く話にカタを付けなければならない。今、そうした状況だ」

　楠が江戸ワードを見上げた。江戸ワードが頷いて大声で指示を出す。

「チーム・スピアリアーズの諸君！」

「はいッ」

「クライアント、楊華音さんの幸せを守れ」

「はっ、はい！」

「次に、みどり組の諸君！」

「はいッ！」

「クライアント、今井将也氏と家族の幸せを守りきれ」

「……は、はあ……」

「チーム・スピアリアーズは百十七番線を使うんや。みどり組は百十八番線を使うんや。それぞれ島田、斗南がサポートするよって、あんじょう気張りいや、以上、始めッ！」

六

社長ら監督者が集うプラットホームの根元から駆け出す。幅の広いプラットホームの右と左に別れ、チーム・スピアリアーズの三人と、みどり組の三人はそれぞれ担当のクラフトマンに率いられて、ホーム中ほどのモニターディスプレイの前までやってきた。

なるほど、百十七番線用のモニターも、百十八番線用のそれも、ホーム根元にあったのと同じ現場を映し出している。十畳ほどの客間の机を挟んで、中年男性とそれより少し若い女性が座っている。江戸ワードと楠が説明した通りの状況になっているようだ。

男はＫＣＪのクライアント、今井将也のようだ。となると、相手は楊華音に間違いない。娘真里菜が気を利かせて、神妙な面持ちで楊にお茶を出している。

『コニチワ。将也ニアイニキタヨ。私、トモダチ』こんなカタコトの日本語で自己紹介する父の友達など怪しすぎる。もちろんこの後、真里菜は隣の部屋でじっと会話に聞き耳を立てるはずだと万三郎は思った。

「斗南さん、お久しぶりです。お世話をかけますがよろしくお願いします」

駆け出しの頃世話になったことのある万三郎が斗南に頭を下げると、上司である三人のＥＴを前にした斗南は、タブレット端末を手にしたまま明らかに当惑した。

「今日は試験です。僕はあなた方の指示に従ってワーズに召集をかける実務を行うだけです。一切のアドバイスは禁じられています。それより……」

斗南はすぐ隣でスピアリアーズ側についている同僚島田をチラッと見てから言葉を継いだ。

「早く始めないと、美千代さんが帰って来ますよ。会話に先攻、後攻はないから、もう始めた方が良い」

三人が斗南の説明に頷いたそのとき、百十八番線のスピーカーからピンポーンと音がして、スピーカーの隣に取り付けられているパトライトが緑色に点灯した。将也のオーダーがみどり組に割り当てられてきたのだ。

同じホームの反対側ではスピアリアーズが島田の説明を聞いていたが、今の音と光に反応して

、祖父谷がキッと万三郎を睨みつけてきた。先程以上に目を血走らせ、激しいむき出しの闘志がうかがえる。

　万三郎は祖父谷の射るような視線を受け流しつつ、杏児やユキと一緒にモニター画面に目を向けた。

　モニターに映っている応接間では、真里菜がお茶を出し終え、障子を閉めて回り廊下を立ち去ったところだった。話し合い開始だ。

　三人は、万三郎が手にしているタブレットに視線を落とす。斗南が持っているタブレット同様、オーダー文が日本語で示されていた。

「楊、僕は君と結婚できない。見てのとおり、家族がいるんだ」

「急いで！」

　斗南の声にハッとして、杏児が万三郎とユキの顔を交互に見る。

“Yang, I can’t marry with you. As you see, I have a family.”

　そうつぶやいた杏児に即座にユキが反応する。

「杏ちゃん、【marry】は他動詞課よ」

「え？ どういうこと？」

　ユキは顔をしかめる。

「もうー。ほうぶん先生の授業で以前習ったじゃないの。『前置詞が要るんじゃないかと日本人が勘違いしがちだけど、彼らには前置詞は不要なのだ』の回で、ゲストで来ていた他動詞課のワーズたちの中に【marry】がいたじゃない」

「そ…そうだったかな……？」

　記憶を呼び戻せない様子の杏児に万三郎が助け舟を出す。

「【enter】（〜に入る）とか、【discuss】（〜について議論する）とか、教室に来て怒ってたじ

ゃないか。【oppose】（〜に反対する）が言ってただろ？　『俺たちの後ろに前置詞を置こうとする奴らに断固、反対する！　みんないい加減にしてくれ』と」

　さすがに杏児も思い当たったようだった。

「あ、俺たちと記念写真撮るとき、プラカード持ってた、あのワーズたちか！　『“oppose to”にするな！　”enter into”にするな！　”discuss about”にするな！』　そして……」

「『“marry with”にするな！』」

　杏児は頷いた。

「分かった。”I can’t marry you.”でいいんだな」

七

杏児は「僕がこちらから直接招集しますね」と斗南に断っておいて、万三郎からタブレットを引き受けて英文を入力した。「招集」ボタンをクリックしたところで、今度は万三郎が、ユキと杏児に心配そうに訊く。

「今の、後半は？　『見てのとおり』って、”as you see”でいいの？　”I have a family,”は？　”a”でいいの？　”the”じゃないの？　いや、ここはそれこそ、”my own family”の方がいいんじゃないのか」

杏児は黙りこむ。ユキも渋い表情をして口をつぐんだままだ。

そのとき、パトライトが黄色に変わって回転し始めた。神経を逆なでするようなアラーム音が鳴り始める。コンピューター合成の無機的な女声がスピーカーから流れ始める。

”You are running out of time! Make haste! ”（時間がありません、急いで！）

ユキがイラついてスピーカーを見上げた。

「もう！　この癇に障る演出は何！　わざと焦らせてるの？」

斗南が焦りにさらに拍車をかける。

「何やってんです、急いで！」

どんなにもどかしく思っても口を出すことがかなわぬ斗南にとって、この試験でみど組の助手をすることは、とんだとばっちりのようだ。みどり組が負けることで自分の人事評価が下がるのではと思うと、彼もイライラを隠せないのだろう。

しかし杏児もまた、万三郎とともに考え込んだ。

「いや、今井家の家族は特定されているのだから、“the family”なんじゃないか？　“I have the family.”」

「そうかあ？ ”my family”の方がしっくりこないか？」と万三郎は食い下がる。

　招集されたワーズたちが到着し、わらわらとホームを走ってくる。シートレは、タブレットを杏児に手渡す前の万三郎によって、「ダサド二百三十系」を二編成呼んであったのがすでに入線してきていた。ワーズたちは車両の前に立って、ＥＴの指示を待っている。

「どれに乗ったらいいんだ？　ＥＴは何をしている？」

「早く、万三郎、杏ちゃん！　もう、最初ので、いいじゃない」

　万三郎がユキを振り返る。

「いや、ユキ、間違えると減点の対象に……」

「シートレの発進が遅くなって、クライアントが相手にやり込められたら、そっちの方が大きい減点になるわよ」

　ところが杏児もタブレットを手にしたまま首をひねっている。

「うーん、ここは大きく分けて三つの案かな。”a”か、”the”か、”my”か……。俺は”the”だと思う」

「俺は”my”だと思う。ユキは？」

　ユキのイライラは頂点に達しつつあった。顔色が変わっている。

　ユキが怒りを爆発させようとしたそのとき、パトライトが赤に変わり、アラーム音はさらにけたたましく音量を増して、ユキの声をさえぎった。

　ワーズたちをなだめていた斗南は血相を変えて三人のもとに駆け寄ってくる。

「なんで一問目からそんなに手間取ってるんですか！」

　万三郎も声を荒げる。

「慎重になるのも当然だろう？　試験なんだ。間違えちゃ、いけないんだ」

　斗南は万三郎の襟首につかみかかりながら、アラームの音量をしのぐ声量で叫んだ。

「間違えていいんだよ、この馬鹿野郎！」

八

勢いで後ろによろめきかけた万三郎が驚いて目を見開く。

「あんたみたいな考えが、日本人の英語の上達を邪魔してきてるんだよ、あんたは今、リアルタイムで、英語でコミュニケーションを取っているんだ。無限に時間があるわけじゃないんだぞ。いい加減、目を覚ませ！」

斗南はそこまで一気に言い切ると、万三郎を睨んだまま、肩で荒く息をした。

杏児が斗南の肩に手を置く。

「おい……」

その手を斗南は激しく払いのけた。そして万三郎から手を放すと、今度は杏児の襟をグイッとつかんだ。

「クビにしたけりゃ、すればいい！　あんたたちのように現場を分かっていない上司の下で今後働くなんてまっぴらごめんだ！　いいか！」

杏児から手を放し、その手をホームの端に並んで待っているワーズたちに差し向けて、斗南は万三郎と杏児を交互に睨んだ。その目は大きく見開かれ、血走っている。ともすれば涙が浮いてきそうにも見えた。

「俺たちクラフトマンがあいつらの配置を間違えてシートレを飛ばすと、ことだまエネルギーが低下するんだ。あいつら、ひどく疲れる。間違いがあまりにひどいと、シートレが墜落することだってあり得る。知っての通り死にこそしないけれど、あいつらだって怪我すりゃあ、やっぱり痛いんだ。だからあいつら、相当なリスクを背負って仕事してる。だけど！」

斗南はそう言いながら視線をユキに移した。ユキの目を見てかすかに頷く。それを合図だと理解したユキは、ワーズたちに向けて親指を立てた。ユキのサインを見届けたワーズたちは一斉にシートレに乗り込む。【family】の前の車両には、最初に召喚された通り、【a】が乗り込んだ。

その様子を目で追いながら斗南は続ける。

「だけど、このチンステでやり取りしているすべての取引は、リアルタイムで進行しているんだ。分かる？　時間がもっと大事なんだ。コミュニケーションってのはキャッチボールだろ？　リズムがあるんだよ。たしかにあんたたちはこのホームで最初、大間違いをしでかしてシートレを墜落させた。だけど、あの時怪我をした連中、本当は怒ってなかったんだ。あの後、あいつら言ってたよ。『俺たちのＥＴを育てようってんだ。多少の痛みは我慢しないとな』って」

　ユキの合図で百十八番線、前後二編成のシートレは飛び立って行った。三人の若者のエネルギー量を反映してか、シートレは素晴らしい勢いで彼方のスリットから向こう側へ消えていった。パトライトもアラーム音も消えて静かになった。

「あんたたちは、あれから一生懸命勉強してきたんだろ？　文法や表現やワーズたちのことを。そしたらさ、もう今のレベルになったら、正確性は二番目でいい。間違えてもいい。間違えても、そんなにめちゃくちゃな間違いにはならない。ワーズたちは、怪我したって疲労が襲ってきたって、あんたたちについていく覚悟ができてるんだ。だから……」
　アラーム音が消えた今、斗南はもう、声を張り上げる必要がない。思いのたけを届けたい一心で、絞り出すような嘆願の声色になっている。

「だから、頼むよ。自分たちの力を信じて、間違いを恐れないで、コミュニケーションのリズムを大事にしてほしい。俺たちのクライアントである日本人は、リアルタイムの英語オーラル・コミュニケーション（会話による意思疎通）が苦手なんだ。彼らの英会話に対する意識を、みどり組のあんたたちが変えてくれよ」

　万三郎も杏児も、斗南の泣きそうな視線を、しばらくの間、まっすぐ受け止めた。

「分かった、斗南さん。今からは間違いを恐れず、スピーディーにシートレを飛ばします」

　そう言った万三郎に続いて、杏児も斗南に頭を下げた。

　ユキが二人に聞こえないほどの小声で斗南にささやく。

「斗南さん、ありがとう」

　斗南はユキににっこりと頬い笑み返すと、ユキよりさらに小さな声で返した。

「一年前のあの墜落事故以来、ワーズたち、労災保険に加入させてもらえたんで、怪我しても補償がつくんです」

　九

　スピアリアーズ側のホームから発進したシートレが英文となって、楊の口から発せられた。みどり組の三人はモニターを通してそれを見ていた。

“Masaya, I’m expecting.”

　将也はきょとんとしている。

　斗南が慌てる。

「まずい、クライアントが理解していない。この分だとクライアントからオーダーが来ない。お三方、クライアントの代わりに適切な返答を返さないと……どう返します？」

　杏児が、万三郎とユキにも聞こえるような声で斗南に答えた。

「『将也、私、あなたに期待してるわ』って、離婚を期待してるってことだろ？　そんなの、ダメに決まってる。今井家の幸せが崩壊する。ごめん、できないと謝るしかない……斗南さん、【sorry】を呼んでもらえますか？」

「ほ、本当にいいんで？」

　戸惑う斗南に杏児が返す。

「いいも何も、早くしないとコミュニケーションが成り立たない」

　さっき自分自身が言った言葉で諭されたら、返す言葉がない。斗南はしぶしぶ【sorry】を召喚する。

【sorry】はすぐ到着した。百十八番線に三浦杏児が立っている。【sorry】は、見たことのある光景だと気付いて、途端に警戒の色を浮かべた。

「今日は川井摘美玲嬢のオーダーで珍しく僕が呼ばれなかったから、何か良からぬことが起こる

んじゃないかと嫌な予感がしてたんだ。こういうことだったのか。百十八番線にＥＴ三浦さんなんて、一年前の悪夢を思い出すよ」

　【sorry】はそう言いながら、表面に【！】の大きなステッカーが貼ってあるキャリーケースを抱えて、二両編成のシートレの、後ろの座席にそれを置き、自身は先頭車両に乗り込んだ。

「もう、墜落だけは嫌だからね。頼むよ」

「ああ。ほかのワーズが連結しないから大丈夫だよ。すぐ行って！」

　【sorry】の言葉を聞いて、アドバイスが禁止されている斗南が、何か意を決したように顔を上げた。そして杏児に対して口を開こうとしたその時、ユキが杏児に言った。

「杏ちゃん、やっぱり違う気がするの」

　杏児は、【sorry】に行けと言った直後に横槍が入って不機嫌になる。
「なんだよ、ユキ。今、斗南さんから、『間違いを恐れるな』って言われたばかりじゃないか」

　その杏児の反論に万三郎も同調する。

「そうだよユキ、間違えてもいいんだ。間違えても、余程のことじゃなければ、そんなにめちゃくちゃな間違いにはならない」

「いや、これは、その余程のこと……」

　斗南が、もごもごとそうつぶやきかけたところに、ユキが答えた。

「でもたしか、”expecting”って、『妊娠している』って意味があったと思うの」

　万三郎と杏児が揃って驚愕の声を上げる。

「ええーっ？」

「だから、”Sorry.”って言っちゃうと、妊娠させちゃったことに対して謝っている、つまり、自分の子だと認めたことになって、あとあと大変なことに……」

「ユキ、それは確かなのか」

　せきこんで訊く万三郎にユキが頷く。

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル！」

　そうつぶやいた万三郎の隣りで、杏児はカシャンという音に振り向いた。見ると、【sorry】の乗ったシートレが発進、急加速を始めた音だった。

「うわあ、待って、待って！」

　杏児の必死の制止むなしく、身軽な二両編成のシートレは、あっという間に充分加速してホームを飛び立っていった。慌てる杏児の姿を横目で見た【sorry】の絶望的な声を残して。

「今度はなんだってんだよおぉぉー！」

　杏児は斗南を振り返って声を絞り出す。

「斗南さん……【sorry】は、キャ……キャンセル。行かせるわけには……」

　感情を押し殺した声で斗南が復唱する。

「【sorry】、キャンセル、します」

　タブレットに出ている ”Are you sure to abort?”（本当に、キャンセルしますか？）の画面の「ＯＫ」をクリックして、斗南は目を閉じた。みどり組の三人が見上げた上空、かなり遠くで、【sorry】のシートレはバラバラになって、花火の燃えカスのようにゆっくり落下していった。

　万三郎とユキは思わず目を背ける。

「ごめん、【sorry】……」

　杏児は小さくつぶやきながら、【sorry】の壮絶な結末を見届けた。

十

その時、例の警告音を伴って、パトライトが黄色になって回り始めた。今の【sorry】はキャンセルされたので、編成に時間がかかり過ぎていると判断されたのだ。

斗南が言う。

「痛いだろうけど【sorry】は死にはしません。それより、早く対応を！」

杏児の代わりに万三郎が斗南に指示を出した。

「斗南さん、とりあえず、つなぎで、“Holy mackerel!”って出して」

斗南が目を丸くした。

「おお！　意外な編成。了解しました！」

斗南が対応している間に、思考停止している将也に代わって、万三郎とユキが次の編成を相談して決める。

「『楊、君はクラブ「夢飛行」のホステスとしてたくさんの客を相手にしていた。君のお腹の子の父親が僕だという保証はどこにある？』ってな感じで、どうかな？」

「うん、いいと思う。で、『クラブ』って、”club”でいいのかな」

「いや、ユキ。たぶん、”hostess bar”だ。クラブは”night club”で、これも、『踊る方のクラブ』のイメージしかない。欧米には日本のように、女性店員が常駐して男性客をもてなすお店がないらしい。だから”bar”だけではイメージが伝わりにくい」

ユキは万三郎をじろりと見た。

「万三郎、やけに詳しいわね。私たちには内緒で遊び回っているの」

万三郎は、しょうがないなあという表情を浮かべ、首を振って否定する。

「マスター・ジロー白須田に単語を教えてもらったんだよ。一人でティートータラーに行っている時に。俺自身はそんなところに興味ないよ」

「ふん、どうなんだか」

　なぜか機嫌が悪くなったユキに首を傾げながら、万三郎は斗南に英訳を口頭で伝える。斗南はそれを即座にタブレットに打ち込む。

“You wait on a number of customers at a hostess bar, Yang. How do you know I’m the father of the baby?”（２）

「うん、いいんじゃないか」

　今井家の座敷の映像に重なるように万三郎の英訳がモニター画面に映し出されている。ようやく我に返った杏児が頷いた。

　ユキも同調したのを見届けるや、斗南が招集ボタンを押す。ちょうどホームでは、先ほど呼び出された【holy】と【mackerel】が、シートレに乗り込むところだった。
【mackerel】は特に喜んでいる。車両から乗り出すようにして、万三郎たちに叫んだ。

「久しぶりの仕事をくれておおきに。しかも、売れっ子の相方だけやなくて、『聖サバ』二人での仕事て、涙出るわ……ほんま、おおきにやでえ」

――へえ、『聖サバ』ってユニット、組んでるのか。

　大阪の売れていない漫才師みたいなセリフを叫んでこちらに手を振っている【mackerel】を万三郎はいじらしく思った。今回はたまたま、つなぎで思いついて招聘しただけだが、今後の編成作業では、機会があればもっと ”holy mackerel”を使ってやろう、いや、地球滅亡から免れたら「ホーリー・マッカラル」をクライアントの間で流行らせてやろう、「聖サバ」を育ててやろうとひそかに思った。

「ゴー！」

斗南がフラッグを振って、”Holy mackerel!!”は飛び立っていった。

十一

次のシートレ、「赤ん坊の父親が僕だという保証はどこにある？」は少々長かったが、時間内にスムーズに編成され、飛び立っていった。

将也氏は、自分の口をついて出て行ったその英文の意味を、出て行ったあとになって初めて理解して、驚きのあまり日本語でつぶやいていた。

「べ……ベイビーだって……？」

祖父谷率いるスピアリアーズの連中も、スムーズにオーダーに応じている。いかんせん、同じホームの右側と左側を使っているので、声が大きいと聞き取れてしまう。

万三郎たちが編成したセリフを将也氏が言った直後、楊さんの顔色が変わった。明らかに怒りの色が浮かんでいる。

「ゴー！」と向こうのクラフトマン島田がシートレを送り出すと、まもなくその編成通り、モニターに映る楊さんから英文が発せられた。怒りで声が震えている。

“Do you mean I’m a damn slut, Masa?”

「将也、あなた、私が誰とでも寝る女だと？」

モニターを見ながらその場で日本語訳する万三郎に、ユキが訊く。

「【slut】って、そんな意味なの？」

「ああ」

万三郎の返事にユキはまた突っかかる。

「どうして【slut】なんて言葉、知ってるのよ！　やっぱり、夜な夜な遊んでるのね」

万三郎が迷惑そうに手を振る。

「違うって！　ティートータラーで聞いたことあるんだよ」

　杏児が口を挟む。

「ユキ、いやに万三郎に突っかかるなあ。万三郎が【slut】を知っていてよかったじゃないか。分からなかったらトンチンカンな答えを返してしまって、減点対象になるところだ」

　ユキはぷいっと横を向いた。万三郎はそれ以上ユキには構わず、杏児に頷き返した。

「祖父谷のやつ、わざと難しい単語や言い回しを送り込んで来ているようだ。こちらのミスを誘っているんだ」

「ああ、そのようだな。で、どうする？」

　すると脇を向いていたユキが振り返り、二人をキッとにらみつけて言った。

「絶対、あの男には負けないで。あの鼻っ面をへし折るのよ」

　一瞬、万三郎と杏児は顔を見合わせて言葉を失う。

「おお怖い。ユキを怒らせるもんじゃないな」

　万三郎が半ばおどけて言ったその時、杏児がモニターを見て「あっ」と叫んだ。

　こちらが言い返す前に、さらに追加の英文が、楊さんの口から発せられたのだ。スピアリアーズは明らかにみどり組を攻めてきているのだ。

“I’ll tell your wife that you've agreed to split up with her just for tying the knot with me instead.

「奥さんと話をするわ。将也はあなたと別れて、私と結婚することに賛成したと」

　ユキがそう訳した。楊さん自身も将也氏を攻めたてている。将也氏はタジタジの様子だ。

「また、将也氏は言葉に詰まっているのか？」

　だが、万三郎の心配は杞憂で、ほどなくして将也氏からオーダーが来た。

「そんな同意、した覚えない。頼む、今日のところは帰ってくれ」

　さっそく杏児が英文を作り始める。

“I don’t remember I’ve agreed like that…”（３）

　その時、万三郎が杏児を制した。

「なあ杏児、やり返してやろうぜ」

「ん？」

「奴ら、攻めて来てるだろう？　だって普通、離婚は【divorce】、結婚は【marry】を使うだろう？」

「ああ、まあ、普通はそうだな」

「俺たちが正しく訳せるか、祖父谷たちがわざと試してるんだよ。だから、こっちもやり返してやろうぜ、ユキ」

　ユキが顔を上げる。

「ユキ、君の番だ。口語の慣用句とか目いっぱい使って、祖父谷をやり込めてやれよ」

　万三郎の言葉に、ユキがかすかに頷く。

「……分かった。じゃあ……」

　ユキがたちまち作文した。

“Hey, give me a break! Say what? I get spliced with you? Well, I will when pigs fly. Look, let’s call it a day now and stop screwing around with me. Then would you please make yourself scarce?”（４）

「これでどう？」

　万三郎と杏児は手を叩いて「パーフェクト！」とユキを称賛したが、当のユキは文を見つめてわずかに顔を曇らせた。

「 “stop screwing around with me”って、ちょっとどぎつ過ぎかなあ？（５）」

　杏児が即座に首を振る。

「いや、いい。これで行こう。ユキ、祖父谷の鼻をあかしたいって言ったじゃないか。それに新渡戸部長は絶対に負けるなと言った。試験だからさ、ここは勝ちに行こうよ」

十二

スピアリアーズの連中は、ユキが送った反撃の文を理解したのかしなかったのか、やがて楊さんの口を通じて長い返事を返してきた。

“Surreptitiously, I recorded your pillow talk affectionately whispering beside me that you would enter into matrimony with me before too long. Right at this very moment, I have firmly determined to file the audio as evidence to the domestic relations court.”（６）

モニターには楊さんがしゃべった言葉が字幕になって自動表示される。画面の三分の二を占めたそれを見て万三郎が呆れたようにつぶやいた。

「なんだこりゃ？」

「祖父谷くん、今度はまた極端に堅い言い回しをしてきたわね。不自然に難しい単語使って……」

あきれ顔の万三郎とユキの間から顔を出して、モニターを覗いた杏児が言う。

「ふん、このくらいでひるんでたまるか。難しい単語は僕に任せてくれ。片井文吾郎先生から特訓を受けた」

ユキがちらりと杏児を振り返って訊く。

「【Surreptitiously】って何？」

「こっそりと、隠れて」

「【affectionately】は？」

「愛情たっぷりに」

「【matrimony】？」

「”enter into matrimony with～”で、『～と結婚する』だ」

「すごい杏ちゃん、完璧じゃない！　祖父谷君が悔しがるわね、きっと」

　ユキが感心していると万三郎が意訳した。

「そうすると、楊さんは、将也氏がピロートークで『そのうち結婚しようね』って言っていたのをこっそり録音していて、それを証拠として裁判所に提出すると言っているのか。すごいな、裁判沙汰にしようってのか」

　杏児が眉をしかめる。

「なんだか、うちのクライアント、ある意味、自業自得じゃないか」

「そうね、脇が甘いわね」

　万三郎がクスリと笑う。

「脇が甘いってユキ、偉そうに……」

　ユキはキッと万三郎を睨みつけた。

「結婚する気もないくせに、その場しのぎで調子良いこと言って。女をナメていると、こういうしっぺ返しがくるのよ。万三郎、覚えておきなさい」

　さっきからいわれのない非難をユキから受けている万三郎は、肩をすくめ、口をゆがめて言う。

「勉強になります」

　杏児は一瞬苦笑したが、すぐに真顔に戻りモニターを凝視した。

「裁判と聞いて将也氏の顔色が変わった。すぐ言い返してやらないと負けてしまう……」

幸い将也氏からの日本語オーダーはすぐに来た。

「楊、どういうつもりだ？　まさか約束の不履行で訴えるというのか。それなら僕も言わせてもらう。君の就労ビザが来月切れるって、ママが言ってた。日本に永住したい君が、血眼になって日本人の結婚相手を探している。今井さん、油断していると言い寄られるわよと、ママから忠告された」

三人は驚いた。

「ええーっ？」

「そうなんだ！」

「なるほど……ね」

三人は顔を見合わせ、そういうことなら論理的には十分対抗できると頷き合った。
こういう、攻められている場面では、難しい表現でスピアリアーズを困らせるより、シンプルで良いからスピードで勝負しようと決めた。

十三

“What? Are you gonna sue me? Well, then, let me say this. Look, I was warned by your manager that I should be careful for being possibly wooed by you because...because with your visa expiring at the end of next month, you were so desperate to get a Japanese spouse so as to be qualified as a permanent resident”（７）

何編成かのシートレがチンステのスリットから出ていく。そのワーズたちが、将也氏の口から反撃に出た。「夢飛行」のママが将也氏に忠告していたと聞いて、楊さんは先ほど以上に顔色が変わる。そして彼女は何か言い返そうとして激しく咳き込んだ。

「落ち着いて。お茶、どうぞ」

そこは日本語で将也氏が楊さんに言う。楊さんは咳き込みながら頷いて、真里菜が入れてくれていたお茶を飲んだ。将也氏は落ち着いてそれを見ている。形勢はがぜん将也氏、ひいてはみどり組に有利になっているように見えた。

「今までそんな予兆まったくなかったのに、急に咳き込んだ。きっとスピアリアーズが、時間稼ぎのために楊さんのフラッフィーから脳に信号を出して痰を絡ませたんだわ」

ユキも万三郎も杏児も、モニターを食い入るように見ている。

「連中、慌ててるんだ」

“What are you talking about? That’s impossible! How dare you say so?”（８）

楊さんの口をついて出た言葉を聞いて、万三郎は寂しく笑った。

「取り乱してる」

　万三郎のその言葉通り、楊さんは机をバンと叩いて前のめりになって将也氏をなじり始めた。すでに論理的な話し合いではなくなりかけている。

「ソンナ、ショーコ、ナイヨ！」

　おぼつかない日本語で楊さんは反抗し、将也氏も日本語で対応した。

「ママは証人に立ってくれるよ。それにＤＮＡ検査をしてもいい。けど、妊娠も嘘なんだろう？」

「ウソ、ナイ！　アナタ、ウソツキ！　ケッコン、ジム、アルヨ！」

　楊さんは膝を立てて将也氏に迫る。

「ジム？」

「ギムでしょ、義務」

　三人は斗南を見やった。この場はおそらく将也氏の勝ちだろう。だがもうこれは、試験というより茶番になりつつある。

　将也氏が困った顔をしたその時だった。

　玄関の引き戸のカギは開いていたようだ。カラカラカラっと軽快にドアが滑る音がした。

　楊さんも、将也氏も、驚愕の顔を浮かべたまま、その場に凍り付いた。

「お、奥さんがテニススクールから帰って来たか！」

　みどり組の三人は息を飲む。もちろん、モニターで見る将也の顔は完全に引きつっている。だが、あまりのことに動きが取れないでいる。そしてそれは楊さんも同じだった。

　「ただいま」という声は聞こえなかった。だが明らかに誰かが靴を脱いで、スリッパに履き替えて、今、廊下を渡ってくる……。わずかな床擦り音が応接間の障子の外で止まった。

十四

スーッと障子が開いて顔を出したのは、将也の妻ではなく、義父の河野源五郎だった。

「あっ、お義父さん！」

将也の次に声を発したのは、楊さんではなく源五郎だった。

「うっ！　どうしてここが！」

源五郎はちらりと将也に目をやって、すぐに楊さんを食い入るように見つめた。楊さんが声を上げる。

「アイヤー！　｜不敢相信《プーガンシャンシン》信じられない！」

三人三様に驚きの声を上げ、そしてそのままの体勢で三人とも数秒の間、凍り付いたように動かなかった。

「お、お義父さん……お早いお帰りで」

源五郎は楊さんから目を離さない。

「き、今日は私は、取締役会があっただけだ。それより将也くん、いったいどういうことだね。どうして君が、真っ昼間からこの女性とここにいるんだ」

「こ、これには訳があるんです……」

「当たり前だ。訳もなくこの女性を私の家に上げているはずがなかろう」

源五郎の声は次第に怒気を帯びつつあったが、今、視線は、将也ではなく楊さんでもなく、あらぬ方向に向けている。明らかに挙動がおかしかった。

「パパさん、今、『私の家』言ったか？　この家、パパの家、言った？」

楊さんが発した問いに、源五郎はあらぬ方向を見たまま答える。

「だ、誰かな、あなたは……」

　楊さんはようやく、感情に支配された状態から幾分理性を取り戻してきたようだ。状況を整理して把握しようとする。

「ナニイッテル、源ちゃんパパさん。アナタ、先週もお店、来たヨ。私に諭吉、イッパイくれて、麻布のマンションで待っ……」

「うおあーっほん！」

　源五郎の咳払いは異様に大きかった。

「げ、源ちゃんパパさん……？」

　将也は楊さんと源五郎を代わる代わる見比べる。楊さんは源五郎に向き直って、しっかりした口調で言った。

「ワカタヨ。将也ダメなら、パパさんでイイヨ。ワタシ、アナタの子、ハランダヨ。セキニン、トッテヨ」

　万三郎がモニターを見たまま、言う。

「斗南さん、もう一回 “Holy mackerel!”だ」

　モニター画面いっぱいに源五郎の顔がズームされていったところで、画面がフッと真っ黒になった。

　続いて江戸ワード駅長の声がスピーカーを通じて両ホームに聞こえた。

「あかんわ、こりゃ。英語のオーダーどころやなくなってしもた。第一問はここで終了や」

十五

「第二問や。モニターを見てみ。山手線の車内の扉の前に立ってスマホをさわっている女性が映っているやろう？　彼女の名は、川井摘美玲さん、うちのクライアントや。新宿での英会話のカフェレッスンを終えて、彼氏の待つ渋谷に向かってるねん。この様子を日本語で表した文をそこに表示させるで。これや」

なるほど、川井摘美玲嬢の映っているモニターの下帯に日本文がゆっくり現れた。

「彼から、私がどこにいるのかテキストメッセージで訊いてきたので、私はもうすぐ新宿駅に着くと彼に答えた」

江戸ワードが説明を続ける。

「さて、このチンステでは随時、シートレの編成を担当する技術者であるクラフトマンを育成しとる。目下、練習用プラットホームで研修中の新人クラフトマン二人に、この日本文に基づいて、今、シートレを編成させたんや。そして、それらを発進させずに、それぞれ百十七番線と百十八番線に回送した。スピアリアーズ、みどり組のそれぞれのＥＴの責任において、それらのシートレの編成をチェックするんや。間違いがあれば直す、なければそのままゴーや。やけど、シートレに間違いがあったら上空でドカンや。ゴーサインを出したＥＴは責任問われるで。よろしゅう、たのんま」

江戸ワード駅長のアナウンスが終わると同時に、両線に、よく似たシートレがカタタン、カタタンと入線してきた。結構長い編成だ。アナウンス通り、すでに各車両にワーズたちが乗っている。

“He texted me asking where I was, so I answered to him I was arriving at Shinjuku station shortly.”

シートレが停止すると、乗車していたすべてのワーズたちが一斉にビシッとみどり組の三人の方に顔だけを向けた。三人はビクリとする。

　斗南が言う。

「時間も限られています。急いでチェックしてください」

「は、はい」

　万三郎以下三人が連れ立って、先頭車両が止まっているホーム先端近くに歩み寄った。

「む！」

　三人と同様に、クラフトマン島田に引率されて、祖父谷、京子、奈留美の三人も、自分たちのシートレをチェックするため、先端に歩いてきた。

　万三郎は祖父谷と目が合った。

「よう、劣った野郎。早くミスれ」

「ふん。さっきの将也氏と楊さんの勝負は、祖父谷、お前らの負けだ」

「くくく。弱い犬ほどよく吠える」

　祖父谷は笑いを残して、悠然と自分のシートレのチェックに入った。

　杏児は奈留美と目が合う。

「あら、お劣り遊ばしておられる庶民のお方、ごきげんよう」

　杏児は苦笑するしかなかった。

　ユキは天敵、京子と目が合う。いや、まつ毛が長すぎてよく分からないが、合っていると思う。

「ふん、バカ女」

　いきなり言い放つ京子。

「な……な……」

　怒りに震えるユキを、斗南が制する。

「試験中です。控えてください」

「ユキ、行こう」

　ユキを促した万三郎は、杏児も交え、声を潜めて言った。

「あいつら、やっぱりさっきの勝負、あのまま行けば自分たちの負けだったと思っているようだ。今、祖父谷の表情はどこか引きつっていた。ほかの二人はただ祖父谷に従っているようだ」

「それが本当なら、あいつら、ダメージを受けているということか」

「そうなの？　それじゃあいい気味だわ。この調子でやっちゃいましょう」
　ユキは溜飲が下がったようだ。

十六

ホームの先端からシートレを見ると、一両目、二両目、三両目……と、ずらりと並んだワーズたちが自分たちを見返している。

「ど、ども……」

最前列の【he】など、この一年のシートレ編成のオン・ザ・ジョブ・トレーニングで何百回と招集してきた知己だ。

口をきくのを禁止されているのか、彼はにこりともせず、目だけで返礼している。
斗南に促されて、三人は先頭から、最後尾へ向けて、コツコツと歩きながらシートレの編成を確認していった。

【texted】……【me】……【asking】……【where】……。

三人にとってほとんど顔見知りの連中だ。なのに、やはりどのワーズもニコリともせず、黙ってこちらの動きを目で追っている。

――シートレに間違いがあったら上空でドカンや。

そんなに簡単に、江戸ワード駅長が言うようにはならないと思うけれど、連結車両が多いだけに途中でバラバラになるかもしれない、と万三郎は思った。

その時、ホームの向かい側で祖父谷がクラフトマン島田に大声で指示しているのが聞こえた。

「これだ！　この【to】が要らない！」

万三郎はハッとして自分のシートレをよく見る。【answered】の後に【to】がいた。祖父谷の声に驚いて、おびえたような目でじっとこっちを見ている。

――【to】が要らない？

万三郎が心の中で祖父谷の言葉を繰り返した時、杏児が二人に驚いた風に言った。

「おっ、おい、ちょっと、向こうのシートレとうちのを見比べてみろよ」

　杏児が指さす百十七番線のシートレと、百十八番線の自分たちのシートレを、前から順番に見比べてみた。

「ああっ！」

　驚いた。二人の見習いクラフトマンたちが編成したシートレは、お互いにかなり似ていた。

　百十七番線のスピアリアーズ担当のシートレは、

“He texted me asking where I was, so I replied to him I was reaching at Shinjuku station soon.”

　対する、百十八番線みどり組担当のシートレは、

“He texted me asking where I was, so I answered to him I was arriving at Shinjuku station shortly.”

「たった三か所しか違ってないわ……」

　ユキの言う通りだ。すると祖父谷が要らないと言った【to】は、【replied】の後の【to】だ。

「するとうちでも、【answer】の後に【to】は要らないのかな」

　万三郎は【to】の前で立ち止まった。ユキと杏児も従う。【to】は三人の凝視に耐え得ず、びくびくしながら目を伏せた。口をきくのを禁じられているのだろう。

　万三郎はユキと杏児を交互に見ながらもう一度確認する。

「祖父谷は、”replied to him”ではなく、”replied him”だと主張し、【to】の乗った車両を外すよう

指示した。じゃあ、こっちの【answer】は？　”answer to him”ではなく、”answer him”なのか」

　二人とも押し黙った。

　斗南がせかす。「時間がありません」

　タイミングを計っていたかのように、黄色いパトライトが回り、警告音が鳴り始めた。

「”answer to it“というのを見たことがあるような……」

「でも杏ちゃん、それは、モノの場合でしょう？　人の場合は？」

「”answer to me”いや、人については、”answer me”だったような気がする……万三郎どう思う？」

「”answer 人 to 物事”なんじゃない？」

「いや、やっぱり、”answer to 人 about 物事”だろう」

「でも、前置詞がなくて、”answer 人　物事”かもしれないわよ」

「二人とも、どっちなんだよ！」

　三人はお互いに顔を見合わせて黙り込む。

「ゴー！」

　隣りでは島田がフラッグを振り、スピアリアーズ監修のシートレが急発進して行った。

「こっちも！　早く！」

　斗南の叫びを合図に、パトライトが赤に変わった。

「どうする！」

　万三郎は【to】の顔を見る。【to】は一瞬顔を上げる。万三郎と【to】の視線が一瞬交わり合った。すると【to】は慌てて目を伏せた。

「万三郎、どっち？」

「どっちにするんだ、万三郎？」

「だめだ、もう時間がない！　出しますよ！」

　けたたましいアラーム音の中、斗南が絶叫している。万三郎も叫んだ。

「【to】降りろ！　うちも【to】は要らない！」

　それを聞くや、一番近くにいたユキが、【to】の手を引っ張って、半ば強引にホームに降ろし、よろめく【to】を抱きとめた。

「発進！」

　斗南がチェッカー・フラッグを大きく振りかぶった。【to】の乗っていないみどり組のシートレは車体をきしませて急発進していった。

十七

スピアリアーズのシートレを追うように、みどり組のシートレが連なっていく。

それを見送る祖父谷が、みどり組の誰にともなく言う。

「真似しやがって……まあ、劣ったお前たちにふさわしい行動だけどな」

その時、前を飛んでいた方のシートレが、スローモーションでパアーンと弾け飛んだ。爆発というより、途中、二か所でちぎれたと言った方がふさわしい。

クラフトマン島田が首から下げていた双眼鏡を借り受けて、シートレの行く末を追っていた奈留美が素っ頓狂な声を上げた。

「まあ、どうしましょう！」

「奈留美、貸してくれ！」

肉眼でも異変を見て取った祖父谷が、奈留美から双眼鏡を奪い取るように取り上げ、起こっていることを確認する。

「あああ……」

祖父谷は双眼鏡から目を離すと、その手をぶらりと落として、膝から崩れ落ちた。

「祖父谷、貸して！」

万三郎は祖父谷が力なく持っていた双眼鏡を取り上げて覗いてみた。

スピアリアーズのシートレは空中分解して、各部品が放物線を描くように落下し始めている。その少し上方を、みどり組のシートレが力強く通過していった。

プラットホームに江戸ワード駅長のアナウンスが流れる。

「スピアリアーズの編成ミスは二か所や。【to】は必要、【at】は不要やった。対するみどり組

のシートレには編成ミスはあらへん。よって、第二問は、みどり組の勝ちや」

「……」

　勝ちと宣言されても、万三郎もユキも杏児も、その場にじっと立ち尽くしていた。三人とも同じことを考えていた。

――スピアリアーズの【at】が不要って、”reach at Shibuya”の【at】か。こっちは、”arrive at Shibuya”だったけど、【at】の要不要についてまで考えてもみなかった。というか、そこまで考える時間がなかったんだ。うちのシートレがミスなしなのは、ラッキーだっただけだ……。

　モニターには、正解が表示されている。スピアリアーズ担当のシートレの正解は、やはり【to】は必要で、【at】は不要だったのだ。

“He texted me asking where I was, so I replied to him I was reaching Shinjuku station soon.”

みどり組担当のシートレの正解は、飛んで行った通りだった。

“He texted me asking where I was, so I answered him I was arriving at Shinjuku station shortly.”

　とても喜べるような勝利ではなかった。

　もしみどり組に割り当てられたシートレが、【arriving】ではなく、【reach】だったなら、やはりスピアリアーズと同じミスをしたかもしれない。万三郎がふと傍らを見ると、祖父谷が膝を折って顔を手のひらで覆っていた。そこへ京子と奈留美が寄ってきて、祖父谷をいたわるように両側から屈んでいる。

「祖父谷……」

　万三郎がつぶやくように声を掛けるが、祖父谷は顔を上げない。

「祖父……」

　もう一度声を掛けようとした途端、京子がキッと万三郎をにらんだ。

「ちょっと！　そっとしといたってんか。可哀想やろ」

　万三郎は当惑した。これではまるで俺がクラスの女子を泣かしてしまったみたいになっているではないか！

十八

ホームの根元にいて、試験を見守っているであろう古都田社長のアナウンスが流れてきた。

「この場合の【answer】と【reach】は他動詞、【reply】と【arrive】は自動詞だ。自動詞は他動詞と違って直後に目的語を置けない。したがって前置詞が必要となる。このような、ワーズたちの性格の違いを学ぶことがＥＴの本分であるのに、新人クラフトマンたちの拙い編成作業のミスを見抜けなかった以上、新人と並ぶ水準と言わざるを得ない。祖父谷くん、君は私の求める水準に達していない可能性が高まった」

相変わらず、ずけずけとものを言ってのける社長だ。万三郎は自分が言われているかのように恥ずかしかった。杏児も、先ほど【marry】が他動詞であることを忘れていたので、まぎれもなく自分も同じ非難に値すると自覚していて、顔が引きつっていた。

立ち尽くす万三郎の後方から、憔悴したように杏児がゆっくりと歩み寄って来る。そのさらに後ろから、万三郎がシートレから降ろさせた【to】と、祖父谷の指示で降ろされたものの、罪悪感を覚えている【to】を、それぞれ斗南と島田に託し終えて、ユキが歩いて来る。

万三郎の傍らで起こっていることを認識した杏児が思わずユキを振り返る。だがユキは、杏児が心配したように、「ふん、いい気味だわ」とは言わなかった。むしろ、泣きそうなくらい深刻な面持ちでスピアリアーズの三人を見ている。

万三郎の横に杏児とユキが歩き至る。万三郎がもう一度、祖父谷に声をかけた。

「双眼鏡、返すよ」

一度振り返った京子が、祖父谷の耳元で復唱する。

「双眼鏡、返すって」

祖父谷がうずくまったまま、万三郎のいる左後方に腕を伸ばす。寄り添うように京子が腕を伸ばし、万三郎から双眼鏡を受け取ると、祖父谷に握らせてやった。

双眼鏡を握った手が震えている。震えが大きくなったと思った時、祖父谷がキッと振り向いて言った。

「まだだ。俺は、お前たちより劣ってなどいない。優れた俺たちが、劣等なお前たちに負けるはずはないんだ」

　万三郎をにらみつける目は真っ赤に腫れている。万三郎はもちろん、杏児もユキも言うべき言葉を失った。

――こんなに、全身全霊で、真剣勝負しているのか……。

　古都田社長のアナウンスが響いた。

「勝者と敗者が何を戯れている？　真剣勝負に感傷など入る余地はない。いくぞ、第三問だ」

十九

両番線ホームの根元から先に向かって五メートルほどのところに、根元側に向いた方が正面になるようにしつらえられた、二つの解答台。それぞれの台上には、手のひらより少し大きな円盤型のボタンがあった。

年に一度放映される人気クイズ番組の最終ステージさながらのこの派手な大道具は、今この時以外、このＫＣＪでどんな時に使えるというのだろうか。

「第三問、チーム対抗、早押しクイズや。これが最終ステージやで」

江戸ワード駅長はマイクを通してそう宣言した。駅長の後ろ、ホームの根元には、何百ものワーズ社員たちがひしめくようにしてこの最終戦を見物している。場は異様な雰囲気に包まれていた。みどり組、スピアリアーズ、古都田、新渡戸、江戸ワード、楠、今神、そしてそれらの人々の後ろで見物しているワーズたち……誰一人として笑っていなかった。

「十ポイント先取で優勝や。ほな始めるで。位置について」

万三郎たちの左の解答台に、スピアリアーズが立った。祖父谷はじっと前をにらんでいて、こちらを気にする様子はない。もう後がないということで、凄まじい集中力を発揮しているようだった。

スピアリアーズに倣って万三郎は、ボタンの上に置いている杏児とユキの手の上に自分の手を重ねた。

ユキは元気がない。ほんの一時間ほど前に、祖父谷に対して「ぶっ殺す！」と息巻いていたのが嘘のように、ただ顔をしかめて伏し目がちになっている。そう、まるで万三郎を起立させた今朝の新渡戸部長の表情のようだ。

「ユキ、大丈夫？」

万三郎は小声で訊いてみたが、ユキはじっと前を見たまま答えない。仕方なく万三郎も、杏児とユキにならって出題者の楠に集中した。

「第三問の、第一問。『住所はどこですか？』正しいのはどっち？

A： ”What’s your address?”、
B： ”Where’s your address?”」

　ピンポーン！　即座にスピアリアーズがボタンを押す。

「はい、スピアリアーズ」

「A」

「正解、一ポイント先取！」

　♪ あなた、優秀！

　ヘリウムを嗅いだ直後の、ロボットのような声が、正解の効果音らしい。祖父谷の自尊心をくすぐるようなサウンドだ。

「ピロロッ」

　電子音とともに、彼らの解答台の前面に埋め込まれたモニターに「一」が表示されたようだ。ワーズたちが一斉に拍手する。

　拍手が静まると楠が原稿を読む。

「第二問。『お手洗い、お借りしてよろしいでしょうか』正しいのはどっち？

A： ”May I borrow the toilet?”、
B： “May I use the bathroom?”」

　ピンポーン！

「くそッ！」

　万三郎たちは押し負けた。

「はい、スピアリアーズ！」

「Ｂ」

「正解、二ポイント！」

　♪ あなた、優秀！

「そうだ、俺は優秀だ！」

　予期せぬ声に会場はざわついた。叫んだのは祖父谷だ。少し背の低い京子の頭越しにそっと祖父谷を見ると、肩で息をしてじっと前をにらんでいる。

――テンパってる……。

　しかし今は、そういうテンションでいることをむしろ求められているのかもしれないと万三郎は思い直す。

「第三問。次の三つの日本語に対応する三つの英単語をすべて答えよ。『こめかみ』、『えくぼ』、『そばかす』」

　ピンポーン！

「よしっ、押し勝った」

「はい、みどり組！」

「【temple】、【dimple】、【wrinkle】」

　杏児の解答の後、一瞬の間があって、それから音が流れた。

ブッブー！

即座に例のロボットの声で不正解の効果音が流れる。

♪ なんてこったい、ホーリー・マッカラル！

万三郎は顔をしかめる。

――なんてこったい！　俺の常とう句が不正解の効果音なのか。

「アホやあ、【wrinkle】はお肌のシワやん！」

京子が勝ち誇った顔で言いながらボタンを押す。

「はい、スピアリアーズ」

「【temple】、【dimple】、【freckle】」

「正解、三ポイント！」

♪ あなた、優秀！

「うおおおおー！」

こぶしを振り上げ、異様なテンションで祖父谷が吠える。

「ざまあ見さらせ、河童の屁！」

二十

問題は次々と読み上げられていく。ポイントはスピアリアーズがみどり組より数ポイント先行していた。

それでもみどり組が正解すると祖父谷は激しくののしった。

「けっ、小賢しい猿どもが！」

「ミドリムシ並みの癖に生意気な！」

「進化論の例外どもめ！」

こいつ本当に試験に集中しているのかと疑うほどの、バラエティーに富んだ、しかし、いくらなんでも聞くに堪えないほどの悪口雑言を、彼はみどり組に浴びせ続けた。

ユキの顔色が悪い。今にも泣きそうな顔をしているだけではなく、その手は万三郎と杏児の手のひらの間で震えていた。

万三郎がユキの耳元でなだめる。

「ユキ、気にするな。我慢だ。問題に集中しよう」

「ままま、負けちゃ、ダメなの。絶対に……」

「そうだなユキ、あいつらの鼻をあかしてやろうな」

「ちちち違う。そそそ祖父谷くん、おか、おかしく、なってる」

万三郎ははっとして、あらためて祖父谷を見る。だが今は上体が前かがみになっていて、京子の頭に隠れたその表情はよく見えなかった。

「第十一問。次の四つの英文のうち、意味が通るのはどれ？

A： It rained as like as chalk and cheese.
B： It rained the birds and the bees.
C： It rained monkeys and donkeys.
D： It rained cats and dogs.（９）」

　直ちに祖父谷が手を上げて叫んだ。

「ピンポーン！　はーい、はい、はいっ！」

　楠が少し強い口調で注意する。

「ボタンを押して」

「あ！」

　我に返ったように祖父谷は、ボタンを覆っている奈留美と京子の手をバンバン叩いた。

　ピンポ、ピンポ、ピンポ、ピン、ピン、ピ……。

「痛いっ、まあ痛いこと！」

「ヨッシー、痛いねんて！」

　二人がボタンから手を引いて、最後に祖父谷自身の手のひらがボタンを勢いよく叩いた。

　ピンポーン！

「はい、スピアリアーズ！」

「月とすっぽん！　そうだ中浜、お前と俺は月とすっぽんなんだよ。もちろん、俺が月だぞ。お前はすっぽんだ。すっぽんぽんだ。ところで、裸のことをどうしてすっぽんぽんって言うんだろうな。優秀な俺でも分からないことってあるんだな」

　ブッブー！

「スピアリアーズ、不正解」

♪ なんてこったい、ホーリー・マッカラル！

――なんてこったい、祖父谷義文。

万三郎は思わずユキと目を合わせた。だがユキは震えながら万三郎から目をそらし、目をつむった。目じりから涙が頬を伝い落ちていく。そしてユキは万三郎と杏児の手のひらから自分の手をそっと引き抜き、その手で顔を覆って、嗚咽をもらした。

「うっ……うっ……」

「え？　どうした、ユキ」

杏児も仰天している。

「えっ、えっ？　なんで泣いてるの？」

ギャラリーのワーズたちも両チームの異常事態に気付いてざわつき始めた。しかし、楠は非情にも試験を進行させようとする。

「次、第十二問！」

そのとき、向こうで京子が絶叫に近い大声を上げた。

「ヨッシー、うち、もうあかん。皆の目にさらされて超絶恥ずかしいから、うちのこと、隠して、頼むわあ。あっ、目に入った」

ちらりと見ると京子は、緊張から来る大汗なのか、頼りにしていた祖父谷がおかしくなってパニックに陥った涙なのか分からないが、顔をびしょびしょに濡らして、それを腕で拭うものだから、ねぶた祭りのねぶたのごとく、マスカラが目の周りの皮膚に黒々と塗り広げられている。マスカラの成分が目の中に入ったのか、両目をきつく閉じて顔をしかめている。自慢のつけまつ毛の片方は剥がれて失われていた。

いや、あった。

　それはなぜか、奈留美の鼻の下に、バカボンのパパに変装するのなら正しいと思われる位置にこびりついて、奈留美の鼻息に合わせてそよそよと揺らいでいた。その奈留美は一人ボタンに手を置いて、大真面目に楠を見つめ、出題を待っている。気付いていないのだ。ひげが、かすかにそよぐ。

　見事なファイティング・スピリットだ。一人でも戦うというのだ。なぜなら、祖父谷は解答台の横で服を脱ぎ始めていたから。

「そんなに、俺のすっぽんぽんが見たいか……」

「第、十、二、問！」

　ざわめきを鎮めるように楠が問題番号を念押しした。

二十一

とにもかくにも、相手チームに勝たなくてはならない。こちらはユキが戦列を離れているが、万三郎と杏児は健在、対する向こうは奈留美一人だけだ。

「次のワーズの意味をすべて正しく答えよ。

【prospect】、
【prospectus】、
【prospective】、
【perspective】、
【perspect】、
【perspection】」

奈留美が悔しそうに鼻ひげを揺らす。

「くっ、わたくしの習っていない単語がありますわ」

ピンポーン！

「はい、みどり組」

「【prospectプロスペクト】、見通し、見込み。
【prospectusプロスペクタス】、内容説明書、学校案内書。
【prospectiveプロスペクティヴ】、将来の、見込みのある。
【perspectiveパースペクティヴ】、見通し、観点、考え方。
【perspect】、そんな単語、存在しません。
【perspection】、そんな単語、存在しません。

「正解、みどり組六ポイント、同点！」

♪ あなた、優秀！

「ああっ、『そんな単語、存在しません』なんて、ズルくありませんこと！」

悔しがる奈留美に、古都田社長がマイクを通して解説した。

「実在しないワーズや、ねつ造されたワーズがまれに紛れ込んでいる。スペルミスなど、英語の使い手が間違えることで生まれたことだまたちだ。これら正規ではない者たちを識別するのも、ＥＴの大事な職務なのだ」

そのとき、ユキが叫んだ。

「しゃしゃ社長！　まままだ続けるのですか？」

場が一瞬静まり返った。ギャラリーの目も一斉に古都田に注がれた。だが、古都田は無表情にユキを見たまま、無言でマイクを楠に返した。楠は無情にも試験を進行させる。
祖父谷はすっぽんぽんになってくるくる回っていた。

「第十三問！　これから一つずつ出していく日本語訳のヒントから、一つの英語ワーズを当てよ。第一ヒント。『保税倉庫』」

「ホゼイソウコって何？」

「知らない」

万三郎も杏児も、そもそも日本語の意味が分からない。

奈留美も首を傾げるのみだ。

「では、第二ヒント。『証書、債券』」

「うーん。さっきの保税倉庫と同じ単語なんだろ？　万三郎？」

杏児から助けを求められても、万三郎も困る。

「うーん。何かの法律用語かなあ、ちょっと思いつかない」

「第三ヒント。『束縛、拘束』」

　その時、奈留美が悔しそうに嘆いた。

「ああっ、だめ。だめですわ。なぜか、強く感じるのです。わたくしたちスピアリアーズの敗北を。わたくしたちは負ける……その強い予感にわたくし、抗えないの……」

　奈留美はそこまで言うと、解答ボタンからするりと手を放し、ぐったりとその場に崩れた。

　解答者がいない、この絶望的な状況にギャラリーはざわめく。

　解答台の前に倒れこんだ奈留美を押しのけつつ、京子が、真っ赤に充血した目を無理にカッと見開いて、解答台にしがみついて立ち上がった。

「抗わな、あかんねん。負けられへん。どうしても負けられへん戦いやねん」

二十二

呆気に取られて見ているだけの万三郎と杏児をよそに、京子はついに解答ボタンを押した。

ピン、ポーン。

「はい、スピアリアーズ！」

京子の答えを聞くべく、一瞬、静寂が辺りを包む。

「……リ……【restraintリストレイント】……」

激痛に耐えつつ、無理に目を開けて出題者の楠を見つめる京子はすでに、髪を振り乱した夜叉同然の風体と化している。その夜叉の視線の先で、楠は無情にもゆっくりと首を左右に振った。

ブッブー！

「スピアリアーズ、不正解」

♪ なんてこったい、ホーリー・マッカラル！

ピンポーン！

万三郎はハッとした。不正解でも連続解答権があるのか。

当たり前やん、当然あるわと言わんばかりに、京子は再びボタンを押したのだった。

「はい、スピアリアーズ！」

「……【restrictionリストリクション】」

万三郎と杏児も息をのむ。京子は、すでに両方のつけまつ毛を失った目で、痛みに耐えるために大きくまばたきを繰り返しながら、必死で楠を見つめる。

ブッブー！

「スピアリアーズ、不正解」

♪ なんてこったい、ホーリー・マッカラル！

ピンポーン！

三たびボタンを押した京子を見て、ユキが大きな声で嗚咽し始めた。

「……もう、もうやめてあげて……」

しんと静まり返ったチンステに、ユキの嗚咽だけが響く。京子は、気力だけで解答台にしがみつき、震えながら口を開いた。

「コ……【controlコントロール】」

言い終わると京子は力尽き、ゆっくり、しかし、しっかり目を閉じて、倒れている奈留美の横にへなへなと座り込んだ。目を閉じた京子の耳に音が聞こえた。

ブッブー！

「スピアリアーズ、不正解」

♪ なんてこったい、ホーリー・マッカラル！

ピンポーン！

「……！」

「……！」

「……！」

万三郎と杏児、それに嗚咽を止めたユキだけではなく、誰もがその音に驚いた。

京子の代わりにスピアリアーズの解答台に立ったのは、一糸まとわぬ姿の祖父谷義史その人であった。

二十三

「はい、スピアリアーズ！」

一秒、二秒の間があった。

「そ、束縛、拘束だろ？　……【bindバインド】」

ブッブー！

「スピアリアーズ、不正解」

♪ なんてこったい、ホ……

ピンポーン！

「【crampクランプ】」

ブッブー！

ピンポーン！

「【leashリーシュ】」

ブッブー！

ピンポーン！

「【yokeヨウク】」

ブッブー！

ピンポーン！

裸の祖父谷は、眉を逆立てた苦しげな表情で、解答ボタンを押し続ける。そしてことごとく不

正解の烙印を押されるのだった。気位の高い祖父谷が、纏い、身を守るものの何一つない姿をさらし、皆の見ている前で全否定されていくところを、万三郎と杏児とユキは今、目の当たりにしている。

　そのとき、万三郎はふと気付いた。古都田社長の左隣に、ビジネススーツ姿の見知らぬ中年男性が立っている。さっきまでいなかった人物だ。サングラスとは言えないほどの、ごく薄い茶色が入った眼鏡をかけている。レンズの色が薄いので、視線が見える。男は口を真一文字に結んで祖父谷の様子を見ているようだ。

　ややがっちりした中肉中背の男は、どちらかというと小柄な古都田より、頭一つ分以上背が高い。万三郎が見ていると、男は顔をわずかに斜め下に傾け、古都田にぼそりと耳打ちしたように見えた。すると古都田は頷いて、江戸ワード駅長に何かを指示した。

　すぐに十人ほどの、セキュリティースタッフらしき男女が駅長の回りに集まった。それからそれらのスタッフ全員がこちらに向きを変えて、毅然たる足取りで一斉に歩いてきた。いや、近づいてきて分かったのだが、彼らが歩み寄ったのは、万三郎たちみどり組の方ではなくて、祖父谷たちの解答台だった。

　その間、祖父谷は、まだ答えようとしていたし、楠も半ば意地のように不正解のブザーを押していた。

「【shackleシャックル】」

　ブッブー！

「【trammelトラメル】」

　ブッブー！

「【fetterフェター】」

　ブッブー！

　男たちが、持参していた毛布を祖父谷にかける。

「やめてくれ！　今、解答中だ」

振り払おうとする祖父谷を、男たちは文字通り力づくで押さえ込んだ。まさしく「拘束」だ。

その間に、駅長の指示を受けた女たちは、手にしていた二本の棒に巻き付いている布をくるくる広げ、担架をつくると、手早く奈留美を担架に乗せ、手分けして担架を担ぎ上げた。京子は別の女に肩を貸され、ほとんど目を閉じたまま、よろよろと立ち上がった。

「おい、試験中なんだ。どうして俺を拘束する？　俺が優秀だからか！」

祖父谷は無理に押されながら、解答台を後にしてホームの付け根に停車してきた自動車に向かわされた。奈留美の担架と京子もその後に続く。

「祖父谷……」

万三郎も杏児も、ただ茫然と彼らを見送るのみだ。

祖父谷は、出題者の楠の前を連行される時にも、懸命に答えを叫んでいた。楠は目を閉じて祖父谷の方を見ようとせず、ただ首を振り続けている。

「【straitjacketストレートジャケット】、【chainsチェインズ】、違うのか……。じゃあ、【ball and chain】……」

車に運び込まれ、乗り込み、押し込まれて、スピアリアーズを乗せた車はドアを閉めた。クラクションを長く鳴らす。辺りにひしめくワーズたちに道を開けさせるために鳴らしているのだろうが、万三郎たちにはまるで出棺の合図のように聞こえた。

車が視界の左から右へ移動していくのを目を見張って追いかけるみどり組の三人に向けて、一切の感情を押し殺した楠の声がマイクを通して響く。

「第四ヒント。『絆、結束』」

泣きはらした顔のユキが、その手を万三郎と杏児の手の上に重ねて置く。それからユキは万三郎を見て、杏児を見た。二人は頷いた。ユキは大きく深呼吸して、それからゆっくりと、しかし確信に満ちた様子で手に力を加えていった。

スピアリアーズの車は走り去って視界から消えた。

ピンポーン。

「はい、みどり組」

　三人が声を揃えて答える。

「【bondボンド】」

「正解、みどり組、七ポイント」

　♪ あなた、優秀！

　それから、楠信太は静かに宣言した。

「チーム・スピアリアーズ棄権により、これにて試験終了します。勝者は、みどり組」

二十四

今神室長はさっきからずっと立ったまま何かをメモしている。江戸ワード駅長はセクション・マネージャー楠と何か打ち合わせをしながら向こうへ歩いて行った。ギャラリーのワーズたちは、日常勤務のために三々五々去って行きつつある。だから、万三郎と杏児とユキの前に立っているのは、古都田社長、魂が抜けたように無表情な新渡戸部長、そして例の薄茶色のメガネの男だ。最初と同じく、誰一人、笑っていない。

万三郎と杏児は、新渡戸が言うところの、真剣勝負の修了試験を終えた今、これからいったい何が起こるのか、上司たちから発せられる言葉を身じろぎひとつせずに待っている。ユキは、もう泣いてはいなかった。しかし、一雨降って、からりと晴れ渡る空のようでは断じてない。じっと柳眉を逆立て、口を真一文字に結び、不満や悲嘆を封じ込める決意がその表情から見て取れた。もちろん、一言も口をきかない。

三人同士で向き合うと、古都田が口を開いた。

「みどり組の諸君、辛うじて負けなかったな」

ユキが目を伏せる。万三郎が何か言おうと顔を上げたその時、杏児が先に口をきいた。
「社長、スピアリアーズの連中はどうなるのでしょうか」

古都田は、質問した杏児をまばたきもせずまっすぐ見つめながら、他の二人にも言い聞かせるように答えた。

「人の心配をしている心の余裕など、今からみじんもなくなるぞ。諸君への人材育成投資はたった今終了した。早速、任務についてもらう」

「スピアリアーズは……？」

話をはぐらかそうとする古都田に万三郎が重ねて問おうとしたとき、古都田はその目をぎょろっと万三郎に向けてその言葉の上に自分言葉を重ねた。

「会社は親睦の場ではない。諸君が今知るべき情報は、これからこの方が教えてくれる。紹介しよう。石川卓さんだ。内閣府情報調査室審議官、つまり日本政府の高級官僚でいらっしゃる」

　にこやかさのかけらもない男が、冷酷にも聞こえる抑揚のない声で三人のＥＴに言った。

「石川だ。お前たちの仕上がり具合を確認しに来た。満足とは言えないが、まあ認めて良いだろう」

――偉そうに。

　というのが、この男に対する万三郎の印象だが、むろんそのようなことは口には出せない。まあ実際に政府筋の偉い人なのだろう。

「お前たちに伝えるべき話がある。だが……」

　石川審議官は回りを見まわす仕草を見せた。修了試験の見物を終えて日常業務を再開したチンステは、喧噪を取り戻しつつある。

「古都田社長、場所を変えよう」

　古都田は静かに応じる。

「ラボに？」

「うむ」

「分かりました」

「では、先に戻っておく」

　古都田は頷く。石川は色付き眼鏡の向こうで切れ長の目を万三郎に向けた。

「あっ！」

「うわっ！」

　万三郎と杏児は驚愕してのけぞった。目の前で石川の姿が一瞬にして消えたからだ。二人は目を見開いたまま無言で古都田に説明を乞う。

「新渡戸くん」

「はい」

　古都田は二人に答える代わりに新渡戸部長に声をかけた。新渡戸は心得たように後ろを振り向く。振り向いた新渡戸の視線の先には、軽自動車が一台停まっていた。万三郎たちが見ていると、新渡戸の視線が合図だったのか、即座にドアが開いて、中から四人の男性が急いで降りて来た。彼らは新渡戸の後ろに横一列に並ぶ。

――ワーズなのか？

　万三郎と杏児がいぶかしんでいると、古都田が言った。

「諸君。このメロディーをよく聞くんだ。今後、このメロディーが合図になる」

　するとその四人のうち一人が、メロディーに乗せて言葉を口にした。

♪ 山寺の、和尚さんが――

　それを合図に、後の三人が美しいハーモニーで合唱を始めたのだ。

♪ 毬（まり）は蹴りたし　毬はなし――

　万三郎たちはまったく想像していなかった展開にただただ目を丸くして息を飲んでいる。

♪ ダカヂク ダカヂク ダカヂク ダカヂク　エイ　ホホー、
　ダカヂク ダカヂク ダカヂク ダカヂク　エイ　ホホーーー

　早口言葉のようなリフレインを背景に、古都田は万三郎たちに言った。

「さあ、戻るんだ、リアル・ワールドへ。物理法則に縛られる、不自由な世界へ」

　リズミカルなリフレインをＢＧＭに、古都田の声の語尾は、温泉旅館の大浴場で発せられたかのようにこだましていった。

「……世界へ……世界へ……世界へ……」

　コーラスの男性が裏声で調子をつけて叫んだようだ。

♪ ニャンが　ニャンと鳴く　ヨーイヨイ

それを合図に、万三郎は突然、立ちくらみのように景色を失っていった。

◆◆◆

（１）ボブ、あなた、あまり良い先生ではないですよね。

（２）ヤン、君は、クラブでたくさんの客の相手をする。その赤ん坊の父親が私だとどうして分かる？

（３）そんなことに同意した覚えはない。

（４）勘弁してくれ！　君と結婚する、だって？　あり得ないね。ねえ、もう終わりにしよう。私をからかうのはやめてくれ。そして、もう帰ってくれないか。

（５）"screwing around with me"には、「私と浮気する、乱交する」という意味があり、ブラックジョークとも取れるから。

（６）遠からず私と入籍するつもりだと私のそばで愛情たっぷりに囁いた、あなたのピロートークを私こっそり録音してたの。まさに今、家庭裁判所に証拠として提出することに断固決めたわ。

（７）何？　君は僕を訴えるつもりなのか？　ふうん、それじゃあ言わせてもらう。いいか、僕はママに警告されていたんだ。君に言い寄られるかもしれないから気をつけなさいと。なぜなら君のビザが来月末で切れる前に、永住資格を得るために日本人の伴侶を見つけようと君が必死になっているからと。

（８）何を言ってるの？　あり得ないわ！　よくもそんなこと言うわね！

（９）"as like as chalk and cheese"「月とすっぽん」,"the birds and the bees"「小中学生が教わる、性に関する知識」、"monkeys and donkeys"このような慣用句は存在しない、"It rained cats and

dogs."「土砂降り」。よって、Ｄが正解。

第十四章　覚醒（1）

―

プシューという音と共に、ふんわりとした風を頬に感じる。暗く深い海から浮上して、今ようやく水面に顔を出したように、急速に意識が戻ってくる。しかし、あまりのまぶしさに、思わず顔をしかめる。しばらくの間、目が開けられない。

「まぶしいだろう。無理もない、一か月も目を使っていなかったのだからな」

聞き覚えのある声……というより、さっきまで聞いていた、古都田社長の声が近くから聞こえた。真っ白な視界の中央で、グレーの影がわずかに動くのが感知でき、その影が次第に黒味を帯び、そして顔のパーツがようやく認識できるようになってきた。ベッドのような場所にあお向けに横たわった状態の万三郎の顔を見ながら頭の辺りをなにやらいじっているその人は、社長秘書の藁手内恵美だった。頭の辺りでカチャカチャしていた手を止め、恵美が微笑む。

「お帰りなさい。ようこそ、リアル・ワールドへ」

「リアル・ワールド……？」

視力が正常に戻った万三郎は、上体を勢いよく起こそうとした。その瞬間、首が折れるかと思うほど頭部を後ろに引っ張られ、額に激痛が走った。

「いがぁぁっ！」

思わず額を押さえようとした両手の手首がそれぞれ革手錠のようなものでベッド脇に固定されており、万三郎は起きることも、頭を押さえることもままならず、そのままバタンと再びベッドに上体を倒した。びくっとして少しのげぞった恵美がたしなめる。

「まだダメよ、ちょっと待って、もうすぐだから……」

「痛ったぁ……どうなってんだ、これ……？」

額の痛みが癒えるまでの間、恵美は頭の上の方でなにやらごそごそしていたが、ようやく「パチン」と音がして、急速に額の圧迫感から解放される。

「はい、いいわよ」

　恵美はそう言いながら、ボタンを押して両手首の拘束を解いた。

　頭と手の自由を確認しながら再び上体を起こす。

「二人目、完了。最後は三浦さんね」

　恵美は万三郎の右二メートルほど離れたところに置かれているカプセル型の寝台に歩み寄り、ボタンを押した。さっきと同じ、プシューという音がして白濁していたカプセルの覆いが一気に透明になる。恵美の後姿が少し横にずれた時、そこに、額に革製の鉢巻のようなバンドが巻かれて横たわったまま、顔をしかめる杏児の姿が垣間見られた。頭の辺りに無数のピンジャックの端子とコードが見える。その時、左から声が聞こえた。

「中浜くん、どうだ、気分は？」

　万三郎はハッとして反対側を振り返った。そこには、声を発した古都田社長に加え、新渡戸部長、石川審議官、そしてその傍らにユキがこちらを向いて立っている。

「中浜くん、どうだ、気分は？」

　古都田は同じ言葉で訊いた。

「はい、妙にリアリティーがあります」

　古都田はふん、と少し笑って言った。

「それはよかった。リアル・ワールドで覚醒するのは新生児以来のことだから、最初は半覚醒、つまり、ことだまワールドとの混乱が起きやすいからな。頭のリアルな痛みのおかげで完全に覚醒してよかった」

「はあ……」

　万三郎がそう答えた時、反対側で叫び声が聞こえた。

「いがぁぁっ！」

　恵美の気の毒そうな声が杏児の叫び声に重なる。

「まだダメよ、ちょっと待って、もうすぐだから……」

二

万三郎たちが横たわっていた近未来的なカプセル型ベッドの機器類を除けば、内装は紛れもなく日本の古民家のそれだ。高くほの暗い天井。囲炉裏の煙でいぶされたようなチャコールグレーの柱や梁。少し黄ばんだふすま。そして板の間に続く畳敷き。この部屋自体は畳にして何十畳あるのか、相当広いが、昭和初期の地方の暮らしぶりを紹介する民俗博物館の体験型展示室の中にいるような違和感を覚える。万三郎は囲炉裏端の板敷きに敷かれた座布団の一枚に正座したまま、まわりをきょろきょろと見回す。

振り子が左右に振りきれた時にわずかに「カ……カ……」と音を鳴らす、大型の壁掛け振り子時計は、八時十五分あたりを指しており、その隣の柱に懸けられている勘亭流の壁掛け日めくりカレンダーは三月三十一日になっていた。

万三郎の視線に気付いた古都田が、「藁手内くん」と呼んだ。恵美は少し向こうでカプセル型ベッドから垂れ下がるコード類の後片付けをちょうど終えた。その恵美を振り返らせ、日めくりカレンダーに目を向けて合図した。恵美は黄八丈の着物にたすき掛けといういでたちだ。少しこちらに近づき、カレンダーに気付いた恵美は、

「あら。すみません、うっかりして……」

といいながら日めくりを一枚破り取った。

四月一日となった。

ニコリとこちらに微笑んだ恵美は、そのすぐ奥にある、台所らしき部屋に、のれんをくぐって消えていった。恵美が着物姿であることに何の疑問も浮かばぬほど、彼女は場の雰囲気に見事に溶け込んでいた。

万三郎は視線を戻した。左隣には、先ほど覚醒した杏児が、万三郎と同様に座布団に正座し、物珍しそうに周りを見回している。その先、左側の囲炉裏端には、同様にユキが座っていた。そして、囲炉裏を挟んで万三郎や杏児に向き合う形で、石川審議官、古都田社長、新渡戸部長の三人が胡坐をかいている。

万三郎たちは、カプセルに寝かされていたときのままの、緑色の前開きタイプの手術着のような服を着ているが、上司三人はバリバリのビジネススーツにネクタイ姿だ。

「おかしいか？」

　室内のたたずまいと彼らの服装とのミスマッチに、万三郎同様、大きな違和感を覚えてそわそわしている杏児に、笑わない微笑を浮かべつつ古都田が問う。

　杏児が答えた。

「はい社長、質問が三つあります。第一に、ここはどこなのか？　第二に、どうしてこんなに和風なのか？　第三に、これから何が起こるのか？」

　杏児の質問のさ中に、膝元にあった茶碗を手に取って、茶をゆっくり啜った古都田は、視線を杏児からそらさず、即座に、しかし鷹揚に答えた。

「第一に、ここは、東京都中央区霞が関一丁目にある、内閣府情報調査室言語実験部、通称、『リンガ・ラボ』だ。第二に、和風の家で日本茶を飲むと旨いと思わないか？　『和風にしつらえるとお茶が旨い。それで和風にしたんだ』と、あの方がおっしゃっていた。今の私にはそれが分かるようになってきた」

　古都田はそう言って、さらに茶を一口啜ると、壁掛けカレンダーの柱の上方に懸けられている写真額を目で示した。まるで今は亡きご先祖のように、黒縁の額に、品のよさそうな老人の上半身のモノクロ写真が収まっている。

「リンガ・ラボ創設者の内村鑑三郎元事務次官だ。引退された今は、山梨県で元気に暮らしておられる。このしつらえは内村さんの嗜好なのだ」

　古都田はそこまで説明すると、声のトーンを少々厳粛に変えた。

「第三の質問に対する答えは、こちらの石川審議官からお伝えする。石川さん、お願いします」

　古都田の言を受けると石川は頷いて、傍らの書類を持って立ち上がった。同時に古都田も新渡戸も立ち上がったので、正座していた若い三人も慌てて立ち上がる。

　石川は囲炉裏端の板敷から数歩歩いて、畳敷きの部分に立った。すると古都田と新渡戸は石川を挟んで立つ。まるで水戸黄門の両脇に控える助さんと格さんのようだ。

　石川はいったん書類数葉を新渡戸に手渡し、上の一枚だけを手にしてこちらを向いた。そして

咳払いをひとつすると、重みのある声色で切り出した。

「それではこれからミッションを伝える。福沢由紀、前へ」

「はい」

　ユキが粛々と石川の前へ進み出る。畳がわずかにミシッと音を立てた。石川は紙を両手で持って、ユキに宛てて朗々と読み上げる。

「辞令。検体番号ＪＥＳ一〇二七番、福沢由紀殿。貴殿に本日付で、救国官として、内閣府官房情報調査室勤務を命ずる。平成××年四月一日。内閣官房長官　毛利正文」

　石川は、しかつめらしく辞令をユキに手渡すと、続けて言う。

「同時に特別指示書も発令されている」

　二枚目の紙を新渡戸から受け取ると、ユキを前にして、これも同じ調子で読み上げた。

「特別指示書。内閣府救国官、福沢由紀殿。貴殿は、日本政府の特命公使として、国際連合緊急特別総会における演説を通して、人類が直面している危機を回避するための対策を提言し、もしくは他の特命公使の適切な補佐を為し、もって救国官としての使命と職責を全うするよう指示する。平成××年四月一日。内閣官房長官　毛利正文」

三

「ケ……ケンタイ番号ってなんだ……？」

万三郎と顔を見合わせた杏児に石川の声が飛んだ。

「次、三浦杏児。ここへ」

「は、はいっ」

石川は、杏児、続いて万三郎にも同様の文書を読み上げた。杏児の検体番号はＪＥＳ一〇二八、万三郎はＪＥＳ一〇二九だった。指示書を見ると、ケンタイは「検体」と書いてある。

万三郎が辞令を受けている間、杏児はそっと傍らのユキに話しかけていた。

「おい、僕ら、やっぱり実験台だったんだな。人体に番号打たれてたんだ。でもユキが〇二七だろう？　それ以前の検体は何してるんだ？」

ユキは私語をしている万三郎をたしなめるように、自分は身じろぎもせず前を見たままつぶやいた。

「そんなこと、知らない」

その時になって杏児は初めて、ユキが小刻みに震えているのに気が付いた。

「あれっ、ユキ、君、震えてるのか？」

「放っておいてよ！」

「三浦くん、何か不都合でも？」

万三郎が辞令書を受け取るのを待って、石川の隣に立っていた古都田が、杏児を威圧するように口を開く。

「いえ……あの、僕ら、実験対象なのなら検体ではなく『被験者』なんじゃないですか」

　石川が言う。

「『被験者』は生きている人間に使う言葉だ。体を実験に供する『献体』は死んだ人間に使われる。どちらも倫理的にデリケートだ。よって我々は単なる『モノ』として扱われる『検体』ということだ。

「我々？」

　怪訝な顔をする杏児に古都田が答える。

「私は検体番号ＪＥＳ一〇〇七だ。石川さんは〇〇二、新渡戸くんは〇一〇、それぞれの職務についている」

「えっ、ということは、社長たちも……！」

「私、藁手内は、〇二二です」

　そう言いながら、恵美がのれんの向こうから盆に日本茶の入った茶碗を載せて現れる。
　古都田は辞令書と指示書を手にしたまま立ち呆ける三人を、戻って囲炉裏の前に座るよう促しながら答えた。

「そうだ。藁手内くんや我々自身も、諸君と同じく実験台だった。我々に共通して言えることが三つある。一つは、先ほどことだまワールドで言った通り、我々は事故に遭い、通常の医療行為では助からなかった、二つは、にもかかわらず脳が無傷で、身体的損傷も回復可能であった、三つは、我々は、死亡届もしくは失踪宣告が出されていて、社会的にはすでに存在していない、ということだ。他に質問は？」

「他に質問ったって……まったく訳わかんない。質問だらけだよ」

　古都田から目を逸らして杏児がそうひとりごちる。だが皆に聞こえていたようだ。杏児の前に恵美がお茶を置く。

　古都田に続いて、石川と新渡戸も囲炉裏の前に戻ってきて、座布団に腰を下ろした。そして石川が淡々と言った。

「だが、あまりゆっくり説明する時間はない」

「ゆっくりお茶を飲む時間はあるのに……」

　小さい声で思わずそう皮肉った杏児を、恵美が「シーッ」と口に人差し指を当ててたしなめるのだった。

「リンガ・ラボのお茶には特別な効力があるの。意味があるのよ」

「このお茶を飲む時間が質疑応答の時間だ。他に質問は？」

四

杏児に代わって万三郎が古都田に訊いてみる。

「あの……僕らは何の実験台だったんですか？」

「英語学習だ」

「は……？」

「英語学習。わが社、『ことだまカンパニー』東京本社英語事業部において、幹部候補生である君たちヒューマン社員が、英単語、すなわちワーズ社員たちをいかに上手く使いこなせるか、その育成プログラム運用の実験台だったのだ」

「社長、それなら初日に伺った通りですね。ここは霞が関のリンガ・ラボだとおっしゃいましたが、ことだまカンパニー本社ビルの中ということでしょうか」

「いや、それは正しくない」

「であれば、ことだまカンパニーは、いったいどこにあるのですか？」

「ここだ」

古都田は自分のこめかみ辺りを人差し指で二度コツコツとやった。

「社長の想像の産物？」

「違う。非物質世界に存在する、ことだまエネルギーの集合体だ」

「非物質……まぼろし……ですか？」

「違うのだ、ある意味パラレル・ワールドだ。ただ、このリアル・ワールドの物理法則は違う法則に支配されている」

「うーん、分からない……」

頭を抱えた。代わりに、今度は杏児が尋ねた。

「で、目覚めたということは、実験は終わったということですか？」

「ああ、終わった。というより、とりあえず終わらせた」

「とりあえずと言いますと？」

「不充分かも知れないが、君たちが習得した英語能力を今、国家のため、いや、世界のために使わなくてはならん事態となった」

「事態……とは」

「緊急の、事態だ」

緊急の、というところに力を入れて、古都田はゆっくりと答えた。再び万三郎が問う。

「いったい、何が？」

「四日後、小惑星が地球に衝突する」

「は？」

「そして早晩、人類は絶滅する」

「……」

言われていることを整理するため、万三郎は三秒ほど、口をつぐんだ。そこに恵美が置いてくれたお茶がある。万三郎はそれを一口すすってから静かに反応した。

「いや、社長、ご冗談ではなく……」

「科学者たちに言わせれば、私の言っていることは、九九．九パーセントの確率で、冗談ではないらしい」

万三郎はあらためて杏児と顔を見合わせる。杏児はそのまま無言で、わずかに一度、首を横

に振った。そして杏児は皮肉めいた笑いを浮かべて視線を古都田に移す。

「だから、救国官、ということ、ですか」

「うむ」

　古都田は頷くと平然と茶を啜る。

「どうせなら、世界を救う『救世官』の方がスケールが大きくていいんですけどねえ……」

と杏児はおどけた調子で言った。それに反応したのは、古都田ではなく、石川だった。

「法に従って日本国民の生命と財産を守る。また日本の国益を守る。『日本国』より上位の概念ーー例えば、世界ーーの利益を担保する国家公務員の役職と呼称は、我が国にはない。我慢しろ」

　石川は身じろぎひとつせずそう答えた。

「そんな、本気で答えていただかなくても……」

　杏児の顔色がいくぶん蒼白に変わったのを見て、事態が冗談ではなさそうだと悟る。にわかに万三郎の顔がこわばった。

五

古都田が早口で補足する。小惑星アポフィスが地球への衝突軌道を取っており、地球からの迎撃の試みは失敗したので、もう衝突回避の方法が他に残っておらず、各国政府はいまだ事実の公式発表をしていないにも関わらず、人類はパニックに陥りつつあるということ。ことだまカンパニー、ないし日本国政府としては、ことだまの力でアポフィスの軌道を変えることに一縷の望みをかけて世界の一人でも多くの協力を呼びかけたいと考えていることなどだ。

その間、石川はしきりに柱時計を睨むようなそぶりを見せた。ユキはといえば、浮かぬ表情で上目使いに古都田を睨み、相変わらず膝についた両腕を微かに震わせていた。

ひとしきり古都田の話を聴いてもまだ腑に落ちていない顔の万三郎と杏児に、石川が再び口を開いた。

「今から言うことをよく聞くんだ」

三人は石川に向き直る。

「今から二時間後、午前十一時に、日本政府はアメリカ合衆国ニューヨークへ向けて政府専用機を飛ばす。お前たち救国官三人は、俺の引率でその飛行機に乗ってもらう」

「ニ、ニューヨークへ……？」

驚く杏児をじろりと見て石川が答える。

「三浦、そうだ、ニューヨークだ。合衆国政府の要請を受けて、日本に駐在していた米国要人とその家族を本国に送り届ける政府間プロセスが大詰めを迎えている。帰りには、在米日本人高官とその家族を載せて帰ってくる。お前たちはその往路便に搭乗して、ニューヨークの国連総会に出席して演説をするのだ」

「演説……？」

つぶやく万三郎に石川は、もう分かっているだろう？　という表情をして言い足す。
「我々の提案を世界に広めるんだよ。支持者をできるだけ増やす。これを『タッチ・ハート作戦』と名付けた」

「ことだまのパワーを結集して小惑星の軌道を変えるという提案ですか……？」

「実際に軌道を変える作戦は、『グレート・ボンズ（偉大なる絆）作戦』と名付けた。『タッチ・ハート作戦』は『グレート・ボンズ』形成に向けて、皆の心を一つにするミッションだ」

　そう言うと、石川はずっとうつむき加減だったユキの方を見た。

「今度は失敗は許されない……」

「今度は、とおっしゃいましたか？」

　万三郎が思わず問い返すと、石川は早口で言い繕った。

「いや、ミサイル迎撃が失敗したから今度こそは、という意味だ」

　ユキがようやく顔を上げて、思いつめた表情で石川の方を見た。

「石川さん、『失敗は許されない』とは？」

　古都田と新渡戸が揃って三人から目を逸らした。数秒の沈黙の後、石川が口を開く。

「失敗したら、我々に、帰りのチケットはない、ということだ」

　さらに数秒の沈黙が流れた。ユキはじっと目を閉じて膝の上でこぶしを握っている。そのこぶしは相変わらず小刻みに揺れていた。万三郎は石川をにらむような目で見返している。杏児が沈黙に耐えられなくなったのか、急に軽い調子でおどけた。

「ま、当たり前といえば当たり前かぁ！　僕たちが失敗したら地球が滅びるんだもんな。戸籍のない僕たちにとっては、日本で死のうがニューヨークで死のうが一緒っちゃあ一緒だな……というより、もう死んでることになってるんだもんな、僕たち。はは」

　石川は表情を緩めず言った。

「指示書に『救国官としての使命と職責を全うせよ』とある。使命が果たせないなら責任を取れということだ。我々の席は、わずか四席だが、まだ彼の地に残っていて、親兄弟が待つ祖国に帰って一緒に最期を迎えたいと願う邦人のために解放する」

三たび静寂があったが、感傷的になる前に、古都田が説明を引き継いだ。

六

「ことだまワールドとリアル・ワールドを往復する検体のことを、我々は『レシプロケーター』と呼んでいる。ことだまワールドに意識レベルで入って行ったり、リアル・ワールドに意識が戻ってくることを『レシプロケーション』、略して『レシプロ』と呼んでいる。機械の方は『レシプロ・カプセル』だが、普段は単に『カプセル』と呼んでいる。見ての通りカプセル型だから」

古都田はそこで、お茶を出し終えてから、後方に端座していた恵美を振り返った。
「藁手内くんもレシプロケーターだ。ことだまワールドでは私の秘書でもあるが、リアル・ワールドではあのように、カプセル・レシプロケーションのオペレーターをしてくれている。　藁手内くん、レシプロケーションの原理を彼らに手短かに説明してやってくれたまえ」

次にそう命じられるのを予測していたかのように、たすきを外し終えていた恵美は、少しはにかみながらもにこやかに古都田に答える。

「わかりました」

三人のＥＴは立ち上がって、恵美が示す一番手前のカプセルを囲むように集まった。

カプセルは、きっと最先端技術の粋を集めた装置なのだろうけれど、デザイン的に洗練されていて、ボタンやスイッチの類いは頭部脇にまとめられ、パソコンなど外部機器とつなぐためのジャック穴群もすっきりと配置されている。ここにささっていたであろうケーブル類は、すでに恵美によって片付けられたようだ。そして内部機器をすっきり隠すために、まるで洗浄型洋式便器の下部を覆うスカートのように、滑らかな曲線を描くプラスチックカバーで床ぎりぎりまで覆われていた。カプセル自体にキャスターがついている。移動できるようだ。ベッド部分が、手術台のように、脇に立つ人の腰よりも上に来るくらい高めなので、ベッドを覆うフードが寝台下部に収納された今の状態でも、古代エジプトの王様の棺さながら、部屋で一番、存在感と違和感のある物体だった。

恵美はまるで展示会のコンパニオンのような軽妙さで説明を始める。

「このカプセルはものものしく見えますが、装備の多くはレシプロ中の生理機能をモニターするためのもので、検体をレシプロへ導くユニット自体はとても小さいんです。それに、ユニットの動作原理も、とても単純です。カプセルの中に入る人間の脳波を、ことだまワールド特定の周波数に強制的に合わせて、ことだまワールドへの『｜入境《エントリー》』を助ける役割をしてい

るだけですから」

　万三郎は、初めて目にする機械と荒唐無稽なその機能を理解するよりも、ことだまワールドにおけるのと同様の、清々しい微笑を絶やさず説明する恵美を興味深く見つめていた。あるいはこの人は、生身の人間ではなくて、アンドロイドか何かなのではないか……と、話の内容そっちのけで疑ってしまうのだった。

　――さっきの話が本当なら、数日後に地球が滅びるというのに、この人はどうしてそんなに涼やかな笑顔を浮かべられるのだろうか。

七

そんな万三郎の視線など気にも留めず、恵美はさらさらと説明を続ける。

「レシプロのために設定するパラメーター、つまり、脳の電極マップの特定の三か所で二十五プラスマイナス四ヘルツのβ波が出ていて、同時に他の箇所でα波が出ていれば、ことだまワールドへ入境できることが分かっていますが、皆さんにはそんな数値は必要ないですね。一か月の間どっぷりとその脳波の組み合わせで過ごしていましたから、ご自分の『感覚』で分かるはずです。どうすればいいか、そのコツはすぐに習得できるでしょう。そうなればもはやカプセルの助けを借りる必要はありません。現に石川審議官も、古都田社長も、新渡戸部長も、私でさえも、機械の力なしに自由にレシプロしています。これをセルフ・レシプロ、または自力レシプロと言います。例えるなら、３Ｄイラストで、絵が飛び出す目の焦点の合わせ方を身につけるようなもので、きっとすぐに慣れます」

そう言い終わると恵美はニッコリしてカプセルの表面を撫でた。

恵美の話が終わるや否や、囲炉裏端で石川が立ち上がりながら言った。

「よし、後は新渡戸くんに任せる。古都田くん、官邸に報告に行くぞ」

古都田も立ち上がり、石川についていそいそと三和土の上がり框に向かいながら三人に向けて言った。

「君たちは、今から一時間以内に機械なしで自由にレシプロできるように、新渡戸くんの指導を仰いで練習したまえ。セルフ・レシプロのための特殊な瞑想法を習得するのだ。新渡戸くん、あとを頼む」

続いて石川が靴紐を結びながら慌ただしく三人に言う。

「一時間後、空港に向かう車をよこす。出張の荷物は着替えも含め、すべてこちらで用意する。搭乗口で落ち合おう。その後の具体的な段取りは機中で伝える」

石川はそう言い終えるとブリーフケースを手に立ち上がった。いつの間に移動したのか、恵美が先に草履を履いて玄関の引き戸の辺りに立っている。その、いかにもガタガタしそうな木製の引き戸がチンといって自動的に開いたので、上がり框まで見送りに立っていた万三郎は大

いに驚いた。引き戸がエレベーターの扉と一体になっていたのだ。

　いち早く恵美がエレベーターに乗り込み、「開」ボタンを押している。石川と古都田は靴音高くエレベーターに乗り込んだ。

　古都田はこちらを向くと、驚いてぽかんと口を開けている万三郎に、

「これも先代の趣向でな」

……と、口の端をわずかにゆがめた。

「一時間後に会おう」

　無機的な面構えの石川が、同行の古都田と、おそらく下まで見送る恵美とともに、音もなく閉まるエレベーターのドアの向こうに消えてから、万三郎はあらためて部屋の中を見渡した。部屋は広い。囲炉裏が切ってあるのは、畳敷きと板張りが半々を占める大きな正方形の部屋の、板張り側の片隅で、畳張り側には、さっきまで自分たちが眠っていた三台のカプセルが並べられている。

　その時、万三郎はハッとして目を見張った。

　さっきは角度が悪くて気付かなかったが、三台のカプセル越しに、畳敷きの向こうのふすまが少し開いていて、その向こうにさらに大きな部屋があり、数台の、フードがかかったままのカプセルが並んでいるのが隙間から見えたのだ。フードカバーは不透明で中は見えないが、カプセルのジャックにはケーブルがたくさんつながっていた。

　――あの、むこうのカプセルにも検体が横たわっているのだろうか。もし、そうだとしたら、俺はその人たちに、ことだまワールドで出会っただろうか。祖父谷は……スピアリアーズの三人は、あのカプセルの中なのか……。

　万三郎がそんなことを考えている時、後ろから新渡戸部長が三人を促した。

「さあ、君たちはこっちだ」

第十四章　覚醒（8）

八

小一時間後、三人と新渡戸がリンガ・ラボの瞑想室から疲れ切って出てくると、石川と古都田の見送りを済ませた恵美が、三人の救国官のビジネススーツを用意してくれていた。

「ユキさんは着替えを持ってこちらへどうぞ」

恵美の案内でユキが別室へ案内されていった。万三郎と杏児は囲炉裏の前で着替えにかかる。

着替えながら万三郎が、誰に言うともなくつぶやいた。

「瞑想室の鹿威しの音って、ことだまワールドまで聞こえて来てた」

新渡戸が説明する。

「時間の物差しみたいなものだ。あの間隔で、今何倍速の世界にいるのか、おおよその見当がつく」

「何倍速って？　部長、こっちの時間とあっちの時間は進み方が違うんですか。私には同じ間隔でしか聞こえませんでしたが」

万三郎の驚きに新渡戸は真顔で小さく頷いた。

「ひとつ、大事なことを明かしておこう。君たちはことだまワールドで一年の実務経験を積んで覚醒したと思っているだろうが、その間、リアル・ワールドで経過した時間は一ヶ月だ。つまり、君たちはことだまワールドにいる間、リアル・ワールドの約十二倍のスピードで時間の経過を経験していたことになる」

万三郎はさらに目を大きく見開いた。隣りで杏児も茫然としている。

「なっ、なっ、何ですって！　どういうことですか、部長！」

「君たちは一年かけて学んだのではなく、実際は一ヶ月で体験し、記憶し、情報処理していたのだ」

　あまりのことに、万三郎はにわかに思考の整理がつかない。もちろん、杏児も同じだろう。

「そ、そんなスピードで僕が物事を覚えられるはずがない……」

「実はそこがマシン・レシプロケーションの真骨頂なんだ。検体に本来備わっている潜在脳力を強制的に引き出して高速学習に対応させる」

「とても信じられません。僕の中ではたっぷり一年経過した感覚です」

　新渡戸は急に不機嫌な口調になって、続く言葉を吐き捨てた。

「レシプロ・マシンによる高速学習メソッドによって、理論的には、学習効率を何十倍にも高めることができるし、通常の人の一生の何倍もの経験ができるという。ふん、実際はそんな　簡単なものだとは思えんがね」

「でも、今のレシプロでは鹿威しの音はリアル・ワールドと同じペースでした」

「そりゃあそうだ。カプセルでのレシプロなら時間の進み方を自由に設定できる。しかし、機械に頼らないレシプロで時間の尺度を自分の意思で変えるのは相当な熟練を要する。社長や　石川さんにはできるようだ。ラボ創始者の内村元事務次官とか、先代社長にいたっては達人の域らしい。私はまだできない。もちろん君たちは、セルフ・レシプロすら完璧ではない」

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル……」

　万三郎は隣の杏児と顔を見合わせてため息をつく。新渡戸は彼らの混乱や不安を払しょくするように口調を明るく変えた。

「しかしまあ君たちが、おっかなびっくりながらも、カプセルなしでレシプロできるようになって良かった。一時間でできるようにさせなければ、私は社長に顔向けできないところだった」

　ユキと共に囲炉裏の前に戻ってきた恵美が杏児に言った。

「さっきラボのお茶を飲んだから、レシプロできたのよ。そうでなければ、今のあなた方は、刺激的な情報を聞きすぎて、とても瞑想できるような精神状態ではないはずよ。ラボのお茶はお薬じゃないのに、すごい鎮静効果があるの」

「あ、恵美さん、着物じゃなくなってる」

　ビジネススーツ姿の恵美は、着物の時の同じく、爽やかな笑顔を浮かべた。

「ユキさんと一緒に私も着替えたの。このラボでお茶を出す時は、あの格好の方が『らしい』でしょう？　鎮静効果を上げるために、できるだけそうしてくれと社長から言われてるの。着替えたのは、今から出かけるからよ」

　杏児は恵美の言になるほどと頷きつつも新渡戸に訴えた。

「でも、まだ僕、セルフでやるレシプロ、自信ないです」

　新渡戸は、杏児から、恵美と一緒に着替えてきたユキに視線を移しながら畳みかける。
「だがもう時間がない。空港へ向かわないと。ニューヨークへ着いてからも、もし時間が取れたら練習しておくといい。ただし、慣れないうちは危険だから、少なくとも一人はリアル・　ワールドに残ってレシプロ中の仲間の身体を見守れ。交代でレシプロするんだ」
　その時、ホトトギスの鳴き声がして、振り子時計の横の壁面に設置してあるモニターが自動的に映像を映し出した。

　それを見て恵美が言う。

「迎えの車が一階車寄せに到着しました」

「よし、行こう」

　恵美が、スーツのポケットからスマホを取り出し、それをリモコン代わりに操作して、三和土の大戸口のエレベーターの扉を開ける。

　皆に続いて靴を履きながら、新渡戸が思い出したように三人に言った。

「ああ、それから、ことだまワールドから自力で帰ってこられなくなった場合や、リアル・ワールド側から緊急で呼び戻す手段として、君たちの脳に合い言葉を刷り込んである。レシプロ中の身体に、リアル・ワールドからそのメロディーを聞かせれば、強制的に覚醒させることができる」

　最後にエレベーターに乗り込んだユキが言う。

「部長、それ、教えておいてください」

皆に遅れてエレベーターのかごに乗り込んだ新渡戸は、おほんと咳払いして口ずさみ始めた。

「♪山寺の、和尚さんが、毬を蹴りたし毬はなしーー」

エレベーターの扉が閉まった。

　九

　車寄せに着いていた黒い特別仕様のミニバンには、見知らぬ男性運転手のほかに、空港で落ち合うと言っていたはずの石川が助手席に、官邸まで同行していた古都田は最後部座席に座っていた。新渡戸が助手席に近づくと、石川は窓を開ける。

「総理と官房長官との打ち合わせを早く切り上げた。総理の決断を仰ぐために、政府高官たちが長蛇の列を作っているよ。総理と彼らの打ち合わせが移動のヘリの中にまで及びそうだと秘書官が言っていたから、ヘリの席を一つでも空けるためにも、時間のある私は車で向かいますと申し出た」

「そうでしたか。で、総理はやはり……？」

「うん、やはり羽田で直接見送りたいそうだ」

「……なるほど」

　納得した新渡戸は、恵美を先に後部座席に乗り込ませ、自分が続いて、二列目には三人の救国官を座らせた。

　石川が運転手に言う。

「では、やってくれ」

「了解しました」

　ミニバンは滑るようにゲートを抜けて走り出した。

　走り始めるとすぐに、運転手がハンドルを握ったまま礼儀正しく挨拶した。

「内閣府大臣官房総務課の｜服部《はっとり》と申します。羽田空港まで運転手を務めさせていただきます。本日は道がすいているので、突発的なことがなければ、羽田まで三十分弱で着きます。よろしくお願いします」

　よろしくお願いしますと三人は揃って答礼を返した後、車窓から左右の風景をうかがう。

――これがリアル・ワールドか。一か月ぶりなんだろうが、ずいぶん年月が経ったように思えてしまう……。

　車の数は少なかったし、歩道を歩く人もいない。しかし、最初の信号待ちの時に、後方からかすかに、太鼓の音と大勢のシュプレヒコールが聞こえてきた。窓は閉まっているのに、車内まで聞こえてくるのだから、相当な大声だ。

　服部運転手は、三人のＥＴが、眉をひそめて耳を澄ましているのをミラー越しに認めて口を開いた。

「後ろです。国会議事堂と総理官邸を取り囲むように朝から大規模なデモが行われています」

「デモ……」

「はい。今日は日曜日ですから、ここ数日で最大規模に膨らんでいます。ちょっと危険な人たちも加わって、警察と一触即発のきな臭い状況です。暴動に発展しなければいいのですが……ね、石川さん」

　服部が助手席の石川に水を向ける。

　石川は頷いた。

「先ほど総理官邸に報告に赴いた時は、車を取り囲まれて身の危険を感じた。服部さんの機転のおかげで助かったが、予断を許さない治安状況だ」

　信号が青になった。車は右折し、エンジン音とともに群衆の声はたちまち遠ざかる。

　万三郎は、車窓に流れる景色を複雑な思いで眺めた。首都高の高架に沿って走る三車線の大きな道に入ってもなお車はまばらだ。そして街はひっそりとしていた。ホテル、カフェ、飲食店など、施設は軒並みシャッターを下ろしている。ことにコンビニと食料品店では、『飲食料、すべて完売しました』との紙がシャッターに貼られているのを見かけた。
心の中に暗雲が広がるのを万三郎は実感している。杏児とユキも無言だからおそらく同じ気持ちだろう。

　服部は重苦しい車内の空気を何とかしようと思ったのか、車を走らせながら、努めて明るい声で、まだ四月一日なのに、ここ数日間の全国の気温がまるで初夏のように高いという話や、沖

縄の南西海上に、季節はずれかつ記録的に強い台風が近づいてきている、という話をした。

　なるほど、見るとこの車では冷房がかかっているし、車窓から見える道々ではソメイヨシノが五分咲きといったところだ。この暖かさの中では、日没までにもっと開花しそうだった。

　万三郎は助手席の石川に、後ろから声をかける。

「石川さん」

「何だ？」

「政府はまだ公式発表していないと、さっきおっしゃってましたよね」

　石川は黙った。服部運転手が沈黙の意味を察して、助手席を見ながらおどけたように答えた。

「石川さん、私も内閣府の人間です。事実を知っていますし、官房長官や事務次官を何度も送迎しています。特定秘密保護法に基づく公務員守秘義務も負っていますので、どうぞご心配なく」

　石川は、頷いて、それから顔を少しだけ後ろに向けた。

「蹴り上げられたラグビーボールのように、いびつな楕円天体が、回転しながら地球に近づいている。そこまでは民間観測機関の指摘を受けて政府も認めている。それ以上については、政府はノーコメントだが、巷のうわさでは、小惑星は太平洋に衝突する、日本列島はもちろん、地球文明全体が衝突に伴う津波で壊滅すると言われている。衝突天体の形状、質量、地球との相対速度、突入角度などの要因で｜大きな衝突《ディープ・インパクト》になるということらしい」

十

車は首都高速に乗った。

「巨大台風のさ中に日本沈没。泣き面に蜂ですね」

杏児が服部運転手に調子を合わせるように、わざとおどけて言った。それなのに服部は、それをたしなめるかのように、重々しい口調で説明した。

「街の行政機能はまだ停止していませんが、民間部門は事実上機能していません。政府が公式声明を出していない以上、大企業は営業を続けようとしていたのですが、社員が出勤せず、開店休業状態です。食糧や水、日用品、医薬品の確保騒ぎはもう収束しました。今はどこへ行っても調達できません。政府は国民をむやみにあおらないように、非公式に大規模な報道規制を敷いていますが、公式発表をしない政府に対する不満からの暴動や、テロや誘拐すら起こらないとは言い切れません。また民間警備が手薄になるのを狙って、食糧倉庫や店などの打ちこわしが起こるのはもう時間の問題でしょう。治安維持のため各地でパトカーが巡回してはいますが、まだ秩序が保たれているのが不思議なくらいです。日本人らしいといえばらしいですが、国民の多くは、本当に小惑星が衝突するのなら、もうどこへ逃げても無駄だと腹をくくって家にいるようです」

しばらく車内は無言になった。その静寂を破ったのは万三郎だ。

「石川さん、私たちが受け取った指示書にあった、『国際連合緊急特別総会』って、国連総会のことですよね」

「そうだ」

「世界中の大臣や外交官が集まってくるんですよね」

「そうだ」

「ということは、先ほどお聞きした、ミサイルによる撃墜の失敗後、まだ何か衝突を回避できる可能性があって、それを話し合うために集まるのですか？」

「ニューヨークの日本政府国連代表部から連絡があったが、衝突を回避できる新たな方法はどの国からも提案される予定はないそうだ」

「じゃあ、何のために集まるのですか？」

「人類はただちに全滅するわけではなかろう。生き残った人が連絡を取り合う方法や、さらに生き延びるのに必要な手だてについて世界中で申し合わせておこうということだそうだ」

　それを聞いて杏児がつぶやいた。

「絶望的なムードですね」

「だから我々が行く」

　淡々とそう答えた石川に杏児が続けて訊く。

「僕らが行って、具体的にどんな演説をすればよいのですか？」

「最後まであきらめるべきではないと訴える」

　一瞬の間があって、それからわずかに吐き捨てるような声のトーンで杏児が返した。

「気休めでは？」

　石川は殺気立った声で杏児をとがめた。

「三浦！　俺の前で二度とその言葉を使うな。認識を変えろ。俺はあきらめてはいない。古都田くんも、新渡戸くんも、スタッフの皆も、ことだまワールドのワーズたちも、あきらめてはいない」

十一

石川が声を荒らげたことで、再び車内がシンと静まった。

「で……でもどうやって……」

それでも杏児が食い下がる。

石川に代わって後部座席から古都田が答えた。

「それが、君たちが救国官を拝命した理由だ。三浦くん、君がこの一か月間、ことだまワールドで経験し、習得した技能を駆使して、全力で世界のリーダーたちを説得するのだ。君が絶望したら、世界が絶望するのだ。そして世界は絶望した通りになる」

それを聞いて今度は万三郎が後ろを振り返って古都田に問うた。

「社長、なぜ、僕らなのでしょうか。英語習得度ということでは、新米の僕らなんかより、社長や新渡戸部長の方がよほど上級だと思いますし、ワーズたちもよりしっかりついてくると思われますが」

古都田は少し目を宙に泳がせた。

「一言で言うと、我々は歳をとりすぎているのだ」

「はあ……？」

「これまでの調査によると、英語の運用能力とは別に、検体が若いというだけで、ことだまにある種の付加的エネルギーを載せることができるようなのだ。研修初日、私はそれを確かめたかった。君たちを説明なしにチンステに送り込んだのは酔狂ではない」

杏児は万三郎の方を向いて顔をしかめて見せる。

「たしかに君たちには英文を構築する知識と技術がまったく不充分だったから、シートレは滅茶苦茶になった。だが、そうなることは承知の上だった。私が見ていたのは君たちの『運用能力』ではなく、若さの『力』だったのだ」

　万三郎が怪訝な顔をする。

「若さの、力……」

　古都田は説明を続けた。

「ある脳神経科学の権威によれば、一人の人間の知能は二つに分類できるそうだ（１）。一つ目が、暗記力、計算力、思考力、推測力など、新しい状況に適応するための問題解決能力で、『流動性知能』という。二つ目が、学習や経験によって得られた知識や技能に相当する、言語運用能力、総合分析力などで『結晶性知能』という。この結晶性知能は年齢を重ねるほどに伸びていって、五十代でピークを迎えるのに対し、一つ目の『流動性知能』は二十五歳前後をピークとして、その後は衰えていくということだ」

　万三郎が口をはさむ。

「では、その一つ目の『流動性知能』と、若さの『力』が関連していると」

「その通り」

　一、二秒の沈黙があった。隣りではユキがさっきからうつむいたままだ。車酔いかなと万三郎は気にかけた。

　古都田は続ける。

「だが私は、君たちが、本当に充分な若さの『力』を持っているのか、この目で確認したかった。なにしろ我々は、若い君たちに、人類の運命を委ねようと考えていたからな」

　万三郎が言葉を継いだ。

「そして僕らは社長を満足させた……」

「ああ。よくぞシートレを滅茶苦茶にしてくれたと感心していた。もし私のような老いぼれが、完璧な英文をオーダーしたとしても、シートレはお行儀よく出発はするだろうが、あの馬力は出ない。エネルギーの弱さは否めないだろう」

「でも、社長、あの時、お顔は怒ってらっしゃいました」

古都田は後ろでニヤリと笑ったようだ。返事のトーンでそれが分かる。

「怒っていたのではない。暴れ馬を調教して良馬に仕上げるには覚悟が要ろう？　間に合うのか、いや間に合わせなければ……という覚悟がそういう顔にさせたのだ。それに、ヒューマン社員達やワーズ達が大混乱に陥っているのを見て社長である私が笑顔を見せられるわけがないだろう？」

十二

古都田はさらに続ける。

「そして、もう一つ理由がある。それは、若くなければ高速学習に脳がついていけない、ということだ」

「高速学習……」

杏児のつぶやきを聞いて古都田は隣の新渡戸へ聞いた。

「もう話してあるのか？」

押し殺したような声で新渡戸が答える。

「はい、先ほど」

「うむ。諸君はことだまワールドにおいて、十二倍速、最後は二十倍速で情報処理を行った。まだ研究中ではあるが、あの速度は二十代前半までの脳でなければ適応できない」

古都田の隣に座っていた恵美が不意に口を挟んだ。珍しく不機嫌な声色だった。
「たとえ二十代前半の脳であっても、個人差があるから、みんなが適応できるとは限らない……」

「う……それはそうだ。まだデータが足らないから、はっきりしたことは言えないが」

古都田が語尾を濁した。

万三郎は、自分の隣のユキが下を向いたまま、微かに震えているのに気付いた。

「ユキ、気分が悪いの？　大丈夫？」

「車酔いか？」

杏児も心配して訊く。ユキは下を向いて震えたまま、首を振った。

「何震えてるんだよ、熱があるんじゃないのか？」

　万三郎はユキの頭を起こすような感じで額に手を当てた。

「触らないで。熱、ない。大丈夫だから！」

　ユキは額に当てられた手を軽く払いのけながら、万三郎の方を見上げて、辛そうな顔でわずかに首を左右に振る。

　その時、ユキの上体が突然、万三郎の胸に飛び込んできた。

「キャッ！」

十三

ユキを胸に抱きかかえたまま、万三郎の背中は車内の右側に激しく打ち付けられた。車体が右に大きく傾いて、左の前後輪がたしかに一瞬宙に浮いた……かと思えば、着地と同時に今度は大きく左へ。ユキの身体は今度は反対側の杏児の方へ激しく揺さぶられた。

ビシッ！　ガツッ！　チュイーン！

得体の知れない音と衝撃が車体を通じて伝わってくる。

「なっ、なんだ？」

杏児が奇声を上げる。運転手の服部が叫んだ。

「みなさん、何かにつかまって姿勢を低くして！」

万三郎も杏児も窓わきの取っ手を片手でつかんだ。ユキの上体は再びこちらへ倒れ込んできているので、万三郎は左手で抱きかかえた。シャーッ。車内カーテンが自動で引かれる。同時に車は右へ左へ激しく揺れた。

「本当に来たな、情報通りだな、くそッ！」

助手席の石川が取っ手に必死につかまりながら叫んだ。

ジグザグ運転の遠心力でカーテンの下端がはためく。姿勢を低くしている万三郎が隙間から見ていたそのすぐ横に、黒いバンが追い上げて来て、こちらのミニバンに並んだ。その横窓が開いていて、黒い目出し帽で顔を隠した男がピタリとこちらに拳銃の銃口を向けている。

「うわっ！」

万三郎が顔を逸らそうとしたその瞬間、

ビシッ！ ビシッ！

目の前の窓ガラスに蜘蛛の巣のような白いヒビが入る。万三郎は大きくのけぞった。服部は左

ハンドルを切ってバンにぶつかろうとする。路肩を走っていたバンはさらに端に避けてかわす。そのたびに車は大きく揺れ、ユキと恵美の短い悲鳴が飛んだ。

「なんだってんだ！　こんな一般車捕まえて、なんで銃を撃ってくるんだよ！　何が目的なんだ？」

　誰にともなく叫ぶ杏児。

　急ブレーキ、急加速、急ハンドルで敵の車を翻弄し、射撃をかわしながら、服部はわずかに後ろを振り返って微笑んだ。

「この車は一般車ではありません。防弾装甲車です。防弾ガラスで、ボディーもチタニウム特殊装甲です。安心してください」

　目の前の取っ手につかまりながら、杏児の質問はもはや叫びに近かった。

「安心してくださいって……、服部さん、あなた、本当は誰なんですか」

「私は警視庁警備部からの出向で、こうした事態の専門家です」

　服部はそう言うと同時に、ハンズフリーの無線スイッチをオンにして、早口で報告し始める。

「送迎マルヨンから東京本部へ。聞こえますか、どうぞ」

　落ち着いた女性の声が応答した。

「了解こちら東京本部、送迎マルヨン緊急事態ですか、どうぞ」

「ああ、その声はマリちゃん。緊急事態。課長そこにいる？」

「はい、代わります」

　すぐに男性の声に変わる。

「服部さん？」

「あ、課長、服部です。敵性車両一台により現在銃撃を受けています。車種は黒のアポロン、ナ

ンバーは一〇一××。検索願います。門を出た時からつけて来てたのは知っていたのですが、やっぱり撃って来ました。現在、首都高湾岸線を西に走行中、もうすぐ空港中央」

「相手の要求は？」

「分かりません。ですが、この車には届け出の通り、内閣府情報調査室の石川卓審議官が乗られています。石川さんと、運転手の私が狙撃されるとまずいことになります。この車が正門を出てすぐについてきていますので、敵は、政府官僚が乗っていることを知っていると思われます。となると、さしずめ、誘拐して、その命と引き換えに、政府の秘密シェルターか何かに避難できる権利を交渉するのでしょうか。でも、交渉材料にするなら、運転している私はともかく、乗っている人質を殺しちゃまずいでしょう？　でも奴ら、撃ってきてるんです。あらゆる方向から……」

　ビシッ！　ビシッ！

　石川の座っている助手席の窓にはカーテンがかかっていないため、並走するバンから狙い撃ちされていた。さすがの石川も顔を逸らす。

「無差別に撃ってくるんです。ひょっとして、一人、二人は本気を示すための見せしめに、殺してもいいと思っているのでしょうか」

十四

敵のバンは路肩を並走し、こちらが加速したら加速し、減速したら減速して、左側から散発的に銃撃し続けた。運転手とは別に、銃を持った人間が複数乗車しているようだ。左側に座っている石川も杏児も気が気ではない。新渡戸部長も前列のヘッドレストにつかまって頭を下げている。服部が無線で報告している。

「課長、奴ら、空港中央出口で降ろしてくれないようです。退出路をふさいで並走してます」

「調べたが、それは盗難車だ。民間人から被害届が出ている。敵はその一台だけか」

「そのようです」

「うーん……車を拉致しようとするなら、二台、三台は必要だろうに……。突発的な襲撃なのか……？」

「とにかく！　こちらに応戦する武器がないので、このまま好き放題撃たれ続けたら、さすがに車体が持ちません。援護車両ないのですか？」

ガガガガガ。

敵のバンはこちらに擦り合わせるようにぶつかってきた。

「うわっ！」

叫んだ石川の真横、至近距離に目出し帽の敵の顔があった。銃を構える二列目の窓は開いている。こちら側の窓ガラスを挟んで銃口から五十センチ以内にいる石川めがけて、奴はピストルをぶっ放した。

ビシッ、ビシッ……。

弾が全く同じ箇所に二発当たり、助手席の防弾ガラスは、粉々に割れる寸前まで大きくヒビが入った。

「まずい！」

　服部はハンドルを右に切り、敵の車から大きく離れる。

　そこへ、まさか銃撃戦が起こっているとはつゆ知らず、邪魔だ邪魔だと言わんばかりにクラクションを鳴らしながら二台の間を猛スピードで追い越して行く大型トレーラー。
服部が本部に報告がてら大声で言う。

「敵のトレーラーなら、車ごと荷台に収容されて拉致されるかも。無関係なトレーラーなら、ラッキーな目隠しになるが……。どうも後者のようだ。ならラッキーだ」

しめたとばかり、服部は車を加速し、中央レーンを走るトレーラーの右にぴったりとつけた。これでしばらく助手席側を狙われることはない。

「助手席、ガラス割られる寸前です。課長、もうすぐ浮島ジャンクションです。どっちへ行けば援護を受けられるのか、指示をください」

　無線の先は沈黙した。悩んでいるのだろう。

　たまりかねて石川が無線に口を挟む。

「内閣情報調査室の石川です。もし撃たれずに済んでも、飛行機の離陸時間が迫っている。長くは待ってくれない。搭乗は総理大臣命令なんだ。頼む、何とか援護してくれ！」
万三郎がカーテンの隙間から外を見て叫ぶ。

「あいつら、こんどは後ろから右側へ回り込んできた。身を乗り出して後ろのタイヤ、狙ってます」

　そう言っている間に、バスッと音がして車体がガタガタと揺れはじめた。服部は慎重にハンドルを操作しながら叫ぶ。

「この車は、ランフラットタイヤを履いているので、タイヤを撃たれてもしばらくは走り続けられます。だが何発も射ち込まれるとキツイ」

　敵のバンは右側の路肩から追い上げてくる。

　ガン！　ガン！

　万三郎の真横のボディーに弾丸が命中している。嫌な感触が、装甲の内側に密着させている身体にダイレクトに伝わってくる。防弾仕様車でなければ、万三郎は一も二もなく身体を打ち抜かれていることだろう。

「課長、今トンネルです。トンネル抜けたらすぐジャンクションです。アクアラインか川崎なら左、大黒ふ頭、本牧なら真っ直ぐです。どうしますか」

　トレーラーは、銃撃戦に気付いてか気付かずか、左車線に移動してスピードを緩めた。必然的に政府送迎車は前に出てしまう。敵のバンは、トレーラーに合わせてスピードを落としたこちらのミニバンの右にぴったりつけて銃口をこちらに向けている。

　服部は、車体をトレーラーに合わせてもう一車線左へ移動させた。

「トレーラーが本線から抜けるなら、分岐点直前でトレーラーの前に割り込んで、敵のバンをトレーラーの後ろに追いやります。急ハンドルを切ります。皆さん、しっかりつかまっていてください！　課長ッ、どっちですかッ！」

　服部の送迎車が走っているところはすでに、本線と分岐レーンを分ける斜線部分だ。ジャンクションの分岐点が目前に迫ってきているのだ。トレーラーはそれ以上スピードを落とさず本線を外れる左レーンを走っている。三台が時速百五十キロメートルで横一列に並んでいた。真ん中の服部の前方から、分岐点のポールが迫ってくる。その先はコンクリート壁だ。

「課長ーッ！」

「まっすぐだ服部ッ！　大黒ふ頭方面！」

「みんな、つかまって！」

　服部は急ブレーキを踏みつつ、ぎりぎりのスピードでハンドルを右に切った。

十五

「頼む、倒れるなよ……」

つぶやきながらハンドルを握る服部のミニバンは、トレーラーと袂を分かち、車体の左側を大きく浮かせながら、分岐点を警告するラバーポールをバシバシとなぎ倒して、それでもコンクリート塊に正面衝突するのを辛うじて避けきって本線上に止まった。

右側車輪が路面に着地した衝撃で車体はグラグラと揺れる。

敵のバンは、こちらがトレーラーについて東京湾アクアライン方面に出ると思い込み、ついて行こうと、ぐっと左へ切り込んできたのが裏目に出た。急減速したこちらのミニバンの前を横切って、自らもコンクリート塊に激突する寸前で、トレーラーの後ろまでようやくかわして、前後ろ逆さまの形で停止した。

「本部……敵をかわした。今、本線上に停止している」

さすがの服部も大きく息を吐く。

「服部、すまなかった。たった今、援護側の返事が来たんだ。よく聞いてくれ。そのまま湾岸線を直進して、大黒ふ頭のパーキングエリアへ入ってくれ。近隣で、援護のパトカー二台を確保した。今パーキングエリアに向かわせている。一台は敵を足止めする。石川審議官たちは、もう一台に乗り換えてもらって、すぐ羽田へ向かってくれ。ただ、警官を一人降ろしてドライバーだけにしても、一台のパトカーに乗れるのは四人だけだ。石川さん、いいですね」

「古都田社長……」

無線を聞いた石川は、最後列の古都田を振り返った。

古都田は顔色が悪く、肩で息をしていた。

「石川さん、もちろんです。私と新渡戸くんと藁手内くんは残る。石川さん、三人をよろしくお願いします」

「分かった。そうさせてもらう。あなた方もご無事で」

　その時、武装グループのバンが分岐点を回り込んで本線に戻ろうとしているのを石川がドアミラー越しに認めた。

「服部さん、奴ら戻ってきた。行こう、行こう、行こう！」

　服部は急いでアクセルを踏みこむ。ほとんど他の車の走っていない高速道路でのカーチェイスがまた始まった。

　万三郎は古都田のショックがかなりのものだと思い、後ろを気遣った。もういい年なのに、こんな乱暴な運転と銃撃の恐怖にさらされては、身体も心も相当なダメージを受けているだろう。無理もない、気分が悪くなって当然だ。

「社長、大丈夫ですか？」

　古都田からは返事がなかった。

「社長？」

　高速走行ながらも直進中なので、抱いていたユキの上体を戻し、万三郎は身体ごと後部座席の古都田に振り向いた。

　古都田は目をつぶってがっくりと首をうなだれていた。

「社……」

「シーッ！」

　驚いて思わず古都田の身体に触れようとした万三郎を、その隣に座っている恵美が強く制した。

「社長は今、レシプロ中です」

「えっ？」

「ことだまの力を使ってここを助けてるんです。ほら、新渡戸部長も」

　恵美が目で指し示した先では、新渡戸が同じように目を閉じて瞑想していた。

「さっき、この車が傾いたけどひっくり返らなかったでしょう？　あれ、社長のおかげです。ワーズの力を結集して、物理的な力に変えたの。私もレシプロしていて、社長が助けるシーン、見ていましたから。あなたたちのように若くないから、すごい精神力を使っておられるけど。今はああやって部長が社長の補佐に入ってる……」

「た、助けるって、どうやって」

「それは中浜さん、これからあなたたちが国連本部でやることでしょう？　同じです。規模はずっと小さいけれど、社長たちは、あなたたちがこれから国連で世界に訴えることが決して絵空事ではないことを、はからずも今、証明しておられるんです」

　杏児もシートから乗り出すように後ろを向いていた。

「三浦さん、いえ、三浦救国官。さっき石川さんに『気休めでは』と言っていましたが、あなたのミッションは決して気休めではないわ。最後まであきらめるべきではないと、私も思います。私も死にたくない。あなたに会えるのがこれが最後だとは思いたくない。あなたの帰りを待っている人がいることを忘れないで。きっとまた戻ってきてください」
いつも変わらず淡々とした笑顔だった恵美が、初めて見せる強い目線で杏児に訴えかけていた。その目に留まりきれなかった涙が、恵美の目尻から頬に一つ筋を描いた。

　万三郎はその時はじめて、恵美も、真実を知る人間の一人として、あらゆる恐怖や不満を笑顔の下に隠して闘っていたのだと悟った。

十六

時速百八十キロ近い攻防。少しでもハンドル操作を誤れば転倒大破、爆発炎上が確実な、一瞬たりとも気の抜けないカーチェイス。ジグザグ運転、車体のぶつけ合い、銃弾が装甲に当たる音……。実際は数分であるはずのこの時間が、万三郎にとっては数時間にすら思えた。

服部は敵の車を欺いて見事に本線からそれ、大黒ふ頭パーキングエリアに車を滑り込ませた。ガラガラの駐車スペースに赤く回転するパトライトが見えた。

服部が叫ぶ。

「左側をパトカーの側面につけます。空港に向かう人はすぐにパトカーに乗り換えてください。あとの｜方《かた》は、羽田に向けたパトカーが出たら、この車で反対方向に逃げます。もう一台のパトカーが敵を足止めしてくれるでしょう。乗り換える際、特に足元の流れ｜弾《だま》に注意して急いでください！」

ミニバンがパトカーの横に止まった。

追いかけて来ていた敵のバンは、二台のパトカーと警官を警戒して、少し離れて止まった。

万三郎が振り返ると、古都田はレシプロから覚醒していて、土気色の額にはびっしり汗が浮かんでいた。新渡戸もまた汗びっしょりで眉間にしわを寄せて前を睨んでいた。

「社長、部長！　大丈夫ですか」

「社長、部長！」

杏児もユキも振り返り、思わず古都田と新渡戸の名を呼ぶ。恵美がさっき言った通りならば、若くはないこの男たち二人は、ことだま世界にレシプロして、敵の車をわずかに横滑りさせたり、弾道をわずかに外させたり、相当なエネルギーを使って、この車と三人の救国官を守ってきていたのだろう。恵美自身は二人から数秒遅れて、今、目覚めた。あれからすぐ再度レシプロして、たった今までその様子を見届けていたに違いない。

「社長、部長、もう……もうこれ以上はお体に障ります」

　恵美はもはや、恵美らしからぬ涙声になって二人を制止する。新渡戸が肩で息をしながら前列の三人を急かした。

「おい急げ！　君らが飛行機に乗り遅れたために地球が滅びるなんて笑い話じゃ済まんぞ」

　古都田が恵美に肩を支えられながらしわがれた声を振り絞った。

「ここから見えなくなるまで、ことだまの力で君たちを守る。君たちが最後の望みなのだ」

　それを聞いた恵美が訴える。

「社長、もうだめです。そんな過酷なレシプロは本当にもう死んじゃいます。どうかおやめください。もうお休みください」

　その時。

　古都田の横の防弾ガラスがバシッ、バシッ、ガツ、ガツ、と音を立てた。続いてミシミシ……という不気味な軋みが車内に響き渡った。

「きゃあ！ 社長ッ！」

　うろたえる恵美の隣りで、頬を押さえた古都田の右手の指を縫って血がにじみ出てきた。ガラスを貫通した弾道が古都田の頬をかすめたのだ。

　恵美は慌ててハンカチを取り出して、古都田の頬の血を拭こうとする。その恵美の手を半ば振り払うようにして、古都田はクワッと目を見開き、血にまみれた手で左のスライドドアを指さした。そして腹の底に残った力を全て絞り出したような大声で言った。

「中浜、福沢、三浦ッ。さあ行けッ！」

　茫然としていた三人に「気合い」が入った。三人は異口同音に答える。

「はいッ、行ってきます！」

「今だ！　警官が援護射撃してくれている。来いと手招きされている。皆、行くぞッ！」

　そう言って石川が助手席のドアを開ける。風が吹き込んでくる。ピストルや機関銃の射撃音が

急に大きくなる。駆け出した石川がパトカーの助手席に回り込んで無事乗り込んだ。

　スライドドアが開いた。すぐに杏児が飛び出す。続いてユキ。ところが、わずか三メートル先のパトカーに乗る寸前、跳弾が杏児の靴の先を打ち抜いた。杏児は足を取られて転倒する。

「あッ、熱ッ！」

「杏児ッ！　大丈夫？」

　ユキと万三郎は杏児を抱きかかえてパトカーに押し込み、ドアを閉めた。

「熱ぅ……いや、痛ッ、いたたたた……痛い！」

　パトカーは急発進して現場を離脱した。

十七

石川と三人の救国官が乗ったパトカーは、立哨によって開けられた羽田空港の緊急ゲートから空港構内に滑り込んだ。

救国官たちのパトカーの進路を確保するため、空港内の全ての作業車両に対して、その場での完全停止を命じられていると、警察無線がパトカーの無線機から聞こえていた。
見えてきた。

数百メートル先のオープンエア・スポットには、赤く緩いカーブを描く機体のラインも真新しい政府専用機が二機、並んで沖止めされている。

一一間に合った！

万三郎は、ユキと協力してパトカー車内にあったファースト・エイド・キットで杏児の足先の止血を何とか完了してホッとしたばかりのところで、飛行機の前に立っている人々の顔ぶれを見て思わずつぶやいた。

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル」

パトカーから降りた四人をタラップ車の前で迎えたのは、ＳＰ達に警護された、内閣総理大臣、大泉万三郎その人であった。傍らには、内閣官房長官の毛利正文と、補佐官たちも居並ぶ。

キーンという飛行機のエンジン音の｜下《もと》で、皆の声は大きくならざるを得ない。

「総理、お待たせいたしました。直々のお見送り、恐縮です」

「えらい目に遭いましたな、石川さん」

「総理、そろそろ公式発表をご決断なさる時かもしれません。今回のような拉致未遂やテロがまた起こるでしょう」

「諸外国との申し合わせがあるから控えてきたが、もう支えきれんかな」

大泉は視線を移した。

「君たち三人が、救国官か。被弾してケガをしたのは……三浦杏児くんだね。大丈夫か？」

「足先のかすり傷でした。すぐ治ると思います」

　杏児は歯を食いしばって笑顔で答えた。

「それは不幸中の幸いだった。機内の救護班に連絡は行っているそうだから、搭乗したらすぐにきちんと手当を受けるといい」

「はい、そうします」

　大泉はユキに目を向ける。

「君は、福沢由紀さんだね」

「はい、そうです」

　ユキは傍から見てはっきり分かるほど震えている。頬と耳を真っ赤にして直立していた。大泉は気の毒がった。

「職務上、ショッキングな体験をさせてしまったようで、本当に申し訳ない」

「い、いえ。そ、総理と直接お話しできて、き、緊張しているのです。恐怖のせいでは、あ、ありません」

　そう聞いて、大泉はいっそう申し訳なさそうに微笑して言った。

「そうですか。機内は安全です。束の間かもしれないが、安心して休んでください」

「は、はい。あ、ありがとうございます」

　大泉は最後に万三郎の前に立った。

「そして君が、中浜万三郎くんだね」

「はい」

「下の名前が私と同じだ」

「光栄に思います」

「いや、それは今後、私のセリフになるかもしれない」

　そう言うと大泉は表情を引き締めて言った。

「私は日本国総理大臣として、最後の瞬間までこの国のために命を投げ出す覚悟を新たにしています。救国官の一人として、若い君にも同じ覚悟をお願いしたい。それを君にお願いするためだけに、私は超多忙の官邸を抜けてここにやってきた」

「私に？」

「そうだ、中浜くん、君にだ」

　すると、大泉の隣に控えていた毛利正文官房長官が、腕時計を見ながら口を開いた。

「石川くん、いいか？」

「はい、毛利長官。始めてください」

「では国連総会で演説をする者一名をここで発表し、特別指示書を手渡す。中浜万三郎救国官、前へ」

十八

機内の照明が就寝用に落とされてからは、十か月前に超新星爆発を起こしたベテルギウスが、窓から、よりはっきり赤く見え、オーロラが目まぐるしく光を明滅させ、うねっていた。あきらかに地球は磁気異常を起こしている。

日付変更線は越えたが、まだニューヨークまではかなりかかる。自分用のスポットライトの｜下《もと》、外務省の役人が用意した講演原稿のたたき台を何度も推敲していた万三郎だったが、ついにライトを消してシートを倒した。シートは二列。すぐ右隣にはユキが、通路を挟んだ向こうには杏児と石川が、すでにシートを倒して休んでいる。

手当を受けて痛み止めを処方されているとはいえ、右足の薬指と小指の先を弾丸に吹き飛ばされた杏児は、つい先ほどまでは時折りうめきながら、姿勢を右に左にと変えていたが、ようやく落ち着いたのか、あるいは疲れきったのか、動く素振りがなくなった。

万三郎もまた、頭も身体もともに疲労がピークに達しているはずだったが、こんなに広く快適なシートの中でも、何度も寝返りをうち、ため息をついた。

「眠れないの？」

低い声で呼びかけたのは隣のユキだった。

「なんだ、ユキ。起きてたの？」

「うん……。万三郎、講演原稿の推敲、終わったの？」

「いや、まだ」

「そう。大変だね。責任重大だから」

「実を言うと、指示書受け取った直後、握手しながら、総理から言われたんだ。『君たちが任務をやり遂げて帰ってくるのを信じてる』って。それが眠れない理由」

「ん……？」

「任務をやり遂げてって、俺たちにとって任務ってなんだ？　国連総会での講演で世界に訴えて共鳴してもらうことは、もちろん大事な目的なんだけど、それって最終目的じゃない。帰国して、世界と一緒に祈らなきゃ。ことだまのエネルギー、送り込まなきゃ」

「そうね」

「それで俺、総理に耳打ちしたんだ。『もし成功して帰国できたら、伊勢の神宮に飛んで、そこで地球の無事を祈りたいのですが、ヘリを手配していただけませんか？』って」

「伊勢の神宮……」

「ことだまのパワーを引き出すのにいちばんふさわしい場所だと思ったんだ」

「総理は何て？」

「うらやましいって。『国家の一大事なんだから、私も本当は伊勢の神宮で祈りたい。だけど私は最後まで官邸から出ることはできないだろう』って」

「それで、約束してくれたの？」

「ああ」

「ふうん……」

　しばらくユキは押し黙った。

　仕切りカーテンのずっと後ろの方の席で赤ちゃんの夜泣きが聞こえる。この飛行機には、ニューヨークに帰るアメリカ人高官の家族も乗っていて満席なのだ。

　ユキがまた、思いついたように口を開いた。

「ねえ、ワーズたちは、私たちと一緒にニューヨークへ向かっているのかな？」

「さあ……。ことだまワールドの中で、場所の概念がどうなっているのか、覚醒してこのかた、もうよく分からなくなってる」

「……」

「時間の概念だってそうだよ。俺は、ことだまワールドでの一年間はそれなりにリアリティーがあると思っていた。それなのに、覚醒してから、実はリアル・ワールドでは一か月だったと聞かされた。とたんに、一年間のリアリティーが薄れてきているんだ」

　万三郎は一度、傾けたシートから上体を起こして、カップホルダーにあったプラスチック・コップの水を飲んだ。

　十九

「ユキ、君はどういうなりゆきで自分がＥＴになったか、知ってるの？」

　ユキは万三郎から目を逸らして、目の前の宙を眺めながら答える。

「知らない」

「ふうん……。じゃあ、もう一つ訊くけど、ことだまワールドで過ごしている間、自分がいつから、どうしてここにいるのだろうって考えたこと、一度もない？」

　ユキは再び押し黙って、それから、くぐもったような声でやっと答えた。

「それは……ないことは……」

「そう、ユキだって、ないことはないだろう？　そうした疑問が出るのは、ある時点よりも過去については、記憶が断絶しているからだ。自分の人生が、最近突然始まっていて、それ以前の記憶はない。記憶が断絶しているって、不自然だと思わなかった？」

「でも、例えば、『物心ついた頃』以前のこととかは、幼すぎて誰でも記憶がないのが自然じゃない？」

「いや、それとは違うね。だって、こっちの世界で言えば、わずか一か月前、あっちの世界で言っても一年前のことだよ？　それ以前の記憶がないっていうのは、二十歳を過ぎている俺たちの歳からいえば不自然だろ？」

「……」

「一年いたという実感が薄れてはきているけど、あっちにいる時、特に研修初めの頃、俺は何回も『断絶」以前を思い出そうとした……ような気がする。そして、もちろん何も思い出せなかったんだけど、不思議なことには、だんだんと、『思い出そうという意思を持つこと』自体をさせないような何かが、自分自身の中に芽生えてきたことだ」

　万三郎の話を聴いているユキの瞳が、薄暗い機内の隣のシート、三十センチメートルほど離れたところで、猫のそれのように大きく光っている。

「矛盾するようだけど、思い出したいのに、思い出す行為が不快に思えて、断念してしまう……というか、断念させられる……というか」

　万三郎は再び身体を起こし、水を飲んで、話を続ける。

「黒板に爪を立てる音とか、百円玉を咥えたら感じそうな歯触りとか、昼間の太陽を直視することとか。断絶した記憶がありそうな方向を向くと、そういう嫌な感覚が一斉に自分に襲い掛かってくるような、そんな感じだった……ような気がする。そうして、いつしかその記憶を求めなくなってしまった……ような気がする」

　顔をこちらに向けて聴いていたユキが、正面に向き直って毛布を掛け直した。

「ね、万三郎。もう寝た方がいいんじゃない？」

「覚醒して俺、思い出したんだ」

「ええっ！」

二十

押し殺した声ながら、驚愕の声を発して、ユキは、今シートに落ち着かせたはずの上半身をこちらに乗りだすようにして起こした。万三郎はユキの反応の大きさに逆に驚いた。通路を挟んでユキの向こうで背中を向けていた杏児の鼾が止まって、眠ったまま痛そうに足先をさすろうとしている。起こしてしまっては気の毒と、万三郎はしばらくの間、口をつぐんだ。

万三郎の左の窓からは、弱い月明かりに照らされた雲海が眼下に広がっていた。離陸時の、機長によるルート案内のアナウンスから、時間的に、ベーリング海上空だと思われる。飛行機は安定した気流の中を順調に飛んでいる。ただ一つ異常なのは、雲海から漆黒の上空にかけて、真っ赤なオーロラが、のたうつ蛇のように、時おり濃く淡くはためきつつ、飛行機についてくることだった。

「俺が思い出したのはね……ことだまワールドの記憶が始まる前に起こったことだ。足摺岬沖で釣りをしていたんだ。｜時化《しけ》の海に落ちて、友達である船長が必死で俺を呼ぶところまでは記憶がよみがえってきた。きっと、あれから俺はおぼれたんだ。そして意識を失い、記憶が断絶した。次に目が覚めたら、白衣を着た、見知らぬ眼鏡の男が覗き込んでいて、ペンライトで俺の目を照らしながらニコリともせず言ったんだ。『ようこそ第二の人生へ、中浜万三郎くん』って」

ユキはずっと無言で、ただ目を見開いて身じろぎひとつせず万三郎の話を聴いている。

「俺はそれからまた眠っていたと思う。次に記憶がはっきりするのは、ことだまカンパニーの社長室だ。ユキはそこにいなかったけど、杏児は一緒だった」

「そ……そうなんだ」

「覚醒直後に聞いた古都田社長の話から総合的に推測すると、俺はきっと、海で溺れて仮死状態になったところを、一般人には見えない沖合いで救助されて、治療を受け、秘密裡にリンガ・ラボへ安置されて、検体番号ＪＥＳ一〇二九になったんだ。今から一か月前だから、三月の初め頃だろう。親や友人たちにはきっと、俺は行方不明、つまり、遺体も見つからなかったことになってるんだろう。そう考えるとつじつまが合うんだ」

「万三郎の意外な過去が判明、ということね」

薄暗がりの中でユキはニッコリ微笑んだ。だがその笑顔は明らかにひきつっていた。

「俺の本当の名前は、｜清水海渡《しみず かいと》だ」

二十一

万三郎はまた水を口にして後、ユキに訊いた。

「ユキも今なら自分の過去、思い出せるんじゃないの？」

「わ、私は、どうしても思い出せないの」

「ふうん……。俺と同じようにユキも、ことだまワールドの中では思い出せなかったけれど、リアル・ワールドでなら……」

小さい声でそこまで話して、万三郎はふと言葉を切って考えた。それから訊く。

「ねえ、ユキ。カプセルで覚醒した時、頭に金属の鉢巻きみたいなの、巻かれてた？」

不意にそう訊かれたユキは、コホンと小さく咳き込んで、答えた。

「お、覚えてない」

「そうかあ。俺は、巻かれてた。だって、その鉢巻きがケーブルで固定されていたのを知らずに起き上がろうとして、グキッ！ てなったもの」

「……」

「今思うに、あれで、レシプロ中の俺をコントロールしてたんじゃないか。だって、嫌な感じにめげずに、なお断絶した記憶を思い出そうとした時には、きまって急に頭痛がし始めた……ような気がする。まさか、孫悟空の頭の輪みたいに物理的に締め付けるんじゃないだろうけど、電気信号でも出していたんじゃないかな」

「さあ……」

「明日、石川さんに訊いてみようかな」

「こ……こんな大事の前には、やめておいた方がいいんじゃない？」

　万三郎は急に少し上体を起こして、ユキをまじまじと見つめた。

「ねえ、ユキ……風邪ひいてるの？」

「え？　どうして？」

「声、震えてるみたいだし、さっき、咳したじゃない」

　万三郎が指摘した通り、ユキの声はさっきから震えている。いや、声というより、ユキ自身が震えているのに万三郎は気がついたのだった。ユキはまた押し黙りかけたが、不自然に明るい声を出して誤魔化した。

「風邪じゃないわ。昼間のカーチェイスをちょっと思い出しただけ。怖かったから」

「そう？ トラウマになりそう？」

「普通じゃなかなか体験できないことだから……フフ」

　笑いながらユキは、握った右手で目尻をこすると、毛布をすっぽり頭まで引き上げて鼻をすすった。万三郎からは、あるいはユキが泣いているようにも見えたが、ユキは頭から毛布をかぶったので、それ以上追及するのはやめにして、独り言のようにつぶやいた。
「俺が思い出そうとして気持ち悪くなったり頭痛になったりしたときって、きまって社章のカモの目が赤く光っていた……ような気がするんだよな。ユキや杏児はそんな経験なかったのかなあ」

　毛布の端をこちらに少し開けて、その暗がりの中からユキがくぐもった声で言った。

「ねえ……万三郎、もうやめよ。考えること増やさないで、頭と身体、休めようよ」

「あ、ああ。そうだな、分かった」

　万三郎はふうとため息をつくと、シートに深く身体をうずめた。ただ、目だけは正面の虚空を睨んでいる。

　――そうだ、俺は東京Ｎ物産に就職が内定していたんだ。そしてＳ大学の卒業論文の口頭試問も終わって、あとは卒業式、入社式を待つのみ。だから高知県四万十市の実家にしばらく戻っていたんだ。そこで海難事故に遭った。古都田社長が言ったように、俺は――清水海渡は――もう

社会的には死んでいるのかな……。

二十二

万三郎はふと我に返り、水を飲みきって何気なく右を見た。そして、ユキがさっきと変わらず毛布の隙間からこちらを見ているのに気がついた。

「ユキ……」

万三郎が何か言おうとするのを、ユキは左手を毛布から出して、人差し指を立て、シーッというジェスチャーをした。万三郎を黙らせておいて、ユキはその左手で、シートのアームレストを立て、シートとシートの間に納めた。境い目のなくなったシートをまたいで、ユキの左手は万三郎の右手を探り当てた。

ユキは万三郎の手を握った。そしてほとんど聴き取れないような声で訴えた。

「ねえ、私、震えが止まらないの。手……握ってて。お願い」

「あ、ああ。分かった」

万三郎は少し驚いたが、毛布の隙間からのぞくユキの目が濡れているように見えて、安心させてあげなくてはと、ユキの手を握り返す。風邪で熱がこもっている感じではなかった。きめの細かい、さらさらと滑らかな手の甲から伝わってくるのは、むしろひんやり生ぬるい体温で、ユキの手は力なく万三郎に握られるがまま、そこにあった。

――ことだまワールドで、ユキの手を握ったことがあったかな……。

覚醒してまだ丸一日ほどしか経っていないのに、ティートータラーでよく食べた、マスター・ジロー白洲田特製ハンバーグの、あの香ばしい匂いや肉汁たっぷりの味のリアリティーも、もう色褪せ始めている。

いろはの鴨焼きは脂ののりといい、得も言われぬ旨さだったように思うが、それすら情感を伴わない記号へと、刻一刻と変わりつつあるようだ。

――あ。いろはの店の外でユキを抱きしめたことがあったな……。

だが今、あの時のユキの頭の重さや髪の毛の質感は幻のようにしか思えない。

「もしーー」

「ん？」

「もし、地球が助かったら、私たち、どうなるのかな……」

「……」

「万三郎とも離れ離れになっちゃうのかな……」

　万三郎はクスッと笑って、ユキを握る手に少し力をこめた。

「ほら、考えること増やさないで、頭と身体休めようよ。そう言ったのはユキの方だよ」

「フフ……、そうね」

　ほんの少しだけ、ユキの手の体温が上がったように万三郎には感じられた。そしてそれが万三郎には心地よかった。

　一年間にも思えたリアリティーの不在。万三郎は、救国官として自分が何をすべきなのか、今ようやくはっきり分かった気がした。

　ーーユキの手の、この温かさを守りたい……。

　そう思ったら、握られていた手の甲を反転させて、ユキの方が万三郎を握り返してきた。

「万三郎。私も万三郎と一緒に、伊勢神宮で祈りたい」

　万三郎はユキの目を見ながら、再びユキの手を握り返した。

「ああ、もちろんだ」

　安堵の残像を残して、ユキの目は毛布の中に消えた。

　万三郎はユキの手を握ったまま窓を振り返る。オーロラは相変わらず飛行機を覆うように声なき威嚇を続けていたが、雲海は消え、眼下には漆黒の絨毯が無窮の広がりを見せている。ただ、

よく目を凝らせば、かすかに金粉を散らしたような街明かりが遠くにうかがえ、そこに命と生活があることを主張していた。仄かであっても、それもまた、守るべきリアリティーなのだと万三郎は思った。

◆◆◆

（１）一人の人間の知能は二種類に分類できるそうだ……英国生まれの心理学者レイモンド・キャッテル（Raymond Cattell, 1905 - 1998）は、知能を結晶性知能と流動性知能に分けた。

第十五章　紐育（1）

一

雨粒をためているであろう鉛色のちぎれ雲が速足で空港の上空を流れていく。雲量は七ほどか。三割ほどの隙間には、まだ青空がのぞいていた。だが、巨大な嵐、ノーイースターが近づいて来ている。

風は強かったが、さすが航空自衛隊の熟練パイロットが操縦しているだけあって、救国官はじめ多数の要人家族たちが乗った日本政府専用機は、予定していた現地時間四月一日午前十時ちょうどに、無事Ｊ・Ｆ・ケネディー空港に着陸した。

空港には民間機に加え、多数の軍用機も駐機していた。着陸した機内の窓からも、銃を持った兵士たちがものものしく立ち並び、乗降客を護衛、監視しているのが見える。

「すごい警備だな」

機内から万三郎が目を丸くしてつぶやいた。

ユキが返す。

「だって、このパニックの中、世界のＶＩＰが集まって来ているんでしょう？　混乱に乗じたテロとか、誘拐とか、略奪を警戒しているのね」

万感の思いでなかなか寝付けなかった二人はしかし、疲労と寝不足を感じさせないほど緊張感を取り戻していた。

「杏児、足の具合はどうだ？」

万三郎の問いに、これも完全に臨戦モードに入っている杏児が平然と答える。

「乗ってすぐ手当てしてもらったし、痛み止めの錠剤が効いてるからかな、痛いのは痛いけど、昨日よりはるかにましだ」

杏児は怪我した足の方も、包帯につっかけ履きではなく、すでにちゃんと革靴を履いていた。大仕事を前にしてさすがの気合いの入りようだ。石川審議官も引き締まった表情でこちらを向いて静かに言う。

「結構だ。さあ諸君、行くぞ、短期決戦だ」

　客室乗務員の案内をしおに、石川と三人は荷物を持って立ち上がった。

　降機した四人は、当局によってあらかじめ手配されていた護衛に付き添われ、ほかの乗客たちとは別の経路で空港施設内の送迎車車寄せに案内された。そこで一行は、迎えに来ていた大垣政義（おおがき まさよし）在ニューヨーク総領事と、部下の｜飯塚茂彦《いいづか しげひこ》総務部長とあいさつを交わした。

　車寄せでは、黒塗りのセダンが三台停まっており、運転士とは別に、領事館職員らしきスーツ姿の三人の男性たちが、それぞれの車の前に一人ずつ立って一行を待ち受けていた。

　飯塚総務部長が名簿を見ながら乗車する車を指示していく。

「えーっと……こちら、一番後ろの車には、佐東くんと三浦さんと福沢さん。真ん中の車には、大垣さんと石川さんと中浜さん、一番前の車には、私と他の職員たち……」

「分乗のようですね」

　杏児が石川に確認した。

「ああ、俺がそう頼んだ。保険だ。日本ですら銃で狙われたんだ。ここアメリカでは誰が何を企んでいるか分からん。万が一、俺と中浜が乗った車が拉致されたり爆破されたりしたら、三浦、福沢、お前たち二人でミッションをやってのけろ」

　石川の言葉に、杏児もユキも身を固くした。

　車列の後ろから近付いたため、一番手前が杏児とユキの車だった。車の前に、運転士と共に立っていたスーツ姿の男が、近づいて来る杏児を認め、ニコリともせず自己紹介した。

「ニューヨーク領事館総務部の｜佐東誠也《さとう せいや》二等書記官です」

「この車に乗せていただきます、内閣府｜付《づき》救国官の三浦杏児です。お世話になります」

　領事館職員であろう運転士がこちらに回り込んでいて、佐東の合図で後部ドアを開ける。

「三浦さん、どうぞ、お乗りください」

　石川にお先にと軽く一礼して、杏児が一台目の車の後部座席に乗り込もうとしていたその時、佐東書記官がユキを見て、素っ頓狂な声を上げた。

「あっ！ あなたは確かこの間――」

　ユキがいやに大きな声で言葉を継いだ。

「そう！　そうなんです！　覚えて下さっていましたか？　先日メールでご挨拶させていただいた……」

「いや、違……」

「そう！　違っていたんですよ、アドレスが。それでエラーで返ってきてしまって！　佐東さん、緊急時のためにメールアドレス、交換しておきましょう」

　ユキはそう言いながら、ぞんざいな仕草でバッグの外ポケットからスマホを取り出すと、万三郎たちから離れて佐東に近づき、佐東と二人して万三郎たちに背を向け、スマホを見せながら何やらブツブツ言っていた。

　そのやりとりをぽかんと見ていた万三郎に、石川が前の車を指さして乗車を促した。

「おい中浜。俺たちは二台目だ。先に乗ってろ」

「あ、はっ、はい」

二

石川と万三郎が乗った車の助手席には、大垣総領事が乗ると言った。万三郎は畏れ入って自分が助手席に乗りますと申し出たが、大垣はそんな万三郎の手を取って言ったのだ。
「中浜さん。私にはあなたと同じ世代の息子と娘がいます。彼らの未来を、救国官のあなたに託したい。成功を祈ります」

万三郎はそう言われた上で、総領事自らの手で後部座席に誘導されたので、いよいよ緊張で胃がきゅうっと縮む思いがした。

ほどなくして三台の車は、国連本部へ向けて走り出した。

石川が大垣と言葉を交わしている間、万三郎は車窓から外を見てぼんやり考えた。

――未来、生活、命、家族の絆……。

望んで立ち上がったわけではない。数奇な運命に翻弄されて、気がつけばここへ連れてこられていた。そして万三郎はもう、その運命から逃げられない。送迎車という監獄の向こうにあるのは、冷静に考えれば勝算のほとんどない、無謀と言わざるを得ないミッションなのだ。それでも自分一人が失敗の責めを負うだけなら気も楽だ。反対に、世界七十億人を背負っていると言われたところで、やはり実感が湧かない。だが、身近な人に手を握られて「あなたに運命を託したい」と言われると、自分が何に直面しているのか、その状況がかえって急にリアリティーを伴って襲ってくる。まるで断崖絶壁の縁に立っているところに足元を見ろと言われたかのように、万三郎は吐き気を催した。

「中浜、大丈夫か」

石川が思わずそう気遣うほど、万三郎は顔色が悪くなっていた。

「すみません石川さん。ちょっと気分が……」

すると石川はアタッシュケースをバチンと開けて紙袋を取り出した。

「飛行機に備えつけのやつを持ってきた。これを持ってろ」

「ありがとうございます。石川さん、抜かりないですね」

　石川はフッと口辺に笑みを浮かべる。

「俺が使おうと思って持ってきたんだよ」

　万三郎は少し驚いて石川の目を見上げる。石川はもう微笑を抑えて、前を向いたまま低い声で言った

「お前ひとりを崖っぷちに立たせるわけじゃない。皆一緒に戦う」

　崖に立つ万三郎の心中を読んだかのような石川の弁にさらに目を丸くしたが、少しして万三郎は、青い顔ながらニコリとした。わずかながら気持ちが軽くなった。

――そうだ、皆で、戦うんだ。

　助手席から大垣が振り向いて万三郎に言う。

「夕方の演説前まで、君たち救国官が落ち着いて準備できるよう、日本政府代表部の連中が、国連事務局ビルの応接室を一室、押さえてくれている。だが、その前に、君が講演する総会議場をあらかじめ見ておいてもらおうと思う」

三

空港から国連本部までのハイウェイは交通規制が行われていて、世界各国から集う要人たちへの便宜が図られていた。日本からの一行もスムーズにマンハッタンへ入ることができた。

車が国連本部に到着すると、国連日本政府代表部の人たちが出迎えてくれて、石川と救国官たちはあいさつを交わす。

石川は、出迎えていた日本政府代表部の｜越川秀実《こしかわ ひでみ》特命全権大使と大垣総領事、そして部下の飯塚総務部長を交えて打ち合わせをするということで、救国官たちとは別行動を取ることになった。

「忘れるところだった。中浜、三浦。領事館から、こちらに滞在中に使う携帯端末を借りている。セキュリティー対策上、通話しかできないタイプのケータイだ。今からお前たちに貸与する。お前たちや福沢を始め、俺や書記官たち、代表部の人たちなど、主だったる番号は皆端末に入っている」

二人は石川からそれぞれケータイを受け取った。

「何かあれば連絡しろ」

石川はそう言い残すと、総領事、国連大使とともに足早に歩いて行った。

セキュリティーチェックを終えると、佐東書記官が三人を開会前の総会議場へと案内してくれた。三人は総会議場の最後部から入った。広い総会議場に、まだ人影はほとんどない。

「今日は午後から開会します。セッションのトリが中浜さんです」

万三郎は自分の立場をリアルに感じざるを得なかった。

一一七十年以上にわたって世界の重要事項がここで話し合われ、世界のビッグ・ネームがここで講演した、その総会議場の演壇に、間もなく自分が立つのだ……。

万三郎の背中に佐東が声をかける。

「アポフィスが衝突したら、何億人かは即死でしょうが、すぐに全人類が絶滅する訳ではないでしょう。ですから人類最後の国連総会……にはならないとは思いますが、衝突後に、世界中で、飛行機が飛べる状態かどうかは分かりません。そういう意味では、全加盟国
が一堂に集まる総会は、もうこれで……」

「来月、また開催されるわ。世界の無事を祝って」

　万三郎が振り向いた時、佐東の言葉の最後を遮って、負けず嫌いのユキが、会議場内を眺める姿勢のままそう言い切った。佐東はユキの方を向いてまなじりを上げ、何か言わんと口をもごもごさせたが、ユキは佐東の方を向いていない。頬を紅潮させ、議場の反対側の端、黄金色の国連マークのレリーフを睨むように見つめている。そして、そんなユキの隣りで、手すりに両手を預け、吹き抜けの明かり取りの高い天井を見上げたまま、杏児がつぶやく。

「そう、そうだよ……」

　杏児は、ユキと一緒に、世界が心を一つにするために、万三郎があそこの演壇で世界へ向けてスピーチをするのと時を同じくしてことだまワールドへセルフ・レシプロを行い、万三郎の言葉にことだまのエネルギーを送り込むミッションを担う。「タッチ・ハート作戦」と石川が名付けたミッションだ。あの演壇に立つ万三郎から、こちら側の各国代表席へ、その心へ、一斉にことだまを放射するのだ。自分たちの「想い」が、彼らの心へと伝わり、琴線に触れなければならない。そう考える彼は、この総会議場のレイアウトをしっかり脳裏に焼き付けようとしていた。

「五時間後……かあ」

「いや、三浦さん、五時間後とは限りません。国連総会議長と事務総長が、加盟各国に、人類の命運に関わる非常に重要な議事があるので、しかるべき立場の人間を派遣するようにと事前通告しています。皆さんと時を同じくして、各国の代表者が続々とニューヨーク入りし、この国連本部へ集結してきています。嵐が近づいてきているので、彼らは飛行機が飛べる今日のうちに帰国したいと考えているでしょう。となると、各国代表がそろい次第、議長権限で総会が前倒しで開会されることもあり得る」

　万三郎は杏児の隣りで再び演壇を見つめていたが、佐東に問うた。

「世界の代表者が、間もなくここに集うのですよね。そして、私の前に誰がどんな話をするのですか」

　佐東は少し黙って、それから万三郎に言った。

「アポフィス衝突後に予想される、各国の暴動や侵略行為への対応、軍事行動の禁止に関する決議、向こう一年間の食糧と水の確保に関する相互援助の取り決めなどですが、万時休すの今、全ての議題が、衝突後の世界秩序をどうするのかというテーマで共通しています。唯一の例外が、あなたのスピーチです」

　万三郎は佐東の答えに耳を傾けながらも、演壇から目を逸らさなかった。佐東は息を継いでさらに続ける。

「先ほど言ったように、議長経由で、各国に事前通告が行っています。『日本が、世界を救う最後の提案を持ってくる』と。事務局が聞き取りした限りでは、世界は半信半疑です。だが、ミサイル迎撃が失敗した今、そこにいくばくかの期待を持って彼らは集まってくる。事務総長と総会議長が通告に言葉を添えたからです。『たとえ人類の歴史が存亡の危機に直面するようなことがあっても、歴史の最先端にいる我々は、最後の一人が、最後の一秒まで、顔を上げて前を向くべきだ。我々は万難を排して集い、この提案に耳を傾けるべきだ』と」

　佐東は、わずかに声を震わせる。

「中浜さん、みんな、あなたの話を聴きに集まってくるのです」

四

万三郎の内臓のどこかの器官が明らかに何かのホルモンを勢いよく体内に放出した。意識していないのに突然何かがこみあげてきて、万三郎は演壇を見つめたまま、それを必死に飲み込んだ。喉が大きく鳴った。横から見ていた杏児が思わず声をかけてくる。

「万三郎、大丈夫か」

「ちょっと佐東さん、彼にプレッシャーかけないでよ」

不満を口にしたユキに、佐東はびっくりするほどの権幕でかみついた。

「プレッシャー……。じゃあ聞くが、ことだまの力って何だ？　気休めの祈りに過ぎないんじゃないの？　僕にはあまりにも馬鹿げているように思える。そんなものに力があるなんて、とても信じられないんだよ。死を前に、心の安寧を図れということを別の言葉で説明しようとしているだけじゃないのか？　牧師が死刑囚の話を聴いてあげて、最後に『祈りなさい』と。それとどう違うんだ」

「佐東さん、いい加減にして！」

「福沢さん！　あなたは僕に向かってそう言う資格はない」

「な、何ですって！」

「あなたはそれを自覚しているはずだ。あなたはなぜここにいる？　どう責任を取るんだ」

佐東はひるむことなくユキを責め立てる。ユキはなぜか顔を真っ赤にして目を大きく見開き、わなわなと手を震わせながら佐東を睨んだ。反論すべき言葉が見つからない風だった。

「うええっ」

その時、万三郎が、こみあげてくる何かを飲み込み得ず、ついに｜嘔吐《えず》いた。胃は空っぽなので、何も出ない。数秒間、下を向いていた万三郎は、青くなった顔を上げると、弱々しく佐東に言った。

「用意してくれている部屋に行って、原稿、見直して来ます」

「おい、万三郎……」

　心配そうに声をかけてくる杏児を手で制して、万三郎は出口に歩き始める。

「一人に……させてくれ」

　興奮した佐東は、その万三郎の背中にさらに言葉を投げかけてきた。

「妻と子がいるんだ。君らが日本に帰る専用機に乗せて、親兄弟が待つ日本に返すことにした。僕は、こっちに残って日本国に殉ずる。代表部や領事館の仲間たちは皆、家族と別れて最後の瞬間まで職に奉ずる覚悟だ。だけど……だけどさ、頼む……。頼むよ、中浜さん。助けて……助けてくれ」

　万三郎は一瞬立ち止まったが、後ろを振り返ることなく、総会議場を後にしていった。

五

ユキは、処理しきれない感情の中で、過呼吸めいた症状が出始めていた。とうとう万三郎にそれ以上の声をかけあぐねて、こちらへ戻って来た杏児が、今度はユキの異常に面食らった。

「おい、どうした、ユキまで！」

ユキは喘ぎながら佐東から杏児に目を移して言った。

「大丈夫よ」

それからユキは息を整え、気持ちを落ち着けて、佐東にトイレに行きたいがと訊いた。

「ああ、案内します」

「俺も、行きたい」

三人は総会議場を出てトイレに向かいかけた。

その時、首からＩＤプレートを提げた、国連事務局のスタッフとおぼしき数人の取り巻きから報告を聴きながら、アフリカ系の身体の大きな男が三人に向かって歩いてきた。いや、正確には、三人と入れ替わりに総会議場の扉へ向かって来たのだ。

「あ！」

向こうの一団と三人が今にもすれ違おうかとする時、ユキが思わず声を上げた。その声の方に一瞬目を向けた男が、ユキを認め、それから足を止めて二度見した。それに伴って取り巻きのスタッフの足も止まり、こちらの三人と対面する形になる。男はニコリと笑って声をかけた。

「ああ、君は確か……ミズ・フクザワ！　ユキ・フクザワじゃないか」

男に親しげに見つめられ、ユキは仰天して瞳を目まぐるしく左右に動かした。

「あ……」

彼はユキに握手を求めながら、強いアフリカ訛りの英語でユキに言った。

「ユキチャン、元気そうな君にまた会えて嬉しいよ」

ユキは男の握手に応えながら、当惑した表情で愛想笑いを浮かべ、小さな声で答えた。
「ビヌワ総会議長閣下、お声をかけていただき、光栄です……」

杏児から見ても、ユキは明らかに立ち去りたそうな雰囲気だった。なのに、ビヌワ議長はユキの手をしっかり握ったまま、話を続ける。

「各国の代表団が、まもなくここへ到着すると報告が次々に入ってきている。まもなく全加盟国の代表がこの総会議場へ集うだろう。今日最後に予定されている君たちの提案に、私もおおいに期待しているよ」

佐東が言葉を挟んだ。

「議長閣下、在ニューヨーク日本総領事館付書記官の佐東です。閣下がこの度、日本を信じ、再度世界に向けて提案の機会を持てるようご尽力下さったと、わが国の政府代表部から聞いております。感謝に耐えません」

佐東はそう言って深くお辞儀をした。もちろん、頭を下げることが日本風の感謝の表現だと議長が知っていると思ってのことだ。ビヌワはユキとの握手を解き、表情を引き締めて佐東に言った。

「日本はこれまでも国連運営に誠実に貢献してきた。今日の日本の提案がどのようなものであれ、それは傾聴に値すると、私は心から信じている」

「閣下、ありがとうございます」

佐東が再び敬礼をする横から、スタッフの一人がビヌワを急かす。

「議長……」

「分かった。行こう」

歩みを再開しようとするビヌワは、再びユキを見て柔和な笑みを浮かべ、ユキの肩をポンと叩いて言った。

「今回は倒れずにうまくやりなよ、ユキチャン！」

　ウインクを残して、大きな体は取り巻きと共に議場内に消えた。

　とても人類滅亡の危機が迫っているとは思えない議長の陽気な振舞いは、しかし意図的に演出されているのだと杏児には分かった。

――それにしても……。

　杏児はビヌワ議長の背中が議場内に消えてから首を傾げた。そしてユキを振り返ったが、ユキはそれを予期していたかのように、杏児の視線を避け、佐東に話しかけていた。

「佐東さん、建物内に瞑想室がありますよね。トイレの後、そこに行きたいのです」

「メディテーション・ルームですね、石川さんの指示で、押さえてあります」

六

総会議場ビルのロビーは次第に人が増えてきた。ビヌワ議長が言ったように、続々と各国代表団が到着しているようだ。

「万三郎は大丈夫かな」

トイレを済ませ、ユキと共に瞑想室に案内される杏児がつぶやくと、佐東が答えた。

「お二人がトイレに行っている間にケータイを鳴らして見ましたが、出ませんね」

「そうですか……」

杏児は上着の内ポケットから自分の貸与ケータイを取り出して開いたが、ボタンを押そうとした指を止め、それからパタンと携帯を閉じた。通常のスピーチとはわけが違う。凄まじい重圧の中、万三郎は一人、身悶えしているだろうか。

リアル・ワールドに覚醒してすぐ、意識不明だった自分や、ことだまワールドでの十二倍速体験や、地球に小惑星が衝突する危機など、立て続けに衝撃的事実を聞かされた。それだけにとどまらず、銃弾飛び交うカーチェイスをようやくしのいで生きて空港にたどり着いた直後に、世界を救ってくれと総理大臣から直々に念を押された。そういう心理状態で機内でスピーチ原稿を渡されて、まだ二十四時間も経っていない。ミッションは、原稿を覚えて、卒なくスピーチすることではない。各国代表の心に訴えて、共感を得、世界の思いを一つにしなければばらないのだ。失敗は許されない。それは話者が誰であっても到底なし得ないことのように思われる。わずかな救いは、原稿は推敲して、自分の思いが伝わるように自由に変えて良いという、石川審議官の許しだった。万三郎にできることは、自分の言葉で話す、ということだけだ。だからといって、同時通訳に頼って、日本語でスピーチすることは許されない。同時通訳を介すと、「想い」のエネルギーが変質してしまうからだ。たいていの場合、元の話者のエネルギー・レベルから著しく低下すると、石川が言っていた。各国代表は皆、外交官レベルだから、無論、英語そのままで理解してもらえる。だから万三郎は英語でスピーチしなくてはならない。ＫＣＪで英語を学び始めて、「一ヶ月」の万三郎が。

――がんばれ、万三郎。

杏児は一人、眉を引き締める。

佐東に案内されて瞑想室の扉の前にきた。

事務局から預かった鍵で佐東が瞑想室の扉を開け、照明の明るさ調整つまみを操作した。

奥に向かってすぼまっていくような形状の、窓のない部屋。その中ほどに、百二、三十センチほどの高さの黒い直方体の石が安置してあった。一番奥には幾何学模様の壁画がはめ込んであり、その両側から間接照明がじんわりと部屋全体を照らしだしている。

「こんなところが、あるんだ……」

部屋の雰囲気が、杏児の声を自然とひそやかなものにした。

石が置かれたあたりから少し手前に、高さの低い台か、あるいは背もたれのない椅子が三つ、置かれていた。

杏児は部屋のその部分へ上がっていく。

ユキが佐東を振り返って言った。

「私たちは、あなたが『信じられない』と言った、ことだまの世界にアクセスする練習をします」

七

佐東はもう、ユキと言い争うつもりはないようだった。一時的な感情の爆発だったようだ。今はもう冷静沈着な若手外交官の風体で、自らの職責を思い出したように淡々と応対する。

「分かりました。私は総会議場に戻って、総会を聴講します。日本の講演予定時刻は、午後四時半です。四時に部屋にお迎えに……」

「佐東さん……」

ユキが佐東に打診した。佐東は頷く。

「分かりました。中浜さんをここへお連れするのですね。そこから控え室へ」

「佐東さん、ありがとう」

「では、後ほど」

扉が閉まった。ユキは椅子と思われる背の低い直方体に腰を下ろす。

「杏ちゃん、足の先、どんな具合？　まだ痛む？」

部屋の中程にある、｜黒鉄《くろがね》のような直方体の石を眺めていた杏児が、ああ、と言って、靴ごと足を少し持ち上げ、ぶらぶらしてみて、苦笑いした。

「訊かれるまで痛くなかったのに……」

ユキが杏児をまっすぐ見る。

「杏ちゃん。石川さんが、自力レシプロの練習は、慣れるまでは交代で一人ずつしろって……覚えてる？」

「うん、一人はレシプロ中のもう一人の身の安全を見守るんだよな。どうする？」

「私から先にやらせてくれない？　たぶん、うまくやれると思うの」

　杏児は一瞬、怪訝には思ったが、頷いた。

「分かった。じゃあ俺、しばらく部屋の外にいるよ。ただ、緊急時は……」

　杏児はそう言って、貸与されたケータイでユキのスマホを鳴らしてみた。着信音が、「山寺の和尚さん」のメロディーになっていた。ことだまワールドから意識を呼び戻すためのコールサインだ。

　ユキは目を丸くする。

「どうしてこの着信音……」

「石川さんが言ってたんだ。石川さんと、俺たちの四人の内々では、電話がかかってきたらこれが鳴るからって」

　それから杏児はユキの前に立ってその肩をポンと叩く。

「自力レシプロって、神経使って疲れるよなあ。ユキ、くれぐれも無理すんなよ。本番で疲れ果ててちゃ話にならないから」

「分かったわ」

　杏児は、訊きたいことを今訊くべきか迷ったが、結局何も言わずにそのまま出て行った。扉が閉まった。

八

一時間経った。杏児がケータイを手に持って部屋に入った時、ユキは椅子に腰かけたままクタッと垂れていた頭をちょうど上げて、一瞬顔をしかめ、それから目を開けた。周りを見回して、ここが瞑想室であることを思い出したようだ。

「ああ、今ちょうど呼び戻そうと思ってたところだ」

「杏ちゃん、石川さんはまだ戻らないの？」

ユキは自力レシプロによる疲労感を顔ににじませながら杏児に訊く。

「ああ、さっき電話してみたら、日本政府代表部の人たちとの打ち合わせが長引いてるらしい」

「万三郎は？」

「電話には出た。まだ部屋にいる。もうちょっと一人でいたいって」

杏児はケータイを畳んで上着の内ポケットにしまいながらユキに訊く。

「で、ワーズたちは？」

ユキは眉根を寄せて杏児を見上げた。

「大変なことになってる。石川さんに報告しなきゃ」

「なんだよ、大変なことって」

「また騒乱が起こりそうなの」

杏児は目を見開いた。

「ひょっとして、来たのか？　キジシマ派が？　ここまで？」

ユキはその杏児の目を見たまま、こくりと頷く。

「ユキは、見たのか？」

「ううん、見てない。【rumor】（うわさ）から聞いたの。で、ただでさえ皆、疲れてるところへ、【bad!】たちがこっちまで追って来てるって知って、戦々恐々としてる」

「皆、疲れてるって、どうして？」

　ユキは椅子の傍らに置いていたバッグから自分のスマホを取り出し、石川を呼び出しながら、杏児に答える。

「地球の反対側まで移動してくるのには、ただでさえ、かなりのエネルギーが要るの。ましてや今、地球の磁気がすごく狂っているせいで、ワーズたちの疲れも大きくなってる。その上、あいつらが追ってきてるって知ったもんだから、タッチ・ハート作戦どころじゃないのよ。ああ！　石川さんなんで出ないの！」

　杏児は眉をひそめて低い声でユキに言った。

「やけに詳しいな、ユキ」

　受話器を置くボタンを二度三度、せわしく押して、ユキがちらりと杏児を見上げる。そして伏し目がちに左右に視線を揺らせながら言った。

「……ワーズたちから聞いたのよ」

　杏児はユキを睨むように見下ろしている。ユキはふて腐れたようにあらぬ方向を見ていたが、ハッと顔を上げて杏児に訴えた。

「それより、【hope】がいないの」

　九

　これには杏児も驚いた。

「確かか。タッチ・ハート作戦のキーパーソン、いやキーワードだぜ、あいつは」

「【freedom】（自由）とか【liberty】（自由）とか、他のいくつかのキーワーズたちも行方不明だって、ワーズたち、大騒ぎになってた」

「間違いなくこっちには来てるの？」

「【witness】（目撃者）が言ってた。自分と同じシートレの、後ろの方の車両から降りてきたところまではちゃんと見たって」

「シートレ？　シートレでニューヨークまで飛んできたのか？」

「だって、ことだまワールドには飛行機は飛んでいないのよ」

　杏児は天を仰いだ。あんな椅子の硬いジェットコースターで何時間かかるかわからないが、ニューヨークまで飛んできたのか、そりゃ疲れる筈だと思った。

「で、【overhear】（偶然耳にする）が、シートレに乗車中、みんなが寝静まって日付変更線を越える頃に、たまたま聴いたらしいんだけど、【hope】が、【dream】（夢）とか【peace】（平和）とか【happiness】（幸福）と一緒に、ひそひそ話をしてたんだって。僕らはどうして偽善者呼ばわりされてまでこんな作戦に参加しなくちゃいけないんだろう……って聞こえたって」

　杏児は渋い顔をして腕を組んだ。

「この間のホテル・セントラルＫＣＪ事件の影響か」

　ユキは答える代わりに、せわしなくリダイヤルボタンを押している。

「ここへきて、作戦への参加拒否ってか！」

　杏児は吐き捨てるように言ったあとで、自らを落ち着かせるように、状況を独り言で整理し始

めた。

「タッチ・ハート作戦の開始が迫っている今、問題は大きく分けて三つある。一つ目は、【bad!】たちキジシマ派の一味がことだまワールドのニューヨークに来ているということ。二つ目は、作戦のキーワードである【hope】が行方不明になっているということ。そして三つ目は……」

「ああん！　やっぱり出ない……どうなってんのよ！」

　ユキがイラついてまた通話終了ボタンを何度も押したその時、杏児は低く押し殺した声でユキに言った。

「ユキ、訊きたいことがある」

　ユキはスマホをぞんざいにバッグに戻しながら答える。

「何？　ことだまワールドに関することなら、今から杏ちゃんがあっちへ行って、その目で見て来てよ。早く【hope】たちを探さないと、万三郎のスピーチが台無しになる。大したことじゃないなら、帰りの飛行機で聞くわ」

　ユキはバッグを持って立ち上がり、扉の方へ歩きかけた。その背中に向けて杏児は静かに言う。

「ことと次第によっちゃあ、帰りの飛行機に乗れないかも知れない」

　足を止めたユキは、軽くため息をついて、それから杏児を振り返った。

「何？」

「ユキ。最近、君、ニューヨークに、国連本部に来てた？」

　ユキの顔色がみるみる変わった。

　十

「な……何言い出すの？」

「佐東書記官とは今日が初対面か？」

「そ、そうよ、なんで？」

　ユキは目をクリクリさせて、記憶をたどっている。何て分かりやすい女なんだろうと杏児は思った。

「僕は目がいいんだよ。あの時、助手席の佐東さんが打っていたメールの本文が、僕の座っていた斜め後ろから見えてた。覚えてるから言おうか？　こうだ。『分かった、君と僕だけの秘密だ。しかし、また君かと思ってクラクラしたよ。本国は何考えてるんだって』佐東さんが送信ボタンを押してケータイをポケットにしまいこんだ。その直後にユキのスマホが、バッグのポケットでビーッって振動してた。あのときはなんだかよく分からなかったけど、佐東さんはさっきのメールをユキに送信したんだということは分かった。車に乗る直前に二人で話をしていたりしていたから、おおかた彼は、ユキに好意でも持ってるのかなって思ってた。でも、それは誤解だった。さっきビヌワ議長の言葉を聞いて、僕の中でつながったんだ。ユキ、君は以前にここ、ニューヨークの国連総会議場に来ていたんだ。そうだね？」

「……」

「それも、スピーチをした、そうだね？」

「……そんなこと……してない」

「じゃあ、ビヌワ議長が言ってた、『今回は倒れないでうまくやれよ』ってのはどういう意味なんだ？」

「そ、そんなこと言ってたかな」

　ユキの声は震えていた。

「今の僕のリスニング能力をなめんなよ！　あれくらいのアフリカ訛り、楽勝だ。ユキ！　総会

のスピーチ前かスピーチ中に倒れたんじゃないのか？」

「……」

「この建物には図書館が併設されている。今から図書館へ行って、何があったか議事録検索しようか？　それとも佐東さんと秘密のデートの約束でもしてるのか？」

「違うよ、そんなんじゃない」

「じゃあ、メール見せてみろよ。違うなら証明してみせろ」

「あのね、人類の一大事って時にそんな浮かれた……」

　杏児の声が大きくかぶさった。

「ユキッ！　何隠してんだ！」

　ユキはビクリとした。杏児の目をまっすぐ見すえているが、その目は少しうるんでいたし、足が震えていた。

「なんだ、秘密のデートか？　万三郎を裏切るのか？」

「な……なんでここで万三郎が出てくるのよ？」

「機内でしゃべってた話が聞こえてたんだよ」

「えっ！　杏ちゃん、寝てたんじゃ……？」

「あんな話の中、起きられるかよ！　寝たふり続けるしかないじゃないか」

「ああ、最悪……」

「最悪とか言うな！　僕は仲間として祝福したい気分だったよ。二人はお似合いだと。だけど、なんだユキ、その節操のなさは」

「佐東さんは違うのよ、そんなんじゃない」

「なんだ？　裏切りを正当化するのか？」

　杏児の「裏切り」という言葉にユキは驚いて辟易したように反論する。

「だからあ、違うって言ってんじゃない！」

「僕は万三郎の親友としてユキの裏切りは許せない。今から万三郎に言いに行く」

「ちょっ……何言ってんの！　彼は大事なスピーチの前なんだから、そっとしておいて！」

「一年間も一緒に学んだ相手を裏切る方が、人類滅亡の危機より深刻な悲劇だ」

「んーっ……もうっ！」

　ユキは半ベソをかきながらバッグからスマホを取り出し、操作して受信メール画面を開いて見せた。

「ほらっ、そんなんじゃないんだから！」

十一

杏児はユキからスマホを受け取ると、受信メールのタイトルから佐東書記官のメールを見つけて開いた。

開きながらユキに言う。

「誤解だったってさっき言ったじゃん……。ユキが佐東さんと何かあるなんて思ってないよ」

ユキがはっとして悔しがった。

「かついだのね！　メールを見るために」

「万三郎に誤解されたくないって気持ちがこんなに強いとはね……」

画面を見ながら杏児が皮肉っぽい笑みを浮かべるのを見て、ユキは頬を赤らめて唇をかみしめた。

「ほら、やっぱり、佐東さんのメールの下に、ユキが送った文章が引用で残ってる」

「ああ……」

「『>前に私がＮＹに来たこと、国家機密です。誰にも郊外しないで』。これ、あのときお迎えの車の前で佐東さんのアドレスもらって慌てて打ったメールだな。口頭で言えないから文字にした……と。もう僕が車に乗り込んで待ってたから慌ててたんだな。コウガイって字、間違ってる……」

ユキは完全に気が動転して半分涙目で杏児を見上げている。杏児はしばらくメールを見つめていたが、スマホをユキに差し出して、厳しい顔で言った。

「第一に、僕や万三郎には貸与されていないスマホが、どうしてユキにだけ研修の最初から貸与されていたのか。第二に、何のために僕や万三郎と一緒に研修を受けていたのか。第三に、君は本当は何者なのか。さあ、ユキ。説明してもらおうか」

まっすぐ伸ばした手の先にユキのスマホがある。もう嘘や言い訳は許さないという杏児の表

情だ。

　その時、ユキの後ろで瞑想室のドアがノックされた。

　ガチャ。

　精神的に追い詰められたタイミングでドアが開いたので、ユキは心中ホッとしながら振り向いた。だが、ドアの向こうから現れたのは、たった今、杏児に責められるきっかけとなった佐東書記官と万三郎だったので、ユキは驚愕し、狼狽した。

　目を見開いたユキの向こうで杏児が万三郎に声をかける。

「来たか。心定まったのか？」

　万三郎は頷きも否定もせず、目を伏したままそこに立っている。毎日その顔を見てきた杏児の目には、万三郎は、とても心定まったようには見えなかった。あれから何度も吐き気におそわれたのかも知れない。顔色は、悪い。目にも力がない。

「時間が近づいてきましたので」

　代わりに佐東が静かに答えた。

――これは、まずい。

　杏児は、万三郎がこれから一世一代のスピーチをぶつような精神状態にはとても至ってないことを直感的に理解した。想定外のことだ。

　目の前のユキも、杏児に追求されて不安定な精神状態になっている。だが、この、人類の命運を左右する一大事を前にして、杏児には、ユキが自分と万三郎の二人に何を隠しているのか、それを知らずして先に進めない思いがあった。

　杏児は困惑した顔で大きくため息をつく。

　その時、杏児が手にしていたユキのスマホから、山寺の和尚さんのメロディーが鳴り出した。杏児よりもむしろ、ユキと万三郎の方がビクリとした。

　コールは続く。杏児は画面に“Ishikawa”と出ているのを確認すると、自分が答えようと応答ボタ

ンを押しかけて、止めた。顔を上げてユキと目を合わせたまま、ユキにスマホを差し出した。

「石川さんだ。秘密指令かな」

　それを聞くや、佐東は気を利かせて、「外にいます」と部屋から出て扉を閉めた。

　ユキは杏児の一言に一瞬凍り付いた。杏児が自分を疑っているのだと気付いたのだろう、杏児を見返して一瞬ふくれっ面を浮かべ、スマホを杏児の手のひらにあえて残したまま、スピーカーモードにしてから応答ボタンを押した。

十二

「はい、福沢です」

スマホのスピーカーから石川の声が鳴る。

「俺だ。今どこにいる」

ユキはスマホのマイクに向かって答える。

「瞑想室です。三浦、中浜の両救国官も一緒です。石川さん！　何回もお電話したのに。今どちらに」

「国連事務局だ。そっちの本会議場につながっているビルだ。ベン・ジャミン国連事務総長と会っていた。グレート・ボンズ形成について理解と協力を取り付けた。当日の具体的な段取りを、国連事務局のスタッフと打ち合わせしなければならない。まだこちらで時間がかかる。そっちはどうだ、ワーズたちの士気は？」

「はい、そのことなんですが石川さん、実は、ことだまワールドでは今、大変な……」

その時突然、杏児がユキのスマホを自分の耳に当てて、ユキを遮るように話し始めた。

「石川さん、三浦です。ことだまワールドの連中は今、大変士気旺盛です。作戦遂行にまったく問題ありません」

「そうか。それは何よりだ」

呆気にとられたユキを無視して、杏児は万三郎の方を見ながら電話の向こうの石川に話し続ける。

「僕とユキは予定通り、万三郎のスピーチ中、ことだまワールドにレシプロして、タッチ・ハート作戦の指揮を執ります。石川さんはどうぞ心配ならさず、今やらなければならない仕事にご専念ください」

「理解してもらえてありがたい。嵐のせいで全て時間｜圧《お》しているんだ。では、ことだ

まワールドのことは頼むぞ三浦。俺は中浜のスピーチの時には、本会議場に戻っている。それで、中浜はどうしている？　そこにいるのか」

　万三郎は狼狽した顔をちらりと上げて杏児を見た。杏児はスマホを持ったまま答える。

「問題ありません。ですが今、トイレに行っています」

「そうか。奴に頑張れと伝えてくれ」

　スマホのスピーカー越しにそれを聞いて、万三郎は苦々しい顔をそむける。その様子を見ながら杏児は石川に返事をした。

「そう伝えます」

「スピーチ後、閉会したらロビーで会おう」

「はい」

　電話が切れた。

　ユキが何か言おうとする前に、杏児はユキにスマホを押し付けるように返し、そのまま万三郎に歩み寄った。万三郎の後ろに回り込んでその背中を軽く押す。椅子のひとつを指さし、座れと促す。

「万三郎、ちょっと部屋に入れよ」

　杏児は扉を開けて顔を出し、佐東を扉際まで招き寄せて訊いた。

「佐東さん、すみませんが三人の時間を取りたい。三十分……いや二十分構いませんか」

　佐東は少し考え込む風だったが、やがて答えた。

「やはり嵐のせいで、予定より早く総会プログラムが進んでいます。十分でお願いします」

　佐東は万三郎を講演者控室へ連れて行くために十分後に迎えに来ると言い残し、部屋を出て行った。

十三

「万三郎、ユキも、まあ座れよ」

万三郎は言われるがままに石の前に置かれた椅子に座る。ユキは杏児にもう一度目で促されたが、「のんびり座ってなんか……」と口の中で小さく言いかけた。杏児は語気を強めて、「まあ、座れって！」と言う。その迫力に気圧されて、ユキは床に座った。杏児は部屋の脇に置いていた自分の肩掛けカバンから、一人用の保温水筒を取り出して、それを手に二人と三角形に向き合うように杏児も座る。

「万三郎、スピーチ、準備できた？」

万三郎は杏児をジロリと睨んで答える。

「やっぱり、俺には無理だ」

ユキが呆れたようにつぶやく。

「無理って、そんな無責任な……」

万三郎は今度はユキを見やってムキになって言い返す。

「無責任？　ああ、そうだな、俺は無責任だ。俺一人で七十億人は救えない。悪いか」

「あなた一人じゃない！　私たちも……」

「だったら君がスピーチすればいいじゃないか！　俺は喜んで譲るよ」

ユキの言葉にかぶせるように喰ってかかる万三郎。

「俺が望んだんじゃない。どうして俺がこんな役目に……」

万三郎はそう言うと頭をかきむしって、右手でこぶしをつくると傍らの壁をドンと叩いた。

「そうだ万三郎。お前が望んだことじゃない。なのに世界を救えという。勝手だよな。理不尽だ

よな。そりゃあ悩むよな」

　杏児はそう言いながら、水筒のふたをコップにして中身を注いだ。

「よくセキュリティー・チェックで没収されなかったよ」

　次にそのコップを脇に置き、内ポケットから白い錠剤を三つ分取り出した。杏児は錠剤の一つをプチッと開け、中身を手のひらに置くと、コップを手に取り、錠剤の口に含み、液体でゴクリと流し込んだ。万三郎とユキはその様子をただ怪訝な表情で見守っている。

　杏児はすぐに二杯目を注いで、そのコップを万三郎の前に差し出した。

「飲んでくれ」

　杏児はコップを手渡し、さらに錠剤をひと粒、自らプチッと錠剤を手のひらに落とし、それも万三郎に手渡す。

「これもだ」

　万三郎は両方を受け取ると怪訝な顔で杏児を見つめる。

「杏児、何これ」

　杏児はわざと気楽な顔をつくっておどけたように言った。

「ほら、リンガ・ラボで恵美さんが出してくれたお茶、あったろ？　心が落ち着く効果がある特別なお茶だと言って。あれの冷茶だよ。錠剤はさ、ＫＣＪ特製、精神安定剤だってさ」

　言われるがままに手元を見つめた万三郎が、顔を上げて不思議そうに問う。

「なんで杏児がそんのなもの、持ってんの」

　杏児が少し笑った。

「リンガ・ラボの出発直前に、恵美さんが僕に手渡してくれた。一日や二日なら傷まないから、ミッション遂行の前にみんなで一杯ずつ飲んで。錠剤と併せると本当によく効くらからと。ただ、効果はせいぜい一時間しかもたないから、本当に直前に飲んで欲しいと。そして今がその時だ

」

　杏児はそう言って万三郎に目で合図した。万三郎は少しの間杏児を見つめていたが、やがて小さく頷くと、錠剤とお茶を飲んだ。

　十四

「恵美さん、どうして杏ちゃんに……」

「ユキ、どうして僕じゃいけないんだよ」

　万三郎からコップを受け取ると、杏児は三杯目のお茶と錠剤をユキに差し出しながらちょっと不満気に言った。

「そう言えば恵美さん、カーチェイスの時、きっと帰って来てって杏ちゃんを見て泣いてた」

「ユキ、早く飲めよ。恵美さん、ユキのことを一番心配してたぞ。彼女、極度の上がり症だからって」

「ふん、大きなお世話よ」

　ちょっとふて腐れながらもユキは、スマホを上着の内ポケットにしまい、杏児からお茶と錠剤を受け取って、すぐに飲んだ。錠剤をのどに流し込んで飲み込むと、すぐユキが訊く。

「ひょっとして、杏ちゃんと恵美さんって……」

「えっ、杏児、そうなのか？」

　ユキからコップを受け取ると、軽く拭って水筒の蓋を閉め、カバンにしまいにかかる。

「違う。そんなんじゃない」

「恵美さんは杏ちゃんのこと好きなんじゃないの？　お似合いなのに……」

　杏児は閉じたカバンをじっと見たまま、答える。

「僕には恋人が……」

　万三郎もユキも驚いた。

「ええっ！　誰？　ＫＣＪの人？」

　杏児は顔を上げて真っ直ぐユキを見た。

「僕……思い出したんだ」

「な、何を」

　ユキは上目使いにのぞき込むように杏児を見つめ、次の言葉を待った。

「ＫＣＪに来る前の自分の記憶だ」

　目を見張るユキから視線を万三郎に移しながら杏児は、思い出した記憶を咀嚼するように、話し始める。

「大学を卒業する春、ちづる……小村ちづるという恋人と、北海道の大雪山へ登山に行ったんだ。三月の大雪山はまだまだ冬。僕はＮ大の登山部に所属していたから冬山登山の経験と技術はあったけれど、後輩でもある彼女は夏山のみで冬山は初めてだった。僕は彼女に冬山の美しさを教えたくて誘ったんだ。無事登頂したものの下山する途中で天候が急変してひどく吹雪いた。ビバークするか悩みながら、僕らはなお歩いた。視界のない冬山で、結局、道に迷い、ルートから外れて、最後に二人して滑落したんだ」
万三郎は杏児をじっと見守っている。ユキは杏児の座っているあたりの床を黙って見つめている。杏児は手にしていたカバンの肩ベルトをぎゅっと握りしめて、「僕の判断ミスのせいだ」と言った。

「ふと気がつけば、僕はＫＣＪ社長室に立っていた。その時、遭難したことや、ちづるのことは全く記憶に残っていなかった。ラボで覚醒した時、僕らのカプセルの向こうに、何台も同じようなカプセルが並んでいたろう？」

　ユキは無言だったが万三郎は頷いた。

「その後、古都田社長たちから事実を聞かされて、僕らは新渡戸部長の指導でセルフ・レシプロの練習をした。三人が代わる代わる練習をしている合い間に過去の記憶を取り戻した僕は、そっと恵美さんに訊いたんだ。『あのカプセルの並びに、小村ちづるという女性はいませんか』と。すると恵美さんは……あの恵美さんが、とても悲しそうな顔をしたんだ。彼女はしばらく黙って考えていたけれど、やがて、『小村ちづるという名前の人については、いません』と答えた」

十五

「という名前の人……？」

杏児は万三郎の問いに頷く。

「おかしな言い方だろ？」

杏児はそれから、ユキを見て続ける。

「ユキが言ったように、羽田へ向かう車の中で、恵美さんは泣いて僕に言った。僕の帰りを待っている人がいると」

万三郎が反応する。

「杏児、それは俺も聞いていた。パトカーに乗り移る直前のことだ。それで恵美さんは杏児のことが好きなんだなと俺は思ったんだ」

杏児は石に視線を移し、ぼんやりと見ながら続けた。

「確かに恵美さんは僕を想ってくれていたのかもしれない。僕は飛行機の中でつらつら考えた。『小村ちづるという名前の人については、いません』という答え方は不自然だ。そして気づいたんだ」

杏児は再び万三郎を見た。

「僕の本当の名前は、｜馬込颯介《まごめ そうすけ》だ。だけど、ＫＣＪでは三浦杏児ということになっている。あのカプセルの検体につけられた名前が、小村ちづるじゃなくて、別の名前なら存在している、と恵美さんは言いたかったんじゃないか。漏えいしてはならない機密事項だからああいう言い方しかできなかったんじゃないか。そして、『あなたの帰りを待っている人』というのは、恵美さん自身もそうかもしれないが、本当はリンガ・ラボで眠っている、ちづるのことなんじゃないか。もしそうなら、ちづるともう一度会えるかも知れない」

万三郎は頷いた。

「なるほど、その可能性は、ある」

　ユキは相変わらず下を向いていた。

「ビバークするべきか下山道をさぐるべきか。万三郎、あの時僕は、迷っていたんだ。そしてその優柔不断さが最悪の結果を招いた。彼女が頼れるのは僕だけという状況で、僕は彼女を絶望に巻き込んでしまったんだ」

　一瞬、沈黙があった。そして杏児が万三郎に言った。

「僕は信じることにした。ちづるはあのカプセルの中で生きている。それなら、僕にはまだできることがある。ちづるを守る。大切なものを守る。それがたまたま人類を守ることと同じなのなら、僕は人類を守る。最後まであきらめずに、為すべきことを為して、僕は、僕を待っている人のもとに帰る」

　杏児は万三郎に向かって上体を倒し、片手を万三郎の肩に置いて言う。

「大切な人を守るためにできることが残され、することを許されている僕らは幸せなんだ。万三郎、僕はやるよ。お前のスピーチの間、ことだまワールドで、タッチ・ハート作戦に最善を尽くす。いいか万三郎。人類を守ると思うな。大切な人を守ると思え。それがたまたま人類を守ることと同じだっただけだ」

　杏児は目だけをユキに向けた。

「お前の、大切な人を守れ。できるな、万三郎」

「ああ、分かった」

　万三郎は杏児に二度、頷いた。

「杏児、ありがとう。やれるだけのこと、やってくる」

「ああ、お前ならできる」

「ワーズたちのこと、よろしく頼む」

「ああ、僕とユキに任せとけ」

万三郎は頷くとユキを見た。

「ユキ……、このミッション成功させて、一緒に日本に帰ろう」

ユキは泣いている。

ノックがあった。

「行け、救国官、中浜万三郎！」

万三郎は杏児と握手を交わし、ユキの肩をポンと叩く。

扉を開けて顔を出した佐東に頷いて、万三郎は瞑想室を出て行った。

声を上げて泣いているユキに杏児がポツリと言う。

「ユキ……やっぱり君も、恵美さん同様、全て知ってたんだな」

◆◆◆

第十六章　使命(1)

一

佐東誠也書記官に伴われて、万三郎は国連本会議場の裏手の控え室に入った。カバンを置いた途端、ノックもそこそこに典儀長が入室してきた。インド系の顔立ちで堂々とした体躯の持ち主は、明らかに不機嫌だ。

「どちらがミスター・ナカハマかな」

典儀長は不作法に訊く。佐東は典儀長に向き合って、万三郎を手で示し、あわせて自分の身分も語った。典儀長は、万三郎に向き直ってジロジロと見てきた。身長差があるので、万三郎は至近距離から見下ろされる格好だ。

「失礼ながらあなたはかなりお若いが、本当に日本国の代表として演説されるのかね」

たまりかねて佐東が間に割って入らんばかりに口を挟む。

「日本政府代表部の人間として、この方が日本国内閣総理大臣の正式な代理人であることを保証申し上げる。グプタ典儀長、この際年齢は関係ありません。ビヌワ議長閣下から申し伝えを聞いておられると思いますが」

グプタと呼ばれた典儀長は、依然、万三郎を見下ろしながら吐き捨てた。

「一官僚だと聞いている」

万三郎は答える言葉を知らず、すがるように佐東の方を見るしかなかった。

「グプタ典儀長、わが国の代表者に対して、あまり失礼な言動をなさいませんように。あなたの品位を落としますよ」

「ミスター・サトウ。あなたはまもなく本国へ帰られるのだろう」

佐東はグプタを見たままいったん口を閉じたが、やがて乾いた声で言った。

「いや、ニューヨークで職責を全うするつもりです」

「ほう」

　グプタは佐東に向き直る。

「では、訊く。家族と共に本国へ帰ることをあきらめ、この格式ある国連総会の典儀長として、最後の瞬間まで誇り高く職務を遂行しようと決意した私がなぜ、その最後の仕事として、一人の官僚風情をここから案内しなくてはならないのか。その無念が君には分かるだろう？」

「典儀長、ご安心ください。これが最後の仕事にはなりません」

　万三郎はグプタをしっかり見つめてそう言った。万三郎を見返すグプタの目が、いったん見開かれ、次に疑念たっぷりに細められた。

「ほう、そうかね……そうだと、いいなあ。以前、あなたのお国の若い女性講演者のように、一言も発することなく倒れたりしなければ、褒めて差し上げよう」

「何ですって？」

　万三郎は思わず訊き返したが、佐東がそれにかぶせるように静かな怒声を発した。

「グプタさん！　議長閣下はそのような応対をあなたに要請したのですか。非礼にもほどがあります」

　グプタはフッと笑って、二人を交互に見ながら言った。

「今から、ミクロネシア連邦の副大統領が島嶼国家の代表として演説を始める。アポフィスが太平洋に衝突したら国家と国民が消滅するので、内陸国家は、わが国民を数十名ずつ、緊急移民として受け入れてくれないか……という悲痛な嘆願だ。ミスター・ナカハマ、次だ。次があなたの番。あと十五分ほどで議場に案内する。準備しておかれるがよろしい」

　そう言い捨ててグプタはいったん部屋を出て行った。

　万三郎はため息をついて佐東を見る。佐東は目でソファに座るよう促し、万三郎と向かい合って座った。

「佐東さん、弁護して下さってありがとうございます」

「中浜さん、この部屋を通して登壇するのは、本来国家元首クラスだけです。それで彼は機嫌が悪い。まあ、彼個人の事情もあるようですが。だが気にする必要はない。総会議長がそれを認めているのだから」

　万三郎は頷き、佐東に訊いた。

「佐東さん、あなたは先程、僕の演説なんて所詮、刑の執行を控えた死刑囚に、祈りなさいと諭す牧師みたいな気休めだろうと言っていましたよね。ですからあのような典儀長の侮蔑から僕を守ってくれるなんて意外でした」

　佐東は二、三秒の沈黙の後、少し顔をほころばせて打ち明けた。

「あなたたちが瞑想室にいる間に、内村さんから私に電話があったんだ」

二

「内村さん？」

きょとんとする万三郎に逆に佐東が訊いてくる。

「あれ、知らないの？　内村鑑三郎さん。元内閣府事務次官の」

「いや……ちょっと分かりません」

「内村さんは、あなたのことを、『私の部下の部下』って言ってたから、てっきり知ってるんだと思っていたよ」

「『部下の部下』？　救国官である今の僕の上司は、石川審議官になるけど……」
「内村さんは、その石川さんの上司だった方だ。私は右も左も分からぬひよっ子の頃、なぜか内村さんに気に入ってもらって、外務省からの出向で内村さんの海外出張の際の通訳兼カバン持ちを仰せつかったものだ」

「はあ……」

「何年も前に引退して、山梨県の片田舎に隠居されたから、今になって私に直接電話をいただいて驚いた」

「山梨県の片田舎……ひょっとして、その人は、古い日本家屋のしつらえが好きで、作務衣姿で勤務して、日本茶が大好きな人でしたか？」

「そう、まさしく！」

手をポンと打って、右手の親指を立てて見せた佐東の目が輝いた。万三郎はあの人だと思い至った。

「僕は直接会ったことはないですが、｜研究所《ラボ》に写真が掲げられているのを見ました。研究所設立の功労者だと石川さんが言っていました」

「ああ、その方だよ」

「で、その、内村さんが電話で何と……？」

「中浜さん、あなたを支援してやれと」

「えっ？」

「私の長年の研究活動の集大成がその男だ、くれぐれも頼むと」

「……」

　佐東は柔らかく笑った。

「本人はそう聞いてもピンと来ないだろうがな、と内村さんはおっしゃっていた。だけど私は、内村さんが『カラスは白いなあ』と言えは、『はい、真っ白ですね』と答える人間だから、内村さんが支援しろと言うなら、命を懸けて支援する。中浜救国官。内村さんが集大成と呼ぶあなたが、ことだまの力で地球の運命を変えるというのなら、私は、それを信じることにしたよ」

　佐東は上着の内ポケットから一枚の写真を取り出して万三郎に見せた。家族の写真だった。両親に挟まれた真ん中の娘さんは、まだ小学生だろうか。カメラを見つめる愛くるしい瞳の向こうに、無邪気な幸せが見て取れた。

「｜希望《のぞみ》っていうんだ。十歳だ」

　万三郎は顔を上げて佐東を見る。いい顔をしていた。

「いい名前ですね」

「中浜さん、私はさっき取り乱して、地球を救ってくれとあなたに強く迫ったが、あなた方を空港で出迎える一時間前に、私は、この妻と娘に見送られて自宅を出たんだ。運転席から顔を出して振り返った私に、何も知らされていない｜希望《のぞみ》が『パパ、またね』って笑顔で手を振ってきた。私も、『ああ、またね』と答えてアクセルを踏んだ。『またね（again）』が来るはずないと思ったら、心はすさむね。内村さんから電話をいただくまで、私はもはや、生ける屍だった。絶望が服を着て歩いていただけだった」

　万三郎は写真を佐東に返した。返された写真に佐東は目を落とす。

「なぜ人は、未来を｜希《こいねが》い、望みを持ち続けるのか。それはきっと本能的に知っているからなんだ。未来はいつでも、宿命づけられた出来事しか起こらないわけではない。時に自分たちの意思（will）を反映して、変わり得るものなのだということを」

　独り言のようにそうつぶやくと、佐東は写真を上着の内ポケットにしまいつつ万三郎に言った。

「私は決めたんだ。必ず妻と娘に、生きて再会すると。絶望の先に未来はないから」

　万三郎は佐東の目をじっと見つめて反復する。

「絶望の先に、未来は、ない……」

　性急なノックの直後に控え室の扉が開いて、グプタが顔を出した。

「出番だ。用意はいいか」

　佐東と万三郎は、ローテーブルを挟んで同時に立ち上がり、どちらからともなくがっしりと握手を交わした。

「私は日本の席に行って聴いています。See you later again.（後で、また会いましょう）」

「I will, for sure.（ええ、必ず）」

三

ことだまワールドのニューヨーク・シティーは、リアル・ワールドのそれとそっくりだ。しかしどういうわけか、国連本部内の瞑想室からレシプロして来て見れば、そこは瞑想室ではなく、タイムズ・スクエアだった。

杏児は目を丸くして驚いた。

――まだ、こんなにも平静が保たれている！

リアル・ワールドでは厳戒態勢が敷かれていて、街中がものものしい不穏な空気に包まれているというのに、ことだまワールドのここは、リアル・ワールドの平時のこの場所と同じとまではいかないものの、悲壮感はなかった。人も、多くはないが歩いている。タイムズ・スクエアのトレードマークでもある、大きなＬＥＤ情報板やネオンサインは、やはりこちらでもギラギラ光を放っていたし、黄色いタクシーをはじめとして、交通量もそこそこある。

こちらのワーズたちも、小惑星衝突の噂を知らないはずはない。それでもまだ街がパニックになっていないのは、嵐が近づきつつあるリアル・ワールドの曇天とは違って、街に柔らかな陽がさしているからなのか。これまで聞かされていたのとは違い、地球の地磁気の乱れと、ことだまワールドの天候には実は相関関係はないのではないかとさえ杏児は思った。

「とりあえず、今は作戦遂行に集中しよう。分かったな、ユキ」

杏児は厳しい表情を作ってユキに言う。ユキはなぜか疲れをにじませた顔で頷いた。

「……分かったわ」

万三郎が瞑想室から出て行ってすぐ、二人は同時にレシプロして、ことだまワールドに来ている。リアル・ワールドで誰も見守る者がいない状況でのセルフ・レシプロは危険ではあったが、もう本番まで残された時間はわずかだったから、決行するしかなかった。

――瞑想室には内側から鍵を掛けたから大丈夫だろう。

「あ！」

　ユキが指さした先、ルビー色の階段状の桟敷に何十人も固まって腰掛けている集団は、まぎれもなく日本からやってきたワーズたちだ。二人が彼らに近づいて行くと、彼らも気がついた。

「や、杏児さん、ユキさん、ご無事で」

「ご無事で？」

　問い返したユキに対し、【｜information《インフォメーション》】（情報）が、杏児とユキを交互に見ながら答える。

「ご存知ないんで？　【bad!】とキジシマ派の悪い連中がＮＹ（こっち）まで来てるらしいんですよ。俺たちの仕事を妨害するために」

「妨害って、どういうこと？」

【｜disturb《ディスターブ》】（邪魔する）が、そこで買ってきたのであろうハンバーガーを食べる手を止めて吐き捨てるようにユキに言う。

「邪魔するってことでしょうよ」

「で、君らは、奴らに会ったのか？」

　杏児の問いに【｜negative《ネガティヴ》】（否定）が答えた。

「いいえ」

【｜rumor《ルーマー》】（うわさ）がその後を続ける。

「でも、後便のシートレでこっちに着いたグループのうち、【｜victim《ヴィクティム》】（被害者）とか何人かは、連中につかまって、連れ去られたらしいんで。『タッチ・ハート作戦が終わったら解放してやる』って言われて、どこかに拉致されていったと、その場を逃げ切った【｜runaway《ランナウェイ》】（逃亡者）が言ってたんで。あれッ、その【runaway】どこ行った？」

【rumor】は仲間たちを見回すが、【runaway】は見当たらなかった。【rumor】は立ち上がって皆に訊く。

「おい、みんな。【runaway】はどこ行ったんだ？」

【information】が口を開いた。

「【runaway】なら、そこのマックにハンバーガー買いに行くって、【hope】とか【happiness】（幸福）とか【liberty】(自由）とか、何人かでここを立って行ったのは見た。もう三十分も前だけど」

　杏児が【information】を問いただす。

「【hope】も一緒に？　三十分も前に？」

「は、はい。ひょっとしてそのまま店内で食べてるのかなと」

「あそこのマックに入るところ、見届けた？」

「い、いや、見届けてまでは……」

　杏児はユキと顔を見合わせる。

「ユキ、僕ちょっと見て来るわ」

　杏児は車道を渡って、マクドナルドへ向かって行った。

第十六章　使命（4）

四

ユキは、ワーズたちに大きな声で呼びかける。

「みんな、そろそろ時間だから、国連本部ビルに向かって」

すると、【rumor】がユキに訊き返す。

「揃っていない仲間たちは、どうするんで？」

「杏ちゃんと私で探すわ」

「探すって、この広いマンハッタンをどうやって？　探しているうちに【bad!】たちと鉢合わせしたらどうするんで？　あいつら、ＥＴ見たら放っちゃ置かんでしょう」

「それでも、何とかしないと……」

「みんなで手分けして探しましょうか」

ユキは少し考える風だったが、やがて難しい顔をして首を振った。

「ミイラ取りがミイラになったら、余計に事態が悪くなるわ。私たちだけで何とか探すから、あなたたちは先に会場に行っておいて。あ、それから会場近くに【bad!】たちが待ち伏せしているかも知れないから気をつけて」

「分かりました。じゃあみんな、行こうか」

【rumor】、【information】などが立ち上がった時、近くにいた【ironyアイロニー】（皮肉）が意地悪くユキに言った。

「それでユキさん、今回は大丈夫なんですかね？　この間みたいにわざわざニューヨークまで無駄足踏まされて……みたいなことには、まさかならんですよね」

ユキの表情が一瞬ゆがんだ。

「こ、今回は、万三郎が演台に立つから……」

「へええ。本当に大丈夫なんですかねえ……」

　いったんうつむいた顔を上げ、ユキはワーズ皆に宛てて訴えた。

「皆、今回は後がないの。失敗したら世界が滅ぶわ。世界の運命はあなたたちＫＣＪワーズ社員の肩にかかってるの。だからお願い、タッチ・ハート作戦に全力で挑んで」

　苦し気な表情を浮かべているのは、【irony】の皮肉によるダメージだけではないようにも思える。すがるようなユキの言葉に、何人かの素直な連中は頷いた。だが、【irony】はあらぬ方向を見たまましれっとうそぶく。

「全力で挑めと言われても、日本からニューヨークまで飛んでただでさえ疲れているのに、ここから国連まで歩かされた日にゃあ、全力出しても、知れてるわなあ、みんな。歩かされりゃあねえ」

　ユキは一瞬凍りつき、それから腕を組んでため息交じりの苦笑いを浮かべた。

「分かったわ。ついて来て」

　ワーズたちは桟敷を下りるユキに従う。

「タクシー！」

　手を挙げてイエロー・キャブを止めると、運転手に「国連本部ビル」と告げ、傍らの【irony】に十ドル札を二枚握らせた。

「これ、お札の形にした私のエネルギーよ。まったく、ＥＴのエネルギーでタクシー移動なんて現金なものね。国連まで一キロちょっとしかないのに……」

「こりゃ助かります、ボス。おいみんな！　全力で挑もうな」

　ユキは次々とタクシーを止め、お札を手渡し、ワーズたちを乗せては送り出した。

　五

　最後の一台を送り出すのと時を同じくして、道向こうから深刻な顔をして杏児が戻って来る。ユキを認めて道を斜めに渡りながら「ダメだ、どこにもいない」とかぶりを振った。

「杏ちゃん、あぶないッ！」

　その時、前方不注意の軽トラックが、かなりの早さで杏児に突っ込んできたのだ。杏児がトラックに気が付いた。その時トラックはもう、目の前五十センチメートルまで迫っていた。ユキは、目を大きく見開いて無意識に腕を伸ばし、手のひらをトラックに向けて絶叫した。

「ダメーッ！」

　トラックが止まった。いや、わずかに動いてはいる。

「へ？」

　頭を抱えてうずくまろうとしていた杏児は、何が起こったのか分からず怪訝そうにユキを見た。ユキは、震える手をトラックに向けたまま、杏児に言う。

「こっちへ来て、早く！」

　トラックは杏児とゆっくり接触し始めていた。

「あ、うん」

　杏児はトラックのフロントグリルに手をついて離れ、いそいそと数歩歩いてユキのいる路肩へたどり着く。

「杏ちゃん、あれ、運転手の顔見て」

　言われるがままに杏児は軽トラックの運転手を見た。前方不注意どころか前傾姿勢で目をカッと見開いてハンドルを握りしめ、轢く気満々に見える。そしてその頬には【sinister】（邪悪な）と彫ってあった。

「こいつか！　どうなってるんだ」

「も、もう、いいわね」

　ユキはそう言うと、腕を下ろしてがっくりとうなだれた。軽トラックは、道の両側の人々を驚かせながらハイ・スピードで通り過ぎて行った。人々が歩く速さが通常に戻り、辺りの至る所にあるＬＥＤビジョンの広告動画も普通の早さに戻った。

「じ、時間を、遅らせた……？　ユキが……？」

　杏児はＬＥＤビジョンのひとつを目で追いながら、隣のユキの肩を揺する。するとユキは力なく地面に崩れ落ちそうになる。

「ユキ！」

　杏児は慌ててユキを抱きかかえる。

「お、押さないでよ」

　ユキは杏児の腕の中で膨れたが、大丈夫と言うと、よろよろと自力で立ち上がる。

「なあユキ、時間を操作できるの？　いつの間に」

　杏児は真剣な顔で訊く。その問い詰めるような表情に、ユキは頷きながらも目を逸らした。

「今だけ極端に遅らせたけど、そもそもずっと、遅らせているわ……」

　杏児は目を見開いて、それから溜息をついた。

「ラボで新渡戸部長が、石川さんとか古都田社長じゃないと難しいって言ってたのに……君はいったい何者なんだ」

　ユキは渋い顔をしたが、やっとの思いで言い返した。

「作戦遂行に集中しようって、杏ちゃん言ったじゃない！」

「ああ。だけど君を信用するかどうかは別問題だ」

ユキは泣きそうな顔になった。

そこへ突然、市内観光バスが突っ込んできた。軽トラックと違って、今度は柵をなぎ倒しながら歩道エリアに侵入してきた。

「あーッ！」

杏児はユキを歩道の深い所へ突き飛ばし、自分も身をよじって、すんでのところでバスをかわす。

その直後、バスが急ハンドルを切ったものだから、屋根なし二階席に乗っていた何人かの観光客たちがもんどり打って右側に倒れ込む。すると背の高いバスだからバランスを崩して、あれよあれよという間に傾き、危ないところで止まるのか、それとも倒れてしまうのか、ギリギリのところで、コンマ何秒彷徨った挙句、ついに横転した。

第十六章　使命（6）

六

バスが倒れるまで少し間があったのと、転倒の勢いが殺されていたので、二階の乗客はバスから投げ出されはしたものの、皆受け身の姿勢で怪我を免れたようだ。

ユキと杏児は身をかわして地面に倒れ込んだまま、上体を起こして茫然とことの成り行きを見守っている。

倒れたバスから運転手が出てきた。

「げッ！」

杏児は運転手の男と目が合った。それは、バス会社の制服を着てはいたものの、ほかならぬ【bad!】その人だった。

――すると、二階の観光客というのは……？

地面に転がった人々がこっちを向いて起き上がる。その頬を見ると、【｜evil《イーヴル》】（邪悪な）、【｜vicious《ヴィシャス》】（悪徳の）、【｜brutal《ブルータル》】（極悪の）、【｜relentless《リレントレス》】（無慈悲な）、【｜ferocious《フェロウシャス》】（凶暴な）……。

「ユキッ、｜レッツ・ゴー《行こう》、レッツ・ゴー、レッツ・ゴー！」

杏児は大慌てでユキの手を引っ張る。体力が充分回復していないユキは杏児に引きずられるようにして奴らから離れていく。

二人が車道に急に飛び出したものだから、イエロー・キャブが急ブレーキをかける。

「あぶねえじゃねえか！」

タクシーが止まったのを幸いに杏児は後部ドアを叩きながら運転手に叫ぶ。

「乗せて！　早く！」

「何だ？　お客さんか？」

　そう言って運転手が後部ドアを開けるや否や、杏児はユキを座席に押し込んで、続いて自分も座席に倒れ込む。

「閉めて！」

　フロントガラス越しに、邪悪な連中がこちらへ向かって駆け寄ってくるのが見える。

　運転手が慌てる。

「何だ？　あんたらこいつらに追われてるのか？」

「車、出して！　早くッ」

「出してって、嫌だよ、俺はトラブルに巻き込まれたくない」

　ユキが叫ぶ。

「もう遅いわ。あなた、滅茶苦茶にされるわよ。早く車を出しなさいッ！」

　運転手も叫び返す。

「車、出せって、奴らをひき殺せというのか」

「転回して後ろに逃げるのよ」

「馬鹿言うな！　この道は一方通行だ」

　フロントガラス越しに迫って来る男たちがほとんどタクシーに至る。杏児とユキは先頭の男の顔に【evil】（邪悪な）と彫られているのをはっきりと認めた。杏児が叫ぶ。

「バックだ！」

　恐怖を感じていた運転手は反射的に後ろを振り返るとギアをバックに入れ、アクセルを踏み込んだ。

「あわわわ……」

「ダメッ、乗ってるッ！」

　ユキがうろたえる通り、【evil】がボンネットに乗っている。エンブレムに足を掛け、左手でワイパーを握って、奴は右手で拳銃を取り出した。

「げえーッ！」

　恐怖に顔をゆがめる運転手。

【evil】は上体のバランスを取って撃鉄を起こそうとした。

「転回だッ、ハンドルを切れ！」

　杏児の叫びに運転手は反射的にハンドルを切る。タイヤを軋ませながらタクシーは急転回する。引き金が引かれる瞬間、【evil】はバランスを崩した。撃った弾はフロントガラスを危ういところで逸れた。【evil】はボンネットから落下し、タクシーはそのまま急ハンドルで完全に向きを変え、一方通行を逆行し始めた。交通量が少ないのが幸いだ。肩で息をしつつ目を大きく見開いて、前方を注視しながら運転手が言った。

「何てこったい、ホーリー・マッカラル！」

　ユキが後部座席から後ろを振り返りながら言った。

「万三郎以外が言うの、初めて聞いた」

「あんたら、今車を寄せるから、とっとと降りてくれ！」

　そう運転手が言い終わらないうちに杏児が大きな声で拒絶する。

「ダメだ！　銃の射程距離から出るんだ！　もっと先へ行ってくれ！」

　運転手はその声にビクリとして、「ガッデム！」と叫んだ。だが彼は前を見るのに必死だ。

七

「一方通行を逆行してんだぜ、対向車が横一列で来たら一巻の終わりだ」

杏児が後ろを振り返りながら答える。

「大丈夫、危ない時は時間を遅らせるから」

「何だあんた、何言ってる？　頭おかしいのか」

ユキが杏児に耳打ちする。

「私たち二人は時間を遅らせて逃れられるけど、この人の時間は……」

「シーッ！ 分かってる」

ユキをたしなめておいて杏児は後ろを振り返る。遠くに【bad!】の姿も見えた。間違いなく自分たちを目がけてバスのハンドルを切ったのだ。

――最初に僕を轢こうとした【sinister】が先遣隊で、僕らを発見したと後続の【bad!】に連絡を入れたのか？

数百メートル逆行できているのは、たまたま交通量が少ないせいでもあるが、対向車を次々とかわすこの運転手はさすがの腕前だ。

対向車の陰に遮られ、ついに連中は見えなくなった。しかし安心はできない。【bad!】は平気でバスを転倒させるようなことをする。一度見つけた以上、どんな手を使っても追いかけてくるかも知れない。

「運転手さん、ありがとう」

「冗談じゃねえ！　ありがとうの一言でこんな、命かけられるもんか！　たっぷりはずんでもらうからな」

「分かった。これで」

運転手は、仕切りの隙間から差し出された札束をチラリと見てまた言った。

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル！」

「ユキ、最初僕を轢こうとしたあの軽トラックの荷室に【hope】たちが捕らわれていると読んだ。どう思う？」

そう訊かれたユキは、窓から街を見ていたが、杏児に答えず、急に叫んだ。

「車、止めてッ！」

逆行していた運転手にしてみれば、車を止めるのは願ってもないことだ。交差点を通り過ぎたところでタクシーはキュッと音を立てて止まった。ユキは即座に後部ドアから外に出ながら、杏児をニコリと振り返る。

「杏ちゃん、その読みは外れだと思うわ」

八

チャコールグレーのオフィスビル街の谷間、交差点の脇に、赤いオブジェがしつらえてある。台座も合わせれば大人の身長の倍以上の高さがある。実用的な物体ではない。芸術作品だと杏児もひと目で分かった。オブジェは文字の積み重ねだった。立方体並みに十分な奥行を持たせた太字のクーリエ書体の文字は、「ＨＯＰＥ」と読める。下の段の「Ｐ」「Ｅ」の上に、「Ｈ」「Ｏ」が載っている。

ユキと杏児のタクシーが通りかかった時、【hope】は少し斜めになった「Ｏ」の内側の穴に身体を横たえ、頭の後ろで腕を組んでいた。小学生の容貌で通している彼は、相変わらずサスペンダーで吊られた半ズボンを履いている。

地上二メートルほどの高さにあるその穴を、ユキは見上げた。

「【hope】！」

【hope】はかなり驚いて二人を見下ろす。

「ユ、ユキさん、杏児さん。よくここが……」

「他のワーズたちは？」

すると【hope】は、あらぬ方向を向いてそっけなく答えた。

「タイムズ・スクエアにいるよ」

杏児が言う。

「そのタイムズ・スクエアの連中はもう国連ビルへ向かった。僕らは彼らを送り出して【hope】、君らを探しに来たんだ」

【hope】が杏児をまっすぐ見て、それから七番街通りの向こうの方に漠然と目をやる。

「【bad!】の手下に連れ去られたのは、僕以外の五人。【happiness】、【liberty】、【freedom】、【dream】、【runaway】」

ユキが訊く。

「どうしてあなただけ助かったの？」

【hope】は穴からわずかに身を乗り出し、交差点の角を指さした。

「仲間たちがあそこのテラス席の場所取りしてた。ジャンケンで負けた僕だけが、みんなの分のタコスを買いに、少し離れたあそこのスタンドにいた。悲鳴が聞こえた方を見たら、奴らが三人を軽トラックの荷室に押し込むところだった。僕は軽トラックに近づいて叫んだ。そしたら運転していた【sinister】が窓を開けて僕に言ったんだ。『タッチ・ハート作戦に関わるな。作戦が失敗したらこいつらは無傷で返してやる』って。僕が追いかけようとしたら、トラックは走り去った。奴らはわざと僕を捕まえなかった。僕を試してるんだ」

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル……」

さっきタクシー運転手が言った言葉を、今度は杏児がつぶやいた。

　九

　ユキが訊く。

「【hope】、それでどうしてこの穴の中にいるの」

「自分がどうすればいいか分からなくなったからだよ」

　ユキはため息をついた。それから【hope】に優しく語りかける。

「そろそろ時間なの。国連本部へ行きましょう」

　【hope】は驚いてユキに訊き返す。

「仲間はどうするんだよ」

　ユキは努めて冷静を保ったまま、【hope】に言い聞かせる。

「【hope】、あなたはあなたの役割を果たして。【happiness】たちは、私が探し出す」

　ところが【hope】は顔色を変えてユキに喰ってかかった。

「ユキさん、あんた何言ってんだ？　あんたの役割も作戦遂行することだろ？　人探しする時間なんてないじゃないか。とにかくうまく言いくるめて僕を連れて行こうって算段か？」

「そうじゃないわ」

「嫌だよ。僕は行かない」

「【hope】、言うこと聞いて。お願い……」

「嫌だ！」

「【hope】！　業務命令だ」

　たまらず杏児がそう言い放った途端、【hope】は地面に飛び降りた。

「拒否する！　クビにしたけりゃすればいい」

「【hope】！　人類の命運がかかって……」

「だからあ！　なんで僕に人類の命運を全部乗っける？　冷静に考えてみろよ、アポフィスがぶつかるんだよ、ほぼ百パーセント。それを僕一人でひっくり返すことなんか、出来るもんか！　信じれば運命は変わる？　へっ、無理だね。それこそ偽善だ。できもしないことを、さもできるかのように人をたらしこんで。そんな偽計の片棒を担ぐなんて、まっぴらごめんだ。僕は、偽善者じゃない！」

　【hope】の反抗のしかたは尋常ではなかった。拳を握りしめて、杏児を睨み、唇を震わせながら感情的に訴えている。シートレで太平洋を渡るときにも自分に疑問を抱き続けていたと【rumor】が言っていたが、かなり根深いものがあるようだ。以前、【wish】に言われた「偽善者」という言葉が相当こたえているように、杏児には見受けられた。

　それでも杏児は苛立ちを隠せない。

「分からん奴だな！　いいか、君が今すぐ国連本部へ向かわなくちゃいけない理由は大きく分けて三つある。一つ目、時間がない。二つ目、作戦失敗は、すなわち滅亡だ。リアル・ワールドもことだまワールドも、人間もワーズも、捕らわれの【happiness】たちも、みんな消えてなくなる。三つ目、君の……」

「杏ちゃん、大声で滅亡とか言わないで。通行人がパニックになるわ」

　憤る杏児をユキが静かに制して【hope】に言う。

「じゃあ、ねえ【hope】、約束してくれる？　私は必ず【happiness】たちを国連本部へ連れ戻してくる。そうしたらあなたは、仕事してくれる？」

　【hope】は目をつぶって天を仰いだ。

「へっ！　時間ないんだろ？　そんなことは不可能だ」

「不可能かもしれないけど、希望を持ってやってみる」

　小学生の背丈の【hope】がユキをじろりと睨む。

「希望を持ってって、僕に対するあてつけか？」

「そんなんじゃない。ただ、他に方法がないから」

「仲間は助かるに越したことはない。だけど、僕が国連本部へ行くと約束はできない。僕は偽善者なのだから」

「あなたは偽善者じゃないわ。今、自分でそう言ったじゃない」

「勝手なこと言わないでくれ。僕は自分の中でまだ答えが出ていないんだ」

　【hope】の心の中が痛々しいまでの混乱状態であることが理解できる。【wish】に言われたことがトラウマになっているのだ。

十

杏児が言う。

「三つ目の理由だ。【hope】、君の代わりは誰にも務まらない」

【hope】は渋い顔をして脇を向いた。

その時ユキが、はっとした表情で背筋を伸ばした。

「杏ちゃん、感じる？」

摩天楼を見回しながら発せられたユキの問いに、杏児は怪訝な顔をする。

「何がだよ。【hope】の代わりか？」

「そうか、私だけか……」

誰にともなくそう言うと、ユキは少し屈んで【hope】の耳にささやいた。

「私を信じて待ってて。私も、あなたを信じて待ってる」

【hope】は泣きそうな顔でユキに向き直って口を尖らせた。

「だから、約束はできない！」

「もう、いくらも経たないうちに、作戦が始まるわ」

そう言うとユキは手を挙げて、今度は交通の流れに沿って走っていた別のタクシーを止め、乗り込む。杏児は当惑した。

「ユキ、【hope】をこのまま放っておくのか？」

ユキは車内からニコリとする。

「信じるってそういうことでしょ」

「いいのか？　こいつ、約束できないって……」

「そうだ、約束はできないんだから！」

　そう訴える【hope】に、車中からユキが頷く。

「分かったわ。で、杏ちゃん、どうするの」

「ど、どうするのって……ユキはどうするんだ？」

「決まってる。探しに行くのよ」

「どこへ？」

「時間がない。乗るの乗らないの？」

　杏児は【hope】とユキを交互に見比べながら慌てる。

　停車中のタクシーに、早く行けと促す後続車のクラクションが鳴る。それを聞いて、杏児はタクシーに飛び乗った。

「ハイウェイ経由でダウンタウン・マンハッタンのヘリポートへ。急いで」

　運転手は了解して車を発進させる。

「ヘリポート？　ユキ、心当たりがあるのか」

　ユキは答えない。

「もう時間がないぞ。僕たちがいないまま万三郎がスピーチ始めたら作戦が台無し……」

「分かってるわ」

「どこへ行くつもりか知らないけど、ヘリなんか乗ってる時間……」

ユキは激しく杏児に噛みついた。

「うるさい！　今、私たち、十二倍速で動いているのよ。さっきまでとは違う」

ユキからそう言われても杏児は意味が理解できなかった。

「十二倍速？　さっきまでとは違う？」

十一

小惑星衝突の噂のせいか、ことだまワールドでは交通量が少ない。ハイウェイをスイスイ走って、タクシーはほどなくしてマンハッタン島の南端近くにあるヘリポートに到着した。

【pilot】（操縦者）は素っ頓狂な声を上げる。

「なんだって！　今すぐ飛んでリバティー島に着陸しろだって？　自由の女神をただ遊覧するというならともかく、着陸なんて無茶言わんでくれ。あの島にはヘリポートはない」
「じゃあ、遊覧でいいからすぐ飛んで！」

ユキは百ドル札を十枚畳んで、【pilot】の胸ポケットに押し込んだ。杏児は呆気にとられて見ている。

数分後、二人は機上の人となっていた。たちまち眼下に自由の女神が迫ってくる。

「ユキ、何考えてるんだ？」

杏児が身振りを交えて大声で訊くと、ユキは杏児の右の耳当てを開けて、耳元で意外なことを言った。

「いいから、黙って私の手を絶対放さないで。行くわよ」

「あッ！」

パイロットが慌てる間もなく、ユキは杏児の手を取り、扉を開ける。

「大丈夫よ、福沢ッ！」

一瞬恐怖に顔をこわばらせはしたものの、キッと眉を逆立てると、ユキは自分に言い聞かせるように大声で叫んで、次の瞬間、杏児の手をつかんだまま、ヘリから飛び降りた。

「うわッ！」

杏児が恐怖でパニックになる。二人は真っ逆さまに自由の女神の足元に落下していく。

「杏ちゃん、踏ん張って！」

「え？」

　言われていることはよく分からなかったが、杏児は死にたくない一心で足をバタつかせた。ユキに手を引かれながら、二人の身体はスローモーションのように回転し、足からふわりと着地した。

「！」

　無事着地はしたものの、直後に立ちくらみが襲い、杏児は数秒間その場に座り込む。視界が戻って来ると、隣りでユキもしゃがんでいた。ユキは細かく震えている。

「おい、大丈夫か？」

　回りにいた数人の観光客が声をかけてくる。ユキはしゃがんだまま手を上げて無事をアピールした。二人が死んでいないことだけを確かめ得て、それ以上為す術もなく、爆音と共にヘリは飛び去っていった。

　杏児はゆっくり立ち上がる。

「ユキ……君は何者なんだ」

「高所、恐怖症……」

「いや、そうじゃなくて、軟着陸できることを誰に聞いて知ったんだ」

　するとユキは一瞬の静止ののち、顔だけを杏児に向けて静かに言った。

「半年前に一度経験済みってことよ。杏ちゃんだって、やればできたじゃない」

　ユキは小さく「えッ」と気合いを入れると、膝を伸ばして立ち上がり、安否を気遣う二、三人の人々に大丈夫だと言葉を投げて、杏児の手を引っ張った。

「こっちよ」

　ユキは駆け出した。女神像の裏手の、内部へ入る入口を目指しているようだった。杏児は訳が分からぬまま、ユキについて走る。

「ちょっと、お嬢さん、チケットを見せて」

　入口の扉を入ると、台座の中は大きなホールになっていた。ゲートでスタッフのおじさんが呼び止める。するとユキは、「ＫＣＪのエージェントです」と言って手で襟をグイッと引っ張って、金鴨の社章をよく見せた。

「カム・イン（どうぞ）」

　杏児も同様に許可を得て、二人は台座の中の博物館へ入る。もう杏児は何がなんだか分からない。

　博物館に人はほとんどいなかった。ユキは迷いなく歩いて行き、後頭部三分の二が壁に埋もれた、金色の巨大な顔のオブジェの前で立ち止まった。

「な、何を……？」

　顎の先が床に、眉毛の上辺が天井に接している顔面は恐ろしく迫力がある。人の頭ほどもあるその双眸は、真っ直ぐにこちらを睨んでいる。ユキはその両目をじっと睨み返すのだった。

「ユキ？」

　杏児を無視して、ユキはまるでガンを飛ばすようにその目を睨み続ける。すると……

「あッ！」

　巨大な眼球が、わずかに動いた。ユキから目を逸らしたのだ。杏児はのけぞって驚いた。眼球に可動性があるとはとても思えなかったからだ。そして、それと同時に低いモーター音がして、顔面が右にスライドし始めた。

「えーッ？」

　もう、漫画かスパイ映画の中のできごとだ。顔面の後ろにもう一枚ドアがあった。金庫のように堅牢な鋼鉄製の扉に見えたが、鍵はかかっていないようだ。ユキはレバー型の取っ手を少し押し下げて、そのままレバーを手前に引いた。分厚いドアが音もなく開く。

「ああーッ！」

　杏児は想像だにしなかったことばかりでこれまで驚愕しっぱなしだったが、今回が最大の驚きになった。探していた囚われのワーズたちがそこにいたのだ。【happiness】、【liberty】、【freedom】、【dream】、【runaway】が一斉にこちらを向き、その表情が警戒から歓喜へとみるみる変わっていった。

「ユキさん！」

「みんな、やっぱりここだったのね」

　杏児が後ろからつぶやく。

「いやいや、やっぱりって……？」

　杏児のつぶやきを無視してユキはワーズたちを急かした。

「さあ逃げるわよ。タッチ・ハート作戦が間もなく始まる。国連本部の総会議場へ行くのよ」

「分かりました！　みんな、行こう！」

　ワーズ達が連れだってユキについて出口へ向かう。一番後ろで、顔面が閉じて行くのを感じながら、杏児は唸った。

「ＫＣＪのエージェント？　うーん、福沢由紀……あいつ、何者なんだ」

十二

自由の女神が正面から見下ろす台座の麓は芝生になっている。さっきヘリコプターから飛び降りて着地したところだ。ユキはワーズたちを連れてここへ出てきた。杏児も最後に従っている。

「いい、みんな、国連本部まで直線距離で七、八キロメートルといったところ。飛べるわね。できるだけ急いで」

ユキはワーズたちにそう言ってから、杏児に向き直った。

「杏ちゃん、私は半年前にここへ来ていた時に、ミッション遂行上の必要性から石川さんにここの存在を教えてもらっていたの。その時、雉島さんという人――その時は私はまだ知らない人だった――も、ここを知っていると石川さんが言っていたのを思い出したから、雉島さんの指示を受けて【bad!】たちが監禁場所に利用しているんじゃないかと考えたの」

「あのチケット係のおじさんは？」

「彼はキジシマ派じゃないと思う。ただ【bad!】たちに脅かされて口止めされていたのね、きっと」

ユキは辺りを警戒しながら手早く髪を束ね直している。そのユキに杏児が訊いた。

「エージェントって何のことだ？」

ユキの動きが凍りついた。

「……」

「ユキ、僕や万三郎に言ってないことが、すごくたくさんあるのか」

ユキは杏児に向き直って、再び手を動かし始めた。上目使いに杏児をまっすぐ見つめながらユキは言った。

「あるわ。いずれその責めは受けるし、責任は取るわ。それより杏ちゃん、自力飛翔できるわね。さっきヘリから着地する時、うまくできたものね。あの応用だから」

　杏児は慌てる。

「ま、待ってくれ。自力飛翔って、自分で飛ぶのか？　何の助けもなしに？」

　ユキはあらぬ方向に目を凝らして、唇を噛んだ。

「来た……」

　それからユキは杏児に答える。

「そうよ。ここはエネルギーの世界。体力の消耗は大きくなるけれど、重力に反発して飛ぶことはできる。ワーズたちは必要ならばシートレなしでも飛べるし、私も練習したらすぐ飛べるようになった。杏ちゃんは筋（すじ）が良さそうだから、今すぐ飛べるはずよ」

「す、筋がって、さっきフワッとできただけだ」

　ユキはそれには答えず、ワーズたちをけしかけた。

「さ、早く！　早く行って」

「じゃ、ユキさん、あっちで待ってます」

　ワーズたちはその場で両腕を垂直にスッと伸ばし、手のひらを合わせて、膝を曲げ、垂直跳びの要領で上にジャンプする。タイミングを合わせて数回、空気を掻く真似をすると、何と宙に制止して、それから徐々に上昇を始めるのだった。そうやって彼らは次々に飛び立っていった。

「あいつらシートレが空中衝突しても、なるほど墜落死しないわけだ」

「シートレに乗車しているときは、モードが切り替わっていないから、すぐには飛べないけどね」

　杏児はそれを見て感嘆の独り言を口にしたが、ユキは左手の海の方をしきりに気にしている。それに気付いた杏児が、ユキの見る方に目を凝らすと、桟橋の先端にモーターボートが係留され、そこから十人ほどの人影が降り立ち、桟橋を大股でこちらに歩いて来る様子が見えた。

「誰だ？　キジシマ派の一味か」

ユキはそちらを見たまま黙って頷く。

「【bad!】たちか。おいユキ、逃げよう！」

ユキは、今度はかぶりを振る。

「あの子たちがもう少し遠くに飛んで行くまで、おとりにならなくちゃ」

十三

桟橋から歩いてきたのは、【bad!】に率いられた、タイムズ・スクエアで見た顔だった。すなわち、【bad!】、【sinister】（邪悪な）、【evil】（邪悪な）、【vicious】（悪徳の）、【brutal】（極悪の）、【relentless】（無慈悲な）、【ferocious】（凶暴な）といった連中だ。奴らもユキと杏児の存在にとうに気付いていた。

芝生に入り、横一列に広がった連中の真ん中を歩く【bad!】が大声で訊いてくる。

「閉じ込めておいたワーズたちを逃がしたのか」

「ええ」

「まあいい、あんたらＥＴが作戦に参加できない方がよっほどいい」

ユキは身構えて、杏児に低い声で囁く。

「いい？　あの子たちの姿が見えなくなったら合図するから、飛んで逃げるわよ」

杏児が頷いた瞬間、ユキは小さく「あ！」と言った。

【bad!】の隣を小走りでついてくる、少年【wish】を認めたからだった。双子の弟だけあって、【wish】も、【hope】と同じく半ズボン姿だった。

「杏ちゃん、私、【wish】を連れていきたい」

囁くユキに杏児が答える。

「どうやって？　僕らでさえ今から間に合うのか分からないのに、あいつを説得する時間なんか、どこにある」

低い声で囁き合っていると、連中はすぐそばまでやってきた。当の【wish】が二人に訊く。

「あんたたちの元に、あの偽善者はいるの？」

　ユキが答える。

「【hope】のことを言っているのなら、いないわ」

「そうか。じゃあまだ街のどこかにいるってことか……」

　ユキは【wish】に一歩歩み寄る。

「ねえ【wish】、あなたどうしてキジシマ派になってるの？」

　【wish】はサッと表情をこわばらせた。

「ユキさん、あんたの知ったことじゃない」

「いいえ、私はＥＴよ。あなたたちワーズのことをよく知って、適切に働いてもらうように取り計らうのが職務なの」

　ユキがさらに一歩近づいた時、【bad!】が目で合図を送った男たちが心得てさっと広がり、ユキと杏児を取り囲んだ。手には束ねたロープを持っている。

「ユキさん、僕は事実から目をそむけたくない。それだけだ」

「だったら！」

「おい、ＥＴ福沢、そこまでだ」

　にじり寄るユキをけん制するように【bad!】が釘を刺し、彼女と杏児を取り囲む輪が逆に小さくなった。

　十四

　杏児が【bad!】にほとんど懇願する。

「【bad!】、作戦の邪魔をしないでくれ！」

　その訴えを【bad!】は鼻先で笑い飛ばした。

「いや、ＥＴ三浦、邪魔する。なぜなら、それが雉島さんの今回の指令だからだ」

「そうまでして、どうして人類を滅ぼさせたいんだ？」

【bad!】は涼しい顔で即座に答える。

「雉島さんがトップに立つ世界を築きたいからだ。そしてそれは、俺がナンバー・ツーの世界だ」

「狂ってる……」

　杏児の呟きに対して、【bad!】は今度は心外そうな表情で言い返す。

「おい、言葉に気をつけろ。アポフィス衝突が契機となって新時代が到来するんだ。そこに自分の居場所がないからといって、その時代が狂っているわけじゃあない。むしろ、あんたらの方が時代の要請から狂い始めているとも言えるだろうが」

　時間が迫っていることもあって、杏児はたまらず【bad!】に歩み寄ろうとした。

「おい、【bad!】！」

ところが後ろに回っていた【evil】が杏児を後ろから羽交い絞めにしようとする。

「この野郎！」

　杏児は【evil】を背負い投げにした。

「うぉっ！」

【evil】はロープを手にしたまま無様に地面に転がった。以前、ホテル・セントラルＫＣＪでの騒動で後ろから自由を奪われた反省から、杏児が密かに考えていた反撃が見事に功を奏した形だ。だがその後は想定外だった。

「おい、ひっ捕らえろ！」

【vicious】や【brutal】が杏児に襲いかかった。同時に、ユキにも【relentless】と【ferocious】が飛びかかる。たちまち二人は完全に自由を奪われた。腕を後ろに捻り上げられながら、ユキは【wish】に語りかける。

「【wish】、本来あなたの役割は、仮定法（過去において実現しなかった、あるいは現在において実現しない願望を述べる構文）だけではないはずよ。けれどあなたは、ほとんどいつも仮定法を組まれて出動させられるから、不満でいつしか心がすさんでしまった。『僕の出番は残念がる時、後悔する時ばかりだ』と」

　聞きたくないといった風で【wish】が遮ろうとする。

「ユキさん、止めろ！」

「いいえ、止めないわ。私はあなたを責めているんじゃない。謝っているの。あなたがこれまで辛い思いをしてきたのは、あなたの役割の幅広さを理解していなかった編成部の一一クラフトマンたちの、そしてその監督者であるＥＴ、私たちの責任だと思っているから」

「もう……いいよ」

「【wish】、日本の学校教育ではあなたを仮定法以外で使わせることが少ない。だからみんな、慣れていないの。私はＥＴとして勉強してきて、あなたの可能性を理解したわ」

「もう遅いんだって。僕の心の傷は治らない」

「ごめんね【wish】、これまであなたを分かってあげられなくて……」

　【wish】の眉は上がり、目は潤んでいた。その横で【bad!】がいらつく。

「おい【wish】、福沢がごちゃごちゃ言ってんの聞いてんじゃねえぞ」

【bad!】はこれ以上【wish】と話をさせまいと、子分格の男たちに命じる。

「お前ら、早くこの二人をあの部屋へ連れて行け。閉じ込める前にちゃんとロープで手足を縛っておけよ」

十五

男たちにしょっ引かれる形で、ユキと杏児は【wish】の元を離れて行く。ユキはそれでも後ろを振り返りつつ【wish】へ訴えた。

「あなた、【hope】と喧嘩しているけど、本当は同じ本質を持っているって分かっているはずよ。【wish】、あなたには『望む』、『願う』という意味がある。それに、名詞としても『希望』、『願望』、『祈り』という意味すらあるわよね。それって、まさしく双子の兄、【hope】と同じ本質でしょう？」

「黙って歩けよ」

口をはさむ【relentless】を無視して、ユキは振り向いて立ち止まったまま訴えを続ける。

「【wish】、分かる？　【hope】は決して現実逃避をしている訳じゃないし、偽善者でもない。希望や願望、祈りは、あなたたち『ことだま』を作り出してきた人間がもともと持っているものなの。【hope】と【wish】、あなたたちは二人とも、人間の本質を象徴しているのよ」

「……」

「【wish】、あなたを失って【hope】はショックを受けていたわ。行ってあげて、お願い」

「……どこへ？」

【wish】がユキにそう訊いたので、途端に【bad!】が声にどすを効かせる。

「なんだ【wish】、お前、行くつもりなのか」

【wish】は【bad!】を見上げて釈明しようとした。

「行って、【hope】を説得する。そしてキジシマ派に引き込む」

【bad!】は身体ごと【wish】に向き合った。

「お前、俺がそんなたわごとを信じると思うのか」

「信じるも信じないも……あっ！」

　【wish】は驚愕した。【bad!】がスーツの内ポケットから拳銃を取り出して、銃口を【wish】にまっすぐ向けたからだ。

「ゴチャゴチャと面倒くせえ。この世界では撃っても死にはしないが、お前もしばらく、あいつらＥＴと一緒にここにくたばってろ」

　【bad!】はそう言いながら撃鉄を起こし、至近距離から【wish】の額にピタリと狙いを定めた。間をおかずに引き金を引こうと指先に力を込める【bad!】にユキは叫んだ。

「やめてーっ！」

　そのような制止を【bad!】が聞き入れるわけがなかったが、ユキの叫びと同時に【bad!】は静止した。【wish】は銃口に向かって大きく目を見開いたまま、凍りついたように動かなかった。
いや、動かなくなった。

　時間が、止まっている。

　杏児は辺りを見回し、大きくため息をついて、自分の身体の自由を奪っていた連中の腕からおもむろに自分の腕を引き抜きながらユキに言う。

「すごい能力だな」

　ユキも顔をゆがめながら拘束から抜け出し、答える。

「それだけエネルギーを使っているの。きついのよ。だから早く！」

　二人は、今まさに撃たれようとしている【wish】に駆け寄り、その顔を覗き込んだ。【wish】は目を開けたまま、まばたきをしない。

「杏ちゃん、お願い。彼を担いであげて」

「担いで、それで自力飛行しろっていうこと？」

「杏ちゃんならできる。早く！　私、もうそんなに長くは止めていられない」

「あ、ああ。分かった」

　杏児はせかされるままに【wish】を両腕で抱きかかえるように担ぎ上げようとして、ハッと気がついて「ちょっと、待って！」とユキに訴えた。

　十六

「何よ、早く！」

　杏児はユキに目で合図を残して、自分たちを拘束していた【bad!】の手下たちのところへ戻り、ロープ束を奪って、その一つをユキに向かって放り投げ、自分はもう一つの束で手早く彼らの身体を一つにまとめ、きつく束ねて固結びに結んだ。ロープ束を投げられたユキも心得て、肩で息をしながらも、拳銃を持ったまま固まっている【bad!】の右手首をロープで縛り、もう片方の端を、鉄柵の手すりに固く結びつけた。

「杏ちゃん！　私、もうすぐ限界……」

「分かった」

　杏児は【wish】のところに駆け戻って【wish】を抱え上げ、当惑のまなざしで目の前のユキを見る。

「飛べるのか……？」

　ユキは両膝を大きく曲げて、それから勢いをつけて伸ばした。すると身体がふわりと浮きあがる。そんなユキを見上げつつ、杏児はつぶやく。

「そんな簡単に、浮くんだ……」

　一応、要領を理解した杏児は、【wish】を抱いたままスクワットのように屈み、そして膝に力入れてエイヤッと直立した。

「おっ、浮いた！」

「杏ちゃん、漕いで、漕いでっ！」

　二メートルほど上からユキが見下ろして叫ぶ。

「こ、漕ぐって……」

「水泳と一緒よ、とにかくもがいて！　ああ……もう限界」

　途端に大きな銃声が響いた。

　【wish】を抱いた杏児がビクリと震える。時間が、動き出したのだ。ユキと杏児は懸命に上空へともがき続けた。

「ハッ、ハッ！」

　ユキは苦しそうだったが、とにかく二人は上昇していく。

　二人に最初に気付いたのは、【bad!】ではなく、縛られた連中だった。

「【bad!】さん、上、上！」

　手下どもの声に従って上空を見上げる【bad!】と、おののきながら地上を見下ろすユキの目が合った。一秒ののち、【bad!】はゆっくり銃口をユキに向けようとする。ユキの顔が恐怖にゆがんだ。

「うっ！」

　思うように腕が上がりきらない。その時になってはじめて、【bad!】は手首のロープに気が付いた。そのロープのもう一方の端が手すりに結び付けられているのを悟る間に、二人はさらに上空へと逃れていく。

「ガッデム！　ナメた真似しやがって……」

　【bad!】は垂直にジャンプしたが、ロープに引っ張られてその軌道は大きく円弧を描いた。だが、【wish】を抱えた杏児には、【bad!】が一瞬、自分の方へぐんと近づてくるように見えたので、想像を絶する恐怖だった。

　さらに【bad!】はロープに引っ張られて体は二人から離れていきながらも、拳銃を左手に持ち替えてこちらへ向けて撃ってくる。

「野郎ーッ！」

　ドギューン、ドギューン、ドギューン……。

　利き手ではないゆえに射撃は不正確だった。　それを幸いに、杏児は片手と両足で必死に空気を掻いて、先行するユキを追う。

「はあ、はあ、はあ……」

「覚えてやがれ！」

　最後の銃声に続いて負け惜しみを聞きながら、二人は軌道を国連本部ビルへと徐々に変えていった。

十七

「一人で、飛べるよ」

そこそこ飛んだところで【wish】はそう言って、自分を抱きかかえている杏児の手をゆっくり振りほどいた。なるほどこのワーズも、普通に飛ぶことができていた。

「エネルギー・レベルがはるかに小さいから、あんたたちヒューマンのように長時間は飛べないけど」

「助かるよ」

杏児はそう言ってから、並んで飛ぶユキをちらりと見た。疲労をその顔に色濃くにじませている。高所恐怖症の恐怖に耐えつつ、懸命に飛んでいるユキには、もう「大丈夫か」などと安っぽい言葉をかけられない。

杏児は【wish】に聞いた。

「で、どうする？」

「……」

【wish】が黙っているので、杏児も続けるべき言葉を失った。

「……」

数秒間、三人は平泳ぎのように黙々と空中を掻いた。

「……とりあえず、会う……」

【wish】がそうつぶやくと、今後は杏児が沈黙せずにすぐに問い返した。

「会って、どうする？」

「……分からない」

　【wish】は本当に当惑しているようだ。杏児はゆっくり噛んで含めるように【wish】に語りかける。

「いいか、四時半から、国連総会議場で、リアル・ワールドの万三郎がスピーチを始めるんだ。今から直行して、ぎりぎりのタイミングだ……」

　飛びながら【wish】は、杏児の目をしっかり見すえ、反論した。

「それについては、あんたたちに何の約束もしない。僕はひとりで【bad!】のところに戻るかもしれない。それどころか【hope】を連れて【bad!】のもとへ行くかもしれないし、どちらの側にも行かないかもしれない……」

「そんな……」

　茫然とする杏児。するとユキが【wish】に目を向け、口を開いた。

「私たちが最後に【hope】に会ったのは、七番街、五十三丁目の辺りよ。あなたたち双子なんだから、会ってよく話し合うことね。お互いの誤解を解く。それが一番！」

　ユキは【wish】に向けて、顔をひきつらせながらもわずかにほほ笑んだ。

「『【hope】を……総会議場へ連れて来い』って、言わないの？」

　怪訝な顔をする【wish】にユキは言った。

“I wish you good luck.”（幸運を祈ってる）

　ことだまワールドの総会議場の前には、ワーズの人だかりができていた。リアル・ワールドでは今にも万三郎のスピーチが始まるというのに、救国官たる二人がいまだ会場に到着していないのだから、不安でざわつくのも無理もない。

「あっ、来た！　あれだろ」

「本当だ。確かに三浦さんとユキさんだ」

「【hope】は？」

「見当たらない。だめだったのか……」

「……って、【hope】がいないのに『タッチ・ハート作戦』、どうやって遂行するんだ？」

　ワーズたちの指摘通り、二人の救国官は【hope】を連れ帰ることなく皆の前に降り立った。

「急いで！　もう始まりますよ」

　【information】が急かすのを、杏児が手で制した。隣のユキが、着地と同時に前に倒れこんだからだ。

「ユキさん！」

　ワーズたちは、地面に突っ伏したユキとその傍らの杏児を丸く取り囲んだ。杏児が皆を見回して言う。

「僕も飛行中、リアル・ワールドに意識を向けていた。確かに急がなくちゃいけないけど、まだ万三郎は待合室にいるようだ。みんな、あと五分、いや、一分だけ待ってくれ」

　そして杏児は片膝をついて、突っ伏したまま肩で息をしているユキに小声で話しかけた。

「いろいろ見てきたことを僕はまだ整理できない。ただ、気分はよくない。君が僕と万三郎に嘘をついていたことは確かだからだ。ユキ、君がいったい何者なのか、君をどこまで信用していいのか、分からない。だけど、今は……力を合わせて作戦遂行にベストを尽くす」

　ユキはしばらく沈黙してただ呼吸に合わせて背中を上下させていたが、やがて杏児と顔を合わせることなく答えた。

「……それでいい。責任は後で取るわ」

　杏児はそれを聞き届けると立ち上がった。

「ようし、みんな、一世一代の大勝負だ。総会議場に入ろう。マスメディア用の部屋から、会場内の各席へ飛んでくれ。行こう」

　杏児を先頭に、ワーズたちはぞろぞろと建物内に入っていった。

十八

総会議場の扉が開く。グプタ典儀長は扉の両側に立っている警備員二人の間を抜けてから、万三郎を振り向いて言った。

「ミスター、行くぞ」

万三郎は、典儀長に伴われて総会議場に入った。何時間か前に、客席用入口から入った時の議場の印象とは全く違う。あの時、ほとんど誰もいなかった議場の、席という席は、今、見渡す限り人で埋まっている。これだけの人が集まれば、あちらやこちらのひそひそ話のノイズが蓄積され、ざわめきが基底音となりそうなのに、咳払いひとつすらはばかられるほどの議場の静謐はある意味不気味だ。議場の吹き抜けの巨大ドームに、空気の振動はほとんどない。ただ、千五百人の、三千の瞳が、万三郎の一挙手一頭足を追っている。空虚に見える空間は、実は好奇心と、疑心暗鬼と、わずかばかりの期待感に満ちていた。

目の前に、机のない素朴な椅子が置いてあり、グプタが「座れ」と小さく言う。万三郎は着席し、全身を聴衆の好奇のもとに晒した。

左後方から、ビヌワ議長がアフリカ訛りの英語で万三郎のことを紹介しているのが聞こえた。

“Finally, the Assembly will hear from Mr. Manzaburo Nakahama, Assistant Vice-Minister of the National Information Security Center of Japan, cabinet councilor of the Prime Minister's Office, and Special Envoy of the government of Japan to the United Nations.”
「最後に、日本政府の内閣情報局補佐官ならびに国連特使である、中浜万三郎氏による講演を拝聴します」

遠くに、日本の席も見える。座っている一人が石川審議官なのか、よく分からなかった。ふと思う。ここはどこだっけ。俺はここで何をしようとしているんだっけーー。超新星爆発のことも、小惑星アポフィスのことも、嵐のことも、ＫＣＪのことも、杏児やユキのことも、何か遠くの、自分に関係ないことのようにすら思えた。

ーーティートータラーのハンバーグが食べたい！

それだけが記号のように万三郎の頭をよぎった。

“I now give the floor to Mr. Nakahama.　Mr. Nakahama, the floor is yours.”
「それでは中浜さん、演壇へお進みください」

　儀長に促され、万三郎は深呼吸を一回して、立ち上がる。これも議長に先導された静かな拍手が、張りつめた空気を掻き混ぜ始めた。

――「タッチ・ハート作戦」、ミッション、スタート！

　万三郎は演壇に立った。

　全てが、動き始めた。

◆◆◆

第十七章　演説（1　序）

―

〈序〉

（１）総会議長閣下、国連事務総長閣下、聡明なる大使の皆様、大臣閣下、そして皆々様。日本国政府の特命政務官として、これから私が行う提案を傾聴してくださるご厚意に感謝申し上げます。

〈Preamble〉

（１）Your Excellency Mr. President of the General Assembly, Your Excellency Mr. Secretary General of the United Nations, Your Excellencies distinguished Delegates,　honorable Ministers, ladies and gentlemen, as a ministerial aid extraordinary of the Japanese Government, I would like to thank you for kindly agreeing to listen to the proposal I am now going to make.

　マイクを通した万三郎の声は、静謐なる総会議場に流れては、わずかな残響に分裂して、消えていく。そしてその声はことだまワールドまで聞こえてきている。

　万三郎の演説と平行して、ユキと杏児は、スピーチの最初の部分の、やや儀礼的なワーズたちを次々に送り出していく。それは、スタンバイしているワーズたちの背中を叩いて押してやるだけの行為に見えるが、その瞬間、ワーズ自身がもともと持っていることだまエネルギーに、ＥＴが持つ、桁が一つ二つ大きいエネルギーを追加注入しているのだった。

　リアル・ワールドにおいて万三郎が立っているであろう演台の辺りには、白い光輪が強い光を放っている。各国代表が座っている椅子にはそれぞれぼうっとした光を放つエネルギー体が「腰かけて」いた。

　メディア席は吹き抜けの議場の二階にあり、一面のガラス窓を通して、直下の演台から各国代表席まで見下ろすことができる。

　ユキと杏児に背中を押されたワーズたちは次々に直下の万三郎のエネルギー体に向けて「滑空」するように飛んでいき、万三郎を経由して無数の光に分裂、加速して、議場の各席のエネルギー体に同化して次々に消えていく。今、儀礼的あいさつを終え、そして万三郎のスピーチは本題

に入ろうとしていた。

二

〈 現状認識 〉

（ ２ ）ご存じの通り、地球は緊急かつ未曽有の危機に直面しています。ベテルギウスの重力崩壊で引き起こされた超新星爆発は、小惑星アポフィスの軌道を地球に衝突する方向に変えたのみならず、同時に地球の磁場を大きく狂わせてしまったため、小惑星の衝突で受けるであろう被害を、人類全体が絶滅しうるほどに悪化させてしまいました。 この一年弱、人類は、持てるあらゆる英知を結集して、衝突回避のために取りうるあらゆる手段を検討し、実行してきました。しかし残念なことに、ＩＣＢＭによってアポフィスを破壊するという、最高水準の軍事技術を人類救済のために使用する試みは失敗に終わりました。今、私がお話ししているこの瞬間も、小惑星は地球に向かっています。

〈 Recognition of the current situation 〉

（ ２ ）As you are all aware, Planet Earth is facing an urgent and unprecedented crisis. The supernova that resulted from the gravitational collapse of Betelgeuse has not only altered the trajectory of the asteroid Apophis so that it is on a collision course with the Earth, but it has disturbed the Earth’s magnetic field so severely that the damage that is expected to be caused by the asteroid’s impact with the Earth may well lead to the extention of all humanity. For almost a year, humanity has collected all the intelligence we retain, considered all possible options, and implemented them to try to prevent the collision from happening.　Regrettably, an attempt to destroy Apophis by ICBMs, that is, an attempt to employ the world’s highest military technology for the sake of saving mankind, was unsuccessful and consequently even as I speak to you, the asteroid is still making its way toward the Earth.

（ ３ ）所轄の国連機関によって報告された予測によると、この事象単体のトリノスケールは最悪より一ランク低い九であるものの、五年以内に人類が滅亡する可能性は九九・九％になっています。というのは、この数字は、地磁気の異常に起因する有害宇宙線の増加と、地球規模の異常気象が続いて起こる影響を考慮しているからです。

（ ３ ）According to the projection reported by the UN agency in charge, the Torino Scale for the collision this time alone stands at 9, which is one notch below the worst level. However, the

possibility of the extinction of human beings within five years has risen to 99.9%. For not only do we have to take into account the damage that will occur as a result of the asteroid's impact, but we will most certainly experience abnormal weather worldwide and an extremely dangerous increase in radiation caused by cosmic rays produced by the supernova.

（４）世界の政治指導者の皆様は、真実を人々に明かすべきか、秘密にすべきかという苦渋に満ちた葛藤の中で、後者を選ぶに至りました。事実は大半の人々に絶望と悲嘆しかもたらさないだろう、それならば、差し迫った悲運を知らされることなく、ある日突然の死を迎える方を選ぶだろうと思い至ってのことでした。

（４）The world’s political leaders, faced with a cruel dilemma: whether to reveal to the masses the truth or to keep the news secret, decided upon the latter. They believed that revealing the truth would only bring despair and distress to most of the human race and that most people might prefer just to die one day without ever having a premonition of their impending doom.

（５）しかしながら、事実をすべて隠蔽するのは不可能でした。独自に活動するアマチュア天文学者による調査がインターネットに投稿され、瞬く間に世界中に拡散しました。今やこの事実は大半の人の知るところとなり、人々の心は荒廃し、世界は悲しみに打ちひしがれています。

（５）The decision to keep the whole truth from the masses, however, soon proved futile as follow-up research by ingenious amateur astronomers was posted on the Internet and was very rapidly made known throughout the world. Now the majority of the people know the truth and they feel devastated. People have become overcome with sorrow.

【｜regrettably《リグレッタブリ》】（残念ながら）、【｜extinction《イクスティンクション》】（絶滅）、【｜despair《ディスペア》】（絶望）、【｜distress《ディストレス》】（苦悩）、【｜devastated《ディヴァステイティッド》】（途方にくれる）など、ネガティヴなイメージを担当するワーズであっても、キジシマ派の思想にいまだ染まっていない者も多く、彼らはタッチ・ハート作戦に協力的だったので、彼らはユキと杏児の指示のもと、次々に飛び立って行った。

ユキは、度重なる時間の進行遅延行為で杏児が心配になるほど体力を消耗しているようだっ

たが、杏児はあえてユキに声をかけなかった。今は文字通り、力尽きるまでミッションを遂行しなければならない時だからだ。

　杏児は意識を目の前のワーズたちに集中する。彼らの背中を押してやりながら、ネガティヴ・ワーズたちに願いを託す。

「あまりに悲観的にしすぎないように、頼む」

　彼らのネガティヴ・エネルギーは、聴衆である各国代表をやみくもに落ち込ませるために使われるべきではない。あくまで現状認識を共有しておいて、この後に続く、ポジティヴ・ワーズたちによる引き上げ効果を高めるためだ。

「お手柔らかに……」

　おかしなお願いを彼らにしながら、杏児は心がざわついていた。

――【hope】は、来てくれるだろうか……。

三

〈提案と主張〉

（６）ほとんど時間も残されていない、このような絶望的な状況にあって、私はあえて最後の提案をさせていただきます。それは、端的に言うと、「世界の、文字通り、全人類が口から発する、統合された『コトバ』の力をもって、小惑星アポフィスの軌道をわずかに変える方法」です。

〈Proposal and argument〉

（６）Under these desperate circumstances with little time left for us, I dare to put forward a final proposal: it is, to put it briefly, a way to slightly change the trajectory of Apophis by means of the integrated power of the “words” which are sprung out from the mouths of literally all humanity.

（７）私が提案していることはSFに過ぎず、正統な科学ではない、と多くの方が思うのも無理はないと思います。ばかばかしいとすら思われるかもしれません。ですが思い出してください、科学は絶えず進歩しているのだということを。多くの場合、科学の知識と技術は次の３つの段階を経て進歩してきました。まず、新しい事象の発見を通して問題が定義され、次に、実験や観察を通してその問題を説明できる理論の構築が試みられ、最後に、その理論に基づいて事象を制御する技術が発明される……という段階です。しかし、私たちは時おり、その機序がまだ完全には解明されていない自然の法則を利用してきたし、今も利用しています。例えば、電気が流れるとなぜ磁界が発生するのか、本当のところはまだよく分かっていないのです。それでも私たちは電磁石を使った家電用品の利便を享受し、リニアモーターカーを走らせようとします。科学が解き明かしたものはいまだ限定的です。科学的であることは真理と言えるけれども、科学的ではないことは真理ではないとは必ずしも言えないのです。

（７）No doubt many of you will say what I am proposing is nothing other than science fiction and is not real science, perhaps even ludicrous. However, please remember that science is continuously evolving. In many cases our scientific knowledge and technology has advanced through the following three steps: firstly, a question is proposed through a series of new findings, secondly, through experiments and observations, an attempt is made to construct a new theory which can rationally solve the question, and finally, a technology is invented to control the matter according to the theory. On occasion, however, we have used and are still using natural rules we

still cannot explain the whole mechanism of. For instance, we still do not fully understand why a magnetic field appears around an electric current, yet we still enjoy in our homes electronic appliances that contain electromagnets and we try to operate maglev trains. What science has revealed so far is limited. This means what is scientific is true, but what seems not scientific is not always untrue.

（８）ここにご参会の名誉ある指導者のお一人お一人は、素晴らしい雄弁家であると確信しております。その上、皆様自身は、ここ、この場所で、先人や同胞による素晴らしく心に残る演説をお聴きになって、力を受け取り、蓄積し、使命感を膨らませて、それによって世界をより良く変えてきたのだと私は強く信じております。皆様はよくご存知のはずです。コトバは力なのです。

（８）I am convinced that every one of you, honorable leaders present here today, is an excellent orator. Besides, you yourselves have heard some extremely impressive speeches made by the predecessors or your contemporaries at this very place. I strongly believe that each time you heard them, you received the power, accumulated it, nurtured your sense of mission, and thereby made the world a better place. As you well know, ladies and gentlemen, a word is power.

　コトバは力。そうであるに違いない。なのに多くの人は、その場合の「力」は、人の心を動かす力以上のものではないと考えている。物理の力とはまた別の力だと、当たり前のように考え分けている。

――それは、違うわ……。

　ことだまワールドで久しく過ごしてきたユキにとって、その一つ一つの「力」が、個々に独立した個性と、その使用されてきた歴史あるいは使用される頻度に比例して、蓄積されてきたエネルギー・レベルを持って存在していることは体験的事実だ。そしてそれらは確かに、物理的な力を及ぼし得る。彼らには、物理エネルギーの源泉が備わっているのだ。だから、人の精神活動に作用する力も「力（パワー）」、物体に作用する力も同じく「力」と呼ばれるのだ。ただし、こうした念力を実践するには相当のエネルギーの集積を必要とすることも、ユキは感じていた。

　通常、一つ一つのワーズが持つエネルギーが物理世界に及ぼす力の大きさは圧倒的に小さいのだ。これは、逆に言えば、ワーズに圧倒的にエネルギーを注ぎ込まない限り、そうたやすく物体は動かせない、ということでもある。

　コトバが持つ物理エネルギーの総和は、コトバそのものが持つ人類共通のイメージの強さにも影響を受ける。

「だから、世界言語である英語の、【hope】という単語に絞りこんで人類のエネルギーを注入するのが、最も大きな物理的エネルギーを得ることができる方法なのだ」

　石川審議官は、往きの機内でタッチ・ハート作戦の意義を説明するにあたって、そう言っていた。

　ユキは、杏児とともにせっせとワーズを送り出しながら、やはり杏児と同じ不安を感じていた。

――【hope】……。戻ってきて、お願い。

（９）地球の四十六億年の歴史の中で、相当に大きな小惑星の衝突は、実は過去何十回も起きているということです。皆様に問いたいと思います。過去の衝突と今回の危機に違いがあるとすれば、それは何でしょうか。過去において衝突の危機に直面した時、地球上に、我々人類と同水準あるいはそれ以上の知的生命体があったでしょうか。私たちは今までのところ、この惑星では、現在の人類以外に高度な知性と意思疎通手段を持った文明の存在を裏付ける証拠を発見するに至っておりません。

（９）Throughout 4.6 billion years of its history, Planet Earth has reportedly experienced a few dozen collisions with fairly large asteroids. I would like to ask you: if there is a difference between the impending collision and past ones, what is it? When the Earth faced the danger of such an impact in the past, were there intelligent creatures on the earth whose intellect was equivalent to, or superior to that of human beings now? We have so far not yet found on our planet proof of the existence of civilizations with higher intellect and method of communication other than the present human beings.

（10）過去その時々の地球上の生物たちは、衝突を止める手段を持ち合わせませんでしたが、今回は違うことになります。というのは、この星の知的生命体が、統合された意志という手段をもって、惨害を回避しようとする初めての試みがなされうるからです。

（10）Although the creatures living on the Earth when past collisions occured could take no measures against the impact, it is going to be different this time; different because the intellectual lives on this planet can first try to prevent the disaster from happening by means of their integrated will.

四

〈コトバのエネルギーの結集〉

（11）アポフィスの軌道を変えるために全人類が使う「コトバのエネルギー」について、詳しく説明させてください。人々は、その小惑星へ向けて、コトバのエネルギーを送り込むことになります。そうすることで、アポフィスが地球に衝突しないようにコースを変えるのです。ここで私が言う「コトバ」は、もちろん口をついて発声される音でもありますが、同時に想いでもあり、祈りでもあります。

〈The convergence of the power of words〉

（11）Please let me explain exactly what it is that all humans are going to use to change the course of Apophis: the energy of words. People are going to send forth the energy of words into the asteroid and thus will change the course of Apophis so that it will miss our planet. The word “words” I use here is, indeed, the collection of articulated voice of sounds. However, it also includes will and even a prayer.

杏児は、【kotodama】という日本語由来のワーズの肩をポンと叩いた。

「出番だよ、【kotodama】。君は、大半の聴き手にとって、なじみのない言葉だ。でも、日本が二千年も大事に守ってきた伝統的価値そのものだ。今から世界の代表の心にそれを知らしめる大舞台だ。頼んだよ、頑張って」

「もちろん、最善を尽くします」

ワーズ【kotodama】の、ことだまワールドにおける外見は、巫女のようだった。今日、彼女はその大舞台を十分意識していて、お神楽を奉納するときのように、正装の装束に身を包んでいる。彼女は杏児を見上げると、こくりと頷き、眉を上げ、幣（ぬさ）を大切そうに両手で持って前傾姿勢になり、そのまますっと宙に浮いて静止した。隣りではユキが、【|spiritual《スピリチュアル》】（魂の）に声をかけている。

杏児が【kotodama】の背中に手を置こうとすると、【kotodama】が振り返って杏児に向かっ

て言った。

「三浦さん、【hope】は、きっと戻ってきますよね？」

　杏児は即座にうんと答えることができず、杏児を見つめる【kotodama】の視線に絡め取られたまま、一、二秒凍りついた。

「皆、最善を尽くすだけだよ」

【kotodama】の表情はわずかに曇る。杏児は思い返したように明るく彼女の背中を押した。

「君の思った通りになる。きっと、大丈夫だ。行って」

【kotodama】はなお一瞬、杏児の目に見入ったが、やがて再びこくりと頷き、「じゃ、行きます」と言って、窓をすり抜けて急降下するように飛び出して行った。【kotodama】の光は、講演台の前の、万三郎のエネルギーの雲にすっと入っていった。

　その後に続いて、【spiritual】や【power】や【good】をはじめとするワーズたちが次々と流れ込んでいく。先ほど自由の女神像から救出された【happiness】も、自分の出番に合わせ、満を持して万三郎へと滑空して行った。そうして彼らは、今度はその万三郎の雲から、透き通ったレーザー光に似た光線となって、議場いっぱいに広がりを持って、わずかに揺らぎながらゆっくり伸びていくのだった。光の色の微妙な変化や濃淡の波によって、それが動的に、常に変化していることが分かる。ユキも杏児同様、そうした光景にちらりと目をやりながら、次々と待機しているワーズたちを招集しては声をかけ、ＥＴのエネルギーを注入していった。

――だんだん、核心に近づいてる……。聴衆がついてきてくれているかしら……。

（12）古くから日本には、「ことだま」という概念があります。私たちが発する言葉そのものには霊的な力が宿っており、言霊信仰においては、声に出した言葉は現実の事象に影響を与えると信じられ、発した言葉の良し悪しによって吉事や凶事が起こるとされたのです。日本は言魂の力によって幸せがもたらされる国、「言霊の幸はふ国」とされていました。

（12）In Japan, people have had the idea of “kotodama” since ancient times. We believe that the words we utter have certain spiritual power inside them, that the voiced words influence the real circumstances, and that good words bring about good events and bad words, bad. Japan is,

according to the cult of kotodama, a country where happiness is caused by the power of kotodama.

（13）また、キリスト教では、ヨハネによる福音書の一節に「はじめに｜言《ロゴス》があった。言は神とともにあり、言は神であった」とあります。このことから、ロゴスは、言葉、意味、論理、理性、思想、理論、また、宇宙の根本原理としての理法までをも意味するようになりました。

（13）In Christianity, there is a quote in the Gospel according to St. John stating “The Word was in the beginning; the Word was with God, and the Word was God.” Influenced by this, the ancient Greek word “Logos” has developed to mean a word, a meaning, a logic, a reason, an idea, a theory, or even the law of the universe.

（14）コトバはエネルギーであり、自然の法則の一構成要素であり、ことだまであります。既知の物理学の数式では表すことができません。しかし私たちが利用してきた、コトバという神からの贈り物には、私たちの想い、というエネルギーを乗せることができるのだと私たちは歴史的に体験的に理解しています。

（14）A word is energy, an element of natural law, and kotodama. It is indeed impossible to explain this by any formulae of physics we already know, we realize, however, historically and by experience, that words, as the gift from the God or gods, can convey energy from the source.

（15）ただ、一かけらのコトバに乗せられるエネルギーは非常に小さなものです。だからこそ、七十億人類皆の、ことだまの力の結集がどうしても必要なのです。声に出すにしろ心で念じるにしろ、私たちが想いを一つにしてコトバを発し続ければ、そのコトバの持つことだまのエネルギーを最大に高め、それを波動としてアポフィスに送り、その進路をきっと変えることができる。そう私は信じています。

（15）The amount of energy which can be conveyed by a single word is, however, very little. For this reason, the combined kotodama power of as many as 70 billion people is vital. If we, no matter whether we voice it or pray it in our hearts, just chant the word with a single purpose, we can maximize the level of the kotodama, send it to Apophis in the form of waves, and we will surely be

able to change the course of the asteroid. This is what I believe.

「ねえ三浦さん、ユキさん。【hope】、来ないよ。どうすんの？」

　次に備えて呼び出された【｜sufficiently《サフィシェントリー》】（充分に）とか、【｜envisage《エンビサージュ》】（心に思い描く）とか、【｜emit《エミット》】（発信する）などの比較的難しいワーズたちは、取扱いも難しい。納得しないと動かない連中だったりする。

「今、出て行っても、僕ら無駄足になるんじゃないですか？」

「【hope】がこなけりゃ、飛んでも仕方なくね？」

「いやむしろ、期待させるだけさせて、一気にがっかりって流れになるでしょ」

「だったらヤだね、俺は行きたくないねー」

「僕も」

「私もまっぴらごめんだわ」

　疲労がピークに達しているのだろう、ユキが目を閉じて天を仰いだ。杏児がほかのワーズの背を叩きながら叫ぶ。

「ここまで来て何言ってんだ！　行ってくれ。君らの働きを見せてくれよ」

【｜aloud《アラウド》】（大きな声で）が即座に大きな声で言い返す。

「だからあ！　何のために？　【hope】がいないのにさ！」

　杏児が【aloud】を睨み返した。険悪な空気がＥＴとワーズたちの間に沈殿し始めた。

【aloud】の代わりに、【｜effective《イフェクティヴ》】（効果的な）が杏児に食って掛かる。

「あのさ、三浦さん、考えてみてよ。俺たちさあ、三浦さんたちの強いエネルギーもらってここから飛んでいくよね？　それで各国代表の外国人たちの心に到着して待機する。で、【hope】が

来ない。つまり作戦は失敗、みんながっかりする。そうしたらさ、心の中が一気にネガティヴに変わるんだよ。それがどういう意味か分かる？　三浦さんたちヒューマンの世界で例えるなら、待機している部屋の酸素が一気になくなってしまうようなものだと、以前ソウルズの人から聞いたことがある。俺たち、抱えてるエネルギーが大きいだけに、言ってみれば、たくさん酸素が必要なんだ。それが一気になくなる。つまり、呼吸できない。それって、すっげー、しんどいんだよ。苦しいんだよ。しかも、俺たちワーズは死ねないから、それこそ地獄の苦しみを味わうんだ。そうなることが確実な、【hope】が来ないミッションを、三浦さんたちＥＴは、どうして俺たちに強いるんだよ」

「今、考えてる。何とかするから！」

「何とかしてから、俺たちは出発する」

「だめだ、行ってくれ。万三郎のスピーチに説得力がなくなってしまう。頼む」

「嫌だね、行かない」

「おいッ！」

　杏児の声が荒くなる。

「お前らより先に何百語も、飛んで行ってるんだ。お前らだけ免れようってのか！」

　だがこれは売り言葉に買い言葉になってしまった。

「あー？　あんた、それを言っちゃおしまいだ。パワハラ上司だ、ブラック企業だ、労組連合に駆け込んでやる！

「何を一っ！」

　ユキが叫んだ。

「【hope】は来るから！　必ず来るから、お願い、飛んで……」

　ユキは肩で息をしていた。膝をついていた。目を赤くして、それでも涙を見せずに【effective】たちに必死に懇願する。

【aloud】や【effective】たちは思わず目を逸らした。万三郎の話の流れから言っても、もう【hope】の出番はすぐそこだ。【hope】が来なければ、【aloud】や【effective】どころか、これまで飛んで行ったワーズはほとんど犬死に同様となる。【aloud】は一瞬天を仰いで、それから言った。

「えーい、必ずだよ！　必ず、辛い思いさせんなよ」

そう言うと彼は、まだ何か言おうとする仲間たちを手で制して、杏児に向かって言った。

「俺から行く。押して！」

【aloud】が飛び立った。それを見るなり、渋っていた他のワーズたちも次々に飛び立っていった。杏児は険しい表情で彼らを見送る。ユキがそんな杏児に息をとぎらせながら声をかけた。

「さ、続きやろうよ」

（16）では、どうやってことだまエネルギーを送り出すのか。これについては、地球上のどこででも、それぞれがただ意識の対象をアポフィスに合わせ、コトバを繰り返し声に出して、または心の中で唱えるだけで十分効果的だと考えます。大事なことは、コトバの持つイメージを明確に思い浮かべ、ことだまのエネルギーが途切れなく地球からアポフィスへ向かって行くシーンを想像することです。そうすることでことだまのエネルギーがアポフィスに向かって送り出されていくものと考えます。

（16）How should we send forth the kotodama energy? In this regard, if each of us just focuses his or her mind on Apophis and repeat the word either aloud or silently at any place on the Earth, it can be sufficiently effective. What is important is to clearly imagine the nuance of the word and envisage that the train of kotodama energy extends from the earth to Apophis. In this way, the kotodama energy will be sent forth toward the asteroid.

五

〈 究極の単語 〉

（ 17 ）バベルの塔の神話は、私たちがかつて共通の言葉を使っていたことをほのめかしています。その共通の言葉とはどのようなものだったか、今では想像できませんが、今日、事実上世界で最もuniversal（ユニヴァーサル・万国共通の）な言葉は、英語です。バベルの塔建設の目的の是非はともかく、それは人々が協力して実現しようとする一大プロジェクトだったに違いありません。今、再びひとつの目的に向かって人類が力を合わせるにあたり、英語は一番多くの人に理解され、イメージすることが可能な、最適な言語であります。
　ですから、私は日本人であり、日常は日本語を話しますが、ことだまを投影する対象となるコトバを、世界言語である英語の中から提案させていただきます。

〈 The ultimate word 〉

（ 17 ）The tale of the Tower of Babel says that we once used a common language. Putting the question of its actual existence and appropriateness aside, the construction of the Tower of Babel must have been a major project which all the people building it endeavored to realize in cooperation. And the globally common language at that time must have functioned extremely well to enable people to communicate and advance the mission. Today, when people are again cooperating for one purpose, the language most widely used in the world is English. It probably will help people understand the mission the most. Therefore, although I am a Japanese, I would like to suggest one English word.

　事前に招集していた外国語ワーズたちの出番がいよいよやってきた。彼らは国連公用語となっている六か国語と、そしてＫＣＪ社員である、日本語ワーズの【希望】である。彼らについては、石川審議官が手配を約束しておくと言ってくれていた。果たして、杏児とユキがことだまワールドのこの議場に到着したときにはすでに待機してくれていた。彼らは自分たちがなぜ招集されたのか、これからどうするべきなのかを、先に飛び立っていったワーズたちを見て理解しており、スタンバイの体制に入った。

「ありがとう。よろしく……」

　彼らの背中に手を置いて杏児がつぶやく。原稿によれば、アラビア語、ロシア語、フランス語、スペイン語、中国語の順に出発してもらう予定だ。そして、最後に日本語が並んだ。彼が訊く。

「三浦さん、結局、僕の後はどうするんですか？」

――どうしよう。

【hope】は、ついに現れなかった。その弟である【wish】もだ。杏児はユキを見る。ユキはほかのワーズたちを送り出そうとしていた。顔面は蒼白だ。この後の出番に控えているワーズたちもざわめき始めている。

「おい、【hope】の奴、とうとう来なかったな」

「この作戦、どうなるんだ……」

「だめだろう。代わりがいない……」

「【desire】なんかどうだ？」

「……いや、私には役が重すぎます」

「じゃあ、どうする」

「日本語の【希望】を、そのまま【hope】の代わりに……」

「世界の中では日本語はマイナーすぎる」

「伝わらない」

「ああ、確かに伝わらないだろうな！　だけどじゃあ、どうするんだ！」

「俺に言われても！」

「三浦さん！　福沢さん！」

　ワーズたちに詰め寄られて、さすがにもうこの段階では二人は空元気も出なかった。

――絶望……。

　凍りついた空気を揺らすのは、リアル・ワールドで万三郎がスピーチしている声だった。

（18）その英単語は、アラビア語では　（アーレアマル）　と言います。ロシア語では、（ナイジェルズダ）と言います。フランス語ではl'espoir　（リースポア）と言われ、スペイン語では、la esperanza （ラ・エスペランサア） と言われます。中国語では、（X?wang　シーワン）と呼ばれ、同じ漢字で、わが母国語では、希望　（Kibo きぼう）と呼ばれる単語です。その英単語は――

（18）This word can be ??? ??? /a:re amal/ in Arabic, надежда /naijelzda/ in Russian, l'espoir /li espor/ in French, la esperanza /la esperansa/ in Spanish, 希望/X? wang/ in Chinese, and with the same Chinese characters, we pronounce /kibou/ in Japanese. The English word is……

「その英単語は――」と言ったところで、万三郎は言葉を切った。もちろん、万三郎は分かっている。【hope】が来ていないことを。

　自分の中に【hope】のエネルギーが満ちてこないのをはっきりと感じ取っている万三郎本人が最も無念であろうことは、杏児もユキも手のひらを指すように分かっている。

――万三郎……。

　杏児は目を閉じる。

　万三郎はこれから、そのまま「hope」と口にするだろう。口にすることは、もちろん可能だ。だが、それは無機的な空気の振動でしかない。そしてその振動では居並ぶ千五百のハートを揺さぶることはできない。タッチ・ハート作戦は、その目的を達することはできない。

――終わり、か……。

　ユキに促されて、【the】【English】【word】【is】の四人が、静かに飛び立っていった。

　そして、静寂が、ことだまワールドの、総会議場二階の報道ルームを包む。誰もが次どうすればよいのかわからず、固唾を呑んだ。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

　バーンッ！

　破壊されんばかりに扉が開いた。待機していたワーズたちが一斉に左右に分かれて真ん中に道ができた。同時に「おお……」とざわめきが起こる。ざわめきの対象は、そこに立っていた三人の姿だ。髪が乱れ、顔を真っ赤にして、肩で息をしている真ん中の男は、紛れもなく石川卓内閣府審議官その人だった。荒い息の合い間に石川は叫ぶ。

「福沢ッ！　今ッ、どの辺りだッ！」

　ユキは目を丸くしたまま答える。

「そ……『その英単語は一一』です」

「よしッ！【hope】、行けッ！」

　石川は、隣に立っていた【hope】の背中を叩いた。

「はいッ！」

　ワーズたちの人垣の間を、恐ろしく早いスピードで【hope】はこちらに駆けて来る。

「【hope】頑張れッ！」

　そう声をかけたのは、三人目の人影。ほかならぬ【wish】だ。

「うおーッ！」

　双子の弟の激励の声を背中に受けながら、【hope】は窓に向かってダイブした。その体は宙に浮いて進む。石川に叩かれた背中からまばゆいほどの光を放ちながら、【hope】はガラス窓をすっと通り抜けて本会議場へと飛んで行く。杏児とユキが見下ろす中、【hope】の軌跡は滝のように万三郎のエネルギー体に流れ込んだ。万三郎がたちまち輝きを増した。

　ことだまワールドに、再び万三郎の声が届き始める。

　その英単語は一一、“hope”です。
　The English word is…… “hope”.

　メディア・ルームは俄然沸き立った。ワーズたちから拍手が湧き上がる。

「すごいッ、間に合ったぞ！」

　杏児は胸が熱くなった。

　ユキは蒼白になった顔を上げて、笑顔でハイタッチを交わしているワーズたちに声をかける。

「まだ、終わってないわ。次のワーズたち、準備して！」

「はい！」

「分かった！」

「オッケー！」

　先ほどの沈滞した空気とはうって変わって、ワーズたちは声も軽やかにスタンバイを始める。

　【wish】が杏児とユキのそばに歩み寄ってきて口を開いた。

「僕の話では動きそうになかったんだ。だけど石川さんが直々にことだまワールドに来られて、頭下げられたら、さすがの【hope】も無碍には……ね」

【wish】はそう言って杏児に並び立ち、【hope】のエネルギーが注ぎ込まれた講演台あたりを見下ろした。

一方の杏児はハッとして後ろを振り返る。石川は、背中を見せて、ゆっくりとドアから出ていくところだった。

――石川さん、リアル・ワールドに戻るのか……。

杏児がそう思ったとき、石川は不意によろめいて、ドアにぶつかるようにもたれかかった。

「石川さん！」

思わずそう叫んだのは杏児ではない。杏児の隣りでワーズたちを送り出していたユキだ。呼びかけられた石川は、振り返る気力すらないのか、ドアにもたれかかったままじっとしている。自身も疲労困憊のユキは、腹から声を絞り出した。

「石川さん、レシプロしてから、こちらの時間の進み方（タイムスケール）をコントロールしていましたね？」

石川は動かない。だが構わずユキは続けた。

「途中から急に、大波に運ばれるような感覚になりました。私より大きな力で時間がコントロールされているとわかりました。ありがとうございました」

すると、ようやく石川が顔だけこちらを振り向いて言った。

「福沢、せいぜい三倍速ではあったが、お前の時間コントロールはたいしたものだ。だが、残念ながらあのスピードでは間に合わん。お前たちは十二倍速までは耐性があるのが分かっていたから、そこまで速めた」

ユキが頷いて答えた。

「ええ石川さん。それを感じました。すごいパワーでした。でも……体力、大丈夫ですか」

杏児が目を大きく見開いて石川とユキを交互に見てつぶやく。

「感じたって、何を？　時間進行のスピードが変わったことをか？　僕は何も……っていうか、ユキがコントロールしていた時間を石川さんが速めた……？」

　石川の後ろ姿は、すぐに、再びあわただしく動き始めたワーズたちにかき消された。

　スピーチはこの先、【hope】の活躍の場が多い。だが、あれだけ強いエネルギーを石川から注ぎ込まれた【hope】は、聴衆一人一人の心を十分揺さぶることができるだろう。

「よしッ、俺ももうひと頑張り！　はい、次の皆さん、来て！」

（19）hopeという英単語が持つイメージを心に描ける人は、hopeと口にするときに、そうしてください。英語が得意ではない人々は、母国語でhopeと同じ意味の単語を口にしてください。

（19）For those who can form a mental image of the word “hope”, please do so when you speak “hope”. For those who do not know English well, please say the word in your language which means hope.

六

〈「希望」こそが希望〉

（20）いま私は、気休めで死までに心の安寧を確立することを訴えているのではありません。また、奇跡がひとりでに起きるのを信じて祈れと言っているのでもありません。私たち自身の力で奇跡を起こしたいのです。かりそめにも人類史の最後のページを絶望と悲嘆によって締めくくるべきではありません。

〈“HOPE” is a hope〉

（20）I am neither suggesting that people establish peace in mind in the face of annihilation, nor recommending everyone pray for a miracle to occur, but would like us to do a miracle by ourselves. If we were to write on the last page of human history book, we should not conclude it with despair and sorrow.

（21）M・ルターはこう言ったと言われています。「たとえ明日、世界が滅びようとも、私は今日りんごの木を植える」。

（21）Martin Luther said, “Even if I knew that tomorrow the world would go to pieces, I would still plant my apple tree.”

（22）また、一八六〇年代の日本に、坂本龍馬という志士がいました。彼は、「いったん志を抱けば、弱気を発してはいけない。たとえその目的が成就できなくても、その目的への道中で目的に向かって倒れて死ぬべきだ」と言い残しています。

（22）In the 1860's at the end of the Edo era in Japan, there was a charismatic Samurai named Ryoma Sakamoto. Loosely translated, he said,“Once you cherish an aspiration, you should not emit bearish at all. Even if you cannot reach your goal, you should die striving to reach that goal.”

（23）皆さん、七十億の人間が心を一つにして、ことだまの力を持つただ一つのコトバを唱えたら、いったいどういうことになるでしょうか。生き残る可能性が〇・一％でもある限り、私たちは決してあきらめない、そう強く望みます。いま一度申し上げます。私たち自身の手で奇跡を起こしましょう！

（23）Ladies and gentlemen, who on earth knows what will happen when 70 billion individuals, with one mind, chant out a single word in unison with its kotodama power? Now I strongly hope we will never give up if there is 0.1 per cent of the possibility for survival. Again, let us do a miracle by ourselves!

七

〈危機を経て人類は進化する〉

（24）実は、私自身の希望はその先に広がっています。もし今回の危機を乗り越えることができたなら、世界は以前よりはるかに素晴らしいものになるだろうということです。なぜなら、ちっぽけな、でもかけがえのないこの惑星にあって、領土領海であれ、食糧であれ、資源であれ、それらをめぐって争うことが、あるいは、思想信条や宗教、文化、肌の色の違いを理由として争うことが、いかに無益でおろかなことかを、人類はついに悟るだろうと期待しているからです。

〈Humanity evolve over the crisis〉

（24）As a matter of fact, my hope spreads further: when humanity overcome this crisis, people will be far more hopeful than ever. I expect that humanity will finally realize how unfruitful and unwise it is to fight, on this tiny, but irreplaceable planet, whether it be for territory, food or resources, or because of a differences of thought, creed, religion, culture, or color of skin.

働きに働いた。飛び立つ前のすべてのワーズにエネルギーを注入してきた。ユキは立っていられなくなって床に崩れ落ちそうになるのを、椅子の背もたれをつかんで懸命に耐えている。

「ユキ、もういい。後は僕が――」

そう言う杏児にユキはかぶりを振る。

「一人じゃ……スピードが遅くなる。気持ちが高揚して、万三郎の話すスピードが速くなってきているから。杏ちゃん、早く次を……」

言われてみればその通り。二人で手分けして結構なペースでワーズたちを送り出さないと、今の万三郎の話すスピードにはついていけそうにない。

――ここが踏ん張りどころか……。

杏児はまだ決してユキを信用し、許しているわけではない。だがこのミッションで手を抜いて

いないことは見ていてよく分かった。歯を食いしばって立ち上がろうとするユキに、杏児は声をかける。

「分かった。あと少しだ。ユキ頑張れ！」

　杏児は、自分がより働いて、ユキの負担をいくらかでも軽減しようと決心し、目の前の仕事に集中することにした。

「次ッ、行こう！」

（25）思えば、人類の歴史は、奪い合う歴史でした。それは人間の本質の一つである「欲」のもたらす結果であったのかもしれません。人類は、殺戮し、破壊し、犯し、奪い、虐げ、支配し、搾取し、従わせようとしてきました。その結果、今日、二十一世紀に至っても、紛争、テロ、差別、環境破壊、飢え、貧困、犯罪がなくなることはありませんでした。今日、世界中で８億人が飢えていると報告されています。

（25）In retrospect, the history of human beings has been that of deprivation. This may be the fate which may well be attributed to an aspect of human nature on one hand; desire. Some have killed, destroyed, violated, deprived, oppressed, dominated, exploited, and subordinated others. Therefore, until today, right in the midst of 21st century, we have never been able to prevent wars, terrorism, discrimination, environmental destruction, hunger, poverty, or crimes from happening. Today, eight hundred million people are reportedly starving in the world.

（26）沈みゆく船の上では、相手を屈服させても、相手からモノを奪っても、奪う側、奪われる側、いずれも全滅です。エゴイズムは、人類が探している答えではない、エゴイズムでは人類の課題は解決しない、という考えを、私もあなた方と共有しております。勝つことと負けることという、二項対立ではない考え方があります。まさに今回その考え方をするべきです。それは、誰かからエネルギーを奪うことではなく、皆のためにエネルギー使うことに基づきます。意思のない小惑星と闘う必要はありません。これは、誰かが負ける、誰かが貧乏くじを引く、誰かが滅びる、ということがないやり方です。

（26）It is no use overpowering and robbing others who are on a sinking ship with you. I share the idea with you, ladies and gentlemen, that egoism is not the answer for us, and that no problem

facing humanity can be resolved with egoism. There is an idea other than the dichotomy between to win and to lose, which should be employed right this time. It is based not on robbing energy from others, but using it to benefit each other. We need not fight the asteroid because it has no will. So this is the idea in which no one loses, gets the short straw, or is vanished.

（27）人間の本質に「欲」があります。しかし、他方で私たちは「愛」も本質的に持ち合わせています。愛があれば、やっとの思いで得られた、ひとかけらしかないパンを、母親は息子に与えることができるのです。死にかけた経験を持つ人は人生観がドラスチックに変わるといいます。私たち人類に同じことが起こることに、私は希望を持つのです。

（27）On the other side of human nature, we have love as well. With love, a mother can give the only piece of bread she has to her child rather than she eats it herself.　A person often changes his or her philosophy drastically after having a narrow escape from death. I expect all human beings to have a change of heart.

「ユキッ！」

　杏児は思わず駆け寄って、崩れかかるユキの体を支えた。

「もう、いい。十分だ」

　その杏児の腕をユキは振りほどく。

「いや……あと、あとちょっとだから……。杏ちゃん、これで最後だから……三人で……やり遂げさせて」

「……」

　ユキは杏児の腕から離れて、椅子の背もたれを頼りによろよろと立ちあがった。

「【miracle】、来て……」

　それでもしばらくの間、杏児はその場にひざまずいたまま、ユキの成り行きを見守らざるを得

ない。その杏児をユキの方が突き放した。

「三浦杏児救国官！　最後よ！　作戦遂行を優先して！」

　杏児は我に返る。

「あ、ああ。分かった」

　もう人がまばらになった部屋を見回す。

「次、行こうか」

八

〈結び〉

（28）顔を上げましょう。想いを一つにしましょう。絶望を心から追い出しましょう。希望を口にしましょう。奇跡を起こしましょう。そして、人類は新しいページをめくりましょう。この魔法のコトバを口ずさみながら……。
“Hope for the earth, hope for the best.”

〈concluding remarks〉

（28）Let us face the future with a single purpose, release desperation out of our mind, and fill hope in place. Let the miracle take place so that we can turn over a new page of the history of mankind by chanting these magic words:“Hope for the earth, hope for the best.”

ユキが【wish】に声をかける。

「【wish】、あなた【hope】を連れてきてくれて、ありがとう」

【wish】は当惑した。

「いや、三浦さんには言ったけど、僕じゃなくて石川さん……」

「ううん、先にあなたが向かったから石川さんが応援する気になった」

「そうかな……」

ユキはニコリと微笑みかけた。

「そうよ」

疲れ切っていた。

　部屋にはもうワーズたちは数人しか残っていない。杏児はふっと気を失いかけるユキを支えるために再び寄り添った。ユキはもう杏児の気遣いを辞退する気力さえ無くして、支えられるがままに、うつろになりがちな目をしっかり見張ろうと努めていた。

「最後、【wish】、あなた飛んで」

「へ？」

　きょとんとする【wish】は、やがてユキに答える。

「僕、出番、ないよ」

　杏児もユキに言う。

「ユキ、【wish】が言うように、あとは【hope】だけだよ」

　ユキは頷く。

「原稿では、ね」

「……？」

　ユキは、半ズボンの【wish】の目を見据えて言った。

「万三郎はね、あなたと【hope】が双子の兄弟だって、知ってる」

　【wish】は頷く。

「ホテルでの騒動があったからね」

　大きく息をしながらユキが続ける。

「うん、【hope】が間に合ったでしょ。だから万三郎は、ここにあなたもいるって、気付いていると思うの」

「……」

「だから、行って」

　【wish】は首を傾げる。

「ユキさん、どうしてそれが分かるの」

「分かるのよ」

　ユキは目を閉じてニコリとした。

「あの人、優しいから」

　杏児は黙っていたので【wish】は腑に落ちたわけではなかったが、しかたなく頷く。

「……分かったよ。じゃあ、今から行くね」

　手持ち無沙汰になりそうで、ぶつぶつ言いながらも【wish】はともかくスタンバイした。その背中にユキが手のひらを当てる。

「もう、残り全部あげる。あなたは【hope】と一緒に、人間の本質を担っているの。忘れないで」

　【wish】の背中が輝いた。

　ユキをそっとその場の床に寝かせて、ほかのワーズたちは杏児がケアすることにした。ケアしながら、杏児は独りつぶやいた。

「【hope】の代わりに？　どこに？」

（29）共感いただけましたら、ぜひ母国にお帰りになり、このことを全国民に訴えてください。人類がひとつになって、奇跡を起こしましょう。皆様、ご清聴ありがとうございました。また、お会いしましょう。

（29）If you thankfully sympathize with us, please communicate these words to your people back home. A hope, if empowered by all peoples in the world, will work a miracle. Thank you very much

for listening, ladies and gentlemen. I WISH to see you again.

◆◆◆

第十八章　告白（1）

　ー

　ハッと我に返った。

いつの間にか目を原稿から離し、両手を大きく広げて、無我夢中でしゃべっていた。もちろん、暗記し、何十回も暗誦して完全に身に付けていた内容だ。文字通り、目をつむってでも言い切れた。意識では、その一語、一語にはなく、この提案をどうしても理解してほしい、協力して欲しいと、その想いだけが無限に膨らんでいた。

　原稿を見ずして最後まで話し終え、想いを乗せるべき言葉がなくなったのに気付いて、万三郎は口が麻痺したかのように、二、三度パクパクさせ、同時に、目の前に振り上げていた拳を無為に二度空振りした後、ついに演台に下ろして、茫然と聴衆席を見つめた。
総会議場ではなお、咳払いひとつ起こらない。凄まじい静寂の重圧だ。万三郎は再び激しい恐怖を感じた。

ーーお、俺は、終わった……。

　目が宙を泳いだ。口は緊張を失って、だらしなく半開きになっている。呼吸がそのまま止まりそうだ。立っている足が、上体を支えきれなくなっていく。膝が笑い始める。上体が揺れ始める。

ーーこれはいけない。誰か、何か言ってくれ……。

　万三郎は、ついにいたたまれなくなって、両手をついて上半身の体重を演台に預け、若干前かがみになってマイクづてに小さく声を発した。

“Uh,……Th……Thank you.”

　パン！

　静寂を打ち破る音が、議場にこだました。万三郎はびくりとしてその場に固まる。

　パン……パン……パン……。

　音波が議場の隅まで行って万三郎の耳に戻って来た。音源は万三郎の頭の上後方だ。振り返っ

て見上げたそこには、万三郎のいる演壇より一段高いところに議長席が並んでおり、ビヌワ議長がいた。そして隣にいるのは、ベン・ジャミン事務総長だ。

　パンパン、パンパン……。

　音がずれて二つになった。いや、三つだ。万三郎が正確な音源の数を見失うのと、その数が一気に対数的増加を見せるのとが、ほぼ同時だった。

　万三郎は最初、総会議場に夕立が降り始めたように思った。だがそれは雨粒ではなく、拍手の音だったのだ。万三郎の立つ演壇から、一列目の席までは数メートルは離れているので、万三郎は人々がどのような動作をしているか理解するのに時間がかかったのだ。

――この拍手は、どういう意味だろう。

　思わず会場を見回す。すると万三郎が顔を向けるそばから、その辺りの席に座っていた人々が次々と立ち上がり始めるではないか。

　万三郎はようやく、自分の主張が認められ、受け入れられたのだということを理解した。
理解した途端、鳥肌が立つ。やっとのことで、ぎこちない笑顔を浮かべる。右手を軽く上げる。

「サンキュー」と口ずさむ。今や議場内の皆が、スタンディング・オベーションをしている。

　万雷の拍手の中、万三郎を呼ぶ声がかすかに後ろから聞こえる。振り返るとビヌワが上段の議長席から身体を乗り出して腕を伸ばしてきている。万三郎が握手に応じると、ビヌワが何か言っている。万三郎は握手をしたまま背伸びして耳を近づけた。

「ミスター・ナカハマ、君のおかげで世界は希望を手にした。ブラボー。君の同僚のユキが今回も話すのかと、ちょっと不安だったが、君は堂々としたものだった。ユキに伝えてくれ、『君には将来、名誉挽回できるチャンスがきっとある。なぜならば、人類は滅びないからだ』と――」

　万三郎は彼のアフリカ訛りの英語は聞き取れたものの、何のことを言っているのか意味が理解できなかった。それで一瞬怪訝な顔をしたが、あえて問い返すことをせず、そのまま笑顔で礼を言った。

「議長閣下、心より感謝します」

　誰が言い出したか、歓声はチャントに変わり、手拍子が揃い始めた。

“Hope for the earth! Hope for the best!”（地球にホープを！　ベストへの希望を！）

事務総長と握手を交わしたのち、万三郎は降壇し、グプタ典儀長に導かれて退場した。

二

――やれることはやった……。

気が高ぶっている。なんだか自分が自分でないような気分だ。みんなはどうしているだろう？　杏児は？　ユキは？　ワーズたちは……？　あれほど会場が希望に湧きたったのは、見えないところで皆が懸命に働いてくれたからに違いない。これはチームワークの成せる業なのだ。

――やったな、みんな！

そう思うと嬉しさがしみじみこみあげてきた。嬉しくて、思いきり泣きたいような気がしたが、前を歩いていた典儀長がドアの前で振り向いたので、万三郎も口を真一文字に結んで立ち止まった。

「ウェールダン、ミスター・ナカハマ。あんなに大きな拍手に包まれたスピーチは久しぶりでした」

「サンキュー、サー」

典儀長の口の聞きかたの変貌ぶりに万三郎は面食らった。グプタはにこやかに軽く手を振って言う。

「お礼を言うのは私の方です。私の祖国はインドですが、この国連本部に残り、最後の日まで奉仕しようと覚悟を決めていました。今、あなたの演説を聞いて再び希望が湧いてきました。世界はきっと生き残ります。あなたが、私のエスコートする、最後ではない登壇者であろうことを誇りに思います。ありがとう、ミスター・ナカハマ」

万三郎は差し出された手を固く握り、典儀長と肩を抱き合った。控え室の前にいた警備員が扉を開ける。

「あなたの荷物は、この部屋に置かれたままです。落ち着くまでここで過ごしていただいても結構です。あちらがロビーへの通路ですが、同僚の皆さんは、まだ瞑想室におられますか？」

「いえ、私の演説が終わったら、北ラウンジに集まることになっていますので」

「そうですか、ではどうぞご自由に。ミスター・ナカハマ、またお会いしましょう。（See you again.）」

　最後の”again”をゆっくり言い終えると、グプタ典儀長は議場の方へ戻っていった。

　万三郎は控室の荷物を手にすると、すぐに北ラウンジに向かう。代表部の人たちや、石川審議官、そして杏児やユキが待っているはずだ。

　ところが、万三郎の演説が総会の最後のプログラムだったため、散会した直後の各国代表団が万三郎を見つけ、万三郎はたちまち大勢に囲まれてしまった。次々と握手を求められ、感謝と称賛の言葉を投げかけられるのを邪険に扱うわけにもいかず、笑顔とジェスチャーでひとしきり社交をこなし終えて、ようやく待ち合わせ場所のラウンジで皆を見つけたのは、控え室を出て三十分も経った頃であった。

第十八章　告白（3）

三

「遅くなって申し訳ありません」

万三郎が詫びると、そこにいた日本人スタッフの皆が口ぐちに万三郎の労をねぎらった。佐東書記官とは言葉を発さずに手をパンと打ち合った。

講演前とほとんど表情の変わらない石川審議官が万三郎に言う。

「さあ、日本に帰るぞ」

「はい」

「空港に駐機中の政府専用機のクルーから連絡が入った。ひどい嵐がいよいよ北上してくる。二時間以内にニューヨークを発ちたい、そうでなければ日本に帰れなくなるとのことだ。中浜、三浦」

「はいっ」

「はいっ」

「国連事務局ビル正面玄関の車寄せにお前たち用の車を一台待たせてある。福沢を見つけて、先に空港へ向かえ。俺はまだここの会議室で、総領事の大垣さんたちと大切な打合せが残っている。終わり次第、俺も空港へ向かう。分かったな。では代表部の皆さん、行きましょう」

そう言うと石川は、国連大使以下、代表部の職員と共に足早に立ち去って行った。佐東は再度握手を求めてきて、万三郎に言った。

「私も打合せに立ち会うように命じられている。中浜さん、いずれまた日本で会いましょう」

お辞儀をして一行を見送ると、杏児がつぶやいた。

「大役を成し遂げた部下に対して、えらくさっぱりしたもんだ」

「いや、杏児、俺のここへの到着が遅くなってしまったから、予定の時間が｜圧《お》してしま

って石川さんも焦ってたんだよ、きっと」

「ところで万三郎。お前、やってのけたな」

　杏児はあらためて万三郎の目を見る。二人はがっしりと握手を交わした。

「お前たちのおかげだよ、よくやってくれたな、あっちで」

「ワーズたち、よく頑張ったよ。特に、【hope】を褒めてやってくれ」

「ああ、もちろんだ。だけど、日本に帰ったら彼らももう一度、最後の力を振り絞って働いてもらわないと……」

「そうだな。今はまだ、衝突の可能性は九九・九パーセント。何ひとつ変わっちゃいないからな」

　そこで万三郎は杏児に訊く。

「ユキは？」

　杏児は途端に不機嫌な表情になった。

「どっかに行ったよ」

「……って、いつから？」

「演説が終わるまでは、瞑想室で一緒にレシプロしてた。ことだまワールドでは一緒に働
たよ」

「それで、その後は？」

「僕がワーズたちと喜び合っている間に、先にリアル・ワールドへ帰って行った。僕が目覚めた時には、もう部屋にいなかった」

「で、今まで連絡ないのか？」

「ああ、電話に出ない」

「なぜ？」

「知らんよ、あんな裏切り者のこと」

「裏切り者？　おい、何があったんだ？」

　杏児は本気で怒っているようだった。今、万三郎と話しているうちにも、何か思い返して苛立ちを増していっているように万三郎には思えた。

「さあね。本人の口から直接聞いたら？　もし再び会えればの話だがね」

「再びって……何だってそんな深刻な状況になってるんだ？」

「知るか！」

「おい、杏児！　こんな時にこんな所で何、仲違いしてんだよ！　何があったか知らないが、今はそんなことしてる場合じゃない。一緒に日本に帰って、ワーズたちと力を合わせて破滅を食い止めないと」

「万三郎、あいつがいなくても僕たちで十分じゃないのか」

「お前、何てこと言うんだ。一緒に一年……いや、一ヶ月だけど学んできた、かけがえのない仲間じゃないか」

「仲間だと？　いいや、あいつは違うね」

　あまりの杏児の聞き分けのなさに、口をぽかんと開けたまま杏児の顔をまじまじと見つめる。これはよほどのことがあったらしい。万三郎は気を取り直して杏児に低い声で言う。

「分かった、今は理由を問わない。ただ、ユキをこのままここに置いておくわけにはいかない。三人一緒に日本に帰ろう。俺はユキを探しに行く。杏児、お前も彼女を探してくれ、頼む」

　万三郎は、にわかに焦り始める。ラウンジはすでに人影まばらになっていた。各国からの代表団にも急ぎの帰国命令が出ているのだろう。空港を飛び立つ時刻が遅くなれば嵐に巻き込まれかねないからだ。そしてそれは日本行きの政府専用機にも当てはまる。

「ほら例えばあいつ、トイレに行ってそのまま敷地内で迷ったのかも知れないじゃないか。なにせ、初めての場所なんだから」

「初めての場所だと？　ハッ！」

　ふくれっ面の杏児に、頼んだよと念押しして、万三郎はとりあえず国連本部の敷地内を探すことにした。

第十八章　告白（4）

　四

「ああ、よかった。やっぱりユキだった。やっと見つけた。ユキ、どうしたんだよ。俺、ずっと探してたんだぜ？」

　万三郎はそう言って、ユキの手を取って立たせようとする。彼女は国連事務局ビルの前にある中庭のお堂の前に座り込んでいた。しかし、ユキはその手を振り払った。

「イヤ。もうちょっとここにいる」

「はあ？　風も強いし、雨がポツポツ降ってきたから、ここは濡れるよ」

「構わない。しばらく放っておいて」

「ええー、なんで？」

　そう言いながら万三郎は杏児に知らせようとケータイを取り出した。

「もしもし？　あ、俺。ユキが見つかった。無事。でも何かふさぎ込んでるんだ。でも説得して連れて帰るから。……えッ？　なッ……お前、何てこと言うんだよ！　……ああ、分かった、ユキを連れて帰ってから、ちゃんと話を聞くよ。先に迎えの車に乗って待っていてくれ。それと、石川さんに報告の電話入れておいてくれ。じゃあ」

　電話を切ると、ユキがすかさず訊いてきた。

「何てこと言うんだよ、って？」

「え？　ああ。『無事なら放っておけ、もう日本に帰って来なくていい』だってさ。何喧嘩してんだよ」

「ふふ、日本に帰って来なくていい、か……」

　どんより暗い黄昏時であることを差し引いても、ユキの顔色は悪かった。万三郎はため息をつくと、ユキの隣に座り込んだ。

「日本に帰る飛行機、あと一時間半ほどで離陸するって。嵐が近づいているから」

「そう。万三郎、行きなよ。私は……いい。杏児もああ言ってるし」

「ダメだ、ユキ。まだ日本でやることがある。ユキの力が必要なんだ」

「……」

　川を渡ってくる風こそビルに遮られて幾分ましではあるものの、それでも回り込んでくる風に翻弄されて、わずかな雨粒がポツリ、ポツリと二人の頬を打ち始める。四月とはいえ、夕暮れではその冷たさが身に沁みる。万三郎は身を固くして首をすくめ、すぐ傍らのユキを見た。ユキは前方の地面をうつろに見つめている。後ろに束ねられたユキの髪から頬に流れ出た数本の後れ毛に細かな水滴がついて震えていた。万三郎はユキが、帰国をあきらめるような気持ちになっている訳を切り出すのを待つことにした。

第十八章　告白（**5**）

五

しばらく風音だけの時間が流れる。

「万三郎、知ってる？　この庭、『ローズ・ガーデン』っていうの。ここに鐘があるでしょ？」

「うん、ここって国連の敷地だろ？　なんで日本風の鐘突き堂があるの？」

「この鐘とお堂はね、日本が国連に寄贈したものなの」

「へえ、そうなんだ」

「平和の鐘といってね、毎年九月二十一日、『世界平和デー』に鳴らされるの。前回私がここに来た頃は、ニューヨークはまだパニックになっていなかった。今回より余裕のある日程で、一週間前にニューヨーク入りできたの。まあ、引率者の石川審議官が、アメリカ駐在の日本政府関係者との間で打ち合わせることがたくさんあったみたいで、それでこっちに早く来ることになったんだけどね。私はね、講演の一週間前からここ、国連ビルに来て、スピーチ原稿の推敲や練習を繰り返してた。ある朝、少し遠くからだったけど、この鐘が鳴らされるのを聴いたわ。その日が世界平和デーだったの。ここでセレモニーがあったのね。アナウンスがあって、館内にいる皆も一分間黙とうしたの。一瞬、ビルの中も喧騒が止んで、静寂の中、日本の鐘の音色を聴いた。何だか不思議な気持ちだった。それで、私はここが好きになったのよ」

万三郎が怪訝な顔で何か言おうとしたとき、またひときわ強い雨粒混じりの突風が吹いた。万三郎のネクタイがユキの方へ勢いよくはためいた。万三郎は、質問よりも提案を優先させることにした。

「それは良い話だけど、いくら好きでも、ここは屋根しかないから、吹きさらしの雨がもろに身体に当たってる。ほら、ユキ、もう服も髪も濡れ始めてるじゃないか。建物の中に戻ろう」

「万三郎、私の風上に座ってくれて、私の雨避けになってくれて、自分が代わりに濡れて……。優しいんだよね、基本的に……」

万三郎は小さくため息をついた。

「なんだ、分かってんならなおさらだよ、戻ろう」

「あえてしばらく濡れさせてやろうって思ったの」

「え？」

「万三郎って、カッコ良すぎなんだよなー。さっきの演説とかさ」

「そりゃあ、ことだまワールドで助けてくれていたユキとか杏児のおかげだろ？」

「私はね、半年前に恥、さらしただけだった」

「半年前？　なあユキ、さっきも『前回ここに来た』とか言ってたけど、何言ってんの？」

　万三郎と違って、ユキは大きくため息をついた。束ねた髪の乱れを両手で直そうとしてうまくいかず、「ああーもう」と言って、髪ゴムを外し、首を振って荒く手櫛で髪を整えた。

「こんなこと、あなたに言いたくなかった」

　誰に言うでもなく、つぶやいて、ユキは意を決したように告白を始めた。

「あのね、万三郎。私ね……このミッション、二回目なんだ」

「はあ？」

「半年前にもここ、国連総会議場に来たの」

「何だって？」

「今日万三郎が立ったあの演壇、あそこに私が立って、演説しようとしてたの」
あまりの唐突さに、万三郎はユキの方を見て口をあんぐりあけたまま、二の句が継げなかった。

「さっきの万三郎の演説と同じことを訴えようとしたの」

「ユキ、ちょ、ちょっと待って。混乱してる。いったい何の話？　何言ってんの？　俺、何か大事な話の時、寝てた？」

「ううん。私があなたを驚かせるようなこと言ってる。混乱して当然」

万三郎はユキから目を逸らし、宙をあおいだ。頭を整理しないと到底理解できない話だ。

第十八章　告白（6）

六

「もう一回訊く。半年前にここへ来たって？」

「うん」

「何しに、誰と、何のために？」

「国連総会で演説しに。石川さんに付き添って。日本政府の提案を世界に伝えるために」

「今日と同じことが半年前にあったと？」

「うん」

「でも、半年前ならまだ核ミサイルは飛んでない」

「そう。アポフィスまで飛ばせるか分からない中、アメリカとロシアの政府が必死に準備中だった。六月にアポフィスの地球への衝突が確実視されて、トリノスケールが九になってからは、国連では緊急特別総会が毎週のように開かれていて、いろいろなことが検討されていたの。その一つに、ミサイルが外れた場合、他にできることがないかという議題があって、そこで私が日本代表として、ことだまの力でアポフィスの軌道を逸らせる提案をすることになった」

「なぜ？」

「石川さん、いえ、日本政府からそう指示されたからよ。それで私は約半年前、去年の九月二十五日、緊急特別総会の二日目の最後に演壇に立った……」

「で？」

「冒頭の、"Ladies and gentlemen,"を言い終えた直後、倒れてしまったの」

「演壇の上で？」

「うん。それでビヌワ議長が議長席から下りてきて、私を抱き上げてくれたらしい。議長、身体大きいから」

「で？」

「医療班のスタッフが来て、担架に移されて退場。演説はお流れ」

「なぜ倒れた？　なんだったの？」

「過度の緊張」

「……ふうん」

　再び二人の間に沈黙が流れた。

　しばらくして万三郎が独り言のように言う。

「さっき、演説が終わってビヌワ議長と握手した時、彼が言ってた言葉の意味が今、分かったよ」

「何て言ってたの？」

「『ユキに伝えておいてくれ、君の名誉回復のチャンスは必ずある。なぜなら、人類はまだ滅びないからだ』って」

　びゅう。冷たい風が二人の湿った服をまた揺らした。ユキは片手で髪が顔にかかるのを抑える。

「ビヌワ議長、今回も私が演説すると思ったんだわ。それで総会参加の各国に、最後まで居残って演説を聴くように特に働きかけたのよ。で、私ではなくてあなたが演説したので、また私が演説を前にして体調崩して、代理のあなたの演説になったのだろうと、そして私はきっと医務室で落ち込んでいるだろうと思って慰めてくれたのね」

「もしそうなら、ユキが半年前にここへ来たことは無駄ではなかったということだ。そのおかげで今回、議長が各国に、最後まで帰らずに日本の演説を聴くよう呼びかけてくれたのだから。それに、日本で俺が外務省職員からもらった演説の原稿って、ユキがその時必死で考えて作った原稿が元になってるんじゃない？　もしそうなら、それもユキの功績だ。ユキ、そのことを俺たちに黙っていたから、杏児はあんなに怒っているのか？」

　ユキは数メートル先の地面を見つめたまま、首を横に振った。万三郎も同様に、少し前の地面を見て、自分が持つ情報を再整理するように、独り言を言った。

「俺たちがことだまワールドで学び始めたのは、ことだまワールドでは一年前にもなるけれど、リアル・ワールドの時間では、わずか一ヶ月前だということだった。もしそれが真実なら、それよりずっと前、六ヶ月も前に、ここニューヨークに来ていた君は……」

　万三郎は顔を上げてユキの横顔を見た。

「君はいったい、何者なんだ？」

　髪に隠れて表情は見えなかったが、ユキは前を向いたままビクッと動いた。三たび、無言の時が二人の間に流れた。

七

「一ヶ月前、万三郎と杏児がリンガ・ラボに運ばれてきて、ことだまワールドで始めた英語研修プログラム、私にとっては、一年前以来、二回目の受講だったの」

「えっ？」

「あなたたちより一年先に、私はリンガ・ラボに運ばれてきたの」

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル……」

「私は一回目の英語学習プログラムを、五十五歳の男性と四十五歳の女性との三人で受講した。受講し始めたあの時点では、まだアポフィスの地球衝突の話はおろか、ベテルギウスの超新星爆発も起こっていなかった。だから私たちは、後で聞かされたのだけれど、リアル・ワールドの三倍速で学習していたらしいの。純粋にワーズたちの統率能力の養成に重点が置かれてた。だけど……」

万三郎のまったく知らなかった事実が明らかにされる。ユキの告白は、万三郎にとって衝撃的だ。ユキの存在が急に遠くに感じられるのだった。おそらくユキも、万三郎のそうしたショックを感じ取っている。だが彼女はあえて告白を続ける。

「……だけど、アポフィス衝突の話が現実味を帯びてくると、政府内で秘密裏にいろいろな対策が検討され始めたらしいの。リンガ・ラボで実験されていた、私たちのプログラムについても、衝突回避に貢献できる可能性が少しでもあるなら試みよ、との内閣総理大臣命令を受けて、石川審議官の指示のもと、古都田社長が途中から学習プログラムのスピードを上げたらしいの。二十倍速に。そしたら間もなく、年上の男性も女性も研修に顔を出さなくなった」

ユキは言葉を切って、目を閉じる。その中年の同僚男女のことを瞼の裏に思い描いているのだろう。やがてユキはぽつりぽつりと再開した。

「私には……彼らの行方を知らされることはなかった……。これも後で聞かされたことだけど、彼らの脳は、高速学習プログラムについていけなくて、異常をきたしたらしい。その後、あの人たちがどうなったのか、知らされてない。そして会社は急に、ことだまワールドに残留していた私の学習速度を十倍速に落とした。そして、二人に比べて大きな異常が見つからなかった私一人で、その後のプログラムを受講したの。修了したのが去年の九月のことよ。そして私は覚醒

した。この間と同じ、救国官を一人で拝命して、ここ、ニューヨークへやってきた。そして失敗した……。私の脳はね、二人の仲間ほどはっきりとした影響は見られなかったけれど、でもやっぱり、二十倍速学習に耐えられなかったの。私の副作用のひとつは、異常な、過度のあがり症だったってわけ。緊張すると足がガクガク震えて、気が遠くなって、最後には気を失ってしまうの」

　雨粒混じりの風が二人にびゅうと吹きつけた。二人は風下に顔をそむける。かなり経って、万三郎が重い口を開いた。

「ユキがその高速学習の副作用で、九月の国連総会の演説に失敗したことは分かった。だいたい、ことだまワールド側でサポートする人間なしで、今日と同じ結果を期待するなんて、無謀極まりない。だけど、それならなぜユキは、二回目の研修プログラムに参加させられたんだ？　演説へ向けての再チャレンジだったのか？　いや、副作用そのものが消えなければ、どれだけ英語能力が向上したところで、演説前に倒れるという、同じリスクが付きまとう。俺が石川さんだったら、地球滅亡を目前にして、そんなリスクは冒さない。じゃあ、なぜなんだ。なぜユキはことだまワールドに再レシプロして、俺たちと一緒にいたの？」

八

ユキは一分近くも黙っていた。杏児があんなに怒っていた理由をユキがこれから話すのだろうと、万三郎も辛抱強く黙って待っていたが、パラパラっと雨が少し強くなってきて、ついに「ユキ……」と促した。ユキは万三郎の側の髪を掻き上げ、少し充血した鋭い眼光で、はっきり万三郎を見て答えた。

「万三郎、やっぱり私、か、帰らない」

ぼつぼつとしゃべっていた先ほどとは違い、吐き出すような強い語調に変わっていた。

「何だよ、頼むよ、ユキ……」

「万三郎、迎えの車の中で杏ちゃんが待ってるんでしょう？　車寄せ、すぐそこだよ。い、行きなよ」

「すぐそこだからこそ、一緒に行こうよ。車の中で話、聴くよ」

「は、話さないことに決めたわ」

「なんだ、そりゃ！」

「ほら、万三郎、これまでありがとう。ほ、本当に感謝してる。地球が助かると、いいね」

「おい、ユキ……」

ユキは立ち上がると、不自然ににっこり笑って万三郎と握手した。そして、「私、こっちに用事があるの」と、雨混じりの風の中を、車寄せとは反対の方向へスタスタと歩き始めた。

「おい、待てよ」

「来ないでッ！　杏ちゃんのところへ行って。あなたはあっち！」

ユキは大きな声で万三郎を制すと、車寄せの方を指さして万三郎に行くように促した。そして立ち呆けている万三郎を背にして大股で歩きだした。

「もう！　何なんだよ、ユキ！　君なしで日本に帰れる訳ないだろう」

　それは万三郎の本音だった。確かにユキの告白はショッキングではあった。だが、だからと言って、杏児も含め、ＥＴとしてユキと共に過ごしてきた日々を全否定することはできない。心の整理は後でもできる。今はユキを空港へ、そして日本へ連れて帰ることが急務なのだ。

　万三郎はやはりユキを追いかける。追いかけながらふと思った。

――リンガ・ラボ特製のお茶の薬効が切れたか。

　セキュリティーゲートがあったが、ユキは守衛にＩＤを見せて難なく出て行った。ユキを追いかけていた万三郎は、逆に不審者だと疑われ、守衛の質問に答える一、二分の間、ゲートに足止めを食らった。ようやく解放された万三郎は、ユキが消えた方向に走る。ケータイが鳴った。ユキを探しながら出る。

「万三郎、今どこだ？　もう石川さんたちも戻って来られた。早く帰って来いよ」

「隣の公園だ。ユキが言うことを聞かずに逃げている」

「何やってんだ。飛行機に間に合わなくなるぞ」

「必ずユキを連れて戻る。石川さんたちには先に行ってくださいと伝えてくれ。あ、ユキを見つけた。切るぞ」

　公園一帯は芝生になっていて見通しがきく。向こうにイースト・リバーを臨むその公園の川際に、人が一人立っていた。小雨ぱらつくこんな日のこんな時間に、公園を散策する人間など他にいなかったから、その人影がユキであることは遠くからでも容易に分かった。

「ユキ」

　呼びかけられたユキは、振り返って眉を上げた。

「万三郎！　どうしてついてくるのよ！」

「一人で戻るわけないだろう。さ、帰ろう」

　万三郎が近寄ってくるのを認めたユキは、そこに自分のハンドバッグを打ち棄て、足を大きく上げてコンクリート・フェンスに引っかけ、腕を突っ張って、ふらつきながらもフェンスの細い上辺に手放しで立ち上がった。上辺の幅は、目測で十五センチメートルもない。

　九

「危ない！　ユキ降りろ！」

「ちっ、近寄らないで！　近寄ったら川へ飛び降りる」

　佐東書記官から手渡された国連ビル群の案内パンフレットに載っていた施設全景の写真を万三郎は思い出していた。万三郎とユキが立っているこの真下に、半トンネル状にえぐれて川岸に沿う形で、ハイウェイが走っていたはずだ。ユキが立っているコンクリート・フェンスの向こう側は、水面まで少なくとも七、八メートルもの落差があるに違いない。飛び降りたら、まず助からない。

「ユキ、今の君、どうかしてる。おかしいよ」

　さらに歩を進めた万三郎に、ユキはほとんど半狂乱で叫んだ。

「近寄らないでって言ってるでしょ！」

　万三郎は足を止めたものの、ユキの足がブルブル震えていて、いつバランスを崩して踏み外すかと思うと気が気ではない。

「分かった。だけど何で、そこまで頑なに日本に帰ろうとしないんだ」

　ユキは眉を吊り上げて大声で言い返す。

「わ、わかんない人ね！　あなたのためにならないから、言うのやめたのッ。分かったらもう私に構わず行きなさいよ！」

　川べりでは風を遮るものがなく、強くなった雨粒が二人に容赦なく打ち付けた。ユキは左手で髪を掻き上げると、もう一度大声で万三郎に叫んだ。

「行きなさいってば！」

♪山寺の、和尚さんは、毬が蹴りたし毬はなし　♪山寺の、和尚さんは、毬が蹴りたし毬はなし　♪山寺の……”

　鳴動したユキのスマホは、打ち棄てられたハンドバッグの中ではなく、彼女の上着の内ポケットにあった。思いがけないタイミングで鳴ったことで、気が高ぶり過ぎていたユキを少しだけ冷静にする効果があったようだ。ユキの表情は明らかに呼び出しに応えるか迷っていた。

「ユキ、石川さんだよ。出ろよ」

　着メロは途切れる様子がないので、万三郎を警戒したまま、ついにユキはケータイを取り出して応答した。

「福沢です……はい」

　万三郎がその隙にユキに近づこうとしたら、ユキはスマホを握ったまま、幅十五センチもないフェンスを一歩、横へ逃げようとした。その危険な行為を見て万三郎は両手を前に差し出し、「分かった、もう近寄らない」というジェスチャーをした。

「……いいえ、私は帰りません。三浦救国官に私の本来の任務を察知されました。知られた以上、任務続行は不可能です。石川さん、中浜救国官が国連ミッションを成功させた今、私はもう用なしです。ただ今をもって解任してください。秘密を守れなかった責任は取ります。飛行機の私の席は、日本に帰りたがっている別の人に割り当ててください。さようなら」

　ユキは一方的に電話を切り、さらに電源を切った。

「ユキっ！　責任を取るって、なんだ」

「しつこい！　帰って、杏ちゃんから聞きなさい」

　ユキはそう言って、ちらりと後ろを振り返った。

――まずい！

　万三郎はすわとコンクリート・フェンスに駆け寄った。やはり、ユキは飛び降りた。間に合わなかった。

十

ユキと呼びかける声すら出ず、万三郎はフェンスから身を乗り出して見た。

「あっ！」

フェンスの向こうはそのまま川ではなかった。フェンスの死角になって見えなかったが、幅一メートルほどの張り出しがあった。ユキはそこに降りたのだ。そしてそこからさらに、今度は本当に数メートル下の川に跳ぼうとしていたが、バランスを崩してわずかにもたついていた。万三郎は夢中でフェンスを乗り越え、張り出しに飛び降りて、ユキに飛び掛かった。

「ユキッ！」

ギリギリのところで、跳躍しようとするユキの身体を両腕で羽交い絞めにし、もがくユキを張り出しの地面に引き据えた。二つの身体は幅一メートルの隙間にもつれ合って転がった。

「あーッ！」

ユキはヒステリックにわめき、手足をバタバタさせる。万三郎はそんなユキの身体をしっかり抱きかかえ、腕以外の動きを封じた。ユキは抑え込まれたまま、両手の拳で万三郎の脇腹といわず背中といわず、ところ構わずポカポカと殴った。

♪山寺の、和尚さんは、毬が蹴りたし毬はなし　♪山寺の、和尚さんは、毬が蹴りたし毬はなし　♪山寺の、和尚さんは……”

万三郎のケータイが鳴った。もつれ合っていた二人の動作が止まる。しばらく考える風だった万三郎はごそごそと内ポケットに手を忍ばせた。ユキが拘束を振りほどこうと動きかけたが、そこは万三郎が強い力でぐっと抑え込む。図らずも、万三郎の目の前に、ユキの頭が来る形になった。肩で息をしながら万三郎が応答する。

「中浜です」

「中浜、福沢を死なせるな。必ず連れ戻せ」

電話から聞こえる石川の声は、至近にいるユキの耳にも漏れ聞こえているのを万三郎は認識し

ている。

「そのつもりですが、何があったんですか！　どうしてこんなことになるんですか！」

「理由は訊くな」

「理由を聞かなければ、彼女を説得できません。彼女が死んだら、石川さん、あなたの責任ですからね」

「つべこべ言わずに連れ戻せ」

「彼女が死のうとする理由は？」

「……言えん」

「じゃあ俺も帰りません。職務放棄です。彼女と一緒に責任を取ります」

「貴様、馬鹿も休み休み……」

　万三郎はブチッと通話を切った。

「やるじゃん……」

　ユキは万三郎の方にわずかに頭を向けて言った。

十一

♪山寺の、和尚さんは……

二人の予想通り、すぐに呼び出し音が鳴る。

「理由は？」

石川はしぶしぶ話し始めた。

「福沢には、ことだまワールドでお前や三浦が自分の過去を思い出そうとするのを妨害する使命を与えていた。語学学習の邪魔になるからだ」

「何ですって！　ど、どうやって？」

「脳波だ。お前と三浦が、過去を思い出そうとしている状況と時間帯を福沢に逐一報告させていた。脳波自体はリアル・ワールドのカプセルでモニターしていた。そのマッチング事例の蓄積をもとに、お前たちに特定の脳派パターンが出現した時、つまりお前たちが過去を思い出そうとした時、電気刺激をお前たちの脳に流し、妨害するようにしていた。事例が増えるほど妨害の精度が高まり、お前たちは学習効果で、たとえ一人でいるときですら、過去を思い出そうとする思考作業を徐々に嫌がるようになる」

「……」

「福沢はお前たちより一年早くリンガ・ラボに収容されていた。あいつはある重要ミッションに失敗したが、今言った秘密任務を遂行させるために、お前と三浦に近づけた。今、あいつが責任を云々と言っているのは、お前たちを裏切っていたという良心の呵責からだろう。分かったか、中浜。分かったら福沢を説得して早く空港に来い」

「……分かりました」

電話が切れた。

ユキは万三郎の腕の下で微動だにしない。もう辺りは薄暗くなり始め、雨は冷たい糸を引いて、時々強風でよじれた。

　ケータイをポケットにしまい、しばらくして万三郎がつぶやく。

「ユキ、本当なのか？」

　ユキのかすかな頷きが腕に伝わってくる。

「なぜ、妨害する必要が」

「十二倍速学習に、支障が出るから」

「なぜ分かる」

「私が……その実例だから」

「実例……」

「ひどく情緒不安定になったり……」

「今みたいに？」

「私の同期の二人はもっとひどいよ。異常が認められたら、外部操作でことだまワールド内で気を失わされて、その後どうなったか分からない。カプセルの中でまだ昏睡状態かもしれないし、もうどちらの世界にもいないかもしれない」

「そんな危険なことをさせられてたのか、俺たち」

　万三郎は改めて怒りを含んだ独り言を吐いたが、ユキは自嘲するようにいい放った。

「私たちはみんな、『検体』だから」

　万三郎が後ろから羽交い絞めにして自由を奪っているので、ユキの顔は川の方を向いていた。その川の方に向かって、ユキは独り言を言うように話を続ける。

「検体ナンバーＪＥＳ一〇二八、三浦杏児と、〇二九、中浜万三郎、それに、私は何も聞かされていなかったけれど、チーム・スピアリアーズの三人もきっとそうね、あわせて五人のＥＴが、ＫＣＪが救国官の候補として育成を試みた『検体』だった。みどり組もスピアリアーズも十二倍

速を経験して、スピアリアーズの方は三人とも、障害が出たわ」

「あっ！　それが……それが、あの修了試験の時の、スピアリアーズの連中のおかしな反応だったのか……」

十二

強い風が二人を襲った。ユキの濡れた髪が万三郎の前ではためいて、鼻をくすぐったか、万三郎は顔を横に向けて勢いよくくしゃみした。

「万三郎、風邪ひくよ」

万三郎は苦笑いする。

「誰のせいだよ」

ユキはクスリと笑ったようだ。もうユキの気分が落ち着いて、冷静さを取り戻したように感じた。

「ねえ、私も寒いよ。万三郎に動き、封じられて、雨風に吹きさらされてるよ」

「ユキ、もう早まったことしないって約束するか」

後ろから首に回された万三郎の腕の下でユキはコクリと頷いた。だが万三郎は、その腕に少しだけ力を込めた。

「いいかユキ、死んじゃダメだ。君は救国官だろ？　君を必要としている人たちがたくさんいる」

「……」

「俺も一一」

ユキの耳元で万三郎が小さく言った。

「君が、必要だ」

冷たい風が一瞬、止んだ。ユキの視界の隅で、万三郎の言葉が白く空気に溶けた。

ユキは目を閉じる。

「……分かった」

「良かった。じゃあ、急ごう」

　万三郎はユキの拘束を解いた。そしてフェンスの上辺に飛びついて向こう側に戻り、身を翻して今度はフェンスから身を乗り出し、ユキを引き上げるために、手を出すよう求めた。

「ほら、ユキ」

　ユキは手を出すことなく、黙って万三郎を見上げたままだ。

「ほらって」

　やはりユキは動かない。前髪からしずくがぽたぽた落ちるに任せている。

「ユキ！」

　万三郎は顔色を変えて、目一杯体を乗り出して、ユキの手を取った。取られるままに彼女は右手を預けた。握手する形になったまま、ユキは口を開いた。

「万三郎、私は、あなたと杏ちゃんをずっと裏切り続けてきた。私は、あなたたちがことだまカンパニーに来た経緯も聞かされているし、二人の本名も知っている。一部のワーズたちやマスター・ジロー白洲田は、私の任務を知っていたけど、古都田社長から固く口止めされていたから、誰も二人には言わなかった。私は、万三郎や杏ちゃんが、研修中に限らず、ことだまワールドでの生活の中で、どんなことを言い、どんなことを考えていたか、毎日、今神秘書室長にメールで報告していたの」

「……」

　万三郎はユキを引き上げることも忘れ、ユキの手を取ったまま凍りついたように静止して話を聴いていた。

　その時、万三郎の真横で声がした。

「へえ、それはスパイ活動、ご苦労様でした」

杏児が傘をさして、すぐ横に現れたのだった。

「杏児！」

万三郎は驚いたが、杏児は万三郎ではなく、厳しい表情でユキの目をじっと見ている。それから杏児は、傘を手にしたまま目を閉じた。

その時、ユキの手の力が急に弱まって、万三郎の手からするりと抜けた。杏児に気をとられ、うっかり力を入れるのを忘れていた万三郎の不覚だった。万三郎の意識が杏児からユキに戻った時、雨ではなく、ユキの目からあきらかに涙が一筋流れた。

「杏ちゃん、万三郎、ごめんね。やっぱり私……」

涙が頬を伝った直後、ユキはかすかに微笑み、身を翻して張り出しの縁を蹴って宙に浮いた。

「！」

万三郎が目を見開いた時、ユキの身体はもう落下を始めていた。考える間もなくコンクリート・フェンスを力いっぱい蹴って、万三郎は、ユキに向かって反射的に身体を跳躍させていた。

二人の身体は相次いでイースト・リバーへ落下していった。

◆◆◆

第十九章　前夜（1）

一

雨と相当な強風の中、日本政府専用機は辛うじてＪ・Ｆ・ケネディー空港を離陸し、上昇を始めていた。

揺れる機内の後ろの方のセクションは、帰国を許された在米邦人高官とその家族で満員だった。そのセクションとはカーテンを隔てて、こちら側、随行員席のシートに、救国官たちは席を得ていた。横並びで、窓側から杏児、万三郎、そして通路を挟んでユキだ。まだ意識のないユキが横たわる席は、特例で離陸時からフルフラットに倒されていた。点滴を施され、体温や血圧や脈拍がモニターされている。

三人の前数列と後ろ数列は、ニューヨークを発った時点ではまだ空席となっている。

上空に至り、多少揺れが収まったところで、シートベルトサインが消えた。ブリーフケースを提げて前のセクションから歩いてきた石川の指示で、濡れた服を着替えるために万三郎が席を立った。その万三郎の席に石川は一時的に座り、ブリーフケースから書類を取り出しながら、コール・ボタンを押して客室乗務員を呼んだ。間もなく、自衛官でもあり、かつ医師免許も持っているという女性乗務員がやって来て、フルフラットシートに横たわっているユキのモニターの数値をチェックした。そして書類から目を離した石川審議官に落ち着いた声で報告した。

「バイタルが安定しているので、しばらくしたら目が覚めると思います」

「そうですか、ありがとうございます」

石川は頷いてから乗務員に尋ねた。

「ところで、この飛行機はロスに立ち寄るのですよね。羽田にはいつ着きますか」

「はい。ロサンゼルスでは数十名の邦人高官を収容するため、三十分から一時間トランジットします。その先、日本の近くにも強い台風が近づいているので、影響がどのくらい出るのかまだ分かりませんが、日本時間で四月三日の朝六時頃に羽田空港に到着することを目指しています」

「なるほど、ありがとうございます」

石川は腕時計をちらりと見て、それから乗務員に礼を言った。乗務員が頷いて石川のもとを離

れると、石川の横に座っていた杏児が石川の耳元で囁いた。

「石川さん、僕は……僕はいったい、どちらの世界の住人なんでしょうか」
　石川は杏児の方を見もせずに、ブリーフケースを取り出すと、ふたを開けて今まで目を通していた書類を仕舞い込んだ。

「喜ばしいことじゃないか、お前の機転の利いたレシプロのおかげで、こいつらの着水衝撃を緩和できたんだろう？　奇跡的に二人の命を助けた。お前の瞬間レシプロ能力の賜物だ」

「自分でも驚きました。石川さん、だからこそ、怖いんです。僕は……何者なんでしょうか」

　石川はもう一枚の書類を取り出して腕時計と見比べ始めた。

「三浦、今お前の哲学問答に付き合っている暇はない」

「ユキから全部、聞きました」

　杏児がそう言うと、石川はギロリと視線を杏児に向けた。

「古都田社長がユキに監視を命じた、ということは石川さんの意向を受けてということですよね」

「……知らん」

「高速学習で何人かの人が精神異常をきたしたと聞いています。何の権利があって危険な人体実験をするのですか」

「……」

「小村、ちづるって名前に聞き覚えがあるでしょう？」

「……」

「今、何て名前でリンガ・ラボのカプセルに収容されているのですか。あの子におかしな人体実験したら、僕はあなたを許さ……」

　石川はいきなり、書類を放り出した右手で杏児の襟首をガッとつかんだ。びしょ濡れのまま搭乗して、さっき機内で着替えたばかりのシャツの第二ボタンが吹き飛んだ。

「若造、口のききかたに気をつけろ」

二

石川は杏児を睨みつけ、声を押し殺して言う。

「お前など本来、まだ山でカチカチに凍っているはずだったんだ。国が動いて、お前が生前、保険に加入していたことにしておいた。すべての費用が保険から出るとお前の親には警察から話が行っている。だがお前が望むなら、これまで国庫から出ている、お前の救出と生命維持に関わるすべての費用――まあ、一億は下らんだろうがな――を、あらためて親に請求した上で、お前ひとり冬山に戻して、永遠の眠りにつかせてやってもいいんだぞ」

杏児は目を見開いて石川を見つめた。首を絞められる形になっているので、声が出せない。

「国家権力を甘く見るな。機密を不用意に口にすると、ある日突然、存在自体がなくなるぞ。これは警告だ。分かったか」

押し殺した声で「分かったか」と言われても、襟首をねじ上げた手が顎を下から突き上げているので、頷くことも声を出すこともできず、杏児は石川の手に自分の手を重ねて、外してくれとただ目で懇願するしかなかった。二、三秒の後、石川は手を離し、念押しするように絡めていた視線をようやく杏児から外して、床に飛んだ書類を拾った。

そこへ前の通路から万三郎が蒼白な顔で歩いてきて、石川の前で立ち止まった。

「石川さん、着替えてきました」

「ああ」

石川は拾った書類をブリーフケースに戻して口金を閉めて立ち上がる。

「福沢は、大丈夫だそうだ。俺は戻る。前のセクションで統合幕僚副長と打ち合わせを済ませてから休む。しばらくは起きているから何かあったら報告に来い」

「はい、分かりました」

「ああ、それから、伊勢行きのヘリに羽田からすぐ乗り換えて飛べるよう、副長に念押ししておいてやる」

「ありがとうございます、石川さん」

　石川は万三郎ではなく、杏児にチラリと目をやり、さらにまだ目が覚めないユキを一瞬見やってから通路を前へと歩いて行った。

　石川が座っていた席に、万三郎が座った。

　石川と入れ違いに先ほどの客室乗務員が万三郎に毛布を持ってきた。

「あ、すぐに持って来ていただいてすみません。もう一枚、それもお借りできますか」

「もちろんです。二枚で大丈夫ですか」

「足りなければまた、お願いすると思います」

「かしこまりました。いつでも」

　そう言って客室乗務員の女性は万三郎に毛布を手渡して、ユキが先ほどと変わりないのを確かめてから歩き去った。杏児は、飛んだシャツのボタンの所在を求めて視線を巡らせたが、結局見つからず、チッと舌打ちをして、ひじ掛けを叩き、「クソッ」と吐き捨てた。

「杏児、どうした」

「いや、何でもない」

「そうか……で、ユキは」

　万三郎はユキを振り返った。杏児が答える。

「石川さんの言った通りだ。怪我も障害もない。もうすぐ眼が覚めるだろうって。おぼれなくて済んだのは、お前がすぐ水の中から引き上げたからだろう」

「そうか……よかった」

万三郎はしばらくユキの寝顔を見てから、杏児に向き直って、その手を取った。

「杏児、改めて言う。ありがとう。お前が助けてくれなかったら、俺もユキも死んでいたかもしれないし、生きていても飛行機に間に合わなかった」

　杏児は万三郎を見返して言う。

「万三郎、俺はユキを赦すよ」

三

万三郎は目を丸くした。杏児は万三郎越しに、まだ目覚めないユキを見やった。

「こいつ、本当に死ぬ気で身投げしやがった。考えてみればさ、ユキも可哀そうなんだよな……。高速学習の後遺症と、心の傷を抱えたまま、もう一回、同じ高速学習環境に押し込められて……。しかも、不本意な監視の任務まで命じられて、俺たちと一緒の間、ずっと罪悪感にさいなまれていたんだ、きっと。一言も相談できずにさ」

「そう……だな」

万三郎も杏児につられてユキを振り返った。杏児が続ける。

「こいつ、タッチ・ハート作戦でお前の演説中も、必死で働いてたぜ。半年前の贖罪のように、相当なことだまのエネルギーをワーズたちに載せて送り出してた。よく気力と体力が持ったもんだ」

「そうか……」

「あの時、俺は裏切られた怒りで、ユキを認めようとしなかったけど、今考えると、死ぬ気で働くって、ああいうことを言うんだなって、思う」

「……」

万三郎は、ユキの苦悩に思いを馳せていた。往きの飛行機の中で、「手を握っていて」と万三郎に言った時も、自分だけが仲間を監視するミッションを担っていることや、半年前に致命的な失敗をした場所を再び訪れなければならないことを決して口にできない代わりに、彼女が発していた悲鳴だったのではないだろうか。

ユキは寝息ひとつ立てずに眠っている。

「万三郎……」

杏児の呼びかけに万三郎は振り返る。

「今度は三人、一緒だ。次は実際に【hope】をアポフィスに向けて送り出す『｜偉大なる絆《グレート・ボンズ》作戦』だな。ユキに負けないように伊勢神宮で一丁、やらかそうぜ」
「ああ」

　二人は改めて目の前でがっしりと右手を組み合った。手を組んだまま、杏児が眉をひそめた。

「万三郎、お前……いやに手が熱いぞ。大丈夫か」

　万三郎は笑いながら手を解き、その手でボタンを押して自分のシートを倒し、仰向けに寝転がって、供え付けのものと併せて三枚の毛布を重ねて拡げた。

「決戦は明日だ。お互い、体力を取り戻そうぜ」

　杏児は訝しんだが、万三郎が話をはぐらかしたのを、あえて問いただそうとはしなかった。杏児もシートを倒して横になり、供え付けの毛布を被った。毛布の陰から万三郎が言う。

「杏児、一瞬でことだまワールドへ飛べる瞬時レシプロの技術、いつ習得したんだ？」

　杏児も毛布の陰から答える。

「あの時が初めてだ。直感的に、何とかしなきゃって思いがよぎって、そしたら僕の手が突然、ぐんぐん伸びて、スローモーションのように、落ちていくお前たちに届く感覚に襲われた」

「カーチェイスの最中、古都田社長と新渡戸部長がやっていた技と同じじゃないのか」

「そうかもしれない。恵美さんが言ってたように、確かに、ほんの一瞬ですごい体力と精神力を使った。年配の人には生死に関わるかも。僕でさえ、しばらくあの場に座り込んで放心状態になったよ」

「杏児、お前、レシプロケーターの才能、あるんじゃない？　古都田社長の後継者になれるよ」

「やめてくれ。僕は望んでＥＴになった訳じゃないし、ＫＣＪの社長になんか……」

　そこまで言って杏児が話すのを止めたのは、万三郎の寝息が耳に入って来たからだった。
万三郎は杏児が言葉を止めたところまで認識したものの、もう会話を続けることができなかった。

――万三郎のやつ、もう、落ちたのか。

　杏児がそう思うのと時を同じくして、機内の照明が暗くなった。杏児は毛布の中で寝返りを打ち、何気なく顔を出してみてぎょっとした。窓越しに、ベテルギウスが赤い妖光を放っていたからだ。杏児は慌てて目をそむけ、毛布を引き上げる。

――アポフィスが……今、この時も、地球に向かっている……。

　にわかに杏児の腹にアドレナリンが分泌される感覚が襲ってきた。

――そうだ。今はまだ、状況は何も変わっていない。石川さんの話が正しければ、おおよそ三十六時間後、アポフィスは、確実に地球に衝突するんだ。

　毛布の中で目を閉じた杏児の瞼の裏に、ちづるの顔が浮かんだ。

第十九章　前夜（4）

四

万三郎を乗せた政府専用機は、夜と共に飛んでいた。だが機内の照明がスッと明るくなり、機長アナウンスが流れ始めた。

「おはようございます。ただいま、日本時間で午前五時三十分です。当機はあと三十分ほどで、羽田空港に到着します。乗客の皆さまにお知らせします。日本政府は、日本時間の四日午前零時に、国家非常事態を宣言しました。羽田空港は現在、厳戒態勢を取っており、空港に接続する全ての公共交通機関は現在休止しています。乗客の皆様は、当機がターミナルに到着しましたら、待機している自衛官の誘導に従ってください」

万三郎の意識は深みから浮上してくる。機内が次第にざわめき始める。そのざわめきを聞きながら万三郎は、刻々と覚醒する現在意識の底を何度もなぞるように、考えを巡らせる。
人々は政府高官の家族ゆえに、信ぴょう性の高い一定の情報は聞かされているのかも知れない。問題は、政府が一般国民に対して小惑星衝突の噂を事実だと公式に認めた上で非常事態を宣言したのかどうかである。だが、政府専用機であるこの飛行機の着陸こそ認めたものの、パニックや不測の事態を警戒して空港を閉鎖するような厳戒体制を決断するくらいだ。すでに広く国民に知らしめてしまったのかも知れない。

救国官の一行がニューヨークに飛ぶために空港に向かう道ですらテロリストに襲われたのだ。あの時はまだ滅亡の危機はうわさでしかなかった。政府が公式に認めたのなら、パニックによって、想像を絶するどんな事態が起こっても不思議ではない。

万三郎は、ぐったりと重い身体を実感しながらも、今、日本がどうなっているのか、人々がどんな精神状態にあるのか不安いっぱいになって、パチリと目を開けた。人々の心が荒れたら、世界に協力を呼びかけた、グレート・ボンズ作戦に、肝心の日本が貢献できなくなる。ことだまの国として、世界の危機にあっても日本人の心がひとつになれないなどという事態は避けたい。

見ると、ユキも同じように目を開けていた。反対側では杏児もこっちを見ている。

「ユキ、体調はどう？」

「うん、大丈夫。幽霊じゃないのね」

万三郎は苦笑した。

「杏児が助けてくれたんだ」

　ユキは、頭を上げて万三郎越しに杏児に礼を言った。

「そうなんだ。杏ちゃん、ありがとう」

　杏児が訊く。

「ユキ、覚えてるのか」

　ユキは頷いてすぐかぶりを振った。

「うん、う、ううん。飛び降りたとこまで」

　杏児も苦笑した。

「ま、いいや」

　その時、前方から石川が歩いてきた。

「おはようございます」

　石川の表情は硬い……というか、寝ていないのではないかと思われた。挨拶をしたユキを見て、ほんの一瞬、表情を緩めたが、即座に、知らない人なら気安く声を掛けられないほど厳しい顔に戻った。

「福沢、気がついたか。大丈夫か」

「はい、ご迷惑をおかけしました」

　その厳しい表情のままで石川は万三郎と杏児の方を向く。

「航空自衛隊のヘリが手配できそうだ。だが、別の所で救助作業を遂行中らしく、羽田への到着が遅れるそうだ」

「どのくらい遅れそうなのですか」

「分からん、作戦が片付き次第ということだ。だが午前中に来るだろう。それまで空港で身体を休めておけ」

「あの……」

　石川は精悍ながら、疲労で黒ずんだ顔を万三郎に向けた。

「石川さんも、伊勢神宮へ一緒に行ってくださるのですか」

　石川は沈黙した。それからひとつため息をついて、万三郎とユキの間の通路にしゃがみ込んだ。

「ひと口に国を守るといっても、実にいろんなものを守らなくちゃならんな」

　前後の客席に座っている他人をはばかって、声をひそめた石川の表情がわずかに緩んだ。

「お前たちは、自分の意志ではなく救国官を任ぜられたが、自分の意志で伊勢行きを選んだ。それなら伊勢で、国を救うために、ベストを尽くせ。俺も国家公務員だ。俺をいちばん必要としている場所で、国のために働く」

「石川さんは、内閣府の役人ですものね」

　石川は頷いた。

「俺は、総理官邸に呼び出されている。非常事態宣言発令中はずっと、大泉総理のそばに詰めることになるだろう」

「では、別行動、ですね」

　石川は頷く代わりに続けた。

「中浜、三浦、福沢。お前たち三人とも、今回はよくやった。だが、その偉大な功績が意味を持つのも、明日を乗り越えてこそだ。俺も東京でベストを尽くす。お前たちも伊勢でベストを尽くせ。共にこの国を守ろう」

　石川は低い声でそう言うと、杏児、万三郎、ユキとそれぞれ肩をポンと叩いた。

「必ず、また会おう」

第十九章　前夜（5）

　五

――古島さん、しっかりして！　ダメだよ、古島さん、死んじゃダメ！　もう、私を一人にしないで、お願い……。

「古島……さん……」

　古島を助け起こしながら目が覚めると、恵美はちゃぶ台に突っ伏して寝ていた。黄八丈の着物の袖が涙でしとどに濡れていた。恵美は頭を起こして振り返り、時計を見る。大きなのっぽの古時計は朝七時を指していた。この振り子時計は夜には時報を打たないように設定している。うっかり寝ている間に、日付けが変わって朝になってしまったようだ。
部屋の照明を少し暗くしたことで、ついあんな夢を見たのかもしれないと思いながら恵美は立ち上がり、着物の乱れをしゃんと直してから、壁に懸けられた小さな鏡の前に立った。眠っている間に泣きはらした顔には、普段のりんとした涼やかさがない。

「やだ、何て顔してんだろ、私……」

　恵美は一瞬苦笑いを浮かべ、ハンカチを軽く当てて、目もとに残った涙を吸い取らせた。
次に、その鏡の隣り、柱に掛かった日めくりカレンダーをしばらく見ていた恵美は、やにわに一枚をめくり破り、さらにもう一枚をめくって、現れた「五」という数字をわざと口に出して言ってみる。

「四月五日、衝突記念日」

　それから、その「五」をちらりとめくってみる。「六」があった。

「あるじゃない……」

　当たり前のことを恵美がつぶやいた時、「カアー」とカラスが鳴く音がした。

――えッ、誰？

　恵美が驚いて、台所への入口にかかる縄のれんの横にあるカラーモニターに警戒の目を向ける。エレベーターの上方からと前後の隠しカメラから撮影された侵入者の姿は、三浦杏児のそれだ。恵美は目を見開き、手で口元を隠して鋭く息を吸った。

「古……三浦さん！」

　恵美は土間の先にある扉に慌てて駆け寄って行った。チン、と音がしてエレベーターの扉が開く。乗っていたのはやはり杏児だ。

「うわッ」

　扉が開くと目の前に恵美が迎えに出ていたので、杏児は少なからず驚いた。

「お、お帰りなさい、三浦さん」

　恵美は嗚咽が込み上げてくるのを必死でこらえながら、軽く腰を折ってお辞儀をした。

「え、恵美さん、ただいま」

　お辞儀から直りながら杏児を見上げて、古島に生き写しのような杏児の目もとを見ると、恵美は自分の目がみるみる潤むのをもはや抑えることができなかった。

「無事に帰国したのね。首尾はどうだった？　撃たれた足は？　ああ……とにかく帰ってきてくれて、すごく、嬉しい」

　抱きつきたい衝動に任せ、｜奴《やっこ》のように両腕を広げたものの、その手のやり場に困り、手持ち無沙汰に静止させた恵美は、仕方なく自分の目元の涙を隠すのに袖を当てた。その恵美の両肩を杏児がいきなりがっしりつかんだので、恵美はビクリと身体をこわばらせた。

「恵美さん、訊きたいことがあるんです」

　恵美はおずおずと杏児を見上げる。帰って来るなり、ろくに事情も話さずに、勢いづいた杏児の性急さが恵美に妖しい胸騒ぎを覚えさせた。

「な……何」

　杏児は華奢な恵美の肩をつかんだまま言い聞かせるようにわずかに前後に揺すった。

「恵美さん、ちづるは、死んだのですか？　それともこのラボにいるのですか」

　恵美の肩を揺らしながらそんな問いを発した杏児を、恵美はうらめしそうに見上げた。そこへ杏児がさらに訊くのだ。

「小村、小村ちづる。僕と一緒に発見されたはずだ。恵美さん、あなたは全て知っているのでしょう？」

　杏児のその一言を聞いて恵美は悟った。杏児は、ニューヨークへの往復旅程のどこかで、何らかの事情で、自分がどうしてここへ運ばれてきたのかを知り得たのだろう。幾度となく上半身を揺すぶられる恵美は、今度はうつむいたまましばらく無言で考えていたが、口を真一文字に結ぶと、杏児の目をしっかり見据えて答えた。

「先日も言いましたが、小村ちづる、などという人は、リンガ・ラボの検体群には存在していません」

六

杏児はハッとした顔で恵美を見つめ返したが、急にまた恵美の肩を持つ手に力を入れ、恵美を揺らした。

「恵美さん、頼む、教えて下さい。ちづるは僕と一緒に救助されたはずだ」

杏児は、恵美がまたうつむいて答える様子がないと分かると、恵美の肩から手を離し、三和土（たたき）から靴を脱いで板の間に上がり、さらに畳敷きのラボを奥へとすたすた歩いて行く。覚醒した時、この奥に、さらにいくつものカプセルが安置してあるのを杏児は見ているのだ。あの並びのうち、一つがちづるのカプセルだろうと杏児は読んでいるようだ。

「ダメよ、行かないで！」

大股でカプセルに歩いて行く杏児に、恵美は必死で追いすがる。

「三浦さん、私は今、このラボの管理権限を古都田社長から一時的に委任されています。勝手なことをしないで。私の責任問題になるから」

それでも杏児は歩調を緩めない。自分たちが二日前に目覚めた、空のカプセルの並びの向こうに引かれている障子を杏児は躊躇なく開けた。次の障子までの間に、三台のカプセルが「稼働」していた。透明アクリルの部分は、電圧がかかっているのか、曇っていて中がうかがい知れない。杏児は一番手前のカプセルにすがりつくようにして、声を絞り出す。

「ちづる！」

そして、カプセルの下に見えるいくつかの配線とスイッチ類を確認し始めた。

「ちづる！　今、目を覚ましてやるからな」

杏児は明らかに我を忘れていた。そのカプセルの中には自分の恋人がいると思い込んでいて、覚醒させようと今にもスイッチを操作しそうだ。

「三浦さん、やめて！」

　恵美は力任せに杏児をカプセルのもとから引き離した。杏児は思いがけない強い力に引っ張られて部屋の隅によろめいて尻もちをついたほどだ。恵美は声を荒げて言う。

「強制的にカプセルを開けることは、検体を殺すことになる。きちんとした手順を踏まないと、ことだまワールドに行っている意識が、身体を見失って、正しく身体に戻って来られなくなるの」

「だったら！」

　同じように杏児が声を荒げる。

「きちんとした手順で、ちづるを覚醒させてやって下さい！」

　恵美は杏児を睨んだままかぶりを振る。

「権限のある人の命令がなければ、ちづるさんを覚醒させることはできません！」

　言ってから恵美はハッとして思わず杏児から目を逸らし、脇を向いた。

――しまった……。

　杏児は恵美を黙って睨み返している。

七

「恵美さん、一時的であれ、あなたが権限を任されていると、さっき自分で言った。ちづるを、目覚めさせて下さい」

恵美は一度目を閉じて、それから顔を上げて杏児を見て、悲しげな顔をわずかに左右に振った。

「三浦さん……。小村ちづるさんは今、別の名前で、ことだまワールド内の、ＫＣＪ別事業部で働いているわ」

杏児の目が大きく見開かれる。

「じゃあ、ちづるは生きてるんですね？」

恵美は目で頷く。

「高速学習は、英語事業部だけで行われていたわけではないの。検体の調達数は年によってばらつきがあるから、いつも全ての事業部が稼働しているわけではないけれど、フランス語、スペイン語、ロシア語、ドイツ語、中国語、韓国語の事業部などには、英語事業部の三浦さんたちのように、ＥＴが存在しています。ただ……」

杏児が、これまで聞かされていなかった事実に驚愕しているのが表情を見ていてよく分かる。どんな複雑な仕組みの中に自分たちは取りこまれてしまっているのかと唖然としているのだろう。それでも恵美は続ける。

「ただ……高速学習の副作用が出ている人が多くて、今回の国連演説のミッションに耐えうる精神状態ではなかったの。だから、英語ＥＴである三浦さんたちだけがミッション遂行要員として救国官を命じられた」

「恵美さん、ちづるは……ちづるの精神状態は、どうなんですか」

恵美は一瞬目を伏せて、それから杏児にほんのわずか、微笑んだ。

「おそらく、大きな問題にはならないわ」

　しかし、杏児は納得していない。

「どうして、それが分かるのですか。僕はユキの極度の上がり症が、高速学習の副作用だと聞かされたし、高速化に耐えられなかった同僚二人がもっと重い副作用で脱落したと聞いたんです。ちづるがそうではないと、どうして言えるんですか」

　今度は恵美が少し目を見張った。

「三浦さん、ニューヨーク出張の最中に何があったの？」

　杏児はそれを説明するのももどかしいような表情を一瞬したが、恵美に失礼だと思い直したようで、早口で答えた。

「在ニューヨークの外交官がユキを覚えていたんです。なぜなんだとユキを追求したら、隠し通せなくなったようで、ついに白状したんです。ユキはその後、自殺を図ったんですけどね」

「何ですって！　で、ユキちゃんは今どこに？」

　杏児はいったん口を閉じて恵美を見た。それから顔色を伺うように問いかける。

「ユキ『ちゃん』？」

　恵美はごまかしようがなく、開き直った。

「ユキちゃん。福沢由紀さん。彼女は、生きてるの？」

「川に飛び込んだんですが、間一髪で助けました。怪我一つありません。今は羽田空港まで帰って来ています」

「そう……」

「恵美さん、やっぱりユキと同じく、全部知ってたんですね」

「ぜ、全部って」

「大きく分けて三つあります。第一に、僕がちづると冬山で遭難してここへ連れて来られたこと

、第二に、ユキが半年前に国連演説を失敗していたこと、第三に、ユキが僕や万三郎の監視役だったこと」

「……」

「まあ、それはいいや。とにかく恵美さん、僕をちづるに、会わせてください」

　恵美は今にも泣き出しそうな顔になって、杏児の胸の辺りに漠然と目を向けていた。必死にこらえていたのに、まばたきをしたために涙が絞り出され、頬を伝いかける。急いで着物の両袖を当てて吸い取ったけれど、そのままついにたまらなくなり、目を袖で覆い隠したまま、「エーッ」と嗚咽を発した。

八

その恵美に、杏児はさらに言葉をかける。

「恵美さん、僕と万三郎とユキは、アポフィスの軌道を逸らせるため、これから伊勢の神宮へ飛んで、世界が力を合わせて発する、『グレート・ボンズ』の形成に身を捧げます。でも、自衛隊のヘリの機材繰りが遅れていて、用意ができるまで羽田で待機せざるを得ない。ヘリの出発予定は十一時。その待機時間を縫って、こっそりここへ帰ってきたんです。ちづるがここにいるはずだと思って」

杏児は恵美の頭越しに障子の手前の三つのカプセルと、障子の向こうにまだあるであろう、さらなるカプセルの方を見ながら言った。

「僕、ちづるを連れて行きます」

恵美は一度嗚咽を発したのみで、両袖を顔に当てたまま、人形のように静止していたが、不意に顔を上げ、杏児をまっすぐ見てかすかに首を振った。

「ＫＣＪ規則違反ですので、お許しできません」

静かに言い放った恵美に、杏児は怒りの目を向けた。

「じゃあ、実力で連れて行きます」

杏児はカプセルの前に立っていた恵美を押しのけようとする。恵美はよろめいたが、杏児に抵抗した。

「ダメです！」

杏児はもう一度、より強い力で恵美を、半ば払い飛ばすかのように押しのけ、文句を言いながら一番手前のカプセルのスイッチを調べ始めた。

「明日、みんな死ぬかもしれないのに、規則違反もへったくれも……」

「止めて！　そのカプセルは、ちづるさんじゃないわ！」

　杏児の身体にすがるようにしがみつく恵美を振り返って杏児が怒鳴る。

「じゃあ、どれがちづるなんだ、教えろよ！」

「三浦さん、聞いて。初めてカプセルから覚醒させる時は、急にしてはダメなの。検体の精神に大きなダメージをもたらすの。検体は起きてすぐ異常な破壊行動を取ることが実験で分かってるの」

「何出まかせ言ってる！　僕らが覚醒したのも急だったじゃないか！」

　杏児は恵美を振りほどいて、もうひとつ向こうのカプセルに駆け寄った。

「これか、こっちか」

「それも違うわ！　十二倍速の世界では急かもしれないけれど、こっち側じゃ覚醒まで半日かけてゆっくり調整していたの。お願い。同じ悲劇を繰り返さないで」

「明日アポフィスが地球を破壊するってのに、今日誰が何を破壊するってんですか！　地球破壊よりひどい悲劇って何か教えて欲しいよ！　ちづる、今開けてやるから、待ってろよ」
　今にもカプセルを開けようとする杏児を恵美がまた後ろから飛び付いて羽交い絞めにしようとした。だが恵美の手の長さでは結局、杏児の背中側から腰に両手を巡らせて抱きついたような格好にしかならなかった。杏児の背中辺りで恵美が言う。

「急に覚醒させられた人は私の恋人です。彼は私の首を絞めて射殺されました」

九

杏児の手が止まった。

「恵美さん、何て、言いました？」

「三年前、強制的に覚醒させられたＪＥＳ-〇二〇、古島哲也は、異常行動を起こして、私の首を絞めたの。私が気を失いかけた時、彼は古都田社長によって射殺された。社長は、私を助けるため、撃つしかなかった」

「それって、ここで……リンガ・ラボで起きたんですか」

杏児の背中で恵美が頷くのが分かった。

「その後の研究で、機械による最初の覚醒が急激だった場合、十中八九、覚醒に失敗するか、成功しても異常なヒステリー行動が起きることが分かったの」

杏児は動きを完全に止めて、力なく直立した。

「恵美さん、あなた……」

「私は、ことだまカンパニープロジェクトによって、両親も恋人も失くした。私の両親は生前、ここの検体だった。でも私が二歳の時に、リアル・ワールドで事件に巻き込まれて死んだの。生き残った私も、十八のときに事故でここに運び込まれた。古都田社長は亡き父の親友だった。そのよしみで、社長にはよくして頂いてる。だけど私には肉親も、帰る家もない。リンガ・ラボが私の全てなの」

恵美は杏児の腰に回した腕を緩める。それに応じて杏児は恵美の方に身体の向きを変えた。恵美は、目を赤くしたまま杏児を見上げて続ける。

「その後、私は、ことだまワールドでは秘書、リアル・ワールドではリンガ・ラボの管理主任として、古都田社長のもとで働いてきた。いろんなことがあったけど、私はＫＣＪに一生、関わり続けるのが天命なのだろうと思い至ってる」

恵美はそこで言葉を切った。杏児は自分がどうすればいいのか、自分でも分からなくなってい

るようで、深刻な表情のまま、黙って恵美を見ている。

　恵美は杏児の気持ちを慮って、一瞬、これ以上言葉を発すべきか躊躇して、うつむいた。二、三秒の後、恵美は大きく息を吸うと、突然手を伸ばして、杏児のネクタイのゆがみを直し始めた。次に首回りからスーツの襟に沿って手を回して、裾に至ると両方を持ってピンと引っ張った。

「三浦さんは覚えていないでしょうけれど、初日に、ことだまワールドのＫＣＪ社長室で、三浦さんにこうしてあげたわ。社章をつけるときに」

「覚えてますよ」

「え、覚えてるんだ」

　恵美は杏児を見上げて、少しだけ頬を紅潮させ、ニッコリ笑った。杏児は少しうろたえた風に視線を逸らした。

　恵美は言う。

「三浦さん、ちづるさんは、あなたの大事な人なのでしょう？」

「はい、もちろんです」

　恵美は杏児の右手のひらを自分の手に取り、軽く握らせて両手で包み込んだ。

「心配しないで。あなたの大事な人は、ここで私が、守ります」

　そしてその包んだ右手を、恵美の胸元まで持ち上げて、乞うようなまなざしで杏児に言った。

「地球は、あなたが、守って」

　その時。

♪山寺の、和尚さんは、毬は蹴りたし毬はなしーー

　杏児の上着の内ポケットのケータイが鳴った。恵美はハッと我に返ったように杏児の手を解放し、その場で後ろを向く。杏児は電話を取った。受話器から漏れ聞こえる高揚したユキの声は、恵美の耳にも届いた。

「杏ちゃん、今どこ？　ヘリが予定より早く来たよ。早く帰ってきて」

十

内村鑑三郎は、畑仕事の手を止めて上空を見上げた。朝九時の時報とともに、どんより真っ暗な空からポツリポツリと雨が降ってきた。縁側に置かれたラジオが時折りザラザラいうのは、どこかで春雷が電波を邪魔しているのだろう。

ＮＨＫラジオはニュースの第一報に台風情報を流した。

「……超大型で猛烈な台風一号は、四日午前八時五十分現在、奄美大島の東百六十キロの海上にあって、一時間におよそ四十五キロの速さで北北東へ進んでいます。中心の気圧は八百六十五ヘクトパスカル、中心付近の最大風速は七十五メートル、最大瞬間風速は百メートルで、中心から半径二百キロ以内では、風速二十五メートル以上の暴風となっています。また、中心の東側八百キロ以内と西側六百キロ以内では風速十五メートル以上の強い風が吹いています。気象庁によりますと、この時期には異例の台風が、太平洋の南（みなみ）海上で発生、高い海水温と気流の関係で大きく発達して、観測史上最大級の勢力を保ちながら日本を直撃する見込みで、充分な警戒が必要です。先ほど暴風域に入り、雨風ともに強まってきている鹿児島市内、ＮＨＫ鹿児島放送局の平岩さんと電話がつながっています。平岩さん……」

――やれやれ。明日、史上最悪の台風に襲われるかも知れない、地球が消滅するかもしれない、そんな悲惨な状況になっても、この冷静沈着な報道。さすがはＮＨＫだな。

鑑三郎はひとり、少し皮肉めいた笑いを浮かべながら、移植ごてやら剪定ばさみやらの農具を片付けた。

ベテルギウスの超新星爆発からこのかた、確かに異常と思えることが多い。先日は富士山をバックに赤いオーロラが輝いた。もちろん、その幻想的な映像はテレビで流され、地球滅亡の噂に油を注ぐ、全国的な騒ぎになった。

鑑三郎は、山梨県側から見る富士が好きだったが、ここ数日、富士は五合目より上はその姿を見せてくれていない。このまま悪天候が続いて、アポフィス衝突で地球が滅びるまで、もうその勇姿が見られないのかと思うと、数日前まで毎朝会ってきた友人を失うかの如き寂しさを感じた。

内閣府の事務次官を退官した後も、元部下や関係者がひっきりなしに内村を慕い、意見を求めて東京白金台の自宅へやってきた。あまり来るのでうるさがって、三年前、ついに東京を引き払

って、富士を仰ぎ見る山梨県のこの村に独り隠居し、手すさびに庭で土いじりをして暮らすことにしたのだったが、やはり一部の部下たちは鑑三郎と深い交わりを続けた。その中には内閣府情報調査室審議官の石川卓もいた。

　総理官邸に呼び出されてから後は、アポフィス衝突予定日時と回避行動の検討や準備に関する情報は逐一、石川を通じて鑑三郎の耳に入っていた。

　一方、日頃付き合っている近所の人は、鑑三郎のそのような過去を知らない。退職をしおに田舎暮らしを始めた男やもめが三年も土地に居着くと、近所の人は次第に心を許し、時には漬物だの餅だのを差し入れたり、野菜の植え付けや、地元の味噌の作り方の指南をしたりと、よく面倒を見てくれた。

　鑑三郎は人当たりが良いので村人から好かれてはいたが、ただ一一時々、そこに誰か人がいるかのように独り言を言う一一と、その風変りな素行を噂されたりもした。

　近所の親父が軽トラックを減速させて、自給用の畑にたたずむ鑑三郎に声をかけて行く。
「おーい内村さん、野良仕事は今日はだめずら。おしめいなって。こりゃあ、本格的に降るずら。｜晩方《ばんかた》から明日にも台風が来るらしいから、雨戸しっかりかためてくんなって。行くど。ふんじゃあ」

「ほだなあ。おおきんよう」

　鑑三郎は手を上げて親父の軽トラックを見送った。これまで親切にしてくれたことに心から感謝する。

「あら、降ってきましたね」

　サッシを明け放った縁側に、奥から黄八丈を着た若い女が出てきて、風で降り込む雨粒が縁板をまだらに濡らすのを見て天を仰いだ。ラジオはまだ各地の台風情報を報じている。ポツリポツリの雨粒を時折風が吹き流す。遠雷が聞こえた。

「いよいよ、明日か」

　そう言いながら沓脱石に履物を揃えて縁側に上がり込んだ鑑三郎は、首に掛けた手ぬぐいで濡れた顔を拭きつつ、庭を振り返る。

　平地より少し気温が低いこの山裾の庭でも、ソメイヨシノの蕾がいっぱいに膨らんでいた。

「アポフィスも、花が開ききるまで待っていてくれたらいいものをなあ、志乃」

「本当に、ねえ」

志乃と呼びかけられた女は鑑三郎に寄り添うように立って桜を眺めた。

十一

琴代志乃は、そこにいるように見える。鑑三郎の目には。

今の鑑三郎は、二枚の布を上下にうねる縫い針のように、リアル・ワールドとことだまワールドをほとんど瞬時に、自在に行き来していた。その意識の往復運動があまりにも早く、あたかも彼は、両方の世界に同時に存在しているように見えた。今や鑑三郎は究極のレシプロケーターだった。

志乃は、ことだまワールドで、鑑三郎が気に入って購入したこの中古の古民家と、同じ空間座標に存在していた。パラレル・ワールドにまたがる鑑三郎にとってみれば、この古民家に志乃と同居しているも同然だったが、縁側に立つ志乃の姿はリアル・ワールドの住人には見えていないので、鑑三郎の言動を目撃した者の目には、しばしば奇異に映っただろう。

鑑三郎は、縁側にあったラジオを切ると、サッシを開け放ったままの居間の畳に座り、ことだまワールドで志乃が淹れた茶をすすった。

絹糸のような雨が「シーッ」という音を立てて一斉に辺りを濡らし始めた。風も伴うので、春雨というには少し風情のない降り方にも思えたが、湿った地面や草木からむせるような匂いが立ち昇るのは、ここ数日の陽気のせいだろうと鑑三郎は思った。志乃には悪いが、ことだまワールドで味わう茶の何倍も、雨の匂いにはリアリティーがあると思った。

「若い奴らがニューヨークでやりおったそうだ」

「そうですか。では手伝わない訳にはいきませんね」

「うむ。しかも三人の救国官の一人は、万三郎という名前らしい。もちろん本名ではないが、俺とよく似た名前なんて、ちょっと愉快だ」

「あなたにちなんで古都田社長がつけたのではないですか？」

「いやあ、大泉万三郎総理にちなんだんだろうよ」

鑑三郎は壁際の柱に掛けられた日めくりカレンダーと、その横の振り子時計に目をやって志乃に言った。

「この時間ならもう帰国しているはずだ。また愉快なことに石川の話では、彼らは伊勢の神宮で祈りたいと、大泉総理に直接願い出たそうだ」

「まあ、伊勢へ？」

「うむ。良い選択だ。ただ、民間の飛行機と高速道路の通行は制限されているから、ひょっとしたら、自衛隊のヘリあたりで伊勢へ向かうのかも知れんな」

　鑑三郎はそう言うと茶を飲み干した。

「では、今夜にいたしますか？」

　志乃は柔らかな表情で鑑三郎に問う。

「うむ。俺もよく生きた。志乃とも連れ添えたし、思い残すことはない。この蕾が開くのと富士山頂を見られんことを除いてはな」

　そう言うと鑑三郎は立ち上がってひとしきり桜を眺め、麓しか見えない富士を眺めて、それからサッシ窓を閉めた。小さくなった雨音に紛れて、振り子時計が微かに「カ……カ……」と音を主張し始める。志乃は鑑三郎に寄り添った。

「古都田現社長の了承を得ていますので、会社の方も、これまで千七百年ほど蓄積してきたエネルギーを全部、吐きだしますわ。きれいさっぱり」

「む。古都田くんがそれを了承したのか」

「私の願いを喜んで聞き入れてくれました。『千七百年もこの会社を切り盛りしてこられた創業社長のご意見に、わずか十余年の経営経験の私が、何の異論がありましょう』と言ってくれました」

「うむ。会社が総力を挙げて挑むのであれば、これは可能性がさらに高まる。さすが志乃、いや、邪馬台国女王、｜壱与《いよ》だ」

「やだ、昔の名前で呼ばれると、何だか恥ずかしいじゃないですか」

　リアル・ワールドに在世した三世紀頃と変わらず、二十歳そこそこにしか見えない志乃は、着

物の袖で赤ら顔を隠しながら、隠されていない目で鑑三郎に微笑んだ。

雨脚が強まり、春雷が近づいた。

十二

テレビをご覧の国民の皆様、ラジオをお聴きの国民の皆様、インターネット生中継をご覧の国民の皆様、日本国内閣総理大臣の大泉万三郎です。日本政府を代表して、国民の皆様にこれから、非常に大切なご報告と、お願いを申し上げます。

私はこれから、悪いご報告を三つと、良いご報告を一つ、お願いを一つ、順番に申し上げます。

悪いご報告の一つ目です。

明日、地球に、小惑星が衝突します。

小惑星の直径は約四百二十メートル、質量は約八千万トン。毎秒十五キロメートルの速さで地球に向かっています。地球と衝突する確率は、計算上は九十九・九九パーセント。衝突場所は、太平洋の小笠原近海の見込みです。衝突予想時刻は、日本時間で明日四月五日木曜日、午前五時十四分、今から十七時間と十分後です。

天体が地球に衝突した際の予測被害状況を表す国際尺度によりますと、被害の深刻度は、最悪を十とする十段階のうちの九にあたり、この衝突は、空前の地域的荒廃をもたらす破壊力があります。残念ながらその地域には、日本列島がすっぽり含まれます。衝突場所が確定したのは、五日前のことでした。

国民の皆様もご存知の通り、アポフィスと呼ばれるこの小惑星は、以前から地球に衝突する可能性があったため、世界が共同で小惑星まで無人の宇宙船を打ち上げ、ごく近いところから小惑星にミサイルを撃ち込むことによって、その衝撃で人工的に小惑星の軌道を安全なものに変える作業を進めていました。しかしながら、昨年五月二十五日に観測された、恒星ベテルギウスの超新星爆発に伴う強力な電磁波の影響で、宇宙船のコンピューターが誤作動を起こして、ミサイルは小惑星の予期せぬ場所に命中してしまいました。その後の軌道計算によって、皮肉なことに、小惑星が明日、地球に衝突することが分かりました。

この事実はいたずらに世界をパニックに陥れる恐れがあることから、わが国を含む各国政府は今日まで厳しく箝口令を敷いた上で、衝突を回避するあらゆる手段を模索し続けてきました。

有力な手段として、米国とロシアが保有する大陸間弾道ミサイルの一部を宇宙用に緊急改造

して、今年二月に一斉に発射し、小惑星の破砕を試みました。残念ながら五日前、三月三十一日になって、その試みが全て失敗に終わったことが判明いたしました。

悪いご報告の二つ目です。

ベテルギウスの超新星爆発の影響で、地球の磁場が一時的に非常に乱れております。そのため、これを原因とする異常気象が世界各地で多発しています。現在、日本列島に上陸しようとしている、超大型で猛烈な台風一号も、その影響で発生したと考えられております。

こうした、地球規模の、水温、気温の変動、海流、大気の流れの乱れにより、小惑星衝突の影響は増幅される見込みです。専門家の見通しによりますと、津波など、衝突の直接的被害に加え、粉じんが地球全体を覆い、気温が下がる影響で、生物相が極端に変わり、食糧が尽きて、五年以内に人類が絶滅する可能性が大きいということです。

悪いご報告の三つ目です。

二日前、太陽の表面が大爆発を起こしました。正確な予測ができませんが、もう間もなくその爆風が地球を襲うだろうということです。この太陽嵐の影響は、明日の午前中まで続くと予想されています。地球の地磁気は現在大変乱れていますので、この爆風の影響は甚大で、世界的に停電が起こり、電子機器は誤作動を起こし、テレビもラジオもインターネットもつながらなくなると予想されています。もしこの間に小惑星が衝突すれば、電気も電波も、復旧は不可能です。

わが国は、巨大台風が国土を襲う中、何一つ情報の来ない、真っ暗闇の夜明け前に、小惑星の衝突を迎える可能性が非常に高くなっています。

国民の皆様、このままでは、この小惑星の衝突によって、わが国と太平洋沿岸諸国は真っ先に、絶筆に尽くしがたい被害をこうむることになります。今となっては、この悲劇的な衝突を避ける術は、ただ一つの方法を除いては、何もありません。

十三

人類を救うたった一つの方法、それは、我が国が古くから大切にしているコトバの力、すなわち、「ことだま」の力を結集して、小惑星の軌道を地球から逸らせるという方法です。

国民の皆様、私は今、内閣総理大臣として公式にこの方法を提唱しております。

実は、政府内に、ことだまを長年研究してきた部署があります。その担当者の中には、ことだまを小さな物理エネルギーに変換できる技能を持つ者が複数おります。その研究はまだ途上ではありますが、非常に小さいながらも、コトバに物理的エネルギーを持たせることが、一般人でも可能であると結論づけています。

日付けが変わる午前零時の時点で、小惑星の軌道を、〇・〇一度、動かすことができれば、小惑星は地球に衝突しないということが、専門家の計算で分かっています。

もし世界七十億人が同じ言葉を発すれば、そのわずかなエネルギーが結集して大きな力となり、小惑星の軌道を変えることが可能かも知れないのです。政府はこれを、「｜偉大なる絆《グレート・ボンズ》」作戦と名付けました。

良いご報告を申し上げます。

日本時間で今月二日、アメリカ、ニューヨークで開かれた国連緊急特別総会において、グレート・ボンズ作戦を、日本が世界に提案しました。世界は、全会一致で日本の提案に賛成の決議をしました。

まさに今この時間、その決議に基づいて、各国首脳が、自国の国民に協力を呼びかけています。それは、人類七十億人が、時を同じくしてことだまの力を結集し、文字通り地球を救う、人類史上最大の作戦です。

日本国民の皆様、私はこの放送を通じて、皆様に最後のお願いをさせていただきます。グレート・ボンズ作戦に、皆様のお力をお貸しいただきたいのです。

幼稚園に通う前の子どもさんも、百歳を超えるおじいさん、おばあさんも含め、日本国に在住、滞在されている全ての皆様、日本時間で、日付けが変わる真夜中零時を中心として、どうか、声に出して、「ホープ！」と唱えてください。ご存知の通り、英語で「希望」という意味です。

現在の世界言語は英語ですので、今回は、ことだまの効果を最大にするために、コトバの「音」も英語で統一することになりました。

同じ時間帯に世界中の人々が、「ホープ、ホープ、ホープ……」と唱えます。そして、唱える時に、どうか心を明るく持ってください。絶望した心で希望を唱えても、軌道を変える強い力は生まれてこないからです。

小惑星の軌道は、現在、地球の軌道とわずかな角度で重なっているにすぎません。今ならまだ、衝突を回避する希望が持てる角度です。

衝突ギリギリまであきらめずにことだまを小惑星に送り出し続けることで、世界人類の「希望、ホープ」が、目には見えませんが、大きなエネルギーの絆となって、小惑星の軌道をわずかに変えることができるはずです。

私たちはこれから、未曽有の強さの台風に襲われ、磁気嵐によって停電が起こり、テレビもラジオもインターネットも電話もつながらない不安と孤独の中で、刻々と迫ってくる小惑星衝突の恐怖と闘うことになります。

ですが、私はもちろん、閣僚も、国会議員も、中央省庁の役人も、自衛隊も、警察も、消防も、決して逃げません。この国を守り通します。

国民の皆様、決して絶望に屈せず、今、日本の、いや世界の一人一人が、心を一つにしているのだ、グレート・ボンズは必ず形成されるのだと信じて、「ホープ」を唱え続けていただきたい。

古来よりことだ……らを信じてき……私たち日本国民……未来を信……どうか最大限に発揮……ザー……ザザザ……国民……明朝、必ずまた、お会いしま……ザザザー……ザー。

十四

ショルダーハーネスをつけてジャンプシートに並んで座っている三人の所へ、副操縦士がコックピットから移動してきた。

「申し訳ないですが、離陸前に警告してあった通り、直接小牧基地へ戻ります」

救国官三人を代わる代わる見ながら、副操縦士は大きめの声でそう言った。

杏児が訊き返す。

「航空自衛隊の救助ヘリでも、この風ではやはり難しいのですか」

副操縦士は、口をゆがめ、言葉に詰まった。サングラスをかけているので表情までは分からないが、おそらく悔しかったのだろう。もちろん杏児は単純に残念だという思いがあって訊いただけで、皮肉を言ったわけではない。副操縦士は一度、口を真一文字に結ぶと、やがて言葉を絞り出すようにして丁寧に説明した。

「伊勢湾海上の気圧は今すでに九百六十ヘクトパスカル、平均風速は二十ノットを超えています。すでに普通の台風の真っただ中と同じレベルです。それでもこのヘリは巡航は可能ですが、現在、伊勢のヘリポートや中部国際空港のヘリポートは、暴風の方向が安定しておらず、着陸やホバリングについては困難です。残念ですが……」

「着陸できるか、様子を見に行って、ダメなら小牧基地へ、というわけにはいきませんか？」

「燃料が足りません」

もちろん不可抗力なので三人にはどうすることもできない。分かりましたと言うほかなかった。

副操縦士がコックピットに戻ると、杏児が万三郎に言った。

「小牧基地って、名古屋市の十キロか二十キロ北の、元名古屋小牧空港だよな。どうする」

万三郎が答える。

「隊にお願いして、車を借りよう。高速道路を使って伊勢に行こう」

「国家非常事態宣言発令中だぜ、通れるのか」

「自衛隊の車なら大丈夫だろう。杏児、お前、運転できる？」

「体が覚えている感覚がある。運転はできると思うが、免許証は持ってきていないぜ」

　万三郎はニヤリと笑った。

「道中パトカーに出会わないよう、祈るよ」

　杏児も笑いを誘われて頷き、それから反対側に座っているユキに車で行こうと伝えた。ユキが頷くのを見た杏児は、もう一度万三郎の方に顔を向けた。

「ところで万三郎、顔色悪いぞ。大丈夫か」

　万三郎は笑って答える。

「こんな暗い機内で顔色の良いも悪いもないもんだ。大丈夫だよ」

「そうか。それならいいんだ」

　杏児は正面を向いて黙った。冗談とは裏腹に、万三郎は予定が狂ったことに焦りを感じ始めていた。ことだまワールド内を伊勢まで移動することもできるのだろうが、作戦の前に移動エネルギーはできるだけ消耗したくない。

――平時なら車で三時間もあれば伊勢に着くだろうけれど、史上最強の台風が上陸する前にたどり着けるだろうか。道中で足止め喰って、そのままアポフィス衝突の時を迎えるなんて、情けなさ過ぎるが……」

　ヘリは名古屋市街上空を横切るように飛行していた。まだ雨はさほどひどくなく、空は薄いねずみ色だった。

十五

航空自衛隊の、通称「ロクマル」ヘリは、着陸の少し前に激しい電波障害を受け、管制塔と連絡が取れなくなったが、幸いにもまだ雨が強くなく、視界が効いたので、熟練したパイロットの腕でなんとか小牧基地のヘリポートに着陸した。

数時間前、羽田空港内の特別待合い室で、遅れているヘリの到着を待つ三人の元へ、｜山下和明《やました かずあき》空佐が自ら、わざわざ詫びに来てくれた。万三郎はその時にお願いして、メモ用紙に一筆したためてもらっていた。彼ら救国官にあらゆる便宜を図るようにと、関係諸方に要請する署名入りのメモだったが、これが小牧で絶大な力を発揮したので、万三郎は内心舌を巻いた。

「ほう、先ほど首相の国民向けメッセージで言っていた、えーっと、何でしたっけな、グレート……」

「グレート・ボンズ、偉大なる絆作戦です」

「ああ、そうでした。それをアメリカまで行って、国連総会で訴え、世界の協力をとりつけてきた政府の役人というのは、何とあなた方でしたか」

「はい、その作戦の仕上げが伊勢神宮での祈りになります」

基地の副司令である｜井関《いぜき》一等空佐は、羽田警備隊の山下空佐とは防衛大学校の同期だということで、そのメモのおかげで、非常にスムーズに協力を取り付けることができたのだ。

「国家非常事態宣言が出ているので、各部隊とも配置についていて動かしにくいのですが、一台だけ使える車両があります。主に基地構内の機材運搬に使っているピックアップトラックですが、公道も走れます。ただ、三人乗りであって、あなた方三人が乗ると、護衛の自衛官をつけられないが」

「構いません、私たち三人で大丈夫です。すぐにでも出発したいのですが」

井関副指令はその場で部下に内線電話をかけ、トラックを回すように指示した。

「予備のガソリンは、荷台のポリタンクに用意すると言っています。それから、私の名前で道路の通行許可証を発行して差し上げましょう」

「副司令、感謝いたします」

　通行許可証に判子を押しながら、並んで起立して、それを見ている三人に、井関は言った。

「総理の国民向けスピーチが終わると同時に、太陽嵐による電磁波障害がはじまりました。今はもう、ラジオはおろか、ネットもケータイも使えません。暴風域はもう伊勢神宮辺りにさしかかっているようです。気圧が一番低くなるのが真夜中十二時ごろだと思われます」

　許可証を両手に持って確認した後、井関は席を立って、自分の机を回り込んで三人に近づき、交互に見つめながら柔らかく語りかけた。

「私には、皆さんとそう歳が離れていないであろう一人娘がおりました。私の影響か、娘は防衛大学校に入学しました。その娘が休暇で実家に帰って来た時、夕食を摂りながら私を叱ったんです。お父さん、冷静で客観的でなければ自衛官の仕事はできないけれど、最後の最後で人間を救うのは、根拠のない自信なんだよ。人間はロボットじゃないんだから。お父さんみたいに偉くなって最前線に立たなくなると、それを忘れがちなんじゃないのって。小娘が利いた風な口をきくなと反対に叱り飛ばしましたけどね」

　井関はそう言いながら、許可証を杏児に手渡し、それから視線をユキに移した。

「その娘が去年、訓練中の事故で亡くなりました」

　ユキがハッとして顔を上げる。

「自分の体を預けたロープが少しずつちぎれていく中、娘は、ヘリに引き上げられていく遭難者役の同僚を見上げて笑いかけたそうです。私は大丈夫だから、と」

　井関は穏やかな目でユキを見つめ続ける。

「娘は結局、助かりませんでした。私は自問しています。ロープがちぎれるその瞬間まで、娘は、救われていたのだろうか、救われなかったのだろうか」

　井関は、山下自筆のメモを万三郎に差し出した。万三郎は黙って受け取る。

「総理の訴えを聞きました。私もこれから、『ホープ』を唱えようと思います。小賢しいと娘の気持ちなど分かろうとしなかった私でも、今夜なら、分かるかもしれませんから」

　井関は、メモを受け取った万三郎にさらに握手を求めた。万三郎はしっかりと握手に応じた。次にユキ、次に杏児と、井関は握手を交わす。

「若いお三方。もしまたお会い出来たら、この私の問いの答えを教えていただけませんか」

　杏児が軍隊式の敬礼を返した。

「お借りする車を、お返しに上がりますから」

十六

民間車通行止めになっている名古屋高速はスイスイ走れるだろうと予想していた杏児の期待は裏切られた。凄まじい横風に恐ろしいほどハンドルを取られるのだ。ジャンクションを経由して伊勢湾岸自動車道に入ると、伊勢湾を渡ってくる暴風が横からまともにぶち辺り、ハンドルを切り誤ると、車体が浮いてひっくり返ってしまうのではないかと思われた。ヘリの副操縦士が、普通の台風の真っただ中と同じレベルだと二時間前に言っていた風は、すでに普通の台風のレベルを超えているのかも知れない。

小牧基地を出る時はまだそれほどひどくなかった雨も、今はバチバチと音を立てて弾丸のようにフロントガラスを襲っている。雨粒による水煙が左右に荒れ狂って、まったく前が見えなくなった。

自衛隊から借りたピックアップトラックは、一列シートだ。杏児が運転し、ユキが真ん中に、万三郎が助手席側に座っている。

ハンドルが大きくとられるたびに、ユキは騒ぎ、杏児は文句を言い返した。

「杏ちゃん、私たちを殺す気？　もっとスピード落として！」

「これ以上遅く走ったら、明るいうちに着けないよ！」

「ほら、もっと右、右！　中央線見えてないの？」

「ちょっ！　横からハンドル触るなよ、危ないだろ！　中央線なんかこの雨で見えないって！　どうせこの暴風雨の中走ってる車なんて僕ら以外にいないんだから、レーンなんか守らなくても大丈夫だって！」

「もう、このへたくそ！　私が運転するから代わってよ」

「ユキッ！　君、バックシート・ドライバーって言葉知ってるか？」（1）

「何よ、知ってるわよ」

「知ってたら君が座るところは僕の隣りじゃない」

　杏児はそう言って、後ろの荷台を親指で指さした。ユキはブスッとした顔で黙り込んだ。
　万三郎はといえば、さっきから二人のやりとりには加わらず静かに座っている。暴風雨の中、どれほど走っただろうか。時刻はもう四時を過ぎている。晴れていればまだしばらく陽は落ちないが、分厚い雲は相当量の光を遮って、もう黄昏の様相だ。
高速道路が海辺から離れることで、いったんましになった風は、その後は強くなる一方で、近づいてくる台風に真っ向から突っ込んで行っている実感がある。行先表示板を照らす照明はもとより、インターチェンジ近くでも道路灯が点いていない。やはり広範囲に停電しているようだ。

　ヘッドライトをハイビームにし、ワイパーを最速にし、ハンドルをがっしり握りこんで、しかめっ面で前のめりになって運転していた杏児が、何の前触れもなくブレーキをべた踏みした。運転への不安と、文句を言うのを封じられた不満で、しばらく黙っていたユキは、そのまま疲れでウトウトしかかっていたところに、激しい減速で強制的に目を覚まさせられた。シートベルトをしていなかったらフロントガラスに頭をぶつけていただろう。それは万三郎も同じだった。

「きゃあ！」

「うわっ！」

　走行速度がそこまで早くなかったおかげで、ピックアップトラックは、路面を滑るだけ滑ったものの、奇跡的に横転せず、まっすぐ前を向いたまま停止した。

「何てこったい、ホーリー・マッカラル……」

　三人が目を見張った。

十七

ハイビームで照らされた前面の道路には木が茂っていた。いや、正確に言えば、切り通しの｜法面《のりめん》が土砂崩れを起こし、こちらの二車線を完全にふさいでいたのだった。土砂崩れが起こってからそう経ってはいまい。だが、待っていれば復旧の工事車両が来るとはとても思えない。

土砂は反対側車線までには達していなかったが、高速道路の真ん中には中央分離帯のガードレールがあって、杏児の運転するピックアップトラックは、これを踏み越えては行けない。

「こんなところまで来て立往生か、参ったな……」

「杏児、今、どの辺りなんだ？」

ユキの前のナビ画面を覗き込みながら万三郎が訊く。

「ＧＰＳは信用できないけれど、さっき確かに松阪インターを越えた。もう少ししたら道が分岐する。分岐したらもう、伊勢神宮までそんなに遠くないんだけどな……」

ナビの地図を拡大、縮小しながら杏児がつぶやく。

「歩ける距離？」

ユキの無邪気な問いに杏児が笑った。

「ハッハ。いっそ風で吹き飛ばされた方が早く着くかもな」

万三郎が言う。

「杏児、戻ろう」

「松坂インターまで戻って一般道に降りるか？　かなり時間がかかりそうだが仕方ないな……」

「いや、運が良ければさっき通ったトンネルの手前か向こうで、ガードレールが外れて、対向車線に移れるかもしれない」

　ユキが素っ頓狂な声を上げた。

「ええっ、逆走するの？　やめてよ！　対向車が来たら衝突しちゃうじゃない！」

　万三郎と杏児は思わず顔を見合わせる。

「ユキ、大丈夫だよ、この道走ってるのって、俺たちくらいだから後続車なんて来てない。だからぶつからない」

「ど、どうしてそう言い切れるのよ？　万三郎の言うようにトンネルの手前で反対車線に移れたとしたら、そこから先、ずっと逆走じゃない！　静止してる土砂でもぶつかりそうになったのに、この雨の中、相手が向かって来てたら、お互い気付く前に正面衝突するでしょ！」

　万三郎はユキ越しに杏児に助けてくれと視線を送った。杏児は両腕を広げて手のひらを上へ向け、「お手上げだよ」というポーズをした。その仕草を振り返ったユキが見てしまったものだから、まずかった。

「今の何？　み、三浦杏児！　わ、私を馬鹿にしたでしょ！　こいつ馬鹿だと万三郎に合図したんでしょ！」

　まあまあと万三郎がユキの肩を叩く。

「ユキ、どうしてそんなに車の運転を恐れる？」

　ユキは大きなため息をついた。

「い、ＥＴになる前の……トラウマよ」

　杏児が急に深刻めいた表情でユキに言う。

「ひょっとして、新たに判明した高速学習の副作用か？」

　ユキはキッと顔を上げて杏児に向き直った。

「とととにかく！　逆走はダメ」

　杏児もイライラを隠さなかった。

「じゃあ、どうするんだよ」

「かか考えて！」

「考えたのが逆走なんだよ！　分からん奴だな、君は！」

「たた対向車来たらどうするのよ、分かんない男ね、あなたは！」

「いいか、ユキ。対向車は、こ・な・い！　来ないんだッ！　ここまで走って来て一台も対向車に出会わなかったろ？　これからも一台も来ない」

「もももし来たらどうする？」

「ああ、もう！　もし来たら、ドジョウ掬い踊りやってやるよ、地球を救ってからな」

「杏ちゃん、昔のこと引き合いに出して私を馬鹿にしたわね」

　杏児はつっかかってくるユキを無視して車のギアをバックに入れながら言った。

「来たら向こうのヘッドライトで分かる。向こうも、こっちのヘッドライトで分かる」

　万三郎が慌てて言った。

「杏児、待ってくれ」

「待てないッ！」

　イライラした杏児がそう言い放って車の向きを変えようとした時、万三郎が言った。

「対向車が、来た」

十八

対向車が来た。土砂崩れとこちらのヘッドライトに気がついて減速してガードレール脇に車を寄せた。これ以上風が強くなれば吹き飛んでしまいそうな軽自動車だった。向きを変えようとしていたこちらの車のハイビームが向こうの右側の前後のサイドウインドウをまともに照らしつけたので、打ち付ける雨粒の向こうで、運転席と後部座席の人物が腕をかざして光を遮っていた。

「あ」

申し訳ないと思った杏児はライトをスモールに変え、ハザードランプを点滅させる。すると軽自動車はハンドルを一杯に切って急発進、向こう側で大きく転回して、車の正面を、こちらの正面に対面させるように動いて止まったのだった。そして向こうの車はまるで仕返しのようにこちらにハイビームを当ててきた。

「うう、眩しい……」

こちら側の三人は揃って手をかざして光を遮ろうとする。

「眩しいって！」

言いながら杏児は、相手に再びハイビームを当て返して、眩しいと意思表示をした。相手がハイビームをやめたその瞬間、運転席と助手席、それからその間に後部座席から顔を出している三つの顔が見えた。三つの顔は全て驚きで口が開いていた。

「えッ！」

「えーッ！」

「ええーッ！」

万三郎たち三人も揃って驚きの声を上げた。みどり組とチーム・スピアリアーズの再会の瞬間だった。

十九

「『チーム・インフェリアーズ（劣等者たち）』と改名してゼロから再出発しようと思っていたら、この騒ぎだ。優れたお前らがニューヨークで活躍している間に、無能な俺たちができることは何かと考えていたら、帰国後、優れたお前らが伊勢に向かうと新渡戸部長から聞いたから、それならこの卑しい私めが先に露払いして、お傍のお世話もろもろの段取りを、何かと気を利かせてやっておこうと、小賢しい浅知恵を働かせてお待ち申し上げていたと、こういう訳だ」

運転席から後ろを振り向いて得意気に説明する祖父谷義史から目を逸らして、万三郎は思わず顔をしかめた。

助手席の四葉京子が祖父谷を見やって言う。

「嫌味ちゃうねん。高速学習の副作用やねん」

そうなのか、それはそれで痛々しい……と思った万三郎の表情は、結果としてはあまり変わらない、苦々しい顔だ。

――なんでまた、正反対の性格に……。

気を取り直して万三郎は訊く。

「で、この嵐の中、高速道路を通ってどこへ行こうとしてたの？」

今度は後部座席、万三郎の隣に座っている綾目小路奈留美が何を分かりきったことを、という表情で答える。

「ここですわよ。他にどこがあって？」

「ここ？　土砂崩れの現場に何しに？」

「何しにって、もちろんあなた方を助けに来たのですわ」

京子が万三郎の方を振り返って説明する。

「この子は副作用で、妙に予知能力が研ぎ澄まされてきたみたいやねん」

　奈留美も祖父谷同様、どや顔で言葉を継いだ。

「土砂崩れで万三郎たちの車が立ち往生する光景が浮かんだのですわよ」

　万三郎も驚いたが、祖父谷も自分の驚きを表現せずにはいられない様子だった。

「奈留美がそう言うので、半信半疑で来てみたら本当にいるからびっくりしたんだ。奈留美の予知は精度が高い」

　万三郎が訊く。

「でも、助けるって、どうやって？　この軽自動車、四人乗りだろ？」

「四人しか乗れない車がこの世にあるなどとはわたくし、思ってもみませんでしたので、そこまでの予知はちょっと……」

　奈留美にかぶせるように、祖父谷が饒舌に説明する。

「この車はレンタカーなんだが、負け組の俺たちには、充分な出張予算が下りないんだ。名古屋までみんなして新幹線で来たもんだから、あとおカネがなくなって……」

　万三郎は祖父谷のキャラクターの変わりように戸惑っていた。

「よく新幹線、動いてたな」

「非常事態宣言が出るぎりぎり前やってん。判断が早いやろ。いや、そんなことより万三郎、奈留美の言うことを聴いてやってよ」

　京子が奈留美を急かす。

「ええ、万三郎。あなた方三人が、この庶民的な四人乗りの車で伊勢神宮の内宮に到着するのが見えてよ」

　奈留美の言に、万三郎は首をひねった。

「四人乗りの車に俺たち三人もどうやって……？」

「いや、中浜。劣った俺たちが優れたお前たちにこの車を明け渡すから、この車で内宮に行って、俺たちが足元にも及ばないお前たちの優れた能力を存分に発揮していただきたく、愚見を申し上げているということだ」

　二十

　祖父谷のへりくだり方は、気持ち悪かった。

「祖父谷、じゃあお前らは？」

「俺たちは、分不相応ながら、お前たちの優れたお車に乗り換えて、手前のインターチェンジまで戻って、一般道経由で、あらためて微力を尽くしに馳せ参じ候……という段取りだ」

「いや、祖父谷。それこそ俺たちが手前のインターまで戻ろうとしてたところだったんだ」

「中浜、お前たちは急がなければならんだろう。暗くなる前に、そして嵐がこれ以上ひどくなる前に内宮に着いて、ワーズたちを率いてグレート・ボンズを作るんだ。お前たちじゃなくちゃいけないんだ。劣った俺たちでは駄目なんだよ」

　祖父谷が、今までとはうって変わって、悔しさに表情をゆがめて万三郎をけしかけた。

「祖父谷……」

「この車で戻れば、向かい風でも十五分以内に伊勢西インターチェンジだ。回り道して一般道で内宮に向かうよりはるかに速い。決断しろ、中浜！」

　その時、向かいのピックアップトラックの杏児がライトをパッシングしてクラクションを三回鳴らした。

　祖父谷が言う。

「ほら中浜。三浦も急げと言っている」

「……」

「俺たち役立たずはお呼びじゃないんだよ。お前たちヒーローがきちんと活躍しないと、地球がかわいそうだろう？　あいつらを呼べよ、中浜。おい、レディース、雨風ひどいけど、向こうに移る準備できてるか？」

　万三郎は思わず祖父谷を遮る。

「祖父谷！　お前たちは、役立たずじゃない。俺、帰りの飛行機でお前たち三人のことを考えてた。お前たちスピアリアーズがいてくれたから、俺たちみどり組は発奮できた。負けたくないと思ったから、英語力を高めることができた。ニューヨークでの成功は、もとをただせばお前たちがいてくれたゆえの結果だと本当に思ったんだ。お前たちと競い合えたことに、叶うなら礼が言いたいと、機内で考えていた。地球の一大事が起こるより前に、こうして出会えたのが奇跡のようにありがたい」

　万三郎はそう言うと、隣にいる奈留美に右手を差し出した。

「な、何です？」

　当惑する奈留美のなよやかな手を取った。

「お嬢。よくこの土砂崩れの現場に駆けつけようと言ってくれたね。感謝を言い表す言葉が見つからない」

「そう言っていただくだけで光栄でございますわ」

「お礼に、これからひと仕事終えたら、ティートータラーでごちそうするよ。ハンバーグの食べ方、今度お嬢にちゃんと教えるから」

　すると奈留美は握手していない方の手で口元を隠して笑った。

「ハンバーグはもうマスターしましてよ。それより先日、肉まんという得体の知れない食べ物が出ましたの。どこからナイフを入れてよいのやら」

「じゃあ、それを教えてあげる」

「そう。では頼みましたよ」

二十一

万三郎は、次に京子に手を差し出して、その手を握りながら言った。

「京子さん、今日どうしたの？　とっても可愛いじゃない」

京子はちょっとムッとして言った。

「なんか、今まで可愛くなかったみたいな言い方やな」

「いや、まつ毛。今日、すごく自然でいい感じじゃない？」

「イヤやわ……」

京子はちょっと顔を赤らめて目をそらした。万三郎の記憶の中で、いちばん四葉京子らしくないリアクションだった。

「高速学習の副作用やと思うねんけど、まつ毛だけが生き甲斐の女って、最近どうかな……って、疑問に思うようになってん。万三郎、『つ』にアクセント置いて、『まつげ』って、言ってみ」

「まつげ……」

「な？　世界の危機に向き合う時に、それ、ちゃうやろ、と思わへん？」

万三郎は心の中で拍手した。

「京子さんって、本当はすごい美人だったんだね」

「そんなん言うても、何も出えへんで……」

まんざらでもなさそうな京子の表情は、英語研修中には見られなかったもので、つくづく、女性は変わるもんだと万三郎は思い知らされた。

「祖父谷……」

　万三郎は後ろの席から祖父谷の前に右手を差し出した。戸惑いながらも、促されるようにしてその手を握った祖父谷に万三郎は頷いて言った。

「ヨッシー。友よ。ありがとう」

　万三郎にまっすぐ見つめられてヨッシーと言われた祖父谷は、うろたえて手をひっこめ、落ち着きなくあらぬ方向を見てつぶやいた。

「す、優れたお前が、俺風情に『ありがとう』なんて、もったいない……」

　万三郎は祖父谷に言った。

「スピアリアーズの申し出にありがたく甘えようと思う。だけど、やっぱりお前たちの助けが必要だ。お願いがある。俺たちは内宮に行くから、お前たちは外宮に行ってくれ。御正殿の前に行けなくても、敷地のどこか屋内で、グレート・ボンズ作戦に参加してくれ。頼めるかな……」

「お……俺たちごときが……」

　祖父谷は伏せた視線を目まぐるしく変えながら当惑してつぶやいた。見事な副作用だ。いや、「反作用」と言ったほうがふさわしい祖父谷の自信喪失ぶりだった。と、京子が突然、祖父谷の頭を思いっ切りひっぱたいた。祖父谷が大きな体をビクリと縮こまらせて両手で頭を抑える。

「あ痛ぁ……」

　京子は、その頭にやった祖父谷のそれぞれの手をとって、胸の前まで下ろして重ねさせ、それを両手でガッと包み込むように握って、祖父谷をまっすぐ見つめ、大きな声で喝を入れた。

「しっかりせえ、大将！　うちと奈留美がついてるがな！」

「そうですわ。しっかりせえですわよ」

「あ、ああ、そうだな」

　戸惑いながらも頷く祖父谷。そんな彼を見守る二人の女性たち。万三郎は安心した。このチームは大丈夫だ。

「よおし！　じゃあ、入れ替わろう。杏児とユキに言ってくる」

　その時、祖父谷が我に返ったように万三郎を呼び止めた。

「あ、ちょっと待て、万三郎」

二十二

万三郎がドアの内側の取っ手を握ったまま顔を上げると、祖父谷は上体を助手席側に乗り出して、助手席の京子の前のダッシュボードを開けて、中にあった栄養ドリンクを取り出し、それを万三郎の目の前に差し出した。

「ほれ。今は店が閉まっているから手に入らないだろうと思って、無能なりに考えて、新幹線の車内販売で買っておいたんだ。最後の一本だった」

――車内販売！　まだやっていたのか。

万三郎は驚きながらも小瓶を受け取った。

「あ、ああ。有難う、後でいただくよ」

祖父谷は運転席から上体をひねるようにして万三郎を見た。

「ダメだ、今飲むんだ」

万三郎が不思議そうな顔をすると、祖父谷は低い声で言った。

「中浜、お前、今、熱、あるだろう」

万三郎は今度は驚いた表情になって訊き返す。

「そ、祖父谷、どうしてそう思うんだ？」

祖父谷は前を向いたまま答えた。

「見りゃ分かる。顔が、疲れてるんだよ。何か月お前の顔見て毎朝闘志湧き上がらせてきたと思ってるんだ」

万三郎が熱を出していることを祖父谷が見抜いたことにも驚いたが、思えばこの三人は、十二倍で学習していたことや、修了試験前には二十倍速まで早められたことを、誰からもきちんと説明されていないのではないかと思い、今生の別れになるかもしれない今、彼らに真実を伝えてお

こうと万三郎は口を開いた。

「祖父谷、俺たちが最初に出会ってから今日まで、正味、一ヶ月なんだよ」

　すると、祖父谷はこともなげに言い返す。

「十二倍速だったと言いたいのか？　覚醒した時、聞かされて知っている。なにしろ、そのせいで俺はこんなに卑屈になってるんだから」

「なんだ、自分で卑屈だってよく分かってんだ」

「話をそらすな中浜。いいか、一大事だから、今、横になって休めとは言わん。だが、有能な者が最高の仕事をするためには、体調もベストに持っていく努力をするんだ。そのドリンクを早く飲め」

「あ、ああ、分かった」

　小瓶のキャップをひねって開けながら、万三郎が訊く。

「古都田社長や新渡戸部長、今どこにいるのか知ってるのか」

　祖父谷は一瞬驚いて振り返ったが、すぐに得心して説明を始めた。

「そうか、お前たちが帰国する前に、社長も部長もすでに行動を開始していたから知らなくて当然だな。社長は皇居のほど近くにいて、ＫＣＪ本社と皇居の両方を見守りながらグレート・ボンズ作戦に参加すると言っていた。ほうぶん先生やほかの先生方も一緒だ。新渡戸部長はお前たちが羽田に着く前に、自衛隊機で出雲に飛んだよ。出雲大社から作戦に参加するということだ」

「出雲へ？」

二十三

四人の乗った軽自動車が、強風にあおられて左右にグラグラと揺れた。

祖父谷が言う。

「中浜、お前、内村鑑三郎という元内閣府審議官を知っているか」

万三郎は頷く。

「石川審議官の上司にあたる人で、ＫＣＪとリンガ・ラボの生みの親だと、ニューヨークで会った外交官から教えてもらった」

「うむ。あの人からの直々の指示があったということだ。日本のことだまの霊力を引き出すのに最強の布陣が、天皇のお｜は《わ》します｜都《みやこ》、伊勢、出雲の三ヶ所からの祈りだということだ。お前たち有能な若い救国官が伊勢に行くと自ら願い出たことを大変に喜んでいて、それなら社長は東京で、部長は出雲で、それぞれ伊勢を補佐しなさいと、内村さんから言われたらしい」

「そうか……」

万三郎は祖父谷の説明を聞きながら、栄養ドリンクを飲み終えた。

「ありがとう。本当のことを言うと、熱のせいでフラフラしていたんだ。これで、戦える体に復活すると思う」

「小賢しい浅知恵が、少しでも役に立ったのなら嬉しいよ」

空の小瓶を受け取った祖父谷は、全然嬉しそうではなかった。

「中浜。お前たちのこれからの働きに比べれば、俺たちはミドリムシ並みでしかないかも知れんが、少しでも力になりたい。外宮に行くよ」

「そうか。ヨッシー、ありがとう」

　万三郎は微笑んで礼を言ったが、祖父谷はニコリともせずに続ける。

「中浜、高熱が出ているなら、栄養ドリンク一本じゃ気休めにもならんだろうがな。国連演説に続いて一世一代の大舞台だ。むろん、みんながお前を信じて力を結集する。人類も、ワーズたちも。だが……ま……」

　祖父谷は、少しの間、目を逸らした。それから万三郎を再びまっすぐ見て言った。

「ま……万三郎。友よ。死ぬなよ」

　初めて万三郎を下の名前で呼んだヨッシーの、そのぎこちない呼びかけに、万三郎はしっかりと頷いた。

　ヨッシーは運転席で大きな体を窮屈そうに反転させて、再び万三郎とがっしりと握手を交わした。

　ピックアップトラックがパッシングをして、クラクションを長押しした。

「よし、じゃあ行く」

「ああ」

二十四

万三郎は暴風で波打つような豪雨の中、よろめきながらピックアップトラックに戻った。一分後、万三郎、杏児、ユキの三人が出てきて、身をかがめながら軽自動車によたよたと歩いて来る。それに合わせて、軽自動車からも、祖父谷、京子、奈留美が意を決して出て行った。両者はワイヤーロープ三本で仕切られた中央分離帯を互い違いに乗り越えた。

「久しぶりね、まつ毛女」

「やかましわ。もうまつ毛は卒業したんや」

「祖父谷、車、ありがとうな」

「これはこれは、優秀な三浦救国官から身に余る光栄な言葉を頂戴して、小生、夢見心地ってなところだ。どうか存分に働いてくれ」

万三郎は、「ひゃあああ」と言って、中央分離帯の前で立往生している奈留美をひょいと抱え上げ、ピックアップトラックの側に移し、立たせてやるときに大声で聞いてみた。

「お嬢、アポフィスは衝突するのかな」

奈留美はカールしたロングヘアをべたべたに顔と服に張り付けたまま、かぶりを振った。

「わたくし、せいぜい二時間先までのことしか、分からないの。ごめんあそばせ。でも、万三郎、きっと生きてお戻りなさいね。肉まんの切り分け方をお教えになって」

万三郎はすでにどこに目があるのか分からない奈留美に微笑んだ。

「分かった。きっと戻るよ。お嬢、ごきげんよう」

「おい万三郎、急げ！」

杏児から大声で呼ばれて、万三郎は再び中央分離帯をまたいで軽自動車の側へ飛び移った。そのせいでくらくらした頭を押さえてよろめいたが、ユキに助けられて何とか軽自動車に移動した。

　まもなく、停電で道路照明もない高速道路を、二台の車が別方向に走り去って行った。
風が声を遮り、雨がぬくもりを奪い、闇がひたひたとそこまで押し寄せてきている。明朝、あるいは人類の命運が尽きる。その前夜が、史上最大、最強の台風とともにやってこようとしていた。

◆◆◆

（１）バックシート・ドライバー……backseat driver 自動車の客席から運転にうるさく口を挟む人をいう。後部座席からではなく、助手席から指図する人も、backseat driverという。ちなみに助手席は、assistant driver’s seat というものの、事故死亡率の高い席であることから、”death seat”（死の席）,” suicide seat”（自殺席）などと呼ばれることがあるので、杏児に嫌われるほどのユキの神経質さも、極端すぎるとはあながち言い切れないかもしれない。

第二十章　伊勢（1）

一

防犯、防災の両方への用心から、雨戸のある家は雨戸を全て固く閉ざし、商店や事務所はシャッターを下ろしていて、人はもちろん、野良猫一匹街を歩いていない。長引く停電で外灯はおろか信号すら消えている。樹木が暴風に翻弄されて起こる枝擦れの音も、路面を激しく叩く雨音のホワイトノイズに塗りつぶされ、他には何も聞こえなかった。

内宮の神苑を縁取って流れる清流五十鈴川。この川にかかる宇治橋のたもとに神宮をお守りする｜衛士《えじ》の見張所がある。その見張所の前に杏児が運転する軽自動車がたどり着いた。

懐中電灯を手に、引き扉を開けて出て来た一人の年配の衛士は、驚いた表情で運転席に近寄った。杏児が窓を開ける。激しい雨音に混じって、衛士のいたわるような声が車内に入って来る。

「救国官の皆さんですね。この嵐の中をよくご無事で……。衛士の神谷と申します。どうぞお入りください」

杏児は後部座席の万三郎を振り返る。アポフィスの軌道を変えるためにことだまのエネルギーを送り込むなら、一秒でも早くレシプロを始めるべきで、残された時間は多くない。しかし、万三郎が疲れた表情をしているので、せめて濡れた頭や身体を何とかさせたいと思い、杏児は神谷と名乗った衛士の申し出に頷いた。

「事前連絡が入りましたか」

「はい、昼ごろ、通信が途絶する前に、大泉総理の秘書官から電話がありました。それに、二、三時間前に、女性二人を付き添わせた男性の方が来られて、『三人の優れた人たちが来たらよろしく』と頼んで行かれました」

杏児とユキが怪訝な顔になっているのに対して、思い当たりがある万三郎が思わず噴き出す。見張所の中はわりあいに広かったけれど、神谷以外は誰もおらず、がらんとしている。神谷は懐中電灯を片手にタオルを取って来て、三人に手渡しながら言った。

「きっと大変な思いをしてここまでたどり着かれたと思いますが、停電の上にガスも止まり、熱いお茶ひとつお出しすることもできません」

　杏児はタオルを押し頂き、頭と顔を拭きながら答える。

「お気持ち、感謝します。ですが、今は一刻を争います。もしありましたら、レインコートをお貸しいただけませんか」

「……」

　そのまま神谷が黙りこくってしまったので、三人ともタオルの手を止めて神谷の方を見た。神谷は最初、何か迷っていたようだったが、意を決したように口を開いた。

「｜御正殿《ごせいでん》にお詣りしたいのですよね」

「はい。そして祈りたいのです。そのために東京から来ました」

「残念ですが、それはできません」

　それまでたった一人、疲れた様子で折りたたみ椅子に腰を下ろしていた万三郎が、神谷の思いがけない答えに顔を上げ、憤然と食って掛かった。

「どうしてですか！」

　その権幕に少し驚いた神谷は、万三郎の方に向き直って申し訳なさそうに言った。

「参道の木々が風で倒されて、道を塞いでいるのです」

二

言葉を失う万三郎に代わってユキが尋ねる。

「そんなに、ひどい状況なんですか」

神谷の影が暗がりの中で頷いた。

「神宮司庁にわずかに残っていた職員が御正殿の様子を見に行こうとしたけれど、参道沿いの杉の、中ぐらいの太さのものまで結構倒れているようで、途中で引き返さざるを得なかったと言ってきました」

「そんな……」

「｜大宮司《だいぐうじ》様のご判断で、世帯主である職員は皆、家族のもとへ帰しましたので、今は、職責の重い人たちと、衛士では私のような老いぼれや、逆に独り者の若い職員がわずかに居残っているのみです。これから雨風がさらに強まって危険なので、帰宅しない職員は司庁舎に集まるよう指示が出ているのですが、私は官邸からのお電話を取った責任上、ここであなた方をお待ちしていました」

万三郎は茫然とした。ここまで来てこんなことになろうとは。

「では……、どうあっても御正殿への参拝は無理だと」

「私は、昼のテレビで総理の緊急放送を見ました。あなた方がどういう目的でこの嵐の中、ここまで来られたのか、分かっているつもりです。ですが、御正殿の無事を心から案じる若い職員でさえ、様子を見に行くのを断念せざるを得ない状況です。あなた方が無理を押して向かっても、たどり着けないどころか、命の危険があります。どうか、ご理解ください」

万三郎が立ち上がって神谷に食って掛からんばかりに大きな声を出す。

「そうですか分かりました、なんて言えません！　このままだと明日はないんです！　僕ら、行きます！」

「台風の！」

　年老いた衛士は、大声を出して万三郎を遮った。三人がびくりとするくらいの大声だったが、衛士はその後、元のように落ち着いた声になって続けた。

「……台風の威力を、甘く見てはいけませんぞ」

　一瞬、部屋を静寂が包む。すると、屋外で荒れ狂う暴風雨の音が再び四人の耳に入ってきた。空き缶か何かが、風に吹き飛ばされて転がっていく高い音がした。

「お三方はお若いから、伊勢湾台風をご存知ないかもしれませんなあ」

　ユキが答える。

「私は、聞いたことはあります。昭和三十年代に未曽有の人的被害をもたらした台風だというくらいしか存じませんが……」

「そうですか。私はその恐ろしさをこの目で見ておりましてね」

「……」

「当時私はあなた方と同じくらいの歳で、この近くの川沿いに居を構え、妻と三歳の娘、一歳の息子と住んでいました。すでにここで神宮の神様にお仕えしていました。若かったので上司の制止も聞かず、司庁に詰めてお宮をお護りしようと雨風の中奮闘していました。だが、自然の猛威の前に、私や同僚は為す術もありませんでした。それどころか、参道の見回りで、倒れてくる杉の大木の下敷きになって死にかけました。一夜明けて近所の人から知らせが入りました。自宅が流され、私は妻と子供たちを失いました」

「……」

「私一人、ここに残ってあなた方を待っていたのは、あなた方を制止するためです。私がいなければ、あなた方は無理に参拝に向かうと思ったからです。残念ですが、ご参拝は諦めてください」

　万三郎が食い下がった。

「か、神谷さん、僕らは命を惜しんではいません。世界の、地球の危機なんです！　例え死ぬと分かっていても、行かなくてはなりません」

「この馬鹿者ッ！」

　神谷が一喝したので、場がピンと凍りついた。

「あんたが死ぬのは構わんが、天照大神様のおはします御正殿の前で死ぬのだけは絶対に許さん。神道では死は最大の穢れなのだ。我々代々の神職が、千三百年以上にわたって日々守り通してきた、穢れなき聖域が神宮なのだ。あんた、自分の狭量な正義感だけで、その聖域を穢して歴史を終わらせるつもりか。日本が滅ぼうとも、大神様の御前に死体を晒すなどということは断じて許されることではない」

　年老いた衛士のあまりの迫力に、一同何も言い返すことはできなかった。暗闇の中、神谷の目だけが、どこかの微かな光を反射してか、キラリと光っている。

　なるほどと万三郎は思った。それぞれの立場の人にそれぞれの思いがある。ことだまの国、日本の中心は伊勢の神宮であると思い立って一方的に押しかけて来た若者に、神宮の大神にお仕えすること半世紀以上の年長者の思いを一蹴して良いはずがなかった。
万三郎は素直に謝った。

「申し訳ありませんでした。思い上がっていました」

　万三郎に合わせて、杏児もユキも黙って頭を下げる。神谷は、また落ち着いた声色に戻って三人に言った。

「いや、取り乱して申し訳なかった。行くところがないのでしたら、司庁舎へおいでになりませんか」

三

目の前の宇治橋は、歩行者用の橋で車は渡れないので、隣の橋まで回り道をして、通用門から司庁へ入るのだが、五十鈴川はすでに氾濫しかかっていた。橋を渡り終えたところでヘッドライトに照らし出された軽自動車は、杏児たちが乗っているものと同型だった。路上駐車されていたものだろう。それは横転していた。風は高速道路を走っていた時より、さらに強くなっている。現に、助手席の神谷の案内で司庁舎へ車で向かうこの短い道中でも、四人も乗ったこの車が風でグラグラと揺れた。万三郎は先程、見張所の前で空っぽのこの車がひっくり返っていなくてよかったと思った。

杏児がようやく車を司庁舎の前の駐車スペースに止めた時、万三郎が後部座席から神谷に訴えた。

「神谷さん、御正殿ではなくでも良いですから、少しでも神様に近いところで祈りたいのです。その方がことだまのエネルギーが高いと思うからです」

神谷は前を向いたまま答える。

「ここはすでに神苑の中です。わずかに近いくらいじゃあ、そう変わらんでしょう」

万三郎は誠意を込めて衛士に説明する。

「いえ、日本中のほとんどのことだまは、ここ、伊勢へ集結して、ここから宇宙へ放たれます。ひとつひとつのことだまがほんのわずか強くなるだけでも、全体では相当な違いになります。後にも先にも一回きりのこの祈りは、一メートルでも近い方が良いのです」

神谷は少し考える風だったが、待っていなさいと言い残して、暴風に翻弄されながらよろよろと司庁舎へ入って行った。

しばらくして、彼は、もう一人、若い衛士に身体を支えてもらいながら出て来た。二人とも黒いレインコートを着ている。万三郎が後部ドアを開けかけると神谷は「そのままで」というジェスチャーをした。万三郎は代わりに窓を開ける。雨風が強いので、若い衛士が大声を出して言った。

「この先に、参集殿という参拝者の休憩所があります。先ほど見回ってきましたが、倒木が多く

、そこより先へは行けません。参集殿には能舞台があります。今、故障していてシャッターが下りないのですが、祈りに必要ならそこを使ってください」

「あ、ありがとうございます」

　すると神谷が続けた。

「大宮司様の指示で、私たち職員は全員、明朝まで外出禁止となった。二つ、約束してほしい。参集殿より先へは行かないこと、参集殿での行動は自己責任でということ。守れますか」

　万三郎が即座に答える。

「守ります」

　衛士は大きく一回、深呼吸をした。それから車から一歩後ずさりして、万三郎たちに向かって深く一礼した。

「大神様と共に、日本を、護ってください。よろしく、お願いします」

　驚いた万三郎たちの車に、若い衛士が一歩歩み寄る。

「三人分の雨具と懐中電灯です。そしてこれが参集殿の鍵です」

　万三郎は頭を下げてそれらを受け取る。

　突風が吹いた。車が大きく揺れ、神谷が尻もちをついた。

「神谷さん！　大丈夫ですか」

　若い衛士が駆け寄る。年配の衛士の無事を確認し、助け起こした若い衛士は、万三郎たちの方を向いて大声で言った。

「今夜は私たちも祈ります。明朝、必ずお会いしましょう！　どうかご無事で」

「感謝します！」

　神谷に肩を貸して司庁舎へ消える若い衛士の姿が見えなくなると、三人は急いで車内で雨具を

着込んで、それぞれ懐中電灯を手に取ると、風の止み間を狙って駆け出して行った。

四

参集殿はそれほど遠くはなかったが、向かい風の時には三人固まってしゃがんで飛ばされないように耐えること数回、到着するまで思いのほか時間がかかった。

三人は懐中電灯で屋内を照らして観察した。建物自体は何百人もの参拝客を収容できるほどの大きさがあった。入ったところから見る限り、白木のような建材が真新しく、開放的で品がある地上二階建ての建物だ。上空から見ると「ロ」の字型に室内空間が取られているようで、真ん中は、雨に濡れているところを見ると屋外パティオになっているようだ。真ん中には、正面入り口と左右の休憩スペースの三方から、壁面いっぱいにとられた掃き出し窓を通して、立派な能舞台が見通せる。能舞台は、正面入り口から見て反対側の棟からせり出す形で、正方形の舞台の真上にだけ屋根がついていた。レシプロの場としての能舞台に興味を引かれた三人にとって幸いなことに、今は能舞台は風下にあたっているようで、舞台には雨はほとんど降り込んではいない。これで内宮の神苑にあって、司庁よりいくばくか御正殿に近いのだから、三人にとっては理想的に思われた。

「あの能舞台の上だな」

「ああ」

「ええ」

三人の意見が一致した。屋内を回り込んで、靴を脱ぎ、左側の棟から舞台へと伸びる廊下をそろそろと歩いて、舞台の真ん中あたりに、万三郎を挟んで並んで座る。

「じゃあ、行くか」

万三郎は左の杏児、右のユキを順に見やった。

「万三郎……大丈夫か」

杏児は万三郎に訊いた。暗闇に目が慣れて来ると、万三郎一人が肩で息をしているのが分かったからだ。万三郎は今朝から徐々に弱っているように杏児には思われた。実際万三郎は、羽田に着いてから今に至るまでカラ元気を出しているように杏児には見えた。杏児が運転するピックアップトラックでは、ユキの向こう側の助手席でぐったりしている姿を何度も見た。だが、人類の

生死に関わるできごとを前に、少々の熱などで弱音を吐いてはいられないと、本人が体調不良に触れないようにしているのなら、体調不良が分かったところで万三郎に大したことをしてあげられない今の状況で、やみくもに心配を口にしない方が良いと杏児は思っていた。だが、これから非常な体力と精神力を要求される仕事に臨むのだから、その異常な疲れ方に杏児も思わず心配を口に出してしまったのだ。

「ああ、大丈夫だ」

「万三郎……ねえ、本当に大丈夫？」

　ユキに心配かけまいと万三郎が無理に元気を装っていることを杏児はよく分かっていたが、そのユキも、さすがに万三郎の顔色が悪いのに気付いている。

「こんな環境でもセルフ・レシプロできるか、ということだろ？　俺は二人よりも練習不足だけど、まあ、大丈夫だろう」

　そう言って万三郎は答えをはぐらかした。それを心得た杏児は、万三郎に合わせて一度頷く。

「そうか。なら、いい。だけど無理すんなよ」

　万三郎は、笑みを含んだ声で杏児に返す。

「今は無理していい時でしょ」

「まあ、そうだな」

　ユキはまだ心配そうな顔をしていたが、杏児は万三郎から、その向こうのユキに視線を移して畳みかけた。

「それじゃあ、行こう」

　能舞台の屋根に叩きつけられた雨は、雨どいから溢れて滝のように落下していた。三人は、滝の裏側から真っ暗な夜空を透かして見た。そのまま目を閉じる。滝とその音は次第に薄れていき、視点は空をどんどんズームアップしていった。上下前後左右、黒一色に囲まれた。次に、少しずつ明度が上がってきて、違う景色と物音、声が聞こえてきた。

第二十章　伊勢（**5**）

五

考えてみれば、人類が電気やガスの灯りを手に入れてからせいぜい二百年で、それ以前は松明か燭台でその辺りを照らすのがやっとであった。人類の歴史において、夜には闇が世界の大半を占めてきたのだ。

生身の人間が棲む場所ではなかったが、ことだまワールドの伊勢神宮近辺も、やはり大半が闇だった。だが、大半であっても、全てではない。気を許せば全てが闇に覆われそうになるところ、かがり火を盛んに焚くことで辛うじてそこに光の領域が確保されているのだった。

暴風雨が吹き荒れていない点で、ここがリアル・ワールドではないことが分かる。だが分厚い雨雲が夜空いっぱいに広がっている感覚があり、生暖かく湿った風がその感覚を裏打ちしていた。湿った風は、時にやや強く吹き、かがり火を揺らす。その度に光の領域もゆらめいた。三人は、その光の領域にしつらえられた三つの椅子に徐々に姿形を現した。それをワーズたちは息を飲んで見ている。彼らワーズは、もう辺りにひしめき合っていた。彼らのどよめきが大きくなる。

「万三郎、いや、救国官万三郎さん。ようこそ、ことだまワールドへ」

万三郎はすぐ耳元でそう囁いた声の主に驚いて振り向いた。それは、ニューヨークで大活躍した、吊り半ズボンの男の子、【hope】その人であった。

「あっ、【hope】！　ニューヨークではよく頑張って……」

【hope】は、立てた人差し指を唇に当てて、万三郎の続く言葉を遮ると、万三郎にウインクをして、それから大仰に叫んだ。

「おおッ！　ようやく救世主が降臨した。おーいみんなァ！　優秀なみどり組ＥＴのお三方が今、伊勢の神宮に到着したぞォ！」

すると、あたりを埋め尽くした、一万はゆうにいると思われるワーズたちが、ワァーッと一斉に歓声を上げた。

「うおおおーッ！　み・ど・り、それ、み・ど・り、あほら、み・ど・り、もいっちょ、み・ど・りッ」

　並み居るワーズたちは、拳を振り上げて、力強くみどり組を連呼している。完全に意識が転送された三人は、深い籐の椅子に座ったまま、思わず顔を見合わせた。

「なんだ、このテンション？」

　三人は状況を把握するのに少し時間がかかる。同じことだまワールドなのに、東京のチンステはもちろん、昨日のニューヨークともまったく違う景色に驚かされる。ワーズたちが集っているここは、弥生時代の一集落のように見える。素朴な白木の高床木造建築物や、竪穴住居が散在する広場に、ワーズたちがひしめいている構図だ。三人が座っているここは彼らの地面より数段高い祭壇のようになっていて、両脇ではかがり火が燃え盛っている。まるで王が民衆の前に姿を現すといった絵だ。もちろん王とは、三人のＥＴのことである。
　杏児が、万三郎のすぐ隣に立っている【hope】に手招きして、顔を寄せたところにそっと耳打ちする。

「なんで、弥生時代みたいなことになってるの？」

「さあ……。でも、リアル・ワールドにも、江戸村とか明治村とか縄文遺跡公園とか、あるんでしょ？　ことだまワールドにも、そういうところがあってもおかしくないと思うけど」

「それが、この弥生集落だと？」

「僕は東京チンステから来たよそ者だからよく分からないけど、ここ、ことだま伊勢神宮を仕切っている人が決めたコンセプトがこれなんだろうね」

六

その時、杏児の隣りで万三郎が手をポンと打った。

「分かった！　このテンション、祖父谷たちが先にレシプロして、ここでワーズたちを盛り上げておいてくれたんだ」

すると、【hope】が笑いながら万三郎に答えた。

「ああ、そういえば、さっき祖父谷さんたちが来た。僕に以前のことすごく謝ってきて、それから皆の方に向き直って、急に古代の神官ばりに偉そうに胸張って両手広げて言ってたよ。『聞け、ここに集えることだまの民よ。優れた三人のＥＴたちが、まもなくここ、ことだま伊勢神宮に降臨するであろう。民よ！　その時には歓喜の叫びをもって迎えるが良い』……って。僕は、それが万三郎さんたちのことだと分かっていたので笑えたけれど、ここに集まっている【hope】たちの多くは皆、地方出身なんだ。いつも顔を合わせているのは、地方のチンステでシートレの編成を担当するソウルズ社員のクラフトマンくらいで、支店長以上の上司に出会ったことがないんだ。だから、ＥＴである万三郎さんたちは、ここではもうハリウッド・スター並みの存在だよ。例えば、ユキさん、ちょっと立ち上がって、手を振ってみて」

言われるままにユキが立ち上がってみた。

途端に群集は、「みどり」の連呼を止め、「おお」と言って固唾を飲む。ユキはぎこちなく、こわばらせた笑顔のまま右手を顔の横で軽く振ってみた。

「ハ、ハーイ、みなさん……」

ユキのつぶやきはどこかに設置された集音マイクで拾われ、三人の椅子が置かれた祭壇――いや、「ステージ」と呼んだ方が適切かもしれない――の両脇に積まれた大型スピーカーから、エコーを伴って彼らに発せられた。

「ハ、ハーイ、みなさん……」

ＥＴの言うことを一言も逃すまいと息をひそめていた群衆は、ユキのその言葉に、地響きのようなうねりで応えてくる。

「うおおおおー！」

　唸りの波が引くのと入れ替わりに、ユキを連呼する新たな波が押し寄せた。

「フックザワ！　フックザワ！　フックザワ……」

　当惑し、羞恥で表情がこわばっているユキのスーツのすそを引っ張り、【hope】は着席を促しながら、杏児に説明した。

「このパターン、さっき祖父谷さんが練習させてた」

　杏児は苦笑する。

「スタジオ前説のＡＤみたいな奴だなあ」

七

ユキが着席すると、誰が先導しているのか、群衆の連呼の内容は、「フックザワ！」から、「M（エム）、I（アイ）、D（ディー）、O（オー）、R（アール）、I（アイ）、ミドリ！」へとクロスフェードしていった。杏児が舌を巻く。

「彼ら、何か勘違いしているんじゃないのか？　アポフィス衝突まであと数時間だと言うのに、まるでコンサートかスポーツの国際試合が行われるかのような盛り上がりようだ」

【hope】が若干胸を張るようにして答える。

「そりゃそうだよ。それが、僕らの真骨頂だもの。彼らは、今何が起こっていて、どうしてここへ集まっているのか、ちゃんと分かってるよ。その上であのテンションなんだ。本来、僕らは楽観的で希望に溢れているんだよ」

「あっ、暗くて頬までは見えなかったから気付かなかったけど、ひょっとして彼らは皆、【hope】なの？」

杏児の言葉に、【hope】はちょっとあきれたようにチラリと杏児を見下した。

「全国の【hope】に召集かけたのは、あんたたちじゃないか」

杏児は苦笑いして言った。

「これだけ【hope】がいるということは、総理のテレビ演説を受けて、口に出して祈りをささげている国民がもうすでに相当数いるということなんだろうね。これから深夜にかけて、まだどんどん【hope】が増えていくってことか」

【hope】は小さくため息をついて話を続ける。

「東京でも地方でも、ほかのワーズたちだって皆、力になりたいと思っているんだよ。ましてや伊勢の神宮など、ことだまワールドのワーズたちにとっては聖地だから、みんな来たくて仕方なかったはずだよ。ただ【hope】が来いというのが、あんたたちＥＴの命令だから。そりゃあ、この群衆の中には、居ても立ってもいられなくて、【hope】たちに混じってこっそり一緒に来た他のワーズもいるようだけれど、多くの村々では、餞別として皆がエネルギーを出しあって、そ

れを【hope】に持たせて送り出したんだよ。彼らは村のみんなの期待を背負（しょ）って来ているんだ」

「なるほど……」

　頷いた杏児に、籐の椅子に腰を下ろして多少冷静になったユキが言う。

「でも、これだけテンションが高いってことは、エネルギーに溢れてるってことだから、いいことよね」

　【hope】が首を横に振った。

「磁気嵐の中、全国各地からここへ集まってくるだけでも、彼らは相当なエネルギーを使っているはず。それに、ここ、ことだま伊勢神宮は駐車場から遠くて、長距離運転してきた上に、特設駐車場から、ぎゅうぎゅう詰めのシャトルバスで会場入りした連中も多いんで、だいぶ消耗しているはず。もともと僕ら【hope】は、カラ元気を出す性格だから、あのテンションになってるけどね」

　万三郎が腕を組みながら言う。

「そんなにエネルギーを消耗しているのは良くないな。日本各地からここへバスで集結するのと、ここからアポフィスへ全力で飛んで行くのとでは、消費するエネルギー量がまったく違う。これからの方が大変だ」

　すかさず【hope】が指摘する。

「だからこそ、あんたたちＥＴの力が必要なんだよ」

八

万三郎は苦笑いした。

「まったくその通りだね、【hope】。それが俺たちの存在意義だ」

万三郎は思う。そもそも古都田社長は、英語の能力以前に、万三郎たちが若いことをもって、ＥＴとして採用したのだ。今、その理由が分かるような気がしていた。社長が重視した、若さ。それは、一途な思いの強さなのかもしれない。英語で言うなら、たとえ下手くそでも、間違いだらけでも、相手にこちらの意思を何とかして伝えようとする、その熱意の強さといえる。

また、若さは、失敗を恐れないことなのかもしれない。若いから経験がない。だから失敗する。現に、自分と杏児は、無茶苦茶なシートレの編成をして、空中分解させてしまった。だが若さは、その失敗から立ち直り、貪欲に学び、失敗によって自分を向上させるパワーを持っている。だから必要以上に失敗を恐れることなく、自分らしさを発揮できる。実際俺たちは、英語能力を向上させ、国連演説を成功させたではないか。

ニューヨークで必要とされたのは、熱意に加え、ワンチャンスで聴き手の心を打つ、英語の構成力であり、失敗は許されなかった。それをやってのけたのは、ことだま時間で一年に及ぶ英語学習の賜物であったに違いない。

それに対して今、グレート・ボンズを形成するのに必要なのは、英語の構成力ではない。構成も何も、ワーズたちはほぼ全員、【hope】なのだ。シートレを編成することではなく、【hope】たちをいかに高エネルギー状態で次々と送り出すことができるか、つまり、若さのエネルギーをどれだけ発揮できるかが問われる。だが、ＥＴになりたてのあの日と違うのは、ニューヨークと同様、失敗は許されないということだ。

基本的には、ワーズを送り出す時に、ＥＴが自らのエネルギーを少しずつ分け与える、という行為であり、それはワーズの背中をポンと叩いてやるだけでも注入することができるようだと、国連演説の時に経験済みの杏児が言っていた。であれば、そうすること自体は簡単だ。だが今の万三郎は、自分のエネルギーに自信がなかった。そしてそれを口に出すこともできなかった。

国民からのことだまエネルギーを無為にしたくはない。だが、問題は、その数があまりにも膨大だということだ。祈りがピークを迎える、また、衝突を避け得る最後のチャンスである夜十二時頃には、自分も含め、救国官は三人とも力尽きているのではなかろうか。

「ローンチング・ステーションはここにはないわよね。ということは、やっぱり自力飛翔……」

　ユキも万三郎と同じく、無数のワーズを送り出すのに必要なエネルギーの大きさに思い至っているのか、不安げに語尾を飲み込む。

　みどり組の連呼がようやく収まったのと入れ違いに、一番手前の高床倉庫の前辺りにいる【hope】たちが、騒ぎはじめた。倉庫の扉が半開きになっていると、ジェスチャーで主張している。

「何だろう」

　万三郎の好奇心に応えるように、隣にいた【hope】がマイクを通して、高床倉庫の近辺の【hope】たちに、扉を開けてくれるよう伝えた。二、三の此彼の意思の疎通を経て、数十人の【hope】たちが倉庫の中からひっぱり出したのは、三メートルほどの大きさがある、同型の三つの機械だった。耳を澄ますと、倉庫近くの【hope】の一人が大声で叫んでいる。

「紙片がついてます。『類いまれなる能力の持ち主、中浜万三郎様へ』とあります」

　それを聞いた万三郎の隣にいる【hope】オリジナルが即座に指示した。

「三台とも、ここへ運んでくれ！」

　九

「なんだ、これ……」

　ハーレー・ダビッドソンのバイクのようでもあり、幼児が遊ぶプラスチックの滑り台に似ていなくもない。いや戦国時代の大砲のようにも見える。至近で見ても、この機械が何なのか、三人にはよく分からなかった。補強の目的だろう、がっちりしたつくりの金属パイプの曲がった部分に、かがり火の炎がちろちろと鈍く反射していた。

　シャキン、シャキン、ジャキーン！

「うわっ！」

　三大並んだ機械の、一番向こうの一台が、急に滑り台のような部分を二段三段に伸ばした。釣竿が伸びるような感じでその先端が五、六メートルほど夜空に突き出た。

「杏児、どうした」

「ここにボタンがあって、押したらこうなった」

　杏児が指し示す、装置の側面を見ると、なるほどいくつかボタンらしきものが配置されたパネルがある。万三郎は自分の目の前の一台の同じ位置を覗き込み、やはりそこにあったボタンを押してみた。

　シャキン、シャキン、ジャキーン！

　シャキン、シャキン、ジャキーン！

　隣を見るとユキの前の装置も、斜め四十五度にその滑り台が伸びた。万三郎は、自分の目の前の一台が伸びた時はらりと足元に落ちた紙片を認め、拾い上げた。

「あ……なるほど」

　三台の機械を用意したのが祖父谷だということは、さっき【hope】が読んでくれたメモで察しがついていた。万三郎は、隣の機械の前にいるユキと、その向こうにいる杏児に声をかけ、紙片

を読んで聞かせる。

「移動式のローチング・カタパルト、即席発射台です。足りない脳味噌を使って考えたところ、きっと必要になるだろうと、優秀なあなた方がニューヨークで仕事をしている間に、新渡戸部長にお願いして、ことだま運送便でＫＣＪ本社からここへ送ってもらっておきました」

　杏児が感嘆の声を上げる。

「祖父谷義史、ブラボー！」

　それを受けた【hope】たちが、そこにいない祖父谷を手拍子で一斉に讃え始めた。

「ソ、フ、タニ！　あそれ、ソ、フ、タニ！」

十

今、日本各地からここに集まってきた【hope】たちは、威勢の良い歓声を上げてこそいるが、磁気嵐に逆らって旅してきたことで、すでにいくばくかのエネルギーを消耗している。ましてや、これからはるかに長い距離、宇宙を加速しながら旅して、どうしても徐々にエネルギーを失いながら、それでも最終的にわずかに残ったエネルギーをアポフィスに次々とぶつけていくのだから、エネルギーをいかに節約するかというのは大きな課題だった。そういう意味では、この三台のカタパルトによるワーズの発射は、この場において最高の選択だ。

国連建物内の飛翔など、短距離の水平飛行なら、どうということはない。だが、垂直方向、かつ長距離のワーズの自力飛翔となると、話はまったく変わってくる。ウルトラマンが宇宙に帰るときのように、格好良く飛び上がれるわけではない。地面から必死で空気を掻き、もがきながら少しずつ上空に浮いていくのである。初速が遅いと非常にエネルギーを消耗するので、本来、まずＥＴたちが、少し浮いたワーズの足裏を持って、そうれ！　と上に押し上げる要領で加速してやらなければならないと覚悟していたのだ。カタパルトは、その労力、エネルギー・ロスを大幅に軽減できそうだ。

もちろん、ＥＴたちは【hope】たちを送り出すのに、やはりエネルギーは使うようだ。このカタパルトを観察することで三人は、これらが手動、つまりアルファベットの「Ｙ」の字の両端にゴムを結びつけたゴム銃と同様、押し出し部を後ろに引っ張るのに人力が必要な仕様になっていることを知った。だがそれでもなお、セットされたワーズは、カタパルトによって一気に解放されるエネルギーのおかげで、相当上空まで加速度を持って自力を消耗せずに飛ぶことができる。そこからなら、地球の磁気圏を振り切って宇宙空間に飛んで行き、目標にたどりつくまでに力尽きることはないだろう。

【hope】たちの｜掛け声《チャント》は、いつしか「祖父谷」から「ＫＣＪ」へと変わっていた。

「ケイ、スィー、ジェイ！　ケイ、スィー、ジェイ！」

右手を突き上げて勇ましいことこの上ない。ステージの上から彼らを見回して、万三郎は思わずユキに問うた。

「ユキ……彼らは、死にに行くのか」

　ユキは前を見たまま、しばらく黙っていたが、やがて独り言のようにつぶやいた。

「知ってるでしょ？　彼らは死なないのよ」

　万三郎は横からユキの目をのぞき込んで念を押す。

「きっと、か？」

「……」

　するとユキは少しの間沈黙して、それから言葉を噛みしめるようにして答えた。

「人間が、生きている限り、想いは言葉になって、生まれるの。言の葉。葉っぱがエネルギーを失って、枯れて地面に落ちても、樹が死なない限り、それはいつしか、樹が成長するための養分になる。エネルギーは循環するの」

　今度は万三郎が黙る。しばらく黙ってから、さらに訊いてみた。

「樹が……人間が、死んだら？」

　ユキは、前を向いて唇を噛んだままだったが、やがて万三郎を睨んだ。

「万三郎、私たちが死んでも、樹は何十億本もある。中には生き残る樹だって……」

「ようし、じゃあそろそろ始めるか！」

　チャントを背景にした二人の会話が耳まで届いていたのかいなかったのか、杏児が気合いを入れた声を出して、二人を遮った。杏児はユキと万三郎の方を見る。ユキは杏児に頷くと万三郎を振り返る。万三郎も真剣な表情で頷く。すると、三人の傍らについていた【hope】オリジナルが、笑みをたたえて万三郎に歩み寄ってきた。

「万三郎さん……いや、中浜救国官。ニューヨークでは心配をかけました。今、僕はあなたと最後の仕事ができることを光栄に思ってる」

「こちらこそ。頼むよ」

　二人は視線を絡め合って、固い握手を交わした。

【hope】オリジナルは、国連演説のクライマックスで心を通い合わせた二人の上司、ユキと杏児とも同様に握手を交わした。そして、集音マイクが充分拾えるだけの声を張り上げて自分の｜複製《コピー》たちに宣言した。

「みんな、始めよう」

十一

スピーカーから発せられたその宣言は、辺り一帯に焚かれたかがり火の光の届かないずっと先の方まで響いていった。光の向こうまで、すでにワーズたちで埋め尽くされているようだ。その声が群衆を撫でつけたかのように、チャントはざわめきへ、ざわめきは静寂へと入れ替わっていく。

「前の人から順番に、ステージへ」

最初の三人の【hope】が上ってきた。皆、吊り半ズボンに白ソックス姿だ。顔も本家と同じに見えるのだが、それこそ希望に瞳をキラキラ輝かせた、テンションの高そうな【hope】たちが微笑をたたえながら、各々担当のＥＴに挨拶した。

「僕らが先頭を飛びます。行ってきます」

勇気ある先鋒たちに敬意を払って激励する。

「地球の命運はあなた方にかかっています。頑張ってきてください」

「任せてください」

頼もしい連中である。三人の【hope】は、それぞれカタパルトの、レール状の発射台にうつ伏せに乗った。レールは、カタパルトの操作法を確かめる過程で、三人によってそれぞれすでに一番手前まで引き下げられている。

「よろしくね」

万三郎の隣のカタパルトでは、ユキが自分の台に乗った【hope】の背中をポンと叩いた。すると、まるで蛍のように、【hope】の背中が光を放ち始めた。眩しいほど輝いている。

「な、何？」

慌てるユキに、【hope】は寝そべったまま顔を向け、笑った。

「『希望の光』、ですよ。今、福沢救国官からいただいたエネルギーを少し使って光っているの

です」

　ユキは光の眩しさに手をかざして、直視できないまま、【hope】に問う。

「でも、余計なエネルギーを遣ってるんじゃ……」

　すると、カタパルトの【hope】は、ユキの懸念を爽やかに笑い飛ばした。

「ＬＥＤ照明ですから、微々たるものなんですよ。それとも、『希望の光』を消しますか？」
　【hope】はそう言うと、頭を持ち上げて、杏児のカタパルトの方へ顎をしゃくって見せた。
「あ……」

　見ると、杏児のカタパルトの【hope】も背中が光っている。

「ＬＥＤって……。ことだまワールドなのに……」

　ユキは唖然としてしばらく凍り付いたように動かなかったが、カタパルトの【hope】が急かした。

「福沢さん、時間がない。発射ボタンを押してください」

　ユキはハッとした。

「分かった。行くわよ」

　うつ伏せになった【hope】が親指を立ててから改めて前方を睨む。

「オッケーです。さあ、行くぞーッ！」

　【hope】の雄叫びに続いて、ユキの号令が響いた。

「準備完了、発射！」

　発射ボタンを押す。凄まじい速さでシャトルがレールを走る。シャトルにつかまる形になっていた【hope】の身体は、レールに沿って急激に加速され、文字通り弾丸のようになって、順番を待つ仲間たちの頭の上を飛んでいく。同時に、万三郎と杏児のカタパルトも、カシャシャッ！と音を立て、それぞれの【hope】を射出していった。明るい光の粒が三つ、ステージから次第に角

度をつけながら遠ざかっていった。それを見送りながらユキはつぶやく。

「頼むわよ……」

「次、行きます！」

　すぐ後ろで待つ、次の【hope】にそう声を掛けられて、ユキはハッと我に返った。慌てて、レールから垂直に突き出た金属の棒をカタカタと後方に押し込んでいく。押すにつれて抵抗が強くなり、より強い力が必要となったが、まだユキには平気だ。

「あっ！」

　その時、レールに乗ろうと待機していた次の【hope】が素っ頓狂な声を上げた。空を見上げる【hope】につられて、ユキは先行の三つの光を目で追った。上空左の方から、スローモーションのように三つの赤い光の粒が近づいて来て、それぞれが白い光にぶつかったのだ。光は混ざり合ってピンクの色を放ちながら、明らかに落下を始めた。落下していきながら、打ち上げ花火の最後のように、スーッと明度を落とし、夜の闇の中に消えていった。

十二

第一陣の軌跡を追っていた群衆の【hope】たちから慟哭が聞こえる。

「な、何？　何があったの？」

ユキは杏児を見る。杏児は首を横に振る。

「ユキさん……」

ユキの前に来ていた【hope】オリジナルが静かに言った。

「動きを止めている場合じゃないよ。次の発射を」

「だ、だけど……」

「方向を少し変えようよ。西二十度へ」

そう言うと【hope】オリジナルは、カタパルトの回転台を一段階右に回して止め、万三郎と杏児のカタパルトに歩み寄って、同様に角度を変えた。その都度、そこに立っている同胞の【hope】たちと無言で頷き合う。

「修正オッケー、発射準備！」

【hope】オリジナルが叫び、【hope】たちがカタパルトに乗り込む。

「ちょ、ちょっと、いいの？」

ユキはうろたえて万三郎と杏児を交互に見る。

「発射、準備！」

ユキを急かすように【hope】オリジナルはもう一度叫んだ。それからユキに歩み寄って耳元でささやいた。

「みんな覚悟ができてるんだ。時間がない。何があっても、動きを止めちゃダメだよ」

　ユキはようやく頷いた。レール上に待機している【hope】の背中を軽くたたく。【hope】は顔だけ振り返ってユキに笑いかけた。

「大丈夫ですよ、行ってきます」

「う、うん……」

　万三郎が叫ぶ。

「準備、完了。発射！」

　杏児が叫ぶ。

「発射！」

　ユキも目を見開いてスイッチを押す。

　カシャッ、カシャッ、カシャッ。

　三台のカタパルトから【hope】たちが先ほどとは少し方向を変えて飛び立っていった。ところが今度は先程よりも早く、赤い光が寄ってきて、三つの白い光にまともにぶつかったのだ。

「ああ！　どうして？」

　またしても無残に落下し、光を失っていく【hope】たち……。群衆の【hope】たちが騒ぎ始めた。

「おい、あの落ち方。あれ、あの赤い光、【-less】（レス）じゃないのか（１）？」

「そうだ、【-less】だ、きっと！」

「まずいな」

　【hope】たちのざわめきを聞きながら、杏児が万三郎に叫ぶ。

「おい、万三郎！　これってどういうことかな」

　その時、ステージ脇のスピーカー群が急に大きな雑音を出し始めた。ピーッ、ガガー。

「……これか、この周波数か？　聞こえてるのか……」

十三

スピーカーの向こうでは男の声が誰か別の人に接続状態を訊いているようだったが、やがて咳払いに続いて、辺り全体に響く音量で男が話し始める。

「聞こえているか、救国官ども」

電波状態が悪いのか雑音が多いが、その声に聞き覚えがあった。三人の眉が上がる。

「【bad!】か！」

万三郎の声に、途端に声の主が不機嫌になる。

「【｜bad!《ベャアーッド》】だ！ 何度言ったら分かるんだ、馬鹿野郎！」

万三郎は目を丸くしてユキと顔を見合わせる。

「こっちの声が聞こえている……」

杏児は思わず辺りを見回す。

「どこだ……」

だが、見える範囲に【bad!】は見当たらない。

「ここだよ」

きょろきょろする三人をあざ笑うかのように、【bad!】は続けた。

「こっちからは、声だけじゃなく、お前らのアホ面まで見えているんだ。監視カメラと盗聴マイクをしかけておいたからな」

万三郎が声を上げた。

「【bad!】、【hope】たちを攻撃したのはあんたか」

「ベャアーッドだ。ああ、そうだ。お前たちが発射する全ての【hope】は、これからも俺と手下どもが責任を持って撃ち落とす。おう！　【hope】たち、聞こえてるか。そこんとこ、よろしく！」

　スピーカー越しにそれを聞いていた【hope】たちが一斉にざわめいた。万三郎が驚いてつぶやく。

「撃ち落とすって……あいつもカタパルト持っているのか……」

　即座に【bad!】が反応した。

「中浜、そんな便利なものは持っていない。お前、持ってるんなら後でぜひ貸してくれ。俺がエネルギーを手下どもに注ぐ、手下どもは、ここにいる【-less】どもにそれを分け与える、すると【-less】どもは元気に飛んでいく……と、こういうシンプルな仕組みだ」

　万三郎は虚空に向かって反論する。

「エネルギーを分け与えるって、【bad!】、あんた自身がワーズに過ぎないじゃないか」

　【bad!】は、万三郎が言い終わらないうちに、いらだった声をかぶせた。

「ベャアーッドと呼べと言っているだろうが！　それが、俺が普通のワーズ【bad】（悪い）と決定的に違うところだ。いいか俺は、普通に悪いんじゃない、桁外れに悪いんだ。そりゃあもう、極めつけに悪い。極悪だ。悪のパワー全開だ。驚くほどの悪なんだ。ほら、トマトでもあるだろう？　普通のやつと違って、驚くほど甘いやつが。あれと一緒だ。ブランドだ、悪のブランド。差別化して違いを際立たせるブランド戦略なんだ。それがベャアーッドなんだ。そのロゴマークが『！』なんだよ」

「呼びにくいんだよ！」

「うっ、くぬぷぷぷ……」

　万三郎に一言で全否定されて、【bad!】の声色は明らかに当惑の様相を呈していた。

「ど、努力しろ。何回も言ってりゃ、言えるようになる」

　しかし実際のところ万三郎は驚愕していた。要するに【bad!】は、普通のワーズとは違って、他のワーズに分け与えることができるほどの、桁外れに大きいエネルギーを持っているということのようだ。それは彼が、ワーズの枠を超えて、ヒューマンやソウルズ並みに進化しつつあるということなのかも知れなかった。脅威を感じて思わず口をつぐんだ万三郎に代わって、杏児が叫ぶ。

「【bad!】、卑怯だぞ、姿を現せ！」

　話題が変わって元気になった【bad!】は、杏児をあざ笑った。

「おうおう、三浦救国官どの。威勢がいいじゃねえか。さすが地球を救う立場ともなると違うねえ」

「誤魔化すな！」

　【bad!】は真面目にな声に戻る。

「誤魔化してるわけじゃねえ。そこに行こうとしているんだが、混み過ぎて動けないんだ。まったく、どんだけ【hope】がいるんだよ」

　万三郎が、姿の見えない【bad!】に再び言った。

「【bad!】、分かってるだろう。【hope】たちを飛ばしていかなければ、アポフィスがぶつかって、俺たちは皆、死んでしまう。今、あんたと争っている場合じゃないんだ。頼む、どうか邪魔しないでくれ」

　【bad!】の声が大きくなった。

「おっと、俺が席を外していても、多くの手下どもが【-less】の近くに待機しているぜ。俺の移動中に意表をついて【hope】を打ち出しても無駄だからな。そして、死んでしまうのは、お前たちと、エネルギーがゼロになるワーズたちだけだ。俺たちは死なない」

「小惑星は、俺たちとあんたたちを区別などしない」

「そうだ区別などしない。だが、俺たちとお前たちでは、向き合い方が違うんだ」

「どういうことだ」

「こういうことだ。知りたいかーー」

　万三郎はぎょっとした。今、最後に聞こえた、【bad!】のものではないその声は、スピーカーからではなく、万三郎のすぐ後ろから聞こえたからだ。万三郎は後ろを振り返る。果たしてそこには、【bad!】ではない、見覚えのある顔が車椅子に乗っていた。

十四

「あなたは、き、雉島さん！　いつの間にそこに」

サングラスをかけていない雉島は精悍な顔つきをしている。そう、皮肉な笑みの一つも浮かべていない。雉島は、底なしの闇をその双眸にたたえているように万三郎には思えた。

「中浜……だったな、お前」

「は、はい」

雉島は、万三郎をまっすぐ見つめたまま、車椅子を動かして万三郎に近づいて来た。

「ことだまの力で小惑星の軌道を変える、というのは、お前の思いつきではあるまい」

「それは……」

「そう、古都田からの命令だ、そうだな？」

「は……はい」

「お前は……うまく行くと思うのか」

雉島は、怒りとも哀しみともつかない表情でまっすぐ万三郎を見上げた。万三郎は一瞬気圧されそうになってひるんだが、気を取り直して雉島をまっすぐ見返す。

「うまく行かせなければ、と思っています」

雉島の目は、ＫＣＪ初日、凄まじい眼力でまっすぐこちらを射抜いてくる古都田社長の目に似ていると万三郎は最初思った。だが、目を合わせたまま、しずしずと流れていくある種の気を見極めたとき、万三郎は思い直した。

――いや、本質は、決定的に違っている。

古都田の眼差しの底には、生かそうという、根源的な創造性があった。あの緊張感の中ですら

、万三郎は心のどこかで本能的にそれを感じ取っていたのだ。それは、正しい合言葉さえ口にすれば、ようこそとお前を迎え入れる用意があるのだぞと、閉ざされた扉の隙間からわざと光を一条、漏れ出でさせる、その、生への導きだった。

　だが、目の前のこの男は、違う。

　悪党は、心の水が濁っている方が、ある意味理解しやすい。邪悪が潜んでいてしかるべきだと思えるからだ。しかし、雉島の目は、透明度の高い湖の水のように、どこまでも澄んでいた。隠れるものなど何もない。哀しくなるくらい透明だ。だがそれでも、永遠に透明なのではない。深く、深く目を凝らしていけば、その向こうは、ついに闇になっている。そして、やはり何もないのだ。何も動かない。命を感じさせるものがない。雉島の目は、まるで、澄みきった死だった。

　それなのに、その雉島が再びこう言ったので、万三郎は驚いた。

「死ぬのは、お前らだ。俺たちは、生き延びる」

十五

「雉島さん、アポフィスは、差別しない」

「そうだ、お前たちは衝突を回避しようとするが、俺たちは衝突を受け入れる」

万三郎は雉島が何を言っているのか分からなかった。

「ならやっぱり、死ぬということですか」

「いや、当分、地下深くに潜る」

「はあー？」

ますます訳が分からない。杏児が叫んだ。

「万三郎！　時間がない。ワーズの打ち上げを再開するぞ」

ユキも同調した。

「万三郎、私も再開するわ」

「万三郎さん、次、僕が行くよ」

万三郎はハッと我に返り、次に待機していた声の主を見た。キラキラ光る少年の目をした、【hope】オリジナルだった。

「う……君が行くのか」

一瞬ひるんだ万三郎に、【hope】オリジナルは笑いかける。

「大丈夫だって。僕も、他の【hope】たちと一緒に働くんだ」

そう言って【hope】オリジナルは素早く万三郎のカタパルトに乗った。

「準備オッケー。万三郎さん、発射ボタン押して！」

「ほ、【hope】……」

　動きが止まっている万三郎を、発射台の【hope】オリジナルがせかす。

「早く！」

「準備完了、発射！」

　向こうでは、杏児が叫んで自分のカタパルトの【hope】を発射した。

「こっちも発射！」

　ユキも杏児に続いて発射して、万三郎のカタパルトの【hope】オリジナルを見やった。

「【hope】あなた、タッチ・ハート作戦のとき、本当にありがとね。今、もう一度、頑張ってね」

　杏児も一瞬手を止めて、【hope】に笑いかける。

「トイレで君と出会えて、よかったよ。グレート・ボンズ作戦も、君の働き次第だ。頑張ってくれ」

　パワー・スポットのことだま伊勢神宮に無数の分身たちといることで、ニューヨークにいる時とは全く違って、希望に満ち溢れているように見える【hope】オリジナルだった。だが、彼がポジティヴな理由の一番はきっと、ニューヨークで双子の弟【wish】と和解できたことだろうと万三郎は思った。【hope】オリジナルは、にっこり笑って軽く手を上げた。

「あんたたちもね。手を休めちゃダメだよ、一人でも多くの【hope】を発射し続けて」

「ああ、分かった。続けるよ」

　雉島はそのやりとりをじっと見つめながら独り言のように言う。

「無駄なんだよ……。おい【bad!】、聞こえているか？」

　スピーカーから声が返ってきた。

「分かってます、雉島さん」

　【hope】オリジナルにも、その【bad!】の声は聞こえていた。彼は血相を変えた。

「万三郎！　早く僕を撃ち出して！」

　その声にはっと我に返り、万三郎は発射ボタンを押した。

「発射！」

　万三郎と同時に、ユキも杏児もそれぞれ次にカタパルトでスタンバイしていた【hope】たちを発射した。オリジナルを含む、三つの【hope】が白く輝きながら飛んでいく。ところが、間髪入れずに別の所から打ちあがった赤い光が、まるで迎撃ミサイルのようにするすると【hope】たちに寄ってきて、たちまちのうちに絡み合い、断末魔のごとくピンクの明るい光を発した直後、暗くなって落下していった。

「【hope】ッ！」

「ああ……どうして」

「【hope】……」

　三人は愕然とする。雉島が静かにつぶやいた。

「無駄だと、言っている……」

　それから三人は、つるべ撃ちのように次々と【hope】たちを発射していく。だが、上空にさしかかった光は、先ほどと同じように、赤い光に追尾され、ことごとく撃ち落とされていった。

「くっそー！」

　杏児もユキも意地になって【hope】を飛ばし続ける。カシャン、カシャン……。

「中浜アーッ！」

雉島は大きな声を出した。

「雉島さん！」

呼応するような万三郎の怒りの叫び。叫ぶと同時に、万三郎は打ち上げ作業の手を止めて、雉島の車椅子の車輪を荒々しく両手でつかみ、雉島に噛みつかんばかりに顔を寄せた。

「やめさせろ！　邪魔するな！」

「世の中ァ、お前が思っているほど単純じゃない！」

「なんだとぉ……」

カッとなった万三郎は思わず雉島のシャツの胸元をねじり上げる。だが、雉島はその手首をひねり上げ、万三郎に悲鳴を上げさせた。

「痛てて……」

身体をよじって、ひねられている手首の痛みを和らげようとする動きを利用して、雉島は万三郎を強制的に前を向かせ、幾分声を静めて言う。

「中浜、見ろこいつらを」

万三郎の目に映るのは、あれだけ先行の仲間たちが撃墜されても、なお我先にと自分の出発と良き働きを志してステージ前でひしめく、希望に満ち満ちた【hope】たちの顔だった。
「お前はこの状況にあって、日本中の人間が皆一様に、小惑星が避けていく希望だけを心に描いて、こいつら【hope】を送り出していると思っているのか。答えろ、中浜」

雉島は万三郎の手首をさらに少し強くひねる。

「いっ！」

顔を上気させた万三郎は歯を食いしばって冷や汗を流している。

「もしそう思っていたのなら、そのおめでたい頭を少々冷やしてやる。お前が国連で美談をぶったところで、皆の思いがひとつに、などと言うのは、うぬぼれが過ぎる。お前ごときが世にはびこる悲観を駆逐することなど、できん」

「そんなこと、ない！」

十六

そう言ったのは万三郎ではない。ユキが雉島の右背後から、万三郎の手首をつかんでいる雉島の上腕に斜めに手刀を振り下ろしながら言ったのだ。ところが、雉島は背後のユキに気付いていた。肩口から肘関節のあたり目がけて振り下ろされてくるユキの手首を、雉島は左手で素早くつかんだ。

「あっ！」

ユキが叫ぶ間もなく雉島は、手首をつかんだままの左手を、自分の頭の周りをぐるりとめぐらせて、万三郎とは反対側へ導いた。なされるがままにユキは雉島の左側へ回り込まされた。そうしなければ腕がへし折られるからだ。

「クッ……」

ユキもまた、捻られる手首の痛みに唇をゆがめた。雉島は言う。

「貧困、飢餓、暴行、略奪、裏切り、陰謀、戦争、レイプ、テロ……。人類が生きている限り、これらは地球上から無くならん。そして今、ほとんど百パーセントに近い確率で小惑星が衝突するってのに、皆が皆、お行儀よくお茶の間で希望だけを念じていると思うか。
【hope】たちを撃ち落としている本質は【bad!】ではない。【bad!】の周りに続々と集結している、ほかならぬ、人類自身のネガティヴなことだまなのだ。見ろッ！」

雉島は両手をクイッと捻り、上空を顎で示した。促されて、というより、強制されて、捕われの二人は空を見上げた。最後に飛ばした【hope】たちも、やはり追撃され、落下しながら光を失っていった。

「【hope】たちに取りつく【-less】どもだ。喜んで自分たちで飛び立っているんだ。プラスとマイナス。ことだまエネルギーが打ち消されて堕ちていく。【hopeless】――絶望、だよ」

雉島はそこでいったん言葉を切って、フッと笑った。

「お前たちがレシプロしてくる前、俺は【bad!】が今いる場所を見てきた。無数の【-less】どもがひしめいていた。【hope】を無効化するにはうってつけの奴らだ。お前らが【hope】に限って招集したのとは対照的に、ネガティヴ・ワーズどもは何も限定されていないから、【no】、

【despair】（絶望）、【disappointment】（落胆）、【pessimism】（悲観）、【lament】(悲嘆)、【dismay】（狼狽）、【catastrophe】（悲劇的結末）など（２）、それはもう、多彩な顔触れがそれぞれ無数に集結していた。今ここに集まっている【hope】より、あっちの方が多いくらいだろう。お前たちは今、目の前の【hope】たちを見て、希望で胸を膨らませているかもしれんが、むしろこいつらは｜少数派《マイノリティー》なのだ。分かったか！」

　そこへ、杏児の叫びが重なる。

「絶望だって？　絶望したら、あんたも死ぬじゃないか！」

　杏児が雉島の後ろから襲いかかった。羽交い絞めにして、万三郎とユキを解放させようとする算段だ。だが、首にかけた杏児の右腕が、雉島が大きく息を吸ったのを感じ取った次の瞬間、杏児は勢いよく後ろに吹き飛ばされていた。杏児だけではない。雉島が手を離したのだろう、万三郎もユキも、それぞれステージの端っこまで吹き飛ばされたのだ。それどころか、ステージ前の【hope】の群集も大勢が倒れ、うめいていた。杏児は、したたかに身体を打った痛みとは別に、気持ち悪さが蔓延し、思わずウェッとえづいた。雉島は車椅子に座ったまま振り返って静かに杏児に言った。

「気をつけろ、俺はだてにことだま裏ワールドを支配しているわけじゃない」

十七

「『ネガティヴィティー波』という、俺の武器だ。陰性の気を一気に放射する。今のは手加減したが、お前らでも気持ちが悪くなっただろう。ワーズたちのダメージは大きいぞ」

そう言って雉島は、車椅子を転回させて、尻もちをついている杏児のそばに来て杏児を見下ろしながら言った。

「俺はソウルズだ。お前たちと違って、ことだまワールドにしか存在していない。滅びるのはリアル・ワールドの人間どもだ」

「だからといって邪魔することはないでしょう？」

「言ったように、ネガティヴなワーズどもが【hope】に取りついている理由のほとんどは、お前らリアル・ワールドの人間どもの思考の結果だ」

「でもあんたはネガティヴを指揮している」

「ああ。この際、リアル・ワールドの人類は、一度滅びた方がいいと思っている」

「リアル・ワールドが滅びたら、思考する人類自体がいなくなるのだから、雉島さん、あんたも含めて、ことだまワールドも消滅するんじゃないのか」

「消滅することで、『｜相《そう》』が変わるんだ」

「『相』？」

「お前は、人類最後の一人が死ぬとき、その人間の心の中には、希望があると思うか、絶望があると思うか」

「……」

「俺は、絶望だと思う。ことだまワールドでも【hope】が死に絶え、【hopeless】だけが残る。そして思考主体である人間がいったん途絶える。だがこの星の生命は再生する。それは今のお前らホモ・サピエンスではないかも知れない。俺にとってはそれはどうでも良い。いずれその新生

物が高度な知性を持って、言葉を操るようになるとき、俺は、俺の価値観をベースにした世界を築き上げる。

「ネガティヴの帝国……か」

「『相』が変わると言っただろう。片方を規定するから、もう片方の意味が決まるのだ。【hope】が先に滅びた瞬間、【hopeless】はもはや絶望を意味しなくなるのだ」

「分からない」

「分からなくていい。分かったところでどうせお前らの命はあと数時間しかないのだから」

　起き上がってきた万三郎とユキが、あと数時間と聞いて慌てて活動を再開する。

「次ッ！　次の【hope】、来て！」

　【hope】たちは、気を失っているステージ近辺の仲間を、邪魔にならない所に移動させ、介抱する。その一方で、新たな【hope】たちが打ち上げを希望してどんどん詰めかけてきた。雉島は車椅子ごとステージ前方へと移動していった。立ち上がった杏児がその後を追う。

「雉島さん！」

　杏児が雉島の前へ回り込んで車椅子の両輪をつかんだ。

「ネガティヴが人間の思考の必然だと言うなら、僕たちの邪魔をせずに、さっさと地中に潜るなりして、望み通りになるのを見ていればいいじゃないか」

　雉島は杏児をじっと睨んでいたが、フッと息を吐くと虚空に視線を移して言った。

「汚い野郎が、自分の築いた世界を何とか守ろうとあがくのが我慢ならん。その努力を踏みにじって、絶望感を味わわせたい。どけ、若造。次はもう少し強く放射するぞ」

「何言ってんですか！　そんなことして何になるって言うんだ」

　雉島は、性懲りもなく万三郎とユキが【hope】をカタパルトに載せて発射しようとするのを見て、先ほどと同じように大きく息を吸い込んだ。

「雉島さん、止めてくれぇ！」

　杏児の願い虚しく、ネガティヴィティー波は放射された。杏児の身体は衝撃波に吹き飛ばされてさっきよりも遠く、空中を飛んでいく。ところが、広がりつつあった衝撃波だけは、途中で何か透明なドーム型のバリアにぶつかって、内側に戻り始めた。

「うおっ！」

　雉島の表情が一変する。景色のゆがみが自分に向かって戻ってくるのを認めて、雉島は反射的に車椅子から脱出してステージの傍らに身を投げ出した。その直後、衝撃波が車椅子の座面の一点に収れんして、車椅子は爆発的に発火した。

　炎に包まれる車椅子。

　雉島はうつ伏せの状態から両手を床について上半身を起こし、目を見開いて辺りを見回している。

「まさか……」

十八

杏児の身体は、サッと飛び出した二人の人影に危なっかしくもキャッチされ、地面に直接激突するのを免れた。細身の杏児を身を呈して守った二人の人影は女性だった。受け止めた衝撃で地面に倒れ込んだ一人は、黄八丈の着物を着ている。

万三郎が叫んだ。

「えっ、恵美さん！　恵美さんか？」

「何、恵美さんだって？」

仰向けに倒れてはいるものの、意識はしっかりしている杏児が、吐き気に顔をゆがめながらも万三郎のセリフに驚いて、地面に手をついて身体を翻し、自分の下敷きになっていた人の顔を見る。

「あっ！　恵美さん……」

着物の女性はまさしく藁手内恵美だった。恵美は背中を打った痛みに耐えつつ、それでも恵美らしくニコリと杏児に微笑みかけた。

「連れて来ちゃいました。社長の許可をもらって……」

「え？」

恵美が移した視線にしたがって、杏児はもう一人の女性を見た。

「ちっ……ちづる！　ちづるかッ？」

女性は今の衝撃で一時的に気を失っていた。杏児はその頭を腕に抱え込んで、名前を呼びながら揺すった。

「ちづる、ちづる……」

恵美は支えていたちづるの身体からそっと自分の身体を抜いて、小さな声で杏児に言う。

「ちづるさんは、検体番号ＪＣＳ－〇一〇、『｜藤堂明穂《とうどう あきほ》』ということだまネームです。身体は、リンガ・ラボのカプセルにあります」

　杏児が顔を上げて訊く。

「生きてるの？」

　恵美は頷いた。

「ことだまワールド内を移動してきました。三浦さん、無事で……」

　恵美は言葉を続けようとしたが、その時、ちづるが軽く呻いて杏児の腕の中でゆっくりと目を開いたので、杏児の意識がちづるに向いた。

「あ、颯介さん……颯介さん……」

「ちづるっ！」

　杏児はちづるをぎゅっと抱き締める。恵美は微笑みを浮かべたまま、ふとあらぬ方向に顔を向けてつぶやいた。

「無事で、良かった」

十九

「汚い野郎とは、私のことか、雉島」

「他に誰がいるというんだ、古都田」

言葉を交わしてはいるが、二人は闘っていた。雉島が深く息を吸い込んで、ネガティヴィティー波を放射する。それは、それまでとはまるでパワーが違うことが、透明な景色のひずみ具合でよく分かった。だが、それほど強い衝撃波でも、古都田がカッと目を見開いて発するバリアの念波をなかなか越えることができない。二つの力が拮抗している境界線が周りの皆の目にもはっきり認識できた。雉島の念波のこちら側への広がりを直径三メートルほどで抑え込んでいる古都田の顔を汗が流れ落ちる。古都田自身は、今はざっと左右に割れて道を開いている【hope】の群集の間、二十メートルほど向こうから念を発していた。

「雉島、あれほど誤解だと言っても分からんのか」

古都田は厳しい眼差しを雉島から逸らすことなく、ステージへとゆっくり歩いてくる。

「誤解だと？　バカめ。『ああ、俺が死んだのは誤解が原因なのかあ……』と納得するとでも思っているのか」

そう毒づくと雉島は「ふんッ！」と一層気合いを入れた。気合いとともに、雉島の念波の境界は一瞬にして一メートルほど後退した。しかし同時に雉島は、自分自身の足でステージに立ち上がったのだった。そして、いったん立ち上がってしまうと、念波のドームの直径は逆に、五メートルほど古都田の念波を押し戻した。

「古都田、ここでお前と会えるとは予想していなかった。お前が東京から出て来たら、皇居と首都は誰が守るんだ。ふんッ！」

押し気味になった雉島のパワーに対抗するため、古都田もさらに気を集中させる。汗が、さらに一筋、古都田の頬を伝い落ちた。

「大泉総理の指示で、石川さんが守っている。雉島、もう一度、ゆっくり話せば分かる。だが頼む、今はとにかく救国官たちを邪魔しないでくれ」

古都田のセリフの最後を塗りつぶすような大声で雉島は嘲った。

「笑わせるな！　今お前が食い止めている俺のネガティヴィティー波の源泉は、古都田、お前に対する憎しみだ。俺を陰謀で消し去って、お前が内村さんから引き継いだ、この、ことだまワールドの秩序を叩き潰すことだけが、俺の行動原理だった。腹立たしいことに今まではお前の力が上で、俺はことだまワールドの裏世界に封じ込められていたが、そこへアポフィスがやってきた。千載一遇のチャンスだ。今度は俺がお前とお前の世界を消し去る番だ」

そこまで言うと雉島は「やれ」と言って頷いた。古都田が怪訝な顔をした瞬間、いきなり何者かに背後から後頭部を棒で殴られて、古都田はその場に崩れ落ちた。とたんにパワーバランスを失ったネガティヴィティー波は、幾分弱まりながらも、スッと広がっていった。後ろから殴った人物は、棒を持ったままの右腕で顔を覆い隠すようにして衝撃波をしのぎ、後ろに数歩よろめく程度で済んだが、その後ろにいた【hope】たちは、悲鳴を上げながらことごとくなぎ倒されていった。

ネガティヴィティー波は、杏児とちづる、そして恵美に駆け寄っていた万三郎とユキの元も通過した。波が弱まっていたので、突風が吹き抜けるようだったが、その直後に気分が悪くなる。吐き気を押さえながら恵美が叫ぶ。

「おじ様ーッ！」

衝撃波から顔を守った腕をゆっくり下ろした人物が、古都田に駆け寄ろうとする恵美を見て、棒を振る手に再び力を入れる。その人物の顔を見た万三郎とユキは思わず驚愕の声を上げた。

「新渡戸部長！」

◆◆◆

（１）【｜-less《レス》】否定の意味を持つ接尾辞。接尾辞は、単語の中心部分（語幹）の後ろについてその単語の意味を補足する。この【-less】については、語幹の意味を否定してしまう。（例）“careless”不注意の、“borderless”国境のない（“border”は「国境」）、“stainless”ステンレス鋼（“stain”は汚れ）。すなわち、「汚れのつかない金属」。なお、接尾辞ではなく、ひとつの単語としての“less”は「より少ない」という意味の形容詞。

（２）ここで挙げられている単語（ワーズ）の、カタカナ表記によるおおよその読みと意味を以下に挙げておきます。

・【despairディスペア】（絶望）
・【disappointmentディスアパイントメント】（落胆）
・【pessimismペスィミズム】（悲観）
・【lamentレマント】(悲嘆)
・【dismayディズメイ】（狼狽）
・【catastropheカタストロフィ】（悲劇的結末）

第二十一章　祈り（1）

ー

古都田に意識がないのを認めた新渡戸は、それ以上古都田を攻撃しようとはしなかった。横を向いて、棒を持っていない方の手を口に当てて、吐き気に顔をしかめて上体を屈めた。

「おじ様ッ！」

恵美が古都田に駆け寄って跪き、大きく揺さぶる。新渡戸が悲痛な声を絞り出した。

「恵美ちゃん、すまない。親代わりの人を……。でも、こうするしかないんだ」

恵美は、ネガティヴィティー波を受けた胸のむかつきに加え、古都田が倒された怒りに燃えて、今まで見たことのないような表情で新渡戸を振り返る。じっと目を逸らさずに大きく息を吸い、ゆっくりと手のひらを新渡戸の顔に向けた。新渡戸は目を見張って、慌てて自分も息を吸い、雉島の衝撃波をかわしたように、右腕で顔を覆い隠したが、今回はあまりにも至近距離だ。

恵美が雄叫びじみた声を上げる。

「ええーッ！」

新渡戸は恵美が発した衝撃波をまともに喰らい、五メートルほど吹き飛んだ。多少減衰しつつも、同じ波が同心円状に拡がり、もう少し離れたところにいた、万三郎、ユキ、杏児、ちづるにも届いた。恵美の衝撃波は、身体と心が同時に揺さぶられるような感覚だったが、雉島のそれとは違い、吐き気は伴わない。それどころか、万三郎たちが見ていると、雉島の衝撃波で打ちのめされていた【hope】たちが、恵美の衝撃波を浴びた後、少しずつ立ち上がり始めたのだ。

恵美の動きを見ながら、雉島が驚いたようにつぶやく。

「『おじ様』だと？　お前は、ひょっとして……」

恵美は新渡戸が吹き飛んだのを見届けると、古都田の上半身をそっと地面に横たえてから後ろを振り返り、今度は雉島に向かって手のひらを広げる。それを認めて雉島は大きく息を吸い、衝撃波を放射した。同時に恵美も衝撃波を放射、それは、広がりかけた雉島の衝撃波にぶつかると、その表面を覆うように広がって、ゴム膜のように、次第に拡散のスピードを抑え、やがて波を半球状に包み込んだ。それは先程古都田の衝撃波が雉島のそれを包み込んだのと同じパターンだ

。

「恵美ちゃん、すごい……」

　横からその光景を見ていたユキは、感嘆の声を上げる。

「僕、あれ、分かるかもしれない……」

　そうつぶやいたのは、杏児だ。

「え、颯介さんも？」

　杏児の腕の中から身を起こしながら、ちづるが反応した。

「私も、できるのよ。訓練したから。颯介さんも訓練を？」

　杏児はふっと表情を緩めた。

「僕、ここでは三浦杏児って呼ばれてる。僕は、訓練したんじゃなくて、さっき、恵美さんの波を浴びたとき、ニューヨークで仲間を助けた時に感じた感覚と同じだと思った」

　ちづるは頷く。

「あ、分かる。東京を出てここまで来るときに、颯介さ……杏児さんに何があったか恵美さんから聞いたわ。衝撃波というか、念波よね。じゃあ、恵美さんを一緒に助けなくちゃ」

二

その時、恵美は怒りに燃えて雉島の波を抑え込んでいた。一方の雉島は、念波を発して対抗はするものの、関心を隠さず恵美を試問するという、不思議な状況になっていた。

「この念波は、誰に教わった？」

「おじ様よ」

恵美はちらと足元を見た。古都田は相変わらず意識がない。

「恵美……お前、親は？」

恵美は古都田から視線を外し、キッと雉島を見返して、手のひらを雉島の顔に向け直す。

「私の名前を気安く呼ばないで！　見ず知らずの人に親のことを答える筋合いなんかない！」

食ってかかる恵美にひるみもせず、雉島は問いを重ねる。

「恵美、キジシマという名前の響きに覚えはないか」

「……知らない」

「そうか……」

一瞬表情を曇らせた雉島は、目つきを厳しくして、さらに息を吸うと、ネガティヴィティー波の威力をぐっと増した。それによって、恵美の念波によって包まれたエリアが押され気味になり、念波同志がせめぎ合う境界が恵美のすぐ近くまで寄ってきた。恵美は歯を食いしばって押し返そうとするが、雉島のパワーは強かった。

「恵美、俺と一緒に地中に潜ろう」

恵美はこの人は何を言っているのだと言わんばかりに目を見開いて、さらに手のひらを震わせながら境界線を押し戻そうとしている。

「あなたはソウルズでしょう？　私は、あなたと違ってリアル・ワールドに肉体を持っているヒューマンです。おかしなこと言わないで」

「リアル・ワールドは滅びる。肉体はもう意味を持たない」

「黙りなさい！」

　その時、恵美のすぐ後ろで古都田が目覚めた。

「おじ様ッ！」

「恵美ッ、何がどうなってる？」

　恵美の意識が古都田に向いた隙に、さらに境界線が恵美の目の前に迫る。

「く……」

　必死に食い止めながら、古都田に叫ぶ。

「新渡戸部長が、おじ様を後ろから殴った。後ろッ！」

　古都田はハッと顔を後ろに向けた。棒を振りかぶった新渡戸が、夜叉のような顔をして古都田に駆け寄ってくる。

「社長！　身体をどこに隠した！」

　古都田に立ち上がる余裕はなく、そもそもなぜ、腹心である新渡戸が自分に殴り掛かってくるのか理解できないのだろう、新渡戸を見たまま凍りついたように動かなかった。

「おじ様ッ、｜避《よ》けて！」

　雉島の念波を封じ込めるのに精いっぱいの恵美が、振り返ることなく叫ぶ。

「うわっ！」

　しかし、次の瞬間、声を発したのは、新渡戸の方だった。新渡戸は再び五メートルほど、今度は横に吹き飛んだ。吹き飛ばしたのは……。

第二十一章　祈り（3）

三

「出た！　杏児さん、二人の力を合わせたら、念波が強くなってる」

「あ、ああ。だけど……」

杏児は明らかに困惑していた。困惑しながらも立ち上がり、ちづるに手を引かれて、古都田と恵美のもとへ歩いて行った。

「恵美さん、加勢するわ」

ちづるは恵美に並んで雉島に向けて手のひらを広げた。

「むう、邪魔するな！」

雉島はさらに息を吸い、念波のエリアを広げようとした。彼の意志はもはやはっきりしている。恵美を絡め取って地中へ連れ去りたいのだ。

「社長、大丈夫ですか」

古都田は杏児に上体を助け起こされる。雉島の念波が、恵美とちづるが力を合わせることでしっかりと封じ込められているのを確認して、古都田は恵美と背中合わせに立ち上がった。

「しかし……なぜ新渡戸くんが……」

「社長、なぜここへ？」

「雉島が東京を出てこちらへ向かったと知ったからだ。奴にだけは、お前たちの邪魔をさせるわけにはいかん。しかし……」

古都田はしかし、邪魔をさせたくないと言ったその相手に背中を向けて立っていた。その視線の先には、目を血走らせて三たび向かってくる新渡戸の姿がある。

杏児は思わず新渡戸に訊く。

「新渡戸部長、あなたは出雲大社で戦うのではなかったのですか」

　新渡戸はそれに答えない。古都田は杏児よりも大声で呼びかける。

「新渡戸くん、なぜだ。何を血迷っている」

　新渡戸は、杏児が古都田を守るように間に割って入って立つのを認めて、足を止めた。

「古都田さん、あなたがＫＣＪの社長で残念だ」

「なんだと？」

「ＫＣＪは間違っている。いったん解散した方がいい」

「なぜだ」

「何人の人間を人体実験に供してきた？　あなたは人として、そのことに疑念は抱かないのか」

「……」

「私は抱く。ずっと抱いてきた。自然のままなら助からない人間が日本のどこかにいると聞けば、こっそり運んできて無理に蘇生させる。それだけなら美談だが、本人に事実を知らせず、カプセルに閉じ込めて、脳に電気を流して強制的に高速学習させる。それに耐えきれず、検体が精神異常をきたしたら、覚醒させて解放してやるわけでもなく……」

　新渡戸はたまりかねたように脇を向いて口をつぐんだ。

「新渡戸くん、今その話を持ち出す必要は……」

「いいや古都田さん、今だからこそ私は言っている。私はアポフィスの軌道がそれ、人類が助かることを願っている。もちろん、私も助かりたい。だが、人類が助かっても、ＫＣＪプロジェクトはこれまで通り進められるだろう。いや、そこにいる三浦くんたち三人の救国官の働きが評価されて、より大々的しかし秘密裡に、国家が人体実験を進めるかもしれない。古都田社長……」

　新渡戸は一歩、前へ踏み出した。

「私は知っているのです。以前、ＥＴの数が多くなりすぎて、カプセルが足りないことがあった

。ある日、あなたと石川審議官が社長室で話をしていた。その次の日から、言動がおかしかったＥＴたちが、一人、また一人と、研修室に来なくなっていった。社長！　彼らはどこへ行ったのです？　その後、リンガ・ラボのカプセルに空きができていたのはなぜですか！」

四

新渡戸はさらに一歩詰め寄った。

「今、アポフィスの軌道をそらせるために働いている、そこの三浦くんや中浜くんは、高速学習にたまたま耐性があったから良かった。だが半年前に副作用の出た福沢くんの苦しみを、古都田さん、あなたは知っているはずだ。福沢くんの最初の同僚たちは、精神がおかしくなって以降、いつの間にか行方不明になった。『次は自分かもしれない……』と思う福沢くんの恐怖はどれほどのものだっただろうか……。その彼女に、あなたは同僚の監視役、スパイになれと命令した。彼女はそれを断ることができただろうか。できるはずがない。断れば消されるからだ。彼女は、心の傷を負ったまま命令を遂行し続け、最後に、その傷を負った現場、ニューヨークに強制的に派遣された。そこでおそらく福沢くんは、歯を食いしばってトラウマに耐え、ミッションをやり遂げた。だが直後に、三浦くんと中浜くんに正体がばれた。古都田さん、あなたは、川に身を投げた福沢くんの気持ちを理解しているはずだ。さらに！」

古都田が何か言おうとしたが、それを遮るように新渡戸は続けた。

「さらに、決して自ら望んでなどいない高速学習の実験にかけられて、予定通り、敗者の烙印を押されたチーム・スピアリアーズの三人は、覚醒することも許されず、劣等感にさいなまれながら、処分される時をただ待っていた」

古都田がハッとして言った。

「新渡戸くん、君だったのか！　君が彼らを……」

新渡戸は頷く代わりに恵美をちらりと見て、そのまま言葉を継いだ。

「古都田さん、あなたは渡米直前の石川さんから命令を受けていますね、『スピアリアーズの三人のカプセルは、俺が帰国するまでに処分しておけ』と」

杏児が驚愕の声を上げた。

「なんだって！」

驚愕している杏児の後ろで古都田が答える。

「ああその通りだ。だが私にはできなかったし、恵美に命令することも……」

　新渡戸はゆっくりと古都田に目を据え直す。

「そうです。私が知っているあなたは、優しい人だ。頬の銃創の治療を終えてラボに帰ってきたあなたは、スピアリアーズのカプセルが空になっているのにすぐに気付いた。だがそれは、恵美ちゃんが、そんなあなたの心情を慮って、あなたに先回りして秘密処理班を手配したのだと思ったのでしょう？　以前、あなたの作業に立ち会って、彼女は手順を知っているから」

「……」

「でも、恵美ちゃんだって、そんなことはしたくない。だから何者かが――恵美ちゃんはそれが私だと分かっていたと思うが――生かして彼らを覚醒させ、逃がしたのだと悟った時、ホッとしたはずだ。彼女自身もきっと、私と同じことをするつもりだったからだ。そうだね、恵美ちゃん」

　それまで古都田同様、驚きを隠せなかった恵美だが、そうだと答える代わりに逆に問い返した。

「急に覚醒させて、暴れたのでは」

　新渡戸はわずかに笑って吐き捨てた。

「手足を固定したまま覚醒させた。落ち着くまで一時間程度、祖父谷くんは絶叫していた。また女性たちは狂暴になるようなことはなかった。どうだ、貴重なデータになるかね？」

　恵美は目を伏せて脇を向いた。

「古都田さん、恵美ちゃんはあなたと一緒に病院に付き添っていただけです。処理班を要請してはいない。あなた方の留守中に私は一人ラボに戻って、彼らを覚醒させた。そして彼らにＫＣＪの真実を伝えた」

　古都田が訊き返す。

「ＫＣＪの真実……」

新渡戸は古都田をまっすぐ見返す。

「ことだまワールドのこと、高速学習のこと、彼らの精神障害はその副作用であること、アポフィスのこと、みどり組のニューヨーク行きのこと、そして……」

新渡戸の声に怒気がこもる。

「スピアリアーズは、最初からみどり組の『噛ませ犬』、アンダードッグに過ぎなかったこと。みどり組が覚醒してミッションに動き始めた今、スピアリアーズはその役割を終えたこと。そして秘密保持のため、レシプロした状態のまま処分される運命だったこと」

新渡戸と古都田の間に立つ杏児は、目を見張ったまま、かすかに頭を左右に震わせていた。

「古都田さん、祖父谷くんは、自分の役割を知っていたそうです。ある夜、自分だけ雉島さんから教えらえたらしい。彼は仲間にそのことを伏せたまま、あえて運命に抗おうと修了テストに挑んで、そして運命通り敗退した。死は覚悟していたそうです」

古都田は一度逸らした視線を新渡戸に据え直した。

「覚悟していたのなら、やはりあのまま安楽死させてやった方が良かったのではないのか。事実を伝えた上で生かしておく方が残酷ではないのか」

「あんた、何様なんだ！」

五

新渡戸は激しく怒気を発した。杏児が我に返って身を構える。新渡戸はしばらく怒りに震えたが、大きくつばを飲み込み、幾分冷静な声に戻って言った。

「古都田さん、四葉京子くんが他の二人の監視役だったことは伝えずに伏せておいた。高速学習中のいつの時点からか、彼女は祖父谷くんを支えてきた。覚醒した今、祖父谷くんには今まで以上に彼女の支えが必要だ」

目をさらに見開いた杏児は、何か言いたそうに口をもごもごさせたが、新渡戸はそれに構わず続ける。

「私は、二度とＫＣＪに関わるなと彼らに伝えたが、彼らはしばらく黙った後、こう答えた。自分たちはすでに、リアル・ワールドに身の置き場がない。ましてや数日中に地球が滅びるというのであれば、地球を救うために闘うみどり組の三人を陰から助けたい、と」

新渡戸は一歩、古都田に近づいた。杏児と古都田が一層身構える。新渡戸は一瞬天を仰ぎ、それから古都田をより厳しい目で見つめ直す。

「私は正直、私の思いを伝えた上で、キジシマ派に来ないかと彼らを誘いたかった。喉元までその言葉が来ていた。だが、結局私は言わなかった。もし万が一地球が助かるなら、彼らは覚醒したのだから、ことだまワールドなど忘れて、普通の暮らしを送ることができる。彼らには自分の意志で生きる権利があるのだから。そうは思いませんか、古都田さん」

強く訴える新渡戸の目に負けて、古都田は思わず目を逸らした。新渡戸はそれを確認して続ける。

「そう、本当はあなたは、優しい人なんだ。だからこそ残念です。おそらくあなたの過酷な命令は、石川さんから指示されている。あなたは社長であるが故に、いや、それ以上の何らかの理由で、石川さんの命令に背くことができない」

「……」

答えに窮している古都田に、新渡戸はさらに一歩、近づく。

「だが私はもうたくさんだ。この人体実験プロジェクトは凍結するべきだ。私は石川さんに三度、直訴しました。三度目に言われました。『四度目はない。お前が死んで、プロジェクトは続くぞ』と。古都田さん、あなたはなぜ、あの人の言うことに反論できないのですか！　あの人はいったい何者なのですか」

　古都田はただ苦い顔をしている。杏児もどうしてよいのか分からなくなっている。杏児は、機内で石川に襟首をつかまれたことを思い出していた。

　しばらくして、古都田が低い声でようやく答える。

「新渡戸くん、言ってはならんことが、あるんだ」

「では、あなたにいなくなってもらわなければ、やはりプロジェクトは止められないということですね……」

　新渡戸はさらに一歩、近づいた。もう二、三歩踏み込めば、棒が打ち込めるほどの距離だ。

「古都田さん、それならもっと言いましょうか。そこの恵美ちゃんのことです」

　古都田の顔色がサッと変わった。

「新渡戸部長、黙りなさい！」

「いいえ、黙りません。恵美ちゃんこそ、ＫＣＪプロジェクトの最大の犠牲者じゃないですか！」

「新渡戸くん、止めろ！」

「あっちの雉島さんももう一人、最大の犠牲者だ。古都田さん！　雉島さんは、ＫＣＪがこれまでやってきたことの負の象徴でしょう？　違いますか？　今、彼はどんな気持ちで自分の娘と……」

「新渡戸ーッ！」

　古都田は、杏児を払いのけて新渡戸に突っかかって行った。杏児はバランスを崩してつんのめった。新渡戸は棒を振り上げ、古都田の額に狙いを定める。

「おじ様ーッ！」

　背中でやりとりを聞いていた恵美がたまらず後ろを振り返る。直ちに、ちづると二人がかりで対抗していた雉島のネガティヴィティー波が、均衡を破って襲ってくる。
そんな瞬間に起こった、まさしく一瞬の出来事だった。

六

辺りの空間全体が、ぐにゃりとゆがむ。自分の足で立っていた雉島が吹き飛んだ。彼が放射していた念波のエリアも一瞬で消滅した。打ち破られたばかりの恵美の念波のエネルギーも雲散霧消した。そして、恵美も、ちづるも、杏児も、古都田も、新渡戸も、スローモーションのように吹き飛んだ。

皆が吹き飛ばされた方向と反対側に、万三郎とユキが立っていた。二人は、さっき杏児がちづると一緒に念波放射した時と同じ、並んで片手の手のひらを立てて真っ直ぐ前へ伸ばしたポーズを取ったまま、そのパワーの大きさに自ら慄然としていた。

「これが、杏児が言ってた、ユキを救った時の感覚か……」

「どうしよう万三郎、みんな吹っ飛んじゃったよ……」

二人はステージの上を駆けて、ステージ下のずっと向こう側へ吹き飛ばされた人たちの方へ駆け寄った。周りにいた【hope】たちが巻き添えを喰って倒れ、それを他の【hope】たちが遠巻きに見守っていた。吹き飛ばされた者は皆、何が起こったのかにわかに理解できず、立ち上がろうともしていない。

「杏児、大丈夫か？」

とりあえず上半身を起こしてこちらを向いた杏児に、万三郎は声をかける。

「万三郎、今の、お前か？」

「ユキと力を合わせた。ごめん、こんなにパワーがあるとは……」

杏児はそれを聞いて立ち上がった。

「そうか、やっぱりお前はすごいな。ちづる、大丈夫か？」

ちづるも、恵美も、古都田も起き上がろうとし始めた。とりあえず四人は無事のようだ。

新渡戸は、近くに転倒したまま、慌てて棒を探したが、見つからず、しかたなく手ぶらで立ち

上がる。【hope】たちの輪が広がる。

　【hope】たちの合い間から古都田が厳しい表情で、その新渡戸の挙動を目で追いつつ言った。

「新渡戸くん、分かっているだろう？　ことだまワールドで私を殺すことはできない」

　地方の【hope】たちも、さすがにＫＣＪのトップである古都田社長と新渡戸人事部長の顔と名前は知っていたから、そのただならぬ状況を察して、二人の間にいる【hope】たちは、すっと両側に分かれた。

　新渡戸は古都田をまっすぐ見据えて言う。

「古都田さん、あなたの肉体は東京のどこにあるんです？　リンガ・ラボにはなかった。石川さんもいない」

「東京に身体を置いて伊勢まで来ているのだ。すぐに戻れない状況で、無防備な場所に肉体を放置しておくほど私は愚かではない」

　その時。

「きゃあ！」

　女の叫び声が聞こえ、皆は顔をそちらに向けた。叫んだのはステージ上のユキだった。男の腕が後ろからユキの首元に絡められ、同時に手の自由を奪われていた。そして万三郎も、別の男に後ろから羽交い絞めにされていた。さらにもう一人の男がステージに上がって来る。

「雉島さん、どうなってるんすか！　スピーカー越しにごちゃごちゃ聞こえるけど一向に指示が来ないんで、心配して来てみればこの騒ぎだ。こいつらＥＴのせいですか」

　赤黒い頬に彫られたトレード・マークの「！」が、かがり火に照らし出されている。

　【bad!】だった。

　そして、ユキを【｜sinister《シニスター》】（不吉）が、万三郎を【｜evil《イーヴル》】（邪悪な）が、それぞれ後ろから羽交い絞めにしている。

第二十一章　祈り（**7**）

　七

「内宮からは一向に【hope】どもが打ち上がらなくなった。どうなってんだ、こいつら地球がどうなってもいいのか」

「そうだった、大事なことを……」

　【bad!】がステージをぶらぶら歩きながらそうボヤくのを聞いて、雉島の再度の攻撃に備えて身構えていた恵美はハッと我に返り、三人の救国官に宛てて叫んだ。

「私が聞いてきた政府の最新情報では、アポフィスの衝突予定時刻は、午前五時十四分十秒。私のコンピューター試算では、人類が最大限の【hope】を飛ばせたとして、衝突回避可能なタイムリミットは、午前零時零分、真夜中です。真夜中までにグレート・ボンズが形成されないと、ジ・エンドです」

　意図した三人の救国官の耳には恵美の情報は確かに届いたが、最初に口を開いたのは、三人ではなかった。

「へっ、夜十二時で地球がジ・エンドか。シンデレラよりはるかにスリリングだな」

　恵美の話を聞いていた【bad!】がおどける。そして、自分の腕時計をひけらかすように見せながら「おっ！」と言った。

「俺のロレックスが、ただ今から、午後、十一時、ちょうどを、お知らせします。ピッ、ピッ、ピッ、ポーン！」

「おいッ、放せ！」

　万三郎は叫びながら【evil】による拘束を解こうと力の限り暴れた。ユキも何とか逃れようと身体をよじる。

「ほんとに間に合わなくなる。お願い、放してッ！」

　【bad!】は二人に向かって叫んだ。

「黙れコラァ！」

　インカム・マイクをつけているので、その凄みのきいた声はステージ両脇のスピーカーから辺り全体に鳴り響いた。タイムリミットを聞かされてざわついていた【hope】たちは、シーンと静まり返った。それが心地良かったようで、【bad!】はフッと笑った。その小さな笑い声さえ、マイクが拾ってスピーカーからノイズとなって不気味に流れた。雉島から、ワーズは滅びないと聞かされているのだろう、【bad!】は上機嫌で脅し続ける。【bad!】はユキの前に立つと、いきなりユキの髪をつかんで顔をぐっと上向けた。

「おい、福沢由紀さんよう。ホテルで蹴りを入れられたことも忘れちゃいねえが、以前、焼き鳥屋でも世話になったなあ。あんときゃ、さすがの俺も一目置いたその胸の鴨も、いい具合に焼けて黄色くなってるぜ。七味かけて、喰ってやろうか、え？」

　ユキは恨めしそうに【bad!】を見上げる。

「手を離して。あなたは、ＫＣＪ、クビよ」

　【bad!】の眉毛がピクリと動いて、切れ長の一重瞼が細くなった。ユキは【bad!】のその目の動きから、これからどうなるのかをうかがい知ろうと、自らの目を見開いて身じろぎひとつしなかった。三秒の後、【bad!】はユキの髪をつかんでいた手を離し、またフッと笑った。

「何、俺、クビだって？」

　息を飲んで見守っている【hope】たちに、スピーカーを通じて、そのノイズとセリフが伝わった。と同時に、【bad!】は、近くにあったかがり火の三脚台に、思いっ切り蹴りを入れた。

　バキッ！

「ひっ！」

　ユキは思わずビクリと身体を委縮させる。かがり火は三本脚ごと、ステージから下へ分解しながら飛び、火のついた薪が飛び散る。その辺りにいた【hope】たちが悲鳴を上げながら飛び退いて、大騒ぎになった。

「クビ、上等じゃねえか」

第二十一章　祈り（8）

　八

【bad!】は続いて万三郎の前に立つ。

「おい、中浜、中浜万三郎。俺はクビだってよ。クビになりゃあ、ＥＴも何もあったもんじゃないわなあ。仕事の上下関係がなけりゃ、ことだまワールドじゃあ、俺にひれ伏すしかないわなあ。え？」

　万三郎の目の前に立った【bad!】は、万三郎の鼻をつまんだ。万三郎は顔を横に強く振って言う。

「やめろ！」

　そう言うそばから、【bad!】はまた万三郎の鼻をつまんだ。

「放せって！」

　三度、万三郎の鼻を強くつまみながら、【bad!】が腕時計を見ておどける。

「あっ、十一時、三分、ちょうどを、お知らせしまーっす！」

「頼む【bad!】……時間がないんだ」

　万三郎を羽交い絞めにしている【evil】が笑って万三郎の口真似をした。

「頼む【bad!】……時間がないんだ……ケッ！」

　【bad!】は万三郎に向き直って、【evil】に言った。

「ようし、放してやれ」

　【bad!】の命令に従って、万三郎は解放された。

「そら、隣のシンデレラちゃんをまず助けろ、行け」

【bad!】がにこやかに顎で示す先の、ユキに向かって万三郎は一歩を歩き出すと、【bad!】はすかさず足を出し、それにひっかかって万三郎は勢いよく倒れた。

「ヒーッ、面白え！　馬鹿だねーこいつ」

【evil】は手を打ってあざ笑った。万三郎は膝をついて立ち上がる。その時に、ユキに目配せした。ユキは首元を抑えられているが、目で心得たと返事する。立ち上がって一歩歩いたところへ、また【bad!】が足を出した。というよりほとんど万三郎の足を蹴っているに等しい。万三郎はつんのめって倒れる。【evil】が手を打って笑う。万三郎は立ち上がる瞬間、手のひらをグッと【sinister】へ向け、「ふん！」と言った。とたんに【sinister】は一メートルほど跳ね飛ばされる。その衝撃でユキはその腕からようやく逃れた。と同時に、万三郎に駆け寄り、二人して揃って手のひらを【bad!】に向けた。

「むん！」

【bad!】は数メートル、ステージの向こうの端まで飛ばされ、そこにあった別のがり火の脚に激突し、かがり火を破壊して転がった。だが【bad!】は、その場にあった、火が燃え移った三本脚の棒の一本を手に取ると、すぐに起き上がって、すごい勢いで二人の元へ向かってきた。

「おのれ、殺す！」

凄まじい形相で【bad!】は、先に火のついた棒を振りかぶる。万三郎とユキは、恐怖に目を見張りながらも、再び手のひらを【bad!】に向ける。

その時、鋭い大声が響いた。

「やめろ、それまでだ！」

雉島の声だった。その声で【bad!】は、振りかぶった棒を渾身の力で振り下ろす直前で、ギリギリで耐えた。止めた代わりに声が出た。

「うおおお！」

第二十一章　祈り（**9**）

　九

「お前ら、もう、いい」

　雉島は【bad!】たちにそう言いながら、気合いを入れて再び自力で立ち上がる。

「雉島さん、やらせろよ！」

　火のついた棒を振りかぶったまま、手持無沙汰になって不満を口にした【bad!】を、雉島は睨みつける。

「お前らは破壊することしか能がない。【bad!】、その頬に彫ってあるのは、『頭が悪い』という意味のbadなのか？　もう少し賢くなれ」

　並み居る【hope】たちの前で侮辱され、【bad!】は雉島に怒鳴り返した。

「なんだと、もう一度言ってみろ」

　雉島は一、二度足を踏み鳴らし、車椅子なしでも、気力で歩けることを確認すると、顔を上げて【bad!】に言った。

「古都田に代わり、俺がこの世界を治める時が間もなくやって来る。【bad!】、そんな今、俺に歯向かうことが賢いことなのかよく考えろ。少しは新渡戸を見習え。今のお前の馬鹿さ加減じゃあ、お前が殴ろうとしているそこの若造たち以下だ。頭の悪い奴ほど、安易に暴力に頼ろうとする。そんなことじゃ、新しい時代のＥＴにはなれんぞ」

　そこまで言われて、【bad!】は見事に何も言い返せない。パチパチと燃える棒をだらりとぶら下げ、わなわなと震えたまま、ステージの上に立ち尽くしていた。

　雉島が振り返ると、恵美が警戒して構えている。雉島は恵美の顔にしばらく見入って、それから静かに口を開いた。

「今日まで、辛く、つまらん人生だったろう。それでもまだ生きたいか。俺と一緒に、来ないか」

　恵美は質問の意味がよく分からず、表情を緩めないまま、かすかに首を横に振った。

「とにかく……とにかく私たちの邪魔をしないで」

　雉島は目を伏せて少しだけ笑った。

「そうか、分かった。じゃあ生きろ」

　それから視線をその向こうにいる古都田に据えた。

「古都田、お前の部下たちの働きで、もし滅亡を免れたとしても、このことだまワールドが残っている限り、俺は必ず奪回しにくる。お前との闘いはその時までお預けだ。もしその時が来ればの話だがな。おい、新渡戸、【bad!】、行くぞ」

　雉島は、身を翻すと、自分の足でスタスタと歩いてステージの方に戻って行く。【bad!】がステージ上から訊いた。

「ど、どこへ」

「地中に潜って、こいつらがどこまでやれるか、高みの見物……じゃない、低みの見物といこう」

「【-less】たちは？」

「放っておけ」

「手下どもがいるんですが」

「地下に潜るよう伝えろ」

　新渡戸は、古都田と恵美の横をすり抜け、雉島について行く。古都田は、その新渡戸の背中に向かって声をかけた。

「新渡戸くん、今なら私は君を許す。戻ってきなさい」

　途端に新渡戸は険しい顔をして振り向いたので、恵美が身構えた。

「古都田さん、そう言われて戻る程度の覚悟であなたを殴ったとお思いか。アポフィスが地球に衝突してほしいとは私は思ってはいないが、もし何もかも滅びるのなら、それは致し方ない。だが、もし衝突を免れて、あなたが社長として、ことだまカンパニーが存続するなら、あなたや石川さんによる人体実験を、私は命を賭して阻止する。たとえ雉島さんに味方してでも、ことだま裏ワールドに沈むことになっても。次に会うときには、どちらかが消える時だ」

　新渡戸はそう言い残すと、古都田に背中を向け、雉島の後を追ってステージに上がって来た。

「新渡戸さん……」

　新渡戸は万三郎とユキを交互に見ながら口を開いた。表情だけ見ればいつもの優しい部長の笑顔で、万三郎は胸が締め付けられる思いがした。

「私は君たちが実験台になるのを阻止できなかった。すまない。だが、君たちを最後の検体としたい。ここは、私も含めて、生身の人間が来る世界ではない」

　そう言い残すと新渡戸は、歩みを再開し、雉島より先にバックステージの方へ歩いて行く。【bad!】に蹴散らされなかったかがり火の光が届かなくなる辺りで、新渡戸の姿はスーッと闇に消えていった。

　雉島は、新渡戸を追っていた万三郎とユキの視線が戻って来ると、低い声で二人に言った。

「地球を、守って見せてみろ」

　雉島は【bad!】たちを引き連れて、新渡戸の後を追い、悠々とステージ後方の闇に同化していった。後は倒されなかったかがり火の松明が時々バチンとはぜるのみだ。

　十

　空気が変わった。

　息を飲んで成り行きを見守っていた【hope】たちが一斉に安堵のため息をつき、ざわめき始める。先ほどの恵美の言葉を間近で聴いていた一人の【hope】が叫んだ。

「時間がない！　十二時までにぃー、グレート・ボンズ！」

　途端に波が伝わって行くように、その言葉の繰り返しが始まる。源を同じくするワーズであるため、意思の伝播が恐ろしく早い。たちまち、大合唱となった。

「十二時までに、グレート・ボンズ！　十二時までに、グレート・ボンズ！」

　ステージ上から万三郎とユキは一面の合唱隊を見回した。

「素晴らしく楽観的な人たちだ。こちらまで勇気付けられる」

　万三郎をユキが急かす。

「万三郎、急ご」

「ああ」

　そこへ、杏児とちづるがステージに駆け上がってきた。

「万三郎！　ユキ！　再開しよう」

「二人で作業するのか」

「ああ。こっちのカタパルトを使うよ」

　その時、ステージに古都田と恵美が上ってきた。

「社長……」

　ユキは、古都田が精神的にも肉体的にもかなりの疲労に襲われているのをひと目で悟った。新渡戸に殴られた後頭部から流血しているのを、恵美のハンカチで押さえたのだろう、白いハンカチが赤黒く染まっている。しかし、おそらくそれ以上に、新渡戸の反抗にショックを受けているのだろう。目を赤く充血させていた。

　古都田の手を引く恵美の目がユキと合った。

「ユキさん、私、社長と一緒に東京へ帰ります」

「恵美さん、今ここでレシプロから覚醒したら、東京で目覚めるのでは」

　ユキの問いに恵美が微かに首を振る。

「離れすぎてるから無理なの。ヒューマンが、ことだまワールドの中で長距離移動するには、少しの時間と膨大なエネルギーが必要よ。かなりの念波を放射したから、古都田社長の残りのエネルギーを考えたら、今帰らないと手遅れになる。それに、新渡戸さんが先に東京に帰って、社長のカプセルを見つけ出したら大変なことになる」

　万三郎が口を挟んだ。

「社長の肉体はリンガ・ラボになくても、恵美さんやちづるちゃんの身体はリンガ・ラボにあるんですよね」

　恵美は頷く。

「それを新渡戸さんに操作されたら、私やちづるさんは、リアル・ワールドに帰れなくなる……」

「分かりました。急いで東京にお帰り下さい」

　古都田が言う。

「中浜……」

　万三郎は古都田を見つめた。

「私を、恨んでいるか」

「……」

　万三郎は言葉に窮した。が、やっとの思いで答える。

「恨むべきことなのか、そうでないのか、地球を救った後で、じっくり考えます」

「福沢くんは」

　ユキはしばらく下唇を噛んで、ようやく答えた。

「恨みは……あります。ただ、それが古都田社長へのものなのか、他の誰かに対して抱くべきものなのかは、地球を救った後で、じっくり考えます」

「……そうか」

「社長、そろそろ……」

　恵美が促す。

「うむ。私は……」

　万三郎とユキ、そして離れたところでちづると一緒に【hope】を打ち上げようとしていた杏児が、古都田の方を見た。

「私は、後悔はしておらん。君たち救国官がニューヨークに行かなければ、そして今ここにいなければ、もう、人類に為す術はなかったはずだ」

　そう言いながら、古都田は自分で自分のしてきたこと、自分の立場を反芻しているようだった。その証拠に、次第に自信を回復しつつあり、口調に力がこもってきた。
「そうだ。救国官たち！　やはり最後には、君たちが日本を、そして世界を救うのだ。頼むぞ」

　古都田の熱のこもった訴えに、万三郎とユキは頷いた。

「ベストを、尽くします」

「私も」

　杏児も口を開いた。

「社長、恵美さん、必ずまた、お会いしましょう」

「うむ」

　ちづるに、カプセルは責任を持って守るからと伝えた後、恵美は、ほとんど泣きそうな顔で杏児に笑顔を向けた。

「さようなら。またね」

　恵美は、着物の袖でそっと目を押さえてから、気を取り直して、古都田の背中をそっと押す。そうして、古都田と恵美は、ことだまワールドの夜の闇に消えていった。

十一

一台目カタパルト、万三郎。

二台目カタパルト、ユキ。

三台目カタパルト、杏児。

【hope】たちの誘導、案内役、ちづる。

ようやく妨げなしに【hope】の打ち上げが再開された。

「次！」

打ち上げ後の機械のメンテナンスを目視で行いながら万三郎が叫ぶと、次の【hope】がちづるに指示されて登場する。

「よろしくお願いします！」

万三郎は【hope】と握手をする。握った手がもはや痛むようになってしまっている。【hope】と目を合わせる。心の中で、ありがとうと声をかける。目に見えない何かが、握った手を通じて、また目線を通じて、ワーズに流れ込んでいく。例外なく【hope】は、こちらを見て微笑んだ。

「救国官、光栄です」

頷いて握手を解く。背中をポンと押してやる。

「はい、そこへ乗って！」

体重を乗せ、スプリングの効いたハンドルを力任せに手前に引く。これが一番つらい。移動式カタパルトなのだ。ガソリンや電気で動くものではなかった。二メートルほどハンドルを引く動作は、一回だけなら、おそらく腕立て伏せを一回やるよりも楽かもしれない。だが、数えてはいないが、もう五百は超えているに違いない。「ううーおっ！」時には声が漏れる。引っ張るだけ引っ張ると、ついにバチンとラッチがかかる。打ち上げの力が溜めこまれた状態だ。

「準備完了！」

　【hope】も、傾斜のあるレールにまっすぐ沿わせた身体を硬くさせ、発射の衝撃に備える。ポンと叩かれた背中が白く光っている。ああ、【hope】が光を放つのは、感動のエネルギーを使っているんだなと、万三郎はふと思う。【hope】オリジナルがさっき言っていたように、彼らにしてみれば、俺はある意味、雲の上の人、カリスマなのかもしれない。東京のＫＣＪ本社の奥深くにいる、｜Executive　Trainee《エグゼキュティヴ・トレイニー》。ＥＴなんて話に聞く以外、地方のーワーズにとってみれば、出会えるなんて思ってもみなかった存在。それが今眼の前で自分だけに声をかけて、握手し、背中を押してくれるのだ。それは、受け手である彼ら自身が、【hope】という、何でも素直にプラスにとって感動できる本質を持つからかもしれない。

「行くよ」

「はいッ！」

「発射ッ！」

　手元のパネルのボタンを押す。

　カシャッ！

　【hope】は一瞬にして上空へ射出されていく。ことだまワールドでは、ワーズの体重自体はこんなに軽いのだ。それは少々頼りなくすら思える。

ーーこれでアポフィスの軌道は、変わるのか……？

【hope】たちは上空で、【-less】や、【no】や、【despair】など、たくさんのネガティヴ・ワーズとやはり遭遇した。しかし先ほどとは違ってエネルギーを分けてくれる者がいないので、彼らは独力で自力飛翔を行っており、その飛翔力は、カタパルトで発射される【hope】たちよりはるかに劣っていた。【hope】たちは、たやすく彼らネガティヴたちの追撃をかわし、背中を明るく光らせながら、次々に宇宙へと飛んで行った。

　【hope】という名のワーズたちは、その名に違わず、どんな時でも明るく楽観的でいてくれた。磁気嵐の中、エネルギーを失いながら旅してきても、ネガティヴィティー波で吹き飛ばされても、生産性をあげられないまま刻一刻と時間が経過しても、ネガティヴ・ワーズたちと衝突して消滅するリスクがあっても。彼らは自分たちがアポフィスまで飛んで行って、いくばくかの残存エネルギーを預けて来ることで、人類が、ひいてはコトバが、ことだまワールドが、必ず救わ

れるのだということを一点の疑いも持たず信じているのだ。

　十二

「……郎……んざぶろう……万三郎ッ！」

　はっと気がついた。

　万三郎は膝をついて、カタパルトの側面をなぞって崩れるようにステージに倒れ込んでいた。いつまで待っても発射されない【hope】が、おずおずと発射パネルの方を覗き込んで発見したのだ。

「中浜救国官が、倒れている！」

　その【hope】の叫びを耳にして手を止めた隣のカタパルトのユキが、ステージに横たわる万三郎の姿を認めて駆け寄ってきたところだった。

「あ……あれ？　どうなってるの」

　座りこんだユキに頭を抱えられ、万三郎は大声で呼びかけられていた。ユキの表情は尋常ではない。

「万三郎！」

　上気した顔と、万三郎が肩で息をしていることに気がついたユキは、万三郎の額に手を当てて驚いた。

「万三郎、大丈夫か」

　杏児も作業をちづるに任せて駆け寄ってきた。

「杏ちゃん、万三郎、すごい熱……」

　杏児も万三郎の熱を確かめて言った。

「万三郎、ちょっと休んでろよ」

　万三郎は意識が戻りきれない中、口を開けて速く息をしながら、じっとユキや杏児を見ていたが、「休んでいろよ」と言われた、その言葉通りの意味をようやく理解すると、ばっと上半身を起こした。

「続ける！　急ごう」

　万三郎は勢いよく立ち上がって、そして貧血でフラッと倒れかかった。杏児がその身体を受け止める。

「万三郎、あとは僕らに任せろ」

　万三郎はかっと目を見開いた。

「いやっ、やれる。やらなくちゃ！」

「無理よ、そんな状態じゃ……」

　万三郎は杏児にジェスチャーで大丈夫だと示して、自分のカタパルトのハンドルに手をかけた。というより、体重を預けてもたれようとしていた。緊張が走ったからか、万三郎は大きく息をするようになっている。

「俺が休んだら、発射能力が、三分の二に、なってしまう。時間が、ない」

「だからと言って、その身体じゃ……」

　ハンドルでは支えられない万三郎の上体を支えようとユキが寄り添うが、万三郎はその手を払いのけた。

「いいって！　ユキも自分の持ち場へ戻れ。時間が……」

　杏児が言う。

「万三郎、日本に帰国する前からすでに熱があったろう？　ヘリの中でも、車の中でもしんどそうだった。このままだと、こじらせて、死ぬぞ」

　万三郎が笑う。

「それより先に、アポフィスにやられて、死ぬぞ」

「……」

　万三郎は、ハンドルに上体をもたれかからせて、杏児に向き直った。肩で息をしているが、表情は柔らかい。

「ユキ、続けて」

　杏児にそう言われて、ユキは心をそこに残しつつも、自分のカタパルトの操作を再開した。その向こうではちづるが杏児のカタパルトを使って作業している。

「なあ、杏児ーー」

　杏児は黙って万三郎を見る。

「新渡戸部長はああ言ったけどさ、俺、検体番号ＪＥＳ一〇二九、中浜万三郎になって、良かったと思ってるんだ」

「……」

「俺、どこまでも自分が可愛い臆病者だったんだ。自分が主人公、自分がいなくなったら終わりだと思ってたから。だから救国官なんて任命されて、あまりに滑稽で自分を笑うしかなかった」

　万三郎はユキをチラリと見て少し声をひそめる。

「往きの飛行機で思った。ユキを守りたいって。初めてだった。誰かのために命を懸けてもいいと思えたのは」

　杏児もユキに目をやって、こちらは声をひそめずに答える。

「万三郎、それは、川に飛び込んだユキを追ったお前を見れば分かったよ」

　ユキが驚いた。今初めてそれを聞いたのだった。誰からも聞かされてなかったからだ。

「えっ！　万三郎、そうなの？」

　万三郎はそれに直接答えず、杏児に視線を戻した。

「ユキのおかげで、国連演説で本当の気持ちをぶつけることができた。そうしたら、自分より大切なものを命をかけて守っている人たちが見えてきた」

「……」

「お国に帰らず国連のために尽くす覚悟をしたグプタ典儀長、最後の飛行機に乗らなかった日本政府役人の人たち、今も日本のために必死で指揮を執っている大泉総理、自衛隊の人たち、伊勢神宮の衛士たち……」

「ああ、そうだな」

「杏児、お前だって、そもそも、クレバスに落ちたちづるさんを命がけで救おうとして遭難したんだよな」

「そりゃ、必死だった」

「杏児。俺、ＫＣＪに来なかったら、身勝手な生き方のまま、社会人やってたと思う。死んだ親父に生前、お前は兄と違って自分だけが可愛いのだなと言われたことがあって、その心の傷から目を逸らして生きてきたから」

「……」

「だからさ、今、自分より大切なもののために命を捨てられる立場にいられて、嬉しい。日本だぜ。世界だぜ。命投げ出して守るのに光栄すぎる対象だ」

「……」

　万三郎は、少し気合いを入れて、もたれていたハンドルから身体を起こした。

「国連のスピーチでも紹介したが、坂本竜馬が言ったそうだ。『いったん志を抱けば、弱気を発してはいけない。たとえその目的が成就できなくても、その目的への道中で目的に向かって倒れて死ぬべきだ』。俺はそうありたい。救国官だから……」

　一瞬目を閉じた万三郎は、カッと目を空けると、ハンドルに取りつくようにしてつかまり、体重をかけて手前へ引いて行く。

「よし【hope】、行くぞ！」

　それを見て杏児はユキに目で合図した。ユキはそれでも何か言いたそうだったが、杏児が手で制した。そして杏児自身も、持ち場に戻る。

「よしッ、ちづる、撃ち手、代わるよ」

十三

リアル・ワールドの人工衛星から見下ろせば、超大型台風の厚い雲に覆われた夜の日本列島では、今、一点の光さえも見つけられないだろう。だがもし人工衛星に、ことだまワールドを見通せる特殊なカメラがついていたならば、磁気嵐吹き荒れる中にあって、小さく点在する「希望」の集結地が認められるかもしれない。それらは東京であり、出雲であり、いくつかのことだまゆかりの地だろう。だが、それらをはるかに凌駕する、大きな「希望のかたまり」が、ここ、ことだま伊勢神宮において燦然と輝きを放っているのが見えるはずだ。

そのかたまりから、光が、細い絹糸のようになって宇宙へと伸びていく……。ひとつひとつの糸は消え入りそうに細い。だが、その繊維に寄り添うように、ひとつ、ふたつ、みっつと、別の繊維が軌を一にする。まだ拙くも、光の束の先端は、漆黒の宇宙空間の上下を分かつようにするすると進んだ。

希望が、飛んで行く。

光を放ちながら。

人々の願いを背負って。

万三郎はそれから、かなりの【hope】を送り出した。もちろん、ユキも杏児もそれぞれの持ち場で懸命に働いた。そうした中、恵美が言った刻限、午前零時がいよいよ近づいている。

現場はかなり混乱していた。時間が迫っているのに、送り出されずに待機している【hope】の数が多すぎるからだ。だがその状況は、なるべくしてなっていることだった。

三台のカタパルトをフル稼働させても、一時間に送り出せる【hope】の数は、せいぜい千。それに対して、ことだま伊勢神宮に集まって来ているワーズの数は、おそらく数百万。しかもその数は今、ぞくぞくと増えている。だがそんなことは、三人も最初から分かっていた。

正直なところ、【hope】一体が保持していることだまエネルギーの量など、ごくわずかだ。そんな彼らは、磁気嵐に抗って各地から伊勢まで出て来るだけでも結構なエネルギーを消費している。その上で、超長距離、それこそ大気圏外の遥か彼方、アポフィスまで飛翔してたどり着く頃には、そのエネルギーをほとんど使い果たしていると思われる。もしかすると、アポフィスにエネルギーを投下する前に、相当数が力尽きてしまっているかも知れなかった。

そして、そうした無駄死にを防ぐことができるかも知れないのが、ことだまの聖地、伊勢神宮だ。ここは、彼らにとって文字通りのスーパー・パワースポットで、磁気嵐に抗って各地からここまでたどり着くのに要したエネルギーを補って、さらに、アポフィスまでの飛行に耐えるエネルギーを「充電」できる場所なのだった。少しでも長い時間、ここにいることによって、彼らはフル充電されると万三郎たち三人は考えたのだ。

また、アポフィスは毎秒十五キロメートルの早さで地球に近づいて来ている。できるだけ地球の近くまで引き付けた方が、【hope】たちの飛行距離が短くて済む。飛んでいく【hope】の数から期待できるパワーとの兼ね合いで、午前零時ギリギリに、残る全【hope】を飛ばした方が、アポフィスにぶつけるエネルギーの総量が最大になるという算段で三人は行動していた。

三人はもともと、カタパルトの存在を期待しておらず、打ち上げ設備がない以上、ワーズたちの自力飛翔に頼るしかないと思っていた。ところが、祖父谷が思いがけず手配してくれていたカタパルトのおかげで、自分たち自身のエネルギー消耗が相当緩和されているのだ。それで、自分たちが予想していたよりかなり長い間、【hope】たちを送り出してやることができている。

実際のところ三人は、カタパルトで【hope】を飛ばしてみて、その効果に感動していた。それで、可能な限りカタパルトで高エネルギーの【hope】を送り出し、時間が迫ってきたら、やむを得ず残りの【hope】たちに自力飛翔してアポフィスに向かってもらおうと打ち合わせていた。

そして、そろそろその時間だ。

これまでカタパルトで飛ばし続けてきた【hope】たちが、高エネルギーでアポフィスに突入して、わずかばかりでも軌道を逸らし得ていると信じたいが、実際のところどうなのか、よく分からない。自力飛翔なら、グレート・ボンズが形成されるほどの数の【hope】が全世界で集まるのでなければ、アポフィスの軌道を変えるなど依然として難しいように思われた。

それでもそれぞれのカタパルトから、五秒に一体の【hope】をただひたすらに送り出し続ける三人。集中していたユキがふと隣の万三郎を見て目を見張る。

「万三郎ッ！」

ユキが再び手を止めて、万三郎のところへ駆け寄る。自分に触れてくるユキの手が、やけにふわふわしていると万三郎は最初思ったが、すぐに気づいた。

――ふわふわした触感になっているのは自分の方なんだ。もう俺は、気力だけでもっているんだ

。

　まるで、ろうそくの残りがわずかとなって、炎の熱で液体になっている蝋の中に、灯芯が今にもパタリと倒れこんで、フッと終焉の煙を立ち昇らせそうな、そんな状態になっているのだと自覚する。

「杏ちゃん！　万三郎が半透明になってる！」

　杏児は今カタパルトに乗せた【hope】を飛ばすためにハンドルを引きながら叫んだ。

「よし、僕もそろそろ限界だし、タイムリミットが来そうだ。残る【hope】たちには自力で飛んでもらおう」

「万三郎はッ？」

「ユキ、こっちは僕とちづるに任せてくれ。ユキは、覚醒して万三郎の介抱を頼む！」

「分かった！」

十四

ユキの意識がリアル・ワールドに戻ると、冷たい雨粒が文字通り顔に突き刺さるようにぶつかってきていた。ユキはまず痛みに顔をしかめる。

――何てこと……。

信じられない。レシプロを始めた時とは比較にならないほどの暴風が、ゴーッと音を立てて雨粒をほぼ横向きに運んでいた。いわば建物の中庭にあたる、しかも屋根付きのこの奉納舞台にさえ、今や雨が容赦なく吹き込んできている。

三人は、衛士から支給してもらった、頭からかぶるタイプのポンチョ型の雨具を着用してレシプロに臨んだ。そのおかげで身体の外側から濡れることはなかったが、顔からしたたる滴が首回りから服や下着を濡らしていったようで、ユキの身体も体温を奪われつつあり、気がつくと身体の芯からの震えに襲われた。思わず雨具の下で両腕を抱く。

闇に眼が慣れてきた。

「万三郎ッ！」

ユキは万三郎がレシプロしたまま能舞台に仰向けに倒れているのを発見し、絶叫した。

万三郎の向こうでは、杏児がこの風の中、辛うじて座禅を組んだ状態で座り続けている。その体勢だったため、杏児の身体はユキと同様、雨具によって雨から護られていた。

万三郎の身体は倒れていたため、雨具が風でめくり上げられ、ズボンから上着まで雨に晒され、ビショビショに濡れている。

「万三郎！」

ユキは万三郎の元へ膝行して、顔を抱き上げ、両頬を両手で挟んでみた。

「冷たい……」

今も刻一刻と体温が奪われているのだ。もちろん意識はなく、震えていない。非常に危険な状

態だというのはユキにもすぐ分かった。

　その時、正面のガラス掃き出し窓が勢いよく割れて、人間二人分ほどもある折れた木の大枝が、横倒しの状態で能舞台の目の前まで飛び込んできた。入口のガラス戸と、休憩室から中庭へ出るガラス戸の二つをぶち破って、枝は回転しながら着地し、そのまま風に押されて、舞台へ上がる階段にひっかかって止まった。同時に凄まじい突風が吹き、割れたガラスの破片が凶器のようにユキたちを襲う。

「キャア！」

　ユキは風に押されて後ろに転倒しながら、銃弾のようなガラスの破片で頬を切った。

　ガラス戸が割れて風の通り道ができたことで、暴風がこれまで以上にまともに吹き付け、雨も斜め上ではなく、真正面から飛んでくるようになった。

――とにかく、雨の来ないところに移して、温めなきゃ……。

　ユキは力任せに万三郎を引っ張る。風下に移動しようとしていることで、うまい具合に万三郎の身体はついてきてくれた。

「うーん。はあ、はあ……」

　ユキ自身も先ほどまでずっと、ことだまワールドで働いてエネルギーを消耗したので、相当な疲労を覚えている。雨風と疲労で、フッと意識が遠のきそうになる中、ユキは懸命に万三郎を引っ張って、まずは能舞台の一番奥まで移動させた。次に杏児を同じところまで引き下げてきた。杏児の身体にはまだ体温が感じられる。

　ユキは、再び万三郎を引っ張り、「橋掛かり」に引き込んだ。舞台と舞台袖をつなぐこの渡り廊下には、パネルガラスサッシが引かれていて、今は辛うじて雨風は吹きこんで来ていない。

――応援を……。

　ユキは上着のポケットからスマホを取り出し、画面を見て、受信感度アイコンに×マークがしっかり表示されているのを認め、電波障害だったことを思い出した。念のため発信を試みたが、やはりだめだった。

「ああ……」

　天を仰ぐユキ。

――なら、どうする？　どうするの？　あ、温めなくちゃ……。

「万三郎！　待ってて」

　半ばパニック状態になりながら、懐中電灯を手に部屋の奥へと進んだ。必死に室内を探し回る。

「ない……ない……。ここも……ここも！」

　懐中電灯を片手に、物入れの扉を片っ端から開けていく。肩で荒く息をしながら、ユキはさらに建物の奥へと進んで行く。

「あー、どこかにあって。お願い……」

　いくつそれらしき扉を開いただろう。

「あっ、あったあ！」

　ユキはついにタオルの束と毛布を見つけた。

十五

普段、参拝者の休憩所として使われている建物だけに、急病人の介抱や寒がりのお年寄りに貸し出すためのものだろうか、畳まれて何枚も入っていたのがありがたかった。

ユキは毛布とタオルを抱えられるだけ抱えて、万三郎と杏児の元へ急いで戻る。

途中どこかでまた、「パリン！」とガラス窓の割れる音がしてユキは思わず振り返る。懐中電灯で壁にかかった時計を照らしてみた。まもなく二十四時、気象予報の通り、いよいよ台風の中心付近が伊勢に差し掛かっているのかもしれない。今回のスーパー台風は、瞬間最大風速が百メートル、中心付近の平均風速は七十五メートルと昼間、気象庁が発表していた。もちろん過去に例がない破壊的な強さだ。

風は絶えずゴーッと地響きのような音で参集殿を包んでいる。市街地からは川を挟んで相当に離れているこの参集殿の周りでは、バラバラに壊れた木造家屋や自動車などはまず飛んで来ないと思っていたが、実際、人の胴体より太い枝が飛び込んできたのをユキはさっき目の当たりにしている。町では家が吹き飛ばされたり、橋が流されたり、色々な惨事が起こっていることだろう。

――御正殿は無事だろうか。

年老いた衛士に厳しく制止されたが、あの時、仮に約束を破って正宮までなんとか辿り着けたとしても、最初考えていたような、屋外で座禅を組んでレシプロするなどというのは、今考えれば正気の沙汰ではなかった。今頃は、低体温症か、飛来物に打たれるか、彼方に吹き飛ばされるか、大木の下敷きになるかして、三人とも間違いなく死んでいただろう。

自分自身も寒さに震えながら、ユキはバスタオルで万三郎の頭と顔を拭いてやり、雨具とスーツの上着を脱がせ、シャツの第三ボタンまで開けて、はだけた胸に新しい乾いたタオルを当ててやった。

次に、今頃、ことだまワールドで必死に働いているだろう杏児の頭をしっかり拭いてやり、雨具の下の服がほとんど濡れていないことを確かめた。座禅したままの杏児の両肩に手を置くと、ユキは杏児の閉じた目を見つめてつぶやいた。

「杏ちゃん、そっち、頼むわよ」

手早く自分の雨具とスーツの上着を脱いで髪と顔と首筋を拭い、ブラウスの水気をタオルに吸わせる。寒い。急いで毛布を身体に巻く。そして、室内の参拝者用の長椅子に毛布を二枚がさねで敷いておいて、橋掛かりに横たわる万三郎の身体の前に戻ってしゃがんだ。ワイシャツとズボン姿の万三郎の、腰の辺りと膝の辺りに下から腕を入れて、ユキは力の限り踏ん張って万三郎を持ち上げる。

「んーッ！」

そして、よろめきながらも数メートル先の即席ベッドまで万三郎を運び、そっと横たわらせた。

「ハア、ハア……」

激しい疲労感で手を後ろについて喘ぎながら、ユキはわずかに安堵の表情を浮かべる。

――これでたぶん、安全。雨風とガラスは、きっとここまでは飛んでこないわ。

息が少し整うとユキは再び万三郎の頬に触れる。

――だめだ、冷たい。

胸に置いたタオルをのけて見ると、かすかに胸が上下している。呼吸はしている。ユキは意を決して万三郎のワイシャツとアンダーシャツ、靴下とズボンを脱がせにかかった。

――だめだよ、死んじゃ……。

新しいタオルで身体を拭い、毛布を二重、三重に掛けた。熱が逃げないように、毛布を身体の下まで巻き込んだ。

――万三郎、万三郎……。

まだ冷たい頬をさすってやると、意識のない万三郎の目尻が上下にゆがむ。両耳を両手で包んで体温を移していく。

一生懸命やっていると、なぜだか涙が出て来た。ユキの冷えた頬を、雨の滴とは違う温かさが筋を引いて伝わっていく。鼻を啜って、しゃくりあげた。ユキは誰も見ていないのをいいことに

、一回だけ、エーンと小さい呻きを発して子供のように泣いた。

……ぽたっ。

瞼を閉じて絞り出された涙が、今度は万三郎の頬に直接落ちたのにユキは気づかなかった。

十六

その時、掃き出し窓越しに、中庭に自転車が降って来るのが見えた。大枝の時とは違い、平屋建ての前方部分の屋根を越えて吹き飛ばされてきたのだ。映画ではない、実際の光景ではおおよそ考えられないことが起こっている。

自転車は能舞台に斜めに飛び込んできて、大枝の頭をかすめ、さっき三人が瞑想していた辺りを直撃したのち、さらに奥まで舞台を滑って、松が描かれた一番奥の壁にぶち当たって大破した。車輪が横の橋掛かりを力なく転がって、座禅を組んだままの杏児の体側に当たって倒れた。

ユキはその一部始終を茫然と見ていたが、我に返って、「杏ちゃん！」と立ち上がり、杏児の元へ駆け寄った。よろよろと車輪が当たった程度だったので、杏児は無傷だったが、ユキはまたパニック状態になった。

――ここは安心できない。万三郎のところまで杏ちゃんを動かそう。

決心したユキは、杏児の雨具とスーツのジャケットを脱がせ、残る体力を振り絞って杏児の足を解き、両腕で抱きかかえた。

「んーッ！」

歯を食いしばって、杏児をようやく万三郎の隣の長椅子に安置した。万三郎の頭と杏児の頭が向き合うように寝かせる。杏児を抱き上げながら体温を感じ取っていたので、ユキは安心したが、念のため杏児の身体にも毛布を掛けた。

――あ、しまった。懐中電灯、あそこに忘れてきた。

だがユキの体力はもはや限界だった。後ろの列の長椅子を背もたれ代わりに使い、二人の頭が向き合う手前の床にへなへなと座り込んだ。すぐには動けない。

バリーン！

参集殿の、別のガラスが割れた。闇の向こうだ。

バリーン！

もう一枚……。

ガッシャーン！

次は、割れた窓から吹き込んだ暴風で、室内の棚か何かが倒れた音だろう。ひときわ大きな空気の通り道が室内にできたようで、暗闇の向こうからビュウと風が吹き始める。わずかに雨粒も混じっている。

ユキは呼吸のため口を半分開けて、音がした闇の方を茫然と見つめていた。

――もう……だめかもしれない。

うつろな目を万三郎に移し、そのままその胸を見つめる。

「……」

三重に毛布で包んでいるので、よく分からなかった。ユキはもう一度目を凝らして万三郎の、今度は口元を数秒間、見つめた。

「……！」

がばっと身を起こすと万三郎の口元に耳を当ててみる。

――呼吸が、ない……。

「うそ……でしょ」

ユキは目を見開いた。身体を少し傾け、毛布の端をめくって胸に耳を当ててみた。心臓は、動いている。

「今、死にかけてる……の？」

ユキは誰にともなくつぶやいた。

バリーン！

今度はすぐ近くで窓が割れる。その割れた音と、ユキの叫び声が同時に響いた。

「イヤアアア！」

……ぽたっ、ぽたっ。

万三郎の両頬を両手で挟んで、涙が彼の眼窩に落ちるのも構わず、ユキは目を見開いたまま、無我夢中で万三郎の名を呼んだ。

闇の中、近くに脱ぎ捨ててあったユキの上着の内ポケットから光が漏れていたが、万三郎を見つめているユキの目には入らない。着信音は、部屋を通う風の轟音にかき消されてユキの耳には入らなかった。

　十七

　ひたすら、ひたすら、ひたすら……。

　同じことの繰り返しを延々としているものだから、万三郎はもはや自分がカタパルトの自動発射装置に組み込まれたプログラムのように感じていた。プログラムには意識もないし、疲労もない。そう思っていたはずなのに、今、千何百番目かの【hope】を発射して、次の発射のためにハンドルを引こうと一歩踏み出したところで、膝がカクンと折れた。

「あれ？」

　立ち上がろうとした。

――なんだ、立ち上がれるじゃないか。

　万三郎はホッと息を吐くとハンドルを引きにかかる。ハンドルを引ききって、カチリと留め金に掛ける。いいか、いくぞ、発射！　と言って発射ボタンを押した。

「あれ？」

　なのに、カタパルトは【hope】を発射しない。二度、三度とボタンを押してみる。それから掛けがねを確認してみた。異常は見当たらない。

　万三郎は隣のカタパルトに目をやった。そこには杏児がいた。杏児は杏児で、必死で【hope】を発射している。

「あれ？　ユキは？」

　万三郎は首を伸ばして杏児のカタパルトのさらに向こうを見る。そこでは、ちづるがカタパルトを操作している。万三郎は杏児に視線を戻して訴える。

「おい、杏児。俺のカタパルト、壊れたようだ」

　そう言ってしばらく黙っていたが、あまりに忙しいのか、杏児は返事はおろか、こちらを向きもしない。

「おい、杏児。ユキは？」

　反応がなかった。

「杏児！」

「三浦救国官！」

　万三郎が少し大きな声で杏児を呼ぶのと、万三郎のカタパルトで発射されるのを待っている【hope】が杏児を呼ぶのとが同時になった。

　杏児が手を止めて振り向く。万三郎が口を開こうとすると、【hope】が先に文句を言った。

「あのー、待ってんですけど……中浜救国官、どうなってるんすかね」

　杏児の顔色が変わった。

「やばい、消えかかってる……」

　杏児は万三郎のもとに駆け寄って跪いた。

「万三郎！　おい聞こえるか。お前、本当に消えかかってる。すごく薄くなってる！　ダメだ、もう動くな。いいか、今、ユキがリアル・ワールドへお前を助けに戻っている。あいつがお前をちゃんと介抱しているはずだ。だから死ぬな。いいか、死ぬなよ」

――何だって？　俺は今、死にかけてるのか？

　その時、万三郎のカタパルトの【hope】と、杏児のカタパルトの【hope】が同時に同じセリフを叫んだ。

「三浦救国官！　時間が！」

　万三郎に語りかけていた杏児は、頭をかきむしりながら言う。万三郎の肩に手をかけるつもりなのだろうが、杏児の手は｜空《くう》をつかんだ。

「万三郎、絶対に死ぬな！」

　杏児は立ち上がり、万三郎のカタパルトのハンドルを引いて、「発射！」と言ってスイッチを押した。

　万三郎は言葉を失った。

――俺、ハンドル引けてなかったのか……。

　杏児は、自分のカタパルトに戻り、乗っていた【hope】を発射し、自分の作業を再開した。

　万三郎は思わず自分の掌を閉じたり開いたりしてみた。

――もう、このことだま世界で発揮できるエネルギーを、俺は使い果たしたというのか……。

　十八

「颯介さん、あと三分で日付けが変わる！」

　ちづるが杏児に叫んだ。

「ああー！　みんな！　済まん、自力で飛んでくれ！」

　集音マイクを通して杏児が並み居る【hope】たちに叫ぶ。ステージの両脇に積まれたスピーカーから大音響でその指示がはるか彼方にまで伝わった。

　【hope】たち、特にステージから遠い連中は、その指示が来るであろうことを分かっていた。なので皆ストレッチしたり、ぴょんぴょんとその場で跳ねてみせたりして和気藹々の雰囲気だった。

　それはとりもなおさず【hope】たちの本質が「希望」だからだ。実際のところ、一人一人の【hope】が、カタパルトや杏児たちリアル・ワールドに存在するヒューマンのエネルギーを借りずに飛び立って、地球の重力圏から飛び出すことすら危ういということを杏児は知っている。特に力のある者がようやく重力を振り切ってアポフィスに向かったとしても、軌道修正のために投下できるエネルギーは微々たるものだろう。これだけ【hope】を飛ばしてきていながら、杏児の心中は絶望的だった。

――世界は……【hope】を飛ばせているだろうか……。

「あと二分！」

　ちづるが叫ぶ。

　杏児は我に返る。

「みんな、今だ！　飛ぶんだ！」

　群衆の地平にまで指示が伝わっていった。　ざわめきが大きくなる。地鳴りのように「おおおお」と、声がうねりになる。

【hope】たちは、両手を水平にまっすぐ伸ばし、その腕を徐々に垂直に立てていく。頭の上まで腕を伸ばした先で、両手のひらを合わせる。その形のままで腕と膝を若干曲げて、それから勢いをつけてクンと伸ばす。すると、身体がゆっくり浮き上がる。顔を上空に向け、歯を食いしばって、「うん！」と力むと、すうーっと上昇し始める。

タンポポの綿毛が風に揺られて飛ぶように、そこここで【hope】が一斉に飛び立って行く。

上空から見ればそれは壮観な光景だろう。だが、杏児の目から見れば、【hope】たちの背中のＬＥＤライトが頼りなさげに点いたり消えたりするのが、エネルギー放射が安定していないようで、いかにも危なっかしいのだった。

実際、あまりに飛翔力の弱い【hope】は、【-less】などネガティヴ・ワーズの赤い光につかまり、暗いピンクの光を残して生暖かい闇にからめ取られていくのだった。しかしそれでもなお、相当な数の【hope】が邪魔を振り切って上昇していった。

十九

万三郎の意識はもうステージの上にはなかった。リアル・ワールドにもない。それは万三郎自身の意思を反映していた。万三郎は思ったのだ。

――もう、いいや。

やれるだけのことはやった。自分が生きるだけのエネルギーしかもう残っていなくて、その生命エネルギーもどんどん減りつつある。

もちろん、心当たりはあった。ユキを追ってイースト・リバーに飛び込んで以来、機内で着替えるまでずぶ濡れのままで過ごした、あれがいけなかったのだろう。だが、ではどうすれば良かったというのか？　事態は一刻を争った。着替えている暇なんか、どう考えてもなかった。

三人が飛行機に間に合っていなければ、ことだまワールドの日本で、これだけの数の【hope】の発射に見合うエネルギーを持った人はほかに存在していなかったはずだ。当然、このようなグレート・ボンズ作戦は、日本では遂行できなかっただろう。だから今の自分は、必然的なりゆきの結果なのだ。

万三郎はこうも思った。

そもそも救国官を拝命したその時から、日本という国なくして自分は存在し得ない立場なのだ。よし、それなら最後の生命エネルギーを使って、できるだけたくさんの【hope】たちを宇宙に送り出そう。自分が存在するエネルギーを最後まで使い果たして、きれいさっぱり消滅すればいい。文字通り、殉職というのかな。運が悪ければ数時間後にアポフィスが衝突して死ぬだけ。運が良ければ日本は、世界は助かる。

そうした万三郎自身の意思で、万三郎のエネルギーはその辺りの上空に、霧のかたまりのように、広く、薄く拡散していた。そこを通りかかる【hope】たちが万三郎のエネルギーを利用して充分に加速し、宇宙に飛んで行けるように。

杏児とちづるは、自力飛翔を指示してからもなお、その辺りにいる【hope】たちを次々にカタパルトに誘導し、発射している。ちづるが叫んだ。

「あと、一分！」

「あああああああーッ、くそーッ！」

　杏児は阿修羅のように目を血走らせながら、残る【hope】たちを次々に撃ち出していく。万三郎のエネルギー体を通り抜けて行く【hope】たちは、エネルギーを得て、「うおおおお！」と言いながら背中のＬＥＤを目一杯光らせ、グンと加速してロケットのように飛んで行った。

　心の目で、その【hope】たちの雄姿を見上げ、また、最後まで懸命に【hope】を撃ち出す杏児を見下ろし、万三郎はゆっくり、意識を失っていった。

二十

｜霞《かすみ》のような、おぼろげな幸せに包まれて、海渡（かいと）はそこにいた。

線路と川を隔てる土手に植えられた桜の蕾はまだ固そうだが、二月末とはとても思えないこの陽気が続くようなら、一気に膨らんできそうな気がする。この季節らしくない、ぬるい風が時折り川面を渡ってくる。風向きの関係か、駅に着いた列車の扉が開くたびに、アナウンスの声がよく聞こえてくる。

「市ヶ谷ァー、市ヶ谷です」

子供のころの傷のせいで斜めに三ミリの不毛地帯を残した、大輔兄の右の眉毛が下がる。

「しかし、お前のあの英語力でよう単位、取れたなあ」

海渡は久しぶりに見る兄のその眉毛を懐かしく思った。

「まだ今は、卒業見込みという状態だけどね。とにかく必死だったよ。英語だけ落として卒業できないなんてことになったら、ずっと学費援助してくれてた兄ちゃんに顔向けできないじゃん」

「海渡、お前すっかり東京弁になっちゅうが……」

それを聞くと海渡は、はにかみながら視線を手元の練り餌に移した。親指と人差し指、中指で小さくこねて、針を隠すように刺す。

「そりゃあ、土佐清水出て、もう丸四年になるき」

大輔もにやりと笑いながら、自分の｜浮子《うき》に目を移す。

「無理に高知弁、使いゆう」

「ははは……」

笑いながら海渡は竿を立てて、餌のついた釣り糸をふわりと目の前の止水に落とした。しばらくして細い棒浮子が立つ。波紋が収まると、深緑の水面に、白く東京の空が映り込んで揺れて

いる。

　思い返せば、今日までの自分の境遇がとても不思議な気がしていた。この大輔兄の援助なくしては、東京の大学になんか絶対に来られなかったし、東京の会社に内定をもらうなんて、考えられなかった。

「兄ちゃん」

「うん？」

「中学の時にさ、『高知市からガイジンの先生が初めて英語の出張授業に来る』って俺が父さんに言ったら、父さんが『うちのサバ、その先生にあげて来い』って、朝獲れた清水サバ一本、俺に持たせた話、覚えてる？」

　大輔兄は顔を上げてこっちを見てまた眉尻を下げた。

「おお、覚えちゅう、覚えちゅう！　面白かったな」

「授業の最初に、氷水から出して尻尾を持って差し出したんだ。硬直して棒みたいなサバを。ジェームズ先生、のけぞって驚いてた」

「そりゃあ無理もないろ」

「そのとき、先生が言ったんだ。『ホーリー・マッカラル！』って。みんな『はあ？』って顔で見てたら、先生が言った。『ナンテ・コッタイ！』って。中学の時覚えた英語って、それくらいだったよ」

「へえ、そんなお前が立派に大学卒業を、なあ……」

　浮子に目を戻す大輔兄の眉尻は下がったままだ。海渡は、魚にアピールするため、竿を少しだけ持ち上げて水中の餌を躍らせ、再びなじませる。次の電車が出発前にフォーンと汽笛を鳴らした。

「兄ちゃん」

「あん？」

「本当はさ、兄ちゃんが東京に来たかったんじゃないの？」

　大輔兄は笑う。

「やき、この休みに実家に帰らんと、久しぶりに海渡に会いに、今こうして来ちゅうがやん」

「いや、観光とか俺に会いに来るとかじゃなくて、プロの料理人として、高知みたいな地方都市じゃなくて東京で修行したかったんじゃないかって意味。あっ、しまった」

　浮子が沈んだのを一瞬合わせ遅れた。海渡は素針を引いた。それを見て大輔兄が言う。

「こんな釣り堀で鯉釣って楽しいか」

　海渡は「何、言ってる」と即座に反論した。

「さっき兄ちゃんが唸ってた、スカイツリーからの眺め。世界屈指の大都会だよ、東京は。釣り人にとっては、この灰色の街の、ここはオアシスだ」

　大輔はふんと目をそらした。

「海渡、お前来週帰省して母さんに卒業見込みと就職内定の報告したら、船で沖磯へ出てヒラスでも釣りいや。鯉とは、引きが違うき」

　海渡は思わず噴き出した。

「当たり前だ」

　餌をつけ直す海渡に、大輔兄はぼそりと言う。

「父さんはおらんし、母さんは東京には馴染めんろ。俺は長男やき、なんかあったらすぐ駆けつけられるところの方が、俺が安心よ。それに……」

　餌を練る指を止めて海渡は兄の目を見る。見る間に兄の眉尻がまた下がった。

「自分のことより、お前のためになるんが、これがなかなか嬉しいがやって」

「ふうん……」

「あ、プレッシャーに感じられんで。お前は好きなように生きればええんよ」

　桟橋の向かいの釣り人はカップルだ。二月だというのに物好きな……と最初は思ったが、釣り好きの彼の頼みか、季節外れの陽気が二人を誘い出したか、女性の方もさっきから楽しそうにしている。

　その女性が魚を掛けた。控えめに「きゃあ」と言う。隣の男性が、女性が握っている竿の根元に手を添えて竿を引き起こしてやった。やがて水面が揺れ、小ぶりな鯉が別世界に顔を出した。寄せてきた鯉を、男性が手元のタモ網で掬ってやって、女性に「やったじゃん」と声をかける。それを見届けて海渡は自分の餌を投入した。

「俺、兄ちゃんみたいに、人のために行動したこと、ない」

　大輔兄はおどけたように答えた。

「そりゃ、お前はまだ学生やったがやき。これから、これからよ。世のため人のために、誰もできらん、でかい仕事やりいや」

　今度は海渡がおどける。

「兄ちゃん、父親みたいだ」

　そういう海渡に、兄は一瞬だけ沈黙した。

「……父さんと爺ちゃんが時化で死んだの、ジェームズ先生サバ事件の後、間もなくやったな」

「うん」

「父さんが生きちょったら、俺と同じこと、お前に言うやろう。でかい仕事やりいや、って。おい、海渡、来ちゅうで！」

　大輔はハッとして竿を立てた。竿を通して手ごたえが伝わってくる。

――世のため人のために、でかい仕事……ちっちぇえ！

　小さい鯉がかかったので、海渡はタモを使わずに抜き上げた。視界の隅で大輔兄が笑っている

。

「お、でかい仕事しゆうやん」

「来週帰ったら、｜晴太《せいた》に頼んでヒラス釣りの船、出してもらう。うわっ！」

　馬鹿にされた小鯉が怒ったか、糸をつまんでのぞき込んでいた海渡の顔の前で尻尾をぶんぶんと振って、水滴を飛ばした。

……ぽたっ。

二十一

滴が落ちて、万三郎の意識が呼び戻される。

記憶を辿りながら時間を遡って、ついには生まれる前に至り、母なる宇宙意識に回帰、融合するものと思われた万三郎の意識。その回想の旅は最初の段階で早々に終わりを告げたようだ。

「……？」

何だろうと万三郎が思った途端、ことだまワールドに生暖かい突風が吹いた。いや、もしかするとそれは風ではなかったかもしれない。だが、突風という言い方でしか、その現象を言い表すことができない。そんな不思議な感覚が万三郎を襲った。それは自分だけではないようで、見下ろすと杏児とちづるも怪訝な表情であたりを見回している。斜め横の夜空から、年配の男の声が聞こえた。

「ここまでよくやった。救国官たち……」

その辺りのすべてのものが、総毛立った。恐怖でではない。励起状態になったと言うべきだろうか。経験したことのない、とてつもない何かがすぐそこに来ているのが、万三郎に感じられた。まだ飛んでいない【hope】たちが全員、一気に宙に浮いた。全ての【hope】だ。と、突然、虚空のどこからか、凄まじい数のワーズたちが現れて、次から次へと【hope】に合体し始めた。合体と言っても、【hope】の身体の中に飛び込んでは消えていくように見える。【hope】ではない、他のワーズたちだ。色々な、本当に色々な連中だ。万三郎は彼ら彼女らを見知っていた。一年間の研修期間中、何度もシートレに乗せた連中だ。

「おお……」

万三郎は驚嘆した。

【have】、【so】、【the】、【very】、【sorry】……。【Ben】なんてのもいた。

彼らは素晴らしい速度で次から次へ、無数の【hope】たちに飛びこんでいき、姿を消す。そのかわり、飛び込まれた【hope】たちの背中のＬＥＤライトは最高に輝きを増していった。

このような全ての現象が、一気呵成に起こっていった。おそらく、数秒間で起こったのだ。

　次に、秩序全体が揺れるように万三郎には感じられた。ぐわり、と地上と上空がひとからげに動く感じだ。

　すると、若く澄んだ女性の声が聞こえた。

「あとは私たちに任せなさい」

――あッ、あなた方は……！

　万三郎は心の目で、その声の主――年配の男性と若い女性――の姿を見ていた。

「中浜万三郎くん、君はまだ若い。私の｜生命《いのち》を君にやろう」

　驚きで言葉を失っている万三郎に、男性の顔が近づき、万三郎のエネルギー体を通過していく感覚があった。

「志乃、行こうか」

「はい」

　そうした言葉が聞こえたかと思うと、もはや巨大なことだまエネルギーのかたまりと化した【hope】たちが、まるで掬い上げられるように、素晴らしい速さで一斉に上空へ飛んで行った。

　そこから先は、万三郎自身の心の目で見たのかどうかすら定かでない。おそらく、何かもっと広い意識の中で感じ取った光景だろう。地球から何万キロも離れた彼方――おそらくアポフィスとは別の方向の宇宙空間――そこに万三郎は、いた。

　そして今、万三郎は「目撃」している。

　地球の、いろいろな場所から、スローモーションのように光の束が伸びあがってきて、重なり合い、捩じれ合いながら、一つの方向へ向けて次第に結束していく光景を。そして、一際強く、太い光の線が、地球の陰になっている半球から飛び出して、他の光の線を巻き込み、従えながら、宇宙の一点に向かって伸びて行くところを。

　世界は一つになって、希望を発信していた。

「グ……グレート・ボンズだ……」

　万三郎は、何とも言えない、崇高で優美で、完全なる至福の光景を味わっていた。その恍惚感の中で、ふんわりとした意識帯の中に、ほとんど包み込まれいった。しかし……。
……ぽたっ。ぽたっ。

　一粒、二粒……。混沌に埋もれてゆく恍惚感とはまるで違って、その滴にはリアリティーがあった。膨張し、宇宙に溶けていきかけていた万三郎の意識は、ことだまワールドにおけるリアリティーに向けて、急速に収れんしていった。

　杏児が放心状態で空を見上げている。ワーズたちと共に何が飛んで行ったのかまるで分かっていないのだろう。そして、万三郎の意識が、杏児が見上げるその空から見下ろしているのに、杏児は気付いてはいまい。杏児の隣りでは、ちづるが気を失って倒れている。そして、弥生時代の集落を中心とした平原のどこにも、もはや一人の【hope】もいなかった。

――あんなにひしめいていた【hope】たちが……。

　寂寥感すら感じる万三郎と、茫然自失の杏児の耳に、同時に懐かしい音が聞こえてきた。

♪山寺の、和尚さんは、毬は蹴りたし毬はなし――

◆◆◆

エピローグ（1）

―

何を言っているのか分からないが、ひそひそ話が交わされている。二、三人の男たちの低い声……。それがごくゆっくりと、意味のありそうな音の連続として意識の城壁の外から呼びかけている。だが、まだその会話の文脈を分析するだけの理性は戻っていない。ただ、聞いている。

「二人とも、息がある……」

「あの……｜白衣《びゃくえ》と袴で良ければ、着替え持ってきましょうか」

「恐れ入ります。お言葉に甘えます」

「こちらの女性へは……」

「智哉くん、司庁舎から巫女装束を」

「あ、神谷さん、分かりました」

それからしばらく静かになった。頬に緩く風が当たる感触がある。

「起こしますか」

「あ、ちょっと待ってください」

すると、急にリアルな布の感触が頬と口元から脳に伝わってきて、思わず顔をしかめる。同時に闇がさっと白くなったので、目を閉じたまま、さらにギュッと目の周りの筋肉に力を入れた。

後ろの方でわずかに弾んだ声がする。

「あ、陽が差してきましたね」

聞き覚えのある男がすぐ間近でつぶやいた。

「余計目立つなあ。しょうがないなあ……」

　布で口元を強めに拭われる。それが不快でまぶしさに怯えつつ、うっすら目を開けていく。

「お。万三郎、気が付いたか」

　一文字に細く目を開けて、光量を絞りながら正面に認めたのは、逆光でまだ表情がよく分からないものの、声からして杏児に違いなかった。万三郎は、何枚かの毛布にくるまれて長椅子の上に横向きに寝かされていることを自覚した。

「どう？　体調は」

　まだ意識がクリアにならないので、そのままの視線を保つ。杏児が額に手を置いた。徐々に目が光に慣れてくる。

「うむ、平熱。万三郎、ユキに感謝しろよ」

――ユキ……。あ……。

　ユキの顔が心に浮かんだ。それと同時に、フラッシュバックのように、それまでの記憶が一気によみがえってきた。

「お、目に光が戻って来たな」

　杏児が嬉しそうに言いながら、視線を万三郎の腹の方に移している。

「杏児……ユキは？」

　万三郎がつぶやくように聞くと、一瞬視線を戻した杏児が、「ここだ」と改めて視線で腹の辺りを示した。ああ、そう言われれば、腹の辺りに少し重さを感じる。だが、万三郎は頭をもたげて自分の腹を見る力もまだなかった。

「生きてる？」

「ああ、呼吸はある。でもかわいそうに、服もびしょ濡れだ」

　杏児はそう言うと、ユキの身体を揺り動かしているようだ。

「おいユキ、大丈夫か」

　万三郎は、その振動が伝わってくる自分の脇腹辺りに手を伸ばしてみた。毛布越しにユキの手が感じられる。さらに手を伸ばすと、万三郎が横たわっている長椅子の中ほど、万三郎の腹のあたりに、ユキの頭の感触があった。ユキは床にぺたりと座って、万三郎の長椅子に上体を預けて力尽きたようだ。

　万三郎は意を決して上体を起こした。身体中の筋肉が傷み、思わず顔をゆがめる。両肘を後ろに突いて頭を起こしてみると、ユキが濡れた髪を振り乱してそこに突っ伏していた。

「ユキ」

　万三郎が呼びかけ、杏児が肩をつかんでそっと揺らすと、ユキがうーんと言って動いた。

「おお、気がついたようで良かった」

　神谷が皺の多い目尻を下げ、しみじみと喜びを口にした。

　そこへ、司庁舎から着替えを持って衛士が戻って来る。

二

若い衛士は気が利いていて、三人の足袋や草履まで揃えて持って来てくれていたので、烏帽子や髪飾りこそないものの、しばらくの後、三人は神職の装束をまとって神妙な面持ちで参集殿の椅子に並んで腰かけていた。

濡れた衣服から解放され、万三郎は着替えを手伝ってくれた若い衛士に礼を言った。ユキも、年配の女性職員に手伝ってもらい、別室で着替えた後、濡れてばらけていた髪をきれいに梳かれ、巫女のように束ねられて、うっすら紅まで差してもらったので、やつれた印象が幾分ましになっていた。それでもまだ、杏児ほど元気にはなれず、口数が極端に少ない。

「杏ちゃん、ちづるちゃんは？」

杏児がユキの方に顔を向けて答える。

「夜中にことだま東京に帰った。アポフィスがそれたら、リアル・ワールドで必ず会おうって」

「そう」

杏児の声が若干弾んでいるのを感じ、ユキは微笑んだ。

その時、向こうから神谷と、他に四人の職員が万三郎たちに近寄ってきた。さっきから会っていたのに今になって初めて気付いた。彼らはこのような未曽有の状況にあっても、衛士の制服あるいは神職の装束をきちんと身にまとっている。神谷老衛士を先頭に、五人が、万三郎たちが座っている長椅子の前に進んできた。万三郎たちは何事かと目を見張る。すると五人は万三郎たちに正対して気を付けをして、

「救国官の皆さん、ありがとうございます！」

と言って深々と敬礼したのだ。

「い、いや、ちょっと、待ってください……」

身体は丸太のようだったが、それでも万三郎もユキも杏児も、その場で慌てて起立した。五人はまだ頭を下げている。三人は本当に困惑した。

「こちらこそ、祈りの場所を貸していただいて……。でも、まだ、本当に危険が去ったかどうか……」

　万三郎の言葉に答えて、頭を下げた衛士たちの向こうから声が聞こえた。

「危険は去った。地球は救われたよ」

　三人ともその声にハッとする。

「石川さん！」

　石川は一人でコツコツと歩み寄ってきた。

「アポフィスは、地球をかすめて通り過ぎて行ったよ。台風の被害は大きいが、今は日本海に抜けた。電波障害は……」

　石川はスーツの内ポケットからスマホを取り出してリダイヤルボタンを押した。すると、ユキのスマホから山寺和尚さんの着信音が鳴り始めた。

「まだ政府専用回線だけかもしれんが、回復したようだ」

「石川さん、夜中に私にかけましたか」

「お、あのとき着信していたのか？　なぜ出ない」

　石川の問いにユキは皮肉っぽく笑う。

「気を失っていくところでした」

「そうか。真夜中頃、一時的に電波表示が立っているのを発見してかけてみたのだ。それ以降はまたずっと通じなかった。だが専門家の話だと、電磁波も少しずつ正常値に落ち着いてくるだろうということだ」

　ユキが前のめりになって訊く。

「ワーズたちは、ワーズたちはどうなりましたか」

　石川は、衛士たちの後ろからユキを目で制した。ことだまワールドの情報について、昨日大泉総理が公表した以上のことは秘密だということらしい。

「ち、ちづるッ！」

　杏児が叫んだ。

「颯介さ……杏児さん」

　後ろから石川の横をすり抜けて杏児に駆け寄ったのは、まさしく杏児の恋人、小村ちづるだ。杏児はちづるの両手を握った。

「やっぱり、リアルさが全然違う！」

　そう言いながら両手をさすり続ける杏児を、同僚や衛士たちが見ているのに気恥ずかしさを覚え、ちづるはそっと手を引く。杏児はちづるの無事を喜びながら訊いた。

「どうしてここに？」

　ちづるはちょっと後ろを振り返った。

「石川さんに東京から連れて来ていただいたんです」

「どうやって」

　神谷の目配せで衛士たちがその場から立ち退いて、そこへ石川が一歩近づきながら言った。羽田に向かう飛行機の中で杏児の襟首をつかんだ石川とは違って、目に、ほんの微かに笑みを浮かべている。

「国家権力を甘く見るな。これくらいの風なら、ここまで充分ヘリを飛ばせる」

　隣りで聞いていた万三郎が小さくつぶやく。

「なんてこったい、国家権力……」

　石川はチラリと万三郎を見てから杏児に視線を戻した。

「古都田社長がお前と藤堂の活躍を褒めていたから、その褒美に会わせてやることにした」

「藤堂……？」

　ちづるが杏児に答える。

「私のことです」

三

ひと足先に参集殿の外に出ていた神谷たち衛士の誘いで、万三郎たちは外へ出てみた。吹き返しの風は生暖かく、まだ時折り強く吹いたが、雨は完全に止んで、雲間から日が差し込んでいる。ユキの束ねた髪が揺れ、万三郎の袴は風を孕んだ。

杏児とちづるも、その横で並んで立っている。彼らの視線の先には、五十鈴川の対岸にある木立ちがあった。五十鈴川の川面は木々に隠されて見えない。対岸の並木でも、折れた立木の、白く生々しい裂け目が散見されたが、目測三十メートルはあろうかという国旗掲揚塔が、昨夜の暴風をしのいで泰然と立っているのが目に留まる。そして、その先端には、日本国の国旗が力強くはためいていた。神谷も救国官たちに並んで日の丸を見ている。そして静かに口を開いた。

「この通り、あなた方救国官の祈りのおかげで、日本は壊滅を免れました。しかし……」

神谷はいったんそこで言葉を切る。そして、万三郎を振り返って訊くのだった。

「政府のお墨付きであるあなた方の、国を救う祈りとは、いったいどのようなものだったのですか」

円熟した老紳士の目の奥に残っていた好奇心が光を発するのが見えた。万三郎は当惑して口ごもりながら視線をぐるぐる巡らせる。すると石川が、神谷には答えず、全然違うことを中浜に言った。

「ああそうだ中浜、お前、航空自衛隊小牧基地の井関さんから車を借りたのか」

神谷に続き、思いがけない話が石川から出て、万三郎はちょっと混乱する。

「え？　あ、は……はい。ピックアップトラックをお借りしました」

「そうか。さっきまで、伊関さんの部下たちのヘリがあそこに着陸していた」

そう言って石川は、対岸の木立の向こうにある駐車場のあたりを指さす。

「神宮周辺の被害状況の調査に来たということだ。ピックアップトラックを見つけて、お前たちの働きを理解したようだ。調査報告のためヘリは、隊員二人だけ残してすぐ帰っていった。その

二人はトラックを運転して陸路を帰って行ったよ」

　そこで石川は万三郎の方に向き直って、折り畳まれた紙片を差し出した。

「お前たちへ、伊関さんから直筆のメモを預かっている」

　差し出されるままに万三郎はその紙片を受け取り、開いた。ユキと杏児も寄ってきて紙片を覗き込んだ。

「昨夜、私は皆と一緒に希望を祈り、今朝、人類は救われました。最後の瞬間まで希望を失わないこと――娘の心は、きっとあの時、救われていたのだと信じます。あなた方が無事であると希望を持って祈っています。台風被害からの復旧作業が落ち着いたら、またお会いしましょう。
伊関」

　一歩離れた後方から紙片を覗き込もうとする神谷に、石川は言葉をかける。だがそれは先ほどの問いに答えるものではなかった。

「それはそうと衛士さん。ヘリで上空から見たら、五十鈴川の水位は相当高いものの、どうやら決壊は免れたようですね。街の浸水は軽微に見えました。御正殿以下ご社殿は無事だったのですか」

　石川は神谷の関心を逸らすことに明らかに成功した。神谷は石川の方に向き直り、それから参道を見やった。

「若い職員たちがチェーンソーとロープを持って様子を見に行っています。あ、あれがその一人です。井出くん！」

　速足で参道をこちらに向かってきた、作業着姿の男性を神谷は呼び止めた。

「御正殿は？」

　息を弾ませつつ男性は答える。

「無事でした。奇跡です」

「その目で見たのか」

「倒木を乗り越え、切り開いて、この目で見てきました」

「おお！　ありがたい」

　神谷の目がみるみる潤んでゆく。それを照れくさく感じて隠そうとしたのか、神谷は、井出と呼んでいたその男性を抱擁してその背中をポンポンと叩いた。

「良かった良かった……ありがとう」

「神谷さん、僕はこれから大宮司様への報告と参道回復の応援を頼みにいったん司庁舎へ戻ります。神谷さんは、どうされますか」

「ああ、一緒に行こう。大宮司様にお祝い申し上げたい」

　神谷は一行を振り返る。

「よろしいですかな」

　石川が頷いた。

　若い衛士たちも引き連れ、いそいそと司庁舎に向かう神谷の後ろ姿を見届け、石川は部下たちに言った。

「さあ、東京に帰るぞ」

「は？」

　は？　と言った杏児を石川はギロリと見た。

「総理から直接指示を受けて迎えに来た。お前たちの口で結果報告しなければならない。ヘリを駐車場に待たせてある」

　そう言い捨てると石川はスタスタと歩き始める。

「石川さん、ちょっと待ってください！」

　万三郎の呼びかけに石川が振り返る。

「何だ」

「御正殿に参拝してからじゃ、ダメですか」

　石川は、身体ごと万三郎に向き直り、その白衣と袴の全身の姿をまじまじと見た。そして隣のユキの巫女姿も。

　数秒の沈黙があったが、やがて石川は口を開いた。

「藤堂！」

　ちづるは驚いてばね仕掛けのように背筋を伸ばす。

「はいッ！」

「司庁舎へ行って、巫女服をひと揃え借りて来い。お前のサイズでな」

「は……はい、分かりました」

　心得てちづるは駆け出した。石川の横をすり抜けた時、石川にさらに呼び止められた。

「藤堂！」

「はいッ！」

「男性用もひと揃え追加だ。サイズはＬだ」

　万三郎とユキは目を丸くして顔を見合わせた。そしてククッと声に出さずに笑った。

　弱々しくも口角の上がったユキの頬に、小さくて白いものが貼り付いている。万三郎が気付いてユキの頬からその淡い色の小片をつまみあげてみると、それは花びらだった。風上を見て、初めて気付いた。倒壊を免れたソメイヨシノの小ぶりな木は、昨日の今頃はおそらく満開の花をつけていたのだろう。夜来の台風にあれほどさらされながら、ほんの僅かに、花が咲き残っている。今さら吹き散らされたこのひとひらは不運だったが、風はこれから次第に弱まっていくだろう。万三郎はユキに花びらを見せてやりながら言った。

「リアル・ワールドでのお花見は来年にお預けになったね」

四

ゴールデンウイーク直前のある日、古都田社長の主催で、ＫＣＪ事業部合同の社内祝賀会がリアル・ワールド東京某所の居酒屋「百人座敷」で開かれた。もちろん、世界が滅びなかったことのお祝いだ。

皆が掘りごたつの席につくと、座敷がいっぱいになった。リアル・ワールドでの祝賀会だからワーズやソウルズはいない。ここにいるのはＥＴも含め、皆ヒューマン社員ということになる。見回してみると、万三郎たち三人の長テーブルの上座には、甲斐和月先生や戸井久美子先生、片井文吾郎先生がかたまって席についていたし、身の上は知らなかったが、ことだまワールドで見かけたことのある顔ぶれも座敷のそこここに座っている。万三郎は隣に座っているユキにそっと訊いた。

「ＫＣＪって、こんなにたくさんのヒューマン社員がいるんだ。ユキ、知ってたの？」

ユキはかぶりを振る。

「私も初めて知ったわ」

すると、テーブルの向かい側に座っている杏児が二人にそっと答えた。

「あそこに明穂……あ、ちづるが座ってるだろ？　彼女とその回りは中国語事業部だって。で、明穂の隣の人に聞いたんだけど、他は、フランス語事業部、ドイツ語事業部、スペイン語事業部、ロシア語事業部の連中らしい」

そのひそひそ声を聞きつけて、隣のテーブルに座っていた若い女性たちの一人が三人に言う。

「私たち、韓国語事業部よ」

「あ……そうなんだ、どうも、はじめまして」

両グループは会釈を交わした。

万三郎が再び会場を見渡しながら独り言のようにつぶやいた。

「スピアリアーズは……」

　そんな万三郎を見て、杏児が黙って首を振る。万三郎は杏児のその素振りを見て、目を伏せた。

「そうか……」
　その時、恵美に付き添われて古都田社長が登場した。講師たちに先導されて拍手が広がる。
「なんてこったい、ホーリー・マッカラル……」

　古都田の姿を見た三人は、一様に驚きの表情を浮かべた。あまりにひどくやつれていたからだ。

――あれほど矍鑠としていた社長が……。

　地球は助かったものの、一連の出来事は、社長には心身ともに相当こたえたのかも、と万三郎は思った。

　ことだまカンパニーがやっていることは人体実験に他ならないと憤っていた新渡戸部長は、やはり来ていない。あの日以来、古都田と新渡戸が再び接触したのか、少なくとも三人には知らされていない。

　三人にとって、新渡戸は入社当時から一番近くにいた上司ゆえ、親愛の情も少なからずあったから、彼が社長に牙をむいたことは、予想だにしないショッキングなできごとだった。以来そのことは意識的に口にせず、気にもせず、三人の心にそれぞれ澱となって静かに沈殿するに任せていたのだったが、こうして痛ましい古都田社長の姿を見せられると、その記憶が再び激しくかき混ぜられた。

　ただ、幸いなことに、羽田へ向かうときに頬に受けた銃創はほぼ目立たなくなっていた。

　恵美がスタンドマイクの高さを調整している間に、万三郎が杏児にささやく。

「新渡戸部長、まさか雉島さんの側について完全にソウルズになったりしてないだろうな……」

　そんな問いに即座に応じた杏児も、やはり同じことを考えていたのだ。

「リアル・ワールドの肉体を放棄してないかってことだろ？　僕もそれが気になって……」

五

マイクの前に立つと、それでも古都田はにっこり笑みを浮かべた。恵美がすぐ横に控えている。

「ＫＣＪヒューマン社員の諸君」

意識的にそうしているのかもしれないが、声には社長らしい張りがあった。

「わが社は今回、内部留保のエネルギーを使い果たしました。これから各事業部のワーズ達にエネルギーを注いで元気を取り戻してもらう必要があります。そのために大いに職務に励んでいただきたい。特に！」

――おお、社長室での古都田社長と同じ語り口だ。

間髪入れず緊張感を醸し出す古都田節は健在だと万三郎は思った。

「業績回復のため、今後はより多くのクライアントにことだまを使ってもらわなければならん。そこで営業部を強化することにした。斎藤くん」

口調が古都田社長らしく偉そうになってきた。万三郎は嬉しく思う。

「はい」

古都田社長に近い席から、細身の男が立ち上がって皆の方を向いた。

「斎藤圭太と申します。私は第一営業課長として、主力商品『ＫＣＪお得意様強制パック・ゴールド』の普及に努めていましたが、このたび現場オペレーションを部下の皆さんに任せ、私は、クライアント候補の適性を調査・提案する、営業調査部の部長として本社に召還されることになりました。

「いよっ！　斎藤部長！　あんたが大将！」

部下たちであろう男女が拍手とともに冷やかす。会場はちょっとした笑いで和んだ。

　斎藤は挑戦的なまなざしになって、座敷の一角に汗をぬぐいながら座っているメタボな男を見ながら言った。

「そこにいる、同期の今神前部長より、いい仕事をやってのける所存です。特に、フラッフィーがサーバーと交信している時に流れるイヤー・ワームの曲目を、最近クライアントが口ずさんだ鼻歌に随時差し替えるつもりです。そうすることで、クライアント個人の妄想も含めた全ての思考情報を、違和感を抱かれることなく盗み出す……いや、吸い上げる新システムの普及にまい進する所存ですので、古都田社長、どうぞご期待ください」

　斎藤は古都田に向き直って一礼する。ともかくも会場から温かい拍手が贈られた。

　古都田はマイク越しに言う。

「特に君に期待をしておるわけではない。今神くんはこれから、役員のみなさんに向けて、一連のできごとを詳細なレポートにまとめなければならん。多忙で営業調査部長を兼務できなくなるため、仕方のない人事だ。そして、斎藤くんの昇進を進言したのは今神くんだ。斎藤くん、今神くんに感謝したまえ」

「は……？」

　席に着いたまま呆気にとられる斎藤。場が一気に凍りつく。古都田社長は彼と部下たちを見下ろすような目つきで付け加えた。

「そして、大将は君ではない。私だ」

六

斎藤と部下たちはたまったものではないだろうが、これが古都田社長なんだと万三郎たちは顔を見合わせてニヤリとした。

「社長、元気じゃん……」

そうつぶやいた瞬間、いきなり古都田に名前を呼ばれた。

「中浜くん！」

「はっ？　は、はい！」

万三郎はびっくりして反射的にその場に立ち上がる。古都田社長は間髪入れず、二人の名前も呼んだ。

「福沢くん！　三浦くん！」

「はい」

「はい」

慌てて立ち上がる二人。たった今、祝賀会の和やかな雰囲気をぶち壊す社長のパワーを目の当たりにしただけに、次に何が起こるのか周囲も固唾をのんでいる。

「諸君、英語事業部みどり組の、この三人のＥＴが、特任国家公務員、救国官である。このたび地球を救った」

たちまち会場が万雷の拍手に包まれた。ヒューという指笛や、「よくやった！」とか「いよっ、救国官」なんてはやし立てられた。

「よって！　その英雄的活躍を称え……」

一転して会場は水を打ったように静まり返る。地球を救ったのだ。金一封どころの話ではなかろう。何百万、いや何千万の単位ではないのか。杏児の喉仏がごくりと上下する。

「みどり組の名称を改め、『きみどり組』とする」

「は……？」

　三人が三人とも古都田社長の意を図りかねていた。

　杏児が訊く。

「社長、ぜ、前節をもう一度……」

「その英雄的活躍を称え……だ」

「で、主節が？」

「『きみどり組』とする……だ」

　古都田は例の、笑わない笑顔で、杏児の視線をがんじがらめにした。杏児は硬直している。

「良かったな。未熟者から少し熟しかかって『きみどり』だ」

　古都田は思い出したとばかり手をたたいた。

「おおそうだ。大泉総理大臣の名前で感謝状が届いている。君たち一人ひとりに。よかったな」

「……」

「し、社長！　ほかに何か、なーー」

　杏児を遮る形で古都田の声がかぶさる。

「何かね、特別指示書に従って職務を遂行したに過ぎない、国家公務員倫理規程第三条第一項金銭等の受取禁止の適用範囲内に該当する特任国家公務員の三浦杏児くん？」

七

私はこれから用があって退席するので、君たち三人が「きみどり組」に昇格した喜びをそれぞれ皆の前で述べた上で、乾杯の音頭を取れーー。そう命じられた三人は、古都田と付き添いの恵美を皆と一緒に拍手で送り出した後、マイクの前に立った。古都田が去っても、今神がいる。ＥＴの行動を逐一報告する任務を負った男だ。三人は乾杯用のグラスを手にしてマイクの前で順に感動を述べた。

「光栄です」

「光栄です」

「光栄です」

通夜のような静寂の中、注いだビールの泡が消えていく。たまりかねた倉間過去完了ほうぶん先生が立ち上がり、マイクの前にやってきて、古都田社長の口真似で言った。

「諸君！　もう一つ、重大発表を忘れていた。これから申し述べることは社外秘であるから心するように。英語事業部の倉間ほうぶんくんは、ロシア語事業部の講師、エカチェリーナ女史に『ほ』の字なのだそうだ。そうだな、ほうぶん先生？」

万三郎が小声で訊く。

「ユキ、『ほ』の字って何」

「好きってことよ」

マイクがその声を拾ったので、会場が騒然となった。

「なんてこったい、ホーリー・マッカラル！」

ほうぶん先生は今度は両手で自分の頬を挟むと、万三郎の声を真似てそう言っておいてから、素の自分に戻るという、落語のような一人芝居をした。

「やや、かくなる上はそれがし、この機会に当たって砕けるのみ！　エカチェリーナ先生！　好

きでござる。Я люблю тебя.（ジャリュブリュー　チェビャー）」

　当然、皆の視線は会場の隅に座っていたエカチェリーナ先生に注がれる。彼女は顔を赤らめて「ダー」と頷いた。たちまち会場が爆発した。拍手や万歳や指笛や冷やかしが飛び交う。場を盛り上げるのが上手なほうぶん先生だったから、まったくの仕込みネタだったのかもしれない。が、ともかく場の空気は一気にほぐれ、祝賀会らしくなった。

「おのおの方、無礼講でござる！　For the Words, cheers!（チアーズ）ワーズたちに乾杯！）」

　万三郎たち三人の肩を抱きながら、ほうぶん先生はグラスを高く掲げる。

「!Salud!（サルー！）」

「За здоровье!（ザ・ズダローヴィエ！）」

「???? ???!（ヒータエフン・ラホーム！）」

「Tchin Tchin!（チン・チン！）」

「干杯！（カンペイ！）」

　ほうぶん先生にほだされた万三郎、杏児、ユキもお互いにグラスを合わせた。

「カンパーイ！」

八

宴もたけなわとなっていた。

「ビールおいしい！　はあー、命あっての物種だわ。幸せー」

英語事業部の三人は今回、ヒーロー＆ヒロインだった。皆が代わる代わる寄ってきてはビールを注ぎ、お祝いを述べ、うらやましいと言った。

「くそー、フランス語、中国語、ロシア語も一応、国連公式言語なんだけどなー。ま、今回は英語に花持たせてやるよー」

「おいおい、そんな何回も地球の危機が来てたまるか」

親しくなった他事業部の連中との会話も弾んだ。杏児のそばにはいつの間にか恋人の藤堂明穂も寄り添っている。寄ってくる人たちがたまたま途切れたところで、杏児がユキに訊いた。

「ところで石川審議官は今日、来られていないね？」

「ああ、うん。恵美さんから聞いたんだけど、古都田社長も石川さんと合流して、これからお通夜で、明日お葬式みたいなの。ほら、あの退官されて山梨県にご隠居されていた内村鑑三郎さん、お亡くなりになったみたい」

「へえ、そうなんだ」

「あの台風の夜だって。お家の中でお一人で。たぶん、心臓麻痺か何かだろうって」

「で、今頃お通夜？」

「地元の方で先に密葬を済ませてあって、明日が本葬、告別式になるんだって」

ユキの説明に、杏児がため息をついた。

「せっかくアポフィスがそれて助かったってのに、皮肉だね」

　すると、驚いた顔の万三郎が、得心したように口を開いた。

「俺、たぶんその人から、残りの命のエネルギー、もらった気がする」

　杏児がぽかんと口を開ける。

「へ？」

「ことだまワールドで、その人から言われたんだ。君はまだ若いから、私の｜生命《いのち》を君にやろうって。それで俺、死にそうだったけど生き返ったんだ」

　とたんに杏児が笑い出した。

「万三郎、それは違うよ。お前が死ななかったのは、ユキのお蔭だよ」

　今度は万三郎が「へ？」と訊く。

「お前の口の周りに、口紅がついてた。お前が目を覚ます前に俺が拭き取ったけどね」

　ユキの顔が見る間に真っ赤になっていく。即座に杏児が、ジェスチャー入りで、ユキの心情を口に出して説明し始めた。杏児は自分の両頬に掌を当てて大仰に目をむいた。

「しまった！　暗闇で見えていなかったわ！　万三郎が息を吹き返したことで私、安心してそのまま眠ってしまったんだわ。なんてこったい、ホーリー・マッカラル！」

　これまでで一番頬を赤く染めたユキの目の前で、頭を抱え込んで見せた杏児は、頭を起こすと意地悪くユキを指さした。

「あれえユキ、何だがホッペが異常に赤いよー」

　それを聞いたユキは、突然立ち上がる。

「わわわたし、ちょっと酔ったから、よ、夜風に当たってくる……」

　堀りごたつだから、杏児の足を蹴飛ばすわけにはいかない。悔し紛れか、立ち去り際にがけにユキはしゃがんで、杏児に耳打ちした。

「たた対向車が来たらどじょうすくい踊ってやるって、あの時言った言葉、よもや忘れてないでしょうね……」

　それだけ言うと、ユキはすたすた歩いて部屋から出て行ってしまった。

「おー、こわ……」

　肩をすくめて苦笑いしながら、杏児は万三郎に目配せする。

――行けよ。

　万三郎は心得て席を立っていく。杏児はそれをゆったりと見送った。

　ほろ酔いで頬を上気させた、ちづること藤堂明穂が杏児にもたれかかってきた。会社の酒宴なので、杏児は少なからず戸惑って周りをそっと見回す。幸いに周りは、我れ関せずという雰囲気だ。

「明穂。君がこっちに来る前、気になってたんだけど、いくら酒の席だからといって、君、中国語事業部の同僚の男性にちょっと馴れ馴れしすぎやしないか」

　杏児はここ数週間で、ちづるのＥＴネームに次第に慣れてきていた。明穂はもたれかかったまま杏児に顔を向けて艶やかに笑う。

「あれ、杏ちゃん、妬いてるの？」

　杏児は苦々しい顔をする。明穂の方もユキの影響か、杏児のことを「杏ちゃん」と言うようになった。それはいい。ただ、恵美が、「大したことないわ」と言っていた、明穂の高速学習の副作用は、アルコールが入ると気が大きくなることだと後に知らされたのだ。

――妬いている？　いやそうじゃない。地球のＸデーが近いときに、明穂は誰と酒を飲む機会があったのか、それが気になっているだけだ。うーん……僕はやっぱり、妬いているのかな……？

　杏児自身にもアルコールが入っているので、だんだん、どうでも良くなってきた。

「心配しなくても、私は杏ちゃんに『ほ』の字よ」

　酔いに任せて明穂がそう囁き、またしなだれかかってくるので、杏児の口元はつい緩んだ。明穂がさらに、耳元で囁いてくる。

「ね、うちの事業部でちょっと耳にしたんだけど、亡くなった内村さんと、石川さん、そして古都田さんの過去って、興味ある？」

　杏児はとろりと返事をした。

「うん、あるある」

　三分後、百人座敷のお店全体に杏児の絶叫が響きわたった。

「何だってぇーッ！」

（了）

奥付

ことだまカンパニー

http://p.booklog.jp/book/114528

著者：今神栗八
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kuriyaimagami/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/114528

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト